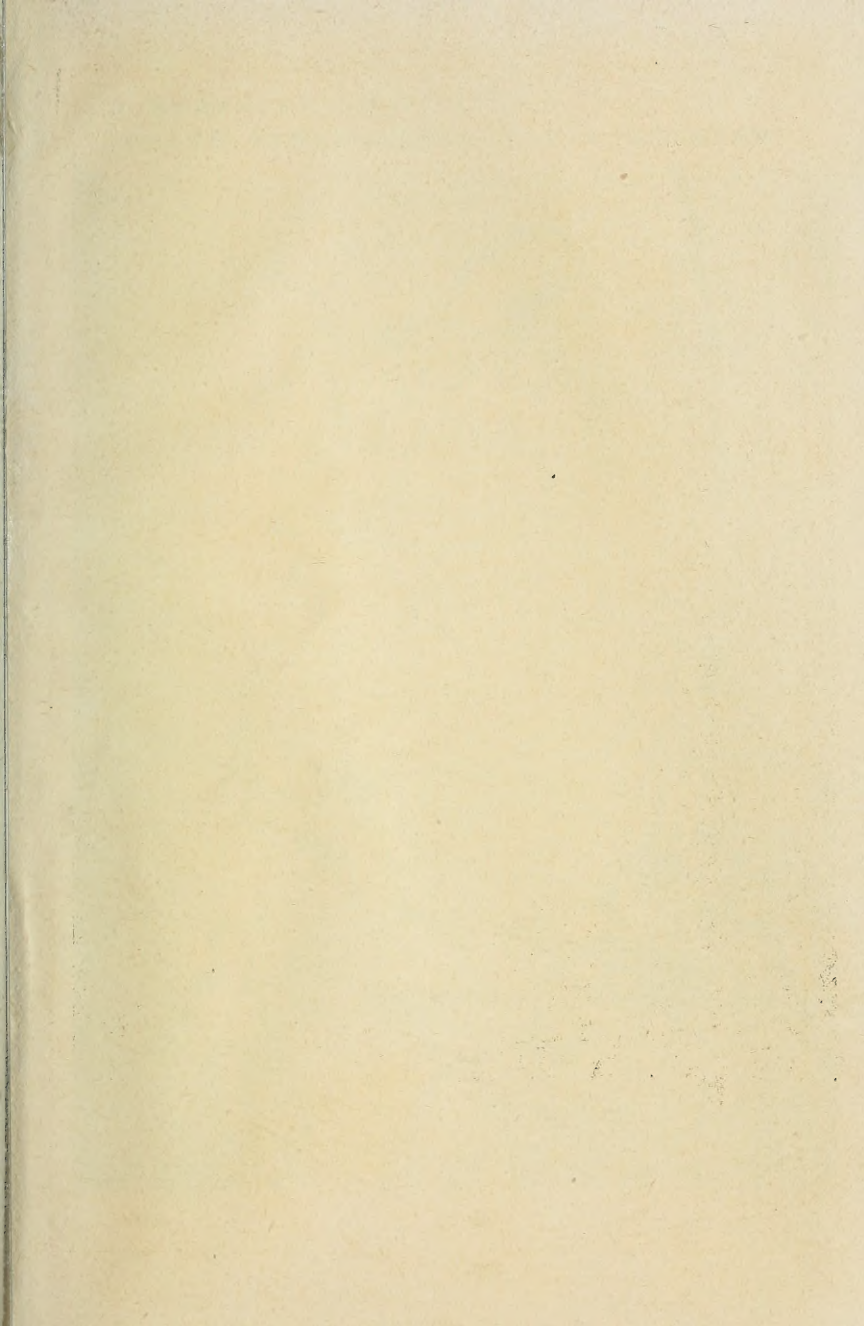
日本戯曲全集
第四巻

並木正三集

東京
春陽堂版

「三十石艠始」を天明九年五月市村座で上演したときの大詰の場の錦絵で、筆者は春亭、ちよつと珍らしいものです。

日本戯曲全集　第四巻　目次

並木正三篇

曲輪の思ひ付に起請の立引夫婦の血潮は天人のするがまひかすみに紛れて失にけり

けいせい天羽衣

能狂言
五番續

キノニノヤノハノモ
ノ北川宗左衛門宿
さゝら三八宿
船にて御約束候事

東山の櫻狩に身受の長歌二人の女房は浪人のあひことばなみのりふねのおとのよきかな

再演絵番附表紙

けいせい天羽衣

桃山の場

樋の口の場

口明

役名　山名右近之助勝家。村雲大學。藤倉玄蕃。太田鄕左衛門。傾城、見容。同、空蟬。同、琴浦。同、玉の井。禿子、小銀。同、萬代。幇間、喜作。今川仲秋。桂左衛門女房、白妙。與五郎女房、おたか。浪人、堤與五兵衛。漁師、白了。親方、才兵衛。細川修理太夫政基。山名宗全。赤松四郎高定。

造り物、桃山の體。總て一面に桃の盛り、所々に幕打ちある。幕の内より、騷ぎ唄にて幕ひらく。藤倉玄蕃、太田鄕左衛門、羽織、大小にて床几に腰かけゐる。太鼓持ちの喜作、側にゐる。

玄蕃　いよ〳〵若殿は、この所へお出でなさるゝか。

喜作　左やうでござります。

鄕左　何をしてござる。さて〳〵遲い事であるぞ、

玄蕃　して、村雲大學どのは、お出でなさるゝか。

鄕左　イヤ、今日一緒に出ましたれど、若殿を訪ねて別れました。

玄蕃　何をしてござる事ぢや……イヤ、あれへ見えるぞ。

ト大學、羽織、大小にて出る。

鄕左　これは〳〵村雲大學どのでござるか。最前よりお出でを待つて居りました。

大學　今日は、親御山名宗全さま、若殿樣に急に御用あつて、尋ねますれど、お出でなされたる先が知れぬゆゑ、廓へ尋ねに參つてござれば、皆を引連れ、この桃山へお出でなされたとござるゆゑ、直ちにこれへ參つたわい。

玄蕃　拙者もこの所へ參つて、若殿を尋ねましたれば、幸ひこれに太鼓持ちが居りましたゆゑ、尋ねましたれば、追ッつけお出でと申しまするゆゑ、相待つて居りまする。

鄕左　ア、あれへ、大勢の聲がする。若殿ではござらぬか。

大學　ドレ〳〵。
　ト皆見ろ。
喜作　さうでござります。あなた方も、あれへお出でなさりますか。
大學　イヤ〳〵、暫らく幕の内で休息いたさう。
玄鄉　左やう仕りませう。
喜作　私しが御案内いたしませう。斯うお出でなさりませ。
　ト皆々、幕の内へ入る。と所知入りの太鼓、三味、摺り鉦の囃子にて、向うより桃の花を巻きたる箱提灯、二行に持ち出る。傾城空蟬、同じく琴浦、雛の戸棚、御殿を持ち、次に藝子小銀、同じく萬代、雛の乗り物を差出る。後に傾城見空、細川勝家、焙烙頭巾の上へ兜巾を被せ、羽織を前へ掛け、見空ともたれ合つて、生酔ひの心にて出る。後へ桃の花の駕籠吊らせ、次に傾城玉の井、雛の臺を持ち出る。次に仲居三人、雛の簞笥、雛など持ち、皆々、並よく舞臺へ並ぶ。いづれも桃の花を頭に差す。
琴浦　長の道中、さぞお疲れでござんせう。
玉の　大事の嫁入り。萬事麁相のないやうに

萬代　皆々云ひ合せ
小銀　御夫婦の仲を、三千歳の桃の祝ひ。
空蟬　幾千代も〳〵、變らぬ桃の色變へず
琴浦　結ぶ妹脊は咲く花の
玉の　露の契りのほうて雛。
萬代　お乗り物はお内方。
小銀　お臺所、お湯殿の間。
空蟬　中の間、口の間、お手道具。
琴浦　お衣裳簞笥、袋棚。
玉の　夜の物、晝の物。
小銀　嫁入り道具、次第を揃へ
萬代　お供いたしましてござります。
勝家　それ嫁入りと云ふ事は、夜めの字を寵愛するを以て、嫁入りとは名けたり。西王母が園の桃、桃にや毛もある、實もある。種ぐちわりをぱつちりと、割る大將の御勳し。
　ト序開きのやうに云ふ。
喜作　東西々々。
　ト後より云ふ。
勝家　エヽ、後から、悔りさしをつたわい。

喜作　さても／＼近年の御趣向、どうも云へたものではござりませぬ。
勝家　なんと、きついか／＼。
小銀　喜作さま、今日は早々から云ひ合せ、殿様と見空さまと祝言の心で、桃山へ來たわいな。
琴浦　幸ひ、今日は桃の節句なり、雛祭りを託けて、飾つてある嫁入り道具。みな持つて來たぞえ。
勝家　なんと、山名右近之助勝家と云ふ大名の、祝言はきついものか。
喜作　こりや恐れ入ります。
玉の　こちらも、見空さまの祝言ぢやに依つて、琴浦さまや空蟬さまと、連れ立つて來たわいな。
萬代　お前は早うござんした。また例のそしりであらうな。
喜作　これはまた惡口を。イヤ、廓からこの桃山までは、餘ツぽどの道、よう皆お出でなされた事ぢや。
琴浦　空蟬さまが媚て〻、萬代さまや小銀さまは歩いたが、玉の井さんは、よう辛どない事ぢや。
玉の　イヽエイナ、あんまり桃が見事ぢやに依つて、思はず歩いて來たわいな。

小銀　此やうな美しい山の、木の根や石で、躓いてなる事ぢやない。これを廓で見たいわいな。
勝家　こりや尤もぢや。イカサマ、この桃が廓にあつたらどうも云へたものぢやない、ナウ太夫……コレ、先刻にから、何が氣に入らぬやら、めつきりと持たせぶり。なぜ物を云やらぬぞいなう。
空蟬　大方、草臥れさしたのであらうぞいな。
勝家　草臥れたとて、物が云はれぬと云ふ事はない。みな打揃うて、嫁入りの儀式するのに、内裡雛並べたやうに祝言するのは嫌か。
見空　なんの祝言が嫌であらうぞいな。
勝家　それに又、なぜ物を云やらぬぞいなう。
見空　皆さんは、内裡雛ぢや、嫁入りぢやと、喜んで下さんすけれど、わたしや嬉しうないわいな。
琴浦　そんなら矢ッ張り、嫁入りは嫌かえ。
見空　嫌ではないわいなア。
勝家　こりや何を云ふのぢや。無理ばかり云うて、とんと分らぬ。
見空　殿様、お前には、天津さまと云ふ云ひ號けのお姉様があるゆゑ、どのやうに思うても、親御様の云ひ號けな

ら添はしやんすであらう。千萬無量思うたとて、所詮叶はぬ戀ぢやと、思ふ程添ひたいに依つて、この嫁入りは嬉しいやうで、嬉しうないわいな。

勝家　なんの事ぢやと思へば、天津姫の事か。さりとはしつこい。コレ、おれは元、細川の次男なれど、將軍のお仲人で、山名宗全どのゝ娘、天津姫と緣を組んで、山名の家に入り聟したけれど、其方への心中に、姫が寢所へは足さへ入れた事もない。その證據には、まだ振り袖着てゐる。アヽ、粹のやうにもない。又しても姫の事を、嗜なめ／＼。

琴浦　わたしらも知つてゐる。そればかりは、殿樣の心に、微塵も如才はない程に、氣遣ひさしやんないなア。

玉の　例へ又、どのやうな事があつても、お前の心さへ据つてゐやしやんす事ならば、なんの添はれぬと云ふ事はないわいな。

勝家　それ／＼、殊に、おれが廓へ通ふ事を、親人がグッとも云はず、隨分氣の保養になる事なら通へ。次手に館へも傾城どもを連れて戻つて、姫にも粹な風俗を見習はせよなどゝ云ふ程、粹な親仁ぢやさかい、どうせうとおれが自由ぢや。それに何が不足なぞい。

見空　さう皆樣が云はしやんすりや、さうぢやけれど。

玉の　けれどで濟むかいな。あやまらんせ／＼。

勝家　折角仕組んで來たのに、無禮な。皆の者へ立たぬ立たぬ。

琴浦　もう堪忍して上げしやんせいな。

見空　もう堪忍ぢやわいなア。

勝家　イヤ／＼、なんぼでも、と云ひたい所なれど、皆の詫び言ぢや。料簡して遣はさう。その代りに心中見せい。

見空　サア、堪忍して下さんすなら、なんなりと。

勝家　せいよ。

見空　なんでも。

勝家　そんなら、この大勢の中で、おれに抱きつけ。

見空　何を爲體もない事。

勝家　嫌ならよい事、勝手にしやれ。

見空　サア、抱きつくわいなア。

勝家　サア、抱きつけ。

ト手を廣げる。

皆々　こりや見たいわいな。

見空　サア。

勝家　サア／＼／＼。

見空　オヽ恥かし。

ト抱きつく。

勝家　極道め。

ト抱きつく。

喜作　千秋萬歳、めでたい〳〵。この勢ひに酒に致しませう。

ト辨當より小筒を出す。

勝家　よからう〳〵。

琴浦　今日は、見空さまを盛り潰さう。

玉の　先度の意趣を晴らさんせいな。

見空　アヽ、もう免して下さんせいなア。

勝家　エヽ、氣の弱い。後には樊噲が控へて居るわい。

喜作　助け手は爰にも。

トこれより皆々、酒盛りになる。

これで一拳參りませう。

ト皆々、拳打つと唄になる。萬代、小銀、三味線、喜作唄ふ。仲秋、深編笠、奴連れ出る。

仲秋　さて〳〵、毎年とは云ひながら、斯う咲いたところは、どうも云へぬ。見事な事ではないかい。

中間　ネイ〳〵、左やうでござりまする。

仲秋　桃李の宿、萬樂一時の詩の心、イカサマ、唐土で寵愛するも無理ならぬ。

ト云ひ〳〵行く。

勝家　コリヤ〳〵、普化僧の田樂。待て〳〵。

ト引留める。

仲秋　待てと引留めなされたは、拙者が事でござるか。

勝家　拙者でなうて、誰れであらうぞ。

仲秋　して、御用でもござるかな。

勝家　ござる段か、近年のでござるぢや。

仲秋　ムウ。して御用の筋は。

勝家　筋とは慮外者め。身を知らぬか。山名の養子、右近之助勝家さまぢや。今日は、太夫様をお連れなされて、この桃山を御遊覽遊ばす大切な騒ぎ場所へ、うか〳〵と、茲な狼藉者めが。

仲秋　ハヽヽヽ、これは拙者が不調法でござる。身はこの邊の者でござるが、餘り桃の盛り、見事と承つたによつて、忍びの遊興に參り、この體も存ぜず、武骨の段は、花に心を奪はれましたゆゑ。眞平御免下されう。

ト行かうとする。

勝家　どこへ〳〵。諸事を花に塗り附けるは、おのれも大

抵のすつぱの皮ではない。知つてゐるわいやい。のうの
うと爰へうせたは、爰へ來てゐる太夫の內にお敵があつ
て、廓へ行て見たら、すつとこなになつたに依つて、跡
を慕うてうせたのぢやな。サア、隱さずと、その編笠を
取つて、名乘れ〳〵。

仲秋　これはまた迷惑な。只今も申す通り、ちと人に面を
合し憎うござるゆゑ、笠の內よりのお詫びは、御免にあ
づかりませう。

勝家　イヤ〳〵、化けの皮を引ッ剝がぬうちは、通す事は
ならぬ〳〵。

見空　コレイナア、知りもせぬお人を滅相な。

勝家　ヤイ、おのれ、大抵では脫ぎ居るまい。ソレ、女郎
ども、取卷いて笠を脫がせ。

ト琴浦、玉の井、空蟬、小銀、萬代、その外女形皆々、
仲秋を圍ひ

皆々　サア、御意ぢや、笠脫がしやんせ。

勝家　異議に及ぶと、ぶつて取るが、返答はなんとぢや。

仲秋　これは又狼藉な。拙者、お近附きでもござらず、ま
して忍びの事なれば、是非とも御免下されい。通ります
る。

勝家　ソリヤ、遁がすな。

皆々　やらぬぞ。

ト下座にかゝるを拂ひのけるうち、勝家、仲秋が笠を
取る。

勝家　すつぱの皮め。

ト顏見合せ

ヤア、こなたは今川仲秋どの。

仲秋　山名右近之助どの

喜作　ムウ。お近附きでござりますかえ。そんなら手が惡
い。

勝家　ヤイ、シイ〳〵〳〵。

ト術なきこなし。

なんにも吐かすな。惡い〳〵。これは又不躾千萬。憎く
い奴等。下がり居らう〳〵。

トいろ〳〵あるゆゑ、皆々、手持ち不沙汰にて、まご
まごしてゐる。

あなたは、將軍家の出頭、今川仲秋どのぢやぞ。それに
狼藉すると惡い〳〵、憎くい奴の。イヤモウ、何奴もか
かつた奴は一人もござらぬ。ハテサテ、思ひも依らぬ所
へお出でなされましたな。

仲秋　勝家どの、見ますれば御遊興と見えて、數多の女を引連れ召されたが、あの者は何者でござるなア。
勝家　アイヤ、これは。
仲秋　何者でござるな。
勝家　イヤ、あれは、ソノ、何者でござる。オヽソレエ、憎くい奴等でござります。彼奴等は、手前が領分の百姓どもでござりますが、お聞きなされませ。嫁入り致しましたれば、村の奴等が石打ちに事寄せ、嫁入りの荷物を碎いたと申しますゆゑ、その嫁入りの道具を取寄せ、只今、詮議最中の所へ、其許がお出でなされたに依つて、彼の碎きました相手めかと存じまして右の仕合せ。彼奴等は百姓どもでござります。
仲秋　百姓に致しては、ハテ、伊達な百姓でござるな。
勝家　憎くい奴等でござります。
仲秋　勝家どの、こなたはどう心得てござる。山名細川は東山どのゝ兩管領職なれども、先年より兩家互ひに忌みある仲なるゆゑ、天下の重寶天の羽衣、並びに霓裳羽衣の曲の一卷、二品を兩家へ預け、その上こなたを細川より、山名へ養子にお遣りなされしは、こりや兩家を無事に納めん爲。その御自分が傾城狂ひに身持ち放埒なれば、否とも天津姫を嫌はにやならぬ。さすれば、兩家確執の基。養父實父の家の爲にならぬが、とサア、拙者が斯様に申すも、其許の爲、且は東山どのゝお志しを立てん爲。成る程、百姓の娘どもに違ひもござるまいが、所が惡しうござる。諸萬人の參る花見の中。惡うござる程に、公事訴訟は館で聞かつしやれ。
勝家　成る程、御意見御尤もでござります。なんのわたしが廓通ひ致して、よいものでござりますかい。
仲秋　さうありさうな事ぢや。
勝家　ヤイ、百姓めら、公事訴訟は屋敷で聞く、ナ、諸事は屋敷で聞く。爰はきつう折が惡い程に、歸れ、ハテサテ、マア、去ねやい。コリヤ、術なうて堪らぬわい。去ねと云うたら、マア、どこぞそこらあたりの幕の間から去なうとしても道はない。本道から去んだ形して……また願ひに出い、よ。早う、ほんまに去ね／＼、去に居らう。

ト皆に呑み込ます。皆々合點して入る。

仲秋　皆、女どもは歸りましたか。
勝家　ハイ、もう一疋も居りませぬ。
仲秋　それがよくござる。けれう、手前なればこそ。ひよ

つとこの事が、將軍家のお耳へ入らば、こなたの大事。そこを存じての拙者が寸志。よもや傾城ではござるまい。

勝家　なんの、あなた。

仲秋　其許に限り、廓通ひなどなされうとは存ぜねども、武士は心掛けが肝要。いま申したを、必らず忘れぬやうに、ナア、御合點か。拙者は忍びの遊興。山深く參る。御免なされ。

勝家　ア、申し、爰に編笠がござります。エヽ、皆憎くい奴等ぢや。

仲秋　ハテ、もうようござる。お呵りなされな。百姓と云ふものは、兎角物事が擧高にござる。

勝家　左やうでござります。

仲秋　百姓の公事訴訟をお捌きあらば、隨分名さかの立たぬやうになされ。然らば、お暇申しませう。

勝家　もうござりますか。

仲秋　おさらばでござる。

ト唄になり、仲秋、奴を連れ入る。勝家、後を見送り、吐息を吐き

勝家　ヤレ〳〵、えらかつた。あの堅藏には弱り果てる。

コリヤ、皆どこへ行た。とんとおれを人身御供に供へ居つた。どこへ行た。もうよいわい。コリヤヤイ、どこへ隱れ居つたしらん。大方、この幕の內。コリヤ〳〵、もうよい、出い〳〵。

ト橋がゝりの幕を引きちぎると、內に大學、玄蕃、鄉左衞門ゐる。

ヤア、村雲大學、藤倉玄番、太田鄉左衞門、何しに爰へ來た。

大學　こなた樣を御意見に。

トきつと云ふ。

勝家　又かいやい。

三人　御意見申さにやなりませぬ。

大學　殿、お嗜なみなされまし。尤もそりや、親殿のお許し、家中どもにまでお許しなされた廓通ひゆゑ、それを否と申すではなけれど、この繁華へお出でなされての御放埓、剩さへ今川仲秋どの、只今のやうに申さるれば、是非一度は將軍のお耳へ入るは定。斯樣に申すもお主が大切さ。色は諸道の妨げ。ちとお嗜なみなされませい。

勝家　これは又、今日ほど、よう意見に會ふ日はない。

ト此うち見突、その外、女形皆々出る。

玄蕃　ちつと術なうござらう。大學どの、手緩い／＼。グッと仰しやれ。

郷左　意見の後詰めは手前が致す。しぬかつしやれ、しぬかつしやれ。

大學　殊に今日は、親殿宗旦さま、御用あつてお尋ねなさるゝゆゑ、大學、これまでお迎ひに參つた。サア、歸らしやれませう。

見空　皆様が迎ひにござんしたは、お姫様が呼びにおこさんしたのぢやな。

ト前へ出る。

大學　女に現を拔かさずとも、サア、お供仕らう。

ト琴浦、玉の井、空蟬、前へ出て

琴浦　コレ大學さま、この間は、なんで廓へござんせん。

ト大學の胸倉を取る。

大學　コリヤ／＼たわけ者めが。

ト此うち玉の井、郷左衞門が胸倉を取る。

玉の　先度の口舌を根に持つて、ござんせんのぢやな。

郷左　コリヤ／＼／＼。

ト術ながる。此うち空蟬、玄蕃が胸倉を取る。

空蟬　行き方が惡けりや、なんぼでも聞きやせぬ。

玄蕃　コリヤ、御前ぢや。

ト術ながる。

空蟬　どう云ふ事でござんせぬ。云はんせ／＼。

ト皆々、一時に振り廻す。

勝家　コリヤ、家老ども。

大學　お召しなさるゝ。爰、放し居らう。

皆々　イヤ／＼、放さぬ／＼。

勝家　村雲大學、ヅッと出い。殘りの奴等も出をらう。ヤイ、尤もそりや、親人が御免なされた廓通ひ、それを否と云ふではないが、爰は繁華、殊に今、今川仲秋どの、最前のやうに御意なされたれば、是非一度は將軍家のお耳へ入るは定。コリヤ、色は諸道の妨げと云ふではないか。ちと嗜なみ居らう。

大學　これは又、術ない事ではある。

勝家　ちつと術なからう。

見空　殿様、グッと云はんせ。後詰めはわたしが云ふぞえ。

勝家　殊に今日は親人宗旦さま、御用とあつて、身共を尋ぬるでないか。サア、早う歸らう。

大學　すつきり身共が云うた事ぢや。

勝家　なんと、痛いか〳〵。

三人　甚だ痛うござります。

見空　お前方の廓へござんすは、殿様へ筒拔けぢやわいな。

大學　しまうた。

勝家　おのいら、廓へ來る事は、疾から知つて居る。サア、有やうに白狀、白狀。

大學　もう斯く顯るゝ上からは。

勝家　コリヤ、その後は知れてある。おのいらが來てゐようと思うて、お敵どのを引摺つて來た。サア、碎け居れ碎け居れ。

大學　そんなら、免されますか。

勝家　免すかとは、野暮め。

大學　こりや、どうもならぬ。

ト一時に寢腹這ふ。

勝家　三人とも隱し好色、措け〳〵。

大學　隱し好色とは曲もない。屋敷では村雲大學、廓へ行くと雲助ぢやわい。

大鄉　わしらは、徒歩荷物ぢやわい。

見空　さつても、きつい解けやう。また毛蟲かと思うて、大抵怖い事ぢやなかつたわいな。

大學　聞きしに增る御器量よし。エヽ、殿様が可愛がりくさるであらうなア。

勝家　可愛がる段か、明の睦言今更に、憂きは別れの袖の海。

玄蕃　なじまぬ昔、ましぢやもの。

ト唄ふ。大學、扇を顏に當て、合ひの尺八、口にて吹く。

勝家　けうとい隱し藝ぢや。夜明けになると、太夫が待たしやんせと引留める。

見空　意地惡う去にたがつて、アレ〳〵、夜明けの鳥が啼く。

大學　こつかこう〳〵。

勝家　この中も去にしなに、大門口で犬が取卷いた。

大學　わん〳〵〳〵。

鄉左　コレ大學どの、調子に乘つて、餘り隱し藝を張り込ましやんな。

琴浦　サア大さま。この間のせりふはどうさんす。サア、いま聞かう。

大學　わん〳〵。

見空　サア、お姫様とわたしと、見替へる心か。見替へぬ心か。心中見よう。
勝家　わん〱。
皆々　エヽ、お前マア。
ト追ひかける。
四人　わん〱〱。
ト四つ這ひになり。逃げ廻る。向うより白妙におたか附き、出る。
たか　申し白妙さま、この桃の花盛りを、ちとお詠めなされませい。
白妙　若殿様、これへお越しと聞いたによつて、是非今日は夫の身の上、お願ひ申さうと、思ひ切つて來たもの、山の景色も花の盛りも、なんの目にかゝらうぞいの。
たか　お道理でござります。左やうなれば一時も早う、お出でなさりませ。
ト本舞臺へ來て、大學に行き當る。
大學　ヤア、こなたは桂左衞門どのゝ奥方。
白妙　これは村雲大學さま、きつい御機嫌でござりますな。
勝家　白妙か。
白妙　若殿様、御機嫌の體を拜し、喜ばしう存じまする。

勝家　其方が爰へ參つたは、また桂左衞門が事を、願ひに來たか。
白妙　一應も再應も、申した上にも申さにやなりませぬ。夫桂左衞門には、幼少より宗全さまのお側を相勤め、お家の出頭。あなた様が細川家より御養子にお出でなされ、天津姫さまと御縁組み濟むや濟まぬに、廓へお通ひなされ、晝夜の御放埓、親殿のお憎しみもありさうなものが、却つて家中一統廓通ひ御免とある事、こりやコレお前様の御放埓をお隱しなさる爲、養子の義理を立て、とくと御意見なさぬかと、お心を押計つて、夫桂左衞門、強う御意見申しましたれば、それが越度とあつて、お目通りの勘當。お側へも召仕はれず、お臺所お次の間まで參つて居りますと云ふ名ばかり。どうぞ桂左衞門が御勘當、お赦し下されうならば、有り難う存じます。
勝家　エヽ、又しても〱同じ事を。コリヤ、よう聞けよ。世間の親仁は、悴が傾城狂ひに身持ち放埓する憎くい奴の。紙子一重で國境ひより追ッ拂へなどゝ云ふを、拔けつ潜りつ廓通ひするが、マア大概若殿様の大法ぢや。此方の親仁のやうに、廓へ行て太夫を買ひ、また屋敷へも連れて戻れ、家中も廓通ひを許すと云はしやるは、悪い

親を持つてさへ廓通ひするに、斯う云ふ粋な親持つて、廓通ひせぬは、差當つて親への不孝と云ふものぢや。ナア大學。

大學　左やう〳〵。拙者どもゝ廓へ通へよと御意なさるゝを、辭退いたせば、却つて不忠でござるゆゑ、こりや忠義の廓通ひでござる。

勝家　忠孝二つは車の兩輪。それを意見する桂左衞門、目通りの勘當なされたは親人。すりや、おれが口からは、づッとモウ詫びはならぬ。

白妙　そんなら、意見はお聞き屆けござらず、お詫びも叶ひませぬか。

勝家　太夫、此方へ寄れいやい。

ト膝の上へ乘せる。

見尖　聞けば聞く程、どうやら氣の毒な。

勝家　大事ないわいなう。

白妙　エヽ、お側に附き添ふ耳ねぶりの佞人、同じやうに踊り狂うて、若殿樣をそゝのかす。夫桂左衞門、目通りの勘當請けずば、仕樣もやうもあらうなア。

大學　よしない事を苦にせずとも、遊んでなりと通うてなりと、主人に忠義を盡したがよい。世界には馬鹿律義な大たわけも、あればあるものでござる。ナウ兩人。

玄鄉　左やうでござる。

たか　イヤコレ大學さま、いま仰しやつた馬鹿律義と云ふは、誰れが事でござります。

大學　わりや、それを聞いて、何にする。

たか　桂左衞門が家來、與五郎が女房、耳にかゝる事は聞かにやならぬ。

大學　律義一遍に馬鹿を盡すを、馬鹿律義と云ふ。卽ち、われが主人の桂左衞門が事サ。

たか　默らつしやれ。主人桂左衞門さまはお家の出頭。一言ものを仰しやれば、一家中は猫に追はれた鼠のやうになつたは昨日今日の事。お目通りの御勘當お請けなされてより、屋敷の中でも、肩身のすぼるをよい氣味ぢやと思ふ者は、みな殿樣の耳をねぶるお家の仇。犬ゐのころも同じ事ぢやわいなア。

大學　ヤ、此奴は、云はして置けば樣々の雜言を吐く。今云うた犬ゐのころとは誰れが事。サア、いま一言吐かして見をらう。

玄鄉　眞ッ二つにするぞ。

たか　サイナア、さうした所は侍ひのやうなれど、最前の

四つ違ひで、犬と云ふ事が知れたわいな。ほんに犬が大小差したのは、今が見始めぢやわいなア。ホヽヽヽ、わん〳〵……ホヽヽヽ、わん〳〵〳〵、ホヽヽヽ。

ト大きに笑ふ。

大學　此奴、もう料簡がならぬ。

たか　其方が料簡しても、此方が料簡せぬわいの。

大學　いつそ、うぬ。

ト反り打つ。

白妙　コリヤ〳〵おたか、控へて居ぬかいな。

たか　でもあなた。

白妙　ハテサテ、お憎しみの上にお憎しみを請け、夫の身の足しになるやうにするのか。

たか　サア、それは。

白妙　マア〳〵、控へて居やいの。ホヽヽヽ、ほんにモウ、足輕風情の女房、譯はござりませぬ。あられもない所は、お免しなされませう。殿樣、どうぞ、あなたのお執成しで。

勝家　アヽ、氣が盡きた。太夫、もつと此方へ寄れやい。

ト引寄せ

爰はモウ氣詰まりでならぬ。幕の内へ行て、飮み直さう。

あつたら醉を醒した。大學、太夫どもゝ、みな幕の内へ來い。

大學　畏まりました。ソレ兩人、追ッつけ若殿のお歸りなさるゝ樣子、親殿へお知らせ申せ。

玄鄕　オヽ、合點ぢや。

見空　申し、白妙さまとやら、先刻にから挨拶もせぬ、憎い奴ぢや、なめた奴ぢやと思はんせうが、わたしや最前から

勝家　モウ、われは何にも云はいでもよいわいなう。サア來い〳〵。

白妙　エヽ、すりやどのやうにお願ひ申しても。

ト此うち勝家、アヽ、と欠伸して居る。

勝家　さらば一杯呑みかけう。大學、皆來い。

皆々　先づ、お入りあられませう。

ト唄になり、勝家、太夫連れて入る。後より皆々、入る。白妙、おたか、鄕左衞門、玄蕃、跡に殘る。

白妙　如何に若氣の放埒ぢやと云うて、善惡の嚙み分けもなう。

ト泣く。

たか　お道理でござります。夫與五郎どのは生れ付いて足

らはぬ人、その愚かな氣にも、御主人のお身の上、奥樣がお願ひなさるゝ、其方附き添ひて、わしと二人前の忠義を立てゝくれと、朝夕涙ぐんで居られます。これ程まで、千度百度お願ひなさるゝに、如何に我が放埒の邪魔になるとて、あんまりな殿樣ぢやわいな。

白妙　今日は是非、お膝元へ詰めかけて、金輪際云はにや置かぬ。

玄蕃　白妙どの、拙者はお屋敷へ歸るが、べら附いて御遊興の邪魔せずと、同道して歸る。サア、ござれ。

鄕左　此方の女も來い。

白妙　もう斯うなるからは、此方の思ふ存分にお願ひ申さねば、一寸も動きはせぬ。用事あらば、先へござれ。

鄕左　引立て歸れとあるは若殿の御意。達て意地張ると、括り上げて提げて歸るぞ。

たか　滅多な事をさしやつたら、爲になるまいぞ。

白妙　桂左衞門が女房白妙、斯くゐる所を一寸でも動かして見たがよい。

玄鄕　小癪な女め。意地張ると、カウ。

ト兩人、白妙を引立てる。おたか、割つて入り、四人少々立廻りある。所へ、仲秋、出て、兩人を捻ぢ上げる。

仲秋　コリヤ、何奴ぢや。

玄鄕　名乘るに及ばぬ。見知つて置け。

ト手を放し、編笠を取る。

玄鄕　ヤア、今川仲秋さま。

ト逃げうとするを、仲秋、二人を當てる。

白妙　兄樣。

仲秋　妹、群集の中へ其方が來てゐるは、さては桂左衞門も勝家と一つになつて、こりや、馬鹿を盡すな。

ト此うち白妙、仲秋にキツと詰め寄り

白妙　兄さん、わたしもお前の妹ぢや。陪臣なれども宗全さまの仲人を以て連れ添ふ夫、放埒の腰押しさうな、夫左衞門ぢやと思はしやんすか。

仲秋　それに又、そちや何しに爰へ來てゐる。

白妙　桂左衞門は家の出頭、廓通ひの御意見したが科とあつて、思ひも依らぬ宗全さままで、目通りへ叶はぬと勘當同然。お側に居ぬを幸ひに、佞人どもの我まゝ。どのやうに仰せられても、いつかな動かぬ夫の魂ひ。左衞門どのに成り代り、御意見に來たのでござりますわいな。

たか　御主人御夫婦樣の忠義を、誰れあつて取上げる者も

文化二年正月中の芝居所演繪番附

なく、却つて狼藉、情ない若殿でござりますわいな。
ト泣く。
仲秋　山名細川は天下の兩腕なれども、互ひに心よからぬ仲。桂左衛門と云ふ重しあればこそ兩家の無事。その桂左衛門が出頭を省かれては、一大事であらうぞよ。
白妙　と云うて若殿のお身持ち。
仲秋　疏通ひを許すとある宗全の心に、一物あるに相違ない。
白妙　エヽ。
ト仲秋、桃の枝を折り
仲秋　妹、夫左衛門に、この桃の心を解けと云へ。
白妙　この桃の心を解けとはな。
仲秋　總じて花を形よく眺めんとて、老木に若木の枝を接ぎ、接ぎ木によつて善惡ある。例はゞ桃の木を切つて梅の木に接げば、花實はなれども、梅に桃を接げば、花も實もならず、却つてその木を枯らすぞよ。
ト白妙、おたか、思ひ入れある。
白妙　桃に梅を接げは、花實もなり、梅に桃を接げば、花實もならず。その木を枯らす。
たか　若殿樣は細川さまの接ぎ木。
白妙　天津姫さまは梅、殿樣は桃、梅のお姫樣を細川の接ぎ木にやれば、花も實もなる。桃の殿樣をこちらへ接ぎ木にしたが、今では妨げとな。
仲秋　そりや木作りの心次第。桂左衛門が狂はぬ植ゑつけ一思案の芽出しを待つてゐると云へ。
白秋　追ツつけ、枯れ木に火打ち返す事、お聞かせ申しませう。
ト此うち仲秋、以前の二人に活を入れる。
玄鄕　エヽうぬ、酷い目に。
仲秋　コリヤ、何もかも將軍職へ申し上げうか。
玄鄕　イヤモウ、お暇申しませう。
たか　申し、もうお屋敷へお歸りなさりませぬか。
白妙　そんなら兄樣、お別れ申しませう。
仲秋　月に村雲、花に風。桂左衛門に、兩家の礎に疵附けなと云へ。
玄鄕　申し、諸事は沙汰なしに。
仲秋　イヤモ、身も忍びの遊山。
白妙　兄樣。
仲秋　妹。
たか　仲秋さま。

四人　おさらば。
仲秋　供せい。
ト唄になり、仲秋、奴を連れ、向うへ入る。白妙、おたか、玄蕃、郷左衞門、橋がゝりへ入る。玉の井、空蟬、大學が胸倉を取つて出る。
大學　ハテ、よいわいやい。
玉の　人の男を用があると云うて、屋敷へ去なして置いて杯になりや、なんのかのと云はんす。大方、なんでもない用であらう。
空蟬　わたしらを外らさゝうと思うて、さんした事ぢやあろ。
大學　コリヤ、おのれまでが肩持つて、そないに云ふ事はないわいやい。
見空　イヤ、わたしが肩持たす。
ト見空、後より出る。
大學　情ない。また責めるのかいの。
見空　今日は、こなさんを一日責めにやならぬ。覺悟さんせ。二人とも取逃がさしやんすな。
玉空　合點でござんす。
ト此うち橋がゝりより、與五兵衞、大盡の形にて出る。

後より白了、漁師の風にて、八幡屋才兵衞を引摺つて出る。
才兵　サア、えいわいの。
白了　えいと云ふ事はないてや。
與五　うせい〳〵。
才兵　イヤ、申しお大盡様、爰まで參りましたからは、氣遣ひな事はござりません。コレ親仁、貴樣も其やうに急く事はないわい。
白了　急かいで詰まるものかいやい。
與五　太夫か身請けをさゝぬと、うぬ、一生動かしやせぬぞよ。
ト此うち見空、白了を見て
見空　ヤア、お前は父樣ぢやないか。
白了　娘か。オゝ、ほんに娘ぢや。お大盡樣、わたしが僞はりのない所は、娘の見空は爰に居ります。コリヤ、駿河の國からはる〴〵と都へ來ると否や、大きな出世が出來た。喜べ〳〵。
見空　わたしが大きな出世とは。
白妙　あのお大盡が、われを身請けなされて、女房にせうと仰しやる。幸ひとおれも居合す。呑み込んで埒を明け

うと思ふ。さうなればわれは仕合せ、おれも大分金儲けぢや。駿河の富士を桃山で見ると云ふのぢや。喜べ喜べ。
見空　父様、あのお客がわたしを身請けせうと云はんすが、お前、請合はんしたか。
白了　なんと、出世の花盛りぢや、嬉しいか。
見空　何を阿房らしい。わたしや否ぢやぞえ。アイ、否でござんす。
ト つんと云ふ。
白了　なんぢや、否ぢや。どうして否ぢや。
見空　云ひ交した殿御がござんす。
白了　なんと。
見空　オヽ、きよと〳〵と、なんぢやいな。殿様と云ひ交して、一日お側を離れもせず、外の客は愚か、親方さんの顔見るも、月に一度あるかなし。殿様と女夫ぢやと云ふ事は、廓の女郎方は勿論、禿、遣り手まで、誰れ知らぬ者はござんせん。そりやお前も知つてゐやしやんせうがな。
ト 此うち白了、見空が胸倉を取り
白了　ヤイそげめ、そりや云はいでも知つてゐるわい。その深う云ひ交してゐる勝家さまとやらは、聞けばお大名ぢやとある。なんぼお大名の奥様にするが嬉しいとて、素手の孫三では大事の娘は得やるまい。又あなたの方へ行くと、養ひは望み次第に遣らうと仰しやる。千も萬もない。其方を思ひ切り、あなたの方へ身請けしられませうと吐かし居らう。
見空　父様。
白了　なんぢや。
見空　エヽ、こなさんはなう。
白了　云ひ交さうがどうせうが、煮てなと、焼いてなりと金にせにやならん。サア、行かうと吐かせ。
見空　否ぢや〳〵、否でござんす。
白了　野太い事を吐かしや、カウ。
ト 擲き据ゑる。皆、取支へる。
才兵　大事の太夫、疵が附いたらなんとしやる。
白了　疵が附からが、腰が抜けうが、擲き殺してしまふ。
ト 叩く。大學、突き退ける。
大學　コリヤ才兵衛、この見空を、なんで打擲さすのぢや。
才兵　これについても、私しが難儀を、御推量なされて下

さりませ。
與五　サア、親方、身請けせう。
大學　若殿が揚げ詰めの太夫を、斷わりもなく我まゝひろぐと打ち放すぞ。
才兵　ア、モシ〳〵、お待ちなされて下さりませ。元この事は、若殿樣が見奈をお馴染みなされてより、晝夜揚げ詰めでござりますわい。なれど、今日が日までも、揚げ代と云うては一錢も貰ひませぬ。お大名の事ぢやに依つて、どうぞお金を貰ひませうと存じ、催促を致しますれば、イヤ今日ぢやの明日ぢやと、金は引摺られるし、外の勤めはさしもせず、迷惑して居ります所へ、あのお大盡樣がお出でなされて、頭から身請けの談合。ヤレ嬉しや、金の蔓に取りついたと、相談いたしますれば、イヤ此方から身請けする、外へ遣つたら免さぬぞと仰しやる。わたしはお大盡樣の手前、後へも先へも參れません。一日延ばし、二日延ばし、もう今日が手詰め。卽ち金子五百兩御持參なされ、身請けをさすか、さゝぬか、侍ひを僞はると首が飛ぶのなんのと、大抵の事ぢやござりません。と云うて、お前樣の方は身請けは出來ず、詮方盡きて、親仁とお客を、この桃山へ連れ立つて參りました。殿樣に逢うて、身請けの埒が明かぬか聞き切つて、あなたの方へ身請けさしませうと、存じましての儀でござります。
與五　サア親方、金渡さう。
才兵　へイ。
與五　是非僞はりに極まると、生けては置かぬぞ。
大學　親方、若殿が一旦心をおかけなされ、身請けなされうと御契約なされたからは、お大名の詞に違ひはない。此方へ身請けする。
才兵　して、揚げ代のたゝまりは、どうなります。
大學　それも一緒に遣るわサ。
才兵　イヤ、身請けの金五百兩、揚げ代の三百兩、締めて八百兩、只今受取らう。
大學　馬鹿め、途中に金銀があるものか。屋敷へ歸つて、遣はすわサ。
才兵　その歸りなされてからが、大抵の事ぢやござらん。サア、締めて八百兩、いま下さりませ。無ければ、あなたの方へ身請けさしませうか。
與五　五百兩は、この通り持參して居る。サア親方、どうぢや。

才兵　サア、もうあなたの方へ差上げませう。

大學　こりや、なんぢやな。おのれら、途中を見かけて難題を云ひかけ、あの方へ見空を渡さうと云ふ企みぢやな。金は何時でもお渡しなさるゝ。御領分に住みながら、不屆き働らくと、家內闕所だぞ。

才兵　如何に御領分の傾城屋ぢやと云うて、太夫は其方へ引き拔いて、金は一文も下さりませず、こりやあんまり胴慾でござりませう。

大學　うぬ、何が胴慾。さう吐かしや、いつそ、うぬ。

ト反り打つ。

才兵　そりや御無體でござります。

大學　何が無體ぢや。

白了　例へ親方が遣らうと云うても、親が遣らぬ。オヽ、おれが遣らぬ。

大學　最前から聞いてゐれば、樣々の雜言を吐くが、うぬは何者ぢや。

白了　へヽヽヽ、駿河の國三保の浦で、白了と云ふ漁師。見空が眞實の親でえすわいなう。

大學　例へ其方が親にもせよ、子にもせよ、此方へ身請けするを、邪魔ひろぐ奴があると、片ッ端から首が飛ぶぞよ。

白了　こりや大ぶんをかしいわい。養ひもおこさず、身請けの金も渡さず、ぶち放さるゝなら、放して見やんせ。

大學　うぬ、その頰桁、切り下げてくれう。

勝家　大學待て。

ト幕より出る。

才兵　ヤア殿樣、お前に逢ひたう存じて居りました。太夫の身請けは、どうして下さります。

勝家　氣遣ひすな。身請けは此方へ致す。

才兵　サア、そんなら、金受取りませう。

勝家　大學、其方に申し付け置いた、金子の儀は如何いたした。

大學　いま四五日仕りますれば、掛け屋方より持參仕りまする。親殿樣や家中を憚りますれば、今と申しては出來憎うござります。

勝家　すりや、いま四五日ほどすると、その金が出來るか。

大學　左やうでござります。

勝家　才兵衞、聞く通りぢや、五日したら金渡す程に、さう心得てゐやれ。

才兵　イヤ、さう心得て居られませぬ。いま金が出來ずば、

身請けは此方へさしますぞ。

白了　オヽ、さうぢや／＼、今の大盡に金のあつた例がない。どのやうに云うても親が遣らぬぞ。

與五　サア、金受取れやい。

大學　あの金取つたら、撫切りぢやぞ。

白了　そんなら、身請けの金はあるか。

大學　サア、それは。

三人　サア／＼、どうぢや。

大學　もういつそ、うぬ。

ト立廻りあつて、才兵衛を引きつける。

勝家　待て大學、金がある。

大學　ナニ、金があるとは。

ト此うち勝家、大學を突きのけ

勝家　大學、矢立。

大學　ハツ。

ト矢立を差出す。勝家、證文を書き

勝家　才兵衞、これを聞け。この度傾城見空に、身共惚れたに依つて、身請けするところ實正なり、金は當月廿一日みな渡さうに候ふ、もし相違あらば、天下より預かりゐる天の羽衣を質物に遣はし申し候ふ事違ひなきところ、めでたくかしく……」なんと勝家が直筆の證文。これを其方に遣つて置けば、ハテ、廿一日に金が出來ずば天の羽衣を質物に遣はさう。なんと、これほど慥かな事はあるまい。

大學　イヤ、申し、大切な御重寶を。

勝家　ハテ、遣りはせぬわい。あれを遣ると將軍からお咎め、家の潰れる事ぢや。それを遣らうと書いたが、即ち遣ると云ふ慥かな證據ぢや。ソリヤ、取つて置け。

ト拋る。

才兵　そんなら金の代りに、これを取つて置くのでござりますかえ。

勝家　なんと粹な捌きであらうがな。

才兵　五百兩いま取るのを、雲掴むやうな證文、天の羽衣が天下の重寶やら、紙子羽織が庖丁やら、知れもせぬもの。イヤ／＼、矢ッ張り金の方に致しませう。

大學　ヤイ、管領の直筆、有り難いと頂戴すべきに、樣々の雜言。うぬ、ぶち放さうか。

才兵　これは又、迷惑。

與五　親方、その證文、質物に取らうか。

才兵　エヽ。

與五　五百兩の質物に取つて遣はさう。身も望みかゝつた太夫、其まゝにしては武士が立たぬ。その證文を五百兩の質物に取つて、廿一日に其方の身請けが出來ずば、その時太夫を受取りに行く。その時外から妨げさせぬ證據。五日過ぎて身請けが出來れば、その時五百兩と證文と替へ替へぢや。すりや、其方が手へも金が入り、先も當分身請けしたと云ふもの。身共も五日過ぎて身請けするか、金で取戻すか、樂しみがある。なりや三方四方、丸う納まる料簡ぢやが、五百兩質に取らうか。

才兵　何は格別、質物に差上げませう。

與五　ソリヤ五百兩。

ト抛り出す。

大學　大切な重寶の書入れた殿の直筆、麁末にすると免さぬぞ。

與五　廿一日に金さへ受取れば、直ぐにお返し申しませう。

勝家　大學、だんないわい。羽衣を遣はしたと云ふでなし、金さへ渡せば、證文は取戻す。親方、太夫は身請けしたぞよ。

才兵　向後は、お前の奥樣でござります。

勝家　ア、嬉しやの。

見空　そんなら、身請けが出來たかえ。

勝家　これから世間晴れての女房ぢやわいの。

見空　オ、嬉し。

白了　イヤ、養ひ取らぬうちは、この親が。

ト大學、金を抛る。

これは。

大學　身請けが濟めば大名の奥方、里の親に當座の御祝儀。

白了　アノ、此お金を。

大學　願ひがあらば、後で申せ。

白了　でもマア、結構なお大盡樣。娘、隨分機嫌を取れよ。

見空　あのマア、まざ／＼しい顏わいな。

與五　最早身共は歸らう。

白了　勝手になされませ。イヤ申し大の大々盡樣。もうお暇申しませう。

勝家　勝手にせい／＼。

ト此うち簾の内より皆々出る。

喜作　ヤレ／＼、どうなる事ぢやと、大抵案じた事ぢやない。

勝家　皆も喜べ。今日から太夫は手活けぢやぞ。

女皆　イヤモ、此やうな嬉しい事はないわいな。

勝家　これから直ぐに屋敷へ去んで、呑みかけう。皆來い皆來い。

喜作　太夫樣と合ひ輿で、比翼連理のお駕籠〳〵。

ト花駕籠を舁き出る。

勝家　サア〳〵、太夫おぢや。

見空　そんなら皆さん、許さんせ。

ト合ひ輿に乘る。

勝家　大學、其方は後から戻れ。

大學　然らば、左やう仕りませう。

才兵　私しも道まで送りませう。

與五　白了、緣あらば、重ねて逢はう。

白了　おさらばでござります。

琴浦　今こそほんの、雛の嫁入り。

玉の　お提灯。

ト桃の提灯、二行に並べる。

空蟬　お先へ。

皆々　ハア、。

ト祇園囃子、所知入りの合ひ方、皆々、行列にて向うへ入る。與五兵衞、白了、東西へ別れ、よろしく後へ戻り、大學と三人、顏見合せて

白與　首尾よく參りました。

大學　コリヤ。

ト押へる。

與五　然らば、證文。

ト大學に渡す。

大學　オヽ、大儀々々。

白了　時にお侍ひ、とんと合點が參りません。わたしどもをお賴みなされ、五百兩と云ふ金までお前が出して、娘が身請けはあつちへさせ、お前の手へ入つた物は、その證文たつた一枚。こりやマア、どうでござります。

大學　不審は尤も。某、兼ね〴〵天津姫に心をかけ、何卒女房に持つて、山名の跡目押領せんと思ふところに、將軍家の指圖によつて、細川よりあの勝家が、天津姫の養子聟に參つた。それゆゑ、廓通ひも腰押して、共に馬鹿を盡すは、山名の家をぼひ出さう爲。この證文を將軍家へ差上ぐれば、傾城狂ひに天下の重寶を質物に入れんとしたる勝家、否ながら細川へぼひ戻す。勝家さへなければ、天津姫はずる〳〵べつたり、その時は山名の跡取り。管領職になれば、高祿くれう。喜べ〳〵。

白了　天晴れ驚ろき入りました。必らずその時は御褒美を

頼みます。

與五　拙者は、堤與五兵衛と申す浪人者。年寄つて斯様な事に與み致すも、子が可愛さ。拙者が悴與五郎と申す者、產れついて心に足りませぬゆゑ、其許様の傍輩、桂左衛門どのへ足輕奉公に遣はしましたれど、高が少切れ米の阿房めゆゑ、尾葉打枯らして、無心にはえゝ參れず、却つてあの方へ貢ぎます。正眞の貧の盜みとやら、御願成就いたした節は、何卒悴與五郎めを、お引上げ下さりませ。

大學　氣遣ひしやるな。曾孫の末まで出世になるわいなう。

與五　然らば拙者は、もうお暇申しませう。

大學　緣があらば重ねて逢ひませう。

與五　白了どの、おさらば。

ト與五兵衛、向うへ入る。大學、思ひ入れあつて、眺める。

白了　イヤ、わたしも、もうお暇申しませう。

ト行かうとする。

大學　待て。

白了　御用でござりますかな。

大學　今の親仁が云うた事、聞いたか。

白了　エ、。

大學　彼奴が悴は與五郎と云うて、桂左衛門が足輕。この事を口走れば、一大事。

白了　誠にこりや、捨てゝは置かれぬわい。

ト此うち大學、思ひ入れあつて

大學　コリヤ、其方は後からぼッついて、向うの松原で、思ひがけなう後からすつぱり。

ト刀渡して、囁く。

白了　合點ぢや。

ト尻引ッからげる。

大學　コリヤ、勝家にその科を塗り附ける仕様は、この證文を死骸へナ。

ト囁く。

白了　面白い。

大學　行け。

ト白了、向うへ走り入る。大學、ちよつと思ひ入れあつて、橋がゝりへ入る。返し。

造り物、一面の葭原の體。後は土手。大黒柱の際に

樋あり、砂舞臺の前に捨て子の蜜柑籠あり。ほの暗がりの景色、霞、ザワ／＼とする。向うの樋を上げると、内より赤松四郎、がつさう頭にて、ちぎれたる着物を着て、血まぶれになり、口に一卷を銜へ、片手に拔き身を拭き、一卷を懷中へ納め、首を腰に提げ、向うへ行かうとする。赤子、頻りに泣くゆゑ、立ちどまり、あたりを見て、また行かうとする。赤子泣く。二三度あつて蜜柑籠を見附け、こなしある。

赤松　身に望みあればこそ、人も殺す、盗みもする。こりや一心凝つたる偸盗戒。水とも湯とも知れぬ者を、捨てて殺すとは殺生戒。エヽ、酷い奴がある……ても、目の張りから鼻筋、色白なよい子めぢや。エヽ、笑ひ居るわい。をかしいか。エヽ、をかしい／＼。オヽ、目をほちほちして、舌を出し居る。見れば見る程よい子めぢや。不便になつて來た。緣でがなあらう。爰に斯うして置いたら犬の餌食。よいワ、おれが拾うて子にしてやらう。

ト子を出し、懷中へ入れる。侍ひ二人、窺ひ立廻り、支へるを、ポン／＼と殺し、死骸を隱し

幸ひ、首の納め所がなかつたが、おれの爲の南無地藏ぢや。

ト首を蜜柑籠へ入れ、それより子を愛する事いろ／＼よろしくあつて、花道へ入る。暫くあつて四ッの鐘鳴る。東西の棧敷の下より、合圖の拍子木打ち合はす。西の棧敷殘らず川と云ふ字の高提灯。臆病口より結構なる大名乘り物、近習、徒士、若黨、中間、附き出る。東の棧敷殘らず山と云ふ字の高提灯。橋がゝりより結構なる大名乘り物に、藤倉玄蕃、附き出る。徒士、若黨、皆々本舞臺のよき所に乘り物直す。みな一同に蜜柑籠を取卷きて辭儀する。

徒士　最早四ッの刻限でござります。

政基　亥の上刻か。

徒士　左やうでござります。

ト此うち細川政基乘り物より出で、蜜柑籠に辭儀して

政基　東山、足利九代の將軍義尙公の御姬君、兒ひとは申しながら、土邊に捨て置きまする段、冥加至極もござりません。

玄蕃　これは細川修理太夫政基さま、御苦勞に存じ奉ります。

政基　山名どのゝ家來、藤倉玄蕃、大儀／＼。

玄蕃　將軍職の御胤、下樣の者同然に、この所へ捨て置

かせらるゝ段、憚りながら様子承はりたう存じまする。

政基　オ、皆の者、不審にあらう。この度姫君御誕生なされしところ、西の刻八歩にかゝりし月蝕の御生れ。殊に将軍義尚公、四十二の二つ子。典薬の頭博士申すは、西の刻八歩にかゝりし月蝕に誕生したる子は、一月過ぐると大いなる難病發す。殊に四十二の二つ子は、其まゝ育つれば親にも子にも祟ると云ふ習はし。これを遁がれんには、何者ぞに遣はし、養子に取るか、又は野原に捨てて、拾ひ子とたすが咒ひとある。将軍の姫君、誰れあつて貰はんと云ふ者なく、この所へ捨て置いて、拾ひ子となさるゝが、姫君の難病の咒ひだわやい。

玄蕃　様子承はつて、驚ろき入りましてござります。

政基　もし狐狼の災ひもあらんかと、守護申し付け置いたが、四方の固めはよいか。

玄蕃　双方申し合はせ、二里に人數を伏せ、四ッの鐘を合圖に火を點じ、守護仕つてござります。

政基　大儀々々。ヤア、姫君のお聲がせぬ。よく御寢なつたものであらう。ドレ／＼。

ト蜜柑籠の側へ寄る。と乗り物の内より

宗全　待つた。細川どの、先づ待たつしやれ。

政基　山名どの、御用かな。

ト此うち山名宗全、乗り物より出で

宗全　御用のある段ぢやござらぬ。控へ召されい。

政基　して用事は。

宗全　お身は禮儀作法と云ふ事を知つて居やるか。

政基　なんと。

宗全　将軍職の姫君御誕生について、仰せを蒙むり、この所へ捨て置き、兩管領立合ひを以て、守護し立歸るは、こりやコレ知れた事サ。それにこの宗全、立合ひもせぬに、我まゝに籠を取扱ふゆゑ、禮儀を知らぬ侍ひと、聲かけたが誤まりか。イカサマ、禮儀を知らぬも無理ならぬ事ぢや。藪醫者などの云ふ事を誠にし、西の刻、月蝕八歩の御誕生の子に、一月過ぎて難病があるやらないやら、虚空を掴むやうな事を云ひ出し、咒ひで候ふなどと、足利の姫君を犬か猫をほかすやうに、イヤモ、立合うた宗全も、阿房らしくて興が覺める。ハヽヽヽヽ。

政基　ハヽヽヽヽ。知らざる者は知るを誹る。日本は神國咒ひを以て主とする。さればこそ王城の鬼門を守る比叡山、所々に奉幣御祈願所など、寺領社頭を附け置かるるも、皆これ咒ひ、變生男子の法もあれ、これらも賣僧

と云つてしまふか。宗全どの、ハ、、、、。
宗全　騙り盗人の云ふ事を、眞受けにするは匹夫の事サ。
政基　イヤ、仰しやるな。如何やうにならうとまゝよ、當將軍義尚公は、身共が育てた養ひ君。出るにも入るにも、將軍のお身の上は某次第。この儀に於て不調法があらば、この皺首を進上申す、其許に雜儀はかけぬ。立合ひならば、チッと見物してござれ。サア、姫君、爺めがぽつぽへ入らつしやれ。
ト上の衣を取つて悄り。宗全、辭儀してゐる。
ヤア。
宗全　なんと致した。
政基　姫君はござらず、生首になつてある。これは、
トいろ／＼うろたへる。
皆々　ヤア、、、。
政基　家來ども、四方の守護は固めたか。
ト急いて云ふ。
皆々　固めましてござります。
政基　それにこれは、オ、、、、。
ト膽潰す。
宗全　細川どの／＼。

政基　ヤア／＼。
トうろ／＼する。
宗全　姫君は御安泰かな。
政基　イヤサ、たつた今まで。
宗全　何がどうした。
政基　家來ども、何れにもせよ、葭の間々、犬狼の居さうた所を詮議いたせ。
皆々　畏まつてござります。
ト皆々、葭の間々を掻き分け索ねる。雀、大分飛び出る。家來、駈け戻り
詮議仕つてござれども、胡亂な者は見えませぬ。
政基　何者も居らぬか。それにこれは、オ、、、、。
宗全　家來ども、修理太夫を閙へ。
皆々　ハア。
政基　待つた、麁相せまいぞ。
宗全　老いぼれたとあつても、其まゝには捨て置かれぬ。將軍職の事は養ひ君ゆゑ、立たうと伏せうとまゝ、不調法があらば皺首と云つたではないか。こりや、察するところ、誠の姫君を殺してしまひ、その科を拔けんが爲、咒ひと云ひ立て、犬狼に取られましたと云ふのか。ど

うせうが、どう陳ぜうが、云ひ譯は立たぬ。サア、細川政基、姫君の在所を云へ。
政基　コレ、宗全大切な儀ぢや。さう意地惡う詮議せぬものぢや。例へ常はよからぬ仲にもせよ、將軍職よりお指圖にて、身が忰勝家を、其方の娘天津姫と娶合せ置けば、一方ならぬ一家。一世一度の場ぢや。共々に詮議してくりやつても大事ない事ぢや。
宗全　一家の結びは內證事、天下の姫君を失ひ奉つても、苦しうないの。
政基　そりや又、あんまり。
宗全　姫君を失うた云ひ譯があるか。
政基　サア、それは。
宗全　サア〳〵〳〵。なんと。
　　ト向うより早打ち來る。
早打　申し上げます。何者とも知れず、寶殿へ忍び入り、霓裳羽衣の曲の一卷、奪ひ取り、番人を切り殺し、立退きましてござります。
皆々　ヤア。
政基　南無三。
　　ト股立ちとり、向うへ行かうとする。
宗全　待て、政基。どこへ駈け出す。
政基　大切な寶の盜賊。
　　トまた行かうとする。
宗全　待て。姫君の行くへ知れるまで、動かす事はならぬ。
政基　サア、それは。
宗全　動くな。
　　ト政基、立廻りにて、昇前の首を見て
政基　心の急くまゝ、面をとくと改めなんだが、この首は守護申し付け置きたる折田伴內が首。これが爰にあるからは、寶の盜賊は卽ち姫君を奪ひし奴。貴殿、立合ひたれば、共々に詮議を召され。寶の詮議が姫の詮議。貴殿、跡に殘つて、詮議召されい。そこ退きやれ。
　　ト振り放す。
宗全　待て。
政基　面倒な。
　　ト振り切る。
　續け。
　　ト向うへ走り入る。乘り物、徒士、若黨、皆々、入る。
宗全　ヤレ、政基待て〳〵。

玄蕃　ト向うを眺め、思ひ入れ。霓裳羽衣の一巻、紛失とござります。
宗全　ハテナ。
ト宗全、向うを眺め、思案の體。内より
呼び　お先。
ト内より
大勢　ハア、。
ト向う、黒幕、切り落す。一面、土手、桃の木原になり、祇園囃子にて、勝家、見空を花籠に乗せ、舁き行く、宗全、後をキッと見ると、徒士、若黨。ハア、と辭儀する。この間、囃子にて、皆々、橋がゝりへ入る。宗全、正面を向き、向うと後との心意氣、蜜柑籠へ首を入れ、小脇に抱へ、静かに乗り物へ入り、戸をピッシャリ。
宗全　乗り物やれ。
皆々　ハア〳〵。

幕

二段目　山名館の場

役名――足利義尚公。今川仲秋。山名宗全。山名綾之助。山名右近之助勝家。村雲大學。藤倉玄蕃。太田郷左衛門。岩淵丹下。甘野藤内。奴、關内。茶道、珍才。傾城、見空。同、空蟬。同、玉の井。同、琴浦。仲居、おさち。山名息女、天津姫。左衛門女房、白了。與五郎女房、おたか。禿、市彌。家老、柱左衛門後ニ北川惣左衛門。

造り物、三間の間、二重舞臺。一面、長暖簾かけ、下座、高塀、橋がゝり、一面の障子、塗り骨にて、向う入り口に、この國屋と云ふ行燈かけ、附け舞臺、砂場の前に青竹にて埒あり、それに寶引き綱、四筋かけてあり、幕の内より騒ぎ唄にて、幕ひらく。
ト藤倉玄蕃、岩淵丹下、大盡の形にて出で
玄丹　亭主は〳〵。國介々々。
ト勝家、亭主の形、前垂れ、手拭、腰に下げ
勝家　エ、、これはお大盡様方、常より早い御來光、お精

が出まして、大悦に存じます。なんと思うて、早うお出でなされました。
丹下　早う來いでならうか。サア、誹らへの奧州は、どうぢやどうぢや。
玄蕃　コレサ〳〵丹州どの、そりや約束が違ふ、まんがちにござる。
丹下　何がまんがちにござる。
玄蕃　ハテ、奧州が事は御自分も、手前も心がけて居るわサ。なんでも身共が手に入れうと存じ切つてゐるのに、內へ入ると否や、奧州とは、近頃まんがちでござる。
丹下　それは御自分の方がまんがちぢや。先に身共が奧州に惚れてゐるゆゑ、彼奴が顏を見ると否や、奧州はどうぢやと尋ねたのサ。
玄蕃　然らば御自身も、奧州が目の先にちらつくか。
丹下　ちら〳〵するわいなう。
勝家　これはお二人樣、きついのぼせやうでござります。イヤモ、御兩人樣ばかりぢやござりませぬ。廓へお出でなさるゝ大盡樣方は、みな奧州さま〳〵と仰しやります。イヤ又仰しやるも道理かい。お年は二八の花盛り。お腰の廻りは靑柳の、いとしらしいお姿は、閻魔大王もこの國へ通ひたからう。この國介も、あの鼻めが許すなら、地獄までも手に手を取つて行きたうござります。
丹下　その地獄で思ひ出した。花車はなんとした。
玄蕃　イカサマ、花車に逢うて、奧州が事を賴みたい。花車を呼べ〳〵。
勝家　イヤ、嚊めは、これも奧州さまの事について、あの二階に居ります。
丹下　大事の事を抛つて置いて、餘所の客の取持ちしをる。お國を呼べ〳〵。
勝家　畏まりました……コレ、お國よ〳〵。
ト內より見空、前垂れ、花車の形にて出で
見空　これは〳〵お二人樣、早々とようお出でなされました。サア〳〵、奧へお出でなされませ。
玄蕃　コレサ丹州どの、最前も申す通り、まんがちはなりませぬぞ。
丹下　そりや餘りくどうござる。身がまんがちに申したりや、御自分はどうなさるぞ。
玄蕃　そこは百年目、お相手になる氣サ。
丹下　面白い。見ん事相手になる氣か。
玄蕃　オヽ、なる。

文化二年正月中の芝居所演番附絵

丹下　なれよ。
　ト兩人詰め合ふ。勝家、見空、割つて入り
見空　申し〳〵、これはなんとした事でござります。こちの人、こりやどうでござんす。
勝家　イヤ、これは何よ。あなたに頼まれた、奥州の事で爭ひぢやわい。
見空　ほんに、こんな迷惑な事はない。わたしも、あの奥州さまゆゑにいぢられて、今も今とて、思はぬ酒を飮んだわいなア。
鄕左　花車、奥州はどうぢや、どうする。
　ト二階より云ふ。
見空　アイ、今そこへ參じます。
　ト此うち鄕左衞門、出る。
鄕左　どう埒を明けるのぢや。
　トほろ醉ひにて云ふ。
勝家　これは堪らぬ。片身恨みのないやうに、內々の趣向を、お話し申さゞなるまい。
見空　さうせざ濟むまい。話さしやんせ。
勝家　さて、お三人樣へ申し上げまする。兼ねて、何れも樣のお望みの奥州さま、どなたに逢はしましても、殘りのお方々から、お恨み受けるはこの國介。幸ひ今日は月待ちで、私しの內の嘉例で、福引を致しまする。その福引を趣向に致し、コレ、この綱でござります。
三人　この綱が趣向とは。
勝家　されば、奥州さまはお一人、お望みなさるゝはお三人なれば、そこでわたし等が智の字を以て、コレ、あの離れ座敷に奥州さまを始めまして、數多の太夫樣方を入れ置き、この綱を持たせ置きまして、そこが運ぷ天ぷ。この綱が互ひの御緣結び、奥州さまを引き合つたお方が、抱いて寢るとは、なんとこれでは、かたみ恨みはござりますまいがな。
見空　なんと夫婦の者の工風、否とは申されますまいがな。
三人　出來た。
　ト一度に手を打つ。
鄕左　サア〳〵、然らば福引を始めい〳〵。
勝家　おつとまかせ。囃子の衆、勇みに勇んでやつてたも。
　ト囃子になり、合ひ方にて鄕左衞門、綱を持ち
鄕左　サア〳〵、身共から引かう。

ト綱引く、向うより玉の井、傾城の形、綱持ち出る。
郷左衛門、引き取つて、顏見合はせ。
ヤア、貴樣は。
玉の　玉の井の深い心を汲み上げて、繋がる縁なら是非がない。水も漏らさぬお心に、なつて下さんせ、賴むぞえ。
郷左　これは渡りに舟かいやい。
ト これをせりふの合ひ方に合はせ云ふ。
勝家　否と云はれぬ緣定め。さらば御來臨。
ト玉の井を郷左衛門の側へやる。
サア／＼、この次は、ひら樣ぢや／＼。
玄蕃　オヽ、引き取つて我が奧州、引き合ひなくて約束し
ト合ひ方に合せ引く。琴浦、綱を持つて顏を見合せ
ヤア、貴樣は。
琴浦　琴浦に峯の松風通ひ來て、いづれの綱か知らぬ火の、燃ゆる思ひを打消して、可愛がつてもらひたい。賴むぞえ。
玄蕃　てんとぴやくらい。
勝家　乘り替へ給へと申しける。
ト右の通り押しやる。
サア、この次は丹さまぢや。

丹下　是非、この度は奧州を、南無福引大明神。
ト合ひ方にて、空蟬、綱持ち出る。皆々、前の通りなるべし。
ヤア、貴樣は
空蟬　空蟬の身は後朝の別れ路の、憂き音を訪うて下んす氣か。否と云はれぬ緣の綱、引かれはせまいぞえ。
玄蕃　じや／＼馬やめて、牛にしよか。
勝家　あの若樣をその角で、一突き突いてくれの鐘。
ト押しやる。
三人　これはどうも云へぬ。國介、出來た／＼。
勝家　なんとこの國屋國介、軍慮の程、きついか／＼。
見空　斯う花を並べて、お揃ひなされたところは、憎うはござりますまいがな。
琴浦　深山木のわしらぢやに依つて、嫌はんすも尤もながら、勤めの慣ひ、ナア玉の井さま、枝かさ松は許さんせい。
玉の　餘所の眺めを手折るも辛や、落花狼藉免して欲しい。
空蟬　身を投げ入れの床ならば、世を山鳥の襖越し、話してなりとも洩らしたい。ナア花車さん。

琴浦　さうぢやないかえ。
見空　これはきつい。お客様方、あれをお聞きなされては、どうも云はれは致しませぬ。
勝家　どうぢや〳〵と責めかけたり。
丹下　ア、、誤まつた〳〵。君達の志し、無足にはせぬが、お二人は。
玄鄕　肉食へば皿ねぶれ。其許と同心ぢや。
勝家　サア、これで夜が明けた。サア、何れも様、コレ爰に綱が一筋剩つてある。剩りし綱は親の者。これはわれ等が拜領かい。
鄕左　ても吐かしたり、喋つたり。只今の働らきに。それは汝に得さするぞ。
玄蕃　それは汝が福引ぢや。
勝家　心得たりと云ふまゝに、打つて置け。
三人　しやん〳〵。
ト打ちかゝるを、見空入る。
見空　どつこい、打つまい。ならぬ〳〵。
勝家　踏ばりめ、なんでならぬ。
見空　アイ、ならぬ。
ト向うへ引据ゑる。

三人　コリヤ〳〵、花車、狼藉すなよ。
見空　大事でござりませぬ。コレ、妓な國介さん、あの綱を貰うて引かうとは、彼のぢやの〳〵。
勝家　彼のとは、なんの事ぢや。
見空　何を、知るまいと思はしやるか。皆様、聞いて下さんせ。國介どのは、あの奥州さまに惚れて居られますわいなア。
三人　ヤア、。
見空　コレ、差詰めこの綱は、奥州さまに極まつた。引寄せて、手に入れうとの事。ならぬ、ならぬ、そりやならぬ。
勝家　コリヤヤイ、剩り綱には福があると云ふぢやないか。その福を取らうと思ふ、其おれを邪魔する貧乏神め。さう云や、この綱、引かにや置かぬ。オ、、奥州さまに、おりや惚れて居る。貧乏神に妨げられ、おれが福を捨てる事はならぬ。構はずと、すッ込んで居れ。
見空　さう云つても、引かす事はならぬ。
勝家　イヤ、おのれは。
ト取つて投げ、踏む。皆々、取りさへ、見空を連れて退く。勝家、腹立てる。

イヤ〳〵、あの貧乏神めに支へられて、お座敷の興を覺まし居つた。おのれを。

トまた叩きにかゝると、丹下、郷左衛門、玄蕃とめる。

玄蕃　ナウ御兩人、察するところ、興に致すところを、嬶めがおりんと相見えた。手前ども、料簡いたさせ、國介に引かさうではござるまいか。

丹下　御尤も。花車、料簡せい〳〵。

郷左　引く事は許す〳〵。

見空　そんなら、引かんすばかりぢやぞえ。

勝家　人中でなるものか。引くばかりぢや。許し居れ。

三人　サア〳〵、嬶衆が和らいだ。國介、急いで引きませい。

勝家　心得たりと夕顔の、御面像をば拜まんと。

ト引く。遣り手おさち、太夫の形にて出る。顔見合せて

ヤア、貴樣は。

さち　奥州ぢや。月かげ廓の道を捨て、五分取りでござんす。おあし三筋や五筋は、ちんの間で儲けやす。お前の先刻のほこ〳〵で、氷の股を溫めてくれなさりんせ。頼むぞえ。

勝家　夢になれ〳〵。これはなんたる事ぞ。旦那樣方、こりや、どう致しませう。

丹下　抱いて寢い〳〵。

郷左　所望ぢや〳〵。

見空　引かれはせまい。國介さま、ヨウ〳〵。

勝家　エヽ、忌々しい。

トおさちを突きこかし、逃げて入らうとする。

さち　コレ男、待ちや。

ト勝家の胸倉を取る。

勝家　夢になれ〳〵。

さち　コレ、國介さま、辛いぞえ〳〵。今日の福引に、奥州さまの間違ひは、わたしが爲には結ぶの神、縁ある綱に引き出され、嬉しやと思うたに、お多福引くとは胴慾な。むごいわいな〳〵。

勝家　夢になれ〳〵。

三人　こりや、奥州が尤もぢや〳〵。

ト見空、おさちの側へ行き

見空　泣かんすな〳〵。

さち　イヤ〳〵、お構ひなさりんすな。大事ない、大事ない。

ト袂より絞りの古手拭を出し、泣く。

見空　コレ國介どの、望みの奧州さまが手に入つた。抱いて寐さんせいな。

勝家　女ひでりがあればとて、あの奧州が、どういけるもので。

さち　アレ又、あんな事ばかり。

ト泣く。丹下、鼻を撮んで

丹下　コリヤ／＼國介、座敷が持てぬ。花車、どうぢや。

見空　こちの人、誤まりか。

勝家　近年の誤まりぢや。これに懲りよ道才坊、よいやうにしてくれ。

見空　コレ奧州さま、女子は相身互ひぢやもの。それ程に主を思はんすこなさん、どうも捨てゝは置かれぬ。今夜一夜さ、主を貸します。奧の一間で寐て待たんせ。

さち　そりや、ほんとかえ。

見空　誓文々々、神かけて。

さち　エヽ、忝ない。アヽ、嬉しい。ほんに嬉しいと思うたら、除ッぽど空いて來たわい。一杯しよかえ。

見空　酒も上げうし、飯も上げう。わしに附いて、斯うござんせ。

さち　そんなら。

ト連れ立ち、奧へ入る。勝家、こなし

勝家　てもさても情ない。百年も年が寄つた。

女皆　よい氣味の。

勝家　エヽ、惡いお方々ぢや。サア、ぎゐん直しに、一杯やりませう。銚子持て來い。

ト手を叩く。見空、アイ、と銚子持ち出る。

嬶、福の神は。

見空　隨分吞まして、寢さして置いた。サア、何れも樣、一つ上がりませう。

郷左　如何にも／＼。併し、今の福の神で滅入りが來た。わつさりとした肴はないか。

琴浦　あるとも／＼。よいのがござんす。この間、この廓へ風流の和中散賣りが、仕方物眞似をして賣るが、面白い事なア。

空蟬　それ／＼、もう爰へ見えさうなものぢや。

玉の　アレ／＼、あそこへ來るわいなア。

玄蕃　そりやよからう。御兩人、呼んで見ようぢやあるまいか。

丹下　亭主、働らけ／＼。

勝家　畏まりました。

ト唄になり、向うより和中散の荷箱をかたげ、藝子萬代、小銀出る。本舞臺へ直ると、唄止む。これより和中散の云立てになる。

萬代　サア、これは本家和中散、御用のお方は召されませい。

小銀　一袋が十二錢。

萬代　半袋が六錢。

小銀　お望み次第、差上げまする。

萬代　さてもこの藥の功能は、四季に用ゆるその品が、先づ初春が春めきて、色樣達の色々と、戀と酒との詰まりには、癪やら、頭痛、疝やら、その折からにこの藥、一袋上がれば忽ちに、心靜かに注連飾る、梅が香匂ふ梅の木の、さてこそせさいと申すなり。

萬代　さてまた夏は舟遊び、祭時分は間夫樣が、俄をだしに君達の、お顏を見ると氣ものぼり、足も空にてふらついて、痛む所や膝頭、擦剝いたのに附けてよし。

小銀　秋はさやけき月見酒、大杯に影うつる、月の桂の客樣の、さいつ押へつ酒盛りに、二日の醉ひはさて置いて、十日の醉ひでもこの藥、あがると忽ち醒めるなり。

萬代　冬は雪の夜降り積る、寒さいとはず通はんす、可愛男の待ちぼうけ、それから互ひの口舌となり、踏んず蹴つつのその時に、この藥をば用ひれば、其まゝ機嫌直るなり。

小銀　そりやなぜに。

萬代　ハテ、仲を和らげ散らすゆゑ、和中散とは名けたり。賣り手の喜び

小銀　買ひ手の幸ひ。

萬代　サア〳〵、藥を召しませ〳〵。

ト皆々、ヨウ〳〵と褒める。

玄蕃　とてもの事に、物眞似が聞きたい〳〵。

皆々　所望ぢや〳〵。

トこれより物眞似、荷箱の内より云ふ。兩人、身振り、立ち姿、いろ〳〵あり、また役者の名を云うて、いろいろある。

小萬　よいか〳〵。

皆々　どうも〳〵。

丹下　コリヤ亭主、これを爰で見せるのは、惜しいものぢやないか。

鄉左　如何にも〳〵、さうでござる。亭主、趣向せい趣向

せい。

勝家　然らば、奥の大座敷で、衣裳を添へまして、女郎樣方も相手に、いま一曲望まうかい。

見空　それ〳〵、皆樣もわたしも、打交はつて致しませう。

玄蕃　これはとんと掘出しぢや。サア〳〵伴うて、奥へ來い。

傾三　そんなら、わたし等も勤めうかえ。

勝家　さうとも〳〵、和中散の二人ともにお入り。先づお入りなされませう。

ト騷ぎ唄にて皆々入る。直ぐに合ひ方になり、向うより茶道珍才、紙子衣裳に一腰差し、頬かむりし、編笠着て、靜かに出る。後より男達二人、附き出る。砂舞臺へ來て、兩人、向うへ廻り、珍才を留めるこなし、いろ〳〵ある。と附け舞臺より關內、男達の形にて出で、見てゐる。兩人の男達、珍才と模樣ありて、珍才を眞中に挾む。

男一　待て。

ト珍才、顏を見て思ひ入れ、後へ戾らうとする。

男二　待ちやアがれ。

ト珍才、立ちどまる。

男一　コリヤ編笠、わりや巴之丞ぢやな。

ト珍才、兩方の顏見る。

男二　ハテ、巴之丞ぢやワ。

男一　われを留めたは別の事でもない。おれが出入りする戸根五郎さまと云ふお侍ひ、この廓の扇屋の、奥州と云ふ太夫に心をかけて、通はしやれども靡かん。聞けば、巴と云ふ蟲があるゆゑ、旦那の心に隨はぬ、それで巴を退けてくれいとお賴みぢやに依つて、キリ〳〵退け。否と吐かすと、臺座と後光しまはする。

男二　但しは否か。

男一　應か、返答は

兩人　どうぢや。

ト此うち珍才、逃げうとする。

二人　どこへうせる。マア、この編笠を。

ト取らうとする。關內、走り寄り、二人を投げ、珍才を圍ふ。二人、起きて

うぬを。

ト手を振り上げ、思ひ入れある。

うぬは誰れぢや。

關内　おれを知らぬか。忝なくも某は、そも出生を申さうならば、西は九州薩摩潟、鬼界高麗南海の、南京とんきん昆崙山、山のあなたを突き抜いて、をらんだまでも隱れない、貫綠の門兵衞と云ふ男ぢやわいやい。
男一　ヤア、おのれは貫祿か。
男二　すりや彼奴が肩持ちか。
關内　オヽ、蟲どのゝ肩持つのぢや。足元の明るいうちに、とツとゝ失せう。
男一　こりや身があつて面白い。合點か。
男二　合點ぢや。
ト兩人、關内にかゝる。立廻りあつて、見事に投げ、さんざんに踏む。
二人　こりや叶はぬ。免せ免せ。
ト兩人、這々に逃げて入る。關内あたりを見廻し、珍才が手を取上げ、上座へ直し
關内　若殿巴之丞さま、思ひがけもない所で、御意得ましてござる。殿樣、爰をどこぢやと思し召します。こなたはその生面をさげて、この廓へよう來られますなう。こなた事は、傾城奥州ゆゑに身を放埓に持ち、家國を見放され、御流浪の身の上。拙者儀はお末の小身者、仔細あつて浪人いたし、先の御恩を思ひ、こなた樣をお匿まひ申したぢやござらぬか。それにまだ、奥州に心殘り、又してもてもて廓通ひ、二貫八百目と云ふ揚げ代に乞ひ詰められ、廓の者どもが門口へ引摺つて、こなたを門へ押しつけ、頭を撫る。それを見て笑止さに、身が一腰を賣り拂ひ、濟まさうとしたその銀を、また盜まれたゆゑ、右の樣子を廓の者に云ひ聞かせ、この國屋國介に請合はせ、やうやうこなたを連れ歸つたぢやないか。そのまだ溫まりも覺めぬうちにこの廓通ひ。誰れに斷わつて爰へござつた。貫祿門兵衞、只今こそ町人なれ、以前は御家來花岡和田右衞門でござるぞや。もうその性根では役に立たぬ。死なしやれ、死なつしやれ。その腐つた性根では、えゝ腹は切れまい。身が手にかけて打ち殺すも刀の穢れ。幸ひ身が履いた草履、これを持つてこなたを打ち殺す。死なしやれ死なしやれ。
ト草履にて叩き、向うへ投げる。珍才、編笠脫き、頰冠りを取り、關内が貌をヂッと見て
珍才　花岡和田右衞門、わりや、主の巴之丞を、其方が履いた草履で打つたぞよ。
關内　オヽ、打つた。死なしやれ、死なしやれ。死なにや、

いつそ打ち殺す。
ト此うち珍才、兩肌を脱ぐ、袈裟掛けてゐる。

珍才　サア、打ち殺せ。
ト關内見て

關内　ヤア、このお姿は。

珍才　これを見い。
ト一通を投げ出す。關内取上げ

關内　佛に申して曰く、一世に定めなき事を思へば、實練門兵衞夫婦の者、貧しき中にわれを匿まひ、武士のあるまじき刀を賣り、我が揚げ代の請合ひ、日限りも近付き、かゝる難儀も我れゆゑと觀念し、遁世するものなり。南無歸依佛、歸依法、歸依僧、敬白、月日、小笹巴之丞判。さてはこなたは、御出家の思し召し立つてか。

珍才　今生の名殘りに、太夫の顏、一目見ようと思うて來ましたわいなう。
ト大泣き。

關内　さう云ふお心とも知らいで、勿體ない、お主を草履で打ちました。御免なされて下されませ。

珍才　イヤ〳〵、何もかも、皆おれが足らはぬから起つた事。堪えてたも。

關内　イヤ、私しから。

珍才　イヤ、おれから。
ト兩人、手を取つて泣く。

關内　力落さつしやりますな。今日、私しの參りましたは、その金の事について、國介と好い相談が出來ました。お氣遣ひなされますな。

珍才　オヽ、兎角頼むぞや。
ト關内、珍才に頰かむりさせ、手を引き、内へ入る。手を叩く。男出でゝ

久助　アイ〳〵、どなたでござります。オヽ、門さまでござりまする。

關内　久助か、亭主は。

久助　奧に居られます。

關内　ちよと逢ひたいが。

久助　御案内申しませう。サア、お出でなさりませ。

關内　さらば參らうか。
ト珍才が手を引き、入ると、ぬめり唄にて天津姬、向うより道中にて、禿袖野、男附き出る。内より勝家出る。

勝家　オヽ、奧州さま、これは近頃御勿體。我れら方へは、

いつでも遲いお越しでござります。
天津　また國介さまのおねだりか。今日は早う出る筈であつたれども、俄かに此方の三毛が、産をしたわいな。
袖野　今日は此方の三毛が、腹が痛いやうになつたに依つて、太夫樣が腰抱いたり、鰹掻いたりして來たわいな。
天津　もう今朝から、取上げ婆やら女郎やら、上へ下へ交ぜて居て、それで遲かつたのぢやわいな。
勝家　左やうでござりますか。イヤ、申し、最前からお客が待つてゞござります。
天津　ほんに、さうであらうなア。行かうかえ。
勝家　サア、お出でなさりませ。
ト入る。向うより禿市彌、風呂敷包みを割掛け出る。後より大學、駕籠を舁き出で
大學　オヽイ／＼、駕籠まけませう。
市彌　まけてたもるか。
大學　エヽ、思へば／＼厭いものぢやけれど、廓まで七々にせう。
市彌　サア、よいやうにして置きやいなう。
ト大學、本舞臺へ駕籠を直し
大學　サア乘らんせ。風呂敷包みは、駕籠の前へ置かんせ。

ト市彌乘る。
サアやるぞ。
ト後の方、一人して舁く。駕籠俯向く。
市彌　ア、コレ危ない。なんとしやるぞいなう。
大學　ハテ、駕籠をやるのぢや。
市彌　でも、危ないわいなう。
大學　合點ぢや。
ト前へ廻り、駕籠舁く、駕籠仰向く。
市彌　ア、コレ、仰向けにこけるわいなう。
ト大學、駕籠を下ろし、思案して
大學　これでは行かぬ。もう來さうなものぢや。オ、イオオイ。
ト向うより藤内、息杖腰に差して出る
藤内　オヽ、おれぢや。ヤア、片棒はわれか。
大學　エヽ、ひよんな奴ぢや。われとおれとは肩が合はぬ。餘の者おこせ。
藤内　さう云はずと、やつてくれ／＼。
大學　そんならえいワ。サア、片棒が出來た。乘らんせ。
市彌　そんなら、乘るぞや。

藤内　ても美しい子ぢや。此奴は只者ぢやないわい。
市彌　成る程、わしは禿ぢやわいな。この廓から伏見の稻荷さまへ、太夫樣の代參したのぢや。そしたら、あの人が駕籠を持つて來て、戻りぢや、乘つてくれと云やつたに依つて、それで乘つたわいなう。
藤内　ムウ、物好きな奴ぢや。
大學　ハテ、肩を休めて置くと、寒さが強くなつていけぬ
サア、早うやれ、やれ。
ト舁き、兩方、後向きになり、行かうとして、兩方へ引ッ張る。
藤内　コリヤ〳〵、どうするのぢや。
ト駕籠を下ろす。
大學　前向くのぢや。
藤内　サア、合點ぢや。
ト舁き、兩人、前向き、兩人、前へ押す。
大學　コリヤ〳〵、どうするのぢや。
トまた駕籠を下ろす。
藤内　前向くのぢや。
大學　サア、それで前向いた。
藤内　エヽ、鈍な奴ぢや。

大學　コリヤ、おれは後向きになる程に、おれが脊中見て、舁けよ。
藤内　オヽ、合點ぢや。
ト本眞に舁き、大學、足をヒン〳〵とする。
コリヤ、何する。
大學　これか。
藤内　オヽ。
大學　俊寛ぢや。
藤内　こりやよい。同じ俊寛ぢや。
ト足をヒン〳〵する。
大學　どうやら拍子がなうて淋しい。禿樣、一節唄はんもんか。
藤内　こりやよかろ。
市彌　サア、唄ふ程に、早うやつてたも。
二人　やるぞ〳〵。
市彌　駕籠の鳥かや、恨めしや。
ト投げ節唄ふと、兩人、駕籠舁きながら、小褄取り、道中の身振りして一遍廻る。
オヽ、もう爰ぢや、下ろしてたも。
大學　もう爰かえ。

藤内　一遍廻つたら、もう爰ぢや。
　ト駕籠を下ろす。
大學　思ひの外早かつた。サア、駕籠下りさんせ。
市彌　價は、太夫様に貰うてやろぞや。
大學　滅相な。太夫様と云ふは總名。お前の云ふ太夫の名は、なんと云ひます。
市彌　名は奥州と云ふわいな。
大學　アノ、奥州さま。
市彌　アイナア。
大學　その太夫様に、直に、お目にかゝつて貰ひたうござります。
市彌　オヽ、逢はして上げう。おぢや。
大學　サア、参りませう。
藤内　コリヤ〳〵、駄賃はどうぢや。
大學　駄賃は投げ節ぢや。駕籠持つて歸り居らう。
　ト張り肘で云うて、入る。
藤内　ハア、なんの事ぢや。
　ト駕籠かたげ、入る。奥より空蟬、天津姫、珍才が手を取り、出で
空蟬　コレ、二人とも、聲が高い、靜かに云はしやんせいな。
天津　イヤ〳〵殿様、云はしやんすな。こなさんの出家にならうと云はんすは、嘘ぢや〳〵。
珍才　何が嘘ぢや。
天津　イヤ、云はしやんすな。そんなら、書かんした起證は僞はりぢや。死ぬるとも生くるとも、二人一緒と書きながら、こな様一人出家して濟むか。坊主になるを云ひ立てに、わたしを退かうと云ふ事ぢや。そりや聞えぬわいな。
空蟬　疑はんすも無理ではない。靜かに譯を立てさんせ。
珍才　これは迷惑。身請けの金はさて措き、當分の揚げ代に責められ、廓へ顔出しのならぬこの巴之丞。なに面目に浮世に住まうぞ。腹切らうと思へども、痛からうと思や、えゝ死なぬ。せめて長らへ、物食ふ爲に剃りこぼつのぢや。料簡してたも。
天津　イヽヤ、さうはならぬ。
珍才　イヽヤ、こぼたにやならぬ。
　トせり合ふ所へ、大學出で、珍才を引立て、天津姫を上へ突きやる。珍才、顔見合せ
ヤア、わりや、戸根五郎か。

大學　しよろぬけめ、よい所へ失せたな。
　ト珍才を打ち据ゑる。
奥州、うぬは聞えぬ奴ぢやぞよ。おのれに心を通じて、身が側さま〴〵と口説けども、この杵藏めに喰ひ附き、まんまと國を追へ寄らぬ戀の仇。伯母者人と心を合せ、儘にならぬひ拂うた。なに不足ない戸根五郎なれども、まんまと國を追と云ふは奥州、われぢや。今宵、田舍大盡となつて呼び出したは、身が家來、禿を手引きに爰へ來たは、家來と入れ替つて、おのれを抱いて寐ようばかりぢや。所に、思ひも依らぬ此しよろぬけが出やがつて、うぬ、座敷も勤めず、どこへ失せる。サア、斯く云ふからは、否でも應でも抱いて寐る。サア、うぬ、失せい。
天津　富貴にめで、心に隨ふやうな奥州ぢやない。寐たか、獨りで寐さんせ。
大學　さう吐かしや。
　ト珍才を引きつける。關内、出て庇ふ。
關内　ヤア、わりや、和田右衞門か。心玄にあらざれば、喰へどもその味を知らずと申すは戸根五郎どの。和田右衞門を見知つてござるか。邪魔を以て殿を追ひ出し、家國を押領しながら、若殿を馬鹿と仰しやる其許は、和田右衞門が目からは、阿房も阿房、日本一の阿房と見えます。
大學　そして、わりや、何しに來た。
關内　奥州どのゝ身請けに來た。
大學　ハア、、素浪人の寄合ひめら、何をほざき出す。奥州は身が身請けする。
關内　ア、こなたが。
大學　オ、サ、國介、參れ。
勝家　御用でござりますか。
　ト出る。
大學　先達て申し遣はした通り、奥州が身請けはどうぢや。
關内　コリヤ、先達て約束の通り、身請けは此方へ。
勝家　サア、その儀は。
關大　サア〳〵、返事はどうぢや。
勝家　マア、お待ちなされませ。その返事は夜半切れ。尤も戸根五郎さまは、お金は御持參でござれども、身請けなさらうと仰せられたは後。お金は渡らねど、門兵衞さまより身請けなさらうとあるは先月。殊に宵よりお出でなされ、だん〳〵のお斷わり。もう夜半の鐘の鳴るまで

は、萬々兩お積みなされても、身請けの返事は、マア、なりませぬやうにござります。
關內　あれ聞かれたか、戸根五郎どの。謀計に羽根を伸すこなたなれども、こればかりは叶ふまい。
大學　みそさゞいどもが囀つたり。えいワ、待つてくれう。只も待つてはゐられまい。その返事あるまでは、うんつくめを預からう。
ト珍才が首筋捕へる。勝家、思ひ入れのうち、側なる据ゑ風呂を珍才にかむせる。
關內　こりやなんとする。
勝家　桶伏せぢや。
關內　ナニ、桶伏せとは。
勝家　巴之丞さまには、揚げ代の殘りがある。その揚げ代の濟まぬうちは、廓の作法の桶伏せぢや。この人に指さす人があると、廓の法で、また桶伏せ。門兵衞さま、これで氣遣ひはござるまい。
關內　國介、幸ひの桶伏せ。しつかりと預けたぞ。
勝家　預かりました。その奉行はこの二人の女郎。これを指さすと桶伏せ。なんと、ようしたものぢやあらうがな。

大學　えいワ。身共は、奧州さへ身請けすりや、申し分はない。夜半過ぎると、連れ歸るぞ。
關內　國介、しかと預けたぞ。
勝家　慥かに預かりました。マア、奧へお出でなさりませ。
ト唄になり、三人、入る。空蟬、天津姬、桶の側へ行て
天空　殿樣。
禿才　太夫。
天津　エヽ、おいとしや。
ト一同、泣く。
なんぼうわたしが可愛いと云うても、一國のお大名がこの有樣、皆わたしゆゑぢや。殿樣、免して下さんせえ。
珍才　其方ゆゑなら、本望ぢや。
ト泣く。
空蟬　申し、氣遣ひさしやんな。門兵衞さまが身請けの金の代りに、主の內儀樣を勤めに出して、お前を連れて去ぬと相談が極まつてある程に、氣を慥かに思うてゐさんせ。
珍才　すりや、太夫が代りに、門兵衞の女房が來るか。

空蟬　アイナア。
珍才　エヽ忝ない。忘れは置かぬ。
　ト手を合す。
兩人　殿さん、お前は、廓に心殘りがあらうがな。
珍才　こりや、珍らしい事を承る。なんで拙僧が心殘りがある。
天津　あの新造の高尾さまに、心が殘つてあらうが。
珍才　ハアヽ、聞えた。その事を今知つたか。幸ひ爰に御來臨。空蟬どの、その云ひ譯、こなたして下され。
空蟬　成る程、わたしが致しませう。奧州さま、聞かしやんせ。後の月の中頃であつた。あの高尾さまが、殿樣にいきついて、逢はしてくれとあつたなれど、わたしが、あなたには奧州さまと云ふ女郎さまと互ひに起請まで書いて、平常離さず持つてゐさんす仲ぢや、その奧州さまと手が切れねば、逢はす事はならぬと返事したわいなア。でも、文屆けてくれと云うてゞあつたに依つて、一二度渡したが、巴さん、その後はどうさんした。
珍才　サア、こなたがさう云ふ依つて、おれも一切れ食べるんのかと思うて、いつぞや、あれが高尾ぢやと云うたに依つて見たれば、脊の高さ、大きさは、おれが手では脊中へ廻るまい。イヤ〱、怪我でもしたら惡いと思うて、拔けつ潜りつして居るわいの。
天津　アヽ、それで讀めた。後の月の晦日の晩でござんした。中の住吉屋で、わたしと初めての出會ひの時、その高尾さまが、わたしの側へ寄つて、お前には深間樣があるげな、互ひに大切な物を、肌身離さず持つてぢやげな。それをちつと拜まして下さんせぬかと頼まんした。ナニ、譯もない、そんな事はござんせぬと、けんもほろろに云うたりや、酒を盛つて盛つて盛り潰して、よう寐さして、わたしが鼻紙袋の、守の袋を取つて去なんしたと、過ぎて禿が云ひましたわいなア。
空蟬　それを隱したは、お二人に云ひ事させ、退かさうと云ふ企みぢや。
　ト此うち見空、盆持ち出で、二重舞臺の先へ出てゐる。
天津　さうぢや、その證據は、なんぼう云うても戾さんせぬ。コレ空蟬さま、門兵衞さまの世話で、身請けの埓が明かば、廓を出る。また起請がなうては、殿樣に云ひ譯がない。どうぞ、夜半の鐘が鳴るまでに、取戾して下さんせ。頼みますわいな。
珍才　それ〱、起請がなけにや、添はぬぞ〱。

ト天津姫、空蟬が手を取り、向うへ出る。

天津　アレ、あの通りぢや。頼むわいな。

空蟬　イヤ、奥州さま、わたしが云ふ事を、悪う聞かんすと腹が立つ。なんぢやあらうと、マア、聞いて下さんせえ。

天津　アイ〳〵。

空蟬　お前も知らんす通り、あの高尾さまとわたしとは朋輩ぢや。尤もあの様は新造なれども、わたしより年がさぢや。マア、オヽと云はんせ。えいかえ。その年がさの女郎の思ひ込んだ戀を、サ、申す事はならぬ依つて、これはマア、免してもらひたいやうな心持ちぢや。えいかえ〳〵、マアさうぢや。

天津　なんぢやら、とんと合點がゆかぬ。

空蟬　サイナア、そこは呑み込んで居るけれど、ちつと、オヽと云はれぬ事がある程に、オヽと云はんせ。マアさうぢや。

見空　コレ〳〵空蟬さま、今までは姉妹と契つたが、懇ろ切つた●この上は辻で逢はうとも、空蟬さま、どうさんしたとも、物は云はん程に、さう心得て下さんせ。

空蟬　何やらまた云ひ出さんした。何が腹が立つぞいな。

見空　わたしや、最前から爰に聞いてゐたが、總體、廓の習ひで、女子と名が附いて、筋の悪い色事すりや、廓の恥ぢや。その肩を持つ、仕返しするが、これが廓の行き方でござんす。こなさんも、その作法を知りながら、身を庇やんす依つて、懇ろ切つたと云ふが、この國が誤まりか。なんと奥州さん、そんなものぢやないかいな。

空蟬　サア、それは尤もぢやけれど、あの高尾さまは脊も高し、どうやら強さうな依つて、怖い事はなけれど、氣味が悪い。

天津　何を云はんすやら。

見空　コレ、申し奥州さま、その空蟬さまを女郎と見かけて、頼まんしたけれども、どうやら意味のあるやうに云うて頼まれさんせにや、しよ事がないが、夜半までに起證を取返さにや、こなさんの一分は立つまいし、コレ、この廣い廓、空蟬さまばかりが女子ではあるまい。また外に頼もしい女子のあるまいものでもない。どこぞ、そこらにゐる、ナア、女子を頼んだら、ツイ埒の明きさうなものぢや。ナア空蟬さま。

ト空蟬、見空に頼めと云ふ身振りして、見せる。姫、見て思ひ入れある。空蟬、姫を突き出す。

天津　そんならお國さま、こなさまをわたしが頼んだら、頼まれて下さんすか。
見空　ハテ、そりやわたしを、女子と見かけて頼まんす事なら。
ト空蟬、姫が後を突く。
天津　そんなら、お前を女子と見て頼む。どうぞ取返して下さんせ。
見空　そんならわたしを女子と見て、頼ましやんすぢやまで。
天津　アイ、お前を、モウ〳〵生粹の女子樣と見て、頼みますわいな。
見空　そんなら、頼まれて上げるわいなア。
天津　頼まれて下さんすか……コレ、頼まれてやるといな。
トやかましう云ふ。
見空　アヽ、やかましいわいなア。
ト立つて、姫が手を取り
コレ、頼まれる、頼まれるが、モシ、人違ひぢやないかえ。
天津　イヽエ、後の月卅日の晩に、酒に醉はして、守り袋を取らやんしたは、禿の市彌が證據ぢやわいな。
見空　よい。取返して上げう。此やうに云へば、どうやら物好きのやうに思はんせうが、其やうな筋道の惡い色事は、廓の名折れでござんす。キッと灸すゑて置くがよい。ハヽヽヽヽ。
ト見空笑ひ
それで頼まれたのぢやが、鈍な事は、その高尾さまは新造さんぢやよつて、顏を知らぬが、お前は知つてゐさんすか。
天津　そりや氣遣ひさしやんすな。わたしや、よう顏は覺えて居るわいな。
見空　そんなら、こなさんを直に逢はして、出入りせう。何にも云はずと、わし次第にして居さんせ。その形ぢや惡い。
ト姫が襠裲を脱がし、我が前垂れを取り、拋る。
天津　さうでござんすとも。どのやうになるとも、お詞は背きませぬ。
ト前垂れを取り、皺を延ばす。
見空　そりや何さんす。
天津　前垂れにお塵が附きましたよつて、お拂ひ申さうと

思うて。
見空　ハテ、追從な。
ト前垂れを引取る。
空蟬　アレ／＼向うへ、高尾さんがござんすわいな。
見空　來るかえ。
二人　サア／＼、來るといな／＼。
ト立ち騷ぐ。
見空　コレ／＼、ざわつく事はない。空蟬さまも、顏を見られては惡い。
ト姫と空蟬が手を取る。
珍才　何分よろしう頼みます。
ト桶の内より云ふ。
見空　ござんせ。
ト内へ入る。と黑船の唄になり、内より琴浦、禿に莨盆持たせ、出で、床に腰かける。と向うよりおたか、傾城にて出で、顏見合し
たか　琴浦さま。
琴浦　高尾さま。
たか　昨夜は御一座、つい夜が明けたなア。
琴浦　お前は眠からうな。
たか　イヤ、さうもござんせぬ……お前は爰に何して。
琴浦　サア、あまり酒に醉うたに依つて、醒ましに出たわいな。
たか　ほんに、よい所で逢うた。こなさんの世話して下さんした脇櫛、差し心が和らかうて、氣味が惡い。どうぞ強う差されるやうなは、あるまいかな。
琴浦　それは氣の毒な。幸ひ、この櫛、わたしや強うて惡い。これ差いて見さんせんか。
ト拔いて出す。おたか、これと取替へ
たか　コレ／＼、これが差し心がよいわいなア。
ト差す。
琴浦　そんなら、わたしのと換へて置かう。
たか　さうして下さんせ。
琴浦　待ち人があるけれど、まだ來をらぬ。奧へ行て、引摺つて來う。
たか　憎い奴なら、さうさんせ。
琴浦　後にえ。
たか　手に合はざ、呼びにおこさんせ。エヽ、野も山も色ぢやなア。
トえい／＼の唄になる。と内より見空、褄からげ、姫

が手を引き出ろ。姫、前垂れを頰かむりにして、見空に手を引かれ出でゝ、橋がゝりにて、おたかと顔見合せ、氣味合ひあつて、摺れ違ひ、また見空とおたかと顔見合はし、摺れ違ふ模樣、いろ〳〵あり。姫、あれぢやと云ふ思ひ入れあると、見空ちよつととまりて

見空　コレ〳〵、コレ申し。

たか　此方の事かえ。

見空　アイ、其方の事でござんす。

たか　なんでござんす。

見空　ちよつとこれへ來て下さんせ。

たか　來たが、なんぢやえ。

見空　あそこへ、ちよつと來て下さんせ。

ト向うへ出る。

たか　あそこへ來たが、なんでござんす。

見空　マアちよつと、下に居て下さんせ。

ト下に居る。

たか　下に居たがなんでござんす。云ふ事があるなら、ちやつ〳〵と云うて下んせ。

見空　こな樣は茨木屋の新造、高尾さまでござんすか。

たか　如何にも高尾でござんすが、さう云ふこな樣は。

見空　この國屋國介が女房國。

たか　アノこなさんが、この國屋のお國さま。

見空　お前が茨木屋の高尾さん。

ト見空、おたか、へ、、、と笑ひ合ひ

二人　ハテ、珍らしい所で、逢ひましたな。

見空　コレ高尾さん、聞けば後の月晦日の晩に、中の住吉屋で、一座の女郎さまの中に、深う云ひ交して、互ひに起證を書いて肌身を離さず、その仲を裂かうと、その起證の入つた守り袋を取らんしたげな。おかしい事をさんすの。其方にあつては益ない物。此方にあつて大事の起證ぢや。わたしに取返してくれと、賴んでゞござんす程に、その守り袋、返して下さんせ。

たか　イヤ、コレ、お國さん、如何にも晦日の晩、中の住吉屋へは行きやんしたが、人樣の大事に掛けさんす守り袋を、取つた覺えはござんせん。

見空　ア、コレ、高尾さん、國ぢや、女子が違ふわいな。そんならさうと云うてしまはんせいな。

たか　わたしも高尾ぢや。覺えのある事、ないと云ふやうな女子ぢやござんせぬ。但し又、わたしが取つたと云ふ、慥かな證據があるかえ。ずか〳〵と粗末な事を云はんす

な。晦日の晩に限つて覺えはないぞえ。

見空　コレ〳〵、爰へござんせ。

天津　イヤモウ、爰がようござんす。

見空　大事ない、ござんせ。

ト姫、いろ〳〵して、見空の側へ行く。

コレ、爰に居さんすが、晦日の晩、こな樣に大酒を呑ました高尾さんぢや。覺えないと云うてぢや。麁相ぢやないかえ。

天津　イエ〳〵、麁相ぢやござんせん。わたしに大酒を呑まし、寢さして置いて盜まんしたは、あの女郎さんぢやわいな。

たか　コレ〳〵、そこなお女郎、麁相云はんすな。とつくりとわたしを見さんせ。わたしぢやあるまいがな。

天津　サア、さう云はしやんすりや、こな樣のやうにもなし、慥かにこな樣ぢやけれど。

たか　わしぢやあるまいがな。

天津　さう云はんすと、こな樣のやうにもなし。

見空　サア、もうよい、そこへ寄つて居さんせ。高尾さま、こなさんに起證を取られ、一分が立たぬ。また夜半までにその起證が出ぬと、死ぬると云うて居さんす。そこで、わたしを女子と見かけて、賴まんしたのぢや。それで、起證を取返す。さう心得て下んせ。

たか　覺えはなけれど、さう云はんすりや、覺えがあるにして上げう。

見空　さうして下んすりや、わたしも一分が立つ。嬉しうござんす。そんなら、こな樣とわしと、爰で出入りせにやならぬぞえ。

たか　ハテ、するわいな。

見空　サア、起證戻して下んせ。

たか　阿房らしい事云はんせ。そんな事は知らぬ。

見空　知らぬと云うて、出さんせぬと、出させやうがあるが、出さんせんか。

たか　出すまいが、どうして取らんす。

見空　斯うして。

トいろ〳〵立廻りあつて、見空、おたかを押へ、守り袋を出す。

大勢　喧嘩よ〳〵。

ト大勢出る。

見空　それか、見さんせ。

ト姫、取つて見て

天津　アイ、これでござんす。
ト戴く。
見空　ソレ見さんせ。こなさんは節の惡い色事師ぢや。こなさんのやうな人は、斯うして置くと廓の名折れぢや。爰で仕様はあれど、堪忍して置くぞえ。重ねて奥州さんに指でもさゝんすと、聞かぬぞえ。
ト引起し
サア、去なんせ〳〵。
たか　わたしも高尾ぢや。此やうにしられては立たぬ。重ねて譯立つる程に、さう心得て下んせ。
見空　ハテ、譯があるなら、聞くわいな。
たか　云はいでいな。
ト應挑ふ。姫、追從らしく、襠褂持つて行く。おたか、引取る。
ア、、脇櫛がない。
ト方々を尋ねる。姫、思ひ入れあり、見空が側へ行き、小聲にて
天津　櫛がないといな。
ト見空、思ひ入れ。
たか　面妖な。これも、わしが手に、わしが盜んだものでがなあらう。
見空　揚屋へ行かんすに、脇櫛がなうては見苦しい。
ト見空、櫛を拔いて出す。
これを差して行かんせ。
たか　わたしも高尾ぢや。ついぞ人に櫛貰うた事がない。
ア、、慮外ながら。
ト見空、思ひ入れ。此うち夜半の鐘鳴る。大學、關內、出て
大學　サア、太夫が身請けの返事はどうぢや。
ト勝家、出る。
勝家　サア、お金、受取りませうか。
關內　サア、それは。
大勝　サア〳〵〳〵。
ト内より
呼び　宗全さまのお入り。
ト皆々騷ぐ。
勝家　親人のお入りぢや。マア、色事止めい〳〵。
ト勝家、衣裳、羽織、大小になり、大學、衣裳、上下。珍才、茶道。見空、琴浦、玉の井、空蟬、傾城になり、天津姫、姫の形になり、おたか、足輕の女房の形。關

内、奴、その他皆々、序の形になる。向うの長暖簾取ると、結構なる金襖になり、山名宗全、同じく綾之助、出る。皆々、式禮ある。宗全、上座に坐る。
親人には、下館へお出での筈。急にこれにお出で遊ばされたは、如何やうな儀でござります。
宗全　今日は、餘り氣欝いたしたに依つて、聞けば、面白い廓の狂言があるとの事。それゆゑ密かに參り、見物いたした。さて〳〵面白い事であつた。
勝家　ヱヽ、お出で存じましたれば、止めに致しませうもの。
宗全　なんの遠慮する事がある。年若の其方、傾城と馴れなじんだも尤も。兎角世上を面白う暮らして、長生きをするがよい。身共がやうに年寄つては、ほたへたうてもほたへられぬ。皆の者、勝家を諫めてくれ。
大學　御意でござりますゆゑ、この大學は、戸根五郎と申す敵役を相勤めました。イヤ、どうも云へたものではござりません。
鄕左　我れ〳〵は大盡風。
敵三　イヤモ、困り入りましてござります。
珍才　それよりは、この珍才は、色事師巴之丞とは、この器量から見立てたものぢや。
さち　お前の巴之丞より、わたしの傾城が見事であらうがな。
空蟬　ほんに大抵よい事ではなかつたわいな。
大學　イヤモウ、親殿樣の手前、面目もござりませぬ。
宗全　なんの〳〵、それに並みゐるは廓の者どもか。
大學　左やうでござります。
宗全　イカサマ、それ〴〵の風儀とは云ひながら、立振舞ひまで、和らかな者ども。其うち勝家が云ひ交した、見空とはどれぢや。
綾之　常々お噂は承つて居りますれど、ついぞお目にかかりませぬ。私しも近附きになりたうござります。父上の御意ぢや。これへ出さつしやれ。
勝家　ソレ、親人がお召しなさるゝ。ちやつと出やいの。
ト見空、脇へ出る。
ハイ、私しが不便をかけます見空とは、これでござります。
宗全　其方が見空か。顏を上げい。
勝家　ソレ、顏上げいと仰しやる。ちやつと上げや。
ト見空、顏上げる。

宗全　ムウ、さて〱よい器量。目元のうづ高さ。イカサマ、勝家が不便に思ふも尤も。ナニ見空、この勝家は細川より、姫に娶合はさんと、養子に貰ひしが、頑なな屋敷で育つた姫なれば、勝家が心には入らぬ勝ち。どうぞ、お身達の世話で、見捨てられぬよう、姫が事は、其方に任す程に、可愛がつてくりやれ。

見空　これは結構なお詞にあづかりましてござります。お姫様の事は、氣遣ひ遊ばされますな。わたしが心一ぱい、お世話いたしますでござります。

宗全　兎角よきに頼む。最前見たれば。傾城の出入り事、親の慾目か知らぬが、姫も味をやつたなア。

天津　恥かしうてならぬけれど、見空さまに習うた通り致しましたわいな。

琴浦　お姫様の先刻の所は、どうも云へたものではござりません。

宗全　最前、姫が相手になつたは、あれは廓の者か。

大學　イヤ、足輕與五郎と申す者の、女房でござります。

勝家　器用な奴でござります。

宗全　イヤ、なか〱驚ろき入つた。逢はう。これへ呼べ。

大學　お召しなさるゝ。苦しうない、これへ出い。

トおたか、おづ〱出る。

宗全　其方は器用な者ぢや。いつち面白かつた。

たか　有り難い御意でござります。達て御辭退申しますれども、苦しうないと御意遊ばす。あられもない所は、御免なされて下さりませう。

宗全　總々の中で、其方が第一の出來ぢや。この上は、勝家の側附きに致し置かう。願ひがあらば、なんなりと叶へてくれう。

勝家　サ、親人の御機嫌ぢや。なんなりとも願へ。身共もとも〱取次ぎしてやらう。願へ〱。

たか　お詞に甘えまして、お願ひがござります。

宗全　如何やうな事なりと、聞入れてくれう。

たか　然らば、お願ひ申します。桂左衛門さま、奥さま、これへお出なさりませ。

ト向うより桂左衛門、白妙、出る。

左衛　たか、御前の首尾は。

たか　御親子とも、御機嫌ようお渡りなされます。

白妙　其方は、いかいお世話ぢやの。

たか　申し、御勿體ない……お願ひなされうならば、今のうちでござります。

ト本舞臺へ出て、よき所に坐る。

お願ひ申しまするは。

左衞　桂左衞門めでござります。御機嫌ようお渡り遊ばされ、斯樣な喜ばしい儀はござりません。

宗全　誰ぞ、茶の間をしつらへ。

ト立たうとする。

左衞　イヤ、暫らく。それは、餘りお心强いと申すもの。左樣にお憎しみなさるゝ程の、左衞門めでもござりません。幼少より、お側を相勤め、家中の出頭、御意見申すが家來の役。若殿のお身持ち放埒を、お禁じなさるゝ事は取措き、却つて廓通ひをお免し、有りたいまゝの惡ぼたえ、お館は揚屋同然。その儀を御意見申したが科とあつて、お目通りの勘當。お次の間に控へましても、お目見得も叶ひませぬ。他門の風聞、將軍職の聞え。何卒、拙者が申す事をお聞分けあつて、召遣はれませうならば、有り難うござります。

宗全　主は舟なり、家來は水なり、水動く時は、その船を覆へす。善惡ともに主人のする事にもどらば、卽ち蔑みする道理。叶はぬ事ぢや。立つてうせう。

左衞　すりや、如何やうに御意見申しても

白妙　お聞入れはござりませぬか。

宗全　例へば身共、提婆の如き惡をなさば、邪魔なりと見限り、二君に仕へるか。

左衞　その儀は。

宗全　おのが料簡に募り、主の非をあぐる性根。館には置かぬ奴なれども、幼少より側近う召使うた功にめでゝ、目通りへ叶はぬと申しつけ置いたに、詞を背く慮外な奴。立つてうせう。

たか　どのやうに申しましても。

宗全　叶はぬ。

たか　奥樣。

白妙　たか、ハア。

ト當惑する。

左衞　成る程、向後フッツリ、御意見申しますまい。桂左衞門、今日より共々、踊り狂うて騷ぎませう。お側に居らいでは、館の萬事、覺束ならうござります、何卒、お聞屆け下さりませう。

宗全　ならぬ。

左衞　お膝元を去りましては。

宗全　ならぬ。

左衞　どうぞ、御料簡。
宗全　ならぬと云ふに。
左衞　どのやうに申しても。
宗全　此奴、引退けいやい。
大學　御意ぢや。立て。
　ト左衞門、ヂッと俯向く。
宗全　七生まで勘當せうか。
左衞　ハッ、お側を立去りますやうにござります。
　ト泣く。白妙、勝家の側へ行て
白妙　若殿様、もう只今から傾城になりとも、奴になりとも、お心に入るやうに致しませう。どうぞ夫のお詫びを、
　ト勝家、氣の毒がる。
左衞　さうぢや、よう云うた。勝家さま、如何やうの儀なりとも仕りませう。どうぞお詫びを。左衞門めは、無念にござります。
勝家　わしも氣の毒なれど、あのやうに云うてござるのに、どうも。
左衞　サア、そこをどうぞ。
勝家　おれぢやゆかん。餘の者を頼んで見や。
左衞　ハッ。

　ト綾之助の側へ行き
若殿、どうぞお詫びなされて下さりませ。よいお子様ぢや。
綾之　其方はわしを、常住可愛がつてたもるゆゑ、師匠のやうに思ふ依つて、父上様にお詫び申して見れど、お聞入れがないわいの。
　ト左衞門、ハッと力落し、大學の前へ行く。
左衞　大學どの、こなたは、若殿のお氣に入りぢや。今まで出頭相勤めて居つた桂左衞門が、一生の願ひ、手を下げて頼む。どうぞようお執成しを。
大學　コレ〳〵桂左衞門どの、耳やかましい、なんぢや。こなたが御前を仕損なへば、身が詫びする筈か。
左衞　イヤ、さうではなけれど。
大學　身共は知らぬ。
　ト空うそぶく。
左衞　そこを又、今までの左衞門が儀、どうぞ。
　トいろ〳〵ある。大學、もの云はぬ。左衞門いろ〳〵思ひ入れあり
太田郷左衞門どの、貴公は、かね〴〵心安うお附合ひ申したが、どうぞ。

ト鄕左衞門、咳拂ひする。左衞門、玄蕃の側へ行き
藤倉玄蕃どの、申し其許は。
ト また咳拂ひする。丹下、藤內が側へ行き
岩淵丹下どの。甘野藤內どの。
ト この模樣にて、だん〳〵賴み、橋がゝりの方へ出で
切り幕の際にて、どつかりと坐る。
ト 白妙、おたか、左衞門の側へ行て
白妙 旦那どの。
たか 旦那樣。
白たどうでも、お聞入れは、ござりませぬか。
ト 左衞門、二人の顏を見て、吐息つき、俯向く。
ハア、。
ト 泣く。
大學 昨日まで、出頭で候ふと、家中追從したが。ハ、、ハ。
宗全 よしない奴で、勝家、興を覺ましたであらう。身は奧へ行て休まう程に、皆打寄つて、勝家を、いさめいいさめい。
皆々 畏まつてござります。
大學 先づお入りあられませう。

ト 唄になる。宗全、綾之助を連れて入る。
見空 つッともう、氣の毒な事であるぞ。
天津 どうぞしてやつて下さんせいな。
勝家 アヽ、氣が盡きた。どうでも親仁の側では、氣が詰つてならぬ、關內よ。
關內 ネイ〳〵。
勝家 なんぞして遊ばんか。
關內 奴めも、氣の毒だで、グツと、しよげりが參りました。
大學 何が氣の毒。斯う致さう、廓の者どもと一つになつて、わつさりと踊らうではござるまいか。
勝家 よからう〳〵。關內も音頭取れ。
關內 それは迷惑でござります。
勝家 なんの迷惑。取り居れ〳〵。太夫も姬も踊りや踊りや。
見空 オヽ、氣の毒。
勝家 サア、皆、並べ〳〵。
ト 女形、皆々、その外も並ぶ
白妙 エヽ、あの態にマア。
勝家 サア〳〵。音頭はどうぢや。

關内　千代の始めの一踊り、先づは松坂越えたえ。

トこれより大踊りになる。皆々騒ぐ。皆々踊の中を浮いて橋がゝりの方へ行く。左衛門、皆々の裾を捕へ頼む。音頭云ひ〳〵皆、ひつしよなく振り切る。本舞臺へ浮いて來る事いろ〳〵ある。この模樣あつて白妙、おたか、行かうとする。左衛門とめてゐる。踊の中にて、關内、大學の頭を叩く、大學、取違へて、勝家を喰はす。

左衛　コリヤ〳〵。

大學　なんぢや。勘當ぢや〳〵。

ト節附けて云ふ。右の模樣いろ〳〵あつて、皆寄つて勝家を投げ、踏まうとする。左衛門、コリヤ〳〵と叱る。なんぢや〳〵と以前の通り云ふ。この中へ、内より

呼び　將軍の御入り。

ト皆々聞かず、浮いてゐる。向うより義尙、出る。花井左門、山中主水、小姓の形にて出る。今川仲秋、上下にて附き出る。

主左　將軍のお成り。靜まれ〳〵。

ト皆々惘りして下に居る。宗全出て

宗全　これは義尙公には、早々のお成り。有り難う存じます。

義尙　宗全、さぞ心勞であらうな。

宗全　ハッ、仲秋どの、御苦勞に存じまする。

仲秋　俄かのお成りゆゑ、定めて心遣ひでござらう。

宗全　先づ、お通り下されませう。

ト義尙、その外三人通る。

義尙　館の體を云ひ立てるは、浮世の雜談と思ひしに、これなれば尤も。天に口なし、人を以て云はしむぢやな。

仲秋　御意でござります。斯樣にあらうとは、存じませなんだ。見ると聞くとでござります。

宗全　御覽の通りの仕儀ゆゑ、將軍のお成りを乞ひ願ひ申しましたのでござります。

義尙　この間より、側附きの者が頻りの訴へ。身が目鏡で養子となしたる勝家。偏執の者の仕業と聞き流し居つたが、これならば尤も。

宗全　心苦しさを、御推量下さりませう。

義尙　今川仲秋、申し附けた儀を早く。

仲秋　山名勝家どの、これへ出さつしやれ。

勝家　ハッ。

仲秋　ト氣味惡さうに出る。
將軍の御意、天の羽衣、仔細あつてお改めなさるゝ。お出しなされ。

勝家　ハツ。
ト羽衣の箱を恭々しく出し
天の羽衣、御上覽に入れます。

仲秋　勝家どの、こなた、實父政基どのゝ事、御存じか。

勝家　イヤ、なんとも承はりませぬ。

義尙　イヤモウ、この體ならば、知らぬも尤も。コリヤ勝家、政基は閉門申しつけ、晝夜勤番云ひつけ置いたわい。

勝家　そりや何ゆゑのお咎め。

仲秋　この放埓では、知らぬ筈。この度、將軍職の姫君御誕生遊ばされしところ、酉の刻、八步にかゝりし月蝕の御誕生、殊に四十二の二つ子ゆゑ、一日過ぎれば難病あり、其まゝ育てれば、御親子に祟りと、細川どの達てお願ひなされ、淀堤に捨てしところに、姫君の行くへ知れず、剰さへ、お預けなさるゝ霓裳羽衣の一卷、何者とも知れず、奪ひ取つて立退いたわい。

皆々　ヤア、。

ト左衞門、ヂッとして居る。

勝家　すりや、姫君を失ひ、霓裳羽衣の一卷も盜み取なれたとな。
ト勝家、宗全の側へ行て
親人樣、毎日の御登城に、實父政基がお咎めの樣子、御存じないと云ふ事はござるまい。なぜお聞かせなされては下されぬぞ。

宗全　ヤイ、知らせたうて、爰まで來てあるわい。おのれが馬鹿を見るにつけても、エヽ、實父は難儀に會うてゐるに、傾城を引込み、たわけを盡す。憎い奴と思へども、隱居の身なれば、是非に及ばず。此やうに露顯に及び、山名の名跡を潰さうかと、胸は張裂けるやうな。幼少より身が育てたらば、斯く馬鹿にはすまいもの。よしないたわけを養子にして、山名の家に疵つける、宗全が心を御推量下されい。

天津　父上樣、そりや何を仰しやりますぞいな。

見空　殿樣、あのやうに云はれさんしても、大事ないかえ。

見天　申し、云ひ譯をして下さんせいな。

勝家　イヤ、申し親人樣、この事はお前が

宗全　まだ馬鹿を盡す。一旦世を譲りたれば、云はれもせず、意見しても用ゆるやうな性根とも見えず、家中一統に馬鹿を盡す。キッと相守る者は、桂左衞門一人でござります。

勝家　そりや、お前……エ、、、。

ト懐へ泣く。

關内　泣いてばかりござつては濟みませぬ。宗全さま、こりやどうでござります。若殿の廓通ひは、お前が御赦免、畢竟申さば。

大學　ヤイ／＼下郎め、大切の場所へ、うぬのやうなうぢ蟲の出る所ぢやない。すッ込んでけつからう。

關内　イヤ、すッ込むまい。下郎なれども、細川よりの附き人、お側去らずの關内、若殿のお身の上に、兎の毛でついた程でも申し分ありや、申さにやならぬ。

大學　うぬ、下郎の身として慮外な奴の。

關内　慮外でも、緩怠でも、申す事は申さにやならぬ。

大學　うぬ、ぶち放すぞ。

關内　ぶち放して見やれ。貴様のやうな鍋掻きが、この尻こぶたへも立てやせぬ。猪口才な。

ト詰め寄る。

主左　兩人、待て。

仲秋　將軍の御前ぢや、靜まれ。

ト兩人これで靜まる。

何にもせよ、先づ天の羽衣、取出して御上覽に備へられよ。

ト勝家、ハッと立ち、箱の蓋を明け、ヤアと悔り。

皆々　なんと。

勝家　羽衣はござりません。

トうろたへる。皆々悔り。白妙、おたか、驚ろく。左衞門思ひ入れ、ヂッと引留める。

仲秋　ナニ、紛失したとは。

大學　勝家どのを取卷け。

侍四　動くまいぞ。

關内　待つた。何ゆゑ。

大學　御前へ申し上げます。この寶の盜賊は、若殿でござります。

仲秋　勝家を盜賊とは、何を以て云ふぞ。

關内　證據がないと、どたまを毆り碎くぞ。

大學　申しつけた品、これへ持て。

侍二　ハッ。

ト戸板に死骸載せ出る。

大學　それを見やれ。

ト勝家、關内見る。

勝家　ヤア、こりや桃山で

關内　お覺えがござりますか。

ト勝家、いろ〳〵悔りの思ひ入れ。

大學　その死骸に附きし一通見い。

ト關内見る。

關内　見空が身請け金、相濟まずば、羽衣渡さうと云ふ證文。

天津　云ひ譯はござりませぬか。

ト泣く。

見空　こりや、なんとせうぞいな。

ト泣く。

關内　大切な所ぢや。どう云ふ事でこの證文が、この死骸にござつたぞいの。

勝家　サア、これは。

トはッと勝家俯向く。

大學　その死骸は、夜前深草の邊に殺めあると、所の者が訴へ。その證文があるからは、さては傾城狂ひの金に詰つて、羽衣を盗み出し遣はし、後日の難儀を思ひ、頼んだ奴を殺したは、こりや藤戸の格。サア若殿、遁がれぬ所ぢや。繩かゝらつしやれ。

關内　ナニ、深草のあたり。

ト思ひ入れ。おたか、ツカ〳〵と死骸の側へ行く。

たか　ヤア、こりや舅御樣。何者が殺しました。コレ、申し申し。

ト左衞門が側へ行く。

あの死骸は、舅與五兵衞でござります。

ト白妙驚ろく。

關内　曲者め、うぬ。

ト花道へ行かうとする。

仲秋　コリヤ、待て。どこへ駈け出す。

關内　深草へ參り曲者を。

仲秋　たわけ者、死骸のあつたが夜前の事、詮議に來ようかと殺した奴が、うか〳〵と今まで待つて居ようか。

關内　サア、それは。

仲秋　急く所でない、控へて居れ。

關内　エヽ、。

ト舞臺へドッカリと居る。

宗全　御寶紛失の上は、我が子とて容赦はならぬ。將軍へ
申し譯。
ト切りかゝる。
義侑　宗全待て。
宗全　なぜお留め遊ばされます。
義侑　紛失いたした勝家を、其方が手にかけ、羽衣の詮議
は、何者を捕へてするぞ。
宗全　イヤサ、その儀は。
義侑　老人の氣を急いたか。マア〳〵待てサ。
宗全　ハツ、老の心の急きまするまゝ、麁相仕りました。
大學、大切な科人ぢや。勝家に繩ぶて。
トはあッと大學寄るを、關内とめて
關内　寄りあがつたら踏み殺すぞ。
大學　慮外する下郎め、若殿もろとも踏みつけて繩ぶて。
侍四　やらぬ。
義侑　待て。
宗全　繩ぶて。苦しうない。
侍四　やらぬ。
トかゝる。關内、立廻りのうち、仲秋、飛び下り、四
人を當て、大學を背打ちにする。

大學　仲秋さま、こりや、なんとなさるゝ。
仲秋　將軍の待てと御意あるに、理不盡に手をさすゆゑ、
打ち据ゑましたが誤まりか。手が廻ると首が飛ぶぞよ。
大馬鹿めが。
宗全　科人に繩ぶちまするを、何ゆゑお留め遊ばされます。
義侑　イヤ、勝家は盜みはせぬ。
宗全　これほど慥かな證據があるを。
義侑　ハテ、羽衣の預かり主は勝家、まッこの如く詮議及
ばゞ、難儀になるは必定。その身の越度となる事を、わ
ざと企んで拵らえようか。
宗全　イヤ、そりや傾城狂ひの大馬鹿、あの證文のあるが
即ち。
義侑　さればサ、あの證文が、盜まぬと云ふ證據。
宗全　とはな。
義侑　羽衣と云ふ事を、あらはに書き記し、自筆にて我が
姓名を顯はしたる證文を、證據となる事知りながら、死骸
に念入れ、附け置くやうなたわけもあるまい。察すると
ころ、こりや勝家が放埓より、よんどころなき品に及び、
書き置いたを幸に、羽衣を盜み取つた奴が、難儀を塗ら
んと、しつらひしに違ひない。こりやコレ、大切な詮議。

宗全、其方が身にもかゝつた大事ぢや。勝家ばかり科人にして、餘り殺してしまひたがるな。
宗全　然らは勝家は、如何計らひませう。
義侚　羽衣紛失いたさせたる科、追放申しつけるぞ。
勝家　エヽ、ナニ、御追放とな。
義侚　赤松滿祐亡びて後、一子四郎と云ふ奴、身の置き所なきまゝ、比叡山へ登り、出家いたし居る所に、又ぞろや山を下り、忍び〳〵に謀叛を企つるとある。すりや二種の寶も、彼奴が仕業であらう。塗り箸で富士を挾むと云ふ譬へ。ハヽヽヽヽ。
仲秋　天の羽衣、羽衣の一卷は、御大將御家督の折から、禁中にかけらるゝ大切の重寶。紛失は正しく謀叛人の業に違ひない。その身全う寶を尋ね出し、歸參さつしやれ。
義侚　寶を持參いたさば、元の親子。それまでは追放ぢや。
仲秋　理非明白のお詞。有り難う思はつしやれ。
勝家　ハツ。
義侚　仲秋、あの下郎をこれへ呼べ。
仲秋　ハア。關内とやら、有り難いお召しぢや。
關内　ヘイ。
義侚　苦うない。ズツと出い。
仲秋　御意ぢや。ズツと出い。
關内　ヘイ〳〵。
義侚　最前より立振舞ひ。なか〳〵氣丈な奴ぢや。そちや細川の下郎ぢやな。
關内　ヘイ。
義侚　コリヤ、其方は早く立歸へり、勝元にも追放申しつけると云へ。
關内　エヽ。
義侚　禁籠同然に、押籠め置きたる親政基、寶の詮議は悴勝元、追放申しつけずば、詮議がなるまい。
仲秋　親の難儀を助けるお情の御追放。謀叛人さへ尋ね出さば、寶も知れるは必定。親政基どのゝ身の云ひ譯、館より直ぐに立退かれよと云へ。
關内　然らば下郎は
義侚　早く行け。
關内　ハツ。
ト花道へ入る。
宗全　大切の寶、紛失仕つたは勝家が越度とは申しながら、彼れが越度は拙者が越度。先非を悔いても申し譯はございませぬ。

義侚　宗全、其方に科はない。この上は今川と申し合せ、
　二種の寶詮議してよからう。
宗全　御仁心のお詞、有り難うござります。
仲秋　義侚公には暫らく奥へお入り、然るべう存じます。
宗全　勝家を、ほッ拂へ。
　ト鄕左衞門と、玄蕃と、藤内と、丹下。
三人　畏まつてござります。
義侚　兩人、奥へ。
宗仲　先づ、お入りあられませう。
　ト唄に成り、義侚、仲秋、宗全、二人の小姓は入り、
　天津姫、見空、勝家に取りつく。大學、二人を引立て
　る。
大學　泣いても悔んでも、もう叶はぬ。玄蕃、姫君を、引
　立てい。
玄蕃　サア、お立ちなされ。
天津　否ぢや〳〵。殿樣に別れて、なんとせう。
玄蕃　ハテサテ、ござれと云ふに。
　ト無理に引立て入る。
勝家　太夫、さらばぢやぞ。
見空　お前に別れてなんとせう。
　ト泣く。
大學　見苦しい。引立てい。
さち　サア、お出でなされ。
見空　イヤ〳〵、なんぼでも行きやせぬ〳〵。
さち　エヽ、これはしたり。
　ト傾城皆々立ちかゝり、見空を連れ、橋がゝりへ入る
　おたか、死骸の側へ行く。
たか　今朝も與五郎どのが、きつう夢見が惡い、お前の事
　が苦になると云うて居られました。蟲が知らせたのか。
　こりや、なんとした事でござりますぞいな。
　ト泣く。
白妙　若殿樣、左衞門が御意見、思ひ合して夢が覺めまし
　たかえ。
勝家　何にも云はぬ。誤まつた。檜山の火は檜より。
　ト云ひさし泣く。
白妙　そのお心が、なぜもそつと早う。
　ト泣く。
大學　丹下、死骸を片付け、女を引立てやれ。
丹下　女、立て。
　トおたか泣くを、死骸諸とも引立て入る。

大學　ハテ、よい態な。いらざる所から養子に來て、山名の家まで騒がす貧乏神め。
ト寄る。
左衞　コリヤ、御主人を何とする。
大學　追放なりや、主人でもなんでもない。
ト蹴る。左衞門、立ちかゝる。
左衞　イヤこれは。
なんぢや〳〵。勘當の身を以て、何をうぢつく。
郷左　こつちへ一寸でも來る事はなるまい。
丹下　お目通りの勘當ぢやわい。
ト左衞門、俯向く。
大學　家來ども、若殿を叩き出せ。
侍ひ　ハア、。
ト割り竹を叩き立てる。勝家、しを〳〵と立つ。
左衞　申し殿樣、必らず短氣を。
勝家　夫婦とも、さらば。
大學　ソレ、追ツ拂へ。
ト勝家、しを〳〵と入ると、奥バタ〳〵にて
左主　家中の者一人も動くな。詮議があるぞ。
ト兩人、出る。

大學　御兩人、何事でござるな。
主水　義尙公、宗全どのゝお手前にて、圍ひへお入りありしところ、お茶の湯に毒が仕掛けてござるゆゑ、御詮議の最中でござる。
皆々　ヤア、。
左門　それゆゑ家中一人も、動かすなとの御意ぢや。
白妙　こりや聞捨てにはならぬ。
ト走り入る。
大學　兩人とも實否を聞かれい。
兩人　畏まりました。
ト入る。
左衞　こりや聞捨てには。
ト奥に行かうとする。
大學　コリヤ、どこへ。
左衞　イヤ、御主人のお身の上。
大學　勘當の身を以て、御前間近く行くは、御主人をないがしろにするか。
左衞　ぢやと云うて。
大學　勘當赦れたか。
左衞　サア。

大學　サア〳〵。どうぢや。

ト詰める。切り幕の際にて左衞門、チッとなる。内より

呼び　將軍のお出で。

ト仲秋、宗全附き出る。跡より義尙、侍ひ、大勢出る。

義尙　宗全、なぜ茶に毒を仕掛けた。眞直ぐに白狀せい。

宗全　これはお情なきお詞。何ゆゑお茶の湯に毒ありと御意なさるゝ。

義尙　總じてふく調の物は、給人の目の內を見て食する事こそ本草の第一。これ毒氣に中るを見るなり。只今茶坊主が給仕、其方が手前なれば、直ちに持ち來るべきに、合點ゆかずと眼中を見るに、黃なる淚は目の內うるむ事死したる鳥の如し、覆面は給仕の息のむさきを止むる馳走と見せ、毒氣に中らぬ覆面。とつくりと見屆けた。

仲秋　なんと、これでもあらがふか。

宗全　そりや御推量と申すもの。將軍へ差上げるお茶、吟味に吟味仕り、水を改め、器を詮議し、なか〳〵麁略なる儀はござりませぬが、毒と申すには、なんぞ慥かな證據ばしござるかな。

義尙　九思一言とて、九度思慮して一言を吐く。再び我が子貢の辯舌にて、申しくろむとも遁がれはない。今川、その死骸をこれへ。

仲秋　ハツ、最前の品、これへ持て。

侍皆　ハア、。

ト珍才の死骸を疊に載せ持ち出る。この間始終左衞門思ひ入れあるべし。

義尙　茶の毒味をさせたる茶道。眼を吊り上げ、黑色の汁を吐き、血走る五體は俗に云ふ紫色。

宗全　サア、それは。

義尙　父母の御恩に依つて人となり、足利征夷將軍氏の長者と呼ばるゝも、この身ばかりの果報にあらず、偏へに天子の命。おのれ如きの謀計に命を失ふか、天の見る目地の聞く耳、宗全、行年は積れども、思慮の薄きは畜生にも劣つたぞよ。

仲秋　サア宗全、繩にかゝれ。

宗全　サア、それは。

仲秋　サア〳〵、なんと。

宗全　切腹仰せつけられますならば、有り難う存じます。

仲秋　切腹とは、どこへ。

義尙　イヤ、コリヤ仲秋、願ひに任せ、切腹申しつけくれ

う。
仲秋　すりや、切腹仰せつけられまするか。
義侚　ハテ、どうで一度は殺す宗全、切腹申しつける。喜ばしいか。
宗全　武士の冥加でござります。
義侚　まだ詮議の筋もあれど、心ありて申しつける切腹、我が目通りで見よう。
宗全　エ、、
義侚　サア、目通りで切腹せい。
宗全　畏まつてござります。
義侚　小姓ども、用意させい。
主左　ハア、お立ちなされ。
ト主水、左門、宗全を取廻し、奥へ入る。
仲秋　村雲大學。
大學　ハツ。
仲秋　宗全が切腹の様子を、家中へ觸れ聞かせい。
大學　是非に及ばぬ儀でござります。
ト橋がかりへ入る。左衞門、奥を見て思ひ入れ。
左衞　憚りながら申し上げます。今川さまと見請けましてござれども、仔細あつてお詞もかけませぬ。桂左衞門めでござります。何卒主人の側へ參りたうござります。御容赦下さりますならば、有り難うござります。
仲秋　昨日、妹に遣はした桃の心も、無駄事であつたなア。其方に限り、二心ない事は存じて居るが、聞けば勘當の身分とある。科は科、主は主、勘當はお上より押附けに遊ばさるゝ事はならぬわいやい。
左衞　すりや、お側へ參る事も叶ひませぬか。
仲秋　叶はぬ／＼。
左衞　ハア。
ト泣く。この間に疊を裏返し、式法の通りにして、主水、腹切り刀持ち、宗全、白無垢、淺黄の上下にて出、疊の上へ坐る。三寶を前へ直す。所へ侍ひ出て
侍ひ　申し上げます。宗全さま御切腹と相極まりましたにつき、一家中の者ども、お暇乞ひ致したいと申し、次に控へ居ります。如何計らひませうな。
仲秋　お聞きあられましたか。
義侚　オ、、優しい願ひ、聞き屆けくれう。宗全、腹へ突き込んだらば、暇乞ひさせい。
仲秋　ハツ、此方より聲かけるまで、控へいと申せ。
侍ひ　畏まつてござります。

ト入る。

宗全　天災とは云ひながら、縛り首にも仰せつけらるべきところ、切腹仰せつけられます段、有り難う存じます。

義尙　仲秋、介錯せい。

仲秋　ハツ。

トこれより宗全、身拵らへして、肌を脱ぐ。この間左衞門、心意氣。宗全、腹へ突き込み、苦しむ。左衞門、寄らうとする。

宗全　ヤイ、側へ寄つたら、七生までの勘當ぢや。

ト左衞門、拳を握る。

仲秋　譜代の者ども、宗全が切腹召された。暇乞ひに出い。

侍皆　ハツ。

ト橋がゝり障子の內より、侍ひ大勢、殘らず白無垢、淺黃の上下にて出る。

宗全　譜代の者どもか。

皆々　ハツ。

ト俯向く。

宗全　君へお願ひがござります。皆これに居るは、譜代の者どもでござりますが、私し相果てますにつき、死後の儀、申し置きたい儀もござります。最早斯く腹へ突き込みますれば、遁がれますやうもござらぬ。何卒、御近習、今川どの、お除き下されうならば、心措きなく申し殘したうござります。お聞き屆け下されませう。

ト仲秋、〻々の家來に目を付ける。

仲秋　某を始め、御近習までを除いて

ト思ひ入れ。

ハア、。

ト宗全を見てせゝら笑ふ。

宗全　御尤も。綾之助、申し聞かす仔細がある。これへ來い。

ト綾之助、側へ行く。

綾之　父上樣、淺ましいお姿でござりますな。

ト泣く。

宗全　子心にもさぞ悲しからう。其方を召寄せたは、餘の儀でない。

ト綾之助が首をポンと切る。

皆々　これは。

宗全　宗全が、叛逆の根を斷ち切つて御覽に入れます。何れもお除け下さりませうならば、有り難うござります。

仲秋　悴の首を切つて、……ハテすつぱりと思ひ切つたな。

ト此うち義侚、宗全が腹を見る。

義侚　凡そ切腹は皮を斷ち切るばかりなるに、節刀四五寸も突ッ込み、背を掛けたるは、暇乞ひを願はん爲であらう。この疵にては最早助かる筋は見えぬ。仲秋、其方は跡に殘り、宗全が首を持參せい。切腹を見屆けたれば、身は歸らう。

仲秋　イヤ、未だ生ある宗全。

義侚　なにサ、所詮助からぬ宗全。また此方を恨むると云うて、如何やうな事をするものぞ。紛失の寶も義侚が勢ひで、天下と云ふ箱の內にあれば、知れぬといふ事があるか。ヤイ宗全、毒藥仕損じ、さぞ無念にあらうな。家中の者は皆これに居る。今川と身共只二人ぢや。野心もあらば云へ。聞き屆けてくれう。

ト宗全、俯向く。

ムウ……譜代の者に暇乞ひを願ふゆゑ、今川も暫らく遠ざける。コリヤ、心措きなう云へ。

宗全　有り難うござります。

義侚　譜代の者ども、其方達は主の最期に、さぞ本意なからう。恨みもあらば聞き屆けてくれう。サア、云はぬか云はぬか、どうぢや。ハハヽヽ。仲秋、最早歸らう。其方も隨分早う立歸れ。

仲秋　畏まつてござります……お立ち。

ト內より

大勢　ハアヽヽヽ。

ト主水、左門、先に立ち、義侚、優美に通る。仲秋後に附き、眼を配つて花道へ入る。この間皆々シーと辭儀する。

宗全　譜代の者ども、さぞわれ達も力落しであらう。

皆々　御推量下さりませう。

ト俯向く。

宗全　最期の用意に用事もあり、暫らくわれ達は次へ立ち何者も來ぬやうに氣を附けい。

皆々　畏まつてござります。

ト皆奧へ行く。左衞門も橋がゝりへ手を組みて、續いて行かうとする。宗全あたりを見廻し、思ひ入れあつて

宗全　桂左衞門一人待て。

左衞　ハッ。

ト恟り。

宗全　これへ參れ。

左衞　ハツ。
　ト つか〳〵と側へ行く。
宗全　桂左衞門、勘當赦すぞ。
左衞　エヽ。
宗全　嬉しいか。
左衞　ハツ。
宗全　嬉しからうな、
　ト 左衞門、ハツと俯向く。
末期に其方へ、申し付ける仔細がある。その燈臺の灯を一つも殘らず消して來い。
左衞　ハツ。
　ト 灯を消し、最前の暖簾を引きちぎり、探り寄つて、宗全を介抱し腹を卷き、いろ〳〵にいたはる。
情なや殿樣、御勘當を今少し早く御赦免ありて、お側に附き添ふならば、斯うした事はござるまいもの。エヽ、桂左衞門が心の內を、御推量下されませう。
　ト 泣く。
宗全　愚か〳〵。將軍を弑し奉らん爲、茶の水に毒をしつらへ置きたる宗全なれば、顯はれて斯くなるは覺悟の前。
左衞　合點が參りませぬ。毒藥の詮議、おのれやれ御最期の後にても、この垢を拔き、主殺しの惡名を雪がんと存じ居りまするに、すりや、矢張り御存じでなせし毒藥とな。
　ト 此うち宗全、左衞門が手を取ると、凄き合ひ方になり、宗全、左衞門を上座へ直し、手を仕へ
宗全　左馬頭權大納言義親公、法名大智院追孝久山大禪正門。こりやこなたの親御の名。拙者が爲には、こなたは三代相恩の御主人でござるわいの。
左衞　そりや何仰しやる。血に迷うて狂氣なさつたか。お氣を慥かにお持ちなされ。コレ殿。
宗全　アヽ最早積りし卅八年。コレ、いま拙者が云ふ事をよく聞かつしやれや。東山義政公と、こなたの親御義親公とは御兄弟。八代將軍に我れおしならんと、兄弟互ひに爭ひ給ふ龍虎の眦。細川は義政附き、この山名は義親公、兩管領も鎬を削るところに、御運拙なき義親公、東山八代將軍は義政と相極まり、義親公は大智院道孝と法名あり、御髮けづり、嵯峨の庵へお引込みなされ、こなた樣は、義親公の御子義村丸どのと申して、今の將軍義尙公とは、從弟同士でござるわいの。
左衞　思ひ合せば幼少より、仕官の身なれど、父も無く母

も知らず、臍の緒に大智院道孝とばかり記しあるが、すりや、今の物語りでは、義親公の胤であつたか。ハテナア。

宗全　義政公、八代の將軍になり、いま九代の將軍義尙公と相續くゆゑ、細川は日々に威を増し、山名は次第に衰ふ。義親公ば御大病、晝夜御介抱申せし甲斐もなく、定命既に今際の枕に某を召され、この度天下の武將を義政に奪はれ、無念この事なし。所詮名を出し、叛逆も事遲く、無念積つて、この間より食を斷ち、湯水を通さず、今日只今、渇して死す。汝にこの義村丸を預くる。我が本懐を立つるは宗全、其方ならで外にない。成人さして天下の主となしくれよ。頭は剃り、衣は掛くれど、心は修羅道。七條の袈裟は七難八苦。緋の衣は大叫喚の煙にむせぶ猛火の熱鐵。義村丸を世に立つるまでは、浮かむ世さらにないぞよと、これを末期のお詞にて、某をチッと引寄せ、兩眼より血の御涙をお流しなされし時は、餘り無念で、宗全もギヤッと一聲、血を吐きましてござるわいなう。

ト左衞門、思ひ入れして

左衞　聞けば聞く程、その時の親人の心、思ひ廻せば、エエ、、。

ト泣く。

宗全　初めて聞いて御無念、お道理〱。

左衞　合點がゆかぬ。その身共を只今まで、目通りの勘當して、側近く寄せざりしは。

宗全　天ケ下に細川の一類あつては、なか〱大望成就なり難きゆゑ、將軍の指圖を以て、勝家を養子にしたを幸ひ、放埒を勸め込みしは、枝を枯らして根を斷たん我が計略。こなた樣一人は、諸武士に歸依させんと存じましての事。桂左衞門に歸伏いたさぬ者はない。必らず本懐を達して下されいや。

左衞　宗全、今の話しを聞く上は、倶に天の戴かざる無念。今よりしては、親人の左馬頭を我が名とし、義村丸の二字を其まゝに、足利左馬頭義村と改名すれば、親子諸とも本懐を達するも同然。今よりしては謀叛の棟梁。

宗全　ハ、ア、天晴れなる御氣性。併しながら、最早大將の御身なれは、木にも萱にも心置かるゝ、御旗上げまでは暫らく御名はお包みなされ、只今のお名、桂とは、都の北川なれば苗字は北川、畏れながら宗全が一命は終るとも、魂ひは御供仕る心にて、左衞門の上へ宗全が宗の

一字を置き、浮世を忍ぶ假の名は、北川惣左衞門と御名乘りなされいや。

左衞　すりや、旗上げをするまでの假の名は、北川惣左衞門とな、エヽ、それ程までに心を盡す其方、早まつて、なぜ腹へ突ッ込んだぞいやい。

宗全　愚か〳〵、將軍に毒害を致し顯はれたれば、命助からんと陳ずる程、詮議に詮議の花が咲き、こなたのお身の大事にならうも知れず。まだ時到らずと存じ、切腹いたせば、拙者が命一つで詮議はこれぎり。コレ、義村公、こなたへ密かに渡す物がある。

ト あたりの飛び石を退け、下より羽衣の箱を出し渡す。

左衞　これは。

宗全　天下の重寶、天の羽衣。

ト 左衞門、驚ろくを、宗全シイと押へ

先達て赤松滿祐が怜、比叡山を下つて此方へ味方いたし忍び〳〵に徒黨を語らひ、霓裳羽衣の曲の一卷も、彼れ赤松が奪ひ取つて立退きました。彼れと心を合せ、二種の寶を合體させ、御旗上げを遊ばされや。

左衞　ムウ。して赤松が面體は。

宗全　叡山法師の術ありて、船に住み陸に住み、疫病疫癘を起し、なか〳〵面は申したりともお覺えはあるまい。あの方には大將と賴むこなたぢやに依つて、よつく存じ罷りある。コレ、海山道路に限らず、キノニノヤノハノモノと申しかくるが即ち赤松。

左衞　ナニ、キノニノヤノハノモノと云ひかくるが、赤松とな。

宗全　假名遣ひの合ひ詞は、赤松にお聞きなされい。まさかの時は、この穴より行けば、この館の外濠まで出る拔け道。御合點か。

左衞　二種の寶揃はねば、將軍宣下叶はず。赤松を味方に附け、二種の寶を以て、一天下を掌握し、草葉の蔭の父上へ手向けん。

宗全　オヽ、そのお詞が未來の土産。早く參つて義親公に、お喜ばせ申しませう。

左衞　エヽ、あつたら武士を、むざ〳〵殺すか。

宗全　これも宿業。

左衞　宗全。

宗全　和子。

二人　エヽ。

ト 手を取り合ひ泣く。この前より白妙、手燭に裲襠を

掛け、聞いて居て、爰にて裲襠を取る。左衛門と顔見合せ、思ひ入れ。

左衛　白妙、最先よりの様子、そちや聞いたであらうな。

白妙　外に一人も知る人のない密事。とつくりと聞きました。

左衛　ハテナア。

ト白妙、ツカ〳〵と左衛門が側へ出で

白妙　サア。

ト首さし伸べる。

左衛　出かした。

ト刀抜かうとする事度々ありて

白妙　エヽ。

女房、去つた。

左衛　性根に愛でゝ助けやるは、今までのよしみ。

ト白妙、どつかり坐り

白妙　わたしや仲秋が妹、去らしやんしたら敵ぢやぞえ。

左衛　大義を思ひ立つ某、これしきにかゝつて、恩愛の義理を破り、無益の殺生はせぬ。

白妙　他人になれば

左衛　訴人するか。

白妙　なんの金鐵。

左衛　そりや、其方が勝手次第。

宗全　兎角、心にかゝるは天津姫。

左衛　その事は氣遣ひしやるな。

白妙　お姫様は若殿様の、跡を慕うて裏道から。

宗桂　なんと。

ト白妙、身拵らへして

白妙　おさらば。

ト花道へ行かうとする。

左衛　白妙、待て。

白妙　御用かな。

左衛　そちや追ひかけて供するか。

白妻　親兄にも見返るは、夫とお主。

ト左衛門思案して

左衛　善と云はゞ

白妙　共に善。

左衛　惡ならば

白妙　共に惡。後を慕うてお姫様へ忠義を立つるも、お前に添ひたいばつかり。

左衛　天津姫は義理ある女、跡より追ひつき、姫に忠義を

立て、先途を見屆けたを、とくと身が心に的中いたしてもあらば、その時は、元の通り夫婦になつてくれまいものでもない。

白妙　そんなら、おさらば。

左衞　行け。

ト白妙、花道へ走り入る。

宗全　いよ〳〵只今の事を。

左衞　氣遣ひせずと往生せよ。

宗全　忝ない。

ト此うち仲秋、侍ひ大勢、出る。

仲秋　暇乞ひ相濟んだか。ソレ、桂左衞門、介錯。

左衞　ナニ、拙者に。

宗全　苦痛させずと、サア介錯。

左衞　畏まつてござります。

ト後へ廻り刀を拔き

お覺悟は。

宗全　南無阿彌陀佛。

ト手を合す。桂左衞門、宗全が顏を見て

左衞　南無阿彌陀佛。

ト首切り、仲秋の側へ直し

介錯仕つてござります。御實檢下さりませう。

仲秋　介錯、慥かに見屆けた。ソリヤ、左衞門に繩打て。

侍ひ　動くな。

ト取卷く。

左衞　何ゆゑ某を取卷かつしやる。

仲秋　將軍を毒藥を以て、弑し奉らんとしたは宗全が謀叛。それを知つて詮議もなく、切腹仰せつけられ、家中へ暇乞ひまで許されたは、宗全が末期に申し殘す密事。何者を捕へ合體するかを見出さん爲、わざと先へお歸りなされた。

左衞　なんと。

仲秋　譜代の者にも隱し、灯を消して其方一人に囁いたは仔細があらう。宗全の片腕、左衞門、繩にかゝれ。

左衞　家の事、娘が事、家中へ形見分け、その外承り及んだる家の格式より外に、胡亂がましい儀はござりませぬ。

仲秋　その詞は、將軍の御前でせい。

左衞　イヤ、御前へ參るまでもござらぬ。

仲秋　然らば持つてゐる箱を、此方へ渡せ。

左衞　こりや、宗全が拙者への形見。えゝ、お目にはかけ

ますまい。
仲秋　疑ひもなき、そりや天の羽衣。
左衞　イヤ、全く左やうな物ではござらぬ。
仲秋　見せぬは曲者、ソリヤ。
　トかゝるを、ツト投げて
左衞　すりや、どうあつても繩かけるか。
仲秋　將軍の御內意にて、外曲輪へ人數を廻したれば、遁がれはないぞ。
侍皆　やらぬぞ。
　トかゝるを、一兩人切り倒し、股立ちを凛々しく取り、身拵らへして、宗全が首を腰に下げ、箱を脊負うてよろしくあるべし。
左衞　さう云や、宗全が首も渡しやせぬ。謀叛ならば謀叛にせよ。金輪際この場を切り拔ける。惡く寄ると死人の山を築くぞ。
仲秋　ソレ、遁がすな。
大勢　やらぬぞ。
　トこれより大立廻りいろ〳〵あり、皆々を追ひ込み、責め太皷になり、左衞門、身拵らへのうち、一騎立ちいろ〳〵あり、皆を泥へ切り込み、件の穴へ飛び込む。

仲秋　ソレ、四方の門々を固め、胡亂な者は縛し上げい。
大勢　畏まつてござります。
　ト皆々橋がゝりへ入る。仲秋も穴へ飛び込む。反し。造り物、一面の石垣、高塀になり、提灯數多行き違ふ。眞中の石垣一つ二つ拔く。この間に侍ひ大勢、弓矢を持ち出し、目配せして石垣の穴を覘ふ。頭を少し出ろところを、皆々射つける。殘らず中る。侍ひ大勢立寄つて右の死骸を穴より引出し
大勢　捕つた。
　ト押へる、白無垢の侍ひなり。後より左衞門出で、皆皆を切り散らし、追ひ込む。同じく後より仲秋出る。左衞門、向うへ行かうとする。
仲秋　左衞門、待て。
　ト左衞門、懷劍を手裏劍に打ち、仲秋、死骸にて止める。左衞門、向うへ走り入る。
　チヨン〳〵の幕

三段目　桑名渡しの場

役名――山名右近之助勝家。息女、天津姫。傾城、見空。八幡屋才兵衞。牛飼ひ金三。下郎、與五郎。奴、關内。細川勝元。北川惣左衞門。赤松四郎高定。

造り物、一面の黒幕。所々に蘆茂り、向う、微かに遠山、桑名渡し場の體。下座の方に苫かけし凄き船あり、柱の際に細川勝元、奴關内、菰を着て見えぬやうに寢て居る。在郷唄にて幕ひらくと、旅人の仕出し大勢、皆船上がりの體にて出る。

仕出　なんと、今の風は一まくり、えらいものではござらぬか。

同　されば〳〵、もう道中で爰な渡しのやうな、怖い所はござらぬ。わしらはなんぼも、爰を通るが、分けてこの四五年は、ちよこ〳〵船が引ツくり返りますわい。

同　左やう〳〵。して、お前は、どつちへ行かつしやる。

同　わしは、尾張の名古屋へ行く者でござる。

同　わしらは直ぐに江戸へ行くのぢやが、鳴海まではもう一里十二町。なんと一服しようぢやござらぬか。

同　よかろ〳〵。

ト向うより八幡屋才兵衞、旅がけの體にて、男を連れ出て來て

才兵　さても〳〵、ひどい風でないかい。

男　イヤモ、命を拾ひましてござります。

才兵　先刻船で見付けた三人、慥かにさうぢやあらうがな。

男　あれに違ひはござりませぬ。

才兵　捕まようと思ふ間に、船がでんぐり返つて、生きた心地がなかつたうち、つい見失うた。ア、、殘念な。向うに人聲がする。

ト本舞臺へウソ〳〵行く。

仕出　エ、、爰な和郎は、人の休んでゐる所へ、ウソ〳〵と、氣味の惡い。なんぢやいの。

才兵　わしは、人を尋ねる者でござるが、渡し場で見付けたゆゑ、捕まようと思ふ間に、取逃がしました。それでキヨロつくのでござります。御免なされませ。ちつと爰

で休みませう。サア、其方も休め〳〵……ホイ、南無三、煙草のまうと思ふに火がない。
仕出　こちらも火に渇えてゐる。とんと煙草の極貧ぢや。
才兵　ホ、あそこへ牛引いて、啣へ煙管で來るぞ。
ト橋がゝりより牛飼ひの金三、啣へ烟管で牛引き來る。
コレ兄貴、一つ貸してくれ。
金三　サア〳〵……船から上がらんしたのか。先刻の風で、えらい目に會うたんぢやろ。
才兵　會うた段か。命一つ棒に振らうとした。
仕出　イヤ、それに付いて、この六七年以前から、きつい疫病が流行るが、兄貴、爰らはどうぢや。流行らせぬか。
金三　流行る段ではない。とんころりと云ふ疫病ぢやが、それで無性に世間が騷がしい。こなた衆も、隨分取りつかれぬやうにさんせ。
才兵　イヤ、おれは廓の者ぢやが、此方の抱への女郎に蟲が附いて、駈落ちしをつたゆゑ、詮議しても未だに知れぬ。とんころりより疫病より、廓の蟲がどうぞ拂ひたいものぢや。時に兄貴、いま爰らへ若い男と女と振り袖と、三人連れは見なんだか。
金三　イヤ〳〵、こちや今まで向うの堤で、牛に草食ましてゐたが、そんな者は見なんだ。
才兵　ハテナ、どうでもこの邊に隱れて居らう。斯うして居るうちも氣が急く。男ども、探して來う。來い來い。
仕出　サア、おいらも行きませう。サア〳〵、皆ござれござれ。
才兵　どこへうせ居つた知らぬ。
トぼやき〳〵入る。仕出しも殘らず入る。
金三　エヽ、やかましい奴等ぢや。時に一服せうか。
ト勝家、見空、天津姫、向うより出でゝ
見空　申し殿樣、もつと靜かに行かしやんせいなア。
勝家　何を云やるぞいの。いま見付けたは、慥かに廓の者。其方の揚げ代の代りに、わしを桶伏せにせうと云ふを、その代りに白妙が廓へ行て、勤めをしたに依つて、わしは難儀を遁がれたれど、其方が廓を出やつてから、また廓からわしが行くへを詮議するとあるゆゑ、木にも萱にも心措かれ、それで足が早うなるのぢやわいなう。
見空　それはお道理でござんすけれど、あれ見やしやんせ。ついぞひろひもなされぬお姫樣、長の旅路で、さぞお御足が痛うござんせうな。
天津　イエ〳〵、なんぼ足が痛うても、殿樣のお側に居り

さへすりや、わたしや嬉しうござんす。道々いかいお世話でござんすなう。

見空　なんのマア、わたしは殿様と深う云ひ交した仲なれば、あなたゆゑなら、どのやうな身になるとても、いとひは致しませんが、お前様はまだ帯紐解いて御寐ならんお身で、それ程までに思はしやんすお心根が、思ひやられて悲しうござんすわいな。

ト泣く。

天津　どうぞお前のお世話で、斯う振り袖が留めたうござんすわいなう。

勝家　國を出てより六七年、さまよひ歩けど、紛失せし寶も知れず

三人　アヽ、味氣ない浮世ぢやな。

金三　うまいな〳〵。男一人を二人して引挾んで、据ゑ膳の念佛講、けうとい、けうとい。

勝家　ても、ませたものぢや。

金三　お前達は、駈落ちぢやの。

三人　ヤア。

金三　先刻、誰れやら尋ねて居たぞや。

勝家　それは大方、廓の親方であらう。どうしたらよからう。

天津　白妙が勤めに行きやつて、揚げ代とやらは、濟んだぢやないかいな。

勝家　イヤ、濟んでも、今の身を尋ねると聞いては、油斷がならぬ。

見空　どうぞ思案はないかいな。

ト勝家、二人に囁く。

勝家　コレ兄貴、わしらは人目を忍ぶ者。其方を男と見て頼む。どうぞ人目にかゝらぬやうに、送つてたもらぬか。

見空　ほんに、可愛らしい人ぢや。

天津　頼もしさうな人ぢやわいな。

勝家　男一疋、頼むぞや〳〵。

トそやし立てる。

金三　氣遣ひさんすな、呑み込んだ。牛飼ひの金三と云はれては、在所で小口もきく者ぢや。大船に乘つたやうに思はんせ。

三人　頼まれてたもるか。エヽ、忝ない。

ト嬉しがる。

金三　もう日が暮れる。サア行かんせ。

三人　オヽ、嬉しやの〳〵。
　ト才兵衞、男、連れ出で、三人を捕へて
才兵　コリヤ、見付けたぞ。
見空　ヤア、親方様か。
勝家　才兵衞か。
才兵　われを尋ねて居たわいの。三百兩の揚げ代はどうする。
天津　その揚げ代の代りに、白妙と云ふ者が廓へ行て、勤めをするに依つて、もうよいぢやないか。
才兵　あんだら盡せ。その白妙を勤めさして、繁昌しかけるところを、また駈落ちひろいだ。
勝家　白妙も駈落ちしたか。
才兵　その上、おのれがあんだら盡したに依つて、廓は取上げられる。出合つたが百年目。サアうせい。
　ト引立てようとする。金三突きのけ
金三　構はずと逃げさんせ。
才兵　小びッちよめ、邪魔ひろぐか。
金三　指でもさすと、頰がまち、いがめるぞ。
才兵　猪口才な、おのれ。
　ト立廻り、三人を逃がすまいと、いろ〳〵あり、三人を捻ぢつける。
サアメめた。男ども、グル〳〵巻きにして引摺つて行け。藤の蔓でも取つて來い。
　トこの間に金三、牛の綱を才兵衞の帶に括りつける。
金三　足元の明いうちに、そこ放せ。
才兵　ならぬわい。
金三　ならにや、斯うぢや。
　ト手を叩く。牛剏ね上がり、橋がゝりへ才兵衞を引摺つて行く。男ども、追ひかけ行く。
三人　オヽ、出來た〳〵。
金三　あれで氣遣ひなしぢや。あの牛が引摺つて行く間に、道を變へて送つてあげう。
三人　エヽ、忝ない。
金三　玆等が、金三の腹ぢや。去なせ〳〵。
　ト唄ひ、三人連れ、橋がゝりへ入る。向うより北川惣左衞門、旅裝束にて、大繩を持ち出る。跡より足輕與五郎、草鞋すげ〳〵、跛引き出る。
惣左　さて〳〵きつい風であつた。あの船には乘るものぢやない。ヤイ、與五郎々々々。
與五　エヽ。

ト悧りする。

惣左　何をして居るぞい。もう日は暮れかゝる。早う行かにやならぬ。もつと歩けやい。

與五　何をけい〳〵らしう。早う行かにやならぬと、行く先の當があるかいな。

惣左　當があらうがあるまいが、行く所まで行かにやならぬ。

與五　それほど日が暮れて氣が急くなら、四日市に泊つたがよいに、主腹よけりや下素腹知らぬと、家來の罰が當るぞえ。

惣左　ハ、、、やり居つた。そしてそりや、何するのぢや。

與五　ハテ、何しようぞ。主人へ忠義を立てるのぢや。

惣左　仰山な事を云ふ奴ぢや。忠義とは。

與五　お前が脚氣で足を痛がらんすに依つて、乘り場で草鞋買うて、すげて居るのぢや。なんと忠義であるまいか。

惣左　こりや、出かした。一生の智慧ぢや。履き替やう。持つて來い。

與五　へ、、さうもあるまいぞえ。身が情を以て、草鞋穿かしてやらう。

ト手を見て、いろ〳〵尋ねる。

惣左　なんとした。

與五　たつた今まであつたがな。

トうろ〳〵する。

惣左　ヤイ〳〵、おのれが腰に下げて居るは、そりやなんぢや。

與五　おのれが腰に。

ト腰の廻り見て、片足片足腰に差いてあるを取つて

ハア、、すげる間、腰に下げたを忘れてのけた。ハテサテ、麁相な人ぢや。

惣左　大馬鹿め。

ト與五郎、惣左衛門に草鞋を穿かす。

與五　なんとさんした。

惣左　また脚氣が發つた。ア痛々々。

與五　その脚氣もしつこい奴ぢや。ほんに思ひ出した。それに好い咒ひがある。

惣左　咒ひがあるなら、疾からしをつたがよい。

與五　サア、立つた。いま癒すほどに、隨分信を取らんせ。

ト惣左衛門が頭を手拭にて鉢巻きし、力身入れて締める。

惣左　ヤイ、頭を締め上げて、どうするのぢや。
與五　やかましう云はんすな。これが咒ひぢや。
惣左　これが咒ひか。
與五　ハテ、脚氣咒の緒を締めよぢや。
惣左　たわけ者が、樣々の事をしをるがな。
ト突き飛ばす。
助五　頭の血を絞り出して、足の痺れを癒すのぢや。
惣左　まだ馬鹿を盡す。これで、日がな一日修羅の種ぢや。
ドレ、煙草でも吸ひつけて行かう。
ト腰を見て
南無三。
與五　なんぢやいの。
惣左　腰提げの煙管筒を落した。
與五　惜しい事ぢやな。
惣左　惜しうはないが、旅で煙管の無いのは、兄弟に離れたやうな、とんと便りない。
與五　そりや麥飯が、とろゝ離れたやうなものぢや。いま思ひ出した。お前、船で煙草をのまんしたが、大方、その時船に忘れて置かんしたものぢやろ。
惣左　ほんにさうであらう。

與五　わしよりは、粗相な人ぢや。
惣左　ア、ひよんな事してのけた。
與五　いつそ、盜んで置いたらよかつたに。
惣左　どうしたらよからうぞ。
與五　どうしたらよからうな。
惣左　コリヤ、與五郎、斯うせい。
與五　アイ。
惣左　われはナ。
與五　アイ。
惣左　大儀ながら。
與五　アイ。
惣左　揚げ場へ行てな。
與五　アイ。
惣左　その腰提げを取つて來い。
與五　エ、。
トけたゝましい顏にて、膽を潰す
惣左　此奴、きつい膽の潰しやうぢや。
與五　これが又潰れねば、潰れるねぶとはあるまい。
惣左　なにを。つい取つて來い。
與五　爰から揚げ場までは五六町もあるぞえ。日は暮れる

し、それでも取つて來いかえ。
惣左　ハテ、つい取つて來るばかりに、仰山な奴ではある。
與五　お前は仰山にないか知らぬが、此方は仰山な天上ぢや。
惣左　ハテ、取つてうせいと云ふに。
與五　それでもマア。
惣左　取つてうせ居らぬか。
與五　サア、取つてうせるわいな。誰れぞ、うせ居るまいと云ふにこそ。これほどうせかゝつて居るのに。
惣左　サア、そんならキリ／＼うせい。
與五　うせるわい。とつとなんぢややら。落さいでも大事ないものを、落してからに。落すなら落すと、斷わり云うてから落したがよい。人に斷わりもせずに、なんぢやらほんに。
トいろ／＼の事ぼやき／＼云ふ。
惣左　何をグド／＼吐かすぞ。
與五　行きやんすわいの。とツとモウ、日は暮れかゝつてある。道はどうやら氣味惡し、凄うもある。
惣左　何を同じ事を。夜が明けうが日が暮れうが、主の云ひ付け。キリ／＼うせい。

與五　主命なれば天命ぢや。行てこまそ。なんの別れに怖いと思や怖し、怖うないと思や堪えられたものぢやない。よい／＼、化け物が怖がる、祕文唱へて行かう。
惣左　ごくにも立たぬ事に、隙が入るがな。
與五　この又凄い氣味の惡い事わいな。
トぼやき／＼行きかゝり
アレ／＼／＼。
ト後へ戻り
あれを見やんせいな。あれを。
ト向うを指さし見せる。
惣左　なんぢや、ドレ、何がい。
與五　ハア、なんでもなかつた。ハヽヽヽ、いたんやほう。
ト鼻唄、念佛申し向うへ入る。
惣左　ハテサテ、あのやうな氣に如才のない者はない。イカサマ、氣味を惡がり居るも無理ではない。日は暮れかかる、風は吹く、餘り心よい所でもない。イヤ／＼、あの又阿房めが、怖い／＼に性根を取られて、船を見失うて、道に迷ひ居るも知れぬ。矢ッ張りおれが、一走り行たらよかつた。イヤ／＼、彼奴ばかりは心元ない。エヽ、行かざなるまい。阿房を使へば、苦を使ふぢや。ドリヤ。

文化二年正月中の芝居所演繪番附

ト云うて花道へ行かうとする。船の苫上がる。赤松四郎、疫癘神の形にて船先きにスツクと立つ。蘆風ザワザワと動く仕掛け。

赤松　待て。

惣左　エヽ。風で蘆の騒ぐ音であつたか。

ト行かうとする。

赤松　待て。

ト惣左衛門、思ひ入れある。

惣左　慥かに人聲。待てと聲かけたは、どこぢや。

赤松　爰ぢや。

惣左　爰とは、何者ぢや。

トいろ〳〵あつて、赤松が姿を見付け、思ひ入れあつて

ハテ、稀有な姿。ア、聞えた。盗賊の類か。但しはこの川に年久しく住む、主などと云ふやうな……わい等が呼びかける用はない。

ト行かうとする。

赤松　北川惣左衛門、待て。

惣左　ナニ、北川惣左衛門と、身が名を知つたは。

赤松　オヽ、爰を通る事、先達てより知つて待ち居つたわい。

惣左　フウ。して何者ぢや。

赤松　キノニノヤノハノモノ。

惣左　ヤア。

ト恂りして

ハテ、思ひかけもない。さてはキノニノヤノハノモノ。

赤松　巡り逢ふは盡きせぬ縁。

惣左　して、彼の一種は。

赤松　二心なき賜物。

ト一卷を出し渡す。

惣左　慥かに受取つた。

ト受取る。

惣左　して、手筈はなんと。

赤松　叡山にて行ひ澄ませし術を以て、諸國へ疫病疫癘を流行らし、一味せざる者は、三日のうちに命を取り、この桑名の渡し守に、一味させて云ひ觸らし、船にて約束したる徒黨凡そ八百人。

惣左　諸國の味方は數知れまい。して、キノニノヤノハノモノとは。

赤松　その合ひ詞假名遣ひ、密かに合體して申さう。

惣左　委細の事は
赤松　渡し船で
惣左　尤も。
赤松　道が暗い。供の人數。
ト合ひ印の提灯、船底より差上げろ、向うより黑股引、黑裝束に甲頭巾にて數多出ろ、皆々、のゝじの書き附けし提灯を持ち、しと〳〵出で、花道へ二行に並ぶ。
惣左　イザ行かうかい。
赤松　同道仕らう。
ト惣左衞門、思ひ入れして、赤松と連れ立ち、向うへ入る。黑裝裝の者殘らず皆々入る……勝元、乞食の形にて起き、向うを見て後ざまに關内を蹴る。關内、ムツクと起きて、菰包みより大小を出し、勝元に渡すと取つて差し、關内に囁く。關内、頷く。
勝元　キノニノヤノハノモノ。黑裝束に紋はのの字。
ト向うを見て
ソレ。
ト勝元、見得。關内、凛々しく、尻引ツからげ、走り入る。よろしく

幕

四段目　白了内の場

役名――山名右近之助勝家。息女、天津姬。傾城、見容。女房、白妙。下郎、與五郎。同女房、おたか。淸見伴作。漁師、白了。惣左衞門女房、乙女。北川惣左衞門。

造り物、三間の間、二間の中二階。一間、奥へ入込んで納戸口、橋がゝり、塀の上に、障子屋疊見える。向う、入り口、黑格子のおまんと云ふ家札あり。幕の内より與五郎、袋を頭巾にし、男二三人、大長持を直してゐる。與五郎、疊を叩き、煤掃きの形。これにて幕開く。

男一　待たしやれ〳〵。
與五　なんぢやいの。
男一　其やうに素股ばかり叩いて、此方まで草臥れる。拍子にかゝつて、やつたがよい。
與五　やるワ〳〵。有やうは貴樣達が、煤掃きの故實を知らぬに依つてぢや。おれが叩くのが、本習ひ事の煤掃き

ぢや。

男二　こりやおかしい。煤掃きにも傳授があるかえ。

與五　エヽ、愚智無智の凡夫ぢやな。知らずば云うて聞かさう。マア、この煤掃きは、天地陰陽に表したものぢや。

男三　とはどうぢやの。

與五　ハテ、疊を仰向けにする。これが女子。この竹の弓は、張り切るほど、りうかくしやりんになつたが男。上から叩くは陰陽和合、心より埃を出して跡で拭くと云ふ心。そこで初め叩いて、サア、埃が出る。今出ると云ふ時、せべりかゝつて、カツタ〳〵と打つのぢや。

男一　その陰陽和合に、大勢かゝつて叩くはどうぢや。

與五　ハテ、そりや念佛講ぢや。

男一　ハヽ、讀めた。念佛講なら引念佛でやらうかい。

與五　それ〳〵、おれが導師ぢや。煤掃きも喜びの物。めでたう葬禮の念佛でやつてたも。

男皆　合點ぢや。

與五　なまいだんぶう。

男皆　なまいだんぶう。

與男　なまいだん佛、なまいだ〳〵〳〵。

ト叩いて廻る。奥より乙女、子を抱き出る。

乙女　これはやかましい。なんの事ぢや。

與五　なまいだ〳〵〳〵。

ト乙女と顔見合す。

乙女　嗜なまんか。

與五　南無阿彌陀佛。

乙女　與五郎は與五郎とも思はうが、皆の衆が同じやうに踊り狂うて、マア、嗜なまんせ。

男一　イヽエ、與五郎どのが、せいと云はれました。

與五　おれが、どこにそんな事。

乙女　イヤモ、ほんに興が覺める。如何に阿房ぢやと云うて、コレ、今の夫、白了どのは武士の浪人ゆゑ、貧しう暮らしても、兵法の弟子も取つて、所で實體なと、譽められてゐる人。今日は宿を替へたに依つて、奥の稽古場へ、荒道具を留守のうちに、片付けうとはせいで、ちつと嗜なんがよい。

與五　叱つたワ。コレ、今日宿替へして、道具も何も運んだに依つて、次手に煤掃きもしてしまふのぢや。これをせんと二度手間せにやならぬ。こりや、このわしが智謀計略ぢや。

乙女　口賢い事ばかり。そして、煤掃きを近所へお斷わり申したか。
與五　なんのマア。
乙女　それぢや程にの。隣は舞ひ謡ひのお師匠様、所で敬ふお人。あの白了と云ふ人は浪人者さうなが、煤が立つに一言の附け屆けもせぬと思はれては、夫の不念、なぜ斷わりに行かぬぞ。
與五　行かぬがあつちの爲ぢや。
乙女　そりや、なんとして。
與五　ハテ、隣は打ち囃子や、謡を教へるゆゑ、毎日々々、てん／＼ひうたゝぽんなどと、うそ喧ましうて堪るものぢやない。此方から煤掃きの斷わりに行たら術ながつて、ア、煤掃きにさへ人を下されますと、折目正しうなつて、ヘイ只今てゝんでござります、ハイ只今ひうたつぽぽでござりますと、毎日々々使ひが來るであらう。それが笑止さに斷わり云はぬ。あつちの爲でごんすわいの。
乙女　でもマア、皆、あの口を聞かしやんせ。
　　ト橋がゝりより歩き、箱を持つて出て
歩き　白了どのゝ所は爰でごんすか。
　　ト入る。

乙女　ホウ、こりや茂六さまか。
歩き　乙女さまかい。とんと一遍尋ね歩いた。爰へ宿替へするなら、斷わつてからしたがよいわいの。
乙女　急な事ぢやに依つて、庄屋どのへ斷わる間もござんせなんだ。
歩き　そんなら尤もぢやが、明日の神事の事。知つての通り爰の先祖、白了どのが、昔この三保の松原で、天人が捨て置いた羽衣を拾はしやつて、この天人と女夫になつて、産んだところが女の子。何代續くか知らぬが、入り聟は白了、娘は乙女。その羽衣は天下の重寶になつてあるげな。その因縁で、この風早の浦に、羽衣の明神と云ふを勸請して、毎年々々白了の内から、乙女を天人の装束で、駿河舞を勤めるが所の祭ぢや。明日は神事ぢやに依つて、天人の装束を持つて來ました。
乙女　私しとした事が、明日の神事の事を、とんと忘れて居ました。
歩き　それぢやわいの。天人が忘れて堪るものか。イヤ、忘れた次手に都からのお尋ね者、若い男と美しい女子と、三人連れで來たのを見付けたら、引ッ縛つて來いとあるお觸れぢや。云ひ渡したぞや。さてと、明日の駿河

舞は隣の囃子屋で、鼓も太鼓も稽古する筈ぢや。追ッつけ皆寄つて始めるぢやあらう。天人の装束渡すぞえ。明け六ツからぢやぞえ。早いぞえ。

ト云ひ〳〵入る。

乙女　アイ〳〵、合點でござんす。

男皆　段々様子を聞きましたが、内方も奇妙なお内でござります。

與五　なんと奇妙な事か。イヤ、奇妙次手に、爰な下家に綿帽子があつた。

ト出して見せる。

乙女　そりや下地の人のを、猫がな引いて行たものであらふ。

與五　こりや、おれが物にするぞえ。

乙女　オヽ、どうなと。

與五　サア、してやつた。これを布子へ入れて、剰つたを襟巻にして、殘るを糸に紡いで毛綿に織つてもらはう。

乙女　綿帽子一つ持つたとて、あれ見て下さんせ。

男皆　ハヽヽヽ。時にわたしどもは、もうお暇申しませう。

乙女　ほんに大儀であつたなア。

與五　そんなら疊敷いてもらはう。

ト皆寄つて敷く。

この長持ほど、大きな忌々しいやつはない。

トぐわたぴしとして直す。

乙女　コレ、靜かにしや。坊が目を覺ますわいな。

男一　そんなら、もうお休みなされませ。

ト皆々入る。

與五　ようごんした。また宿替へするなら呼びにやりませう。エヽ、きついてんばどもぢや。

乙女　與五郎、旦那どのはまだかや。

與五　ハイ、庄屋どのからまだ戻らずぢや。また蕎麥であらう。エヽ、食ひたいな。

乙女　コレ、その装束を神棚へ直して置きや。

ト此うち橋がゝりより男一人、肴籠に状箱を持ち出る。

男　頼みませう。黒格子のおまんさまとは、内方でござりますか。

與五　アイ、黒餡の饅頭は食ひたうごんす。

ト此うち、男入る。

男　おまんさまに、この中は御苦勞に、ようこそ口をお寄せなされて下さりました。

與五　ハイ、ヘイ。

男　死なれました母者に、逢ふ心が致します。

與五　ヘイ、ハイ、ホウ。

男　あゝ申されましたれば、成佛しられたに違ひござりませぬ。

與五　ハイ、ホイ、フイ、ヘイ。

男　これは些少にござりますれど、お禮の印までゞござりますと仰しやつて下さりませ。置いて歸ります。

ト肴籠置き入る。

與五　ハイ、ホイ、フイ、ホウ、スイ。

ト跡で返事ばつかりしてゐる。

乙女　コレ……コレイナ。

與五　ハアア、もう去んださうな。

乙女　なんぞあんな使ひの來る覺えがあるかや。

與五　それをおれが知つた事かいの。

乙女　滅相な。どこからぢや、問うたがよい。

與五　それを問ふ程なら、聞いた口上覺えて居るわいの。

乙女　あんな使ひの來る筈はないが。

ト狀箱明けて包み銀を出し

なんぢや、白銀一封、黑格子おまんさま。

ト此うち與五郎、肴籠明けて

與五　ハヽヽヽ、鯒と赤貝、こりや忝ない、晩にはこれを食はんとて。

ト持つて踊る。

乙女　こりや門違ひぢや。どうして持つて來たぞいな。

與五　この持つて來た因緣故事來歷、この與五郎が胸に的中いたして居る。

乙女　そりやどうして。

與五　爰は下地、黑格子のおまんと云ふ巫子の居た跡ぢやわいな。アレ見やんせ。表に家札がまくらずにある。大方宿替へした事を知らずに持つてうせたのぢや。

乙女　それ程知つて居て、受取ると云ふ事があるものか。今の人を追ひ駈けて、戾して進ぜい。

與五　もう影も形も見えぬ。

乙女　そんなら持つて行て戾しておぢや。

與五　ア、お前は慾を知らん人ぢや。なんであらうと持つて來たは此方の福ぢや。この吝い世界に、只貰ふと云ふはうまい。菜に添へて飯を食へとある天道のお引合せぢや。

乙女　アレ、まだそんな橫道な事を。

トせり合ふうち、また男一人、肴籠と禮銀を持つて出

で

男　頼みませう。黒格子のおまんさまは、お内でござりますか。

與五　アイ、おまん、内に居られます。禮銀なら受取りませうかな。

男　イエ〱、旦那が直にお渡し申せと申し付けられました。おまんさまにお目にかゝりたうござります。

ト此うち乙女、與五郎が袖を引く。

與五　ハイ〱、成る程、内に居られますが、いま急に疝氣が發つて、寢てゐられます。

男　ハイ、左やうなら持つて歸りませう。

與五　ア、、コレ〱、折角持つて來て、また持つて去なうとは、どうぢやいの。

男　でも、逢はにゃ渡すなと。

與五　そんなら、爰へ呼んで來う。

ト此うち、乙女、袖引く。

サア、よいわい。

男　ハイ〱、どうぞお逢はせ下さりませ。

與五　オイ〱……それ〱、おまんさまの聲がする。ちつとの間、そちら向いて待つて居やしやれ。

男　ハイ〱。

トあちら向く、乙女、與五郎を此方へ連れて來て

乙女　滅相な。當途もないに。

與五　よし、諸事呑み込んでゐる。わし次第にさんせ。

ト箱の内より天人の裝束出す。

乙女　コレ、滅相な。

與五　ちつとの間ぢや。

ト裝束を着て右の綿帽子をかぶり、納戸口へ出で

ハイ、待つてゞござります。

トばた〱として

私しに逢ひたいとは、どなた様ぢや。

ト乙女、術なきこなし。

毛島屋毛兵衞どのか。

男　アイヤ、七兵衞でござります。

與五　ほんに七兵衞どの、ようござつたなう。

ト鼻を撮んで云ふ。

男　旦那申します。この間は御苦勞でござりました。獨り娘ゆゑ、母めが嘆きに沈みます。

與五　道理いの。美しい子であつたに、この中梓で呼び出したれば、今も顔見るやうな。まだしも兄弟衆があつて

仕合せいの。
男　イヤ申し、獨り娘でござります。
與五　それいの。わしや親仁様の妹御かと思うた。ホヽヽ。
男　これは些少にござりますれど、この間のお禮でござります。
與五　オヽ、云はれぬ事を。そんなら辭儀せずと貰ひませう。太郎兵衛どのに、よう禮を云うて下され。
男　太郎兵衛とは誰れでござります。
與五　其方の旦那いの。
男　手前旦那は福萬寺と云ふ、門徒寺でござります。
與五　ほんにいやい。駕籠舁きの太郎兵衛どのと取違へた。ちつとの違ひで、云ひ損なうた程にの。ホヽヽ。
男　ヤ申し、この中お出でなされし時は、裲襠を召してござつたが、けたゝましい形でござりますな。
與五　されば今、日本に黒格子のおまんさまと云うては、巫子の飛切りでござる。それを聞き傳へて都から、淸盛入道と云ふ人が、小野の小町が死んだと云うて口寄せに來ました。
男　ヘイ、。
與五　知つて居やしやらう。國七九郎兵衛の姪ぢやわいな。本町橋で心中して、哀れな事いの。內裡女郎を寄せるは、十二單衣を着て口寄せるが巫子の法ぢやわいの。
男　ハテ、それぞれの衣裳がいりますな。私しはもうお暇申しませう。
與五　去なしやりますか。よう禮云うて下され。和尙様に先日申しました門跡様は、伊勢熊野かけて、身延へも參らしやる筈ぢやと云うて下され。
男　ハイ〳〵、畏まりました。
ト入る。
與五　ようござつたや。
ト綿帽子脫ぐ。
サア、してやつた。
乙女　わしや、よう聞いて居て、術なうてならなんだ。どこぞでは大きな目に會ふぞえ。
與五　なんの、ねだつて來たら返す分ぢや。晩に旨い物を澤山買うて。
ト此うちおたか、淸見作作、その外浪人四人連れにて出る。
たか　もう爰でござります。

伴作　これはよい所でござる。
たか　ハイ、今歸りました。
與五　嬶、戻つたか。
乙女　其方が遲いに依つて、明日の神事の事を云うて宿替へを斷わらんと、大抵やかましう云うて來たぞえ。
たか　早う戻らうと存じましたが、道で淸見伴作さまに逢ひまして、お供して歸りました。サア、お入りなされい。
乙女　これは〳〵伴作さま、皆樣も、ようお出でなされました。
伴作　前の所へ參りたれば、空家でござるゆゑ、これは何れへと存ずる所に、おたかどのに出合ひ、同道で參りました。
　トこれにて與五郎、ムッとする。
乙女　イヤモウ、急な事であつたゆゑ、お知らせ申す間もござりませなんだ。
伴作　なんの、お取込みでござらう。今日は歸りませう。
乙女　イヤモ、追ッつけ歸られます。稽古場は先へしつらはせ置きましてござります。マア、奥でお待ち下さりませ。
伴作　然らば左やう致しませう。

與五　嬶よ〳〵。用がある。爰へ來い。
たか　また阿房な事ぢやないかえ。
與五　夫が呼ぶに、詞を背くか。アノ不心中者めが。
たか　ホヽヽ。こりやこな樣が道理ぢや。サア、來たが何の用ぢやえ。
與五　そちや何の年ぢやと思ふ。
たか　また埒もない事を云ふのかいな。わしは酉の年ぢや。
與五　サア、其方は酉の年の酉の刻、酉の日に生れた女。身共も酉の年酉の刻酉の日に生れた男。その酉と酉とが女夫になつたは、比翼連理の鳥追ひ萬歲、大黑舞ぢやぞよ。
　トおたか大笑ひして
たか　ホヽヽヽ。その女夫が、なんとしたぞいなう。
與五　おのれは身共が女房でないか。その女房の身を以て、あれに居らるゝ伴作どのと、連れ立つて戻つたには仔細があらう。重ねて置いて六つにする。それへ直れ。
たか　そりや何を云はしやんすぞいな。
與五　ヤア、白々しい、あらがふまい。既に以て唐の鯉の瀧昇りには、よほ〳〵と云うて上がる。ましておのれは、

あの伴作めに、によぼ〳〵と云うて上がらしたに違ひない。サ、眞直ぐに白狀せい。

ト　おたか大きに笑ふ。

おのれ、二世と連れ添ふ夫の云ふ事を笑ふは、さては嘲弄するな。百年目ぢや。エヽ、口惜しい。

ト泣く。

たか　コレ、嗜なまんせ。お家樣は大事ないが、皆樣が聞いておやわいな。

與五　その皆樣と嬢らしう樣づけが、猶氣に食はんわい。

ト泣く。

たか　これは情ない。

伴作　イヤ〳〵、これは與五郎が尤もぢや。

たか　聞いておくれなされ。他愛はござりません。

伴作　イヤ、こりや拙者が詫び事いたさう。ナニ與五郎、段々おてまへが尤もぢや。おたか女郎と連れ立つて戻つたに依つて、疑ひもあらうが、全くさう云ふ事はない。腹が立たば料簡してくりやれ。武士が手を突いて詫びを致す。

乙女　申し、其やうに仰しやると、附けあがりが致します。

たか　お前もマア、お嗜なみなされませ。

伴作　サア、ようござる……どうぞ料簡してくれまいか。武士が手を突いて詫びるを、

與五　料簡しにくい所なれど、武士が手を突いて詫びるを、聞入れぬは神明への恐れ、不信の至り。

伴作　オヽ、さうとも〳〵。

與五　侍ひ、首代おこせ。

伴作　ヤ。

與五　密夫のお定まり、三匁かんなしにおこすか。返答はなんと。

ト皆々笑ふ。

伴作　成る程〳〵。三匁でも、四匁でも、其方が氣に入る程遣るわいやい。

與五　下さんすか。

伴作　遣るとも〳〵。

與五　そんなら幾日なと貸しませう。

伴作　ハヽヽ。氣輕い者ぢや。

乙女　おたか。皆樣を案内申しや。

たか　畏まりました。サア、こちの人、こなたもござれ。

與五　エヽ、立ち憎い場所なれども、煤掃きで草臥れた。奥に行て、ちつと休まう。

ト唄になり、伴作、浪人四人、與五郎、おたか入る。

乙女殘り

乙女　あれにかゝると人樣の手前、大抵氣の毒な事ぢや。これは又、こちの人は何して居やしやんす。遲い事ではあるわいな。

ト此うち勝家、見空、橋がゝりより出る。

勝家　コレ、太夫、行く先も知れぬに、其やうに早う行きやんな。

見空　何云はしやんすやら。お前こそお姫樣と別れてから、跡へ心が殘るやら、歩かしやんす事ぢやない。

勝家　何云やるぞいの。さうしてマア、どこへ行くのぢや。

見空　サイナ、この三保の浦には、知つての通り、白了と云ふ父樣がござんす依つて、尋ねたれば、宿替へしたと所の人に敎へてもらうたが、慥かに爰でござんせう。

勝家　ちよつと訪うて見や。

見空　ちつと物が尋ねたうござんす。白了さまは內方でござんすかえ。

乙女　アイ、爰ぢやが、どこからござんした。

見空　申し、爰ぢやといな。

勝家　爰か。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。

ト兩人は乙女を見て

見空　ヤア、お前は姉樣。

乙女　妹か。

勝家　乙女かいな。

乙女　殿樣でござりますか。

見空　ても、よい所で尋ね當てた。

ト此うち乙女、思ひ入りあり、表を締め

乙女　お國の樣子承りました。いかい御苦勞をなされますな。

見空　姉樣、樣子聞かさんしたら、云ふに及ばぬ。殿樣のお身の上、よろしうお賴み申します。

乙女　右近之助さま、私しが先祖は羽衣の家、天下の重寶になりましたる緣で、あなたの親御政基さまのお執成しにて、親白了はこの駿河の國で、領地を貰うて家來も同然。お家の騷動承りまして、直ぐに都へ上らうと存じたれど、父樣はいつぞやより都へ上り、今に歸られませぬゆゑ、私しはこの國の所より離れませず、悔んでばつかり居りましたに、ようマアお出でなされましたな。

勝家　大切な寶を紛失の科、何卒尋ね出さんと、月日を送りさまよふうち、賴みに思ふは其方ばかり、よいやうに

賴むぞよ。
乙女　お氣遣ひなされますな。お主といひ、妹の緣もござれば、一方ならぬその上に、夫も元は都の武士、頼もしい人。打明けてお身の上を申したら、寶の詮議も致されませう。
勝家　して、都方では御亭主は、何と云ふ人ぢや。
乙女　名はとくと承りませぬが、山名細川には、御恩があると申して居られました。あなた方の事を、折には申し出して居られました。
二人　オヽ、嬉しや〳〵。
乙女　イヤ、モウ、お前方の詮議に、爰まで配符が廻つてござります。
二人　エヽ。
ト悄りする。
乙女　お匿まひ申すからは、氣遣ひなされますな。幸ひの中二階。妹、殿樣のお供して、あそこへ行て居や。
見空　さう致しませう。
勝家　兎角、よいやうに賴むぞや。
乙女　マア、お出でなされませ。
見空　殿樣、ござんせ。

ト兩人、中二階へ上がる。
乙女　必らず人に見られぬやうに……ア、おいとしや、お身の放埒とは云ひながら、いかい苦勞を遊ばすな。夫が戻らんしたら、若殿樣の事を相談して、どうぞ密かな、隱れ所を拵らへたいものぢや。もう戻らしやりさうなものぢや。何をして居さんす事ぢやいな。
ト此うち赤子笛。ゆすぶり。
又、しゝかいな。ドリヤ、おむつを仕替へてやらう。
ト唄になり、乙女、奧へ入る。天津姫、橋がゝりより出る。
天津　此やうに尋ねても逢はぬは、どうでもわたしが否ぢやに依つて、突き放して行かしやんしたか。そりや胴慾ぢや。聞えませぬわいな。今頃は見空さまが可愛がられて、添うて居やしやんすであらう。エヽ、腹の立つ。例へこの身は朽ち果つるとも、命限り殿樣に逢はねば置かぬ。どこにどうしてござる事ぢやぞいな。
トいろ〳〵ある。フト家札を見て
しやかの巫子、黒格子のまん。ムウ、爰は巫子さうな。嬉しや爰な巫子どのに、見空さんと殿樣との生口を寄せてもらうて、行くへも知りたし、まツこと添うて下さん

せぬお心なら、その時死ぬる分の事。さうぢや〳〵……申し、お頼み申しませう。
ト與五郎出で
與五　手の隙がない。通れ〳〵。
天津　黒格子のおまんさまとは、爰でござりますかえ。
與五　イヽエ、そんな……ア、待つたり、聞いたやうな名ぢや。
トそつと表を覗いて
ヤアア、美しい振り袖がたつた一人。こりや好い金儲けぢや、……口寄せにごんしたか。
天津　アイ。
與五　そりやこそ金儲けぢや。
ト右の十二單衣を着て、綿帽子をかぶり、煤掃きの弓に襷張り、古い箱を出し、拵らへ置き、表を開けてまんに用とは、どなさんぢや。此方へ入らしやりませ。
天津　ヤレ〳〵嬉しや。
ト内へ入る。
與五　若い女中のたつた一人、口寄せにござつたは、母樣にでも離れたと云ふやうな事かいな。
天津　イエ〳〵、わたしは夫諸とも、家を出た者でござんすが、その夫が外に可愛がらしやんす女中がござんす。それと一つになつて、わたしを捨てゝ行かしやんした。その生口を寄せてもらうて、行くへも知りたし、又いよいよわたしに添うて下さんせぬかを、聞かうと思うて。
與五　ムウ、生口でござんすか。寄せて進ぜうとも。捨てられて、さぞ力なうござんせうな。
天津　推量して下さんせ。
ト泣く。
與五　そして、その女子は、こなはんの爲には、祖父樣か婆樣か。
天津　イエ、なんでもござんせぬ。傾城ぢやわいな。
與五　オヽ、寄せて進ぜうぢやが、神下ろしをせねばならぬ。錢百出さんせ。
天津　イヽエ、おあしは持ち合して居りませぬ。
與五　ヤア、錢が無いか。なんの事ぢや。無駄骨折らした。錢無しで、生口が寄せられるものか。早う去なんせ。アヽ忌々しい。
天津　サイナ、おあしはなけれど、爰にちつと持ち合せがござんす。これで大事なきや、どうぞ頼みますわいな。
ト香包みを出す。

與五　ハン、阿房らしい。煙草や藥で
　ト明けて見て
ヤア、こりや一分ぢや。
天津　それでも大事なか、どうぞ寄せて下さんせ。
與九　ホヽヽ、寄せいでなんとせうぞいなア。
天津　忝なうござんす。
　ト此うち與五郎、神下ろし、咳ばらひを幾つもする。
與五　天淸淨、地淸淨、内外淸淨、六根淸淨……天淸淨とは酒を飲む獸物の事、地淸淨とは猩々の赤うなつた事。内外淸淨とは、女房の腰湯した事。日本國の神々を驚ろかせ奉り、梓に下ろし寄せ申す……、寄せや寄れ寄れ小店の女郎……外宮は四十末社、内宮は八十末社、合して二四が百二十、末社の中にも尊き御神は、雨の宮、風の宮、月よみ日よみ、猿松は山王權現、熊野は三莊太夫、濡れ手で粟に一の宮、六つ合せば七つびり、四九と張りや八幡、吉野に藏王彌勒は笑ひ、加茂の入れ首、愛宕にや地藏菩薩、嵯峨には松茸、いきりきつて、駿河の羽衣明神。近江に尻鬚大明神、閻魔大王三途川のお婆、達磨の目の玉、鰡の臼の目、弘法大師、父を尋ねて高野へ登る。高野とはどうやら佛臭いやうなが、爰にも神が有るわいの。何れも神が寄つたぞえ……、神達が寄り合うて、願人宿のやうに、梓の弓におだてられ、死んだ者かなんぞのやうに、おりや爰へ寄つたぞや。
天津　申し殿樣、わたしに、なに見落しがあつて、捨てゝ行かしやんした。
與五　なんの捨てる氣はなかつたれど、燒芋買うて居るうちに、はぐりやつたら、せうがないわいの。
天津　そんならお前は、わたしと傾城とは、どちらが可愛うござんすえ。
與五　ハテ知れた事。ずんばい桃のやうに、ずく／＼とはちくれてゐる其方、可愛うてなんとせう。
天津　イヽエ、そりや嘘ぢや。わたしを捨てゝ行かしやんしたは、傾城と添ふ邪魔になるに依つてゞござりませうがな。
與五　滅相な事云やる。傾城は傾城、其方は其方、わしぢやて、二人の機嫌を取らうと思へば、よん所ない物が二本はなし、一方から片附けにや、喰ひがつゐがゆくわいの。
天津　ムウ、そんならどうでも、わたしは嫌ぢやな。これと云ふのも傾城づらゆゑ、腹が立つわいなう。

ト泣く。
與五　おれも立つから起つた事ぢや。
天津　どうでも女夫になります。否と云はんすと、爰で死にますぞえ。
ト懐劍出す。
與五　ア、コレ、滅相な。
天津　そんなら添うて下さんすか。
與五　添ふ〳〵。添ふわいの。
ト節附けて云ふ。
天津　誠添はしやんすなら、傾城を思ひ切つたと云ふ、心中を見せて下さんせ。
與五　心中が見せたいけれど、今年は首締めばかりぢや。又よい心中があつたら見せう。
天津　イヽヤ、今爰で心中に、傾城と二人の仲の、起證を燒いて見さんせ。
與五　サア、起證を燒くは燒くが、今は持ち合せがない。明日は唐辛子醬油で、燒いて見せうわいの。
天津　そんなら、いま死にます。
與五　爰ではゆかぬに依つて、コリヤ、肩替へて、もう去ぬるぞや。

天津　イヤ〳〵、なんぼでも去なす事はなりませぬ。
與五　イヤモ、腰が張つて來た。去ぬるわいなう。
天津　是非去なうと云はしやんすと、死ぬるぞえ。
與五　ア、コレ〳〵、そんなら傾城と入れ替ろ。
天津　イヤ〳〵、死ぬる〳〵。
與五　ハア〳〵、もう入れ變つた。いま顯はれて出たは傾城ぢやぞ。なんで起證を燒けと云やる。
天津　エヽ、聞えぬ。其方ゆゑに殿樣に、見捨てられたわいな。
與五　それでも、わしや味がよいやら、殿樣に氣に入り、其方は生れ付いた味ぢやと、思ひ切つて堪忍して、生口を早う休ませて下されいなう。
天津　サア、殿樣を、わしにたもるか。
與五　遣る〳〵。なんぼでも遣るわいなう。
天津　サア、そんなら證據に起證おこしや。
與五　遣りたいけれど、今は切れた。
天津　その緣を切つたは其方ゆゑぢや。サア死ぬる。
與五　ア、コレ。
天津　起證を出すか。
與五　もう皆、去んだ〳〵。

天津　わしや死ぬる。

與五　アレイ〳〵。

ト姫、附け廻す。與五郎、二階へ逃げ込まうとする。勝家、見空、出で、姫と顔見合つて悧り

天津　ヤア、殿樣か。

勝家　姫か。

見空　與五郎どの。

天津　逢ひたかつたわいなう。

ト勝家に抱きつき、見空、ピンとする。與五郎、膽を潰す。

與五　そんならこれがお姫樣か。これはしたり。

天津　殿樣、お前は聞えませぬ。これ程までに慕ふわたしを、振り捨てゝ行かしやんす。そりやお胴慾ぢやお胴慾ぢや。

勝家　なんの其方を捨てうぞ。都の追手ゆゑ、思はず其方を見失ひ、今頃はどこにどうして居やるぞと、案じてばかり居たわいな。

天津　さう云ふお心なら、どのやうな憂き難儀もいとやせん。必らず女夫ぢやぞえ。

勝家　其方を退けて、誰れと女夫にならうぞ。

天津　エヽ、嬉しうござんす。

ト抱きつく。見空、姫を引退け、勝家が胸づくしを取る。

見空　殿樣、お前は今も今とて、二階で何と云はしやんした。われを退けて、外に可愛い者はない、おれが女房は其方一人ぢやと云うて置いて、お姫樣を捕へて、其方より外に女房はないとは、なんの事ぢやいな。

ト振り廻す。

與五　行司、廻つて廻つて。

勝家　わが身に云うたは、嘘ぢやないわいの。あゝ云はねば、この場が濟まぬ。

見空　嘘つかしやんしたら、聞く事ぢやござんせぬ。

勝家　なんの、わが身に嘘をつくぞいな。

ト姫、勝家の胸倉を取る。

與五　相撲が高い。折れ合はう〳〵。

ト鉢卷して、箒を腰に差して騷ぐ。

天津　殿樣、わたしに今云はしやんした事は嘘かえ。

勝家　なんの嘘をつかうぞいな。

天津　嘘でなくば、見空どのと緣切つて下さんせ。

勝家　サア、それは。

天津　さうなけりや、開かぬ〳〵。
見空　千も萬もない、お姫様と今爰で、緣切つて下さんせ。
天津　殿様、死にますぞえ。
ト懐劍を出す。
與五　待つたかしよ。
ト箒で、押へる。
見空　殿様、死にますぞえ。
ト懐劍出す。
與五　どちらも待つたり。
トとめる。
天津　サア、死なうか。
見空　緣切らしやんすか。
兩人　サア〳〵〳〵、どうでござんす。
ト此うちおたか出て
たか　ヤア、殿様、お姫様、見空さま。
與五　嬶か。よい所へ來てくれた。おれ一人で、根が盡きる。とめい〳〵。
たか　合點でござんす。
與五　コレ、お二人とも悪い吞み込みぢや。お前方を片一方添や、片一方が捨てらるると思はんすが間違ひぢや。二人ながら女房ぢや。ハテ、汁ばかりで飯が食へず、飯ばかりでは咽喉が詰まる。三十日を十五日づゝ分つて、二人して可愛がつたがよいわいな。
たか　それに日蔭の殿様に、悋氣いさかひは、あなたにお笑止。二人しておいとしほがりなされいな。
兩人　そんなら二人ともに、添うて下さんすか。
勝家　添はいで、何とせうぞいな。
天津　そんなら今から
見空　仲ようして
二人　いとしがらうわいな。
ト抱きつく。
與五　エヽ、うまい事ぢやな。
トおたかに抱きつく。
たか　何さんすぞいな。
ト突き飛ばす。
勝家　して、與五郎、おたかわが身達は、どうして爰に居やる。
たか　あなた方も、どうしてお出でなされました。
見空　爰はわたしが父様の内ぢやわいな。
たか　これはしたり、申し、爰の主は桂左衛門さまでござ

りますわいな。

三人　ヤア、。

ト此うち白妙、駕籠に乘つて出る。駕籠より出て

白妙　駕籠代は渡したぞえ。

駕舁　ハイ〳〵、慥かに受取りました。お靜かにお出でなされませ。

ト入る。

白妙　お賴み申しませう。

與五　今日ほど、よう賴みませうの來る日はない。

たか　マア、お忍びなされませ。

トおたか三人を連れ、二階へ上がる。

白妙　お賴み申しませう。

與五　誰れぢや。もうしまひぢや。

白妙　イヤ、白了さまとは爰でござりますかえ。

與五　ハテ、爰は巫子ぢやないと云ふに。

白妙　イヤ、ちつとお尋ね申したい事があつて

ト云ひ〳〵入る。顏見合せ

そちや、與五郎ぢやないか。

與五　ヤア、お家樣か……逢ひたうござりましたわいな。

ト泣く。

白妙　ほんにマア、不思議な所で逢うたな。

與五　お前が去られさつしやりましてから、旦那に附き歩いて、國を出ましてからも、このお家樣は、どこにどうしてござるぞ。旦那に去られて、さぞひだるからう。蟲がかぶるであらうと、夜さり婢と一緒に寄りや、その事を云ひ出して、泣いてばかり居りました。定めて憎い奴ぢや、おれがあれ程可愛がるに、旦那にばかり附き歩いて、おれを構ひ居らぬと思はしやらうが、知つての通り、わたしが親與五兵衞は、伏見の深草で人に切られて相果てました。名も顏も知らぬ、雲摑むやうな敵を、旦那樣が氣遣ひすな、おれが力となつて敵を討たしてやらう。と、賴もしう云うて下さるが嬉しさ、親への孝行ゆゑ、水臭い所は堪忍して下さりませ。よう健で居て下さりましたな。

白妙　飽きも飽かれもせぬ仲を、去られたは徒らでもあつたかと、其方衆の手前も恥かしいが、別れねばならぬ義理となつたは、この身の因果。

ト泣く。

與五　そして見りや、派手な衣裳を着て、屋敷にござつた時とは、髮の風も伊達になつたぞえ。

白妙　伊達な筈ぢや。廓で勤めする傾城になつたわいな。
與五　お家様、そんなら去られてひだるい依つて、傾城にならんしたか。
白妙　其方までが其やうに思ふかいな。
　ト泣く。
若殿様が廓へお通ひなされた揚げ代の代り、桶伏せにせうと云ふが悲しさ。千方盡きて揚げ代の代りに勤め奉公。忠義に肌は穢せども、心は夫の女房ぢや。なんのさもしい心を下げうぞ。それに其方までが徒らで、傾城になつたかとは、そりやあんまり胴慾ぢや。
　ト大泣き
與五　ワア、、。
　ト泣き出し
堪えて下され。お前に限つて、よもやとは思へども、この身の近がつゑに引比べて、ひよんな事申しました。堪忍して下さりませ。
白妙　大事に思やるからぢや。疑ひ晴れたかや。
與五　晴れましてござります。
白妙　今のやうに云うたは、わしが悪かつた。
與五　イ、エ、疑うたは、わたしが悪かつた。
白妙　イ、ヤわしが。
二人　悪かつた〳〵。
　ト大泣き。
白妙　辛い勤めの中にも、夫の事を忘れぬと云ふ、わたしが心の誠、これを見てたも。
　ト帳を出す。
與五　こりや、なんでござります。
白妙　サイナ、幾夜さか替る客の数、幾日はどうして勤めした。斯うした事で身を穢したと、心覚えのわたしが日記。それが夫への面晴れぢやわいな。
與五　てもマア、帳に、よう書いて置かんしたな。
　ト帳を開け
ハア、日書きの下にあるはなんぢや。朔日より八日まで巾着なし。この巾着とはなんの事ぢやえ。
白妙　廓で客を巾着と云ふわいの。それは、わたしが身を我が手に買うて、身上がりした日ぢやわいな。
與五　ハヽン、客なしに身上がりぢやに依つて、巾着なし
　ト白妙が顔見て
いろ〳〵の唐言を覚えさんしたな。
　トちよと泣き

なんぢや、九日ほがらかとは、なんの事ぢやえ。
白妙　そのほがらかとは、揚げ捨てにして置いて、來なんだ阿房な事を、ほがらかと云ふわいな。
與五　エヽ、大氣な奴ぢやな。なんぢや。十日ほがらか。十一日ほがらか。此方、えい禁と見えるわい。十二日うがち……うがちとはなんぢやえ。
白妙　それは女郎の張りの強いを、うがちと云ふわいの。その日は揚げた客を、振つて戻つた日ぢやわいな。
與五　なんぢや、十三日うがち、十四日うがち。エヽ、腹を立て居つたであらうな。十五日結構天道樣。こりや、なんぢやえ。
白妙　それは客かきつう喜ぶを、天道樣、と云ふわいな。
與五　ハア、上のないと云ふ心ぢやな。その天道樣、をなぜに書いてあるえ。
白妙　サアそれは、どうもならぬ義理合ひになつて、その夜はつい
與五　つい
白妙　帶解いて
與五　ハアヽ、結構天道樣ぢやな。
白妙　恥かしいわいな。

ト泣く。
與五　なんの恥かしい事がござんすぞいな。勤めするからは天道樣も有りうちぢや。十六日結構天道樣、十七日結構天道樣。十八日結構天道樣。これは如何な事。十九日結構お月樣とは、なんの事ぢや。
白妙　ハテ、もう問はずともよいわいの。
與五　イエノヽ、聞かねば氣が濟まぬ。なんでござりますえ。
白妙　そのお月樣は、初手の天道樣ぢやわいな。
與五　サア、天道樣が隱居さしやつたか、お月樣は聞えてあるわいな。
白妙　サア、どうもならぬ品で、初夜時分から寢間に入り、酒には醉うて居るし、それなりに寢入つたら、惡洒落な客で、わしが寢た間に。
與五　寢た間に。
白妙　又。
與五　エヽ、蒸し返した天道樣ぢやな。ても、根の強い客めぢやな。お主ゆゑとは云ひながら、御苦勞をなされますな。
白妙　忠義ゆゑにする勤め。なんのいとひがあらうぞいな

う。

ト泣く。

與五　時にお家樣、喜ばんせ。若殿もお姬樣も傾城も、今日爰へ來たわいな。

ト乙女出て、蔭聞きして居る。

白妙　ヤア、、それはほんかいなア。早うお目にかゝりたい。

與五　逢はそ〳〵。たつた今。

ト思案して

イヤ〳〵、お前は爰に置かれぬわいな。ちやつと去なんせ〳〵。

白妙　そりや又なぜに。

與五　コレ爰は、旦那樣の內ぢや。

白妙　ヤア。

與五　今は白了と云うて、爰な入り聟ぢや。嬶の名は乙女と云うて、この間、子が出來たが、又その嬶の悋氣深さ、しつこさと云ふものは、モウ、ほうかまち云はしてこましだい依つて、お前が爰に居やしやつたら、あの嬶めが、それこそモウかぶりつかうも知れぬ。また旦那に逢はんしても、去つた所へなんでうせたと突き出したり、どづいたりするを見るやうな依つて、今のうちに去んで下さんせ。

ト白妙思案して

白妙　爰が夫の內なら、皆樣を爰には置かれぬ。して、お三人は、どこにござる。

與五　あの中二階に。

白妙　ナニ、中二階。

ト行かうとする。向うへ乙女、立ちふさがる。

乙五　ソリヤこそ出たぞ。

白妙　こな樣は誰れぢや。

ト乙女。

乙女　わしやこの家の主、白了どのと、子まである女房。

白妙　わしや、爰の主の前の女房。

乙女　何にもせよ、去られた男の內へ、ずる〳〵と來るのぢやない。早う去なしやんせ。

白妙　居いと云うても爰には居ぬ。

ト二階へ行かうとする。

乙女　コリヤ、どこへ行くのぢや。

白妙　お三人のお供して去ぬ。そこ退きや。

ト立廻り

乙女　大事の御主人、渡す事はならぬ。
白妙　其方がお主なら此方もお主、お供して立退くのぢや。
乙女　夫も元は家來筋、夫婦の者が命に替へて、お匿まひ申すのぢや。こな樣は去られて赤の他人、夫の留守にえ匿まひとげず、渡したと云うては夫へ立たぬ。
白妙　サア、その御家來筋の内ゆゑ、置く事は猶ならぬ。邪魔しやると、爲にならぬぞ。
ト此うち乙女、刀掛けの脇差を取る。
乙女　身こそ駿河の乙女子なれ。夫に連れ添へば武士の女房、命二つあらば、連れまして去んだがよい。
ト白妙、刀掛けの刀を取り
白妙　金輪奈落までお供して去ぬる。命あるうち、キリキリ渡しや。
乙女　指さゝす事もならぬが、見事連れて去にやるか。
白妙　連れて行くが、留めて見やるか。
乙女　連れて行けよ。
白妙　連れて行く。
乙女　どうして。
白妙　斯うして。
ト拔き合し、立廻りいろ／＼あり、與五郎とめるうち

二階より勝家、天津姫、見室、おたか出で、兩人を引分け、見得よく留める。
たか　マア、お待ちなされませいな。
皆々　マア／＼、待つた／＼。
乙女　お前方を渡しては、わたしが夫へ立ちませぬ、お退きなされませ。
勝家　して白妙、わが身は何ゆゑ、連れて退かうと云やる。
たか　申しお家樣、お氣遣ひなされますな。爰は桂左衞門さまの内でござりますわいな。
白妙　サア、その夫の内ぢやよつて、置きます事がならぬわいな。
勝家　忠義金鐵の桂左衞門が内に、置かれぬとは。
白妙　サアどうも、その譯は申されませぬ。
ト此うち與五郎、白妙が胸倉を引取り廻し
與五　玆などう畜生め。
ト白妙、思ひ入れあつて
白妙　何ゆゑ、わしを畜生と云やる。
與五　エヽ、こなたはなア。こなたが去られさつしやつたを、こちら夫婦は、どうぞ再び元のやうに、女夫にならしやるやうにと、祈らぬ神佛もござらぬわいの。それに

旦那どのゝ内ぢやと聞いて、落ちつからとはせいで、あなた方を置く事はならぬと、無理に連れて去なうと云はんすは、こりや勤めをするうち、外に男が出來て、若殿樣を引摺り出して、その男に渡して褒美を取らうと云ふ事か。道理で先刻に、天道樣が續いたと思うた事ぢや。それぢやに依つて、畜生と云うたが誤まりか。アノ茲などう畜生め。

たか あなたに限つて、なんのマア。

與五 構ひくさんな。構ふとおのれも去つてしまふぞ。

白妙 情ない事を云うてたもる。わしが心を知らぬかいなア。其やうに性根の下がる白妙ぢやと思ふか。覺えもない事、畜生と云はるゝ

ト乙女を見て

エヽ、口惜しいわいな。

ト泣く。

與五 口惜しくば旦那どのに、あなた方を預けられぬ譯を云はしやれ。

皆々 その譯は。

白妙 どうも、今は云はれぬわいな。

ト此うち白了、惣左衞門、橋がゝりより出で

惣左 即ちこれでござる。イザお通りなされませ。

ト此せりふのうち、勝家、姫、見空を長持へ入れる。

表は挨拶あつてズッと入り

先づ〳〵。

トこれにて白了、上座へ直る。

乙女 ヤア、お前は父樣か。

白了 娘、久しいなア。

ト此うち惣左衞門、白妙と、顏見合せ

惣左 そちや白妙、何用あつて爰へ參つた。

白妙 わしも足のある人間、爰へ來る事は法度かえ。

惣左 ハテ、それはマアよく來たな。

乙女 父樣、いつぞや妹に逢うて來うと、都へ上らしやんしてから、便りがなかつたが、見れば結構な形になつて戻らしやんしたな。

白了 成る程尤も。先つ頃都へ上り、娘に逢うてより、爰かしことさまよふうち、山名の出頭、村雲大學さまに御奉公申し、今にては高知を賜はり、この度御詮議の筋あつて、諸國に新關を据ゑ置かるゝ。即ち、その關所の切手燒印所を仰せ付けられ、斯くの仕合せ。この駿河の國にも關所を立て、即ち身が預かりの燒印の捺した切手を

改める。その次手、庄屋方にて、其方が事を尋ねしところ、これなる今の白了を入り聟して、爰に居る由。幸ひ聟どのを呼び遣はし、同道して罷り歸つた。其方も身の出世ぢや、喜べ〳〵。

乙女　そんならお前は、村雲大學どのに一味しやんしたか。

白了　なんと嬉しいか。

乙女　ハテナ。

白了　聟どの、庄屋方で申せし通り、大學さまの味方に相違ないか。

惣左　別心はござらぬ。殊に舅どのゝ仰せ、違背いたしませうやうはござらぬ。

白了　ムウ、それに相違なくば、山名勝家、天津姫、傾城見空、三人ともにこの國へ入込み居る由、搜し出して搦め捕つて、差上げてよからう。

惣左　委細、畏まりました。

乙女　コレ、こちの人、そりや何云はんす。お前、大學どのに與みしては。

惣左　何を其方が。大學さまに一味するに相違ござらぬ。

乙女　お前、兼ね〴〵云はんすは、京家の武士ぢやとの話し、なりや、勝家さまはお前の爲には、お主であらうがな

惣左　如何にも以前は主筋ぢや。

乙女　サア、そのお主の仇となる大學に與みし、勝家さまに敵對と云はんすは

惣左　子が可愛さ。

乙女　エ、。

惣左　如何にも古主なれど、所詮世に出ぬ主人に、べんべんとかゝつて居ては、可愛い坊主までが、一生浪人して暮らさにやならぬ。ハテ、名を取らうより、得を取れぢやわいなう。

乙女　そんならお前は眞實に。

惣左　子と云ふものは、不便な者ぢや。

乙女　ハア。

ト泣く。

白妙　お前ばかりは、大學どのに一味する人ではないが、こりやなんぞ、樣子のある事であらうな。

惣左　去つた女房に詞はない。出てうせう。

白了　いよ〳〵忠義を勵み召されい。

惣左　畏まつてござります。

ト此うち伴作、浪人を連れ出る。

伴作　白了さま、お出であられましたか。

白了　淸見伴作、して、樣子はなんと。
伴作　三人とも、この家へ參つたを、とくと見屆けましてござる。
白了　ソリヤ。
浪皆　やらぬぞ。
　ト惣左衞門を鐵砲にて取圍む。
惣左　待つた。こりや何ゆゑでござる。
白了　ヤア、知るまいと思ふか。身が今日爰へ參つたも、彼奴等を詮議の爲、勝家、天津姬、見空、この三保の浦へ入込みし樣子。所の者の訴へゆゑ、昔のゆかりを思ひ、娘が緣を知るべに尋ね來るは治定と、兵法の弟子と僞はり、それなる淸見伴作を入込ませ置いたところ、三人を匿まふからは、大學さまへ與みするとは僞はりゆゑ、飛び道具で取卷かした。
伴作　この間より弟子となつて入込みしは、白了どのゝ仰せ、遁がれぬ所ぢや。覺悟せい。
皆々　やらぬぞ。
惣左　待つた。以前は何にも致せ、いま改めてお味方申したからは、二心のある拙者でござらぬ。お疑ひが晴れずば、僅かなる茅屋、御詮議あつた上の事。

白了　面白い。然らば、家搜しするぞよ。
惣左　御念に及ばぬ事、先づ差當つてこの長持。
　ト蓋を明けうとする。立廻りあつて白妙、乙女、見事に上へ乘り
二人　この長持、明けさす事はならぬ。
惣左　家搜しせねば、お疑ひが晴れぬ。そこ退け。
乙女　この長持は明日の神事の道具。駿河舞ひの祭禮は、乙女子が預かりにて、天下の祭り、穢れ不淨の男の手をさゝす事ならぬ。天人の裝束、乙女がかけたその後は御勝手次第。外を詮議なされませ。
白了　不審の長持、見せねば曲者。
　ト立寄るを白妙、立廻りあつて留める。
山名宗全、謀叛の兆ありて、將軍を弑害せんと企みし科人。細川修理太夫は、重寶を盜まれ、その上、將軍の姬君を失ひし科にて、兩家ともに沒收せられ、宗全は腹切つて相果つる。細川政基は首打つて、六條河原で曝されたわやい。
皆々　ヤア、。
白了　村雲大學どのには、天津姬に心をかけ、何卒山名の家を押領せんと企めども、勝家養子に參つてより戀の叶

はぬゆゑ、某一味して、堤與五兵衞と云ふ浪人を語らひ勝家に證文書かせ、羽衣の盜賊にせんと思ふところ、追放の身となり、行くへ知れず。大學どのゝ戀の妨げ。首打つた姫を都へ連れ歸る。

惣左　して、その與五兵衞と申す者は、なんとなされた。

白了　後難を思ひ、身が手にかけて、ぶち放した。

與五　嬶よ。

たか　こちの人。

與五　嬉しや、敵が知れたぞ。

ト行かうとする。惣左衞門、二人を取つて引きつける。

惣左　コリヤ、早まるな、待て。

與五　旦那樣、年頃日頃、お前に賴んだ敵が知れました。ヤイ、蛇爺め、おのれが打つて立退いた、堤與五兵衞が悴、與五郞。

たか　女房、たか。

與五　サア、勝負ひろげ。

ト立たうとする。惣左衞門、引きつける。

白了　身を敵と覘ふ奴を、引込み置くは、いよ〳〵二心。ソリヤ。

浪皆　やらぬぞ。

惣左　待つた、麁相せまいぞ。知らぬうちは是非がない。男どのと知つては討たされぬ。オヽ、金輪際、討たしは仕らぬ。

與五　旦那どの、そりや何云はんす。お前、兼ね〳〵、氣遣ひすな、おれが尋ね出して、敵を討たしてやらうと、賴もしう請合うて下さりましたぢやないか。

惣左　如何にも、討たしてやらうと云うたが、ありや他人の事ぢや。大學どのに味方申せば、一方ならぬ男どの、家來のおのれに親を見替へやうか。

與五　それぢや、こなた、侍ひの詞が違ひますぞえ。

たか　約束變替へ常の習ひ。

惣左　ヱヽ、こなたはなア。

二人　ト此うち白了、與五郞が首筋取つて引きつけ

白了　ヤイ、うぢ蟲め。うぬ、見事この白了を、親の敵と云うて討つか。コリヤ、討つかいやい。

ト捻ぢつける。

日本國の新關の、燒印所となつた白了。うぬら風情の腕に合はうか。それを又、肩持ち立てする奴があると、忽ち鐵砲の風穴を開ける。うぬがやうな蛆蟲は、カウ〳〵。

ト捻ぢつけ、踏みつけ

アノ、大たわけめが。

ト蹴倒す。

與五　もう料簡が。

ト行かうとする。惣左衞門、與五郞、背打ちにする。

おたか、寄るを、伴作、引きつける。

惣左　ヤイ、大馬鹿め。飛び飛具で取卷かれたれば、うぬが討たうと云ふと、火蓋を切つてたつた一擊ち。すりやどこからどう廻つて、あの入れ物に中つて、誰れが死なうも知れぬ。

ト乙女、白妙、思ひ入れある。

これからは今までと違ひ、身が妨げして、敵を討たす事はならぬ。今まで主從となつたは、敵を討たうばかりと吐かす。もう主從の緣もこれぎり。腰膝が立つに依つて舅どのへ敵對。いつそうぬは、カウ〳〵。

ト背打ち。

この家に置く事はならぬ。

ト首筋持つて、表へ抛り出し

出てうせう。

與五　エ、、それは。

ト入らうとする。惣左衞門當てる。與五郞、ウンと反る。

惣左　なんと舅どの、これでお疑ひはござるまいがな。

白了　疑ひ晴れた。これから三人の奴等、入込みしとあるからは、キッと家搜しするぞよ。

惣左　御尤も。先づ暫らく奧へござりませう。

伴作　この長持が、どうでも。

白了　伴作、氣遣ひすな。例へこの家を逃げ走つても、所所に新關あつて、切手にこの燒印が据らねば、動く事はならぬ。なりや袋の鼠同然。家搜しについて詮議がある。娘、來い。

ト乙女を引立てる。

伴作　女、うぬにも詮議がある。うせう。

トおたかを引つけうとする。

たか　エ、、こな樣はなう。

ト立廻りにして、惣左衞門抱へ

惣左　なんにも吐かす事はない、奧へ來い。

白了　殘らず裏道を圍へ。

浪皆　ハア、。

惣左　先づ、ござりませう。

ト唄になり、この一件、皆々入る。あと合ひ方になる。與五郎、起きて、打ちなやされし思ひ入れ、いろいろあつて

與五　エヽ、旦那どの、聞えませぬ。この年頃、こなたに附き添ふも、どうぞこなたの刀で敵に巡り合ひ、本望遂げさしてもらはうばつかり。日頃頼もしう云うて置いて、今となつて討たさぬのみか、此やうにむごたらしう、ようぶたしやつたな。それが侍ひか。そりや犬ぢや、畜生め畜生め。

ト大泣き。白了出て、聞いて居る。

あの和郎が、あゝ云ひ出したら、もう敵討つ事はならぬ。今まで辛抱したも敵が討ちたさ。敵討たねば永らへて、なんの役に立たぬ裟婆ふさげ。父さん、もう敵が討たれぬに依つて、おりや死にまする。この世こそ不孝なれ、未來へ行たら、地獄の三升釜で飯も焚かうし、蓮の葉で味噌も買ひに行かうし、閻魔どのに足輕奉公して、樂々と養ひませうぞや。エヽ、刃物が無いわい。

ト立つて見て

アイタヽヽヽ。これはむごいなやしやうしをつた。所詮、おれが手にはよう死ぬまい。この三保の浦へ身を投げて、死んでこまそ。人の恨みがあるものか、ないものか。エヽ、口惜しいわい。

ト泣き入ると、唄になり、與五郎、肌を脱ぎ、襦袢の袖をちぎり、門の柱へ掛け、小指食ひ切り、書置を書く。

お家様、この書置はお前への置き土産。一片の回向を請けるはお前たつた一人。死んだ跡にて可愛やと、香花取つて下さりませ。旦那づらめ、おのれは勝手にしくされ。

トまた唄になり、これより、しなしなと肌を入れ、あたりの石を拾ひ、袖に入れ

もう、今がこの世の名殘。お家様、さらば。

ト橋がゝりへ入る。白了、見送り、長持へかゝらうとする。與バタバタとする。白了、走り入る。おたか、走り出で、表へ出る。

たか　與五郎どの、どこに居やしやる。與五郎どのの。

トいろいろ尋ねるこなしのうち、書置を見て

これはわたしが覺えのある、與五郎どのゝ片袖。

ト下ろし見て

書置の事、ヤア。

ト悄りして、いろいろ騒ぐ。

書置の事。一つ、旦那が敵を討たしてやらうと嘘だまし

て、そして、たんと〳〵叩かしやつたに依つて、無念で腹が立つさかいで、身を投げて死に申し候ふ。お家様、與五郎。ヤア、、、……そんなら今のを口惜しう思うて、身を投げて死ぬのかいな〳〵。

ト橋がゝへ行たり、向うへ行たり、いろ〳〵騒ぐ事ある。

エヽ、どこをせうどゝ……ソレ、三保の浦は、この裏通りが一筋通。さうぢや。

ト走り入る。あと謠になり

〽涙の露の玉かづら、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も目の前に見えて。

トこの謠のとまり、羽衣のめりやす。乙女、子を抱き出で、泣き〳〵

乙女　父様、如何にその身の榮耀がしたいとて、白了の家は先祖代々、御恩を請けし天下の家。その大恩を振り捨て、敵に一味、それに加はる夫の心、どうした天魔が魅入つたぞ。それも誰れゆゑ、坊、其方に迷うての事ぢやぞえ。子ゆゑの闇に惡事に與みし、主を殺さうと云はしやんすは、惡鬼とも魔王とも、譬へ難ない父様ぢやわいな。

ト泣く。

いま母が手にかけて、其方を殺すぞえ。其方さへ死にやれば、わたしも死ぬる。可愛い孫や我が子や、女房が死んだと聞いて、誠の心になつて下さんせ。其方を殺すは夫の爲。親孝行ぢや、死んでたもや。

ト泣き、懐劍出し

母が顔も、其方の顔も今が見納め。南無阿彌陀佛。

ト振り上げうとして、手を慄はし思ひ入れあるうち、赤子笛泣く。ちやつとゆすぶり

この可愛らしい顔を見て、現在、親の手にかけて、なんとマア殺されう。心は鬼になつても、エ、、、、。

ト泣き落す。隣り座敷にて

〽南無奇妙、月天子。

ト羽衣の謠、よき切りにて

時も時、折も折、隣りの稽古は、明日の神事の駿河舞ひ、あの謠を聞くにつけ、お家の御恩はそめいろの山。其方を殺さうと云ふ母が苦しみは、取りも直さず、天人の五衰。母が苦しみを、推量してたもいなう。

ト泣く。

〽或ひは天津御空の緑の衣、又は春立つ霞の衣、色香も

妙なる乙女の裳。

ト謠の切り、唄になり、乙女右の裝束を出し、キツと思ひ入れ。

オヽさうぢや。この羽衣を着て、天人の姿とならば、それに連れ添ふ夫もなし、下界に繋がる親もなし。其方の命、母は取らぬ。天帝の勅によつて、夫の惡事をしめす天女の裝束。さうぢや。

ト羽衣のめりやす。この間に天人の裝束を着て、天衣、天冠を着る事あるべし。

サア、今こそは白雲の袖ぞ妙なる母が姿。南無阿彌陀佛。

ト突かうとする。赤子笛泣く。其まゝ抱へて乳を飲ます。

オヽ、可愛い子を、誰れが〳〵。コレ、乳ぢや。なぜ飲みやらぬ。さては姿が變つたゆゑか。もう母が顏を見覺えたか。この賢い者を、可愛や〳〵〳〵。

ト大泣き。

へ浦風に棚引き〳〵三保の松原、浮島が雲の足高山や、富士の高根、微かになりて天津御空の、霞に紛れて失せにけり。

トこの謠の間、いろ〳〵仕打ちあるべし。

所詮この家では、心引かされて殺されぬ。さうぢや。

ト表へ出るところへ、村の者、與五郎が死骸、ずぶ濡れに藻をかづきたるを、戸板に乘せ、持つて出る。

村男　コレ〳〵、爰の與五郎が、三保の浦から身を投げて、死んだわいの。

乙女　ヤアヽ。

村男　引上げて見たれば、口をほんがり明けて居る。もう息絶え切つた。それでマア、内へ持つて來た。アヽ、えい人であつたが、可哀や〳〵。

ト皆々入る。跡にて乙女、死骸を見て、いろ〳〵あり、また書置を見て、愕りして

乙女　ヤア、さては年頃覗ひし親の敵、討たれぬやうになりしゆゑ、世を恨んで死んだか。可哀や〳〵。

トばた〳〵にて長持開くと、内より勝家、姫、見空、出る。

天津　コレ、申し殿樣〳〵。

ト勝家、狂氣の體。

勝家　ヤアなんぢや。親人は腹切つて死なしやつたか。兄貴は出奔、家は沒收。ハヽヽヽ、こりやをかしい。實の親も、養子親も、腹切つたか。獄門にかけい〳〵。連れ

立つて廓へ行かう。供せい、禿ども。引渡せ引渡せ。ハハ、、。

見空　さては兩家の騷動を聞かしやんして、お心が亂れたかいなア。

天津　お前がそゞろにならしやんして、わたしはなんと致しませう。

ト取りつくを、振り放し

勝家　イヤ〳〵、どうでも廓へ行く。放せ〳〵。

ト立廻りいろ〳〵あり、勝家、表へ出ようとする。

乙女　コレ、申し。

ト乙女、内へ入り、立ちふさがる。勝家、行かうとする。作作出る。

見空　コレ、待たしやんせ。

伴作　コリヤ待て。

天津　コレ、待つて。

ト珠數つなぎになり、白了、出て、姫が首筋を捕へる。

白了　コリヤ、待ち居らう。

ト引きつける。惣左衞門出て

惣左　さうはさゝぬ。

ト白了の首筋を捕へる。白妙出る。

白了　ソリヤ、伴作、ぶち放せ。

伴作　合點ぢや。

ト惣左衞門、伴作が鐵砲を叩き落す。勝家振り切る。伴作とめるを、見空、振り切り、勝家は入る。伴作、見空をとめる。姫振り切る。伴作、また姫をとめる。白妙振り切る。姫は入る。立廻りにて、白妙、走る。伴作、追ひかける。

乙女　コレ、こちの人、こな樣の惡事に與みした、その根を斷ち切るは、この子とわしが命。

ト子を刺して、自分も、腹へ突ッ込み、死ぬる。

惣左　南無三。

トゆるむ。白了、うぬと、外へ出ようとする。引きつけ、燒印を取る。

白了　それを。

ト立廻りにて當てる。白了こける。惣左衞門、乙女が側へ行き

惣左　大學に一味と云ふは、諸國の關所往來のこの燒印を取らう爲。身に大望ありて、爰かしこに姿をやつし、暫らく其方と語らうたも、足を止め、人數の手配り、愛憐に依つて悴を儲けたれば、大望成就の上、其方も悴も、

玉の輿に乘らんずものを、エヽ、果報拙ない坊主めぢや
な。

白了　燒印を奪ひ、人數を手配ると云ふからは、お尋ねの
謀叛人。マア、その燒印を。

トかゝるを外へ抛り出し、戸を閉める。

謀叛人の注進、さうぢや。

ト行かうとする。おたか、橋がゝりより戻り

たか　舅の敵。

ト立廻りにて留める。

白了　邪魔な女郎め、うぬ。

ト此うち與五郎、ヒラリと起きかへり、作作が落せし
鐵砲にて

與五　親の敵、思ひ知つたか。

ト白了の額へ打ちかける。蘇枋の額になり、こける。

たか　こちの人。

與五　旦那樣、嬶めに云うておこして下さつた通り致しま
して、親の敵を討ちました。エヽ、忝なうござります。

ト此うちに惣左衞門、火鉢にて、燒印燒く。

たか　サア、白了、覺悟せい。

ト此うち白了、起きて

白了　與五郎、うぬはくたばつたぢやないか。

與五　なんであらうと構ひくさんな。どたまめいで置いた
ら、氣遣ひのきの字もない。

白了　返り討ちや、覺悟せい。

トそれより三人、立廻りあつて、トゞ白了を殺す。

たか　舅の敵。

與五　父樣の敵。

ト止め刺す。

惣左　討ち負ふせたか。

與五　首尾よう討ち負ふせました。

惣左　コリヤ、早う勝家にぼッつけ。

與五　いま所々の新關、なか〱通られませぬ。

ト惣左衞門、燒印を戸へ落す。仕持けにて煙出る。

惣左　ソリヤ。

ト戸を切り破る。燒印の所、外へ落ちる。

兩人　これは。

惣左　關所往來の切手。

兩人　エヽ、忝ない。

ト頂く。

惣左　行け。

兩人　ハア。

ト走り入る。

幕

大切　大磯虎屋の場

役名——細川勝元。山名右近之助勝家。天津姫。傾城、見空。同、浮島。虎屋妙林。下郎、與五郎。同女房、おたか。奴、關内。仲居、おくら。同、おまん。同、おきし。いぜき大盡、萩坂喜三治。傾城、小櫻。同、入梅。赤松四郎高定。北川惣左衞門。

造り物、三間の間、奥より砂舞臺まで、一面の二重舞臺、向う、兩方、金襖、眞中に一間半の見事なる染め暖簾。下座、綺麗なる中二階、橋がゝり局格子。入り口にとらや、と云ふ掛け行燈、門口に注連飾り。年越しの體、舞臺先に紅梅の盛り。片脇に手水鉢直しあり、おくら、おまん、仲居の形にて火鉢にあたり居る。厄拂ひ大勢、行き違ふと、奥よりやかましう手を叩き、拳などして居る。

女二　アイ、、、、。

くら　なんとマア、入梅さんや、小櫻さんは、まだござんせぬかいな。

まん　先刻から、お客がやかましい依つて、おきしを呼びにやつたわいな。

くら　あのいらくらが呼びに行たら、堪るものぢやない。

ト奥より手を叩く。

兩人　アイ、、、。

くら　今夜の客ほど、よう呼ぶ奴はない。

まん　行きな／＼。

ト騷ぎ唄になり、向うより入梅、小櫻、傾城の形。おきし、赤前垂れにて出で、皆々内へ入る。

きし　なんと見やんしたか。わたしが引捕へて來たわいなア。

入梅　もつと早う來うと思うたれど、今日は年越しぢやに依つて、年を祝へと花形屋で、なんぼでも放さんせぬ。それで隙が入つたわいな。

小櫻　わたしも同じ事。

きし　わしが行かにや、まだ隙が入るのであつた。

小櫻　イヤモ、大抵やかましい事ぢやたい。
　ト奥より手を吊く。
皆々　アイ、、、、。
まし　行きなえ〳〵。
　ト奥より太鼓持ちの宗介、豆を囃し〳〵、出て
宗介　これは太夫様方、どうでござりまず。
入梅　遅う來た云ひ譯をして居るわいな。
宗介　イヤモ、お客よりは爰の婆めが、大抵の事ぢやない。
小櫻　また宗介さまが、妙林さまの事を譏らんす程にの。
宗介　イヤモ、爰の婆ほど、慾づらの引ッぱつた奴はない。
皆々　そりや、なぜに。
宗介　ハテ、虎屋妙林と云うては、凡て關東中にない大金持ちぢや。ほん藏へ燈明の上がると云ふは、爰の事ぢや。おいら、これ程の金持ちなら、大名貸しでもするのに、矢ッ張り揚屋とは、慾づらの婆めぢや。
きし　サレバイナ。今夜も云はしやんす事には、今日は大事の年越しぢやけれど、わいらに年を取らすと豆が入るに依つて、年を祝はずに置けと、云はしやんすわいな。
宗介　そしてアノ、爰な亭主の金助どのは、ありやマア、誰れへの養子ぢやと思はんす。
皆々　サア、つんと合點がゆかぬわいな。
宗介　そこが婆が慾づらぢや。金助どのが三百兩の敷金を持つて、雛路さまを連れて、養子にござつたのぢや。婆の氣では、その三百兩いたしめて、雛路さまも何もかも取込むつもり。そこで、名前もちやんと切りかへて、虎屋金助、婆は小判の脾胃虚煩らはにやよい。
入梅　それに又、雛路さまが勤めさんせぬは、どうぢやいな。
宗介　ハテ、ありや、金助どのが惚れて居やんすわいな。
まん　ほんにさうかいな。
宗介　あの雛路さまに、金助どのが惚れて居やしやるので、勤めはさゝず、三百兩と云ふ敷金を取つたれば、婆がよう云はぬ。こればかりが、ちとよい氣味ぢや。
　ト此うち妙林、婆の形にて聞いて居て、この時
皆々　よい氣味とは、誰れが事ぢや。
林々　エ。
　ト悔りする。
妙林　宗介どの、こなんは太鼓持ちの癖に、蔭口の惡い人ぢや。此方の内に、いかいこと金がありや、こなたの苦になるか。如何にも金助は、三百兩と云ふ敷金を持つて

來たに依つて、此方の息子にしたれば、縱な事横へも金助が心任せぢやに、こりや金の威德。金をなんとも思はぬ者は、行く末がようない。それぢやに依つて、こなんもいつまでもその態ぢや。

宗介　ハヽヽ、なんのお前を譏りませう。身上がようて、此やうにしてござる、金の冥加がよい。また、幸ひ旦那も金助さま、今日の年越しの御祝儀を祝はうと、話して居たのでござります。

妙林　イヽヤ、さうぢや無かつたぞえ。

皆々　イヱ／＼、さうでござんしたわいな。

妙林　ムウ、そんならよい。そして、おれを祝ふと云はしやつたが、なんぢや。

宗介　サア、なんでも年越しぢやよつて、コレ、この寶船を祝うて上げます。

妙林　こりや忝ない。なんでも、ぎゑんぢや。

宗介　サア、そのぎゑんを祝うて、厄拂ひませうかい。

皆々　こりや、よからうわいな。

妙林　そりや、ぎゑんがよい、さらば承らう。

宗介　やアらめでたいな、こなたの婆様の御壽、申さば、鶴はつんぼ、龜はがんち、東方朔ば金減らし、浦島太郎は頓死して、如何なる福の神が來るとも、この厄拂ひが脊に負ひ、疫病神はお婆の蹬へ、さらりしつかこう。

妙林　エヽ、ろくな事は吐かさぬがな。

ト箒を斜に構へる。

宗介　あの身振りは年越しの鬼ぢや。鬼は外／＼。

妙林　エヽ、おのれは／＼。

ト宗介を追ひかける。逃げ廻る。

皆々　もう、ようござんすわいな。

ト皆々とめる。橋がゝりより細川勝元、侍ひにて出る。闇内、奴にて供して出る。入り口にて宗介、勝元が羽織の下へ屈む。

妙林　おのれを。

ト勝元を見て

これは、どれからお出でなされました。

勝元　イヤ、身共は北國の者ぢやが、この國に逗留いたすゆゑ、保養の爲に氣晴らしに參つた。虎屋と云ふは爰かの。

妙林　ヘイ、さてはお大盡樣。ヤレ／＼、マアようお出でなされましたな。わたしが所は、虎屋金助と申します。マア、お入りなされませ。

勝元　通つても苦しうないか。
ト内へ入る。

妙林　苦しうあるのないのと、云ふやうな御仁體ではござりませぬ。コリヤ、おきし、おまん、お盆持つて來い。マア、お火鉢を出せやい。宗介さま、お伽申さんせ。入梅さまや小櫻さま、借りませうぞや。ヤレ、お茶上げませい。
トいろ〳〵やかましう云ふ。勝元、埃を拂ふ。

關内　さても〳〵、やかましい婆めぢや。コリヤ、旦那は御遊興にこそお出でなされ、聾になりにはお出でなされぬぞ。

勝元　イヤ、コリヤ〳〵、總體、廓と云ふものは、人の心を鬱症するほど、慰めとある。ナニ、これが太皷持ちと云ふのか。

妙林　左やうでござります。

勝元　これに居る二人も、遊女のうちか。

妙林　左やうでござります。

小櫻　さつても堅し。立派なお侍ひ樣ぢやが、これに居る二人も遊女のうちかとは、こりや、餘ッぽど揉み込まざなるまい。

入梅　ソレイナ。
きし　イヤ、申しお侍ひ樣、お前のお名はなんと申しますえ。

勝元　オヽ、身共は加賀越前の境、揚屋峠の孫嫡子。佐々良三八と云ふ者ぢや。

皆々　ハヽヽヽ。
ト大笑ひ。

關内　ヤイ、馬鹿め、旦那のお名を聞いて、滅多無性に笑ひ居るが、エヽ、こりや旦那を嘲弄しよるか。眞二つにするぞ。
ト反り打つ。

勝元　ヤイ〳〵、そりや何事ぢや。總體、廓と云ふものは、無禮不作法を構はす、有體に事を計るを樂しみとする。身が名を聞いて、おかしがるも尤もぢや。マアマア、控へてお居やれサ。

妙林　イヤ申し、人の名も多きに、揚屋峠の孫嫡子とは、どうした名でござんすえ。

皆々　ほんに、どうぢやえ。

勝元　これはだん〳〵樣子がある。身が故郷、加賀の國はづれに、揚屋山と云ふ山がある。その峠に佐々良三八と

て、代々身が領地がある。彼の山の神に先祖三八が逢はれて、疱瘡疫病の咒ひには、佐々良三八と云ふ名を書きつけ置けば、祟りなすまいと、契約したる佐々良三八孫嫡子、代々傳はるゆゑに、孫嫡子と云ふ。

妙林　それで、佐々良三八宿と書付けを貼り置きます。その三八さまでござりますかえ。

勝元　なんと、不思議な事か。

妙林　この頃、世間に疫病の咒ひぢやと云うて、キノ二ノヤノハノモノ船にて御契約の事、北川惣左衛門宿とある書付けを、どこにも貼りつけますが、それと同じやうな事でござりますかえ。

きし　わしや又、孫嫡子とは、飯を盛る杓子の事かと思うた。

皆々　わしもいな。ハヽヽヽ。

關内　これ程明りの立つ事を、笑ひ物にしをる。憎くい奴。

勝元　ハテサテ、何を腹立てる事がある。扣へてお居やれ。

關内　ネイ／＼。

妙林　そして、あなたは、お望みの太夫様でもござりますかえ。

勝元　イヤモ、さして望みと云ふ事もないが、この虎屋の浮島と云ふ太夫に逢ひたい。

皆々　アノ浮島さまをかえ。ハヽヽヽ。

ト皆々、大きに笑ふ。

關内　ヤイ／＼／＼、旦那がなんぞ仰しやると、げら／＼と笑ひ居るがな。

勝元　ハテサテ、又しても腹を立てる。マア／＼、控へて居らう。

關内　ネイ／＼。

妙林　イヤ申しお大盡様、ほんぽに、浮島をお望みでござりますかえ。

勝元　オヽ、聞き及んで參つた。どうぞ世話を頼むぞ。

小櫻　折角お出でなされたけれど、よしになされませいな。

勝元　よしにせいとは、日を付けねば、逢はれんと云ふやうな事かな。

まん　イヽエ、見せたら愛想が盡きるわいな。

妙林　ヤイ／＼、おのいら、そりや何吐かす。折角賣れかかつてあるを、金儲けの邪魔するのか。

宗介　イヤ申し、御存じないに浮島さまを突きつけるは、座頭に熱湯ぢや。とつくりと云うて聞かしまして、得心の上がよいわいな。

妙林　イカサマ、それもさうぢや。イヤ、申しお大臣樣、浮島はわたしが所の女郎で、器量押出しは頭拔けでござりますが、ちつと氣の毒は、一言も物云ふ事が、啞ごろでござります。それ御合點でお買ひなされて下さりませう。

關内　ヤイ、婆め、例へ啞ごろでも、旦那が買ふと仰しやるに、酢の蒟蒻のと吐かす。うぬ、いつそ、ぶち殺さうか。

勝元　これはしたり、又しても、控へぬかサ。

關内　ネイ〳〵。

勝元　成る程、啞ぢやと云ふ事も聞き及んだ。器量よく、物云ふ事のならぬとある。それを望みで參つた。

宗介　ヘイ、啞御合點でお出でなされましたか。

勝元　如何にも。

皆々　ても、物好きぢやな。

妙林　サア〳〵、物になつた。サア、早う浮島を呼んで來い。

きし　アイ〳〵。

ト向うへ入る。

勝元　して、その浮島は、幾つになるぞ。

妙林　年は十四。オヽ、それ〳〵、今夜は年越しで、十五でござりますけれども、年よりは大柄で、十七八のやうに見えまするて。

勝元　明けて十五。まるで十四。

小櫻　世上では、啞聾と云ふけれど、浮島さんは物云はしやんせぬばかりで、耳が聞えるに依つて、手習ひもさしやんす。書いて見せると、埒が明くわいな。

入梅　その癖器用で、大抵、心立ての好い子ぢやわいな。

勝元　さうあらう。すべて片輪と云ふものは、器用なものぢやて。

ト此うち、關内ムッとして

關内　これは又遲い事ぢや。何を隙入り居る。旦那を待ちぼうけに會はすかい。早く出せ〳〵。

勝元　ハテ、忙しない奴ではあるぞ。

關内　ネイ〳〵。

宗介　コレ、おくら、其方も追ひ迎ひに呼んでおぢや。

くら　アイ〳〵。

ト表へ出る。

アレ〳〵、あそこへ浮島さまが、見えるワ〳〵。

ト唄になり、向うより浮島、傾城の形。おきし、附き

出る。この間座敷、杯事あり
きし　サア〳〵、浮島さまがお出でたぞえ。
ト手を取つて勝元の側へ寄せる。
まん　申し、これが浮島さまでござります。
勝元　ハテサテ、浮島どのでござるの。其許のお名を承はり及んで、はる〳〵と貰ひに參つた。揚尾峠の孫嫡子、佐々良三八と申す者でござる程に、心措きなうしてくりやれ。
ト浮島、啞の身振りして、入梅に勝元はわしが客かと云ふこなし。
入梅　さうぢやわいな。
妙林　コレ、其方の大事のお客ぢや程に、隨分と可愛がられるやうにしや。
ト浮島、勝元に、わしを抱いて寢ろかと身振りする。
勝元　オヽ、執心に思うて尋ねて參つた。向後相方になるからは、マア、痃癖痳疹の氣遣ひはないぞや。
ト浮島、勤めする事は嫌ぢやと身振りして、さめ〴〵泣く。
勝元　オヽ、これは〳〵、愁傷の體か。アヽ、はる〴〵と尋ねて參つたが、それ程嬉しいか。嬉し涙か。道理々々。
ト浮島が脊中を撫る。矢張り泣いて居る。
これはどうぢやいやい。
妙林　又とこぼえるか。エヽ、おのれはマア。
ト叩かうとする。皆々とめて
小櫻　お客も爰にござんす。マア、よいわいな〳〵。
妙林　面妖、お客とさへ云へば、とこぼえる程にの。
勝元　初めて逢うた身共が、馴れ〳〵しう云ふゆゑ、否な事もあらう。身共さへ機嫌よう遊べばよい。其やうにやかましう云ふな。
妙林　イヤモ、あなたさへ御得心なれば、嬉しうござります。
關内　旦那の得心なされて居るを、又しても、邪魔入れる。もう堪忍ならぬぞ。
勝元　これはしたり、又かいやい。控へて居やうぞ。
關内　ネイ〳〵。
勝元　コレ浮島、初めての身共ゆゑ、嫌なと思ふも尤も。シタガ、君の名を聞き及んで、近附きになりに參つた。强ち戀するものでもない。酒の相手になつてもらひたい。近附きになれば、國への土産。座敷ばかりぢやと思うてたも。寢ようとは云はぬぞや。

ト脊中叩く。浮島、ニッコリと笑ひ、座敷ばかりで、寝るのぢやないかと云ふ思ひ入れ。
オヽ、さうぢや〳〵。勝手次第に遊ばすのぢやよ。
ト浮島、そんならいつまでも遊んでくれと云ふ身振りして、側へひつたりと寄る。
これ、見よ、この通りぢや。ハヽヽヽヽ。
皆々　さつてもきつい。
小櫻　年越しもあらうものぢや。斯う解けさんしたを見た事がない。
皆々　あなたはきつい、あやかり者ぢや。
關内　あれ程旦那のお氣に入るもの。既に叩かうとしをつた。憎い婆め。おのれ。
ト妙林、逃げる。
滕元　コリヤ、控へて居ぬか。
關内　ネイ〳〵。
妙林　爰は端近、奥の離れ座敷へお出でなされませ。
滕元　イカサマ、さう致さう。コリヤ、われは小座敷で休息せい。
關内　ネイ〳〵。
滕元　然らば案内しやれ。
妙林　畏まりました。
宗介　わたしも、お供いたさう。いざお客を召連れて、離れ座敷へ急がんと、先に進みし勢ひは、騒がしかりける。
ト入る。
滕元　ハテ、騒々しい男ぢや。
ト唄になり、滕元、浮島、妙林、入る。
關内　我れも小座敷へ行つて、酒でも打喰うて、ゆつくりと、足を伸ばして寝るべい。案内せい。
まん　なんとマア、先刻から見てゐれば、よう腹を立てる奴様ぢやわいな。
くら　ほんに、をかしい奴様ぢやな。
關内　こや此奴等、武士の家來を、をかしいとは、今一言吐かして見よ。手は見せぬぞ。
きし　それは思ひ違ひ。この廓では、お前のやうなよい男を、をかしいと云ふわいな。
關内　そりや又なぜに。
きし　ハテ、顔が美しいに依つて、女子の方からしいる。その顔を逆さまに讀んでをかと云ふ。をかでしいるに依つて、をかしいと云ふわいな。
關内　ムウ、そんなら顔ををかと云ふか。をかゞ美しいに

依つて、女子の方からしいる。をかでしいるに依つて、
をかしいと云ふのか。
まん　お前はきつい器量よしぢやな。
關内　へ、、、。ちつとをかしいばかりぢや。
入梅　ほんにをかしいな。
小櫻　大抵をかしい人さんぢやない。
關内　なんとをかしからうがな。
くら　わしやキッと、をかしいぞえ。
まん　わしらも、キッとをかしいぞえ。
皆々　をかしうて、どうにもならぬわいな。
關内　其やうにをかしがつてくれては、つんと、どうやら恥かしい。誰れぞ器量のよい者が、たつた一人をかしがつてくれい。
皆々　イ、エ、そりやならぬ。皆をかしいわいな。
關内　それでは、斟酌するわい。
きし　をかしがられるのは、あやかり者ぢや。
皆々　をかしう生れつかんした因果ぢやわいな。
關内　へエ、なんのそれ程にをかしうはあるまいて。
ト此うち、奥より手を叩く。
皆々　アイ、、。

ト皆々入る。
關内　こりやなんだ。雷の落ちたやうな。さうして皆どこへうせたぞ。コリヤ、もつとをかしがらぬかい。コリヤコリヤ。
ト云ひ〳〵入る。唄になり、勝家、與五郎、おたか出て
たか　お心持ちは慥かにござりますか。
勝家　オ、よいとも〳〵。とんと本性になつたわいの。
與五　爰は大磯と云ふ所の傾城屋でござります。爰でもお前樣をお大盡にして、幾日も〳〵居續けして、その間に御養生させまして、詰まらぬ時には、三人ともに駈落ちぢや。
たか　こりや出來た。こなさまの一生の智惠ぢや。
與五　これが今始まつた事かい。
たか　そんなら早う、内へ入りましたがよい。
與五　諸事胸にあり。
ト表より
賴もう。大盡ぢや。傾城を買ひに來たのぢや。大金持ちぢやが、誰れも來んかい。
トそろ〳〵内へ入る。

聾の寄合ひかい。爰は空家かい。大盡ぢやぞ〳〵。
ト見廻して
嬶、旦那を連れまして入れ。
たか　よいかえ。サア、お出でなされませ。
ト勝家を連れ入る。
勝家　大事ないかや。
與五　人ぎれは一人もない。此うちに、えい座敷へ入つて
居よう。
たか　さうさしやんせ。
與五　どうぞ食物を才覺したいものぢやが。
ト云ふうち、見空出て
見空　ヤア、殿様か。
勝家　オヽ、太夫か。
與高　これはしたり。
見空　よう來て下さんしたなア。
勝家　其方に別れてから、與五郎夫婦の世話となつて、病
氣も本腹したわいなう。シタガ其方は、どうして爰に居
やる。
見空　わたしも、方々さまよふうち、桂左衛門さまに逢う
て、いかいお世話になつてゐたところが、この家へ養子に
ござんして、今では名も金助さまと云うて、二人ながら
爰に居るわいな。
與五　嬶、聞いたか。
たか　わしや倒りしたわいな。
勝家　國を出てより十三年、お尋ね者になつて、身を隠し、
其方や姫にも別れ〳〵。ほんにマア、斯程までに、武運
盡き果てたか。
見空　お前も。
勝家　其方も。
二人　淺ましい身の上ぢやな。
ト泣く。此うち、いぜき大盡、奥より出で
いぜ　不義者め、動くな。
ト兩人を引きつける。
與五　とんぼ作め、こりやなんとしをるぞい。
いぜ　揚詰めして置いた身が、側に居らぬと思へば、コリ
ヤ、うぬ、間夫だな。
たか　氣相云はしやんな、あなた方は御夫婦ぢやぞ。聊示
せまいぞ。
與五　昔から女夫ぢやわい。
いぜ　女夫ぢやと吐かすが、さてはうぬらが取持つて、身

が揚げて置いた女郎を盗みひろぐか。
二人　イヤサ、それは。
いせ　それはとは、人に金を出さして、ぬつくりと巧い事ひろいだがよいか。これがよいか。
ト刀にて背打ちにすると、奥より惣左衛門、亭主の風にて、出で、いせきを見事に投げる。
奥五　サア、旦那どのぢや。〆めた〱。千人力ぢや。
ト嬉しがり、横鉢巻きをする。皆々喜ぶ。
いせ　ア痛々々々。何奴ぢや。
惣左　何奴でもない。虎屋金助と云ふ御亭主でえすわい。
ト煙草のみゐる。
いせ　ヤイ、その亭主が、ほんで客を投げたのぢや。
惣左　人が大事にかけて撫で擦る奉公人を、わりや又、なんで打擲する。
いせ　雛路は、おれが揚げてあるのに、あの男と不義を働らくに依つて。
惣左　馬鹿め、願の明くまゝに、ずぼ〱と、うぬらに揚げさしてよいものかい。
勝家　コレ、御亭主とやら。ひよんな所へ参りまして、迷惑いたします。
惣左　なんにも氣遣ひな事はない。
勝家　とは云ふものゝ、思ひも依らぬ所で、マア息才な。
惣左　ハテサテ、何にも云ふまいぞ。雛路は外に客がある。
いせ　ヤイ亭主、今夜は誰れが揚げぢやと思ふ。
惣左　おれが揚げぢや。
いせ　ヤ。
惣左　虎屋金助と云ふ親方の揚詰めぢや。雛路は、おれが惚れて居るに依つて、勤めもさゝず、おれが女房同然ぢや。おのれが揚げると云ふには、證據があるか。
いせ　證據と云ふは、この家の妙林サ。
惣左　妙林でも、梅林でも、旦那の女房に指さす奴があると、脛も足も、ぼつき〱とへし折るぞ。
いせ　イヤ、此奴、慮外な奴な。
ト此うち、妙林
妙林　オイ〱。そりや金助と談合して
ト云ひ〱出る。
こりヤ何事でござります。
いせ　コリや妙林、先達て揚げ代を渡した、身が揚げた雛路を、其奴が無體を云ふに依つての事サ。

妙林　お前の揚げの、雛路を何奴か。
　ト見て
　金助か。
惣左　母者人、この雛路は、おれが連れて來て女房にする筈ぢやに依つて、勤めはさゝぬと云うて居るを、どうして、あの猿松に揚げさしたのぢや。
妙林　なんの、おれが勤めをさささうぞいな。其方がどうなと心任せにしたがよい。
いぜ　ヤイ妙林、そりや何吐かす。先達て揚げ代を取つたでないか。
妙林　サア、お金は貰ひました。
いぜ　それに又。
妙林　サア、取つたは取つたけれど、この金助は三百兩と云ふ金を持つておぢやつたに依つて、どうなと云やる通りにせにやならぬ。
いぜ　どぎ／＼と何吐かすぞい。
妙林　どうなと相對なされませ。わたしは用がござります。
　ト入る。惣左衞門、いぜきが首筋取つて捻ぢつけ
惣左　おれが女房同然の太夫に指さして、うぬ、間夫ぢやぞよ。
いぜ　サア、それは。
惣左　うぬ、只は置かぬ、覺悟ひろげ。
いぜ　さう云や、うぬ。
　ト切りつける。ちよつと立廻りあつて、いぜきをさんざんに喰はし、首筋引ッ掴み、大小ともにグル／＼巻きにして
惣左　仕返しは濟んだ。とツとゝうせう。
　ト抛り出す。
いぜ　エ、うぬ。
惣左　用があるか。
いぜ　待つて居れよ。
　ト走り入る。
勝家　よい所へ、よう來てたもつたなう。
　トいろ／＼喜ぶ。惣左衞門、勝家、見空を、上座に直し、三方に豆入り桝と寶船と載せて傍に置き
惣左　除夜の御祝儀、お年をお取りなされませ。都よりあなた樣の御詮議が強うござれば、何卒お匿まひ申さんと存じ居るうち、見空どのに出合ひ、匿まひ置きましたも、あなたや姫君に巡り逢ふばかり、先づは、御安泰の樣子、珍重に存じます。ソレ、その三方の船の御徳、追ッつけ

寳も手に入りませう。お氣遣ひなされますな。

勝家　此やうに年を重ねても、寳の詮議の手がゝりもなし。どうで亡き身と思ひ暮らして居るわいなう。

見空　殿樣に久しう別れて居るうち、お姫樣とさぞ仲よう添はしやんしたであらうなア。

與五　お姫樣で、屈托でござります。

たか　お行くへが知れぬゆゑ、大抵の案じぢやござりませぬ。

勝家　ほんにマア、どこに居やる事やら。

見空　お行くへが知れぬかいな。

ト勝家、與五郎、おたか、投げ首。

惣左　お氣遣ひなされますな。姫君も追ッつけ尋ねて逢はしませう。其やうに氣を落してばかりござつては、御身の崩折れ。久しうお逢ひなされぬ依つて、積る話もござりませう。見空どのを連れて奥へござりませ。

見空　サア、殿さん、ござんせ。

勝家　何を面白さうに。

ト手を取る。

見空　わたしも、話したい事がある。久し振りぢやに依つていな。

ト勝家、思ひ入れして

勝家　でも。

ト惣左衛門に遠慮する。

惣左　ドリヤ、我れらは奥へ參らうか。……後にお目にかかりませう。

ト入る。

與五　エヽ、粹ぢやな。

たか　何を云はんすぞいな。

見空　あのやうに云はんすに、お前は否かえ。

勝家　否ぢやないけれど。

ト與五郎を見る。

與五　ヘヽヽ。

トあちら向く。

見空　サア、ござんせいな。

勝家　そんなら草臥れ休み、足でも撫つてもらはうワ。

ト勝家、見空入る。與五郎、俯向いて居て、頭を振つたり、いろ／＼の事して、おたかに抱きつく。

たか　オヽ、コレイナ、何ぢやいやい。何をさんすぞいの。

與五　嬶、もう行かしやつたか。

たか　アイナウ。

與五　エヽ、どうもならぬ。
たか　何がいな。
與五　今夜は桃の子さへ抱へてねると云ふに、今のを見てからと云ふものは、どうも堪へられぬ。この寶船のやう〳〵に、われが船へ乘るのぢや。
たか　オヽ、珍らしさうに、なんぢやぞいな。
與五　さうぢやて、この重荷がどうなるものぞ。そろ〳〵寶船へ積みかけう。船さん、ごんせ。
ト唄になり、寶船を持ち、おたかを連れ、奥へ入る。と奥バタ〳〵にて妙林、浮島を叩いて出る。小櫻、入梅、おくら、とめて出る。
妙林　放せ〳〵。
皆々　マア、ようござりますわいな、
妙林　寄つたら、おのれ等も蕭ざつぱくれるぞ。ヤイ女郎め。片輪の癖に、客と云ふとたゞえる。サア、勤めをするか、否なら叩き殺すぞ。
ト浮島、頭を振るゆゑ、さん〴〵喰はす。トヾ目を廻す。
皆々　ヤア、目が舞うたわいな。
妙林　大事ない。其方へ寄つて居れ。
ト火鉢にて火箸を燒き、
コリヤ、見たか。勤めを否と吐かすと、この鐵火をうぬが面へベタ〳〵ぢや。サア、どうぢや。
ト此うち浮島心づき、慄へて居る。
サア、怖くば勤めをするか。否ならこれで阿腹突き殺かうか。否か、應か。サア〳〵。
ト附け廻し
エヽ、面倒な。
ト當てうとする所へ、勝元出で、妙林の手を捻ぢ上げ、鐵火を當てる。
アツヽヽヽ……コレ、茲な人、奉公人の折檻するに、こりや、なんとするのぢや。
勝元　ハテ、そりや其方が召使ふ奉公人、身共が構ふ事はなけれども、この者には親兄弟もあらう、もし荒氣なう打ち杖が脈所へでも當り、相果てた時は、その縁類の者どもが、よも默つて居まい。そこを思うてコリヤ、其方が爲ぢや。
妙林　爲にしては熱い爲ぢや。コレ、彼奴は叩き殺しても大事ない。
勝元　とは又どうして。

妙林　あの女郎は、四つの年に傳兵衛と云ふ、肝煎りが連れて來てな、片輪者ゆゑ、値の廉いを得にして買うて置いた。その時、親判を尋ねたれば、兩親とも死んでしまうて、一家一門もない奴ぢやと云ふを呑み込み、纔禮ぐみに四つの年から買うて置いたところ、傳兵衛と云ふ者も死んでしまうた。すりや、叩き殺さうと尻の來ぬ奴ぢや。こなたの世話にならぬわいな。
勝元　すりや、四つの年から爰へ來て、親兄弟も無く、何國の者と云ふ事も知れぬか。
妙林　オヽ。
　ト勝元、思ひ入れあつて
勝元　それなれば、猶不便ぢや。妙林、この傾城、身請けせう。
妙林　エヽ。
勝元　浮島を身請けしてくれう。
妙林　それは忝なうござります。身請けなら三百兩は合點かえ。
勝元　オヽ、身の代は如何ほどでも遣はさう。
妙林　ハイ／＼、そんなら只今、お金を下さりませ。
勝元　成る程、手附けには、斯うと。

　ト妙林を散々打つ。惣左衛門出で、留めて
惣左　コリヤ、母者人を、なんとさんすぞ。
勝元　さう云ふ其方は何者ぢや。
惣左　アイ、この家の亭主、虎屋金助と云ふ男でえす。
勝元　ナニ、其方が虎屋金助とな。アノ其方が。
　ト顏を見て、
ムウ、成る程、虎屋金助、見知つた。定めて樣子を聞いたであらう。あの太夫を只今身請けする。なりや身共が妻の浮島を、打擲するゆゑ、仕返しするのぢや。
惣左　イヤ、この身請けは變替へぢや。
妙林　オヽ、さうぢや。身請けせぬ先でさへこの通りぢやもの、身請けさしたら、叩き殺さうも知れぬ。金は其方、奉公人は此方の者。身請けさゝぬからは、金助、仕返ししてたも。
惣左　お侍ひ、身請けさゝにや、こなたの自由になるまいがの。
勝元　如何にも、身請けがならぬと云へば、達ては云はぬが、浮島は、今宵身共が買うたれば、明日までは武士の女房、夜明けぬうちは、腹癒せに、まだどのやうな目に會はさうも知れぬ。婆め、覺悟して待つて居れ。

惣左　イカサマ、こりや尤も。今宵はこた樣が、買うて置かしやつたあの浮島、打擲したら此方の不調法。夜が明けたら客でもなんでもない。母者人を、ぶたしやつた仕返しは五分々々。夜が明けたら客とは云はさぬぞや。

勝元　ハテ、その時は勝手次第。夜が明けたらば、また致しやうもあらう。勝手にせい〳〵。

妙林　勝手にしませいぢや。

ト この前より中二階に、赤松四郎、見て居て

赤松　家來ども、金助親子に繩かけい。

ト 侍ひ大勢出で

侍ひ　腕廻せ。

妙林　ヤア、お前は宵の大盡樣。

勝元　アヽ、さては、お合ひ客か。これは〳〵、さては最前よりの樣子御覽なされ、御立腹の餘り、見兼ねて合ひ客のおこし。近頃恭なう存じまする。成る程、親子の者どもは憎い奴なれども、さのみ繩かける程の儀でもござらぬ。矢張り其まゝ、お捨て置き下されい。

赤松　慮外千萬。お身達ごときの事を、此方になんの取上げう。構はずと、すッ込んでお居やれ。

勝元　ホウ……左やうならば如何やうとも。

ト 片脇へ寄り煙草のみ〳〵、赤松四郎を眺め居る。

赤松　ソレ、繩かけい。

侍皆　やらぬぞ。

惣左　コリヤ、何ゆゑ我れ〳〵親子に繩かけさしやる。

赤松　身共は、當國相模の領主、戸田豐前守が家來、花形内記と云ふ者。主人豐前守は女子一人ありたれど、癪の病にて物云ふ事叶はず、何卒この病、平癒なさしめ給へと、箱根權現へ祈り、十年以前、御息女と只二人、通夜なされしところ、何者とも知れず御息女をかどわかし、お行くへなくなり給ふ。國元の歎き、一家中は云ふに及ばず、近國他國までも、配符を以て御詮議。未だ御命恙なく、博士が申すを力に、草を分けて詮議するところに、燈臺元暗しと、この廓に十四歳に成る啞の傾城ありと云ふを聞き出し、入込んで窺へば、案に違はず。最前妻めが、口走つたはおのれが罪。遁がれぬところぢや。覺悟ひろげ。

妙林　そんなら浮島は、この國の殿樣の娘御であつたかいな。

ト 此うち、赤松四郎、浮島が手を取り、恭しく

赤松　今まではさぞ辛い、憂き目にお會ひなされたであら

うな。
ト浮島泣く。
お道理〳〵。邪慳な親子の奴輩。國元の御前へ引く。家來ども、引立てい。
侍ひ　動くな。
惣左　待つた。如何にも、そりや、國主の姫君とも知らずに、買ひ取つたからは此方の奉公人、親方が折檻するを科とあつては、廓中に人種はあるまい。內證さまとやら、こりや、ちと無成敗かと存じまする。
赤松　どこへ〳〵。盜人猛々しい。知るまいと思ふか。十年以前、御息女をかどわかしたは、余助、おのれであらうがな。
惣左　アイヤ、麁相仰しやるな。私しが、かどわかしたと云ふに證據があるかな。
赤松　證據なき事云はうか。家來ども、繩附き引け。
侍ひ　ハア。
ト役拂ひの仁太、繩にかゝつて出る。
赤松　ヤイ余助、其奴が面を見い。
惣左　ヤア、われは。
仁太　コレ、もう叶はぬ。十年以前、箱根でこなたが、かどわかして、肝煎りの傳兵衞に遣つた時、おれが一分取つた事も何もかも、白狀してしまうた。
赤松　なんと、これでもあらがふか。
惣左　サア、それは。
侍ひ　やらぬぞ。
惣左　待つた。示なされな。逃げも走りも仕らぬ。成る程、十年以前箱根にて、御息女をかどわかしたは、拙者でござる。
赤松　さてこそな。
惣左　浪人の間、金子入用の事あつて、人かどわかしとなりました。斯く顯るゝからは是非もなし。武士の切取り強盜はある慣ひ。國主の御前で申し開き致しまする分の事サ。
妙林　そんなら、かどわかしたは其方か。
赤松　ムウ、まだしもの白狀。うぬが面魂ひ、まだ外に詮議あり。家來ども、親子ともに縛し上げい。
侍ひ　捕つた。
ト妙林を縛り、惣左衞門にかゝるを、一兩人投げて
惣左　ハテ、此まゝで御前へ行く。理不盡なさるゝと、手向ひ致すぞ。

文化二年正月大坂中の芝居上演繪番附

妙林　申し、こりやわたしを、なんとなされます。
赤松　どこへ、うぬ。この年月酷う當つたおのれら。覺悟しをらう。
妙林　これは又情ない。
赤松　金助、繩かゝらぬと云うても動かしはせぬぞ。
惣左　イヤ、遁がれるやうな者ぢやござらぬ。
赤松　家内殘らず缺所仰せつけらるゝ。家來ども、婆めが腰の鍵を以て、一々改めい。
皆々　畏まつてござります。
ト妙林が腰の鍵を取つて皆々奥へ入る。
妙林　三百兩の敷金で、嬉しや、好い養子をしたと思へば、こりやどうぢや。
惣左　氣遣ひな事はない。御前で云ひ譯は胸にある。氣を落ちつけて居やしやれ。
妙林　これがどう落ちついて居られるものぞ。
ト此うち家來皆々出で、金箱を積む。
赤松　奉公人は親元へ戻し、諸式の儀は追つて御沙汰。金子は殘らず御前へ持參せい。サア、イザお立ちあられませう。
ト浮島を引立てる。

金助親子も歩め。
皆々　立たう。
ト惣左衛門、妙林を追ひ立てる。
惣左　皆、留守せいよ。追ツつけ戻るぞよ。
女皆　アイ。
赤松　ソレ、引立てい。
ト惣左衛門、妙林を先に立て、赤松四郎、浮島を連れ、侍ひ捕り繩して花道へ行く。
勝元　詮議が殘つた。マア、待て。
ト構はず行かうとする。
イヤサ、詮議がある。待て。
ト氣味合ひあつて又行かうとする。
キノニノヤノハノモノ待て。
ト赤松四郎、惣左衛門、恟りする。
ハテ、驚ろく事はない。待てと云はゞマア待て。
ト皆々後へ戻る。思ひ入れあつて
赤松　待てと聲かけたが、用があるか。
勝元　ある段ぢやない。大きにある。
赤松　さう云ふわりや、何者ぢや。
勝元　揚尾峠の孫嫡子、佐々良三八と云ふ者。

赤松　アノ其方が。
勝元　如何にも。
赤松　ハテナ。
勝元　いま承はれば、當國相模の領主、戸田豐前守どのゝ御家來、花形内記どのとな。何ゆゑ金助親子に繩かけ、家内を缺所になさるゝな。
赤松　樣子は聞いたであらう。國主の息女をかどわかし、放逸の振舞ひゆゑ。
勝元　すりや、この傾城は國主の娘か。
赤松　オヽサ。
勝元　ハヽヽ。ハテ、よう仕組んだな。
赤松　何がなんと。
勝元　コリヤ、ヤイ。身共は用事あつて、旅宿いたして居るわいやい。
赤松　ヤ。
勝元　その上、豐前守どのは、廿二歳におなりなさるゝ。この傾城は明けて十五歳。十五の娘を二十二歳の豐前守どのゝ娘とは、コリヤ、豐前守どのゝ七つの時、生れさしやつた子か。
赤松　ヤ、なんと。

勝元　とくと委細を聞き合してうせたがよい。ハテ、不埒な騙りぢや。
妙林　そんなら、この大盡樣も騙りかえ。こりや、なんの事ぢや。
勝元　金助、その金箱は其方がのぢや。
惣左　ハイ。
ト不承々々に返答する。
勝元　手剛くば縛し上げい。
惣左　ハイ。
トそろ／＼立ち上がる。
勝元　イヤ、コリヤ／＼、さして痛がるにも及ばぬ。高で數に足らぬ奴輩、此方の目當は只一兩人……サ、何時でも搦め捕らうと儘ぢや。金子さへ取返したならば、去なしてやれ。
惣左　ハイ。
ト思ひ入れして
エヽ、うぬらは命冥加な奴等ぢやぞよ。重ねてうせたら、命がないぞ。大泥坊めら。キリ／＼うせう。
ト皆々顔見合し入る。赤松四郎も行かうとする。
勝元　コリヤ、どこへ行く。

赤松　推量の通り、富家と見かけて仕掛けた騙り。顯はれたれば、是非がない。歸りませうわい。

勝元　どつちへも動かさぬ。鏇が見入つた。詮議がある。

赤松　なんの詮議が。

勝元　船にて御約束仕り候ふ事。

ト惣左衛門、赤松四郎も、悄りする。

赤松　うぬを。

動きは取らぬ程に、マアさう思へ。

トかゝらうとする。タテあつて、四郎を見事に投げる。

惣左　ハヽンムウ。

ト惣左衛門、火鉢にあたり居る。

妙林　コリヤヤイ、ちやつとこの繩解いてくれ。

ト皆々、妙林が繩を解く。

勝元　妙林、金箱は元の所へ納めて置け。

妙林　エイ、有り難うござります。

ト男出て、金箱を持つて入る。惣左衛門、勝元の側へ行き

惣左　佐々良三八さまとやら、其許がお出でなされずば、親子とも、騙りに出合ひ、難儀仕らうもの。お庇で斯樣になりまして、忝なう存じまする。

勝元　オヽ、喜びは尤も。……併し、この騙りの顯はれたを、そちや、本意なう思ふであらうな。

惣左　とは又なぜに。

勝元　ハテ、騙りを渡世にする者ならば、如何やうの事も、計り騙るまいものでもないに、我が身に覺えもない事を、如何にもかどわかしたは、身共でござると、白狀した其方が心は。

ト惣左衛門キツとなる。

惣左　浪人の渡世に詰まり、かどわかした子は、幾人と云ふ事數知れず、もし其うちかと思うて。

勝元　ハテ、物覺えの悪い人かどわかしぢやな。その分では云ひ譯暗いぞよ。

惣左　騙りは騙り、騙られたは定。暗いとて、なんと致さう。

勝元　騙りの筋は僅かなれども、とつくりと詮議したら、天下の大事も知れさうなもの。金助、この科人、詮議して見ようかい。

惣左　そりや、御勝手次第。

勝元　コリヤ、もう叶はぬ。同類があらう。有やうに白狀せい。

赤松　ノ同類は今歸してしまうた。
勝元　イヤ、その同類でない、船にて約束の同類の事サ。
赤松　そんな事は知りませぬ。
勝元　ナニサマ、容易くは申すまい。妙林、その門口に貼つてある、咒ひの札を取つて來い。
妙林　ハイ／＼。
ト取つて來て、勝元に渡す。
勝元　キノニノヤノハノモノ。金助、こりや何ぢや。
惣左　そりや疫病の咒ひ札サ。
勝元　成る程、キノニノヤノハノモノ、船にて御約束仕り候ふ事。この北川惣左衛門は山名宗全が家來、桂左衛門と申す者、宗の一字を讓り受け、北川惣左衛門と名乘り、謀叛を企む由、今にては天下のお尋ね者。その北川惣左衛門、キノニノヤノハノモノと書いたは、正しく彼れが合ひ詞と、身共は睨んだが、そちや何と思ふ。
惣左　何とござらうか。
勝元　キノニノヤノハノモノと書いたは、どうした事であらうな。
惣左　唐人の寐言のやうな事ぢや。
勝元　知るまい／＼。町人の合點のゆかぬは尤も。身共さへ合點ゆかぬ。これを問はゞ、この騙りめ、おのれならでは知る者ない。有やうに白狀せい。
赤松　騙りより外は、何にも知りませぬ。
勝元　ハテ、斯う云ひかゝつては、われが云はねば、こちらで云はす。これがほんの鎹責めぢや。最前詮議の時、待てと聲かくるに、聞捨てにしたおれが、キノニノヤノハノモノと呼びかけたれば止まつたは。
ト四郎、思ひ入れ。
サ、有やうに云へ。
赤松　知らぬ。
勝元　云はぬか。これでも知らぬか。
ト四郎の膝へ刀を刺し込む。
苦しくば、有やうに云へ。どうぢや。
赤松　イ、ヤ、知らぬ。
勝元　死太い奴の。金助、なんとマア、これほど責めても、云はぬと云ふは、踏の据つた者ではないか。
惣左　例へ責め殺されても、知らぬ事は申さぬ筈でござらうかい。
勝元　所を云はして見せう。サア、船にて約束の事を云へ。
赤松　そりや、どこの船で。

勝元　桑名の渡し船で。
赤松　ヤア。
勝元　なんと、胸にこたへやうがな。
赤松　知らぬと云ふからは、金輪際知らぬ。
勝元　さう云へば、カウ。
　ト四郎を抉る。惣左衛門、火箸を手裏剣に打つ。勝元、
　叩き落し
　危ない事の。
惣左　これはしたり、てんがうかはいて、火箸を片し、飛
　ばしてのけた。
　ト詫れる。
勝元　コリヤ／＼金助、其方が尋ぬる、火箸はこれか……
　ハテ、町人にしては天晴れな手の内。
　ト取上げ
　コリヤ、いま戻す、受取れ。
　ト打ち返す。惣左衛門、中に止めて
惣左　ほんにマア、いろ／＼のてんがうかはいて。怪我が
　あつたらよいものか。
　ト灰をならす。
勝元　イヤ、それは氣遣ひするな。兎の毛で突いた程も、
　疵は附けられぬ大切な科人。詮議も大方、胸に浮かん
　だ。こりや、もうこの家は動かれぬわい。
　ト惣左衛門、四郎、思ひ入れ。
　詮議も暫らく、猶豫してくれうわい。揚げて置いた太夫
　を伴ひ、奥で一つ食べう。揚屋の不肖ぢや。金助、これ
　からいつまでも居續けぢや。併し、大事の科人、此まゝ
　置くは遊興の妨げ、と云うて又身が側を放しては、何十
　人番いたしても心元ない。ハテ、どうがな……オヽ、幸
　ひ幸ひ、金助、この科人は、其方に預けるぞよ。
惣左　エヽ。
勝元　覺えもない事を云ひかけた騙りめ、われが身の晴い
　云ひ譯を相談せい。
惣左　すりや、あの科人を。
　ト心意氣ある。
勝元　取逃がしても苦しうない。籠の鳥ぢや。
惣左　ナニ、籠の鳥とは。
勝元　五萬や十萬の用金では、なか／＼屆かぬぞよ。
惣左　なんと。
勝元　色品の揃ふまでは、マア、放し飼ひぢや。
惣左　誰れを。

勝元　サア、色品の揃はぬうちは、浮島を抱いては寝ぬ。水も漏らさぬ屏風の内。取巻いてある程に、金助、心静かにとつくりと、相談召されい。

ト唄になり、勝元、浮島を連れ、妙林、その外、皆々入る。後にて惣左衛門、四郎が縄を解く。

赤松　たうとうしくじつてのけた。

惣左　しくじつた段ぢやない。あの浮島は、こなたがよう知つて居て、大事ないと云うたぢやないか。

赤松　サア、自體彼奴は拾ひ子、四つの年まで育て上げ、手を廻してこの廓へ賣つておこした。それゆゑおれが顏を見知らず、幸ひかけ構ひない仕事ぢやと思ひの外、ぐれが來ました。

惣左　して、合圖の手筈は。

赤松　キノニノヤノハノモノと云ふ貼り紙の貼りやうに依つて、諸國より走せ集まる筈。先つ頃より諸國に、佐々良三八と云ふ貼り札を出してより、疫癘疫病も靜まり、拙者が術も輝ほども聞かず、何はさて措き、最前の詞の端。

惣左　この上は、軍用金を奪ひ取る手段。コレ。

ト囁く。此うち妙林、そろ〳〵出て、聞いて居る。

妙林　樣子は聞いた。この通り注進。

ト行かうとする。惣左衛門、當てる。其まゝ死ぬる。

惣左　ソレ死骸。

ト赤松四郎、死骸を隱す。

赤松　今宵中に三八めを。

惣左　萬事は奧で。

赤松　マア、ござりませ。

ト唄になり、兩人は入る。奧より、大盡いぜき、萩坂喜三治、その外、侍ひ大勢出る。

喜三　いよ〳〵勝家に相違ござらぬか。

いぜ　相違はござりません。傾城の雛路と云ふは、慥かに天津姫と睨んだ。この間より奧へ入込み、まんまと勝家を附き出した、傾城は天津姫。コレ。

ト囁き、皆々表へ出て

喜三　然らば、旅宿で相待ち申す、隨分ぬからぬやうに。

いぜ　追ツつけ吉左右。

喜三　家來、參れ。

ト入る、いぜき、身繕ろひして、内へ入らうとする。與五郎出て、戸を締める。いぜき、首しまる。これより面白きタテあつて、トゞ、いぜきを殺し、死骸を隱

し思ひ入れあり、所へ奥より浮島出て、與五郎に行き當る。

與五　これは浮島どのか。

ト浮島、わしを呼びに來たかと云ふ身振り。

オヽ、用があつて呼びにやつた。用と云うて外の事ではない。こなたは美しい顏ぢやが、啞ぢやの。

ト浮島、生れ附いた因果ぢやと云ふこなし。

道理〳〵。ハテ惜しい事ぢやな。こなたのやうなよい。

ト切らうとする。浮島、氣味合ひ。

ハヽヽ、さて惜しいものぢや。コレ、寶船を見やんせ、いかい事あるわいなう。

ト出して見せ

その歌は下から呼んでも、同じ事ぢや。面白い物ぢや。それ〳〵、讀んで見やれ。

ト浮島、指を突いて歌を讀む。與五郎、切らうとして顏見合せ

ヘヽヽヽ、ハヽヽヽ、それ〳〵、鎧着てゐる人があると、頭の長い人が袋に腰かけてゐると、戎樣が鯛を釣つて居やしやる。

ト此うち、浮島、頬づかへして寶船を見る。與五郎、あたりを見て

女子、首くれい。

ト浮島、飛びのき、傍へ居る。

オヽ、怖からう。騙して切らうと思へども、ひよつと斜にでもなつたら惡いに依つて、得心さして殺すのぢや。其方の命たも。

ト浮島、なんで首切ろと云ふこなし。

尤もぢや。定めて酷い者ぢやと思はしやらうが、此方にもどうもならぬ事がある。一通り聞いて下され。天下の管領、右近之助勝家さま、國をお退きなされ、十二年この方の流浪。都より首打つて渡せとあり、寶を詮議せうにも、科人同然の御身の上。其方をお姫樣のお身替りにして、首打つて都へ渡し、その間に寶を詮議して歸參させ申す。所詮、片輪な身で、一生勤めせうより、天下の爲、姫君の身替りに立てば、其方の仕合せ。この寶船のやうに、浪乘り船の音のよき、弘誓の船に乘りて、生れ變つて、滿足になりや。とひ弔ひは力一ぱいする程に、得心して、命下んせ。頼む〳〵。

ト附け廻す。浮島、逃げ廻り、死ぬる事は否ぢやと云ふこなし。奥へ逃げるを引きとめ

これほど事分けて頼むに、聞分けのない。もう否でも應でも命貰うた。

トいろ〳〵あつて、トヾ浮島を繩にて縛り、切らうとして、ウンと反り返る。勝元出かけ、浮島が繩を解き、顔を眺め、思ひ入れあつて

勝元　十三年以前、將軍義尙公姫君の誕生は、月蝕八歩にかゝり、酉の刻の御誕生にて、四十二の二つ子。一月過れば難病ありと博士の敎へに任せ、親修理大夫政基、淀堤へ捨て奉りしを、何者とも知れず連れ歸つて行くへ知れず、何卒尋ね奉らんと、心を盡し尋ぬるところ、この廓に、十四歳になる啞の傾城ありと聞き、入込んで樣子を見るに

ト浮島が胸を見て

博士が申せし難病のしるし、乳の下に五つの黑子。將軍の姫君を、匹夫下郎の刀をかけんとしたるゆゑ、足利の威勢に押され、悶絕したか。ハテナ。

ト此うち、與五郎、起きて、不思議な顔して居る。

奥の兩人、慥かにそれと見た目は違はぬ。

ト貼り札出し

キノニノヤノハノモノ。正しく合ひ詞……讀みの下らぬは。

ト思ひ入れあり、梅の木に鶯囀る。この間、浪花獅子のめりやす。

雪深く、白梅もやうやく芽を出すに、紅梅の咲き揃ひ、鶯の囀るは。

ト思案して

天の羽衣羽衣の曲は、天人の白衣、黑衣の賜物。月宮飛音樂の始めにして、迦陵頻迦の鳥も集まり、異香薰じて、花降り下つて、下界の花開くとある。ムウ、一種の寶も、この家の内を離れはせぬわい。とは云へ、キノニノヤノハノモノ……のの字のを捨て假名にして、キニヤハモ、、、、ムウ。キニヤハモ。

ト思ひ入れ。

初春の朝ごとには來れども、逢うてぞ歸る、元の古巣へ……キニヤハモ。

ト側にある寶船を見て

長き夜の、とをの眠りのみなめさめ。こりや子供も知つてゐる迴文、いつの世よりか除夜の祝賀。これはさて措き、キニヤハモ、キニヤハモ。

ト此うち、鶯啼く。

逢うてぞ歸る。元の古巣へ。逢うてぞ歸る。

ト寶船を見て

聲のよきかな。長き夜の……廻文も返る。逢うてぞ歸る
と、足を隱して見れば、最早じき。

ト思ひ入れ。

時來を文字にて見れば、時來る。この貼り札を逆しまに
貼るを合圖に、最早、時來り、時節調ふの字。徒黨を
集むる合ひ詞、疑ふ所もなき北川惣左衞門、赤松が悴に
極まつた。すりや、姫君をかどわかして、この廓へ賣つ
たも赤松、將軍の姫君、寶の盜賊合ひ詞、謀叛人まで一
時に知るゝと云ふは、エヽ、嬉しやな。

ト梅の木に手燭にて灯を附ける。仕掛にて、燃え上が
る。梅、殘らず、散りうせる。赤白の旗二筋、空へ上
がると、遠責めになる。與五郎、恟りして、うろたへ
廻る。

コリヤ、われに尋ねる事がある。奥へ來い。

ト與五郎を引立て、浮島を連れ、奥へ入る。惣左衞門、
勝家、天津姬、見空を連れ出る。

勝家　あの鉦太鼓は。

惣左　破軍我が眼を貫き、白星地に落ちたるは、我が運命
もこれ限り。

ト手洗鉢を退け、羽衣の箱、羽衣の一卷を取出し

宗全が娘の緣に依り、命は助ける。今まで忠義を盡した
は、世上へ謀叛を知らすまい爲、女房が心に免じ、助け
くれる。まだ外に用がある。來い。

ト三人を連れ、奥へ入る。跡へ關内、鎖帷子にて、大
勢連れ出て

關内　大切な科人、疵附けぬやうに。

皆々　畏まつてござります。

關内　何れも、踏ん込め／＼。

返し

屋根を突き出す。この間遠攻め、惣左衞門、大童に
て、いろ／＼と大タテあり、皆々切り殺す。與五郎、
おたか、屋根へ上がり

與五　旦那どの、佐々良三八と云ふは細川勝元。

たか　この家の四方を取卷きました。

惣左　さうあらう。

たか　して、あなたのお身は。

惣左　最早、絶體絶命ぢや。

與五　嬶よ。覺悟はよいか。

　トおたかに脇差を突ッ込む。直ぐに腹を切る。

惣左　コリヤ、何ゆゑ死ぬるぞ。

與五　旦那どの、斯ういふ事なら、なぜわしも、人數へ入れて下されぬぞい。ア、、それも尤もかい。此やうな阿房ぢやもの……わたしも心は侍ひぢや。討ち憎い親の敵を、お前樣のお庇で、討ちました。お主と云ひ、大恩のあるお前に離れ、なんと死なずに居られませう。コリヤ、嬶よ、われも武士の女房ぢや。死ね／＼、死にをれ／＼。

たか　オ、、こちの人、よう殺して下さつた。わしや、生き長らへて居る心はない、冥土の先驅け。

與五　さうはか。さうはか。

たか　申し、旦那樣、未來は矢ッ張り、お主樣でござりますぞえ。

與五　オ、、さうぢや。出かした／＼。

惣左　主從の義を重んずる志し、三世の機緣は忘れはせぬ。心安う成佛せい。

二人　エ、、有り難うござります。

たか　思へばわたしは、酉の年、酉の日、酉の刻の生れ。

與五　おれも酉の年、酉の日、酉の刻生れ。

たか　この日に生れた者が女夫になると、劍難にかゝると云ふが。

與五　阿呆だらめ、爰で死ぬるは本望ぢや。浮世に思ひ置く事何もない。旦那どの、さらば。

たか　旦那樣、さらば。

　ト兩人、死ぬる。屋根より血流るゝ

惣左　ハテ、不思議やな。親子兄弟ならば、同腹同性の血汐、一つになつて流るべきに、夫婦は別腹別生、他人の血汐合體して流るゝは。

　ト思ひ入れあつて

誠に酉の年、酉の日、酉の刻に生れし夫婦は、陰陽の陽氣に負けて、劍難に遭ひ相果てる。その血汐、合體すれば、唖の病を療す。いま流るゝ血汐に、湯氣立てゝ人氣の通ふは、この下座敷に、血汐の滴りにて、難病を救ふ者あるか。ハテナ。

　ト此せりふのうちに、屋根セリ上がる。

座敷、下よりセリ上がる。赤松四郎、關内、細川勝元、凜々しき形にて、樋より滴る血汐を鉢に受け、浮島に飲ます。

勝元　酉の年、酉の日、酉の刻に生れた夫婦が血汐、又あるまじき妙藥、手に入つたは、細川の家を引起すべき前表、斯様の運には叶ふまい。北川惣左衛門、何所に隱るるとも、遁がさうか。
浮島　細川勝元。
勝元　ハア、言舌爽やかにござらうがな。
浮島　ほんに、わしや物云ふわいな。
勝元　赤松滿祐が悴、四郎高定、遁がれぬ所ぢや。覺悟せい。
赤松　オヽ、何をか包まん。我れこそ赤松四郎高定。
關内　さてこそな。
勝元　十三年以前、淀堤にて姫君を奪ひしも、其方であらうがな。
赤松　おんでもない事。親滿祐が敵取らんと、比叡山より下りて、北川惣左衛門と心合し、既に事成就せしと思ふに、汝が謀計に落入つたか。エヽ、無念やな。
勝元　サア、これからは、謀叛人の張本、北川惣左衛門、遁がれぬ所ぢや。覺悟せい。
惣左　北川惣左衛門、それへ參つて對面せん。
　ト音樂になる。惣左衛門、羽衣、天冠を持ち、花道より出る。
勝元　虚空に音樂聞え、異香薫じ渡るは、さては、天の羽衣よな。
惣左　佐々良三八と云ひしは、細川勝元であつたよな。
勝元　天下の料人、北川、赤松。
惣左　細川勝元。
勝元　其方が詮議を
惣左　雲を穿ち
赤松　大地を分けて
勝元　逢はう
惣左　逢はうと
赤松　思ひしに
三人　ハテ、珍らしい對面ぢやな。
勝元　寳手に入るからは、命助けるは武士の情。
惣左　重ねて出合ひは戰場にて。
三人　さらば〳〵。
　トちよん〳〵、よろしく　幕

けいせい天羽衣（終り）

よどの川せのかたきうちくる〳〵くるわの水ぐるまめぐるもんびはしんどうせき口りうぎはおとらぬ
みうけのゐんが娘の道中われたるかはらけどちらを見てもゑらぶゑい

源八渉
平太堤

三十石艠始

乗合　五艘

ふりつもるゆきのつちゝにちしほのれんばんあかまへだれはぶけのうちかけおはなばたけへ道行すがた
川すじふしんしうげんのかんどうかしこまりたてまつるとはこれもすさまじい

再演繪番附表紙

三十石艠始

口　明

東山茶の場
大内の場

役名――花滿左衛門憲法。川浦遊軒。石橋中將。池上圖書。熊本辨之作。花滿鑓之助。吉川紋之丞。志賀左近。太鼓持ち、小市。傾城、總角。同、花浦。造り手、すぎ。岩瀬記内。妹、喜蝶。揚屋、才兵衛。源八女房、見船。淀與三右衛門。

造り物、三間の間に社壇。一面の玉垣。前に櫻幕、引くと太鼓打ちかゝろ。面白や三保の津の浪と云ふ唄になる。向うより紋之丞、花浦、左近、唐子大勢、太鼓にて踊り出る。後より總角、喜蝶、振り袖にて喜蝶は烏帽子、釣り鯛を持ち、惠比須の心にて出る。總角は唐子を打連れ、焙烙頭巾、袋かたげ、槌を持ち、大黑の形にて、こゑびす大黑三社のやうな唄にて、所作事あつて、しまひ、神樂になる。

ト内より

呼び　後室樣のお入り。

喜蝶　イザ、お入り遊ばされませう。

ト記内、後室の形。中將は山伏玄妙院。才兵衛、上下にて出る。花浦、紋之丞、上へ通り、次第に並ぶ。

總角　後室樣には、御參詣でござりまする。

記内　一家中の者、大儀にこそあれ。

ト圖書、神主の形にて、出迎ひ

圖書　後室樣、若殿樣、姬君樣、御參詣でござりまするか。

右近　神主右京、今日は神事の勤め、大儀にこそあれ。

圖書　ハア。

喜蝶　誠に、今日の御神事、私しどもまで、斯樣な喜ばしい儀はござりませぬ。追ツつけ御願が、成就いたしませうと存ずるゆゑ、只々おめでたう存じます。

總角　樞の戸さんの云はしやんす通り、分けて、この度の御神事は、一しほ神も納受と存じまする。若殿樣のお行くへも、追ツつけ知れませうと存じまして、おめでたう存じまする。

記内　誠に、この妹脊山の家の事は、外に並びなき歌道の家。櫻木の家の藤太郎どのを聟に取り、これなる生駒姫に娶せ、家を繼がせんと思ひしところに、藤太郎には、傾城狂ひに身持ち放埒。その上、國を出奔なされたとある。何卒行くへを尋ね出し、家を繼がせん爲の神いさめ。皆も神慮を仰いでたも。頼むぞよ。

花浦　廓通ひなさるゝとあつて、悋氣する氣はなけれど、見ぬ戀にあこがれた藤太郎さま、なんぼう神樣を祈つたとても、自らに添うては下さんすまいと思うて、わたしや悲しうござりますわいな。

左近　なぜ其やうに思し召します。其お氣をおいさめ申しませう爲、皆も神慮を祈りまするではござりませぬか。

紋之　それ〳〵、主水が申しまする通り、皆神慮を祈りまするも、御氣色が惡うござりますれば、母樣への不孝。姉樣、なぜお氣をいさめさつしやりませぬ。

記内　イヤモウ、兎角姫の嘆きやるが悲しきゆゑ、先達て玄妙院を頼み、祈禱を誂らへ置いたが、玄妙院は、怠らず祈禱をしやるであらうの。

中將　仰せの通り、三七日が間、壇を飾り、大聖不動明王に祈りをかけ、姫君安全、家繁昌の御祈禱を致します。

記内　オヽ、大儀〳〵。

才兵　イヤ、なんぼう若殿の行くへが知れても、傾城狂ひに、國を出奔する程の大だわけ。なんの神も納受ござらうぞ。こりや矢張り、玄妙院の勸めの通りに、なされたがよからう。

總角　軍藏どの、今のお詞の端、なんとやら、藤太郎さまを蔑みしたる一言。どうすればお家が治まりまするかな。

才兵　妻菊、女の知つた事でない。すッ込んで居やれ。

總角　外記之進が娘妻菊。申す事は、申さねばなりませぬ。

才兵　云うて聞かさう。若殿が此お家繼がさつしやつたと云うて、役に立たぬ藤太郎どの、さつぱりと縁を切り、後室樣の里の子、大藏さまを繼がすが上分別サ。

總角　そりや、どなたのお捌きで。

中將　この玄妙院が申し上げた。

喜蝶　玄妙院どの、すりや、こなさんが、お家の指圖さつしやるぢやの。

中將　お家が大切さに、申し上げたが、なんとした。

喜蝶　妻菊さん。

總角　槇の戸さん。

喜蝶　もう、詮議せにやならぬわいな。

總角　大方樣子が知れて來た。
喜蝶　玄妙院どの。
總角　ちよつとお目にかゝりませう。
中將　汝共にか。
ト向うへ出る。
なんの用ぢや。
總角　繩かける。手を廻しや。
中將　默れ。この玄妙院には、なんの科あつて繩かける。
總角　云ふまい。里の子戸根五郎と同腹になつて、お家を呑まうとする大惡人。遁がれぬ。覺悟。
喜蝶　黑いこの目で、睨んで置いた。
中將　この玄妙院に惡逆と云ふ、なんぞ證據があるか。
總角　神主右京、最前の箱、これへ。
圖書　ハア。
ト圖書、箱を持ち出る。
總角　この箱、覺えがあらうがの。
中將　この箱を。
ト立廻りある。
總角　掛け奉る願主、玄妙院。
中將　もう、うぬを。

ト切りかける。箱にて受ける。箱、仕掛けにて毀れる。中より藁人形、願書出る。
總角　ソレ、槇の戸さん。
喜蝶　合點でござんす。
ト願書を取る。
才兵　それを。
ト槇の戸にかゝる。立廻りあつて、才兵衛を押へ
喜蝶　敬つて申す、願書。卿木藤太郎を、三日の間に命を取り給へ。玄妙院、これを承はる。願主、何某。
才中　それを。
ト立廻りあつて、二人を見事に押へ、括る。
記内　待て〳〵。大切な玄妙院に、なぜ繩をかけたぞ。
喜蝶　後室樣、あまり賢人立てを仰しやるな。若殿樣を呪うた玄妙院、それに組する軍藏、繩かけたが誤りか。
圖書　すりや、御詮議を、其許がなされるゝぢやまで。
喜蝶　キッと致してお目にかけませう。この詮議したら、この何某と書いてある、願主も大方知れさうなもの。ナア、後室樣。
記内　されば。
ト氣味惡く云ふ。

總喜　サア、有やうに云へ。
中將　知らぬ。
總喜　知らねば斯うぢや。
　ト刀の鞘にてこじる。兩人、苦しき思ひ入れ。
記内　ヤレ、待て〳〵。エヽ、憎い奴等ぢやなア。此やうな大それた事を企む奴等ぢやに依つて、事顯はれたら、こりや、後室樣の云ひつけぢやと、罪を自らに讓らん爲であらうがな。怖い奴ぢやなア。さりながら、身に取つて覺えのない事、必らず疑うてばし下さるなや。
喜蝶　そりや、さうありさうなものぢやてや。
　ト兩人、箱を見合せる。
紋之　コリヤ〳〵兩人、餘り強う詮議して、姉樣や某を、不孝者に致すなよ。
花浦　兎にも角にも、自らがあるゆゑ、大勢の難儀。さらば。
　ト自害せうとする、左近、留める。
圖書　お待ちなされ、妻菊どの。姫君樣が自害なされますと、忠臣却つて不忠となりますぞ。
記内　オヽ、さうぢや。強う詮議すると、姫は死ぬる。其方は主殺しとなるがや。

總角　エヽ、槇の戸さん、こりやマア、なんとせうぞいな。
喜蝶　現在知れてある事を、ハテ仕合せな、後室樣ぢやなア。
記内　ヤレ嬉しやの。
　ト侍ひ、走り出て
侍ひ　申し上げまする。珍らしき棒のし、力持ちを致しまする。なか〳〵面白い事でござりまする。お姫樣のお慰みにと存じ、控へさせ置きましてござりまするが、歸しませうか、如何仕りませう。
圖書　幸ひ〳〵、姫君の好いお慰み、これへ通さつしやい。
侍ひ　ハア。
圖書　靱負之丞さま、後室樣には、奥へお入りあられませう。
記内　オヽ、足元の明いうちに、奥へ行きませう。
喜蝶　エヽ、仕合せな。
記内　コリヤ、達て云ふと、姫は死ぬるぞや。
皆々　先づお入りなされませう。
　ト神樂になり、皆々、入る。花浦、唐子、殘り居る。
唐一　アレ、今の力持ちが來るわいなア。
唐二　ほんになア。

ト輕業の三味線になる。と縫之助、力持ちの形、小手脚絆にて、樽をかたげ、その後に黑き衣裳を着け、小市、出る。

縫之　サア〳〵、評判の力持ち、評判々々。

圖書　コリヤ〳〵、姫君のお慰みに、曲持ちを致してお目にかけい。

縫之　畏まりました。

侍ひ　お氣にさへ入れば、褒美は如何程でも下さるゝ。早く早く。

縫之　東西々々。これまで力持ちは、數多ござれども、重い物を差し上げますばかり、この度は曲ざしでござりまする。ハリトウ〳〵。

ト輕業の三味線になり、小市、後にて使ふ。

圖書　よいよ〳〵。

縫之　と留めましたところが、野中の一本松。返して參りますと、天の釣り舟。ハリトウ〳〵。

ト三味線にて留める。

御褒美に、ドッと褒めた。

圖書　よいよ〳〵。

縫之　これより山雀の餌落し。鶯の谷渡り。あなたこなたへ通うて參る。ハリトウ〳〵。

トこれよりいろ〳〵樽を使ふ　といろ〳〵なむしき事あるべし。縫之助、女形に濡れる。小市、一人にて曲持ちしてゐる。圖書、悔りして、反り打ち睨む。小市三味線に合せ、額へ〳〵樽を使ふ。縫之助、女形に突き飛ばされ、圖書に抱きつく。

圖書　何ひろぐ。大盜人め。

縫之　お免されませ〳〵。

ト橋がゝりへ逃げる。

圖書　おのらは、人を呆痴にした奴ぢや。

縫之　力持ちでござんすわいの。

圖書　まだ〳〵、面妖、不思議な事をすると思へば、後から黑いものを着て遣ひ居る。あれではなんでもなる筈ぢや。大盜人めが。爰には叶はぬ。出てうせう。うせぬか。眞二つにするぞよ。

縫之　アイ〳〵、さつぱりとしくじつた。

花浦　コレ、あの男に、ちよと尋ねたい事がある。爰へ呼んでたも。

圖書　お召しなさるゝ。ズッと出ませい。

縫之　ハイ〳〵、御用でござりますか。

花浦　この守り袋は、其方のか。
縫之　ハイ、私しがのでござりまする。エ、今のうちに、落したさうにござりまする。此方へ下さりませ。
花浦　この守り袋には、藤太郎さま參る、陸奥と書いてあるからは、そんならお前は藤太郎さまぢやな。
縫之　それを知つた、其方は。
花浦　云ひなづけの、生駒姫でござんすわいなア。
縫之　南無三方。
　ト逃げんとする。
花浦　それを、ソレ、止めてたも〳〵。
皆々　マア〳〵お待ちなされませ。
花浦　エ、聞えませぬ藤太郎さま。お前がお館へお入りなされませぬゆゑ、母樣が樣々の惡逆。お前を除けて、わたしや外に男を持つ氣はござんせぬ。それ程に思うて居るものを、胴慾なお心入れでござりますなア。
縫之　身持ち放埒ゆゑに國を出奔して、所々方々とさまよふうち、云ひ交した陸奥も死ぬる。なに面目に妹脊山の家へ、世繼ぎに入らうぞと、心は出家になつて居る。恥かしい對面をしますわいなう。
花浦　斯うお目にかゝりますからは、なんぼうでも離しは致しませぬ。お止まりなされて下さりませ。但し死にませうか。
縫之　サア、それは。
花浦　死にませうか、サア〳〵〳〵。
皆々　どうでござりまする。
圖書　さては櫻木藤太郎どのぢやよな。この通り、戶根五郎さまへ注進。
　ト駈け出る。小市、圖書を切り、止めを刺す。
皆々　これは。
小市　御不審は御尤も。私し儀は、御勘當を蒙むりし谷坂兵内が悴、和田右衞門と申す者でござりまする。若殿出奔なされたと承はり、所々方々を尋ね廻り、何卒勘當お詫びの願ひ、父が一念を立てんと存じて、若殿とも存じませず、只今まで附添ひ居りましてござるも、武運を開くべき端相。何卒昔の勘當、御赦免下さりませうならば有り難う存じまする。
縫之　ムウ、さては先年、勘當したる谷坂兵内が悴、和田右衞門であつたよな。勘當赦さいで、なんとせう。隨分忠義を勵んでくれよ。
小市　エ、有り難うござりまする。

總喜　樣子は殘らず承はりました。
　ト兩人、出る。
縫之　ヤア、二人の衆か。
喜蝶　例へ如何やうに思し召しましても、姬君樣のお心根不便と思し召し、お止まりなさらねば、武士の道は立ちませぬ。
總角　その上お前が、國へお入りなされませぬゆゑ、後室樣の惡心。里の子戸根五郎さまを、世に立てんと樣々の企み。お前のお心一つで、國が亂れまする。サア、なんと。
縫之　成る程、姬の心と云ひ、あやまつた。姬と夫婦になつて、この家國を治めうわいの。
總角　すりや、御得心でござりまするか。
花浦　エヽ、嬉しうござりまする。
小市　若殿、御得心の上からは、御祝言の壽。御祝儀、御祝儀。
　ト摺り鉦、太鼓。と辨之作、家來大勢を引き連れ、水あぶせの形、紅絹の頭巾にて手桶を持ち、出る。
辨之　女房呼んだら、川へぼッ込め。
總角　戸根五郎さま、心得ぬ體。何ゆゑこれへお出で。
辨之　何ゆゑでもない。若殿藤太郎どのと姬と、祝言めさるゝと聞いたに依つて、祝うて、水を差上げる。
縫之　待つた、藤太郎、これに居りまするぞ。
辨之　さう見たに依つて、家來ども。
侍ひ　女房呼んだら、川へぼッ込め／＼／＼。
小市　待つた。最前より、若殿を附け廻し、なんとする。寄つたら爲にならぬぞ。
辨之　よい推量。姬と夫婦になつて、家を繼がうと思ふ所に、思ひ依らぬ藤太郎。打ち殺して、家國を治める。早く殘らず、腹を切れ／＼。
小市　さうあらうと思うた。遁がれぬところ、覺悟せい。
辨之　家來ども、合點か。
侍ひ　畏まつた。
　ト皆々、タテになる。三味線、太鼓入り、皆々、追ひ込み、追うて出て、敵役を押へて
縫之　國の敵、覺えたか。
小市　若殿、めでたうお國入り。先づ、この場はお立ち。
　ト脇幕になる。內よりしやぎり太鼓、皆々、道具を片付けるうちに、打ちませう、シヤン／＼と手を打ち、黑幕を引くと、一面の障子屋體。殘らず衣裳着流し、

憲法　東山の猿の體。向うより川浦遊軒、花滿憲法、出て

遊軒　イヤモウ、けうといものであつた。

憲法　出來た〳〵、けうといのなんのと、斯樣なものではござらなんだ。

遊軒　お銚子。わつさりと、これで一つ呑みませう。

憲法　さて〳〵、皆々きつい名人。分けて縫之助どのは、なか〳〵味をおやりなさるゝ。ほんの役者と見えまする。

遊軒　弟は、えらうようございまする。ハヽヽヽ。

總角　今の妻菊になつたは、傾城の總角ぢやな。

遊軒　オヽ、恥かし。

總角　なんの恥かしい事はない。身は禁裏の御用相勤める、川浦遊軒と云ふ者。折々廓へ行くであらう。よく見知つたがよいぞよ。

才兵　兼ね〴〵お名は、噂して居りやんす。ちつと廓へもお出でなさんせえ。

小市　イヤモウ、やつて見ようと思へどもなア、狂言にかかるか否や、一口もいけるものぢやでござりませぬ。小市々々。

才兵　エヽ、

小市　貴樣は太皷持ち程あつて、面の皮が厚うて、えらうえい。

唐一　何を才兵衞さん云はんすやら。わしやモウ、お前のばち〳〵と物を云はんすやうに、云つて見ようと思うても、根ツから行くものぢやござりませぬ。イヤ、それはさうと、太夫樣方の唐子踊り、皆出來ました〳〵。

才兵　ほんに、此方の兄樣は、よう物を云はんす。わしやモウ、恥かしうて、なるこつちやなかつたわいな。

花浦　何を吐かすやら。花浦さんや禿どもを見いやい。

唐二　イヤモウ、あまり褒めて下さんすな。冷汗が出るわいなア。

記内　もう、今度の狂言には、輕い役に使うて下さんせ。

圖書　ひよつと申し損なはうと存じて、手に汗を握りましてござります。

辨之　さて、辨之作が敵役の、太うてえらうえい。

　　　ナニ、圖書さまの嫌がらすやうな事仰しやりまする。私しが主人、縫之助どのさへなされますもの、おのれのやれ、當てゝくれうと存じまして、でもとんと、出ると夢中でござりまする。

圖書　イヤ、われはわれとも思ふが、中將さまには、いつの間に稽古なされました。

中將　なんと、えらいものであらうかな、自由に芝居は見に行く事ならず、茶屋へ行て、役者を呼び寄せ、芝居ばかりは、さすものぢやないて。

記內　總じてお前樣は、常平生に斯樣な遊興所へ、お出でなさるゝ事はならぬでござりませう。

中將　イヤそ〻、近年は、役人どもが詮議して、どうもならぬ。それを無理に遊びに行くと、おいらにはえゝ構はず、先の茶屋へ祟り居るに依つて、いつぞやのやうに、川東のものになるてや。

憲法　イヤ、折々には、ちと遊興にお出でなされたが、ようござりまする。

遊軒　イヤモウ、あなた方を手放しまするると、一向、方途がござりませぬ。

中將　アレ、御所の內から、あのやうに云ふに依つて、外の者は猶云ふが、憲法、聞いてたも。この間も、和泉式部の梅山が所へ、楊弓に行たれば、役人共に逢うて、何がいぢつてこました。此方がやうな、公卿はさむしい。ちつと遊ばねば樂しみがない。

憲法　最前、ちらりと見れば、淀の城預かり、與三右衞門が妹の喜蝶ではないか。この東山へは、どうしてお來やつた。

喜蝶　アイ、お前は今度、鎌倉より室町樣へ、御參內にお立ちなされまする。定めし、道中、何かと御苦勞にござりませう。殊に、縫之助さまも、お供に上京なさるとある。ちよつとお見舞ひに行けと、兄與三右衞門どのに云ひつけられまして、河原町へ參りましたれば、この東山へお出でと承はりました。

憲法　見舞ひに來たところを、直ぐに引ッ捕へて、狂言に使うたぢやまで。酷いものぢや。

縫之　なんの、酷い事がござりませう。廓の者さへ呼び寄せますもの、こりや、あなたへの御馳走でござります。

憲法　ぢやと云うて、明日か明後日、此方へ嫁入りまするる大事の花嫁を。ハヽヽ、イヤ、お引合せ申しませう。これは、喜蝶と申して、淀與三右衞門が妹でござります。卽ち、弟縫之助と妻合せまして、一兩日のうち、此方の國へ嫁入り致しまする。箱入り娘を、狂言に出してお目にかけました。

遊軒　イヤハヤ、モウ、この間から種々の御馳走。今日は祇園町、明日は島原のと、御馳走に飽き滿ちまするぞやし。

憲法　左樣仰しやつて下さると、結句迷惑に存じまする。

圖書　イヤモウ拙者も、新田、錢座、名目錢、さま〴〵の取次いたしましたれども、此やうな御馳走に逢つた事はござりませぬ。その代りには中將さま、明日の儀を、よろしうなされて遣はされませい。

中將　なさらいでよいものか。諸事、金で葺いてあるもの。イヤナニ憲法、昔から、使者に立つた、首尾のよい天上は、わが身であらうわいなう。

憲法　それは、有り難うござります。

遊軒　ちつと口賢い申し分ぢやが、大內の事は、立てうと伏せうと、拙者が儘でござる。しくじらさうと思ふと、これに中將さまがござる、それは〳〵酷い目に遭はせまする。

憲法　兎角遊軒さま、よろしく、お指圖を頼みまする。

遊軒　拙者が其許の領分、獅子飛びを切り落し、淀川へ流しましたゆゑに、五畿內とも、水損とんとござらぬ。其許には、關西往來の朱印を頂戴してござるゆゑ、定めて往來の御工風でござらうの。

憲法　サア、その儀に付きまして、私しが家內の騷動、記內、一通り話しやれ。

記內　イヤモウ、遊軒さまが獅子飛びをお切りなされてより、湖は淀川へ落ちまする。只今までよりは、十倍の水の速さ、艪を立てましても、櫂を立てましても、一向、舟は上りませぬゆゑ、長柄堤に舟を拵らへ、あれより往來いたさせまする積り、主人、存じつきましてござる。

憲法　時に、家中に關口平太、神道源八と申して、屈强の若者二人でござりまするが、兩人ともに、兎角火を摺つて、仲が惡うござりまする。

中圖　ハテナア。

記內　それゆゑ、源八方には渡しを渡したらば、平太方の堤が、成就いたしまするゆゑに、渡し普請を引延しまする。まつた、平太方にて堤を築かば、源八方の渡しが、自由いたしまするゆゑ、堤の儀を延引しまする。兩方、挑み爭ひますから、自由に普請成就は、致しますまいと存じまする。

憲法　この兩人の仲の惡いは、兵術の流儀を、爭ひまするゆゑでござりまする。なれども、武士の身では、不屆きな儀とも申されず、一方に片付きますれば、生害にも及びまする。外に致しやうもなし、お上へ對しては、延引に及びまする。背中に腹とやら、いづれ一人は捨てねばなりませぬ。何とも困つたものでござりまする。

進軒　その平太と申すは、拙者が弟でござる。
憲法　ハテナア。
進軒　拙者は算術に妙を得ましたるゆゑ、大切に相勤めまする。弟めは、武藝に心掛けまするゆゑ、其許のお屋敷を勤めまする。狀通の使ひばかりを致しまする。
憲法　左やうとも存ぜず、粗相な儀を申しましてござる。
進軒　なんの〳〵、この上は、平太源八、兩人にはお構ひなくとも、西往來を致しまする用には、拙者、罷出し置きましてござる。明日、參內の折から、書付けを以て差上げさつしやつたらば、こなたの拔群のお手柄になりませう。拙者がよろしう仕りませう。お氣遣ひなされますな。
憲法　これは、餘りのお志し。然らばよろしうお賴み申しまする。
圖書　然らば中將さま、また後の狂言の稽古、この間に奧で致しませう。
中將　さうしよう〳〵。
憲法　喜蝶、コレサ喜蝶、何をうつかりして居る。河原町の屋敷から送らさう。早う去にやれ。
ト喜蝶、小市、囁き居る。

喜蝶　イヤ、わたしは、もそつと居りませう。
記內　お前が左やう仰しやるは、縫之助さまに、名殘を惜しまつしやれてか。殿にも一兩日のうちには、此方のお國へお入りなさるゝ。マア、お歸りなされたがようござりまする。ナア、縫之助さま。
ト縫之助、總角、話して居る。
縫之　オヽ、なんぢやいな。
記內　何をなされてござりまする。
縫之　イヤ、これは何を、オヽ、後狂言は淺間ケ嶽。その稽古して居るのぢや。
辨之　イヤ申し、喜蝶さまを、淀へ歸しませうと、申す事でござります。
縫之　オヽ、早う去んだがよからう。
喜蝶　イヤ〳〵、わたしや、やつぱり爰に居りまする。
小市　イエ〳〵、早うお歸りなされて、嫁入りの拵らへ、なされたがよからう。
喜蝶　わたしや去にやせぬ。否ぢやわいなう。
縫之　去んでもらはうぞえ。爰らあたりに居てもらふまいぞえ。
小市　サア〳〵、去んだ〳〵。

喜蝶　構やんな。わしや去ぬ事は否ぢや〳〵。矢ッ張り爰に居る。
總角　イヤ、置くまい。
縫之　われが又、なんで其やうに。
總角　自體、こなさんが。
喜蝶　わが身は、わしを。
小市　こなたはマア。
　ト四人、爭ふ。皆々、止める。
記内　これはマア、なんでござる。
縫之　これは。
記内　なんでござります。
縫之　矢ッ張り狂言の、稽古ぢやわいやい。
記内　稽古ならば、もそつと靜かにしたいものな。
憲法　これは、何をザワ〳〵と。喜蝶も居たくば、もそつと居たがよい。稽古ならば奥へ行てしやれ。
中將　サア、皆奥へ行かう。縫之助、奥へおぢやいなう。
縫之　そんなら、奥へ行てこまそ。
喜蝶　わしも、行かう。
小市　おれも行く。
總角　申し〳〵。
縫之　勝手にせい。
四人　エイ〳〵〳〵。
　トせり合ひ、入る。
記内　なんの事ぢや。おれも奥へ行てこまそ。
才兵　おれも、奥へ行てこまそ。
辨之　おれも、奥へ行てこまそ。
　ト才兵衛、記内、辨之作、入る。
中將　ドリヤ、奥へ行て、稽古せう。
岡書　御兩人、これにござれ。
　ト皆々、入る。
憲法　ハテ、騒々しい。
遊軒　イヤ、淺間ケ嶽、見物でござらう。さて憲法どの、只今、禮式を御指南申すに依つて、申しまするが、今の儀は、どうでござる。
憲法　今の儀とは、なんの事でござる。
遊軒　ハテ、ソレ、内々申した、彼の事な。
憲法　エ、、それは何時なりとも、掛け屋方より。
遊軒　イヤサ、金でなしに、御内室樣の事。
　ト口の内にて云ふ。内よりドロ〳〵。
岡書　エ、口惜しや、腹立ちやなア。

トどろ／＼にて、合ひ方になり、メリヤス。

憲法　エヽ、狂言の稽古をしをるぞ。物音が知れぬ。もそつと大きな聲で、お聞かせ下されい。

遊軒　イヤサ、大きな聲もし憎い。お内方の深雪さまの事サ。

憲法　エヽ、深雪が事な。サア、お望みならば、進ぜませうと云うたぢやござりませぬか。

遊軒　恥を云はねば理が聞えぬ。深雪さまは元、この京の舞子。恥かしながら拙者、命も身をも抛つて、惚れましたれども、イヤ、すつたの、もじつたのと申すうちに、こなたが國元へ連れ歸らしやつたと云ふ事を聞くと、その時は、さて遺恨を含みました。今度大内への御上使、なんでもしくじらせてくれうと思ひの外、深雪さまを遣らうと仰しやる。それで、とんと腰が拔けて、さて附合つて見れば、きつい粹。けうといものぢや。

憲法　そんなら、深雪を遣らうと申したを、まだ嘘ぢやと思ひくさつたか。

遊軒　イヤ、嘘とは思はぬけれど、また女房をくれうと申す事ぢやに依つて。

憲法　愚痴ぢや。きつい愚痴。一體マア、表向きは女房で、ついぞ一緒に寢た事もない。

遊軒　嘘、けうとい嘘。女房に持つて、寢いで居るものか。それは、今度の事があるに依つて、身共への

憲法　イヤ／＼、ほんの事／＼。

遊軒　ほんの事か。

憲法　アヽ、疑ひ深い。

遊軒　そんなら、問ふ事がある。辨之作／＼々々。

ト内より

辨之　三種の寶劍を、こなたへ渡せ。

小市　ならば取つて見よやい。

辨之　その寶劍を。

トばた／＼、蔭にて云ふ。

憲遊　辨之作々々々。

ト呼ぶ。

辨之　ハイ／＼。

小市　勝負は戰場。

兩人　それまでは、さらば。

ト和歌になり、辨之作、書拔を持つて出る。

辨之　とんとモウ、結び際でござりました。アヽ、しんどい役ぢや。

遊軒　辨之作、逢ひたいと云ふは餘の事でもない。內々其方に口說いてもらうた、深雪どのゝ事。
辨之　ア、申し、コレ〳〵。
ト云ひ消す。
遊軒　大事ない〳〵。
辨之　それでも、憲法さまが。
遊軒　一つも苦しうない。憲法どのに貰うたてや。
憲法　さては、辨之作に、今まで口說かしたぢやなア。
遊軒　面目次第もない。
憲法　玆なすつぱの皮め。
辨之　ウム、主人憲法さまには、御合點でござりますか。
憲法　われが取持ちは、おれが爲ぢや。出かした〳〵。
辨之　それで讀めた。申し、遊軒さま、お返事が參りました。
遊軒　ヤア。
辨之　折を見て、渡しませうと存じて、チッと持つて居りました。
憲法　今まで見せぬと云ふ事があるものか。
遊軒　ちやつとくれ〳〵……花夕さま。おゆきより。昔の花夕を、まだ覺えて居てくれたかやい。
憲法　花の夕とは、否な替へ名ぢや。
遊軒　エ、弄らしやるないなう。辨之作、讀んでくれ。
辨之　主人の前では、あんまり。
憲法　エ、氣の弱い。その根性で、今までよう取持つた。大事ないわいやい。
辨之　それもさうかい。
ト讀む。
「疾より御返事と存じ候へども、人目の關に差控へ參らせ候ふ。誠に、御無事の樣子、風の便りに聞きまし、嬉しさこの事に候ふ、數ならぬ身にしを、さほどまで思し召し下されし御事、嬉しさ限りなう、飛び立つばかりにて御座候ふ」……飛び立つばかりでござります。
憲法　飛び立つばかりぢや〳〵。
遊軒　ばかりで〳〵。
ト辨之作、また讀む。
辨之「前方、つれなく申せしは、殿御の心の飛鳥川、とくと見申さん爲、思はずも憲法さまに請出され、國へ參じ候へども、好かぬ事ゆゑ、遂に側へ寄つた事も御座なく候ふ。」
遊軒　なんと〳〵。後は〳〵。

辨之 一お前の志し嬉しいと思ふ魂ひが、現にも通ひし可愛さは、舊に増して、早う女夫になりたいと存じ候ふ。」

遊軒 サア、堪らぬ〳〵。

ト また讀む。

辨之 「どうぞ表向きの譯、御立て下され、御返もじの程、待ち入り焦れ參らせ候ふ、花夕さま御事、今は遊軒さま參る。焦るゝ身より一……サア、焦るゝ身よりおや、ハツ。

ト 狀を抛る。遊軒、戴く。

憲法 ヨウ、花夕さま。

ト 遊軒、狀を額に當てゝ恥かしがる。

遊軒 樣々と今までは疑ひましたは、眞平お免されませう。モウ〳〵、神八幡、其許の事なら、命でも進上いたす。

憲法 それは忝なう存じまする。さつぱりと進上いたす。

遊軒 手を突きまする。

憲法 ハテ、きつい嬉しがりな。

ト 内にて

大勢 やらぬぞ。

岡中 どつこい。

ト 立て所作の三味線、太鼓、鳴る。内より

才兵 辨之作さま〳〵。

辨之 オイ、もう所作になつたさうな……私しは、ちよつと參りまする。

憲法 行て來い〳〵。

才兵 辨之作さま〳〵。

辨之 オイ〳〵、待て〳〵。合點のゆかぬ女めが振舞ひ。

ト せりふ云ひ〳〵入る。

遊軒 さて、淀川の事は斯うなされい。彼の川筋の眞中へ、眞直と堤を築くと、十三里の所が、さし渡しになされて、七里半に、京大坂の通路がなりまする。モウ、渡しぢやのなんのと、面倒い事は打ッちやつて、その利法を申し上げさつしやつたらば、莫大の御褒美でござらう。

憲法 サア、その儀を存じ付かぬでもござらねども、川の眞中へ堤を築く事は、お咎めがあらうかと存じて。

遊軒 ハテサテ、淀川は手前が切り落しました。拙者が何とも申さぬに、誰れが何と申しませう。

憲法 サア、二筋に川がなりましては、また水がぬるみまして、土砂が止まつて埋れませうと存じて。

遊軒 ハテ、川が埋れたら、なんの事。其許の御用にさへ立てば、皆埋めても大事ござらぬて。明朝、直ぐに天奏

へ、書付けをお出しなされい。手前、よろしく申して手
柄にさせませう。
憲法　兎角、よろしく頼み上げまする。明日、持參いたし
ませう。
遊軒　式禮は、昨日御指南申せし通り、鎌倉の御名代なれ
ば、門より內は、大納言の家官でござる。裝束をお附け
なされたか。
憲法　夜前、石稿中將さまがお附けなされて、とくと承知
いたしてござる。
遊軒　あの圖書などが藏人の役で、御簾を差上げまするに、
彼れがしくじらさうと思へば、やう〳〵疊から二尺ばか
り上げて置きまする。御簾へ冠を當てぬが故實ゆゑ、四
つ這ひに鼻摺らす。イヤハヤ、その態とした事が。
憲法　明日は高う上げたいものでござるが。
遊軒　イヤ、其許のは、御簾一杯に上げまする。邪魔にも
ならば、引きちぎつてなりと置きませう。
憲法　眞の太刀、土器拝領は、矢張り紫宸殿でござるな。
遊軒　如何にも。天盃頂戴の時、是非に土器を割るもので
ござる。
憲法　直ぐに土器を、鎌倉へ早飛脚で遣はしまする。自然、
割れましては。
遊軒　サ、そこでござる。その通りの土器は、二枚ござる。
一枚は、拙者が持つて居りまする。天盃頂戴して鎌倉へ
下るは、身共が替への土器、お下しなされ。割れても少
しも苦しうない。同じ土器でさへあれば、ほんの京都と
鎌倉との、儀式をするのサ。
憲法　左やうなれば、重疊の仕合せでござる。
遊軒　マア、そこを日の御門にて、こちらへこそ廻る。左
右方へ雜式が出る。こちらへお出でなされい。
ト敎へるうち、獅子とらでんの太皷入りの唄になる。
さて、騷々しうて、物音も聞えませぬ。奥へ行て、密か
に申しませう。
憲法　左やうがようござりませう。云はゞ今晚が惣稽古ぢ
や。
遊軒　例へ惣稽古がないとても、始終手前が引添うて居る
から、氣遣ひの氣の字もござりませぬ。サア〳〵、お出
でなされい。
憲法　マア〳〵、お出でなされませい。
ト入る。唄になり、喜蝶、小市が胸倉を取り、出る。
小市　コレ、放さつしやりませいなう。

喜蝶　イヤ、放さぬわいなう。
小市　コレ、お前は近江の國の縫之助さまへ、一兩日のうちに嫁入りなされますぢやないか。そんなら主あるお方ぢや。太鼓持ち風情が側へ、お寄りなされますな。
喜蝶　エヽ、其方はなう。
小市　オツと口舌は、筋ばかり云うたり。
喜蝶　去年の正月、智恩院の御忌に參つた時、わしは忍びの徒歩詣で。戀に上下の隔てはない。可愛らしい男ぢやと、思うたが戀の初め。
小市　淀へせき〳〵通ふにも、餘ッぽどに思はにや行かれぬ。大抵や大方の方の事ではござりませぬ。
喜蝶　それぢやに依つて、今度京都へ來たも、見舞ひと云ふは附けたり、其方の顏を見に來たのぢやわいなう。緣組みも何も、兄さんがさしやんした。わしや、なんにも知らぬわいなう。どうしたものであらうぞ。思案してもらはうと思うて、胸は板になつて居るわいなう。それそれ、今のやうな事、ようも〳〵云はれたなう。
ト泣く。
小市　なんぼ泣かしやりましても、その手は喰はぬ。こりや下地から知れてゐる事、態とはなうて、高が此方のやうな者ぢやと思うて、けつぶすのか。さう巧うは乘るまいわいなう。兎から云ふと腹が立たう。わしや疾から、疑うて居やせぬわいなう。
喜蝶　そんなら、疑ひは晴れましたかや。
小市　お前の心は、わしがよう知つて居るもの。
喜蝶　それに、人を術ながらしくさつて。
小市　よう術ながらしくさつたなア。
ト抱く。
喜蝶　時に、嫁入りの事は、ひよんな事ぢやなア。どうぞ思案してたもいなう。
ト記内、出る。
記内　喜蝶さま〳〵、コレ、喜蝶さま。
喜蝶　オヽ、なんぢやいなう。
記内　なんぢやどころぢやござりませぬ。與三右衞門さまから、お人が參りましてござります、ちと仔細があれば、一兩日のうちに輿を入れねばならぬ。喜蝶を早う歸してくれいと、お迎ひが參つてござりまする。お供廻りは表に待たせ置きました。拙者がお供仕りまする。サアサア、お出で遊ばされませい。
喜蝶　サイナウ、去ぬるわいなう。

記内　若殿様もそれゆゑに、急にお國へお歸りなされねばならぬ。お供廻りの用意はよいか。

ト橋がゝりより

家來　ハア。

喜蝶　これは又、急な嫁入りではある。

記内　何が急な事はござりませう。殿樣もお前も、御婚禮は御一緒になされねばなりませぬ。斯樣におめでたい事はござりませぬ。

ト此うち喜蝶、小市の側へ寄り

喜蝶　どうしようぞいの。

小市　サア、どうしようとて、マア一旦は、嫁入りなされずばなりますまい。その思案と云へば。

記内　ヤイ〳〵、おのれは太皷持ちぢやないか。御寮人の側へ寄つて、嫁入りなされずばなりますまいとは、おのれが指圖は受けぬ。びらしやらした事があると、おのれが首が飛ぶぞ。

小市　ハイ〳〵。

喜蝶　便りを待つて居るぞや。

記内　なんの便りを。サア、お出でなされませい。

喜蝶　來てたもや。

ト小市に云ふせりふ、記内、間違うて云ふ事あり。

記内　お供仕りまする。

喜蝶　必らず、おぢややえ。

記内　これはしつこい。お供いたしますわいなう。

ト入る。總角、縫之助、皆々、出る。

總角　ござんせ〳〵。

縫之　なんぢやいやい。

小市　ソリヤ、もう一口、始まつたワ。

總角　なんで、お前は女房持たんす。

縫之　誰れがいやい。

總角　あの喜蝶さんは云ひ號けで、淀から嫁入りさしやんすと、今までわしに、よう隱して居やしやんしたなう。

禿　さうぢや〳〵、キツと云はんせ。

縫之　其やうに、煽てゝくれんな。

總角　イヤ、煽てる事も何もいらぬが、急に身請けの客があつて、今日か明日には埒が明く筈。それではどうもならぬに依つて、思案して下さんせと云うて置くのに、待はずに、抛つて置かしやんすに依つて、遣り手のすぎが、もう今夜の明けまでに身請けの相談が出來た、早う戻れと、いま迎ひの駕籠が來てあるわいなア。

縫之　ヤア。

總角　ヤアどころか、もうわたしに飽きが來たに依つて、喜撰さまを女房に持つて、身請けのあるを幸ひ、わしを突き放すのぢやな。お前ばかりは、さう云ふ心ではあるまいと思うたに。こちや、聞かぬ〳〵、エヽ〳〵。

ト抓る。

禿　さうぢや〳〵、グッと云はんせ〳〵。

縫之　サイナウ。おれも、その事に如才はないけれども、兄貴の御上使で、金の向きは聞き上げて、掛け屋へ云うてやつても、根ッから取合はぬが、氣遣ひしやんな、夜明けに金拵らへて身請けする。

總角　イエ、大事ござんせぬ。高があつちへ行たら、死ぬる分の事ぢや。

縫之　其やうに、短氣に物を云やつては、どうもたらぬ。

總角　イエ〳〵、どうなとお前の心次第にさしやんせ。

縫之　サイナウ、どのやうにしてなりと。

ト花車すぎ、出る

すぎ　總角さん、先刻にから、駕籠を待たして置いたが、何をしてござんす。今夜中に去なねば、身請けの時が切れると、また叱られる。ちやつと戻らしやんせいなう。

總角　エヽ、騙された。わしやモウ去にやせぬ。

すぎ　去ないで詰まるものか。太夫さん方、明日は身請けの惣揚げぢや程に、早う戻らしやんせ。サアサア、早う早う。

縫之　コリヤ、すぎぢやないか。マア、待つてくれ。太夫は、おれが身請けするのぢや程に、ちつとの間

すぎ　申し〳〵、コレ申し。いつぞやから、揚げ代の算用もせずに置いて、わしらへの纏花もくれずに、五百兩と云ふ身請けの金が出來るものか。

縫之　さればいやい、金はな。

すぎ　イエ〳〵〳〵〳〵、お前ぢやと云うては、親方が身揉ひ立てゝ否がる。待つ事はマアなりませぬ。身請けなさるゝなら今夜中に、五百兩の金を持つてお出でなされませ。サア太夫樣、ござりませいなう。

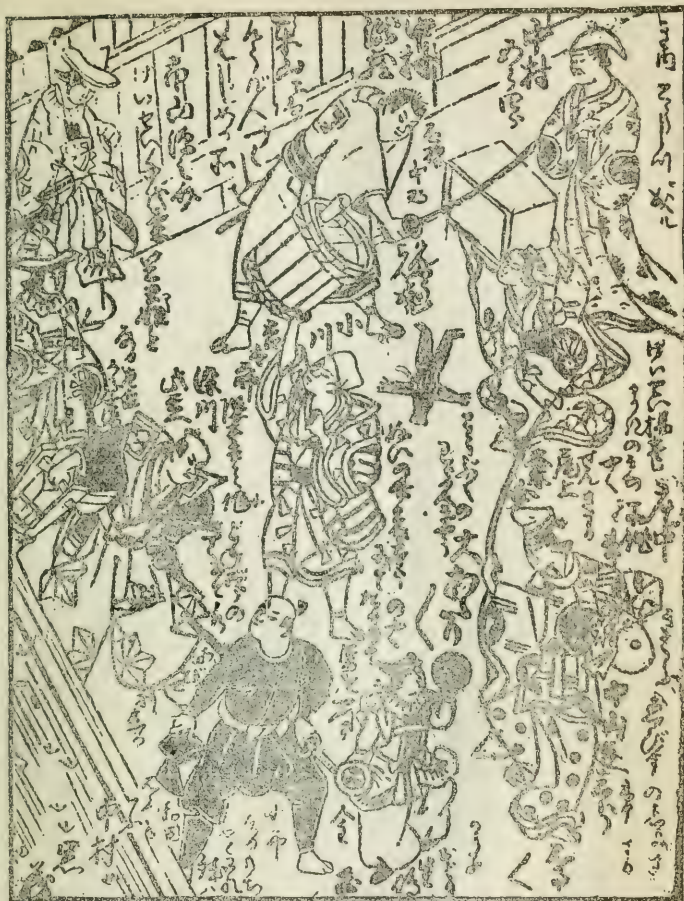
總角　殿樣、もう逢ふ事はござんすまい。さらばでござんす。

縫之　コレ、それをやつては。

すぎ　アヽ、ならぬと云ふのに。

縫之　サイヤイ。

すぎ　金はな。

安永元年正月大阪

角の芝居上演繪番附

縫之　サア、金は。

すぎ　金持つてお出でなされませい。サア、ござれ。コレござれと云ふのに。

縫之　ハテ、これはどうもならぬわいやい。

皆々　申し、どうで生きて居る氣はござんすまいぞえ。

小市　ア、、どこも角事の、生粋ぢやなア。

ト辨之作、石橋中將、圖書、才兵衞、出る。

辨之　其やうに云ふ事もないわサ。

才兵　イヤ、云はにやなりませぬわいなう。

中圖　サア、よいわいやい。

才兵　イヤ、ようたいわいなう。コリヤ、どうして下さりまする。

小市　また一組、始まつたワ。

辨之　遣ると云ふのに。

才兵　サア、いま貰はう。あるまいが。頭から斯うなるを知つて居るに依つて、マア第一、お公家を客にする事は否ぢやと云ふのに、今日まで太夫衆を廓で、こなさん達三人で、外の客をせぬに依つて、身上は上がつたりぢや。今日の明日のと引摺られて、橋の寮へ來い、合點ぢや。來て見れば、どこへ金、首筋押へて戻らにやならぬ。渡さつしやれぬと、代官所へ斷るぞや。

辨之　其やうに、大仰に云ふ事はないわいやい。

才兵　イヤ云ふ。石橋中將さまと圖書さまと、辨之作さまとぢやと。

圖書　辨之作、コリヤ、どうするぞいやい。

辨之　もう料簡がならぬわいやい。

ト拔く。留める。

才兵　なんぢや。切るのか。切られう〳〵。

辨之　おのれ、眞二つに。

才兵　切つてもらはうわい。

ト川浦遊軒、出る。

遊軒　待て。

辨之　イヤ、お退きなされませ。

遊軒　待て。何も皆聞いた。町人の無法者を相手にして、不調法者めが。

才兵　イヤ遊軒さま、町人の無法者とは、金受取らうと云ふが、どうして無法者ぢや。

遊軒　二百兩ある、受取れ。

才兵　オ、、受取らいでは。

ト遊軒、才兵衞を背打ちに打ち据ゑる。

アイタ／＼。
遊軒　身の程を知らぬ奴。おのれ、高位を咎にした事を、知らぬ顔なればその通り。うぬが口上から申し上げると、うぬが首が飛ぶが、うぬ、最前のやうな事、いま一言云つて見よ。ぶッ放すぞ。
才兵　アイ／＼、あやまり入りましてござりまする。
遊軒　金は、身が續ける程に、辨之作、何方へなりと行け。
辨之　ア、有り難うござりまする。今までだん／＼お金を貰ひましたに依つて、云ひ兼ねて居りまする。
中將　才兵衛、これから、居續けるぞや。
才兵　なんぼうなりとも、お出でなさりませい。
圖書　ニ、ヽ慾づらの引ッ張つた奴ぢや。
遊軒　コレ縫之助、氣の細い、どうした事ぢや。ソレ、五百兩。
　ト抛り出す。
縫之　エ、ヽ。
遊軒　明後日は、嫁御の輿が入るとあつて、家中が迎ひに參つて居る。將監どのゝ機嫌の損ねぬやうに、早う歸らしやれ。太夫は、後より身請けしてやるわいなう。
縫之　すりや、身請けして下さりますか。
遊軒　辨之作、五百兩を廓へ持つて行て、總角が身請けして、國へ連れて行け。
縫之　エ、ヽ忝なうござりまする。
辨之　若殿、お嬉しうござりませう。
縫之　嬉しい段か、生々世々、この御恩、忘れ置きませぬ。有り難うござりまする。
遊軒　まだ／＼金は、なんぼうでも用に立つ。もう一家同然ぢやわいなう。
縫之　日本晴れがしたやうな。
中將　この勢ひに、どつと呑み明かさうではあるまいか。
才兵　斯程小判の山を築くからは、太夫樣方を引連れて、直ぐに廓へ押しかけ山の郭公。
辨之　たつた今まで惡態を吐きくさつた大化坊めが。
　ト侍ひ一人出て
侍ひ　花滿憲法さまへ、追ッつけ、七ッでござりまする。お歸りあられませう。
遊軒　憲法どの／＼。
　ト憲法、出る。
憲法　最前より一遍と、尋ねて居りました。
遊軒　イヤモウ、貴殿は念を入れて、稽古なさる事はござ

らぬて
憲法　オヽ、迎ひに來たか。
侍ひ　ハヽア。
憲法　私しはもう、參じませう。
遊軒　お出でなさるゝか。
憲法　弟、どなたも皆、送つて行け。
中將　イヤ／＼、それには及ばぬ。おれも、直ぐに後から參内する。
圖書　明後日、嫁御がお入りある。直ぐに歸らしやれ。
憲法　イカサマ、親どもより度々の使ひでござる。そんなら、お暇申して、國へ歸りませう。
縫之　イヤモウ、今日ほど嬉しい事はない。
遊軒　然らば諸事は、先達て申した通り、明朝、大内でお目にかゝりませう。
憲法　いよ／＼、頼み存じまする。
遊軒　イヤモウ、一面に皆、味方サ。
憲法　あなた、これにござりませい。
中將　オヽ、明日逢ひませう。
圖書　明日々々。
憲法　廓の者ども、大儀ぢや。
皆々　ようお出でなされました。
憲法　紋之丞、サア、供せい。
紋之　ハア。
憲法　明朝御意得ませう。
ト七ツの鐘になる。憲法、入る。
遊軒　サア／＼、廓の者どもを連れて、縫之助も歸らしやれ。國元に將監どのが、待ち兼ねて居られう。
縫之　そんなら身請けの事、頼み申しまする。
辨之　私しが呑み込んでをりまする。
縫之　ヅツとこの嫁入りは、ひよんな事ではあるぞ。
ト小市、出て
小市　申し、旦那。
縫之　小市か。
小市　その嫁御を、どうぞお去りなされて下さりませ。
縫之　ヤア。
小市　私しは喜蝶さまと、云ひ交して居りまする。
縫之　ヤア。
小市　あの子も、行きともなし、お前も持ちともなし、去つてさへ下さりますれば、私しは、首が落ちても添ひまする。胴を据ゑましたのでござりまする。御得心なくば、

いつそ爰で殺して下さりませい。
辨圖　サア、えらい事を云ひ出した。
小市　お大名の嫁御に、疵を付けました。殺して下さりまするか、去つて下さりまするか、返事なされて下さりませい。爰は動きは致しませぬ。
縫之　よう言ふうしてくれたなア。如何にも遣らう。と、云つても、親仁が得心せねば、遣らうとも云はれず。
辨之　きつう思ひ込んだ顔付きぢや。
小市　命は捨てゝ居ります。
圖書　不便な事ぢやなア。
中將　遊軒、どうぞ仕様はあるまいか。
遊軒　イヤ、なか〳〵器量者ぢや。ずつけりと、よう云うた。その代りには、添はれるやうに思案してやらう。
小市　エ、。
縫之　去るやうの、分別がござりますか。
遊軒　ある〳〵。
皆々　どうでござりまする。
遊軒　小市、われは人の見知らぬを幸ひに、武士になつて、縫之助の國へ行て、神言の中へ强請り込め。
皆々　さうして、どうぢやな。

遊軒　爰で其方が云ふには、手前は、なんの何と申す者、即ち淀與三右衛門が妹、喜蝶は二世までと云ひ交して居る某。夫のあるもの娶るとは不義者、間男ぢやと、强請りかけるのぢや。
皆々　面白い〳〵。
遊軒　そこで、こなたが、さては左やうか、其やうなみだらな女を女房に持つて、惡名取る事ならぬ、云つたと云ふ。
皆々　去らにやならぬ。
遊軒　かぶせ物しられた事ぢやに依つて、親將監どのも、グッとも云ひ分ない。さつぱりと去つてしまふ。その後が駈落ち。與三右衛門ぢやと云うて、指が汚ないとて、切つても捨てられず、それなりにしてしまへば、なんと、夫婦になられるではないか。
皆々　シタリ。
辨之　智惠もあればあるものぢや。
縫小　これより外に、思案はないぞ。
縫之　何かに付けて結びの神樣、忝ない。
遊軒　拜まつしやれ〳〵。
縫之　さて、われは侍ひになつて來るか。

小市　參りまする。
縫之　よし、仕組み行かざなるまい。
小市　やるものぢやござりませぬ。若殿、縫之助さまに、ちよつと逢ふなどゝ身知らずぢや。
縫之　さうぢや。こりや、道々云ひ合さゞなるまい。出鰐目に、やつて見ようかい。
小市　出鰐目々々々。
ト侍ひ一人、出て
侍ひ　旦那、これにござりまするか。深雪さまより、御狀が參りました。
縫之　エヽ、早う戻れであらう。
ト狀を見る
侍ひ　イヤ〳〵、わざ〳〵の飛脚で參りました。密かに御覽なさりませい、後は火中なされてとの儀でござる。
縫之　ハテナア、むづかしい。なんぢや。花さま參る、御存じ。
ト遊軒、取り
遊軒　よし〳〵、覺えある〳〵。
縫之　花さま、御存じ。覺えがござりますか。
遊軒　人に見せなと云ふ筈ぢや。こりやモウ、夕を拔いて、花さまぢやわいやい。
辨之　洒落るワ〳〵。
中岡　今のか〳〵。
遊軒　今のとも〳〵。
縫之　お前のか。
遊軒　世話を燒く、根本根元ぢやわいやい。
小市　サア、早う行かうぢやあるまいか。
縫之　去なう〳〵。
辨之　追ッつけ身請けしてやりませう。
縫小　結ぶの神樣、有り難うござりまする。
遊軒　これは、御慇懃のお禮、痛み入ります。
ト鹿爪らしく云ふ。
才兵　サア、太夫樣方、お出でなされませい。
皆々　後から戻らしやんせえ。
圖書　お歸りかいなア。
中將　さらば。
辨之　ようお出でたえ。
ト唄になり
縫之　これは、見馴れぬお方でござる。
ト歩きながら云ふ。

小市　拙者は、でんてく彌五右衛門と云ふ、浪人者でござる。
縫之　ハヽヽ、こりや、えらい〳〵。
小市　不義者、遁がれまい。
縫之　待つた。不義とは、何を以てお云やる。
小市　ヤア、巧い〳〵。
トせりふ、花道の眞中に立ちどまり、云ふ。いろ〳〵こなしあり、舞臺より褒める。皆々、入ろ。合ひ方、唄になる。
辨之　サア、それから、燕君の文が承はりたい。
遊軒　先刻の狀の上に、引續いて到來したは、實が來たわいなう。
中將　エヽ、あやかり者め。
圖書　ちつともあやかる爲ぢや。我れら讀みかけうか。
遊軒　ひけらかすではないが、聲を上げて讀んでくれ。
遊軒　さらば聽聞仕りませう。
圖書　「いよ〳〵御機嫌よく御わたりなされ候ふと、喜びまゐらせ候。さ候へば、辨之作に文遣はし候ふ、大方御覽も候はんと存じまゐらせ候。」
遊軒　見たい〳〵。
圖書　「隨分嫌らしく書きつらね參らせ候ふゆゑ、お前が御覽なされたらば、お笑ひ草と存じまゐらせ候。」
遊軒　隨分嫌らしいのがよい。なんの笑はうぞいなう。
中將　ても、きつい好きぢやなア。
圖書　「前方、京に居りし時分より、いろ〳〵口說き候へども、身しん絕えて、遊軒は嫌にて候ふゆゑ、七りんけんぱい願籠めいたし候ふ所にて、お前樣と連れ添ひ、朝夕に有り難く存じまゐらせ候。」
辨之　ヤア。
遊軒　もう一度讀んで見い。
圖書　「身しん絕えて、遊軒は嫌にて候ふゆゑ、七りんけんぱい。」
中將　ドレ。「願籠めいたし候ふ所にて、お前樣と連れ添ひ、朝夕に有り難く存じまゐらせ候。」
中將　なんの事ぢや。
ト狀を辨之作の前へ抛る。
遊軒　大事ない。その後、ズカ〳〵と讀め。
辨之　ハイ。
遊軒　讀めやい。
辨之　ハイ。

ト辨之作、氣味惡さうに讀む。
「ところに又々、家來辨之作を賴み、いろ〳〵と口說き申し候ふゆゑ、賴む遊軒は、べら坊とも阿房とも存じ候ふが、辨之作めが仕方、より〳〵に手討と存じ居り申し候ふところ。」
遊軒　サア、後を讀め。
ト氣色立つて云ふ。
辨之　ハイ。
トうぢ〳〵する。
遊軒　讀めいやい。
トぐつと云ふ。
中將　讀んでしまへやい。
ト引ッたくり讀む。
「惡緣契り深しと、今度の御上使、遊軒に大內の作法を習ひ、諸事お賴みなさらねばならず、私しに遊軒への文遣はし候ふやうに、細々仰せ下され候ふゆゑ、筆も墨も穢れしやうに存じ候へども、阿房が氣に入るやうに、道ならぬ文遣はし申し候ふ」。
圖書　ドレ、ちつと讀まう。「お申し越しの通り、あの文にては、如何な遊軒も腰を打拔き申すべく、御上使の首尾も、よく致し候はんと存じ參らせ候ふ、後は思し召しの通り、上使の役目さへおしまひ候はゞ、遊軒を引出し、赤恥をおかゝせなされ候はん事、御尤もに存じ候ふ、一體慾深き佞人にて候ふ間、そのお心得にて、また國へお歸りの節、早々辨之作を逆磔にお上げ御尤もに存じまゐらせ候」
辨之　ヤア。
ト頭ふ。
圖書　「御機嫌にて早々御歸國、待ち入りまゐらせ候。火中へ。花滿遠法さま參る、深雪より。」そんなら花さまは、花滿の花であつたか。
中將　こりやどうぢや。
ト右のうち遊軒、腹の立つこなし、いろ〳〵あり、辨之作が持つて居る金を引ッたくる。
辨之　これは。
ト遊軒、默つて懷中へ入れる。辨之作、思ひ入れ。
遊軒　うぬ〳〵……今までくれた金は、騙られたと思うて濟ます。うせう。
ト辨之作、鐺取つて
辨之　待つた。
遊軒　物吐かすと、打ち放すぞ。

辨之　成る程、御立腹は御尤も。今までこなた樣を僞はり、金錢を騙り取つたかと思し召すところが、どうも濟まぬ。サア、打ち放して下さりませ。

ト遊軒、振返り、切らうとする。

遊軒　ぶち放すぞよ。

辨之　今の状の文句、國へ去ねば逆礫。どちらでも遁がれぬ命。

遊軒　憎くい憲法め。

辨之　彼奴等には構はぬ、大恩はこなた樣。

ト遊軒、思ひ入れ。

遊軒　もう、何時ぢや。

圖書　追ツつけ夜が明けまする。

遊軒　おのれ、それ程に思ふならば、云ひつける用がある。

辨之　何なりとも。

遊軒　コリヤ。

ト囁く。

辨之　畏まつてござりまする。

遊軒　行け。

ト辨之作、走り入る。

圖書　遊軒どの。

中將　其方が心は。

遊軒　コレ。

ト兩人に囁く。

兩人　合點ぢや。

遊軒　先へ廻つて。

圖書　今出川口の門からござれ。

ト兩人、入る。返し。

造り物、一面の築地、公家門の體。橋がゝりより雜式二人、その後へ仕丁、黑裝束の公家、二行に並ぶ。その後へ對の黑裝束にて花滿憲法、出る。その後へ諸太夫二人、仕丁大勢、靜かに出て、西の方、公家門にて立ちどまる。

公一　お庇で、四位の侍從に兼官いたし、有り難う存じまする。

憲法　町支配の御兩所、御苦勞。取分け櫻田左衞次どの、御苦勞。

公二　鎌倉より、京都お館を預かり居りまする武家に、納言の兼官、有り難う存じまする。

ト四人、目禮する。雜式より段々、門の內へ入る。と

公家門、引き道具にて、大臣柱ともに東へ引込む。花道より兩方へ、御簾のかゝりたる屋體、セリ上がる。花道より舞臺、所々に御簾かゝりたる御殿を引出す。憲法一人、出る。公家一人、向うへ行き、摺れ違ひ、躓く。

公家　不作法な奴の。

憲法　御免なされませい。

公家　わりや、誰れぢや。

憲法　イヤ、御免なされませい。

公家　見知つたぞ、覺えて居よ。

憲法　イヤ、申し〱。

ト公家、云ひ捨てにして入る。憲法、本舞臺へ來る。また公家一人、ツカ〱と行き當る。

公家　ア痛々々。

トこける。憲法、抱き起し

憲法　これは不調法な。御料簡下さりませい。

公家　ヤイ、わりや見馴れぬ者ぢやが、誰れぢや。

憲法　私しは、鎌倉よりの上使。

公家　ムウ、侍ひが禁中へ來るに、返りざはりの作法も知らずに來る。但し鎌倉から、斯うせいと云ひ付かつたか。

憲法　イヤ、貞平、不調法でござりまする。

公家　後日にキッと云ひつける程に、さう思へ。

ト行かうとする。

憲法　イヤ、申しそれは。

公家　エ、。

ト突き飛ばし、入る。憲法、思ひ入れあつて

憲法　遊軒どのは、どこへ行かしやつた。

トまた公家一人、通る。

申し〱。

公家　なんぢや〱。

憲法　紫宸殿へは、どう參じまする。

公家　ハ、、、、大納言の裝束を着て、紫宸殿を知らぬとは、ハ、、、、、。

憲法　イヤ、ちと便りにする人を見失ひました。敎へて下さりませ。

公家　紫宸殿は、さう行くのぢや。

ト頭をグルリと廻す。

憲法　どう、參じまする。

公家　さう行くのぢや。

憲法　どう。

公家　さう。エヽ、鈍な。
　　ト笏で頭を突き、入る。
憲法　何を云うても、便りにする人が居ぬに依つて。
　　ト憲法、思ひ入れある。中將、出づるを見附け
イヤ、石橋中將さまではござりませぬか。夜前はお目に
中將　ヤイ〳〵、コリヤ、かりや誰れぢや。
憲法　ハテ、私しでござりまする。
中將　私しとは。聞けば、鎌倉よりの使ひとあるが、武士
に、心ある物云はるゝ覺えない。夜前とは、なんの事ぢ
や。知らぬぞよ。
憲法　成る程、御尤も。ついにお目にかゝつた事もござり
ませぬが、ちとお尋ね申し上げたい儀がござりまする。
紫宸殿へは、どれから參りまする、教へさつしやつて下
さりませ。
中將　紫宸殿は、わが足の向く方へ行け。大たわけめ。
　　ト下座の方へ行く。憲法、呆れて居る。
憲法　こりや、餘程思ひ違つたわいなう。併し、石橋中將
さまが、斯う行かれるからは、此方が紫宸殿であらう。
　　ト見て
櫻と橘が見える。斯うぢや〳〵。

　　ト行く。とこれより引き道具、御簾のある所へ行く。
　　圖書、此方に居る。憲法、御簾、低うかゝりあるを、
　　揚げて行かうとする。
圖書　コリヤ〳〵、御簾上げる事はならぬ。潜れ〳〵。
憲法　さう仰しやるは圖書さま。餘り御簾が低うござりま
す。もそつとお上げなされて下さりませい。
圖書　ヤイ〳〵、御簾を上げいとは、慮外な奴め、大内の
事、差配するか。
憲法　差配は致しませぬが、この約束では。
圖書　約束とは何が約束。御簾へ手をさへると、後日に鎌
倉へ、キッと申しつくるぞよ。
憲法　ハア。
　　ト憲法、思ひ入れあつて、御簾の内へ潜るところ、圖
　　書、冠のゑいを持つて引く。冠、落ちる。
圖書　不吉者。冠落した。天奏へ申し上ぐる。待つて居
よ。
　　ト走り入る。憲法、これより思案して、胸を極める思
　　ひ入れにて、冠を着けて、しを〳〵と行く。御殿の道
　　具、引出す、圖書、中將、公家四人、遊軒、居る。憲
　　法、階の側へ來る。

中將　鎌倉の使ひ。御座どころぢや。
憲法　ハア。
ト中將の顏を見て、ギックリする。
中將　御座近う、上がらつしやれ。
憲法　ハア。
トまた階を渡る。向うの御簾、少し上がる。
中將　出御。
皆々　シイ。
ト辭儀する。
中將　每度の格に任せ、御太刀を下さるゝ。頂戴。
憲法　ハツ。
ト中將、御簾の內より黃金作りの太刀を出す。鞘を殘して、身ばかり出す。憲法、見て、恟りして、柄の方より取る。
圖書　玉座が近い。白刃を隱せ〳〵。
憲法　ハツ〳〵。
ト袖の下へ入れる。
中將　頂戴の物、隱す事緩怠。
憲法　ハツ。
ト出す。

中將　金剣狼藉。
ト憲法、腰へ差さうとする。
下され物を腰に差す慮外者。
憲法　ハツ〳〵。
ト憲法、思案して、襟を裂き、白刃を隱す。
中將　古格の獻上物は、どうぢや。
憲法　先達て、天奏方へ、供へ置きましてござります。
中將　不調法千萬な、天奏に受取つた者、一人もない。直に持つて上がるは知れた事。不念、法外な。
憲法　ハツ〳〵。
ト此うちより、無念のこなしある。
中將　天盃、頂戴。
憲法　ハツ。
ト中將、三方に大土器を載せ、御簾の內より持ち出で、憲法の頭の側へ置く。土器、破つて置く。憲法、土器を取上げる。破つてあるゆゑ、ちやつと膝へ入れる。
中將　この度の使ひ、甚だ法外の至りなれども、其まゝに差免す。下がれ〳〵。
憲法　ハツ。
ト憲法、階を下り、少し思ひ入れあつて、後振り返り

行く。向うより公家二人出て立ち塞がる。通さぬゆゑ、
附け舞臺の方へ行く。また、公家二人出て立ち塞がる。
その外、皆々、憲法を眞中へ取卷く。

こりや、何れも方は、なんとなさるゝ。

公一　イヤ、なんともせぬ。大納言の劍官で、大內へ來るからは、歌もなるであらう。ちつと所望しようかい。

憲法　イヤ、無骨者でござりまする。

公二　ハア、歌はゆかぬか。歌詠む術を知らいで、大納言の劍官するとは、太い奴ではあるわいなう。

公三　面の皮の厚い奴ぢや。

公四　イヤ、厚いものぢや。

ト皆々寄つて憲法が顏をこづく。

憲法　どのやうになされても、知らぬ事は存ぜぬが、中將さま、國香さま、こりや又、遊軒どのも、酷い仕樣ぢやぞや。

遊軒　酷いとは。

憲法　イヤサ、宵までは。

遊軒　宵まではとは、上使が宵に公家と對顏しても、大事ないか。

憲法　イヤサ、それは。

中將　大事の上使が、お目見得せぬうちに、我れらへ內通しても大事ないか。

皆々　逢つたが定か。宵までとは／＼。

憲法　イヤサ、ついにお目にはかゝりませぬ。

皆々　その筈／＼。

ト憲法、遊軒が側へ行き

憲法　遊軒どの、だん／＼御造作、お禮はゆるりと申さう。差當つて、土器が破れました。直ぐに鎌倉へ下しませねばならぬ。彼の替へ土器を、どうぞ所望させて下されそれ程の事は、相違なうなされ下され。

遊軒　替へ土器とは、なんの事ぢや。

憲法　ハテ、この間から教へさつしやれた替へ土器。

遊軒　天盃は其まゝで鎌倉へ遣はし、あの方で頂くものぢやが、ア、頂戴の土器は捨てゝしまうて、下々等の呑む盃を、鎌倉へ下すか。

憲法　イヤ、左やうではなけれども。

遊軒　阿房盡したら、鎌倉まで祟りが行かうぞよ。

憲法　ハ、ア、よう思へば、これは、なんぞ足らぬ物があるに依つて、俄かに此やうになされたと見える。後日謝禮は、如何程でも致さう程に。

遊軒　コリヤ〳〵〳〵、なんぢや、謝禮とは、頂戴土器は塵芥へ捨てゝ、金で買うて去ぬる盃を、鎌倉へ遣るのか。

皆々　金で買ふと云ふのか〳〵。

憲法　イヤ、全く左やうでござりませぬ。

遊軒　先づ第一、見た事もない態で、横柄さうに遊軒どのと、餘り横柄に吐かすと、青侍ひに云ひつけて、頤蹴放すぞ。

憲法　それは又餘り。

遊軒　餘りとは〳〵、

皆々　餘りとは〳〵〳〵。

ト この間に遊軒、上の方へそろ〳〵歩み立つて居る。

憲法　サア〳〵成る程、どなたも〳〵、お近付きではござりませぬが、恭々しい大内へ入り、少し取逆せましたか、てん〴〵致したさうにござります。眞つ平御免下さりませう。

遊軒　さう云へば、まだしもぢやが、今日の無禮、式法はみな破れた。後日にお咎め行く程に、さう思うて居よ。

憲法　斯うなる上からは、後日のお咎めは、覺悟の前でござるが、遊軒どの、これは又、餘り酷いと申すもの。たつた今までは、式禮作法、殘る所もなう、懇ろに指南して、今さら此やうになさるゝは、なんぞ一物あるものでござらう。淀川筋も、通路の儀も、貴殿の教へのやうに、七里半の堤、築く事を自筆に認め、天奏へ差上げたれども、今になんの御沙汰もなし、此やうに惡う横に出さつしやると云ふは。

皆々　横にとは〳〵〳〵。

憲法　サア、横と申すは拙者が事。遊軒どの、私しは縛り首に遭ふとても、いとひは致さぬが、天盃の土器と、眞の太刀は鎌倉へ納めねば、末代鎌倉将軍の疵になります。茲をどうぞ聞分けて下されい。

遊軒　オヽ、笑止な事ぢやなア。如何にも、天盃土器は二枚。一枚は遊軒が持つて居る。コレ、雲の内に、關白の御判を据ゑられたのは、これぢや。

ト 土器を出して見せる。

欲しかろ。先刻に土器を破つて置いたも、身共ぢや。

憲法　成る程、よく〳〵腹の立つ事があるものでがなあらう。如何やうになと、腹の癒るやうにした上で、その土器を下さりませ。賴みます。コレ、遊軒どの、賴みます

る。
遊軒　コレ、皆御覧じ。この吠え面わいなう。
圖書　その吠え面へ、笏振舞はう。
ト笏で叩く。
中將　ドレ、おれがのも一つ喰はさう。
ト また叩く。
公一　おれも喰はさう。
公二　これも喰へ。
皆々　これを〳〵〳〵。
ト皆々、憲法を散々に叩く。憲法、キッとなる。
なんぢや〳〵〳〵。
遊軒　無念なか。
憲法　なんの、この位な事が無念にござらう。
遊軒　それならば又、土器遣るまいものでもない。
憲法　どうぞ下さりませい。
遊軒　オヽ、遣らう。
ト柄にて叩く。憲法、見て悄り。額に血少々流るゝ。
無念なか。
憲法　なんの無念にござりませう。
公一　ドレ、もう貰ふやうにしてやらう。
ト蹴る。
圖書　おれも、貰ふやうにしてやらう。
ト蹴る。
中將　肋で貰うてやらう。
ト蹴倒す。憲法、思ひ入れ。
遊軒　もう遣るぞ〳〵。
憲法　どうなりとなされませい。
遊軒　オヽ、どうなりと、せうわい〳〵。
ト蹴倒し、踏む。憲法、遊軒が側へ行き
憲法　サア、もう大概腹が癒えたであらうなう。
遊軒　オヽ、その位にしたら、もうよい。今こそ土器遣らう、と云つたらよからうが、ならぬ。
憲法　此やうにしても、ならぬか。
遊軒　コリヤ、これでもならぬ。
ト狀を出す。憲法、讀んで、悄り。
憲法　すりや、この狀を見たに依つて。
遊軒　うぬが絶體絶命ぢや。土器も、斯うぢや。
ト打ち割る。
憲法　もうさうすりや、是非に及ばぬ。
ト遊軒を一かせ切る。

皆々　ヤア、切つたワ〱。

ト少し立廻りあつて、追ひ廻す。憲法、冠を締め直し、裝束を捲り上げ、用意して、また切りにかゝるを、いろいろあつて、追ひ込む。道具、元へ戻る。中將、圖書、いろ〱逃げ廻る。

中將　サア〱、大抵の事ではないぞ。

圖書　中將さま〱。

ト圖書、中將、行き當り

中將　遊軒は、なんとした。

圖書　遊軒どのは今出川口より、二條の館へ送りました。

中將　女中方は。

圖書　みな關白さまのお指圖で。

中將　淀、伏見、膳所の屋敷へも、早打ち遣はしたれば、追ツつけ加勢が來るであらう。

圖書　イヤモウ、淀の與三右衞門、早打ちで、追ひ〱駈けつけまして、日の御門まで參つたれど、迂濶にもえゝ入られず、御門に待つて居りまする。

中將　膳所の火消し屋敷も、追ひ〱に駈けつける。憲法がもし手に餘らば、與三右衞門を加勢に入れう。

圖書　關白樣へ伺ひませう。

ト走り入る。半素袍に露取つた侍ひ、掛け烏帽子にて、長道具を持ち、八人、憲法を取卷き出る。憲法、冠着ながら、裝束を捲り、大タテあるべし。圖書、中將、公家皆々、かゝる。タテあつて

憲法　卑怯な川浦遊軒、出ぬか〱、出やがらぬか。

ト遊軒を尋ねるうち、右の人數、取りつく事あるべし。此うち遠責め。大勢、組みつく。切り倒し、井戸へ入る。

侍ひ　南無三方、空井戸へ取逃がした。堀筋水門を、捜せ捜せ。

ト皆々入る。道具、一面の惣築地になる。淀與三右衞門、花道より早馬にて出る。

與三　憲法は、空井戸へ逃げ込んだとある。拔け道は、この水門。

ト窺ひ居る。憲法、向うの水門より出る。あたりを見て、これより冠と裝束を脱ぎ、前に眞の太刀、土器を置く。與三右衞門、隱れて見て居る。憲法、身繕ろひして腹へ突ッ込む所へ、見船、鉢卷、大小にて出る。憲法を見て惘り。

見船　ヤア、憲法さまか。

安永元年正月大坂角の芝居上演繪番附

憲法　神道源八が女房、見船か。

見船　まそつと早う駈けつけたら、やみ／＼と御生害は、させますまいもい。

憲法　イ、ヤ、悔むな。大内を騒がしたれば、牛裂き釜入りにも遭ふべき體、切腹するは我が本懐。

見船　委細の様子は承はりました。川浦遊軒が、奥様に無體の戀慕、それゆゑの邪ま。

憲法　無念は無念と堪えやうが、眞の太刀、天盃の土器はこの通り。鎌倉への申し譯、どうも堪えられぬ。

見船　併し、遊軒を討ち漏らしなされて、さぞ殘念でございませう。

憲法　して、遊軒は。

見船　痴養生に、二條の館へ歸りました。

憲法　エ、。

ト無念がる。

見船　お道理でござりまする。

憲法　其方は、身が首に、この天盃、眞の太刀を添へ、鎌倉へ有りの儘を訴へて、指圖を待て。

見船　有りの儘に言上せば、理非は立つても、大内を騒がせた科。もしお國を沒收せらるれば、奥様や縫之助さまは門前拂ひ。親殿様は、いづくの大名へぞお預け。

憲法　花滿の家は斷絶。

見船　憲法さま、お國も城も、身の成る果。

憲法　エ、、無念なわやい……サア、介錯せい。

見船　ハツ。

ト後へ廻る。

憲法　この腹へ突ッ込んだる刀を、源八に渡し、遊軒を討ち漏したるを、無念なと云へ。關口平太は、遊軒が弟ぢやぞよ。

見船　エ、。

憲法　あれら風情に目はかけな。志す怨みは、川浦遊軒一人ぢやぞよ。

見船　畏まりました。

憲法　介錯。

見船　エ、。

ト首を切り、これより裝束に包み、右の太刀、土器を包み、脊中に負ふ。この間、侍ひ、下座、橋がゝりより、鎗を持ち狙ふ。見船、尻目にてキッと見付け、思ひ入れあつて、知らぬ風にて、わざと鎗先へ向ふ。両方、そろ／＼付け寄つて、見船を挾み、一時に突く。

見船、開く、兩人、芋刺しになる。また突き出す。見船、切り倒し行かうとする。圖書、熊手にて見船を引ッかけ立てる。圖書、長刀にかゝり、首、場の中へ飛ぶ。公家一、また立ち塞がる。顏を切る。替へ面にて死する。この模樣のタテあつて、見船、向うへ走り入る。與三右衞門、始終を見て、頭巾を取り、見船を遙かに眺め、思ひ入れあつて

與三　ハテナア。

ト手を打つ。

幕

二段目　花滿館の場

役名　關口平太。神道源八。花滿縫之助。憲法奧方、深雪。花滿將監。志賀左近。吉川紋之丞。玉淵久馬。彌五原三平。吉川十内。槇山新治。熊本辨之作。津田伴之進。志方角兵衞。出家屋太郎右衞門。傾城、總角。與三右衞門妹、喜蝶。太鼓持ち、小市。源八女房、見船、淀與三右衞門。

造り物、向う一面の金襖、二重舞臺。君は千代ませの謠。二重舞臺の中に奧方深雪、立つて居る。東の方に神道源八、西の方に關口平太、上下にて手を組み居る。玉淵久馬、上下にて並び居る。双方に武士大勢、上下にて反り打ち、詰め合ひ居る。志賀左近、吉川紋之丞、眞中へ入り、制して居る。源八方に舟大工、平太方に百姓大勢、並び居る。

大工　どうなされて下さりまする。

百姓　どうなされて下さりまする。

西方　拔け。

東方　拔け。

左近　待つた、待たつしやれ、

ト　やかましう云ふ。この見得にて幕開く。

深雪　わしが聲を掛けぬに、待たぬか。

紋之　奧樣の御意ぢやが、鎭まらぬか。

左近　善にもせよ、惡にもせよ。奧樣が待てと聲をおかけなさるに、尾籠の振舞ひ。却つて越度でござらうぞ。

紋之　源八どの・平太どのゝ詞も出されぬに、ちと我まゝかと存しまする。控へさつしやれ。

西方　ぢやと申して。

紋之　御意でござる。
百大　どうなされて下さりまする。
久馬　やかましい。引かぬと縛し上げるぞ。
左近　おのれらもかしましい、控へぬか。
東方　ハイ。
平太　コレ〳〵弟子衆、何をザワ〳〵と云ふ事がある。關口流、神道流、どちらが善い、どちらが悪いと云ふ事は、取付き立ちをする子供まで知つた事。貴様達がワヤ〳〵と云うても、勝つ所で勝たにや役に立たぬ。仰せ渡された刻限に、竹刀打ちの勝負を決し、打勝つた者に渡しも堤も、淀川筋はみな平太が普請。おてまへ達がザワ〳〵云ふと、なんぞ後の勝負が危ふいやうにも、人が思うて悪い。控へさつしやれ。
源八　コレ〳〵弟子衆、御前も爰にござるに、不作法な、どうした事でござる。仰せつけられた竹刀打ちの勝負、刻限までは餘ほど間がある。神道流か、關口流か、印可を申し請けた方が、渡し、堤ともに、淀川の普請を承はる。まだ勝劣も知れぬうちに、ザワ〳〵とかしましい。控へさつしやれ。
東方　餘りと申せば。
源八　ハテ、理非は、勝負にあるわサ。
平太　やかましう云ふと、端から出るやうで悪い。皆、控へさつしやれ〳〵。
西方　餘りと申せば。
平太　ハテ、チヤワ〳〵云ふなら、云はして置いたがよい。
左紋　双方ともに、お引きなされい。

ト引く。

平太　おのれ等も、やかましく云ふなサ。
百姓　お國へ直に參りましたも、堤の普請を、早うしてもらひませぬと、又しても淀川の水が流れ込んで、田畑が流れて、南長柄の百姓は、乞食になりまする。源八さまと、意地づくをお立てなされまするは、私しどもの迷惑でござりまする。
平太　ハテサテ、最前からの事を聞かぬか。おのれ等が、その泣き事を吐かすに依つて、今宵、竹刀打ちの勝負して、打勝つた方へ、堤も渡しも固めて取る。胸の悪い事を片付けて、追ッつけバタ〳〵と普請して取らす。暫らく待つて居れサ。
百姓　ハイ、どうぞ頼み上げまする。
源八　ヤイ、大工ども、わいらも難儀であらうが、いま聞

く通り、意地づくに隙どる渡しの普請。今宵のうちに、どちらへなりとも固めたらば、急に取急いで致してくれう。暫らく待て。

大工　ハイ、先刻にから承はりまして、どうぞお前の勝利になりまするやうに、致したうござります。私しども大工も、仕掛けて今に拵つてござりますゆゑ、棟梁受取りました、私し一人の迷惑でござりまする。

源八　追ッつけ善悪が知れる。待つて居れ。

平太　ハ、、、、イカサマ、盲目千人、目明き千人だの日本開闢の闢口平太が、弟子になると云ふは、其許達の目が明いてあると云ふもの。若木を以て、ゐのころ追はへ歩くやうな事云うて信仰するは、大きなべら坊と云ふものサ。

西方　左やう〳〵でござりまする。

久馬　平太どのの善悪は、小口からでも知れさうなものでござるが、現に善い方を知らずに、悪い方を指南うけるは、どうしたものでござるぞいなう。

平太　イヤモウ、どうの斯うのと申して、マア、云うて見れば、生れついた福と貧乏との違ひでござる。ハ、、、ハ、。

西方　ハ、、、、。

源八　人間は水と見れど、天人は瑠璃と見る。また餓鬼は炎と見る。剣術もその通り、邪を以て向はゞ、清儀よくても、刃金たまれば無刀も同然。正道を胸に納めゝば、智を鋭う向ふを以て神道流。彼の同じ目明きでも、いろはもえ書かぬ者を、文盲と云ふ世に、各々も随分、清儀に眼を見開いて居たがよい。

東方　ハア。

久馬　源八どの、其方のお弟子は、文盲ではござらぬか。

西方　ちつと眼が開きましたかな。

東方　イヤモウ、四書五経、詩文章までも心得てござる。

西方　して、外のはな。

源八　ハテ、餘所の文盲サ。

東方　左やうでござりまする。

平太　皆、よく聞かつしやれ。彼の大鵬でござる。片羽搏が九萬里づゝ伸びまする。

西方　左やうでござりまする。

平太　その大鳥の前で、雀侍ひがちやらくちや〳〵と、ハハ、、、、。

西方　ハ、、、、。

源八　あの烏と云ふ奴は、月などが冴ゆると、夜が明けたかと思うて、ガア／＼と吼え廻る。これを、阿房烏と云ふ。さて、烏どもがガア／＼と、よう啼くぢやござらぬか。
東方　左やうでござりまする。
源八　魚の腸でも引ッかけさせて、去なしたらようござらう。ハ、、、、、、。
東方　ハ、、、、。
平太　ドレ、烏の因縁、承はらうか。
ト立つ。
西方　お聞きなされざなりますまい。
源八　烏の因縁、聞からうとあるに、雀の因縁、聞かいでも詰まらぬものぢや。
ト立つ。
東方　こりや、お聞きなされませい。
ト兩人、向うへ出て
平太　なんと、神道流は關口流よりは、よいものかなア。
源八　さあれば、何れもは、なんと思し召す。
東方　イヤ、拔群の違ひでござる。
源八　あの通りでござる。

平太　へ、、、、、雀どもが囀るワ。
東方　雀とは。
平太　イヤ、貴樣達の事ぢやない、雀の事サ。ごくにも立たぬ事を、貧乏雀どもが、ア、、不便な事ぢや。ナウいづれも。
西方　不便な事でござる。
源八　ハア、烏が啼くワ。
西方　烏とは。
源八　イヤ、各々方の事ぢやない、烏めが事ぢや。さて、よう啼く烏ぢやござらぬか。
東方　よう啼きまするて。
平八　ヤイ雀等。あの猿と云ふものはな、おのれが面の赤いゆゑに、箔の塗つた佛の顏を見て、笑ふといやい。
源八　あの蟹と云ふ奴はな、おのれが横に行くに依つて、直ぐに歩く人間を、笑ふといやい。
ト平太が方をこづく。
平太　オ、、澁い柿めは、甘い柿の人に食はるゝを、笑ふといやい。
源八　磔刑が獄門を見て、足がないと云うて、笑ふといやい。

平太　すりや、獄門の塩梅、よう知つて居るか。
源八　知らずば、ちつと知らさうかい。
平太　知らうわい。
源八　知らさうわい。
平皆　知らうわい。
源皆　知らさうわい。
ト両方よりやかましう云ふ。
深雪　双方ともに、待てと云ふに、待たぬか。
左近　御意を背くか。
深雪　女子と思ひ、侮つての仕方か。
源皆　ハア。
深雪　源八、平太、それへ出い。
平源　ハア。
深雪　其方達は、主従の禮儀を知つて居るか。イヤ、知りやせまい。其方達兩人は、兵術の御師範も、鎌倉より仰せ渡された、淀川の普請の儀も、片身怨みのないやうに源八には渡し、平太には堤を築けば、源八が渡し、成就する事を憎んで堤を築かず。渡しさへ渡さずば、堤の往來叶はぬと、互ひに拒み、兵法の流儀、私しの宿意に、主の用事を缺かすさへあるに、今宵はなんぢや。縫之助さまへ、淀與三右衛門さまの娘、喜蝶どのを婚禮の最中。夫左衛門は鎌倉の使者に、京都へお上りなさるゝお留守のうち。親殿、將監さまも今宵の婚禮。わしまで上下に氣を付けるに、もし口論に及んで、双方の武士が、段さ放したらなんとする。めでたい夜も、家中に亂を起して主を呪ふのか。
源平　イヤ、全く。
深雪　殊に、廻船往來の、御朱印を預かるこの屋敷。淀川往來の普請、延引に及ぶゆゑ、今宵子の刻に、兩人が立合ひの勝負を決し、打勝つた方へ一人に云ひ付けいとの親殿の仰せ。兵術も役目も、打勝つた方が承はる筈でないか。それに家中を騒がすは、主を蔑ろにする不届き者。但し、左衛門さまのお留守の内と見かけての我まゝか。
平源　サア、それは。
深雪　不所存者めが。
源平　だん〳〵誤まり入りましてござりまする。
深雪　めでたい祝言の夜なれば、聞き捨てにして、今は免す。皆、以來は嗜なめ。
源平　ハア。
深雪　子の刻までは、魚と水の交はり。上下にも、とくと

云ひ付けて、將監さまの御機嫌を伺ゐや。

源平　畏まつてござります。

紋之　誠に、主人と云ふ重石がなくば、つい口論にも取結びませうもの。武骨の段は、御容赦下されませう。

平太　イヤモウ、時のはずみで、ふら〳〵と過言を申した。御料簡なされて下されい。

源八　イヤモウ、今さら面目次第もござらぬ。

平太　結構な法儀を輕蔑いたしたは、下拙が誤りでござる。

源八　イヤ、手前から手を突きまする。

平太　イヤ、重々、不調法。

源八　イヤ、手前が不調法。

平太　イヤ、手前が。

源八　イヤ、手前が。

兩人　ハヽヽヽ。

久馬　長柄の百姓ども、渡し船の大工ども、其方達も子の刻までは、溜りへ參つて控へて居れ。

大百　畏まつてござりまする。

百姓　ドレ、溜りで待つて居よう。

大工　そんなら、待つて居りまする。源八さまの勝ちに極まつてある。

百姓　平太さまの勝ちに極まつた。

大工　サア皆、ござれ〳〵。

ト兩方へ入る。

左紋　イザ先づ奧へ、お出でなされい。

源平　各々も、奧へ。

西方　ハア、ヽヽヽ。

源八　平太どの。

平太　源八どの。

源八　勝負は、子の刻。

平太　後刻。

源平　御意得ませう。

ト唄になり、侍ひを連れ、双方へ入る。

深雪　左近、紋之丞、掛け物、みな取片付けい。

兩人　畏まつてござりまする。

ト入る。花滿縫之助、出る。

縫之　さても〳〵、急に來た程にの。エヽ、深雪さま。

深雪　縫之助さま、もう嫁御は見えたかえ。

縫之　見えた段か、與三右衞門が附いて居られ、親仁様とめでたい盡しの話し、交ぜ返して居る。

深雪　そんなら又、お前も、なぜ嫁御の側に居やしやんせ

ぬぞいなア。

縫之　何をよい氣らしい……もう來さうなものぢや。

深雪　誰れがいな。

縫之　イヤサ、よもや彼奴も、あれ程に稽古した事ぢやに依つて、來ぬと云ふ事はない筈ぢやが、エ、、こちらの身請けも、エ、ヅッと、おればつかりに氣を急かし居る。

深雪　お前もキヨロ〳〵と、嗜なましやんせ。女子と云ふものは、さうしたものぢやないぞえ。祝言の夜さりは、大抵恥かしい、怖いものぢやない。それでも頭から、聟のしなつこらしう物云ふは、いかう勢になるものぢや。側に居てやらしやんせ。

縫之　もう來さうなものぢやが。

深雪　エ、、凡そな聟樣ではある。ドレ、わしも喜蝶さまの顔を見て來う。けうとい器量ぢやげな。エ、、あやかり者め。

ト脊巾を叩き、入る。

縫之　ホウ、なんのあやかり者な事があろ。よもや小市めに如才もあるまいが、辨之作は、もう太夫が事を、云うて寄越しさうなものぢやが。

ト山家屋太郎右衛門、町人の形にて侍ひと出る。

太郎　縫之助さまに逢ひさへすりや、ようござりまする。

侍ひ　ぢやと云うて、不作法な。どこまでうせる。

太郎　サア、ようござりまする。

侍ひ　憎い奴の。

縫之　コリヤ〳〵、待て〳〵。其方は京都の町人、山家屋太郎右衛門ぢやないか。

太郎　縫之助さま、お前は。

縫之　コリヤ、あたりへ目を利かせい。コリヤ、この者には、用事がある程に、苦しうない、次へ行け。

侍ひ　畏まつてござります。

ト入る。

縫之　よう來たなア。

太郎　よう來たなア。縫之助さま、コリヤ、どうなされまする。どうして下さりますのでござりまする。

ト關口平太、聞いて居る。

縫之　コリヤ、聲が高い。聞えるわいやい。

太郎　イヤ、聞えるやうに云ふのでござりまする。お前が廓通ひの揚げ代に詰まつて、どうもならぬ程に、金二百兩、貸せと仰しやる。大盡金は一文もなりませぬと云うたれば、金は濟ます、違ひのない證據に、お上から預か

りの、廻船往來の御朱印を預けうと云うて、コレ〳〵この證文。右二百兩の金子、來る晦日までに相濟み申さず候はゞ、廻船往來の御朱印、其方へ質物に差入れ申すべく候ふところ、實正明白なり。

縫之　大きな聲をすないやい。

太郎　斯う云ふ證文を書いて置いて、もう幾月になりまする。今日は遣らう、明日は渡さうと云うて、御朱印もおこさず、金もおこさず、こりやマア、どうするのでござりまする。

縫之　サア〳〵、尤もぢやけれど、その御朱印の事は、急なに依つて、つい書き入れたのぢや。なか〳〵、わいらに渡す物ぢやない。金は追ッつけ濟まさう程に、もう二三日。

太郎　ヤ、コレ〳〵、その大事の物を書き入れさして置いたが、此方のこみづぢや。千も萬もない。ようござりまする。

ト行かうとする。

縫之　わりや、どこへ行く。

太郎　奥へ行て親御樣に、この證文を見せて、金を受取りまするわいの。

縫之　それを云うて堪るものか。

太郎　サア、嫌なら二百兩の金、いま受取りませう。

縫之　サア、二百兩の金は。

太郎　金がなけりや、アイ、若殿樣に御朱印を。

縫之　シツ〳〵、ヤイ、大きな聲すると、爲にならぬぞ。

太郎　ヤア、切刃を廻して、切る氣か。

縫之　さうではなけれど。

太郎　お大名の弟御が、町人に金を借りて、殺しても大事ないか。切られませう。

縫之　其やうに、沒義道に物を云ふなやい。

太郎　奥へ行て、めつきしやつきする。

縫之　それを云うて。

ト取りつく。

太郎　ハテ、面倒な。

ト突き飛ばす。立廻りある所へ、關口平太、取つて抛り、當てる。

縫之　平太か。よい所へ來てくれた。

平太　サア〳〵、ようござります。

縫之　彼奴マア。

ト平太、太郎右衞門が懷中の證文を取つて、懷中へ入

れる。と太郎右衛門、起きて、懐中をいろ／＼捜し

太郎　コリヤ、いま手酷い目に遭はしたは、われか。

平太　われかとは、素町人の分で、うぬ／＼。

ト睨む。

太郎　イヤサ、強い顔すない。今の證文はどこへやつた。

平太　おれが取つた。

太郎　ヤア、その證文を。

ト取りにかゝる手を捻ぢ上げる。

アイタ、、、、。

平太　大盗人めが。御朱印々々々と澤山さうに、大切な物を證文へ書き入れさして、うぬ、表向きで詮議すると、首が飛ぶぞよ。

太郎　アイ／＼。

平太　この證文は闕所する。命から／＼去ぬるを、有り難いと思うて、うせう。

ト突き倒す。

太郎　こりや又、あんまり。

平太　いつそ、ぶち放してのけう。

太郎　ア、、お免されませ。

ト逃げて入る。

縫之　てもよい所へ、よう來てくれたなア。

平太　お前もお前ぢや。上樣よりお預かりなさるゝところの、廻船往來の御朱印は、大切なお家の柱、此やうな事が聞えると、お國の大事になりますが。ア、、益體もない。

縫之　おれも、さうは思うたれど。

平太　こなたは、一向夢中ぢやて。

縫之　サア、今の證文、早うたも。

平太　この證文を、くれいか。

縫之　オイナウ。

平太　縫之助さま、こなたに平太めが、一生の御無心があるが、聞いて下さりませうか。

縫之　イヤモウ、今の難儀を救うてたもつたわが身。何なりとも聞かうわいなう。

平太　先づ以て有り難う存じまする。別の儀でもござりませぬが、お前の深う云ひ交してござる、島原の傾城總角、私しに下さりませい。

縫之　ヤ。

平太　モウ、ぞつこん惚れ拔いて居りまするゆゑ、廓へ通ひましても、お前と鬩り合つて居るゆゑ、根ッから手に

廻りませぬ。お前が主ぢやに依つて云はれもせず、いまいましう思うて居つたが、幸ひの所ぢや、私しに、さつばりと下されい。總角が起證を持つてござるであらう。ドレ、下されませい。
縫之　平太、われは氣が狂ひはせぬか。
平太　何が、どう致しましたとえ。
縫之　イヤモウ、興も明日も、覺め果てた奴ぢや。
平太　なんにも覺める事もないがな。
縫之　ヤイ、太夫と深う馴染んで居るは、廓中に隠れはない。その主の思ひ込んで居る者に、惚れるさへあるに、なんぢや、廓へ通うた。大方、その位なら、常の客のやうな顔で、買つて取つたも知れまい。おのれは〳〵、ようおれに向つて、起證をおこせの、くれいのと、そんな事よう云ふなア。
平太　ハテ、惚れたものぢやに依つて、下さりませい。惚れる事はなりませぬかな。ドレ、起證を下さりませい。
縫之　まだ〳〵。ならぬ。今度からそんな事云ひ居ると、手討にするぞ。大盗人め。
平太　サア〳〵、ようござりまする。それ程お腹の立つ事なら、貰ひますまい。
縫之　なんの爲に。
平太　ア、、そんなら、せう事もなし。
ト立ち、行かうとする。
縫之　コリヤ待て。今の證文おこせ。
平太　アノ、この證文をや。折角此方へ取つた物を、マア、止しに致さう。
縫之　ヤイ、その證文、持つて居て、どうしをる。
平太　どうも致さぬ。大切な廻船の御朱印を書き入れた證文ぢやによつて、物ぢやて。
縫之　ヤ。
平太　物ぢやて〳〵。太夫が起證くれて、さつぱりと退いてしまはつしやれば上げます。否ぢやと云はつしやると物ぢやて。
縫之　そんなら、おのれ、云ふ氣ぢやな。
平太　なんの、お主の難儀になる事、私しが申しませう。總角さへ下さるれば申しませぬ。起證下さりまするか。下さりますであらう。
縫之　エ、、おのれ。
平太　下さりますか。
縫之　ならぬわい。

平太　ならずば、物ぢやて。
縫之　おのれ、それを。
ト取りにかゝる。突き飛ばす。
モウ、おのれ。
ト拔いて切りかゝる。刀をもぎ、捨て
平太　物ぢやて。
縫之　エヽおのれ。
トまた小刀を拔いて、切りかゝる。もぎ取つて、捨て、突き飛ばし
平太　下さりませぬか。否なら、物ぢやて。
縫之　おのれ。
ト捕まへる。
平太　こなたの體の一大事になる事ぢや。とつくりと思案して下さりませい。下さるであらう。遲うなると、物ぢやて。
縫之　おのれ。
ト平太、寄つて當てる。
平太　物ぢやて。イヤハヤ、結構な物ぢやて。
ト入る。唄になる。と縫之助、起きて、無念のこなしあつて、大小を差し、身繕ろひして、切り込まうとする。神道源八、出で
源八　お待ちなされませ〳〵。
縫之　イヤ、退け〳〵。聞かぬ〳〵。
源八　マア、待たつしやりませ。ついにない、血相變へてどこへお出でなされまする。
縫之　平太めを切つて、おれも腹切る。
ト行かうとする。
源八　サア、ようござります。最前からの樣子は、物蔭から見て居りましたれど、日頃意趣ある平太、私しが出ては、猶意地强うなり居つて、お身の妨げにならうと、わざと控へて居りました。
縫之　源八、もう堪忍がならぬ。
源八　さればサ、あつちは、拔きさしのならぬ、證文を持つて居れば、お腹を立てられますが程、事の破れになつて、お家に瑕が附きまするがや。
縫之　と云うて、あれを。
源八　取返して上げませう。
縫之　ヤ。
源八　取返しさへしたら、手の下の罪人。どうせうと儘、私し次第になされませ。

縫之　そんなら、取返してたもるか。
源八　お前は何も知らぬ顔で、美しうしてござりませ。
縫之　イヤモウ、取返してさへたもれば、よい。
源八　その事を、必らず色目にも、お出しなされますな。
縫之　合點ぢや〳〵。
　ト内より
深雪　縫之助さま〳〵。將監さまがお召し遊ばす。縫之助さま。
縫之　ハイ、それへ參りまする。
源八　ちやつと、お出でなされませ。
縫之　そんなら、頼んだぞや。
源八　私しが呑み込んで居りまする。
　ト内より
深雪　縫之助さま〳〵。
縫之　それへ參りまする。頼むぞや〳〵。
　ト思ひ〳〵入る。
源八　追ッつけ、私しが……せうどもない事、仕出さつしやれた。急に取返さねば大事になる……時に、カウツ、これでは、戻し居りさうなものぢやが。
　ト思案して

　カウツ……さうぢや。
紋之　源八どの〳〵、お召しなされまする。源八どの。
源八　それへ參ります。ア、まゝよ、さうせずばなるまい。
　ト小首、傾け入る。唄になる。と橋がゝりより小市、尻からげにて
小市　イヤサ、申す事は申さにやならぬてや。
十内　無禮な侍ひがある。
小市　逢はにや置かぬ〳〵。
　トせり合ひ出る。久馬、深雪、紋之丞、出る。
久馬　奥へ響くが、なんぢや。
十内　イヤ、その侍ひが、若殿縫之助さまに逢はうと、お座敷へ通りまするゆゑ、右の仕合せでござりまする。
久馬　お聞きあられましたか。
深雪　どうやら見たやうなお侍ひ。なんの用があつて、この屋敷へは參つた。
小市　さ云ふ女性は、どなたでござる。
久馬　花滿左衛門の奥方サ。
小市　奥方でも口方でも大事ない。縫之助どのに逢へば、様子の知れる者でござる。
深雪　縫之助どのに逢へば様子が知れる。縫之助さまを呼

びや。
久馬　縫之助さま〳〵。
ト縫之助、出る。
縫之　なんぢや。何事ぢや。
深雪　あのお侍ひが、お前に逢ひたいと云はれまする。
縫之　ヤ、來たぞ。先刻から。
小市　ウヽン〳〵。
縫之　ムウ、貴殿には、ついぞお目にかゝつた儀もござらぬが、手前、縫之助でござる。
小市　さては御自分が縫之助どのでござるな。ついぞお目にかゝらぬが、近付きであらう筈もなし、近付きでござらねば、ついぞお目にかゝるやうもなし。近頃、無念殘念の對面を仕るなア。
縫之　して、御用とはな、
小市　成る程、えらう用がござる。ちよつと、それへ出やつしやれ。
縫之　拙者にな。
小市　如何にも。
ト向うへ入る。
縫之　御用とはな。

ト小市、捕り繩を出し、たぐる。
小市　縫之助、腕廻しやれ。異議に及ぶと、踏みつけて繩かける。返答は、なんと。
縫之　待て〳〵。ついぞ逢うた事もない奴が、この縫之助には、なに誤まりがあつて繩かける。
小市　わりや、不義者ぢや。
縫之　不義者とは。
小市　どこへ。白々しい。身が事は、八幡の邊に蟄居するえらう永介と申す浪人者サ。
縫之　其えらう永介が、何ゆゑ繩をかけうとは云ふ。
小市　今宵、この館へ嫁入りして來た、淀與三右衛門が妹喜蝶どのは、身共が夫婦の契約をして居る。所に、その主のある喜蝶を嫁に取るとは、不義、密夫。すりや、身は先の馴染み、われは後の馴染み。不義間男と云ふが、此ゑらう永介が誤まりか。返答はあるまいがなア。
縫之　すりや、嫁入りして來た喜蝶と、其方は懇ろして居るか。すりや、かぶせられたな。
久馬　待つた、何とも合點のゆかぬ。お聞きなされましたか。
深雪　淀の城を預かる程の與三右衛門、男のある者を、よ

もや緣組みなされう筈がない。

久馬　こりや聞えた。さては、お大名の緣組みを見かけて强請り込み、金銭を貪りに來た騙り者ぢやな。侍ひ衆、引出さつしやれ。

十内　大騙りめ。

ト立ちかゝる。

小市　聊爾せまい。聊爾すると、腕に覺えは有明櫻、はらはらはつと散り召されうが、お笑止な。一つの行燈を蹴破つて、明日の晩から、事を缺かすぞ。

縫之　アヽラ、烏滸がましや、如何に永介。喜蝶と汝、女夫ぢやと云ふには、なんぞ慥かな證據があるか。

小市　證據のない事を云はうか。喜蝶が直筆の、二世も三世もいひ交した起請が證據。これを見い。

縫之　誠にこりや起請。皆、粗相すな。慥かな證據があるぞ。荒立てると、此方の武士が立たぬぞ。

小市　なんと、これが證據になるまいか。

皆々　ハテナア。

久馬　イヤ／＼、その起請は、僞せ物であらうも知れぬ。

小市　千も萬もない。喜蝶を爰へ出せ。喜蝶に逢うて、喜蝶が身共を見知らぬと云うたらば、身共は騙りぢや。又如何にも女夫でござると云うたらば、縫之助、貴様、聞男ぢやぞ。

縫之　面白い。喜蝶を呼び出して詮議する。左近、喜蝶を爰へ引摺つて來い。

左近　畏まつてござりまする。

深雪　左近、待て／＼。

縫之　なぜお止めなされまする。爰へ呼び出し、詮議いたしまする。

小市　早う出せ／＼。

深雪　待て。マア待ていやい。縫之助さま、喜蝶を爰へ呼び出して、もし覺えないと云はしやんすればよけれど、もし、如何にもわたしが夫でござると云はつしやると、いから詮議がむつかしうなつて來るぞえ。

縫之　なんの、むづかしい事はござりませぬ。

深雪　むづかしいわいなア。アヽ、氣の毒な。

小市　なんの氣の毒な事がある。

縫之　大事ない。左近、早う連れて來い。

左近　畏まりました。

ト入る。

久馬　ムウ、紋之丞、其方はこの通りを、與三右衛門さま

へ、委細に申し上げて、これへお出でなされと云やれ。
紋之　畏まりました。
小市　だんない。與三右衛門、怖うないぞ。
深雪　コレお侍ひ、大事の事を云うてござつたが、いよいよ、それに相違はないかや。
小市　えらう永介、武士でござる。
ト小市、縫之助、目配せする所へ、嫁、綿帽子、白無垢にて、淀與三右衛門、上下にて、紋之丞、左近、附き出る。
與三　ハテ、それは合點のゆかぬ。
ト云ひ〳〵出る。
深雪　與三右衛門どの。
與三　さて今日は、種々の御馳走。將監どのにも、殊ないお喜び。こなたにも、別してお取持ちでござる。
深雪　イヤモウ、風情もない仕合せでござりまする。
與三　時に、いま奧で承はれば、永介とやら、妹喜蝶に譯があるとやら。その浪人は、あれか。
小市　如何にも、えらう永介は、身共サ。
深雪　お覺えがござりますか。
與三　ハテ、益體もない。淀與三右衛門が妹に、其やうな事があつてよいものか。
縫之　與三右衛門さま、なんとやら私しも、心憎うござります。喜蝶どのをあの侍ひに、お逢はせなされましたらば、ようござりませう。
小市　オヽ、逢はう〳〵、
與三　ハテ、貴殿の面晴れに、逢ひたくば逢はしてやらう。妹、喜蝶、あの侍ひに逢へサ。
喜蝶　アイ。
ト縫之助の側へ行く。
縫之　コレ、大事ない。何もかも、諸事は味よう呑み込んで居る程に、ちやつと側へ行て、すつぱりと有やうに云はつしやれ。
小市　喜蝶か。合點が行くまい。なんであらうと、餘の筋は要らぬ。云ひ交して居る事を、すつぱりと云ひさへすりやよい。サア、云うてしまへ。
ト振り切つて、縫之助の側へ行く。
縫之　ハテサテ、なんでならうと、有やうに云ひさへすりやよい。ちよつと云はつしやれ。
ト突きやる。
小市　諸事は後で知れる程に。

トまた縫之助の方へ來る。
縫之　ハテ面倒な。
小市　怖い事はないわいなう。
　ト連れて來る。もぢ／＼する。
縫之　マア、この帽子を取つて。
　ト取る。總角なり。
總角　縫之助さま。
縫之　ヤア、わが身は。
小市　ヤア、こなさんは。
與三　與三右衞門が妹喜蝶、曇り霞みのない妹でござる。
　とつくりと詮議なされい。
小縫　こりやどうぢや。
縫之　マア、わが身は、どうして
總角　モウ／＼、縫之助さま、わたしや淀與三右衞門が妹
　の、喜蝶でござんす。嫁入りして來て、お前の女房ぢや
　程に、可愛がつて下さんせえ。
縫之　これはマア、夢ではないか。與三右衞門さま、どう
　でござります。
與三　イヤ、コレ、縫之助どの、御親父將監どのと、縁組
　みいたした。喜蝶はそれでござる。不調法者でござれど
　も、こなたを戀ひ焦れまするゆゑ、取急いで嫁入り致さ
　せた。天下晴れて夫婦にするのぢや程に、必らず粗相の
　ないやうに、賴み存じまする。
縫之　根ッから合點がゆかぬ。
小市　おれも、合點がゆかぬ。
與三　但し、不得心にござるか。
縫之　滅相な。これが不得心で堪るものでござりまするか。
與三　然らば、添うて下されうか。
縫之　添はいでなんと致しませう。
小市　なんの事ぢや。
深雪　お侍ひ、サア、喜蝶どのが出やしやんした程に、詮
　議さつしやれ。
小市　イエ／＼、こりや、喜蝶ぢやない。ほんの喜蝶を呼
　び出して下さりませ。
總角　コレ／＼、粗相云はしやんすな。淀與三右衞門が妹
　の喜蝶は、わしでござんする。
小市　なにを。こなたは喜蝶ではないもせぬもの。
總角　喜蝶でござんす。
小市　なんぼでも、喜蝶ぢやない。
總角　喜蝶ぢや／＼／＼。

小市　喜蝶ぢやない〳〵〳〵。

トせり合ふ。

與三　妹、何をせり合ふ事がある。控へて居いサ。

深雪　お侍ひ、その喜蝶とは、云ひ交しては居やつしやらぬか。

小市　イヽヱ。こりやどうぢやいなア。

縫之　どうぢやの斯うぢやのと云ふ事はない。おりや、嬉しうて堪らぬわい。

小市　面々ばつかり嬉しがつて。

久馬　不義ではないか。

小市　ちよつと去んで參じませう。

深雪　浪人、待つた。

十内　御意ぢや。待たう。

小市　ハイ。

深雪　喜蝶さん、お前は、云ひ交した覺えはあるまいなう。

總角　滅相な。其やうな事があつて堪るものでござりまするか。

深雪　お侍ひ。云ひ交した覺えがないとあるからは、約束通り、其方は騙りぢやぞや。

小市　ヱ、。

與三　二腰を差しながら、一國の大名に無實を云ひかけ、それなりにして置かうか。身が妹を、どう云ふのぢや。

小市　ハイ……コレ、縫之助さま、よいやうに云うて下さりませいなう。

與三　縫之助どの、いかう馴れ〳〵しい物の云ひやうする浪人ぢやが、部屋住みなれど左衛門どのゝ舍弟、彼れ等しきの素浪人に、知る人あらう筈がない。ハテ、知る人なれば、妹、その喜蝶がな、何やかや、差構ひになりさうなものぢやなア。よもや知る人ではござるまい。

小市　イエ〳〵、知る人の段ぢやない。

縫之　ヤイ〳〵、ついぞおのれ、見た事もない奴ぢやが、何ゆゑ騙りを云うて來た。眞直ぐに云へ。

小市　それは、どう云ふのぢやいなア。

縫之　何者ぞに頼まれたか。有やうに云へ、云はぬと、骨を拉いでも云はさにや置かぬぞ。

小市　イヤ、これも凄まじいワ。コレお前、頼んでわしに斯うせいと。

縫之　ヤイ〳〵、そりや何を吐かす。ヱ、聞えた。さてはおのれ、身が熱うなつたに依つて、樣々と僞はりを云うて、この場を遁がれう〳〵とする、大盜人め、

小市　これは興がる。如何に面々ばつかり、すつかりとうまい目に會うたと云うて、コレ、主は主とも思ふが、こなんが、しゝらしんとして居る所ではないわいの。

縫之　ようわしに云ひ掛けをしに來たな。どうやら、怖い男ではあるわいなう。

小市　そんなら、寄つてたかつて、おれを獨り、刎ね出し者にしたな。アイ、あの喜蝶と申すは、あれは。

與三　其奴、縛れ。

十内　捕つた。

ト小市を縛る。

小市　これは迷惑な。

與三　大騙りめが。何も吐かすな。ヂッとして居れば、事に依り歸してくれまいものでもない。いらぬ頤をきくと、直ぐに首が飛ぶぞ。

小市　アイ／＼、なんにも物は申しませぬが、これは又、迷惑な事ではある。覺えてござりませえ。

深雪　合點のゆかぬ事ばかりぢや。とくと詮議しや。

十内　大騙りめ、おのれ、仔細のある奴ぢや。先づ懷中を詮議して。

小市　どうなとなされませ。

ト十内、懷中を搜し

十内　さして仔細もない。

ト守り袋を取り

懷中に、この守り袋がござります。

ト渡す。深雪、守を取りて

深雪　これは。

十内　なんぞ仔細がござりまするか。

深雪　與三右衞門さま、あの縄付きには、ちと詮議いたしたい事もござりまする。私しにお預けなされて下さりませ。

與三　イヤ、この館へ仕掛けに參つた騙りめ、如何やうにともなさりませう。

深雪　そんなら、預かりましてござりまする。

與三　如何やうとも／＼。

深雪　ソレ、片脇へ、引据ゑて置け。

十内　サア、立たう。

小市　立たう。なんの事ぢや。一つも合點がゆかぬ。

縫之　與三右衞門さま、何も申しませぬ。エヽ、有り難うござりまする。

小市　なんの事ぢや。

安永元年正月大坂角の芝居上演絵番附

與三　いよ〳〵妹めが儀を、頼み存じまする。
縫之　千年も添ひまするでござりませう。
小市　壺をかぶつたやうな。
久馬　イヤ、與三右衛門さま、少し詮議が殘りました。
與三　身共に。
久馬　なんとやら、氣味の惡い物の云ひやう。最前あの男めが云ひ交した證據と、起證を出しました。即ちこれにてござります。
與三　妹、自筆で、一筆書け。
總角　ハイ。
ト左近、硯箱を持つて行く。總角、書く。
與三　久馬、見やれ、
ト久馬、見合す。
久馬　こりや、拔群の相違。
與三　それでサラリと詮議は濟まうか。
久馬　ムウ。
ト九ッの半鐘、打つ。
左近　子の上刻でござりまする。
ト花滿將監、出る。
將監　子の上刻か。
紋左　左やうでござりまする。
與三　將監どの、彼の勝負、只今でござりまするか。
將監　幸ひ皆これに居るワ。
與三　見物仕りませうわい。
將監　双方ともに、呼び出せ。
紋之　ハア。
ト竹刀を向うへ直し
關口平太どの。
左近　神道源八どの。
紋左　立合ひの刻限でござるぞ。
平源　ハア、、ッ。
ト双方より弟子大勢、連れて出る。
將監　源八、平太、改めて申し聞かすには及ばねど、鎌倉より仰せ渡された淀川普請、兩人に申しつけたれども、互ひに意趣を含んで延引するゆゑ、鎌倉への聞え、御朱印を預かるこの家の疵になる。それゆゑ竹刀の勝負。勝つた方へ家の師範、淀筋の役目、一時に申し付ける。左やう心得い。
兩人　ハッ。
與三　源八、平太が爭ひは、承はり及んだ。堤も築かず、

渡しも渡さず、差當つての詮議は、御當家でございまする。

將監　左やらでございまする。

深雪　凡そ二三年も、普請抛つてございまするゆゑ、誰れ云ふともなしに、源八の渡し、平太の堤と申しまする。

縫之　大切な勝負ぢや。打負けぬやうにしやれ。

ト平太を見て睨む。平太、總角を見る。嫌がる。

平太　エヽ、ウヽン／＼。

紋左　双方ともに、お立合ひなされい。

トこれより身繕ろひする。弟子、兩方へ別れ、キッと見て居る。兩人、立合ふ。これより兩人、將監方に目禮して、それより竹刀打ちにかゝる。双方の弟子より掛け聲。このタテ、樣々あるべし。詰まりに平太、源八を打ち据ゑる。

皆々　ヤア平太どの、お出かしなされた。

與三　平太、天晴れの手の內、見事々々。

將監　出かした。これは花滿の家の印可。師範たる者に讓るが古禮。淀川往來の普請も、其方に云ひつけるぞ。

ト印可を左近、取次ぐ。平太、取る。

平太　有り難うございまする。弟子衆、喜ばつしやれ。

東方　お手柄、申しやうもございませぬ。

平太　ヤア、きつう骨の折れる事もござらぬ。溜りに控へて居る百姓どもへも、この通り申し聞かして歸したらよからう。

左近　畏まつてございます。

ト入る。

將監　これで追ッつけ、普請も成就いたさうと存じて、氣が休まりまする。

與三　左やらでございまする。

將監　サア、奧へ參つて、祝言の杯いたさう。與三右衞門さま、お出でなされい。

與三　追ッつけ參りませう。

將監　深雪、皆を引連れておぢやれ。

深雪　畏まつてございまする。

將監　紋之丞、參れ。

紋之　ハア。

ト將監、連れて入る。

與三　源八は、定めて殘念に思ふであらう。併し、天災不定と云うて、大丈夫の氣にかけるものでない。主人の馬の眞先が肝要ぢや。サア、縫之助どの、奧で祝言の杯い

たさう。
平太　イヤ、なりますまい。
與三　なぜ。
平太　部屋住みながら一國の大名、傾城を女房にする事は
なりますまい。
與三　傾城とは。
平太　何もかも承はつた。與三右衛門さま、餘りなされ方
が粋すぎて、嫌ぢやわいの。
與三　與三右衛門が、何がどうした。
平太　こなた樣の妹御と云うて、嫁入りしたこの女は、總
角と云ふ島原の傾城サ。
與三　與三右衛門が妹を、傾城と云ふには、なんぞ慥かな
證據があるか。
平太　證據、お目にかけませう。
ト懐中より狀を出し、右の起證を取り
「せき／＼お通ひ下され候ふ、お志し、お嬉しく御座候
へども、此方にちと／＼差構ひ御座候ふまゝ、是非々々
お思ひ切らせ下され候ふ、この後お返事も申さず候ふ。
かしく、平さま參らせ候ふ、總角より。」この狀と、この起
證の寫しが同筆。これが傾城と云ふ證據。

深雪　ドレ、その狀、爰へ。
平太　御覽じませ。
ト深雪、取つて
深雪　ほんになう。こりや紛れもない同筆ぢや。
ト引裂く。
平太　オヽコレ、そりやどうなさります。
深雪　どうもせぬ、破つたのぢや。
平太　それを破つては。
與三　平太、妹を傾城と云ふには、又なんぞ證據があるか。
平太　證據は。
與三　ドレ、證據は。
平太　深雪さま、なんで破らしやつた。
深雪　破つたは、其方が爲ぢや。
平太　けう怪訝な事を仰しやるが、どうして爲ぢやな。
深雪　家中一統に廓通ひは御法せき。それに、平さま參る
總角とは、そちや法度を背いて、廓へ通うたか。
平太　サ、それは。
深雪　破つてやるは、其方が爲ぢやわいやい。
平太　ハア。
ト口を開く。

與三　平太、妹は傾城か。とくと見い。
平太　見す〳〵傾城を。
深雪　顔を知つて居れば、廓へ通うたのぢやな。
平太　サ、それは。
與三　近付きか。とく見い。
平太　イヤ、近付きではござりませぬ。
與三　こなた慮外者めが。キッと糺明する奴なれども、妹が一世一度の祝言の夜。今は免す。この後、キッと嗜なめ。
平太　壺かぶつたやうな。
小市　どうでも壺が流行る。
深雪　サア、構はずと、奥へお出でなされませ。
與三　妹、奥へ。
總角　アイ。
平太　ア、、なんぼう壺かぶつても、また此方には、よい物があるぢや。
皆々　エ、。
平太　物ぢやて。
ト縫之助、睨む。源八、顔で止める。
小市　とんと壺ぢやて。

深雪　縄付き、引立てい。
皆々　うせう。
ト唄になる。與三右衛門、深雪、總角、小市、入る。
平太　ア、、何奴も此奴も精出して、祝言しあがつたがよい。追ツつけ思ひ知らしてこまさうぞ……シタガ、なんと、日頃には口きいても、今のを見られたか。
十内　イヤモウ、見ぬ事は話しにならぬ。常の顔とは反對。
イヤモウ、驚ろき入りましてござりまする。
三平　あの見て叩かれた時の態と云ふものは、かゝつた形ではござらぬ。
ト仲之進
仲之　彼の後足を擲られた時は、病み犬が水道へ轉げ込んだ態ぢや。
平太　イヤ、拙者も、ちくと背も折れうかと存じたが、根から猫を弄るやうな。あれが腕なしの振りづんばいでござる。
ト角兵衛。
角兵　源八どの、今日の勝負は、我れらも摩利支天へ立願をかけまする程の儀、こなたから云はいで置いたぢやたいか。

新治　イヤ、コレ、お待ちなされ。百萬だら云うたと云うて、負けてしまうて、なんの役にも立たぬ事ぢや。各々方は存ぜぬが、手前は、ずんと思ひ切りました。
角兵　拙者も、これから好い師匠取りをして、武藝を勵まにやならぬ。何れもは、なんと思し召す。
皆々　我れ〳〵も、左やうでござる。
角兵　源八どの、向後、師弟の縁を切り、指南は頼みませぬぞや。
新治　指南上げましたぞや。
角兵　平太どの、この列の者、一人も殘らず、お弟子になりたう存じまする。
新治　向後、弟子になされて下さりませうなら、有り難う存じまする。
平太　オヽ、こりや皆、悧巧になられた。それでちつと、米喰ふ武士のやうな。アヽ、シタが、碌にもない事を敎へ込んで、きうせん筋へ固まつたに依つて、一人々々、本海道へ敎へて、眞人間にしてやらうと思へば、アヽ、世話やの〳〵。滿足に敎へてやらう。
皆々　有り難う存しまする。
平太　皆仕合せな和郎達、有卦に入つたやうなものぢや。

皆々　左やうでござります。
平太　ドレ、弟子師匠の杯いたさう。奧へござれ。
皆々　ハア。
　ト行かうとする。
源八　イヤ、闕口平太、ちよつとお目にかゝりたい。
平太　拙者に。
源八　如何にも。
　ト兩人、向うへ出る。
平太　用とは、なんでござる。
源八　ハヽヽヽヽ、イヤモウ、日頃は手前も、おのれやれ、いざと思はゞ、樊噲項羽でも一握りのやうに存じたが、なか〳〵參るものではない。最前の、其許の働らき微妙の構へに、寄りかゝる事ではござらぬ。向後、手前も御指南を受けませう。門弟になされて下されうならば、忝なう存じまする。
平太　ハテ、いつにない悧巧な御挨拶で、痛み入りまする。
源八　イヤモウ、甲乙を見ますれば、天と地と申さうか。富士の山を蟻がせゝるも同然。及びません〳〵。
平太　イヤ又、其やうにもござらぬて。
源八　イヤサ、及ばぬと申す證據には、目の前で弟子衆が

其許へ入門いたされたを、なにとも申さぬ。また各々の前で斯く申すが、この後、從ひまする性根でござる。
平太　これは痛み入る御挨拶。左やうに仰しやれば、この後は睦まじう致し、互ひに申し語らひませう、と申したらよからうが、否ぢや。貴樣は、大きな鼬喰ひぢやの。この間から、兵術は天下に我ればかりのやうに、如何に頤に細工のよい蟠番ひがあると云うて、人も多いに、この鬮口平太と立並んで爭ふと云ふは、瞎の束ねの丈夫なと申さうか、盲目蛇に怖ぢずと申さうか、面の皮の厚いと申さうか、身の程を知らぬと申さうか。けち太い腰骨も、痛むであらうが、それは、手前が打ちたうて打つたのぢやない。貴樣がけち太いから、叩かれたのぢや。彼の水を浴び居る者を、足首を泥鼈めが喰ひついて、引込まうとするを、引提へて、料理せらるゝと同じ事ぢや。シタガ、面の皮の厚いのは、零落したら、つんと足しになるものぢやげな。斯うさつしやれ。もう兵術は止めにして、辻放下の豆を切る鎌の曲に、ソレ、今のなんでもかぶる、太夫になつたがよい。ハ、、、、、、。
源八　イヤモウ、お指圖うけまして、何なりとも稽古いたさにやなりませぬ。時に、平太どの、先づ、御師範の印可は取らつしやる。渡し堤ともに、淀川の普請は受取らつしやる。先づ云ふ所はない。これで其許の、十分になつたと申すもの。時に、その代りに、ちと其許へ、御無心の筋がござる。
平太　無心とはな。
源八　餘の儀でもないが、物ぢやて。
平太　ヤ。
源八　へ、、、、物ぢやて。その、物を下されまいか。
平太　ヤ。
源八　わが身にも主ぢやないか。難儀さつしやる事ぢや。又、あればかりが女子でもござるまい。サ、もう貴殿の十分になつたからは、餘の事は如何やうにもなりさうな事ぢや程に、闘分けて。
平太　コレ〳〵源八、なんぢやと思へば、物ぢやてを、返してくれいか。
源八　サア、それを、どうぞ。
平太　ならぬ。ずんとならぬ。
源八　サア、なるまい。さう見たに依つて、貴樣を十分に納めた。忠義者ぢやに依つて。
平太　ヤイ。

源八　その志しを酌み分けて。
平太　ヤイ〳〵、そんなら何か、その物を貰はうと思うて、わざと立合ひの勝負に、負けてやつたと云ふのか。
源八　イヤ、全くさうではない。それはそれ、これはこれ。
平太　默りやがれ。うぬは太い奴ぢやなア。いけもせぬ立合ひに、打ちのめされたが面目ないに依つて、物に托けて、云ひくろめるのか。
源八　さうではない。
平太　ならぬ、グッとならぬ、大べら坊めが。面の皮の千枚で、又この平太に、ずばら〳〵と物を吐かすな。みな弟子が落ちたが、恥かしうないか。この頤で、この面でよう、惡態をきくなア。
ト指で突く。
せめて無念なと思ふ根性があらば、くたばつてしまへ。アノ、大泥坊めが。
ト額を毆る。
源八　源八、邪が非でも、貰ひかゝつた物ぢや。貰はにやならぬ程に、さう心得て居やれ。
平太　ハ、、、、皆、聞きやれ。あゝ云ふ頤ぢや。
弟三　今のやうに打たれても
皆々　恥かしうはないか。
源八　忠義の恥かしめは、韓信も股を潜る。强うても負けるもあらうし、弱うても勝つもあらうし、そこは千差萬別ぢやと思うたがよい。
十久　面白い。
十内　强うて負けるならば、その强い所へ、ちとお見舞ひ申さうかい。
源八　何時なりとお出でなされ。
久馬　その素ッ首を、カウ。
ト打ちにかゝり、十內、同じく打ちかゝる。竹刀打ちにて二人を打ち据ゑる。
源八　マア、ざつとこんなものぢや。
新三　さう云ふ所を、後から、カウ。
ト又かゝるを、立廻りあつて、打ち据ゑる。
源八　幾人なりとお出でなされ。
平太　こりや出來た。けうといものぢやが、それは皆、とりどりの猿を見るやうな野郎達、拍子でやられもせうが先生は、ゆかぬていな。
源八　それも、やり兼ねはせぬて。
平太　ハ、、、、、やり兼ねずば、最前御前で、なぜやら

なんだ。そこらが口が調法で、貧乏隱しの段ぢや。コリヤコリヤ、よい事を云うて聞かさう。おれと勝負せい。おれに、ちつくりでも打勝つたら、コリヤ、わが望む證文を遣るワ。その代りに、腰を叩き歪める。事に依ると、ぶつて〳〵ぶち殺さうも知れぬぞよ。

源八　打勝つたらば、證文取るぞや。

平太　ハ、、、、もう慾になつた。よいワ。コリヤ、證文は爰にあるワ。マアちよつと、マア〳〵、竹刀の先が平太の體へ、ちよつと當つたら、直ぐにこれを遣るが、けうといものか。

源八　力一ぱい、やつて見ようわい。

平太　サ、、出かす〳〵。ト云タガ、思ひ依らぬ所を、斯う打ちかけると。

源八　斯う止めるでありさうなものぢや。

平太　餘ッぽど、やうなつたわいやい。又、爰を外して、斯うやつたら。

源八　斯うして防ぐぢやてや。

平太　えらいものぢや。ところを、斯う付け込んだら、斯うして。

ト これより立つて、いろ〳〵あつて、源八、平太を打ちのめす。

源八　斯う打つたものぢや。マア、此やうなものぢや。どなたでも、何處でも、マア、こんなものぢや。

ト 弟子ども、氣味惡がる。

ドレ、さらば證文。

ト 取る。

平太　コリヤ、それは。

源八　なんぢや。竹刀が、ちくとでも當つたら、證文遣らうと、賭づくぢやないか。約束ぢやに依つて、取つたがなんと。

平太　よう取つた。けうといものぢや。そのけうとい所を又、カウ。

ト 拔いて、切つてかゝる。立廻りあつて、打ち据ゑる。

源八　まだ望みなら、カウ〳〵〳〵。幾つでも、氣に入つたやうに、打つてやる程に、さう心得て居たがよいぢや。

ト 側へ坐る。弟子皆々、袖引き合ひ、氣の毒なる思ひ入れ。平太、そろ〳〵起きて、刀を差し、静かに塵を拂ひ

平太　どんな事があつても、勝つ所で勝ちさへすればよいぢや……源八、なか〳〵手利きぢや。よう打つた。なん

源八　にも云はぬ。この事は重ねて、キツと云ふぞよ。
源八　關口平太、神道源八、何時なりとも承はらう。
平太　云はいでならうか。
源八　聞かいでならうか。
平太　どうで遲いか
源八　早いか
平太　禮云ふ所が
源八　互ひの切端。
平太　しつかりと
兩人　忘れなよ。
　ト唄になり、平太、皆々、連れて入る。所へ、縫之助總角出る。
縫之　源八、出かしやつた〳〵。
總角　大抵氣味のよい事ではなかつたわいなア。
源八　ナニ、あの位の事は、屈托するものぢやない。マア、證文、お戻ししませう。
　ト遣る。
縫之　こいつにかゝつて、さま〴〵の目に遭ふ事ぢや。
　ト破る。小市、奧より出る。縫之助、行き當つて
小市　ワアイ。イヤモウ、歸ります。
縫之　小市ではないか。
小市　縫之助さま、ヤ、こなさんは〳〵、よう酷い目に遭はしたぞよ。
縫之　イヤモウ、脊中に腹ぢや。堪忍してたも。
總角　小市さん、お前は、どうして繩を解いて戻らんした。
　ト將監、與三右衞門、喜蝶に綿帽子着せて連れ出る。
縫之　ほんに、どうして繩は解けたぞ。
小市　サア、變つた事ぢやないか。あの深雪さまと云ふは、おれが姉ぢやわいなア。
三人　ヤア〳〵。
小市　わしが親は、禁裡の諸大夫であつたが、仔細あつて浪人の尾羽打枯らして、姉は舞子に賣られる、わしは奉公に行つて、今のこの形。最前の守り袋に、生れ年月が書いてあつたを見て、幼な顏が殘つてある。小さい時の話し、親達の事、憂き苦勞を物語りして、姉弟の名乘りをしたわいなア。
縫之　それで讀めた。兄左衞門どの、堂上方の娘を妻に貰うたとばかり、親の名も云はず、委細は追つて知れうと云うて暮らさつしやつたが、そんなら舞子と云ふ事を、隱さう爲であつたか。

源八　そりや私しに、密かにお話しでござりまする。深雪さまの舞子の時の名は、大吉と申しまする。
小市　如何にも、元の名は大吉と云ふ、舞子であつたげにござりまする。
縫之　これはしたり。
總角　そんならお前も此お内の、一家ぢやわいなア。
小市　ア、、一家にしては薄いものぢや。
源八　さて、最前聞いて居りましたが、こりや矢張り、傾城の總角どのでござりまするか。
縫之　オイナウ。
源八　どうぢややら、入組んだやうな譯ぢやが、どうでござりまする。
縫之　サア、おれも合點がゆかぬ。高がこの小市は、喜蝶と云ひ交して居る。おれは、太夫へ添ひたし。
小市　そこで、縫之助さまと相談して、高は喜蝶を、さうして連れて去ぬる、約束して置いたところが、これぢや。
縫之　マア、どう云ふ仔細で、おぢやつた。
總角　サイナア。お前の金は來ず、その間に、身請けの客の埓が明いて、添うたと思うたところに、思ひがけもない與三右衛門さま。なんであらうと、おれが妹の喜蝶ぢやと云うて連れて行く。云ふやうにせいと、俄かに拵へて、連れてござんしたわいなア。
源八　シタリ、さては喜蝶どのも、縫之助どのも、云ひ交した者のある事を知つて、圓う納めうと云ふ、與三右衛門さまのお志し。仇に思はつしやりまするな。
總角　エ、、忝ない。
將監　樣子は殘らず聞き屆けた。
總角　ヤア、親人樣。
將監　そこに居るは、島原の傾城、總角ぢやな。
皆々　イエ、これは。
與三　云ふまい。慥かに聞き屆けた。將監どの、こなたには先祖より、家中には不義法度の、固い掟と承はつたが、見ると聞くとの違ひ。妹喜蝶の婚禮の夜に、傾城遊女を引込み、館は揚屋同然。これで濟みまするか。將監どの。キッと御返答を承はりませう。
將監　さて〳〵、云はう所もない憎くい奴等。源八、おのれも、同じ穴の狐ぢやな。
源八　與三右衛門さま、これは、どうでござりまする。
縫之　與三右衛門どの、この者は、御自分樣の妹、喜蝶どのでござります。

與三　誰れか、ついに見た事もない女、廓の傾城や賣女に與三右衛門、近付きは持ちませぬぞ。

總角　イヽエイナア、お前が妹喜蝶ぢやと、わたしを連れてござんしたぢやないかいな。

與三　ヤイ／＼、何を吐かす。

ト喜蝶、綿帽子を取る。と縫之助、總角、小市見て

三人　ヤア、これは。

與三　宵より婚禮を待つたところに、延引するこそ道理、こりやなんぢや。將監どの、淀與三右衛門は武士でござるぞ。妹を揚屋同然の館へ、嫁入りはえゝさせますまい。傾城ゆゑに妹めは廢りました。淀與三右衛門が武士の立つやうの、御思案が承はりたい。

皆々　なんの事ぢや。

將監　成る程、御尤も。返す／＼も不所存者の悴め、勘當ぢや。

皆々　エヽ。

與三　今生までの勘當ぢや。早く、出てうせう。

縫之　ハッ。

與三　成る程御尤も。勘當さつしやれずばなりますまい。

源八　憚りながら、與三右衛門さま、お前樣が。

與三　將監どの、武士が知行をくれ、召抱へるも、まさかの用に立てんため。それに、家中へ指南もする身を以て、滿座の中で打ち据ゑられたは、差當つて祿盗人。此奴等は、どうなされまする。

將監　御尤も。

與三　次手に、勘當なされずばなりますまい。

將監　源八、勘當ぢや。出てうせう。

源八　ナニ、勘當とな。

與三　先づ、さつぱりと勘當がよからう。

將監　對面もこれ限り、うせう。

源八　ハッ。

與三　次手に申すが、深雪どのは、舞子とあり、これ以て遊女。次手にこれも、勘當してしまはつしやつたがよからう。

將監　一人端麗なれば、一國を亂す。

與三　一人も置かぬが政道。

將監　云ふに及ばぬ。深雪も勘當ぢや。

皆々　エヽ。

與三　妹、おのれも勘當ぢや。

ト突きやる。

喜蝶　エ、。
與三　妹、おのれが不義も知つて居る。勘當ぢやぞうせう。
喜蝶　なんにも申しませぬ、堪えて下さんせえ。
小市　そこら中が、勘當だらけになつた。
與三　イヤ又、勘當なされずば、お上へこの事、噂あらば家の瑕。勘當とは、いつちよい思案でござる。
將監　悴めゆゑに、妹御を捨てさせまする段、なんぼう気の毒に存じまする。
與三　イヤモウ、手前などは、勘當いたせば、七生までの勘當。
將監　手前とても七生までの勘當。
與三　併し、一旦は左やう仰せらるれども、指が穢ないとて、切つては捨てられぬ俗の譬へ。少しこの勘當、與三右衛門、會得仕らぬ。
ト將監、書く。
將監　これを、よろしく申し上げて下されい。
ト一通、認め出す。與三右衛門、取つて
與三「一つ悴儀之助事、身持ち放埒、また深雪は遊女なる由、詮議の上、不屆き至極、それゆゑ七生までの勘當いたし申すところ實正なり。この儀、鎌倉へも御披露、願ひ入るものなり、正月晦日。花満將監、同じく左衛門。」成る程、この通り言上仕りませう。とてもの事に、刻限をお書き入れなされい。
將監　心得ました。
ト書く。
與三　これで、謂ひなき勘當、お家の格式は立ちました。
將監　家來ども、門前より叩き出せ。
皆々　エ、。
與三　とてもの事に、早々叩き出したがよからう。
將監　奧へ行て、深雪めを引摺り出し、一緒にうせう。
ナニ、與三右衛門どの、これにござりませう。
ト入る。七ツの半鐘。
ト銀之助、總角、源八、思ひ入れ。
三人　與三右衛門さま、こりやマア、どうでござります。
與三　最早七ツ時、六ツまでは、たつた一時。用意の乘り物。
侍ひ　ハア。
ト乘り物、八人して舁き出る。與三右衛門、乘る。花道の方へ行く。
皆々　これは。

與三　明け六ッまでに、屋敷を立退け。將監どのには、覺悟なされと云へ。うろたへて、この場に居ると、命がないぞ。

侍ひ　エイ〱〱〱。

ト早打ちの如く舁き入る。皆々、呆れて居る。

皆々　こりやどうぢや。

ト深雪、長刀にて辨之作を追ひ掛け出る。立廻りあつて、深雪が長刀を打ち落し、引きかたげうとする。源八、辨之作を取つて投げる。タテあつて、辨之作、逃げて入る。

將監　辨之作の主殺しめ。

ト手を負ひ、出る。

皆々　ヤア、將監さま。

源八　南無三方、こりや、どうして手を負はしやつた。

深雪　家來辨之作が、兼ねて川浦遊軒に頼まれ、わしを口説いたが、今度のお使者に左衞門さまのお供。それに今宵忍び入り、わしを連れ、立退かうとするを、支へなされたれば

源八　この通りの深手か。

トうろたへる。

將監　オイナウ。

源八　おのれ、辨之作め。

ト行かうとする。

深雪　源八待て。將監さまのお命が危ふいがや。

ト源八、戻る所へ、紋之丞、左近、出て

紋之　今まで家中揃ひありましたが、屋敷に人ぎれは、一人もござりませぬ。

皆々　ナニ、一人も居ぬか。

左近　その上、廻船往來の御朱印が、紛失いたしましてござりまする。

皆々　ヤア。

將監　ナニ、廻船往來の御朱印が。

ト死ぬる。

皆々　コレ申し、これは、ア、、、。

源八　すりや、御朱印も辨之作め、うぬ。

ト花道の方へ駈け出す。向うより見船、包みを脊負ひ、走り出で、血みどろになつて源八に行き當る。

ヤ、女房見船か。

見船　お家の大事ぢや〱。

ト轉ける。

皆々　ヤア、見船が。
ト源八、行かうとする。
深雪　コリヤ源八、見船がこの形、家の大事ぢやと云ふがや。
小市　コレマア、なんぢや知らぬが、大事ぢやといなう。
ト源八、駈け戻り、見船を起し、呼び生けて
源八　コリヤ女房、氣を鎭めて、物を云へ。源八ぢや。源八ぢや。
見船　コレ、この切尖の血を見て、源八に無念なと云へと。
ト反る。
源八　コリヤ／＼、後も先も云はいでは、合點がゆかぬ。とつくりと云へ。左衞門さまが、この切尖の血を見て、無念なと云へとか。
見船　眞の太刀、この土器、それと。
ト風呂敷を抛り出し、ウンと反り、死ぬる。
源八　なんぢや／＼、見船やアい。
トいろ／＼して
もうこりや、息が絕えたか。
皆々　ヤア。
源八　マア、包みの中を。

ト解く。
深雪　ヤア、こりや夫左衞門さまのお首ぢや。
皆々　ヤア、ナニ、左衞門さまの、ハア。
ト遠責めになり、皆々、恂りする。
源八　兩人、遠見せい。
紋左　畏まつてござりまする。
ト入る。これより思ひ入れ、様々あつて、源八、土器の破れと太刀と見て、思案。深雪は首に取りつき、取亂し、泣く。
源八　聞き傳へたる天盃の土器、眞の太刀。この血を見て無念なと云へと、左衞門さまが……切腹なれば……ソレ深雪さまに、戀の叶はぬ意趣。遊軒が大内の
ト思ひ入れあつて、花道の方を睨みつけ
エヽ、さぞ御無念にござりませう。
ト見船に向ひ
出かした、愛い者ぢや。よく知らせたな。
ト紋之丞、左近、出て
紋之　三百人ばかりの人數にて、出口を塞ぎました。
左近　承はれば、館を闕所仰せつけられ、もし狼藉も致さうかと、用心の遠責めぢやと申しまする。

源八　推量の通り、もう叶ひませぬ。これは左衛門さまが、禁裡で騒動をおやりなされ、切腹なされた、その祟りと見えまする。両人、旅の用意せい。
左紋　ハア。
源八　サア／＼、これはしたり、どうでござりまする。
縫之　どこへ行くのぢや。
源八　どこと云うて、マア、當なしに出るのでござります。
皆々　さうして、爰はえ。
源八　天下よりの仰せつけられ、明け渡さにやなりませぬ。
深雪　そんなら、明け渡すか。
　ト源八が顔をヂッと見て
　エヽ、腑甲斐ない。
　ト泣く。
　エヽ、男になりたい／＼。
縫之　そんなら、この屋敷に籠る所存はないか。
源八　アヽ、コレ、壁に耳、天に口。我れ／＼同士の意趣ならば、如何やうにもなりますれど、天下へ弓引くと朝敵。朝敵となれば、例へ後日に如何程の大功なすとても、再び相續は叶ひませぬぞや。サア／＼、共々にお諫め申して、サア／＼／＼。

深雪　ハッ。
　ト取亂して泣く。
喜蝶　お道理でもあり
總角　マア、お立ちなされませい。
　ト泣く、
源八　アヽ、コレ／＼、共々お諫め。エヽ、何をキョロキョロ。
縫之　イヤ、この草鞋は、右へ穿くのか、左か。根ッから知れぬもの。
源八　どちらなと穿いたがよいわい。
　ト深雪、足の立たぬ思ひ入れ。源八、深雪を引起し
　コレ、御新造様、お前には、川浦遊軒、熊本辨之作と云ふ二人の敵がござりまするがや。
深雪　ヤア。
　ト深雪、キッとなる。その顔へ刀さしつけ
源八　コレ、この血汐は、夫左衛門さまの血汐ぢやがや。
　ト深雪、身を顫はして睨む。
　もうよい／＼、サア／＼、立たう／＼。左近、そちらへもかゝれいやい。
　ト深雪、縋る。

安永元年正月大坂角の芝居上演繪番附

若殿様、御用意金がござりませうな。お枕金がござりまするか。

縫之　イヽヤ、根ッから無い。

左近　イヤ、源八どの、もし入らうかと存じまして、用意の金子を。

紋之　僅かなれども、私しも。

ト源八、取つて

源八　ハア、栴檀は二葉よりと、まだ年端も行かぬに、流石は武士の子ほどある。よい心掛け。コレ若殿様、お枕金と申すものは、斯様な時にほか入りませぬ。それにマア、根ッから無いとは、あんまりな。高い方へ行くがよからうか。

ト矢数多、射かける。紋之丞、死する。皆々、惘りする。

もう絶體絶命ぢやわいなう。

ト捕り手数多、出る。見事なるタテあり。追うて入る。と黒裝束の侍ひ一人づゝ出て、五人を一人づゝ擔げ入る。この間、始終、バタ／＼、いろ／＼タテあるべし。

源八、手負ひ出て、いろ／＼思ひ入れあつて

縫之助さま、深雪さま。

新治　やらぬぞ。

ト切る。新治、脊へ面にて死する。

源八　深雪さま。

三平　やらぬぞ。

ト足を切られて死する。

源八　斯様に尋ねても、お行くへの知れぬと云ふは、敵方へ奪ひ取られたか。エヽ、無念やなア。

侍ひ　やらぬぞ。

ト兩人、出て切られ、死ぬる。鐵砲、撃つ。

源八　ヤア、飛び道具を以て、卑怯な。何奴ぢや。

ト平太、鐵砲を持つて出る。

平太　いま汝が右手の腕を撃ち掠めたは、おのれに委細を云ひ聞かせ、後にて嬲り殺しぢや。覺悟せい。

源八　さては今の鐵砲は、うぬであつたよな。

平太　左衛門は鎌倉の上使をしくじり、その上、兄遊軒に手を負はせ、大内を騒がしたゆゑ、左衛門はくたばつてしまうた。

源八　ナニ、兄遊軒と吐かすからは、さてはおのれは、川浦遊軒の弟よな。

平太　重罪の左衛門、部類眷族一人も殘らず、ぶち殺せと

の上意。この館は、兄遊軒に下され、この平太が押領するわやい。

源八　ヤア、人も多いに遊軒に、館を押領しられたか。エエ。

平太　無念なか。オヽ、悲しい筈〳〵。深雪は兄遊軒が心をかけ居れば都へ送り、總角は身が女房。喜蝶も手かけにする。縫之助も後からやると、くたばつたら左衞門にこの平太が言傳てしたと吐かせ。

源八　エヽ、遊軒こそ手に入らずとも、おのれを打ち殺して、主人への土產。遊軒も後からやる。半座を分けて置き居らう。

平太　嬲り殺しぢや、覺悟ひろげ。南無阿彌陀佛。

ト立廻りある所へ、與三右衞門、ツカ〳〵と出て、平太を突きのけ

與三　源八、苦しうない。早く立退け

平太　でも、鎌倉の科人を。

與三　縫之助・深雪こと、將監勘當いたしたる事、紛れもなき自筆ゆゑ、助け遣はす條件の如し。勘當の者どもにお祟りない。有り難い勅書。

平太　でも、左衞門が從類を。

與三　勘當は寅の一天。家の沒收は卯の上刻。

源八　イヤ、なんと。

與三　かゝる願ひをせん爲に、種々に心を碎いたわいやい。

源八　ぢやと云うて、御主人達は。

皆々　皆爰に居るわいなう。

ト花道より出る。

源八　ヤア。

與三　家來を廻し、細工は流々。

平太　四人の奴等。

與三　勅諚を背くと、たつた一擊ち。

ト種ケ島を構へる。

源八　エヽ、お志し、忝ない。

與三　その手疵では心元ない。

源八　斯くの仕合せ。

ト手水鉢を切る。

與三　出かした。

平太　うぬ。

與三　行け。

幕

三つ目　源八渡の場

役者——金貸し、權九郎。渡し守、茂治兵衞。揚屋、才兵衞。阿房、與九郎。熊本辨之作。源八女房、お舟。同娘、お松。

造り物、一面の黒幕。眞中に渡し場の小屋。橋がゝり、松原。高札を立てあり。砂舞臺に草井戸。在郷唄にて、幕開く。

ト仕出しの百姓三人、出る。

百一　しんどい、休め〳〵。

百二　なんぢややら、やう〳〵爰は源八の渡し。もう今から休んで、どうなるもので。

百三　それ〳〵、まちつと歩め〳〵。

百一　なんぢや。高札が立つてあるワ……ドレ〳〵。

ト讀む。

百二　淀川筋、水早く落ち候ふゆゑ、舟にて登る工風いたす者あるに依つては、重罪たりとも、その科を赦し、褒美は望み次第たるべきもの也。

百二　ムウ、それで、おれも讀めた。

百一　爰を、どうして源八の渡しと云ふぞ。因縁のありさうな事ぢや。

百三　これは、平太と云ふ人と、源八と云ふ者と、渡し船と堤の爭ひがあつたが、源八は負けて、平太が兩方ながら、普請を受取つたげな。

百二　人にさしても、矢ッ張り源八の渡しと云はすは、太い奴ぢやな。

兩人　さればいなう。

ト小屋の内より與九郎、阿房の形にて出る。

與九　コリヤ〳〵、わいらは何を吐かす。役に立たぬ事吐かすな。首が飛ぶぞ。

皆々　ハアイ。

與九　頭が高い。下に居れ。

皆々　ハア、、、。

與九　おれは所の代官ぢや。聞けばおのれらは、源八さまを惡う吐かし居る。此まゝでは免さぬぞ。

皆々　イヤモウ、なんにも存じませぬ、お免され下さりませ。

與九　この後はキッと嗜なめ。憎い奴の。

ト皆々、頭を上げ、與九郎が顔を見て

百一　ヤイ、おのれ、阿房な面をして、代官ぢや。よう、おれらに辭儀をさせ居つたなア。

與九　オヽ、おりや殘な渡し守ぢや。一ぱい喰はした。ハハヽヽ。

皆々　おのれ、此まゝでは堪忍ならぬ。

ト せり合ふ。橋がゝりよりお舟、やつしの形、お松を連れ、辨當を持つて來る。在郷唄。

ふれ　アヽ、コレ〳〵、何事かは存じませぬが、愚かしい者でござんす。料簡してやつて下さりませ。

與九　お家さんか。わしが一ぱい喰はしてこましたを、腹立てゝ。

ふれ　阿房よ。皆、もう料簡して下さりませ。

皆々　そんなら料簡してやろはやろ。渡しを渡してくれ。

與九　それ見たか。否でも應でもあやまるわサ。

まつ　コレ與九郎、其方の詫らへの辨當、持つて來たぞや。

與九　オツトショ。芋炊いて下さんしたか。

ふれ　どうした事やら、お松は、われが云ふ事を聞く筈。さらば、對面いたさうか。

與九　ト辨當を明けうとする。

皆々　先刻にから待つて居る。飯を喰はずと、渡してくれいやい。

與九　やかましい。喰はぬ先から、咽喉が詰る。

ふれ　皆樣を渡して來てから、喰やいなう。

與九　そんなら、お家さん。お前に預けて置く。犬に取られて下さんすな。

まつ　オヽ、早う行ておぢや。

與九　罪人ども、斯う參れ。

皆々　罪人とは。

與九　ハテ、弘誓の舟へ來いと云ふ事ぢや。

ト與九郎、臆病口へ入る。皆々、入る。と橋がゝりより飛脚一人、出る●

飛脚　モシ、女中さん。ちと物を尋ねたうござりまする。

ふれ　ハイ、なんでござりまする。

飛脚　此あたりに、渡し守の茂治兵衞と云ふ人がござりまするか。

ふれ　ハイ、ついそちらの方を、横へ取つてござりますと角の家がさうでござります。幸ひわたしは、その家の者でござんすが、なんの御用でお出でなされましたえ。

飛脚　それは幸ひでござります。そんなら、お前に上げま

せう。わたしは飛脚でござります。この狀を屆けまする。
ふれ　ハイ。「おふねどの參る。」これは、向うの名がござりませぬ。どこからお出でなされましたえ。
飛脚　イヤ、おふねどのに渡すと、先で知つてぢやと云うてゞござりました。
ふれ　そんなら慥かに、受取りましてござります。
飛脚　イヤ、もう參じませう。
ト入る。
ふれ　マア、寄つて、お茶でも上がつてお出でなされませいな。これはしたり、よい所で逢うた。ハテ、合點のゆかぬ事ぢや。
まつ　ドレ、見せさんせ。こりや、父さんの手ぢやわいなア。
ふれ　ほんにさうぢや。そこらへ氣を付けてたも。
まつ　アイ。
ト封を切り
「一筆申しより〳〵、いよ〳〵御無事に候ふや。然らば今に御朱印の在所も知れず、承はり候へば、又々總角どのにも、揚げ錢の代りに廓へ參られ候ふ由、定めて平太が廓へ通ひ候はん儘、其許、面を見知らぬを幸ひに、廓へ入込み、御朱印の詮議なさるべく候ふ。直ぐに詮議いたし候うては、前の意趣ある平太に候へば、面合はし候ふ事惡しく候ふ。よろしく賴み入りより。猶々娘の事も、よろしく賴みより。めでたくかしこ。五月十七日。」
ふれ　さては、廓へ入込み、御朱印の詮議を、わしにせいと云ふのか。ア丶、どうしたらよかろ知らぬ。待て。
ト思案する。橋がゝりより與九郎、羽二重の衣裳、編笠着て來る。と後より揚屋才兵衛、男二人を連れて出る。
才兵　男ども、キリ〳〵と引立ていく〳〵。
トおふれ、留めて
ふれ　どうなされます。
才兵　さればいやい。總角も、前の總角なら戴いて居るけれど、この縫之助と云ふ者があるゆゑ、勤めはしをらず、それで、縫之助を連れて、桶伏せにしたらば、總角が勤めを大事にするであろと思うて。男ども、引立て〳〵。
ト皆々、かゝる。
與九　ハア丶丶丶丶丶。
ト笠を取る。
コレ、お家さん、殿樣が、舟へ乘らしやる所を摑まへて

なんのかのと云ふに依つて、殿様の着るものを着て、おれが化けた。なんと、智謀の程、見て置け。きついか。

才兵　さては、おのれが逃げらしたな。

ふれ　コレ、才兵衛さん、マア、其やうに云はずとも、もちつと待つて下さんせ。金の工面。

才兵　オツと皆まで云ふまい。金の工面どころか、權九郎さまに五十兩と云ふ金借つて、今日の明日のと日延べ。代官所へ斷わると云うて居らるゝ。それに金どころか。ツイそこらにも、金がぶらついてあるにな。

ふれ　そこらあたりに、金がぶらついてあるとはえ。

與九　拾ひたいものぢや。

才兵　ソレ、そこに。目の前に。

　ト與九郎、捜す。

與九　ハテ、面妖な。わしが目には見えぬ。

才兵　ハテ、その娘、廓へさへやれば五十兩。なんと、目の前にあるではないか。

與九　ヤイ、まだ響きも入らぬ子を。

才兵　その響きの入らぬが附け目ぢや。

與九　響きの入らぬが附け目ぢや。酷い奴の。

ふれ　サレバイナア。あの子は、ちと義理のある子なり、まだ、ほんの飯食はうて。

才兵　イヤサ、よひ頃合ひでごんすて。

與九　まだ去年まで、溝でしゝやつたもの。

まつ　母さん、わしを廓へ遣つて下さんせ。わしや、廓へ行きたうござんすわいなア。

ふれ　何を云やるやら。廓へ行けば、芝居と違うて、苦しいものぢやぞや。

まつ　わしや廓へ行て、常住殿様の顔が見たいわいなア。

ふれ　ナニ、廓へ行て、殿様の顔が見たい。

まつ　アイ。

ふれ　そりや、誰れが、世話して。

與九　わしが中へ入つて。

ふれ　何度ほど、逢うた。

まつ　たつた三度。

與九　一度は湯殿で。

ふれ　そして、心持ちは。

まつ　いとしうござんす。

ふれ　我折れ。差合ひもくらずに、いとしうなつたか。

　ト思案して

そんならわが身は、廓へ行きやるか。

まつ　アイ。
ふれ　才兵衞さん、そんなら、さうして下さんせ。併し、ちとお前に無心がある。
才兵　娘さへ來る氣なら、何なりと聞きませう。
ふれ　わたしも一緒に、奉公に行きたうござんす。仲居になりと、遣り手とやらになりと、一緒に置いて下さんせんかえ。
才兵　イヤ、そりやならぬ。それでは初めから蟲附きぢや。總體、子飼ひの奉公人でも、ちよこ〳〵親が來ると、根性が惡うなるものぢやに依つて、そりやならぬ。
ふれ　そんなら、この相談も、止めに致しませう。
才兵　そんなら、金受取らう。渡せ。
ふれ　金はござんせぬ。
才兵　据ゑるな〳〵。
ふれ　ハテ、嫌なら縫之助さまを連れて行て、桶伏せにしたがよいが、世間には阿房な者が澤山ある。そりや桶伏せにしたら、さりとはあれは男氣な者ぢやと存じて、譽める者もあらうが、桶伏せの桶から金は出せまいし、また親ぢやもの、子ぢやもの、なんの一緒に居たと云うてあの子の爲めにこそようあれ、なんの惡い事があらう。

才兵　ア、、コレ〳〵、御苦勞ながら、奉公にお出でなされて下さりますと、喜びまする。どうぞお出でなされて下さりませ。
ふれ　イエ〳〵、無理に行かうとは云はぬぞえ。
才兵　ア、消えたい。どうぞお出で下さりませ。
ふれ　そんなら談合いたしませう。さうしてマア、あの子の給銀は、揚げ代差引きして、五十兩受取るが、わしが給銀は、なんぼ寄越さんすえ。
才兵　一年に二兩二分。
ふれ　アノ、たつた二兩二分。
才兵　そんなら三兩。
ふれ　アノ三兩。
才兵　いつそ飛んで五兩。
ふれ　廉いもんでござんすな。そんなら、カウツ、いつそ大坂の新町へ談合せうか。
才兵　ア、、コレ〳〵、そんならなんぼ。
ふれ　マア、五十兩。
才兵　エ、。
ふれ　ドリヤ、一走り行て來う。
才兵　ア、、コレ〳〵、出す〳〵。五十兩出す。

ふれ　イヤ、無理にとは云はぬぞえ。
才兵　誰れが無理にと云ふぞいの。娘を五十兩で、好い奉公人取つたと思へば、勤めをせぬ者を五十兩とは。
ふれ　高いかえ。
才兵　イ、エ、廉いものぢや。サア、ザツと埒が明いた。證文認めて、金渡しませう。一走りござれ。
　トこの間に辨之作、出て聞いて居る。
ふれ　そんなら、さう致しませう。
才兵　して、あの子は幾歳ぢや。
ふれ　十六で、戌の年でござんす。シタガ、あの子の戌の年は不思議な生れ。戌の年の、戌の月の、戌の日の、戌の刻に生れた、戌の年でござんす。
才兵　それは不思議。出世しませう。サアござれ。
ふれ　コレお松、わしは、あなたと、ちつと行て來る程にどこへも行かずに待つて居や。與九郎よ。氣を付けいよ。サア、お出でなさんせ。
　ト入る。
まつ　早う戻らしやんせえ。
與九　お松さん、アノ、これから常住、殿さんの顔見て、嬉しからうな。
まつ　わしや嬉しいわいなう。
與九　廓へ行くと、道中せんならんが、お前知つてか。
まつ　イヤ、知らぬわいなう。
與九　おれが敎へてやろ。マア、斯う褄を取らんせ。斯う足を向うへ、斯う。
まつ　ずんと、ようせぬわいなう。
與九　ハテ、どうでひろげねばならぬ足ぢや。不器用な人ではある程にの。
まつ　斯うかや。
與九　わしが後から見てござんせ。
　トこの間に、後より辨之作、お松を連れ、小屋の内へ入る。
まつ　ハア、コレ。
　ト權九郎、敵役の形にて出る。町人三人連れ出る。茂治兵衞、親仁の形にて出る。
町人　サア、よござるわいなう〳〵。
權九　コリヤ、老ぼれめ。代官所へ連れ行く。サア來い。
町人　コレ權九郎、其やうにせずといやいの。
茂治　コリヤ權九郎、如何に貸したが强いと云うて、其や

うにせぬものぢや。ハテ、借つた金は返す。マア、二三日待つてくれい。
町人　コレ權九郎、貸したく〳〵と云やるが、證文でもあるかや。
權九　否ぢやわい。今日の明日のと、いつまで待つのぢや。サア今受取つた。金渡せ。
權九　わり様達は、人に金を貸した事がないに依つて、其やうな事云ふわいなう。金貸して證文取らいで濟むものか。
與九　コリヤ權九郎め。
權九　なんぢや。
與九　なんでもない。
權九　「一札の事、一つ金五十兩なり、右の金子、御入用次第、きつと返濟申すべく候ふ、もし間違ひ候へば、娘お舟を、其許へ女房に遣はし申し候ふところ實正なり。」なんと、これで物云ふわいやい。
與九　權九郎め。
權九　なんぢや。
與九　なんでもない。
茂治　權九郎、それは尤もぢやが、マア、二三日待つてたも。お舟も、今は男を持たしたに依つて、わしが儘にもどうもならぬ。
權九　なんぢや、娘に男持たした。太い奴ぢやなア。親仁、證文に書入れて男持たしたと云うて濟むか。
ト草履にて叩きかゝる。皆々、取支へる。
町人　マア、ようござる。もし疵でも附いては悪い。もう料簡さつしやれ。
茂治　權九郎、如何に所に合うた者ぢやと云うて、胸倉取つて、わりや、どうするや。
權九　イヤ、斯うするワ。
ト叩きかゝる。後より辨之作、權九郎を投げる。
イヤ親仁、わりや味やるな。腕づくなら來い。
ト辨之作が顔を見て
ヤア、今のはお侍ひか。わりや、なんでおれを投げた投げた。
辨之　年寄りに、もし怪我でもあつては悪いと思うて、引退けたが、なんとした。
權九　イヤ、われが引退けやうは、えらい引退けやうぢやな。
ト摑みかゝる。顔を叩く。

ア痛々々々。

ト そこらを捜す。

町人　なんぞ落したか。

權九　目の玉は、そこらにないか。

與九　オツとあるぞ。梅干の種ぢや。

辨之　コレ親仁、こなた、あのべら坊に、金五十兩借つて居るか。

茂治　ハイ。

辨之　ソレ、返してしまはつしやれ。

ト 金を遣る。

茂治　エヽ、すりやこの金を、私しに下さりまするかえ。

與九　アノ、只かえ。

辨之　如何にも。

茂治　お前は神様か、佛様か、産土神様か。有り難うござりまする。コレ、皆の衆、喜んで下され。

町人　オヽ、出かしやつた。早う返してしまはしやれ。

茂治　コリヤ權九郎、金返す、受取れ。

權九　受取らいぢや。

與九　權九郎、證文から先へおこせ。

權九　忙しない、金改める。待ち居れ。

與九　證文おこせ。

權九　まだしも似せ金ではない。ソリヤ、證文。

與九　オツトシヨ。

茂治　おれが手に、改めて見よ。

與九　お前の手も何もいの。字が兩方へ別れてある。

茂治　阿房めが。

町人　權九郎、金受取つたら、もう去にやらぬか。

權九　こなた衆は、いろ〳〵世話をするの。年寄る筈ぢや。おれが足で、おれが去ぬる。搆うてもらふまい。アヽ、世間には阿房な者がある。近付きでもない者に、五十兩と云ふ金を遣る。いかいたわけ者ぢや。長生きすれば、いろいろの事を見るわいやい。

ト 花道の中程まで行くと

辨之　コリヤ待て。

權九　なんぞ用があるか。

辨之　われは、なんぞ忘れた物はないか。

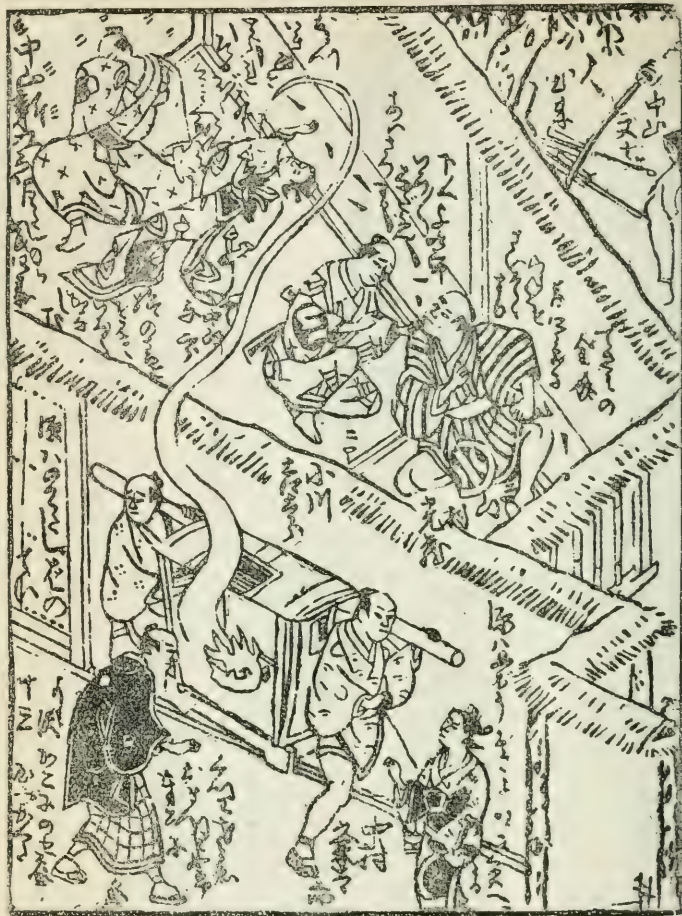
ト 權九郎、捜して見て

權九　なんにも忘れたものはない。

辨之　金を返すからは、云ひ分はあるまいな。

權九　誰れぞ云ひ分があると云ふか。

辨之　最前は、なぜ親仁どのを打擲したぞ。
權九　なんぢやい〳〵。埒の明かぬ事云ふないやい。そんな強請り喰ふものぢやないぞ。金貸して喰うて行く權九郎ぢや。返せば云ひ分はない。返さぬさかいでぶつたが、なんとした。
　ト本舞臺へ戻る。
辨之　先刻には、金返さぬさかいで、打擲したが、今は金返したさかいで、われを、カウ〳〵。
　ト背打ちを喰はす。
權九　イヤおさぶ、如何に差いたと思うて、ひらめにすな。なんでぶつた。なんで叩いた。
辨之　返したに依つて、われを、カウ〳〵。
　トまた叩く。
權九　イヤモウ、生きても死んでもぢや。侍ひ、われはひよんなものと出入り仕掛けた、不仕合せな者ぢや。喧嘩して、生きて戻つた、例しのない男ぢや。
　ト後へ逃げ支度して
なんの、命投げ出して置いてするわい。
町人　ハテ、もうよいわいなう。料簡して行きやいなう。
權九　構ふない。挨拶すると、わいらが相手ぢやぞ。

町人　構ふな〳〵。
權九　サア侍ひ、怖さうにせんと爰へ來い。高が命一つぢや。わりや、なんで挨拶する。おのれを。
　ト町人に投げられ
もう聞かぬ。
　ト逃げては
爰へ來い。何奴でも相手ぢや。
　ト逃げて
コリヤ侍ひ、卑怯な。爰へ來い。
　トやかましう云うて、町人ども共に向うへ入る。
茂治　お前樣は、神樣か、佛樣か。見ず知らずの私しに、大枚のお金を下さりまして。阿房よ。お禮申せ。
與九　たんとの金を、只くれると云ふ事があるものか。嬉しうございまする。
　ト辨之作、茂治兵衞が白髮を切り、火にくべて、小屋の内より壺を出し、合せて呑む。
辨之　戌の年の、戌の月、戌の日、戌の刻。
　ト戴き、呑み、ウンと氣を失ふ。
茂治　アヽ、コレ、お侍ひ樣〳〵。
與九　アヽコレ、申し〳〵。

安永元年正月大坂角の芝居上演繪番附

茂治　これはマア、なんの事ぢや。お侍ひ様〳〵。
與九　なんぢやら、犬々と云はんしたが、まちん呑まんしたさうな。
茂治　お侍ひ樣、お氣が付きましたか。阿房、水々。
ト井戸の水を汲み、呑ます。
辨之　ウ、ン。
茂治　お侍ひ樣、お氣が付きましたか。ヤア、お前のお顏は。
辨之　おれの顏が、なんとした。
與九　ソノ、お前の顏は。
辨之　身共が顏が、どうした。
ト草井戸にて見て
戌の年、戌の月、戌の日、戌の刻に誕生の、女の生膽に血筋の者の白髮を合せ用ゆれば、相好變ると遊軒どのゝ秘傳。ハテ、變つた妙藥も、あればあるものぢやなア。
茂治　エ、。
辨之　緣あらば、重ねて
ト向うへ走り入る。
茂治　なんの事ぢや。
ト與九郎、茂治兵衞が襟を持ち、井戸に向ひ

與九　戌の年、戌の月、戌の日、スンヘンヘンスン、ハラメンスン、キヤウ〳〵。ハテ、變つた寢言も、あればあるものぢやなア。
茂治　エ、、阿房め。どうやら胸騷ぎがして惡い。お松はどこに居る。
與九　ほんに、お松さんに、道中教へて居たが、どこへやら消えさんした。
茂治　エ、、何吐かすやら。尋ね居れ。お松よ。
與九　お松さん。
茂治　松よ。
與九　松よ。
茂治　もちつと大きな聲で呼べ。ヤイ、お松よ。
與九　おまよ。
茂治　松よ。
與九　お松さん。
茂治　松よ。
與九　ア、コレ、小屋の內が血だらけぢや。
茂治　ヤア〳〵。
與九　ソレ、お松さんが殺されてある。芋とやら云ふものを取つたさうな。

茂治　そんなら今の侍ひが、孫の敵ぢや。
　ト尻からげ、花道へ入る。
與九　ア丶コレ、おれ一人殘して、コレ、おれも行かう、親仁さん。
　トお松の死骸をかたげ、向うへ入る。
　ト才兵衞、お舟出る。
才兵　サア／＼、事が濟んだ。證文取つて、金渡す。
ふれ　いかいお世話。お松や／＼／＼。これはしたり、どこへ行たやら。コリヤ、小屋の邊は血だらけ。
才兵　コリヤ、愚圖々々するは、證文して金受取ると、ふけらかしてしまふか。その手は喰はぬ。その金、此方へ。
ふれ　イエ、その金を。
才兵　男ども。其奴、踏みのめせ。
男皆　合點ぢや。
　ト寄つて踏む。ドロ／＼にて、お松出る。
まつ　こりや、母さんを、なんとする。
ふれ　ヤ、お松か。どこへ行てゐさつた。フン、もう廓へ行く事が嫌になつたか。
まつ　ちよつと戻つたのでござんすわいな。
ふれ　これでも逃がしたのでござんすか。
才兵　イヤモウ、近年の誤まり。とんと誤まつた。
ふれ　ア丶、其やうに云はんすなら、料簡しよう。
才兵　サア、そんなら娘、駕籠に乘りや。アノ、垂れを上げてくれいか。ドレ、上げてやりませう。
　トお松を駕籠へ乘せ、歸る。
ふれ　そんならわしは、後から行く程に、皆さん、賴むぞえ。追ツつけ後から行く。機嫌よう行きやえ。
才兵　娘が上氣したかして、顏が赤うなつた。
　ト向うへ入る。
ふれ　追ツつけ行く程に、待つてゐいや……ア丶、女と云ふ者は、早う智惠附くものぢやなア。昨日や今日まで、子供のやうに思うて居たが、いつの間にやら殿樣と。
　ト淚をこぼし
可哀やなア。神道源八が女房や娘が、僅かな身の代に傾城の奉公。ア丶、又、愚痴な事云うた。こんな事云ふ手間で、ドリヤ、去にませう。

幕

四段目　　寶來屋の場

役名――花滿総之助。阿房、與九郎。太鼓持ち、幸助。同、喜作。傾城、總角。同、常磐木實ハお松の亡靈。同、花の井。同、玉の井。同、松代。同、千代鶴。同、八重菊。造り手、お舟。同、おかぢ。揚屋、才兵衛。玉淵久馬。岩瀨記内。爪長屋權九郎。神道源八。渡し守、茂治兵衛。關口平太。

造り物、惣二重舞臺。向う長暖簾、まいら戸。下座、中二階。橋がゝり、本大格子。寶來屋と云ふ行燈かかり、騷ぎ唄にて、幕開く。

ト權九郎、喚いて居る。才兵衛、お梶、詫びて居る。梅野、八重菊、松代、千代鶴、いづれも傾城の形。玉の井、泣いてゐる。

かぢ　マア、お待ちなされませい。

權九　怪體なぞ〳〵。

梅野　權九郎さん、突き出しの太夫さんぢやに依つて、どうで氣に入らぬ事もあらう。其やうに云うたものでもないわいな。

松千　マア、堪忍さしやんせいな。

才兵　まだ小さい太夫どのゝ事でござりまする。悪い事があるなら、造り手のお梶に叱らせませう。

かぢ　わたしが、とつくりと意見いたしませう程に、マア、お待ちなされませ。

權九　コリヤヤイ、金出して買ふに、すつたのもぢつたのと、この權九郎、ついに女郎に振られた事がない。ちつぽけな形をしくさつて、太ばつたの男を、よう振つたな。

かぢ　成る程、御尤もでござりまする。わたしが、お腹の癒るやうに致しませう。

才兵　さうぢや〳〵。意見しや。

かぢ　コレ、玉の井さん、こなさんはマア、やう〳〵この頃、仕立てゝ間もないに、お客を振ると云ふ事があるものか。なんで振らしやつた。

ト抓る。玉の井、泣く。

梅野　コレ〳〵、其やうに荒うさつしやるないなう。

千松　泣かしやんすわいなう。

かぢ　構うてもらひますまい。太夫さん方の不勤めは、造り手が折檻せにやならぬ。サア、どう云ふ事で振らしや

つた。
玉の　振りはせぬわいなう。
權九　イヤ、振つた〳〵。
かぢ　イヤ、振つたのか。
玉の　なんの、わたしが振らう。逢うたわいなう。
かぢ　逢うた……その逢うたものが、あのやうに仰しやりまする筈が。
玉の　逢うたは逢うたけれど、づッともう。
ト泣く。
かぢ　權九郎さま、逢はれましたかえ。
權九　オヽ、逢うたは逢うた。
梅野　ソレ、見さしやつたかの。
才兵　お逢ひなされましたら、其やうにお腹をお立てなされる筈はござりますまいがな。
かぢ　なんぞ外に、悪い事がござりますかえ。
權九　オヽ、ある。自體、この間から、あの遣り手の、お舟に惚れて居るに依つて、わいらを頼んでも、イヤすつたの、もぢつたのと云うて埒明かぬ。お舟めはこはゞる。五日も八日も、此やうに居續け打たして置いて、おのいらは、おれを太郎にかけるのか。

才兵　全く左やうではござりませぬ。あのお舟が娘を、私しの所へ取りましたに依つて、その目代に、遣り手奉公に参りましたが、彼の蟲附きの總角を揚げ詰めにして、ちよつと、いらはしも致しませぬ。外に結構な身請けのお客があつて、遣らうと思うても、金銀をパッ〳〵と蒔き散らかして、廓中を靡けるに依つて、太皷遣り手まで皆、お舟が幕下に屬いたして、私しも力一ぱい云うて見る氣ぢやけれど、威勢に畏れて、よう申しませぬて。
かぢ　どうぞ手に入れて上げませうと思うて、才兵衞さまと、いろ〳〵に相談をして居ります。もそつとお待ちなされませい。
權九　サア、おれもホッと待ち退屈したに依つて、マア、蟲こなしに、あの新造を呼んだところが
皆々　振られしやんしたかえ。
權九　イヤ、振りはせぬ。
才か　それでもお前。
權九　サア、初手は逢うた。それから、話しをしても、接ぎ穗がないに依つて、また逢うた。爰ぢや。今度の目はしく〳〵泣いてうぢつくに依つて、イヤア、年に似合はぬ手をせり居ると思うて、きほひかゝつたれば、逃げ廻

るに依つて、爰へ追はれて來たのぢや。女郎が無理か、おれが無理ぢやあるまいがな。

梅野　其やうになうてさへ、アタ憎てらしいこなさんに、逢ふ者はあるまいと思うたに、オヽ怖。

松千　こちらは嫌ぞ。

かぢ　こりや、太夫さんのが尤もぢやわいなう。

才兵　定めてその位なら、天晴れなものであらう。

權九　おれも、自棄ぢや。お舟が手に入らねば、女郎どもや禿どもを、こたくつてこまさう。

才兵　これは迷惑でござりまする。

かぢ　わたしらも如才はござりまぬ。どうして見ても、行かぬに依つて、彼のお舟が娘の、常磐木さんも、お前に呼ばして、いじり立てさすと、娘を人質に取られるもんぢやに依つて、嫌ながら手に入らねばならぬ。この思案は、どうでござりまする。

權九　出來た。それぢや〳〵。

才兵　オヽ、待つたり〳〵。その常磐木は、平さまと云ふ大盡の揚詰め。これも總角を、あのお舟が揚詰めにして、放さぬに依つて、その人質に買はつしやるのぢや。外へは遣られぬてや。

權九　此奴が〳〵、平にもせよ、壺にもせよ、銀出して太夫を買ふに、何を吐かす事がある、

才兵　でも、揚詰めでござりまする。

權九　揚詰めなら、貰ふわい。

才兵　先は歷々のお侍ひ様でござりまするぞえ。

權九　侍ひが、なんぢや。怖うないぞ。うぬは襟に附くか。

才兵　さうではなけれど。

かぢ　そんなら先のお侍ひ様と、御相談になされませ……

ト この間に源八、頭巾着て、向うより出ろ。記内、後より附いて出ろ。この家へ入る。

禿衆、迎ひに行かつしやれ。

千松　アイ、、、。

ト 向うへ入る。

梅野　アレ〳〵、常磐木さんが、平さんと連れ立つてござんすぞえ。

才兵　サア、これからは、お前の存分に、お貰ひなされたがようござりまする。

權九　おのれに、指圖請けいでも、コリヤ、腕づくにてこまさう。穴なし、われも呑め。

かぢ　サア、一つ上がりませ。

ト ぬめりになり、向うより常磐木、道中して出る。禿八重菊、附き、後より關口平太、衣裳羽織、侍ひ久馬を連れて出る。

平太　コリヤ〳〵常磐木、もそつと靜かに歩け。

常磐　爰に消え、彼處に結ぶ水の泡、浮世に捨つる身こそ惜しけれ。

平太　兎角此奴は、小ませた事ばつかり吐かす。コリヤ、われが此やうに、辛い勤めをするは、みな母めが根性からぢや。總角が手に入るまでは、存分に慰む程に、さう思へ。

かぢ　エヽ、平さま、常磐木さまも、ようお出でなされました。サア〳〵、お入りなされませ。

常磐　先へ行くぞえ。

平太　コリヤおかぢ、また取逃がすな。

かぢ　合點でござりまする。

才兵　さて平さま、待ち兼ね山の郭公。サア、お入りなされませ。

平太　今夜は意趣返しに、おのれも酒責めぢや程に、さう思へ。

ト 記内、出る。

記内　平太どの。

平太　記内、最前の奴は。

記内　後先へ付けまして、氣取りましたか、この家へ付け込みましてござりまするゆゑ、お出でを相待ち居ります。

平太　慥かに彼奴と、見た目は違ふまい。

記内　左やうでござりまする。

ト 常磐木、内へ入る。平太、記内に囁き、橋がゝりへ入る。

平太　亭主、何者ぞ、内に居るか。

才兵　ハイ、お客がござりまする。

權九　イヤア、常磐木はこれぢやな。よい〳〵。

平太　ソレ。

ト 權九郎が顏を見て

久馬　畏まつてござりまする。

ホウ、こりや違うたワ。よく似たところもあるが、ハテ、馬鹿な面だなア。

ト 突き倒す。

平太　誠に、横顏を見れば、其まゝぢや。

梅野　アレ、お舟どのが、また、例の酒に醉うて、戻らん

すわいなう。
かぢ　ほんになア。エヽ、あの形わいなう。
才兵　太夫樣方や禿を、なんぞおのれが使ひ者のやうに申
す、お舟が參ります。
平太　總角もござるか。
久馬　參ります〳〵。
平太　直に口說いて抱いて寢てこまさう。
久馬　直にお口說きなされませ。
ト平太に云ふ。
才か　さらば、戀の捌け口を見ようか。
ト向うより傾城總角、花の井、道中して出る。お舟、
赤前垂れ、仲居の形、酒に醉ひたる體、しどけなく、
笹にいろ〳〵の櫛、笄、貢入れ、小判、鏡、守り袋を
附け、この笹を持ち出る。帮間喜作、幸助、皆々、欲
しがり、觸り、取卷き出る。右、摺り鉦、三味線、し
か踊りなり。
ふれ　誰れに。
花の　わしに。
ふれ　わしの子にや遣らぬ。誰れに。
喜幸　おれに。

ふれ　折れたもんにや遣らぬ。誰れに。
喜幸　鼻に。
ふれ　離れぬもんにや遣らぬ。
ト花道にて、いろ〳〵あつて、ひよろつく。皆々、笹
を持ち、引き拐ろゆゑ、こける。皆寄つて引起す。花
の井の肩へかゝる。囃子、とまる。
面白い〳〵。
才兵　喜作、幸助、またお舟を引ッ張つて、おちよばい。
あんまり煽てゝもらふまいぞ。
かぢ　さうして今日は、なんぞ貰はしやつたか。
喜作　しやつたの段か。マアちよつと、貢入れ五つに金三
兩。
かぢ　ヤア、。
幸助　なんぼ呵られても、お舟大盡でなければ、夜が明け
ぬ。
かぢ　エヽ、そんなら、おれも行たらよかつたもの。あた
ぼこしもない、一生の損ぢや。
總角　コレ、お舟どの、其やうに酒が過ぎて、身も世も堪
るものではない。ちつと扣へて下さんせ。
ふれ　これは太夫主、お志しの段、申し上げう詞もない穿

鑿でござんす。こちや少しも酔はぬでござんす。
總角　でも、道々も、それは〳〵危なうてなる事ぢやないわいなう。
かぢ　イヤお舟どの、總角さまを、ちよつと借りたいと云ふ客があるが。
才兵　コリヤお舟、太夫を買ふは、金でする事ぢやに依つて、せう事がない。お客があるのに、大枚の給銀立つて居る遣り手が、野良かはいて濟むか。
ふれ　濟まぬでござんす。親方様、キツとあやまり奉つたぢや。ドレ、ちつと又、此方の商賣ぢや。お客様の座敷を取持つて。
　ト行かうとして、ひよろ〳〵する。
總角　ア、コレ、危ないわいなう。
　ト抱きかゝへる。
花の　お舟どの、この中云うた、平さんと云ふのは、あのさんぢやぞえ。
總角　なんぢや、平さんとは。
　ト見て
　ほんに又、ござんしたかいなう。
平太　しぶとう逢はねば、しぶとう通ふ。揚詰めの大盡、お舟と云ふ遣り手は其方か。近付きになりたい。
久馬　お召しなさるゝ。爰へ來て、お伽を申せ。
ふれ　平さまとは、兼ねてお噂在原の平さまぢやな。太夫主、だんない、行かんせ。わしも近付きにならう。
總角　イヤ、それでも。
ふれ　ハテサ、わしがだんないと云ふから、だんないわいな。イヤ、常磐木の、變らぬ色は酒が足らぬか。その色の靑さでは持てぬ。大方灸が足らぬものでがなあらう。こなさんは、きらを絕やすと惡い性ぢやのに、なぜ云ひ付けて置いた通りに、四火くわんもんを据ゑてもらはんせぬぞ。わしが附いて居ぬに依つて、それぢや又、お腹が痛うはないか。ドレ〳〵。
　ト行かうとする。
久馬　コリヤ、何する。今宵は身共が揚げた太夫、指さす事はならぬ。
　ト突き飛ばすを
ふれ　ホイ、我が物ならぬ情なさ。よし〳〵、構ふ事もなし。酒持てよ。
禿　アイ、、、。
　ト銚子杯を持つて來る。

ふれ　口が惡い。水一つくれ。
喜作　畏まりましてござりまする。
ト差出す。お舟、幸助が脊中へ凭れ居る。
ふれ　アヽ、さつぱりと、これで飮み直せるぞ。
ト平太、總角が手を取り
平太　奧へ行て、抱いて寢るわい。
總角　どのやうに云はしやんしても
平太　縫之助に心中立てるのか。
總角　いつやらから、フッツリと便りも無し、文も屆かぬ音信一つさしやんせぬ。聞こえぬぞえ殿樣、死出の山も三途の川も、手に手を取つて行く約束ではないかいなア。
常磐　死出の山も、三途の川も、手に手を取つて行くとは羨ましい事ぢやな。
平太　エヽ、イケ死太い。よう此やうに仕込み居つた。千も萬もない、抱いて寢る。來い。
ト引立てる。お舟、割つて入り
ふれ　何なさるゝ。
平太　連れて行つて、抱いて寢る。
ふれ　ちつとなるまいかいな。
平太　なぜ。
ふれ　なぜとはつらい。たつた今、お侍ひさんが、常磐木は揚げて置いた、太夫に指さすなと、呵らしやんしたぞえ。
平太　ヤ。
ふれ　ちつと、お免し〳〵。
ト權九郎、お舟が側へ行て
權九　コリヤお舟。
ふれ　ヤア、お前は。
ト見て
エヽ、又、取違へた程にの。アタ嫌らしい。この顏わいの。
ト額を突く。
權九　コリヤ〳〵、身くじらかなんぞのやうに、指でねなすなえ。サア、返事はどうぢや。
ふれ　なんの返事ぢやえ。
權九　おれと抱かれて寢ようと云ふ返事をせい。
ふれ　とんと嫌、極上、箱入り、飛切りの嫌ぢや。味な事。
ト笑ふ。
權九　イヤ、コリヤ、けらつくな。おかしうないぞ。邪でも非でも、抱いて寢る程に、さう思へ。
平太　揚詰めの總角、そんなら借らうかい。

ふれ　ちよつと貸す事もならぬぢや。コレ、此方へもそつと寄つてもらひませう。

ト總角に抱きつく。

わしが、これ程に思うて居るに、殿さんに逢ひたい〳〵とは、揚詰めのお客の手前、ちつと無遠慮ではあるまいか。思ひ出してもらひますまい。

平太　貸す事も、ならぬぢやまで。

權九　どうでも、ならぬぢやまで。

ふれ　なんと、飲み直さうぢやあるまいか。

ト おかぢ、幸助、喜作

三人　ようござりませう。

平太　記內、一つ飲まうぢやないか。

久馬　才兵衞、お杯を持て。

權九　おれも飲まう。お舟大盞、わりや遣り手ぢやないか。おれが座敷を持て。

ふれ　ほんになア、とんと商賣を忘れた程に。アイ、權さま、ちとお相いたしませう。

久馬　さらば常磐木、獻さうか。

常磐　イヽエ、わしや酒は嫌ひでござんす。

久馬　下戶か。

常磐　アイ。

平太　下戶とは面白い。

權九　客が飲めと云ふに、飲まぬか。

ふれ　權さま、遣り手と云ふ者は、欲しがる者ぢやと云ふがお定まりぢやが、御存じかえ。

ト權九郞、紙入れより一分出し、鉢の中へ入れ

權九　えらいものか。小判ぢやない、一分。サア〳〵、飲め飲め。醉ひ潰れさして置いて、おとゝつて締める。飲め飲め。

ト お舟、金三兩、出し

ふれ　誰れぞ助けて欲しいなア。

喜作　オッと我れら。

幸助　まんがちな。

かぢ　イヤ、わしが助ける。

ト張り合ひ、三人、寄つて飲み

三人　一兩づゝ、有り難い。

才兵　見落しの一分は、我れら。

權九　ヤア、われは、けうといものぢやな。

ふれ　權さま、お前のやうな、ひちりかすりを商賣に、人を痛めて、金儲けする者が、鄽穿鑿は、マア、過ぎ候ふ

ぢや。わたしがキッと太鼓持つぢや。持つ程に、わたし相應の大盡におなりなされねば、諸事アイとは申し憎い。粹にならんせ。戀のせうが、あんまり野暮な。惣體の客さんが、後家茶屋へ行くもよい、仲居のある茶屋へ行くも。揚屋の遣り手は、下まで伊達な所へ、コレナア、如何に相方が見えぬと云うて、去なうとは、どうぢやいなア。お前は、あなたにばつかり可愛らしうて、其やうに堅い殿御を、誰れも持ちたいなア。何しやらく云ふやら、昨夜の口舌がどうで斯うでと、果は話しも縺れるに依つて、つい座も長うなる。その折節は、ちよつとどうやら可愛らしい事が、せき〳〵になると、茶の間で寢るか、起き番の夜は、廊下に待つて居るやうに、色は心の外ぢやわいなア。その派手もなしに、わしを口說くとは、役に立たぬてんがうぢや。今の一分で、とんとお脈が上がつたぢや。爪長屋とは、よう附けさんした

權九　サア、それは。

ふれ　旦那くわつくわ。

　　ト脊中を叩く。

皆々　ワアイ、云ひ負けて、よい氣味ぢや。

　　ト權九郎、しよげになる。

ふれ　いから醉うた〳〵。足を揉め〳〵。

　　ト寢ころぶ。

喜作　アイ〳〵。

　　ト揉む。

平太　サア常磐木、献いた程に、これで一つ飲め。

常磐　イエ、其やうな鉢で。

平太　ついに飲まぬのを、盛り殺すが此方の手ぢや。

久馬　飲まいでも飲ます。嫌と云ふと、口へ注ぎ込む。

ふれ　ハテ、仰山な酒盛りぢやなア。

平太　ハテ、總角を借らうとは云はぬ。われも、おれが揚げだに依つて、燒いて喰はうが、此方の儘ぢや。

久馬　肴には、この切り炭を、頰張らさうかい。

　　ト火入れの火を挾む。

平太　これは出かした。サア飲め。

常磐　そんな無理な事を。

平太　飲まぬか。

久馬　喰へやい。

總角　コレ、お舟どの、あれ見やさんせいなう。

常磐　詫び言して下さんせいなア。

ふれ　飲んだり〳〵。飲まにや持てぬて。

平太　ト寝言のやうに云ふ。ドレ、喰はしてやらう。

ト總角、鉢を取つて、常磐木を引き退け

總角　貸しますでござんせう。

平太　貸すか。

總角　貸すわいなア。

平太　貸せば、よいて。

總角　貸さう程に、もう常磐木さんは、堪忍して下さんせ。

平太　サア、埒が明いた。

久馬　これから奥へ行て、彼の奴も詮議いたしませう。

平太　奥へ行て、一つ飲まう。

才兵　サア、お出でなされませ。

權九　アタほこしもない。よい、おれも奥へ行て、小びつちよを相手にして、飲んでこまさう。

喜幸　旦那、私しも參じませうか。

權九　勝手にしをれ。

平太　サア總角、來い。

才兵　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、平太、總角を連れて入る。久馬、常磐木を連れ、その外、皆々、入る。お舟、寝て居る。權九郎、ソッとお舟の寝て居る所へ行き、お舟に枕あてる。才兵衛、やかましう云ひ出る。權九郎、才兵衛に抱きつく。

才兵　熱や／＼……エ、、權九郎さん、お前のその形は、なんぢやえ。

權九　用場はないか。

ト入る。才兵衛も入る。お舟、ソッと起き、思ひ入れあつて

ふね　アヽ、浮世ぢやなア。神道源八が妻や子が、如何にお主の爲ぢやとて、前垂れ姿で酒浸しになつて、娘は傾城。その娘を賣つた身の代で、太夫を揚詰めにして、變つた身の上ではある。シタガ、もう百兩は皆になつたが、夜半までに身請けの相談。こりやどうせう知らぬ。

ト二階にて大勢の聲する。

才兵　これは、持てるものではないワ。

松代　常磐木さんは、どうやら持てぬ顔付きぢやわいなア。

花の　常磐木さんの三味線が聽きたいわいな。

才兵　こりや、ようござりませう。

常磐　わしや、よう彈かぬもの。

花の　なに、この中、唄うて居やしやんした。わしや知つて居る。
ふれ　ムウ、もう斟酌か、案じたものではない。
花の　どうでも聽きたいわいな。
才兵　サア／＼、所望ぢや／＼。
ト蔭にて三味線彈く。妹脊川。
ふれ　ハア／＼、唄ふ／＼。怯めす臆せず、屋敷で敎へた三味線、女子の嗜なみ、廓の客の慰みに間に合ふといふは、正味の雙六、盤で横槌……イヤ／＼、こんな事云うて居ても埒が明かぬ。時に此方の身請けの事は、カウッ。
ト お舟、いろ／＼思ひ入れある所へ、茂治兵衞、與九郎を連れ、風呂敷を負ひかけ出る。
茂治　慥かに爰らぢやと聞いたが。
與九　格子のある所ぢやと云ふ。爰でごんす。
茂治　爰ぢや／＼。コリヤ、必らず吠えな。何も云ふな。
與九　なんの、云うて堪るもので。
茂治　そんならよい。アイ、誰そ賴みたうござります。爰の内に、お舟といふ和郎があるか。ちよつと逢はして下さりませ。
ふれ　アイ、誰れぢや。此方へ入らしやんせ。
茂治　入つても大事ござりませぬか。お免されませ。
ト内へ入る。
ふれ　どこからござんした。
茂治　イヤ、わたしはちつと。
ト顏見合せ
お舟か。
ふれ　父さん。
與九　お家さんかえ。エ、。
ト泣くを、茂治兵衞、睨む。
泣かぬぞ／＼。
ふれ　ても、よう來て下さんした。文を遣らうにも便りはなし、定めて廓へ來て、後で憎い奴ぢやと叱つて居さしやんしたであらう。
茂治　イヤモウ、憎いやら、悲しいやら。
與九　譯のある事ぢやごんせぬ。コレ、お松さんはなア。
茂治　また吐かすか。待ち居らぬか。
與九　へ、、、、お松さんは、お松さんぢや、ア、し
ト泣く。
ふれ　尤もでござんす。道理でござんす。お前の心にも、姉の見船が居たらば斯うではあるまい。生さぬ仲ぢやに

依つて、廓へ賣つたかと思はしやんせう。なんの眞實の娘より可愛いもの。仮へこの身を刻まれると云うても、あの子を放してよいものか、皆お主の爲ぢやと堪忍して下さんま。

茂治　其やうに可愛がつてくれる程、おりや、身も世もあられぬわいやい。

ト泣く。

ふれ　コリヤ與九郎、何もかも、われがよう知つて居るぢやないか。なぜ父さんにとつくりと、合點のゆくやうに云うて聞かしてはくれぬぞいやい。

與九　サイナア、云うて聞かしたけれども、エヽ、コレ、おれより泣くなと云うて、こなさんがたんと泣かんすわいの。

茂治　何吐かす。おりや泣きはせぬわい。

與九　それでも、涙がチヨロ／＼出るわいなア。年寄りといふ者は、堪えのないものぢや。

ふれ　シタガ、氣遣ひして下さんすな。娘も達者に勤めて居りまする。

茂治　ヤ。

ふれ　わしが側に附いて居るによつて、風邪一つ引かしはせぬ程に、それを腹癒せに、お前に知らせずに、廓へ來たは、料簡して下さんせ。

茂治　ヤア／＼／＼。なんぢや、孫は達者で居る。

ふれ　アイ、しかも廓へ來るは、あの子の望み。

與九　その譯も、とつくりと話しました。

ふれ　それぢやに依つて、辛い勤めぢやとばかり、思はしやんすな。殿樣に逢ふを賴みにして居やるわいなア。

茂治　なんぢややら、どき／＼と譯が知れぬ。其方は娘が事を知つて居るか。

ふれ　常住側を離さぬもの。知つてゐいざ、なんといたしませう。

茂治　猶どき／＼として譯が知れぬ。

與九　コレ、お松さんはな。

ふれ　あの中二階に居るわいなう。

茂治　ヤア、お松は二階に居る。

ふれ　また案じたものぢやござんせぬ。客に揚げられ、あの二階に。

茂治　二階に。

ト二階に三味線、唄を唄ふ。

ふれ　アレ、あの聲がお松でござんす。

茂治　ヤア、お松か。
　ト見る。二階に餓鬼の影坊師うつる。
皆々　ヨイヨ〱。
與九　ヤア、あの影は。
　ト茂治兵衞、與九郞が口を押へ、ヂッと泣く。
ふれ　常よりは達者でござんす。
茂治　そんなら、殿樣を慕うて。
　ト思ひ入れあつて
可哀や〱。
ふれ　總角どのに勤めをさすと、生きては居ぬと殿樣の御短氣。お松が身の代で今日までは、總角どのを人に逢はさず、我が娘の戀の取持ちして、總角どのを袖にする。末の出世を娘ですると、世間の口の端、總角どのゝ妬み、源八どのまで忠義の立たぬ悲しさに、折角逢はうと思うておぢやつた娘なれども、隱し包んで逢はせぬも義理詰め。殿樣は、つい側にござる事も知らずに、逢ひたい逢ひたいと云うてる心根、可愛うござんす。
茂治　そんなら、殿樣には逢はせぬか。
ふれ　アイ。
茂治　可哀や〱。
ふれ　侍ひには何がなつたものぢやぞ。
　ト與九郞、二階へ行かうとするを、茂治兵衞、引戾し
茂治　どこへ行く。
與九　わしは、常々殿樣に、よう似た〱と云うて、わしばつかりを廻して居やんした。今の譯を聞けば可哀さうに、せめておれが顏なと見せて、樂しましてやるのぢや。
茂治　あんだらめ、われやおれが逢ふと、つい消える。
ふれ　なにがえ。
茂治　サア、そりや、あの二階の客が座敷の興が醒める。消える。ちつとの間なと消えぬやうにしてくれおれ。エヽ阿房め。
ふれ　其やうに思うては病が出る。今でこそ此やうな淺ましき形になりて居れど、追ッつけ殿樣を御世に出して、娘も歷とした聟を取りますわいな。
茂治　なんぢや、娘に聟を。
ふれ　アイ。
與九　ワア。
　ト大泣き。
ふれ　何を泣く事があるぞいやい。
茂治　娘、其方に無心がある。聞いてたもるか。

ふれ　父さんとした事が、改まつた。なんなりと云はしやんせいな。
茂治　餘の事でもない。お松が願ひを聞いてたも。
ふれ　お松が願ひとはえ。
茂治　如何に忠義なればとて、逢はさぬとは餘り酷たらしい。一生のおれが賴みぢや。どうぞ、殿樣に逢はしてやつてたも。お松よ、氣遣ひするな。われが心に入つたやうに、爺がしてやらうぞよ。お舟、賴む／＼わいなう。
　ト　お舟、俯向いて居る。
與九　コレお家さん、こなさんの前のお家さんが死なんしてから、旦那を始終なめさんしたぢやないか。コレ、物心覺えてからは、堪忍のなるものぢやない。
茂治　コレ、孝行は外にない。どうぞ、殿樣と孫と寢さしてやつて下され。賴むわいなう。
與九　わしが一生の恩に着ませう程に、お松さんの嬉しがらんすやうにして下んせ。
茂治　拜むわいなう／＼。
ふれ　お前より、わたしが逢はしてやりたさは、どれ程にあらうと思うて居やしやんすぞいなう。
茂治　そんなら、逢はしてやる氣か。

ふれ　どうも義理が立ちませぬ。
茂治　さうぢや。
　ト　合口にて死なうとする。與九郞、お舟、とめる。
ふれ　コレ、待つて下さんせ。
茂治　エヽ、いつそ割つて云ひたい。云ひたいけれど。
與九　云うたら消えさんすであらう。お家さん、逢はして下さんせいなう。
總角　逢はさいでなんと致しませう。
　ト　總角出る。
ふれ　總角さんか。
茂治　今の樣子は。
總角　みんな聞きましてござんす。お舟さん、なんにも申しませぬ。エヽ。
　ト　拜み泣く。
ふれ　この仕儀ぢや程に、どうぞ。
總角　例へどのやうな事があると云うても、これがマア、どう默つて居られませう。
茂治　兎角よいやうに。
總角　お松さんは本妻、わたしは妾。二人して仲よう添ひますわいな。

ふれ　有やうは、親の口から云ひかねて居りました。どうぞ、そんなら。
總角　直ぐに爰に寢さしまする。
ふれ　エヽ、忝ない。そんなら父さん、與九郎、もちッとの間、奥へ。
茂治　行くなと云うても行かねばなるまい。阿房來い。
與九　アイ。
ふれ　まだほんの懐子、お前を頼むぞえ。
總角　そりや氣遣ひさしやんすな。
與九　何時消えやうも知れぬ。
茂治　コリヤ。そんなら案内してたも。
ふれ　小座敷へお供いたしませう。
與九　佛壇のある所へ。
茂治　コリヤ。
ふれ　イカサマ、義理といふその義理こそは義理ならめ、義理の上越す義理もあるまじ。
茂治　南無阿彌陀佛。
ふれ　サア、ござんせ。
ト唄になり、お舟、茂治兵衛、與九郎を連れ入る。後にて總角、思ひ入れあつて手を叩く。

松代　アイ、、、、。
ト松代出る。總角、囁く。松代、入る。
總角　今までは、わしより外に一生女房は持たすまいと思うて居たが、しかもわしが床取つて寢さゝねばならぬと云ふも、お松さんと殿樣との仲へ、よくよく先の世の縁を引いて、仲が結ぶの神樣の結びやうに、念が入つたものでがなあらう。
トこのせりふのうちに、千代鶴、八重菊、松代出て、屏風を引き、床を取る。花の井、出る。
花の　總角さん。
總角　よう來て下さんした。二階の客は、もう濟んだかえ。
花の　アイ、みな奥座敷へ行て、二階には常磐木さん一人轉寢してござんす。
總角　そんなら、お前方を頼む。奥の客へ好いやうに間を合して、常磐木さんを爰へ呼んで下さんせ。
花の　そんなら、爰へおこすのかえ。
總角　頼んだぞえ。
松千　アイ、お床はようござんす。
總角　コレ。
ト皆々囁く。呑み込んで入る。總角、長持ちの錠あけ

る。縫之助、出る。

縫之　太夫か。

總角　殿さん。

ト物云はずに行燈の火を、手燭へ灯し、暗がりにする。平太、後へ出て、暗うなるゆゑ、氣を附ける。久馬出る。これに囁く。

縫之　床は取つてあるか。

總角　アノ、格子の間に。

トこれより平太、探つて橋がゝり床の取つてある所へ行く。源八、才兵衛が口を押へ、出て、同じく床の際へ寄る。總角、縫之助、頷き合ひ、連れ立ち、床の側にて

總角　待つてござんせ。

縫之　早うおぢや。

ト總角、元の所へ戻る。久馬、床の脇へ探り寄る。平太、縫之助を捕へ

縫之　コレ。

ト口へ手を當てる。

久馬　平太さま、御首尾は。

平太　ソリヤ。

ト久馬に渡す。久馬、縫之助を縛る所へ、源八、才兵衛を突き出し、縫之助を取る。久馬、才兵衛に猿轡を嵌め、縛る。源八は縫之助を連れ、探つて内へ入る。平太、舌舐りして、これよりいろ／＼思ひ入れあり、様々あるべし。所へ中二階より、總角、常磐木を連れて出る。

常磐　總角さん、いま云はしやんした事は。

ト口に手を當て

總角　コレ。

ト總角、囁く。

常磐　ヤア、そんなら殿さん。

ト總角、囁く。

エヽ、アノお前、イエ／＼それでは。

トまた囁く。

總角　眞實。

常磐　ほんまかえ。

總角　なんの、神かけて。

常磐　エヽ、忝なうすざんす。

ト總角また囁き、それより常磐木を床の側へ連れ行き、屏風に行き當る。

總角　殿さん、ござんすか。
平太　待つて居るわいなう。
　ト小聲で云ふ。
總角　オヽ、嬉し。
　ト唄になり、常磐木を屛風の中へ入れ、總角、屛風を引き廻す。これより本舞臺へ戻り
これでマア、道は立つたが、女子ほど執着の深い者はない。此やうに義理づくめになつて、手づから寢さしても、又どこやらが腹が立つやうなものぢや。
　トお舟、出て、總角が後に居る。
わしも新造の時、殿さんに惚れて、逢ひかゝりの時は、怖いやら可愛いやら、どうも口で云はれぬものであつたが、さぞお松さんも、今頃は嬉しい事であらう。どのやうな事を云はんす。アヽ聞きたいな。
　ト屛風の側へ行き、聞き耳立て、ちやつと本舞臺へ戻つて
エヽ、アタ鈍な。あの初心な子に、此方の惡性者が、可愛いと云ひくさる。エヽ、腹の立つ。
　ト思案して
イヤ〳〵、あの可愛いは、わしぢやと思うて云ふのぢやな。そんなら道理、あのやうに云はれると、身も世もあられぬ程嬉しいものぢやが。
　ト又橋がゝりへ行き
エヽ、つんと、男ははずみ切つてゐるに、女は泣いて居るさうな。
　ト思案して
イヤ〳〵、今時の娘に油斷はならぬ。なんで泣くのやら知れはせぬ。サア〳〵腹が立つて來たぞ、腹が立つて來たぞ。いつそ……エヽ、すつきり。こりや、わしがのが無理ぢや。エヽ、ツッともう、よう思ひ切らぬ事ぢや。
　トお舟と顏見合せ、お舟、物云はずに拜んで居る。
これ程は女の常ぢや、堪忍して下さんせ。
ふれ　子ほど可愛いものはござんせぬ。料簡して下さんせ。
總角　イエ〳〵、わしが心の狹いから、さぞ蔑すましやんすであらう。
ふれ　身勝手な者ぢやと、怨んでござんすであらう。
總角　手を合せて拜みます。
ふれ　イエ〳〵、わたしが。
總角　イエ、わたしが。
兩人　堪忍して下さんせ。

ト源八、縫之助を連れ出る。
源八　女房お舟。
ふれ　ヤア、こちの人。
總角　ヤア、殿さん。
源八　始終の樣子はみな聞いた。いかい苦勞をするなア。
ふれ　お前にその詞を聞くが氣附け人參。よう來て下さんした。
ト取りつく。
いつの間にか爰へござんした。
縫之　聞けば聞く程、果敢ない浮世ぢやなア。
源八　豐入院龜山大居士、豐秋院角山大居士、今日は左衞門さまの御命日、將監さまのお逮夜。
トお舟、源八が手を捲り
ふれ　見舟命、姉樣も今日が逮夜。
源八　心ばかりの、せめては營み。
ふれ　今日の命日、人に隱れて料具も爰に。
ト唄になり、位牌を飾る。その前に縫之助を直し、お舟、硯蓋に菓子餅を供へる。この間、唄。
源八　さぞ御無念にござりませう。追ツつけ敵討つて、お家を再び取立てませう間、今暫らく草葉の蔭でお待ちなされませ。
縫之　その時、都に居りませうならば、叶はずとも遊軒を、一太刀恨みませうもの。何事も不孝の段は、お免されて下さりませ。
ト二階の障子明く。中二階にて茂治兵衞、鉦打つて回向して居る。
ふれ　姉さん、さぞその時は、口惜しい最期でござんせう。お氣遣ひなされますな。身は鹽になるというても、殿樣の仇、お前の敵、追ツつけ討つて修羅の苦患を助けませう。お松が事は氣遣ひせずと、草葉の蔭から見て下さんせ。その代りには、源八どのは貸して下さんせ。未來は三人一つ蓮でござんすぞや。南無阿彌陀佛々々々々々々。
縫之　餘所の無常を告げるやら、心寂しき一つ鉦。
源八　幸ひの追善供養。サア、總角さま、二世までの固めの杯、殿の位牌の前で、縫之助さまと夫婦の杯。
總角　エヽ、それでは、お松さんが。
源八　そのお松めが事を、志しにあづかつたゆゑの祝言。こなたは本妻。
ふれ　その代りには、お側になりとも、娘が事を。
源八　祝言の謠は、あの念佛。

ふれ　お酌いたしませう。
ト唄になり、祝言する。
源八　御朱印の盜賊は、慥かに平太とは睨んだれども、何をこれぞといふ證據もなし。迂濶にかゝらば御朱印を土灰にもなさば、未來永々お家は埋れ木、見出すまではと、今日まで廓へ入込めども
ふれ　慥かにこれぞといふ證據もなし。
源八　女房、次手にこの戒名に回向して置け。
ト戒名を出す。
ふれ　さんけんきよう信女。この戒名は。
源八　娘松が戒名。
ふれ　エ、。
源八　お松は、死んだわいやい。
ふれ　エ、、それに先刻に父さんが。
ト二階より茂治兵衞、顏を出し
茂治　聟どの。
源八　舅どの。
茂治　先へ來て居やつしやるの。
源八　疾に參つた。
茂治　胸に詰まつて
ト思ひ入れして
そこへ云うて下され。
ト着物を抛ろ。障子ピッシャリと閉す。
ふれ　コレイナア。お松が死んだとは、なんの事ぢやいな。
總角　殿さん、お前までが、どうでござんすぞいなア。
ふれ　この着物は、お松が……血だらけになつて。こちの人、たつた今まで臥して居たお松が。
縫之　あれが事を思うて、今まで姿を見せたのは、幽靈であつたわいなう。
ふれ　エ、。
源八　其方が身の上、娘が事、與九郎が話しで具さに聞いた。何者とも知らず、渡し場に於て、娘が生膽を取つたとある。戌の年、戌の月、戌の日に誕生したる女の生膽に、白髮を合せ用ふれば、忽ち白髮となりて相變るとあり、正しく敵の所爲。其方にも、この事云ひ聞かさんと來て見れば、娘が面影、殿の事を戀ひ慕ひ、未來の緣を結びもらひたさに、この世の緣は總角どの、子に迷はぬ親はないわいやい。
縫之　それ程まで、おれが事を思うてくれる志し、忘れは置かぬ。この世は僅か未來では、長う夫婦になつてやら

うぞよ。

ト總角、泣く。お舟、振り袖を持ち、いろ〳〵身に添へ泣く。

ふれ　母さん、傾城になつて居るのに、この櫛は小さうて惡い、もそつと脊の高いのを買うてくれいと云ふ。何を榮耀らしい、母も此やうに金遣ふのは、大抵苦しい事か。忠義にする勤め奉公、榮耀者と叱つたれば、今にも見えたその時に、わたしや惡うござんす、どうぞ、薄の兩指しを買うて下さんせ。殿さんは此やうな風がお好きかいなアと、死んで居ながら修羅の迎ひは苦にもせず、經念佛は一遍も聞かず、粧ひ化粧や頭の飾り、唄三味線を心懸けたは、殿樣に添ひたい〳〵と、思ふ心の念力であつたか。我が身の子よりも可愛うて、ついぞ肌を離した事もないもの。姉さんへの云ひ分は、なんと未來へなるものぢや。其方に別れて、わしやなんとせう。お松、ま一度もの云うてたも。知らぬ事とて殿樣に、逢ひたい〳〵と云うて暮らしたを、逢はしたらよかつたもの。お松、堪忍してくれい。堪えてたも。可哀や〳〵。

ト大泣き。

總角　今までは、心中を立てる〳〵と思うたが、女の意氣地はお松さん、お前に負けた。未來は必らず女夫になつて下さんせ。いとしや〳〵。

トこのせりふのうち、橋がゝりの屏風、開く。平太、卒塔婆を持ち、聞いて居る。

源八　泣いたとて、悔んだとて返らぬ事。兎にも角にも殿の御先途を、見屆くるこそ娘が追善ぢやがや。

ふれ　アイ。

縫之　せめて佛間に回向がしてやりたい。

源八　憚りながら、それは望みまするところでござりまする。

ふれ　あの子が肌身に付けた着物、せめてあなたの手で。

ト渡す。縫之助、取つて抱きしめ

縫之　可哀や〳〵。

ト平太と顏見合す。お舟、ちやつと源八を押入れの内へ入れる。縫之助は中二階へ上がる。お舟、思ひ入れあり。屏風の方を見る。

平太　エヽ。

ト卒塔婆を踏み折る。總角を引ッ捕へようとする。

ふれ　こりや、何さしやんす。

平太　知れた事、抱いて寢る。

ふれ　揚詰めのうちは、指も差させぬと云ふのに、物覺えの惡い人さんではある程にの。

平太　われは男に生れ歸つたものぢや。出かすわいやい。

ふれ　其やうにもござんせぬて。

平太　神道源八が女房。

ふれ　エ、。

平太　夫が逃げ廻るゆゑ、さぞ不自由であらうな。

ふれ　ハ、、、一つも覺えのない事を。

平太　わりや、源八が女房ではないか。

ふれ　源八とやら、源七とやら、左やうな者は存じませぬ。

平太　へ、、、知らぬであらう。どこぞそこらに居さうなものぢやが、正眞の猫に追はれた鼠同然。彼處の隅、爰の押入れの蔭に隱れ廻る野良犬めが。

ふれ　サア、犬と云はうが、猫と云はうが、爰へ出ては彼の衆、イヤサ、主に別れてさまふやうな人が、なんの爰らに居て堪るものか。

平太　イヤ、云ふまい。關口平太、神道源八と、互ひに兵術を爭ふ程の奴が、うぬが主の國を横領せられて、あんけらひよんとしてけつかるは、どう腰抜けめ。爰へ出て平太へ欝憤を云はぬか。あのべら坊めが。

ふれ　サア、腰拔けと云はれうが、なんと云はれうが、大切な願ひがあるぞえ。

平太　さう吐かすは、平太が所持してゐる廻船の御朱印の事であらう。

ふれ　エ、。

平太　そりや世話燒くな。おれが持つて居る。

ふれ　エ、。

平太　可哀や。どのやうに働らいても、知れぬ所にたぼたぼして置いた。平太に一寸でも疵をつけるが最期、朱印は天へ飛んでしまうて、マア、この世界にないぢや。ようしたものか。爰へ出て、平太と勝負して取返さぬか。取返して見ぬか。こりやアなんぢや。ハア、飾つた二つの位牌は、左衞門と將監が位牌か。エ、、アタ忌々しい。

ト蹴飛ばす。

ふれ　サア〱、爰をチツと堪えねば役に立たぬ。これはしたり、總角さん、どうぢやいな。

平太　ヤイ、うぬが主の位牌ぢやぞよ。その位牌を平太が踏み躙るが、無念にはないか。口惜しうはないか。口惜しくば、爰へ出て平太と勝負せい。出やがらぬか、青蠅めが。

ト縫之助、中二階より走り出て、平太が胸倉取り

縫之　ヤイ、おのれが爲にも主の位牌を、土足にかけて、恩知らずめ。さうして、御朱印もおのれが盗んだな。サア出せ。おのれ、出さぬとて、出させずに置かうか。

ト平太、默つて居る。懷を探し

こりや、懷にはない。どこへか隱した。サア、眞直ぐに。

ト平太、縫之助が首筋取つて捻ぢつけ

平太　うぬ蟲めが。うぬ、おのいらが手に觸る所に置いてよいものか。川浦平太は一國の大名、その大名の懷中を家捜しゝて、うぬ、盗みをひろぐか。

ト捻ぢつけて振り廻し

此やうにされたら、どこぞの簑蟲めが、面を出しさうなものぢやが。

ふれ　御朱印の知れぬうちは、滅多に顏も出されまい。

平太　總角、心に從へやい。

總角　エヽ、こなたはなう、

ト泣く。

平太　ヤイ、簑蟲め、此奴が總角に腐りついてけつかるゆゑ、身が戀の妨げ。いつぞやは／＼と思うて居たが、爰へ出たは百年目、思ひ切りました、總角を上げませうと吐かし居らう、吐かせやい。

トいろ／＼にじりつける。

ふれ　出まい／＼。ハテ、總角さん、出やしやんすな。

平太　出たが最後、しやぶりと卒竹割りぢや。

縫之　エヽ、おのれはなア。

平太　おのれとは／＼、エヽ、生白けたしやッ面。極印打つてやらう。

ト縫之助が眉間へ疵つける。

總角　アヽ、コレ。

トお舟、留める。

平太　出たが最後、朱印は消えてしまふ。出て見ぬか。コレ、斯うするが、出て見ぬか。

トこづく。

ハヽヽヽ、よい人質が出居つた。總角、否ならなぜ寢ようとは云はぬ。その代りに、此奴を摘み殺すぞよ。

總角　サア、それは。

平太　出さうなものぢやがな。

縫之　コレ／＼、必らずおれを庇うて、此奴が心に從うてたもんなや。

平太　吐かした面わいの。此やうな目に遭うても、まだ頤

の減らぬ、裾貧乏のはつた二才めが。骨も皮も、ごた〳〵になるやうに、うぬをカウ〳〵。
ト捻ぢ廻し、いろ〳〵あり、無理に踏みつける。
總角　もう、いつそ。
縫之　從やると、おりや死ぬるぞや。
總角　サア、それは。
平太　オヽ、死にたくば、いつそ打ち殺して。
ト引廻す。お舟、總角を突き放し、縫之助を中へ圍ふ。
ふれ　ソレ、總角さんを渡します。
平太　へ、ヽ、ヽ、餘程堪えたさうな。
ふれ　引替へにするからは、云ひ分はござんすまいがな。
平太　總角さへ渡せば、何奴も此奴も緩めてやらう。
ト長持へ縫之助を引立て入れ、錠卸ろす。
兩人　これは。
平太　まだ強ばつて居る總角、とつくりと寢た床の上で、この鍵渡さう。
ふれ　總角さん、常磐御前を知つてぢやあらう。
總角　わたしや、死ぬると云うても。
平太　抱かれて寢ぬと、たつた一突き。
ト刀を逆手に持つ。
ふ總　アヽ、コレ。
平太　抱かれて寢るか。
總角　サア、どうなりと。
ト泣く、
平太　奧へ行て抱いて寢よう。
かれ　その上で、その鍵も。
平太　欲しくばやらう。うぬ。
ト源八方へ行かうとする。お舟、枷になり
ハテ、命冥加なうづ蟲め。
ト平太、總角を引立て。奧へ入る。唄になり、源八出て、奧へ駈け込まうとする。お舟、取りつき
ふれ　コレ、いま奧へ行くと、總角どのに凶事が出來る。殿樣が生きてはござらぬぞや。
非人　お尋ねの源八、見付けたぞ。
ト門口に窺ひし非人、走り入る。
源八　南無三。
ト行かうとする。
コリヤ、もう網を張られたわいなう。
ふれ　こちの人、わしが思案は。

源八　ト囁く。
　出來た。そんならおれは。
　ト囁き入る。與九郎、出る。
與九　お家さん、アノ。ヤア、お前は旦那さん。
　ト口へ手を當て、お舟、囁く。
　ウン〳〵、呑み込んだ。
ふれ　父さんに早う。
　ト紙入れを拾ふ。
　こりや、最前平太が懐から落した紙入れ。この一通は。
　ト讀んで見て、戴き居る。權九郎、出る。
權九　お舟〳〵〳〵。どこへ行た。
　ト出る。
　お舟〳〵、コリヤ。
ふれ　エヽ、權九郎さんか。
權九　權九郎さんぢやが、今われはおれに逢ひたいと云うておこしたが、なんぞ用があるか。
ふれ　アイ。
權九　なんの用ぢや。
ふれ　權九郎さん。
　ト思ひ入れあつて
　きつう冷えるなア。
權九　構ふな。
ふれ　ドレ、火鉢あげようか。
　ト火鉢を側へやる。
權九　ついぞない事ぢや。ドレ、あたつてこます。
　トお舟、いろ〳〵思ひ入れあり、權九郎、見るやうで見ぬこなし。
ふれ　アヽ、コレ、づツと冷えるけれど、滅多に火鉢へもあたられず。
權九　コレ、爰へ來て、あたつたがよいわい、
ふれ　大事ないかえ。
權九　なんの、誰れが叱る者があつて。
ふれ　そんなら、あたろ。
　ト側へ寄る。
權九　オヽ、寒。ても寒い事ぢや。
ふれ　權九郎さん。酒飲まうぢやあるまいか。
權九　飲まう〳〵。幸ひ爰にある。
　ト酒、銚子を取つて
　替へにやる事は面倒な。
　ト火鉢の上へかける。

ふれ　權九郎さん、お前は、アノわたしに、なんのかのと云うて下さんすは、マア、定か嘘か、それが聞きたい。
權九　嘘かとは曲がない。モウ〳〵〳〵〳〵、てつぺい、足の爪先へこたえて。
ふれ　イエ、嘘ぢや嘘々。ようわしが、うか〳〵と乘らうかいなア。
權九　ほんに〳〵、強いほん。
ふれ　云はしやんすな。お前がほんの事なら、なんの男はあるといふ名ばかりで、後家同然、抱かれて寢いで、なんとするもので。
權九　それは、夢ではないかいなう。そんなら、御意の變らぬうちに、早う〳〵。
ふれ　ア丶、忙しない。まだちつと云はねばならぬ事がある。口でばかりさう云はしやんしても、男の心と飛鳥川と、よう云ふぢやないかいなア。
權九　そんなら、心中見せうか、腕引かうか。股突かうか。そもじゆゑなら、どうなりとするわいなう。
ふれ　イエ〳〵、そんな仰山な心中はいらぬ。お前の體へ極印が打ちたい。
權九　なに、極印とはや。
ふれ　ハテ、お前は人に勝れて好い男、もしや餘所の女子が惚れると腹が立つ。それでお前の腕へ入れ黒子をしたい。
權九　ムウ、入れ黒子、それは心安い。明日でも內でして來よう。
ふれ　ア丶、そんな水臭い。さう云うて騙そでな。モウモウ、心底の知れた。ドリヤ、奧へ行て。
ト行かうとする。
權九　ア丶、コレ〳〵、氣の短かい。するわいなう。
ふれ　そんなら、サア、爰へござんせ。
ト硯箱を出す。
權九　なんとする。
ふれ　ハテ、知れた事、おふね命。
ト唄になり、左の腕に書きにかゝる。權九郎、身を縮める。
ハテ、臆病な。まだ書くのに、なんの痛い事であるぞいな。
ト御の字を書く。
權九　ア丶、コレ〳〵、そりや御の字ぢや。つい、平常のおの字を書きやいなう。文盲な人ではある程にの。

ふれ　お前は、強うわしを安うさんすの。
權九　なぜに。
ふれ　ハテ、わしはお前の女房。女房ぢやに依つて、御の字を書くのぢや。
權九　さては、われらの爲の御ふねといふ心か。
ふれ　アイ。
權九　尤も。
ト書く。
ふれ　これで、おふね命、ア、、針がない。鈍な事ぢや。
權九　針がなくば、明日の事。
ト權九郎が根附けの刺刀を、お舟見て
ふれ　イエ／＼、幸ひ、好い物がある。この小刀で。
權九　ア、、コレ／＼、如何に女子の物を知らぬと云うて、小刀で入れ黒子するといふ事があるものか。神武この方忌み物ぢや。
ふれ　そんなら措かんせ。ドリヤ、奥へ行て。
權九　ア、、コレ、さても氣の短かい。サア、そんなら入れ黒子した後は、今のぢやぞや。サア／＼、お突きなされお突きなされ。とんと鳴神が呆れる。
ふれ　そんなら、おふね命と彫るぞえ。

ト合ひ方。此うち、權九郎、いろ／＼思ひ入れあるべし。この間彫り／＼せりふ云ふ。
お前は、大分強いわいなア。ハ、、、、。
權九　なんの、この位の事は、朝飯の茶漬ぢや。わしが前方、喧嘩したが、知りやるまいの。
ふれ　イ、ニ、知らぬわいな。
權九　なにが大勢、向うは拔身を持つて、おれに切りか、るところを、手を出すは邪魔だと思うて、頭で受けたぢや。
ふれ　ハテナア。コレ、茲が大事の辛抱所ぢや。斯う／＼斯うして、斯うするともうよい。さても仰山な。
ト早う突く。
ソレ見やんせ、好う出來た。
權九　ムウ、もうしまひか。おりや、又まちつと長いものかと思うた。サア、約束の通り寐よう／＼。
ト奥の一間へ入り、唐紙を閉める。
ふれ　マア／＼待たんせ。まだ肝心の事があるわいなア。
權九　まだかいな。
ふれ　ハテ、祝言の杯せねば、馴れ合ひ女夫になるわいなア。

權九　杯は後へ廻す。
ふれ　幸ひ、爰に酒がある。
ト火鉢の燗鍋に手を添へて
オ、熱。これはきつう通つたさうな。
權九　なんの熱い事があろ。
ト取りにかゝる。
熱々々々。オ、熱。
トお舟、鼻紙に挾み、酒を注ぎ
ふれ　サア、わしからさすぞえ。
ト權九郎、受けて手へかゝる。
權九　熱々々。
トお舟、燗鍋を權九郎が右の肩へ當て、二人ながら轉がる。いろ〳〵をかし味あり。
ふれ　サア、これでよい。
權九　フウ、片身恨みのないやうにしたものぢやな。サア寐よう。
ふれ　コレ、この羽織を着やんせ。
ト源八の羽織を着せる。
權九　なんぢや、をかしい物着せやるの。
ふれ　これで、とんとこちの人。

權九　女房ども。
ト連れ立ち、屛風引きながら入る。記内、家來、大勢連れ出る。
記内　平太さま、平太さまはどれにござります。
ト屛風の内を見て
ヤア、うぬは最前の遣り手。誠は源八が女房ぢやよな。
ソリヤ、家來ども。
侍ひ　やらぬぞ。
權九　ア、コレ〳〵、やらぬとはなんの事ぢや。一つも覺えはないが、なんの事ぢや。
記内　ヤア、うぬは神道源八ぢやよな。
權九　イ、エ、神道ぢやござりませぬ。門徒でござります。ナウ、女房ども。
記内　うぬ、その女と、共々寐て居るからは、源八に違ひはないぞ。
權九　コレ〳〵、女房は女房ぢやけれど、たつた今、ぬくぬくの女房ぢや。云ひ譯をしてたもいなう。
ふれ　コレ〳〵こちの人、お前は源八ぢやないわサ。源八ぢやないさかいで、どこへ出ても源八ぢやないと、云ひ拔けて下さんせ。

記内　女房が云ひ教へるから、いよ〳〵源八ぢや。ソリヤ。
侍ひ　やらぬ。
　ト内より茂治兵衛、與九郎に繩かけ出る。
茂治　ハイ、注進の者でござります。
ふれ　ア、、コレ〳〵父様。お前は三代相恩のお主に繩かけるとは、大惡人ぢやなア。
茂治　コリヤ、ヤイ、今時は、名を取らうより、德を取れぢや。それゆゑ、縫之助どのに繩かけて渡す。そんなら此奴が源八か。
ふれ　ア、、コレ〳〵、お前の口から、主を源八かと云はしやんしたからは、もう顯はれたか。ハア、嬉しや。
權九　なんの事ぢや。
與九　コレ〳〵源八、此やうな淺ましい縫之助が姿と思うて、見限つても、もう叶はぬ。三世の機縁を結ぶいやい。
權九　なんの事ぢや。こりや皆、氣が狂うたさうな。阿房め、うぬはそんな事を、どこで習うて來居つた。祭のだんじりに雇はれたと思うてけつかるさうな。
記内　縫之助、最前は、よく似せ物を摑ました。それは追つての事。家來ども、其奴縛れ。
侍ひ　腕廻せ。

權九　滅多無性に廻せ〳〵と、なんの事ぢや。
記内　卑怯な源八、是非あらがふとても、あらがはせぬ慥かな證據があるぞ。
權九　證據、面白い。
記内　家來ども、最前の繪圖を出せ。
權九　なんぢや、繪圖ぢや。サア〳〵、合せて見たい〳〵。
　ト家來、繪圖を出し、合せ
記内　年の頃三十年、眼、小さく。
侍ひ　寸分も相違はござりませぬ。
記内　うぬ、これでもあらがふか。
權九　ア、、コレ〳〵〳〵〳〵、なんの事ぢや。
記内　右の腕には鐵砲傷あり。
侍ひ　出せ……鐵砲傷が、しつかりとござりまする。
記内　左の腕には、みふね命と入れ黒子あり。
侍ひ　御ふね命と、しつかりとござります。
記内　其奴、縛れ。
侍ひ　畏まりました……捕つた。
ふれ　コレ、こちの人、入れ黒子から顯はれたかと思へば、わしや悲しい。
權九　なに吐かす。

記内　家來ども、引立てい。
侍ひ　うせう。
與九　コレ、お家さん、旦那さんに。
茂ふ　シイ。
與九　今の佛さんの命日には、なんぞ旨い物を拵らへて進ぜて下さんせえ。
茂ふ　可哀や。
　ト茂治兵衞、お舟、顏見合せ
お痛はしやなア。
記内　キリ〳〵うせう。
權九　マア〳〵待たんせ。コレ、わりや、おれを太郎にかけたなア。
侍ひ　うせう。
記内　うせう。
權九　マア〳〵待て。よう山を見せなんだな。
侍ひ　ハテ、うせうてや。
　ト花道へ入る。茂治兵衞、お舟、跡見送り
茂治　まんまとこれで遁がれた。
ふれ　コレ、これは最前、あの平太が、懐より落した一通。
　ト茂治兵衞、讀んで見て
茂治　これはマア、結構な物拾やつたの。
茂ふ　アヽ、嬉しや〳〵。
　ト兩人、拜む。押入れより源八出る。
源八　舅どの、女房ども。
ふれ　まんまとお前に仕立てゝやりました。この一通は最前、平太が懐から落した一通。
　ト源八、讀んで見て
源八　すりや、この一通があるからは、御朱印は平太が所持して居るか。この樣子を若殿樣へ。
　ト長持の錠を捩ち切り、明けて
ふれ　ヤア、この長持の內が、切り拔いてござんす。
源八　內が切り拔いてあるとは、合點のゆかぬ。
　ト花の井、出て
花の　コレ〳〵、お舟どのや、こなさんが平太の側へ附いて居よと云はんしたゆゑ、引添うて居たればの、總角さまを引連れて、裏道から逃げて去んだ。
源八　ナニ、總角さまを引連れて去んだとあるからは、若殿樣も、平太めに出し拔かれたか。無念なア。
花の　まつと先でござんした。
源八　程は行くまい。

茂治　聟どの。

源八　女房ども。

ふれ　これが近道。

源八　合點ぢや。

ト尻からげ入る。唄になり、引返し。

造り物、向う黒御簾、柳の幹あり、東大臣柱に出口の門あり。雨降りの體。侍ひ、提灯ともし、駕籠一挺、總角、縫之助、乘せ出る。後に平太、合羽、傘、足駄穿き出る。

駕舁　申し旦那、どうぞ桐油を掛けさして下さりませ。

侍ひ　大事の急の用事でお歸りなさるゝに、小言吐かすと首が飛ぶぞ。

平太　コリヤ〱、急の道、駕籠の損じ賃は如何程なりと遣はす。早くやれサ。

駕舁　左樣なら、ようございます。

ト向うへ行かうとする。向うより源八、駕籠の鼻を押し戻し、本舞臺へ來る。

平太　源八か。

源八　平太か。

侍ひ　うぬ。

ト提灯切り落す。皆々逃げ入る。花道へ追うて行き、本舞臺へ戻る。

源八　その後は逢はぬが、最前はいかい世話であつたなア。

平太　われが爰へ來たは、二人の奴等、取返しに來たか。

源八　マア、そんなもの。

平太　如何にも、戻してやろ。

ト駕籠の側へ拔いて差しつける。

源八　コリヤ〱早まるな。麁相すな。われには、只一言云ひ聞かす仔細がある。早まるな。マア待てサ。コレ、この一通は、最前其方が懷中より落せし一通、この中に往來の御朱印は、其許に所持なさるべくとあるからは、其方が手にある筈。この往來の御朱印、若殿の御手よりお上に差上げねば、盜賊の惡名が拔けぬ。われも以前のお主の事ぢや。私し同士の意趣に、主の大事は替へられぬ。茲をどうぞ聞分けて、その御朱印の在所を云うてくれ。武士が手を下げて頼む。聞分けてくれいサ。

平太　われはおぞい者ぢやな。さう和らで出たら、返してくれうと云ひたいが、ならぬ。おのれには、常から意趣のある奴ぢや。如何にも往來の朱印は、おれが手にある

安永元年正月大坂

角の芝居上演繪番附

が、返す事ならぬと云うたら、われ切らざなるまい。切つては水の泡。そんなら助けて置いて云はさうと思ふか。この平太が目の黑いうちは、金輪際云ふ事ならぬ。サア、切れ〳〵。切れ〳〵、拔けやい。

源八　ハテサテ、いま云ふ通りの所存。なんのさういふ氣はない。手向ひせぬといふ證據。

ト刀を抛り出し、

昔の意趣があるなら、われが存分にして、後で御朱印の在所を云うてくれ。賴む〳〵。

平太　オヽ、よい推量。すりや、おれが存分になるか。

源八　源八も武士だ。二言はない。

平太　そんなら、うぬをカウ〳〵〳〵。

ト蹴倒し、踏みつける。

源八　サア、存分になつた。云うてくれサ。

平太　イヤ〳〵、まだこんなこつちやない。ズツとえらい事がある。

源八　まだ存分にならざ、サア、如何やうともせいサ。

平太　うぬを斯うして〳〵。

ト下駄にて顏を蹴り、踏みつけ、唾をかける。

われは武士でないか。顏を灰吹きにされても、無念にはないか。へヽヽヽヽ。張合ひのない奴。

源八　ハテ、手向ひせぬと云ふからは、なんの構はう。存分にしてくれ。

平太　まだ存分にやし足らぬ。

源八　まだ存分にやし足らぬか。この上の存分は。

平太　われを存分には、斯うする。

ト切りかける。傘にて留め

源八　その存分ばかりは、えゝならぬ。

平太　ならねば斯うぢや。

ト立廻りになり、源八、平太が衣裳の紋を切る。朱印出る。ト平太、抛る。柳の枝へかゝる。高塀よりお舟見て居る。

源八　ハテ、變つた所に隱し居つたな。

平太　平太が定紋は、いつでも御朱印ぢやと思うて居よ。

源八　最早御朱印の在所が知れるからは、此まゝでは置かぬ。覺悟せい。

平太　最早、あれが出たらしよ事がない。うぬを殺す。覺悟せい。

ト唄になり、これよりドロ〳〵になり、つまり平太を殺す。曉六ッの鐘鳴る。駕籠の繩を切る。內より縫之

助、總角出る。

縫之　源八。

源八　若殿樣。

ふれ　ソレ、往來の御朱印。

源八　忝ない。

平太　それを。

　　ト源八、ポンと切る。

源八　ござりませう。

幕

切　幕

與三右衞門館の場
淀川水車の場

役名――淀與三右衞門。花滿縫之助。憲法女房、深雪。與三右衞門女房、木幡。同妹、喜蝶。秦野官翁實ハ熊本辨之作。奴、雁平。傾城。總角。勅使辨の中將。太鼓持ち、小市。神道源八。川浦遊軒

造り物、向う金襖、二重舞臺、屋體入込み、大名屋敷の體、好みあり。橋がゝりに城の櫓少し見える。

中門は橋がゝり。縫之助、小市、白き兜頭巾、裝束にて窺ひ居る。高札あり、白梅、盛りの體。總一面に雪降りの體。秦野官翁、下座の屋體に惣白髮で茶を立てゝ居る。向うに奴雁平、雪にて猿を作り居る。琴唄にて幕開く。奴二人、竹箒にて掃除してゐる。

奴一　なんとやか内、如何に冷たい事ではないか。

奴二　冷たい段か、足許から腦天まで、縮み上がるやうなわい。

奴一　こちらも遊軒さまの奴なら、此やうに冷たい目はすまいものを。

奴二　シタガ、あのやうにほだへかくると、機嫌を損ねて得ては笠の臺が落ちるものぢやてや。

雁平　ヤイ〳〵、おのい等は、そりや何を吐かす。身共は旦那遊軒さまの御意で、猿を拵らへて居る。おのいらが差配は賴むまい。がた〳〵頤きくと、頤引裂いてしまふぞよ。

奴一　わりや、見事頤裂くか。

雁平　望みなら引裂いてやらうか。

奴二　引裂かるゝなら、引裂いて見よ。

雁平　引裂いて見せう。

トやかましく云ふ。木幡、襦袢にて奥より出る。縫之助、小市、囁き入る。

木幡　ヤイ／＼騒がしい。何事ぢや。

雁平　さればでござりまする。此奴等が私しめが事を我意に誹ります。それゆゑ喧嘩でござりまする。サア、うぬら、なんとか云うて見ぬか。

木幡　ヤイ／＼中間ども、この度、八幡御造営につき、禁廷よりお勅使がお立ちなさるゝ。その守護として川浦遊軒さま、親御官翁さま、この所に御逗留。萬事麁相のないやうに云ひつけ置いたが、もし過ちあつては、夫與三右衛門どのゝ不調法になるがや。嗜なめ／＼。

奴二　だん／＼、誤まり入りましてござります。

雁平　なんと、えらいものであらうがな。

木幡　其方達はしまうたら、休め／＼。

二人　ない／＼。

ト入る。

官翁　雁平。

雁平　ナアイ。

官翁　忰遊軒は、まだ歸らぬか。

ト愚痴なる親仁方のせりふにて云ふ。

雁平　今日は、旦那遊軒さまには、淀の景色を御遊覧とあつて、お勅使諸とも、お出でなされてござりまする。

官翁　然らば、追ッつけ歸るであらう。われは早く迎ひに行け。

雁平　ナイ／＼。木幡さま、お迎ひに行て參りませう。

木幡　大儀ながら、早う行てござれ。

雁平　ナイ／＼。

ト入る。

木幡　これは／＼、官翁さまにも、冷えまするのに、其やうになされずとも、マア、ちと御休息なされましたがようござりまするわいな。

官翁　なんぼ冷えても、爐のたぎりで、さして屈托にもござらぬが、年寄つて久しく強ばつて居れば、腰も膝もメリメリと、アヽ、いかう冷えまするて。

木幡　左樣でござりませうとも。

官翁　ちと、それへ參つて寛ろぎませう。

木幡　サア、これへお出でなされて、御休息なされましたがようござりまする。

官翁　左樣いたさう。さて／＼、草臥れた／＼。

ト向うへ出る。

木幡　お道理でござりまする。
官翁　イヤ又、斯う見渡したところは、どうも云へぬ。
　ト若いせりふにて云ふ。木幡と顏見合せ
イヤ、ナニ、御内所、こなたの夫與三右衞門どの、いかい心遣ひになりまする。
　ト親仁方にて云ふ。
木幡　これは〳〵御挨拶でござりまする。夫與三右衞門どのは、天下よりこの城を預かり居られますれば、天下の御用は卽ち手前の勤め、さのみ氣苦勞にも存じませぬが、お勅使樣のお供なされまする遊軒さま、お前樣、さぞ氣苦勞に思し召しませうな。
官翁　忰遊軒が事は、淀川筋巡見いたさねばならぬゆゑ、さのみ屈托にもござらねども、どうで參らねばならぬ身の上。また身共が事は、茶に事慣れたとあつて、お勅使へ茶を上げるやうにとの事。高位高官に差上げるは、イヤモウ、氣が張つてなるものではござらぬて。
木幡　左樣でござりませうとも。さりながら、茶に妙のあるお前ゆゑ、高位高官にもお附合ひなされまする。ほんにマア、わたしらも、姬御前ではござりますれども、茶の稽古いたしたうござりますわいな。

官翁　それはよい心懸け。ちと稽古さつしやれ。敎へて進ぜう。
木幡　そんなら、敎へさつしやれて下さりませうかな。
官翁　如何にも敎へて進ぜう。併し、茶と云ふものは、いかうむづかしいものでござるてや。
木幡　左樣でござりませう。
官翁　マア、ちよつと立たつしやれ。
木幡　アイ〳〵。
官翁　その兩手を、グッと上げた〳〵。
木幡　アイ、斯うでござりまするかえ。
　ト手を上げる。
官翁　それ〳〵、さう手を上げた所を、斯う緊めつけたものぢや。
　ト戲れる。振り放し
木幡　あなたとした事が、こりや、何をなされまする。
官翁　ハア、茶を敎へてやりまする。幸ひあたりが靜かなれば、こゝらで一服呑みませうか。
木幡　これはマア、あなたとした事が、ひよつと人に知れたら、なんとなされまする。
官翁　なんの、人に知れるもので、この間よりどこぞでは

どこぞではと存じて居つた。こなたへ心中と存じ、この
文認め置いた。これを見て返事下され。
ト状を懐へ捻ぢ込み、側へ寄る。振り放し
木幡　これはマア、お前様は、御本性でござりまするかえ。
さうして、よい年をして　與三右衛門といふ夫のある
身の上でござりまするぞえ。それにマア……つれない君
様參る、及ばぬ身より。オ、嫌らし。
ト投げつける。
官翁　年寄り〳〵と云うてもらひますまい。此やうに年は
寄つて見ゆれども、いでさらば爰だと思へば、若い者の
五六人前も働らく。つれない君よ。幸ひあたりは靜かな
り、爰らあたりでも隨分。
トまた戯れる。
木幡　放さぬのか、放さぬか。
官翁　放さぬ〳〵。わしや、なんぼうでも放しやせぬ。
木幡　年寄りだてら、力が強うて、とても叶はぬ。
官翁　この力では、若い者にも、なか〳〵負けやすまい。
木幡　申し、遊軒さまへ申しつけるぞえ。
官翁　遊軒は愚か、與三右に云うても大事ない。どうした
とて放すものか。

ト與三右衛門、最前より出て、聞いて居て、官翁を取
つて抛ろ。
これはきつい力ぢや。その強さでは。
ト見て悧り。
木幡　エヽ、好い所へ。申し、先刻から、どうもなる事
では。
與三　コレ〳〵奧。今日は、遊軒どのゝ御親父官翁どの、
お勅使へ茶を差上げらるゝ。圍ひの花も、念入れよと云
ひつけたが。
木幡　イヽエイナア、先刻にから、あの親仁めが。
與三　ハテサテ、人には目も耳もないと思うて居るか。何
事も聞いて居る。また知つても居るわいなう。
木幡　すりや、先刻にからの事、よう御存じ……ハヽヽハ
ハ、わたしや、御存じあるまいかと思うて、ひよつとお
疑ひでもあらうかと存じまして。
與三　ハテ、女と云ふものは、味な所へ氣の廻るものでは
ある。
ト官翁、そろ〳〵入らうとする。
イヤ、官翁どのでござりまするな。
官翁　これは〳〵與三右どの、この間は、いかいお世話に

なりまする。
與三　イヤ、其許にも、今日は御苦勞にござりませう。
官翁　左樣にもござらぬてや。
與三　イヤ、官翁どの、手前どもはとくと存ぜぬ事ながら、茶の湯と申すものも、樣々手前のある事さうにござるな。
官翁　なんとござるやら。
與三　先づ斯う手を上げまして、そこを斯う緊めつけますか。これに挨拶がござる。その挨拶には、此やうに年は取つたけれども、いでさらば、力づくと云へば若い者の五六人前も働らく。人がなんと侮つたとて、この力瘤で力瘤で。ハ、、、、。
官翁　イヤ、與三右どの、手前、左樣な茶は存じませぬ。
與三　官翁どの、其許には、もうお幾歳におなりなされまする。
官翁　拙者、七十六に罷り成りまする。
與三　七十六……七十六で五六人前とは、ハテ、達者な事でござるな。
官翁　なんとござるやら。
ト與三右衞門、杖を拾ひ取り
與三「つれなき君さま參る、及ばぬ身より」。つれないとは獨り旅の事か。及ばぬ身、この身は、ハテ變つた身ぢやなア。官翁どの、なんと茶の湯にも、斯樣の物が要る事でござりまするか。
官翁　お花畠の茶の湯の稽古いたさねばならぬ。
與三　イヤ、官翁どの、このつれない君とは、どういふ君ぢや、承はりませう。
官翁　イヤ與三右どの、大切なお勅使、饗應の茶の湯、殊の外取込みまする。後程お目にかゝりませう。ハア、ぢやてぢやて〳〵。
與三　イヤ、コレ、このつれない君は、どうぢやぞいなう。
官翁　ハア、ぢやて〳〵〳〵。
ト云ひ〳〵奥へ入る。
與三　ハア、、、、。
木幡　てもさても、マア、よい氣味な事でござりましたわいなう。
ト此うち、門の際に縫之助、小市出て聞いて居る。
與三　さればく〳〵、年には依らぬものぢやてなう。
木幡　左樣でござりまする。イヤア、その文、私しに下さりませ。今一度、耻かゝしてやりまするわいの。
與三　イヤ、よしにしやれ。遊軒どのゝ耳に入つても、よ

くない事ぢや。よしにしやれ〳〵。

木幡　イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。云はゞわたしが胸が濟みませぬわいなア。

ト與三右衞門、兩人を見て

與三　ハテ、味に入込んだな。川浦遊軒は、淀川筋に七里半の堤を築き、往來自由の普請承はると雖も、川筋を船にて往來する工風いたす者あるに於ては、重罪たりとも科を赦し、恩賞は望み次第との仰せ。與三右衞門承はり、この高札、サ、家を立つべき綱にもと、樣々に心は盡せども、遊軒が計らひにて、獅子飛を切り落したれば、淀川筋の水高うして、なか〳〵船にて往來する事思ひもよらぬ。サ、家を立つべき功もなくして、勅使守護の遊軒に刃向ふは、朝敵も同然。與三右衞門が城にあるうちは、叶はぬ事〳〵。

木幡　イヤ申し、それは何事を御意なされまするえ。

與三　サア、此やうな雪の夜には、見付けられぬやうに隱れたらよからう……サア、何者も爰らに居らねども、大方、雪に隱れさうなものぢや。

ト縫之助、小市、囁き、また隱れる。

木幡　なにがいなア。

與三　アレ〳〵、庭の樹木が、大方雪に隱れさうなもの。オヽ、それがよい〳〵。ハテ、入込んだなア。

ト橋がゝり、バタ〳〵にて、雁平、深雪を捕へ出る。

雁平　サア、非人め、出さぬか〳〵。

深雪　アイ、なんにも隱した物はござりませぬ。

雁平　まだ〳〵、うぬが。いま隱した物、出さぬか〳〵。

木幡　ヤイ雁平、聲高な。そりや何事ぢや。

雁平　只今、旦那を迎ひに、大手先へ參りましたるところこの非人めが何やら合點ゆかぬ面構へにて、御城内を窺ひまする。とくと心を附けますれば、刃物を隱し持ち居りまする。それゆゑの詮議でごわりまする。

木幡　非人の身として、刃物を隱し持ち居るとは、ハテ、合點のゆかぬ。

雁平　サア、非人め、出せ。

深雪　なんにも隱した覺えはござりませぬ。

雁平　出さねばカウ。

ト少し立廻りにて、深雪、刀ヒラリと拔き、さしつける。

深雪　隱されるだけは包みますれども、斯樣にお目立ちまする上からは、包みませうやうはござりませぬ。但し、

非人は刀を所持いたしまする事の、ならぬものでござりますするかな。

與三　非人の女、これへ參れ。

深雪　ハイ。

　トつか〳〵と出で

與三右衞門さま。

與三　ヤイ〳〵女、ついに見た事もない見苦しい女。必らず麁相云ふな。

深雪　ハイ、御用でござりましたかな。

與三　非人の身として刀を携へ、城外に徘徊すれば咎める筈。何ゆゑ又、大手先にはうろたへ居るぞ。

深雪　ハイ、この刀が賣りたうござります。

與三　なんと。

深雪　斯様の身と衰ろへ、所々流浪いたしまするが、與三右衞門さまはお情深いと承はりまして、この刀を買うてもらひませう爲。

與三　アノ、その刀を。

深雪　ハイ。

與三　イヤ、そりや身共ではあるまい。外に買うてもらはうと思ふ人があつての事であらうがな。

深雪　エ、。

與三　勅使守護の高家には、相應の小太刀。買うてもらはうと思ひ、與三右衞門に取次ぎを頼むのか。さうであらうがな。

深雪　お目立ちまする通り、外へ持つて參られませぬこの刀、目指すところは

與三　遊軒どのか。

深雪　ハイ、左様でござりまする。

與三　さうありさうなものぢや。

雁平　ハ、、、、見れば切尖は、血にて錆び腐つてある鈍刀物。旦那遊軒さまに賣らうとは、こな大騙りめが。

深雪　莫耶が刀も、持ち手の手の內。刀の錆も見苦しけれど、血汐の無念の血の落ちぬ、直ぐな心の亂れ焼。ちつとお目には入りますまいけれど、スワと云はゞどなたでも、何奴でも切りかねぬ業物でござります。

與三　見事々々、さう見ゆる〳〵。

　トこの間、縫之助、小市、出て見て居る。

雁平　頤の過ぎた、どう乞食め。

　ト立廻り、雁平を當てる。見得あつてとまる。

與三　その刀、これへ持て。

ト見得あつて、深雪、與三右衛門に渡す。とつくと見
て
鋒先の血、さぞ無念にあらうな。
木幡 女中、して、あの刀の價は。
深雪 金銀に望みはござりませぬ。その價は。
與三 身が屋敷に、奉公の望みか。
深雪 ハイ、左樣でござります。
與三 イヤ、そりや叶はぬ。
深雪 そりや又なぜでござります。
與三 この度、男山八幡造營に付き、勅使のお成り、守護
する役は川浦遊軒。與三右衛門がお宿を申し、御馳走申
すうちに、ちつとでも過ちあれば朝敵同然。與三右衛門
が手にあるうち、敵討ちはなるまい。
木幡 すりや、この女中は。
深雪 花滿憲法が女房、深雪。
與三 將監を討つて、立退いた辨之作は、在所が知れたか。
深雪 遊軒は高位の交はり。せめて辨之作なりともと、さ
まざま尋ねても
與三 知れまいな。知れぬ筈ぢや。辨之作は遊軒が匿まう
て居るぞよ。

深雪 エヽ……例へ朝敵にならうとまゝよ。
與三 家が大事か、敵が大事か。
深雪 イヤ、なんと。
與三 敵を討つも先祖へ孝。その家國を立てる功があるか。
深雪 サア、それは。
與三 敵を討つて先祖を潰すか。こな不孝者めが。
縫之 その家國を立つべき功は、爰にある。
深雪 縫之助さま。
縫之 與三右衛門さま、お久しうござりまする。
與三 縫之助、家國を立つべき功があるとは。
縫之 天下より預かり奉る關西往來の切手、詮議仕つてご
ざりまする。お受取り下され。
與三 如何にも相違ない切手。慥かに受取つた。
縫之 いよ〳〵家督の儀は。
與三 立てられまい。
深雪 敵討ちは。
與三 なるまい〳〵。
縫み なぜな。
與三 なぜ、家は立てぬ。
縫深 サア、その切手で。

與三　花滿憲法ことは、鎌倉の御名代、大内へ參內し、大切な御用をし損じ、禁裏を騷がしたる科、從類を絕やせとの仰せなれども、勘當の者どもにお祟りないは時の憐愍。川筋普請の事も徒らに、大切なる預かりの切手まで盜まれ、科に科を重ねたる花滿一門。例へ預かりの切手、取返したればとて、其まゝに家國が納められうと思ふかやい。

深雪　すりや、この切手を差上げても。

小市　家國は立ちませぬか。

與三　木幡、その高札をこれへ持て。

木幡　ハア。

ト高札を持ち行く。

與三　縫之助、家國を納める功はこれぢや。

縫み　これとは。

與三　淀川筋、水早き所、船にて往來する事、工風する者あるに於ては、重罪たりとも科を赦し、褒美は望みたるべきものなり。

ト向うより

呼び　遊軒さまのお歸り。

ト深雪、縫之助、小市の三人

三人　ナニ、遊軒が。

ト行かうとする。

木幡　コレ、お勅使の守護でござりまするぞ。

深雪　すりや、その切手は。

與三　與三右衞門が預かつた。

縫之　館の內は取卷いて

小市　一人も動きませぬぞ。

木幡　勅使守護の役目もしまひ

深雪　辨之作が在所も知れ

縫小　再び本地に立歸る

與三　今宵のうちに時節があらう。

木幡　マア、それまでは腰元深雪。

與三　女房、着類も着せ替へやれ。

木幡　女中、奧へ。

深雪　ハア。

縫小　深雪さま。

深雪　皆も短氣を出すまいぞ。

縫小　ハア。

ト木幡縫之助小市、入る。深雪、與三右衞門、殘る。

與三　ナニ、腰元深雪、大切なる勅使守護の遊軒どの、隨

分無禮のないやうに。
深雪　時節までは、キッとお預け申しまする。
與三　それがよい〳〵。ナニ深雪、もし又時節に及んだ時、其方が手の內は。
ト深雪、簪にて松へ手裏劍打つ。小鳥、飛び去る。鳩一羽落ちる。
深雪　兼ねて手練は致しました。
ト見せる。
與三　見事。女に稀れなる手の內。併し騙すに手なし、思ひがけない所を、カウ。
トぶちかける。莨盆にて受け
深雪　こりや、なんとなされます。
與三　もし、敵が斯うせば。
ト立廻りになる。深雪、疊を上げる。與三右衞門、飛び退く。
深雪　この手練ではな。
與三　見事。所を透かさず、カウ。
ト手裏劍打つ。駒下駄にて受けとめ
深雪　これでは、なんとござりまするな。
與三　しつかりと抱へたぞ。
深雪　エヽ、忝ない。
與三　奧へ行て休息せい。
深雪　ハッ。
ト唄になり、深雪入る。與三右衞門、雁平を引起し、活を入れる。雁平、起きて
雁平　ウム、最前の女めは。
與三　雁平、氣が付いたか。
ト雁平、恂り。
雁平　與三右衞門さまでござりまするか。
與三　遊軒どのゝお歸り。迎ひに出い。
雁平　ナアイ。
ト橋がゝりより、勅使辨の中將、後より川浦遊軒、長上下、乘り物吊らせ、家來附き出る。奧より官翁出る。
官翁　これは辨の中將さま、只今お歸りなされましたな。
中將　官翁、茶の湯の用意はよいか。
官翁　ハッ。
與三　遊軒どの、只今お歸りでござりまするか。
遊軒　やうやく只今でござる。
與三　先づ、お通りなされませい。
ト辨の中將、上座へ直る。官翁、遊軒、與三右衞門、

並よく並ぶ。
今日はお勅使さま、徒歩をおひろひ遊ばされ、其許樣にも、萬事御苦勞、
遊軒　イヤ、さのみ苦勞な儀もござらぬが、貴殿には院客が參つて、さぞ御退屈にござりませう。
與三　これは御勿體ない。
中將　ハツ、官翁、其方が云うた細工は出來たか。
官翁　ハツ、雁平、申しつけた細工は出來したか。
雁平　ヘイ、疾に仕り置きましてござりまする。
　ト官翁、側へ猿を持ち行く。
官翁　なか／＼よい作ぢや。なんと御覽じましたか。
與三　御幼稚におわたりなさるゝゆゑ、さぞ道草でござりませう。
遊軒　イヤ、モ、御覽じ付けられぬ民家の手業、一段とよいお慰みでござる。
官翁　悴、淀川筋の巡見し召されたか。
遊軒　イヤ、さしてえらう面倒い事もござらねど、どうでも土砂を津の國尻なし川へ流し込みまするゆゑ、思ふやうに行きかねまするゆゑ、北山の木を伐らします筈でござる。
與三　ハア、、御工風が出來ましたかな。
遊軒　餘り水早くて土を保ちませぬゆゑ、北山の木を殘らず伐りますると、雨は直ぐに山へ落ち、山の土は、一雨一雨に淀川へ流れまするところへ、藪をとつて流しますると、彼の竹の根がしがらんで流れまするうちに、右の山土が流れて參りますると、竹の根へ挾まれ、この竹が川中へ土臺となりますると、自然と川が埋もれまするうちに、堤を築きまする算用でござる。よくしたものでござるてや。
與三　シタリ、あの早き川瀨、登り船さへ突き流されるゆゑ、行かぬ事と存じたに、川中へ堤を築くとは、その意を得ませぬとばかり存じたに、今のお話し、驚ろき入りましてござる。
官翁　イヤ、コレ、與三右どのばかりは、左樣に仰せられるな。悴遊軒が工風いたした堤の事、惡からうとこなた一人、探つて申し上げたぢやないか。それに、今さら追從らしい。
遊軒　コレ／＼、年寄りだてら、そりや何を云ふのぢや。與三右ぢやと云うて、追從も云はつしやれいでなんと致さう。當時この遊軒に追從せぬ者は、雪で作つたコレこ

の猿松。ナウ與三右。
與三　左様でござりまする。
遊軒　今度の堤の儀も、彼れこれ小智慧のある衆が、遊軒を嫉んで申し上げたゆゑ、暫らく差控へて居るうち、高札ぢやのなんぢやの、川の山のとやつて見ても、サ、一人もこれぞ好い事といふものが無いゆゑ、せう事なしにまた遊軒に仰せつけられた。玆を思へば、世間に智慧のある者は、いかう少ないものでござる。
與三　それ〳〵、こなたのお智慧に及ぶ程の者はござらぬ。
遊軒　イヤ〳〵、强ち斯様な者が無いとも申されぬ。二人ござる。
與三　それは誰れでござる。
遊軒　ハテ、一人は拙者、いま一人は、世間の人を一人に致して。ハ、、、、。
與三　イカサマ、仰しやれば左様なもの。見ますれば、お勅使様には、徒歩をおひろひなされ、この乘り物はな。
遊軒　雁平、その乘り物の内に居る者、これへ引出せ。
雁平　畏まつてござりまする。
ト内より喜蝶、腰繩にて出る。
與三　其方は。
喜蝶　お耻かしうござりまする。
官翁　悴、見れば女、仔細はどうぢや。
遊軒　只今、片沼を蹈りまするところ、お勅使と拙者が眞中へ、鐵砲を擊ちかけました。
與三　ハテ、それはひやいな事な。
遊軒　早速、あたりを吟味いたさせましたところ、彼奴が鐵砲所持いたすゆゑ、直ぐに捕へて參つた。
與三　ハレ、危ない事な。
遊軒　女の手業に斯様の事仕るは、一人の企みではあるまい。同類があらう。有やうに白狀せい。
喜蝶　狙ひすまして、本望遂げようと思うたに、エ、、仕損じて口惜しいわい。
ト懐劍にて切りかける。腕首捕へ
遊軒　與三右どの、この女、見知つて居やつしやるか。
與三　イヤ、ついに見た事もない奴でござりまする。
遊軒　アノ、現在の妹を。
與三　妹にもせよ、一旦勘當いたしたれば他人。他人なれば、見知らうやうもござりませぬ。
遊軒　ハテ、氣散じな事ぢやな。
官翁　悴、總體この間は夜寢惛い。用心しやれ。

喜蝶　遊軒。
　ト また突きにかゝる。
遊軒　コリヤ、親を切るか。
喜蝶　親とは。
遊軒　最前捕へし時、肌を探せば臍の緒の書付け。亥の年亥の月、亥の日、亥の刻の誕生、息災延命と書きつけたは、拙者が手ぢや。
喜蝶　エヽ。
遊軒　鬼やらひの節會の夜、端下の女に手をかけ、懐胎したるは其方。母は些少の誤まりあつて、大内で追放。その後、娘誕生したれども、母は當座に死んだるゆゑ、守り袋を證據に方々と尋ねて居たが、ハテ、健で居たなア。此方と同じ守り袋、見よ。
　ト出す。喜蝶、合せ見て
喜蝶　ヤア、しつくり合ふからは、そんならお前は父さん、お前が父さんなれば。
　ト小市と顔見合せ
ヤア、お前は。
　ト小市、隠れる。
父さんなれば……ハア。
　ト大泣き。
與三　淀堤に由ある守り袋を添へ、捨てあつたゆゑ、拾ひ上げた妹は、遊軒どのゝ娘であつたよな。
喜蝶　夫への功、憲法さまの敵、一太刀恨まうと思うたに敵は父さん、すりや、小市どのと……こりやマア、なんとせう／＼。
　ト泣く。
與三　お勅使へ鐵砲を撃ちかけたれば、所詮命はないと思うて居よ。
喜蝶　ソレ、父さんにもせよ。夫の仇。
　ト切りかくる。
遊軒　ハテサテ、わりや、憲法方の奴と、腐り合うたな。
喜蝶　夫への面晴れぢや。
　ト立廻りあつて。當てる。ウンと反る。
官翁　これは。
遊軒　藥でも遣つて下され。
　ト官翁、藥を服ます。喜蝶起き
喜蝶　エヽ。
　ト泣く。
遊軒　世になしものゝ蚯蚓めらには、遊軒が娘は添はさぬ。

追ツつけ好い聟取つてやらう。
ト官翁、目で知らす。
官翁　ウン、さうとも〳〵。
ト頷く。
與三　遊軒どの、手前が召抱へましたる新參の腰元がござるが、其許樣を戀ひ侘びまして、何卒お伽と申すも慮外、お茶の給仕になされて下されと望みまする。幸ひ、持ち傳へましたる太刀一振り、これをお買ひなされて下さるまいか。それを橋渡しに致したいと申すゆゑ、よろしう申し上げくれうと、次に控へさせ置きましてござる。なんと御覽遣はされまいか。
遊軒　身共に小太刀が賣りたい。
與三　親子ともに、お目利きの上手と承はり及びました。
雁平　最前の女の非人めが、旦那に刀を賣りたいと願ひまする。何とやら、合點のゆかぬ奴でござります。
遊軒　ドレ、その刃物見ませうかい。
與三　御覽なされませい。
ト渡す。遊軒、抜いて見て
遊軒　こりや、疑ひもない眞の御太刀。
與三　その切尖の血……銹を賣りたいと申しまする。

遊軒　買ひませう。その賣り主は、どこに居りまする。
與三　小太刀の賣り主、これへ參れ。
深雪　ハツ。
ト着流しにて出る。
遊軒　わりや、憲法が女房深雪。
深雪　遊軒さま、お久し振りでお目にかゝりました。
遊軒　遊軒を嫌ぢや〳〵と嫌うたが、いま思ひ知つたであらうな。そしてマア、久しう見るうち、きつう窶れたなア。
深雪　エ、。
ト與三右衞門、止める。
昔が今の氣であらうなら、流浪は致しますまいと、悔んで居りまする。
遊軒　與三右どの、深雪をこの屋敷へ引込んだは、さてはこの遊軒を。
與三　お寢間の伽が致したい願ひ。
遊軒　ヤ、、、なんと。
與三　意氣地を立てますも身が可愛さ。野心ないと申す印には、賣りました誠の御太刀、價には妾なりと、以前のよしみが受けたい彼れが願ひでござる。
遊軒　すりや、憲法への貞心を捨てゝ。

深雪　お耻かしながら、どこへ取りつく島もないこの身。昔のよしみを思し召し、お側でお伽の申したさ。お前に逢ひたい……逢ひたい〳〵と思うて居りましたが、マア、お健でお嬉しうござりまする。

遊軒　アノ、この遊軒が側で

深雪　御奉公が申したさ。

與三　それゆゑ、刀賣りまするでござりまする。

遊軒　如何にも買ひませう。一旦心かけましたる女、寢間の伽させう。深雪、爰へ來い。

深雪　ハイ。

與三　お召しなさる。行儀よくして參れ。

ト深雪、思ひ入れあり、側へ行く。

深雪　御用でござりまするかな。

遊軒　われさへ寢間の伽せうならば、心許して寢間の伽さしてくれう。

ト切りかける。與三右衞門、深雪引退ける。

與三　こりや、何さつしやる。

遊軒　なんとなさるゝ。

遊軒　此方へ求める小太刀、切尖の銹で切れ味心元ない。女を試しまする。

與三　ちつと御粗相かと存じまする。

遊軒　何がなんと。

與三　こなたは勅使守護の役、血をあやしても苦しうないか。

遊軒　尤も。親人、ソレ。

官翁　合點ぢや。

ト深雪に切りかゝる。立廻りのうち。與三右衞門、扇にて打ち落す。

與三右、こりやなんとする。

ト手酷く云ふ。

與三　年に似合はぬ頑丈な事な。

官翁　ヤア、なんと仰しやる。

ト急に親仁方にて云ふ。

與三　貴殿には、勅使へ茶を差上げる役目、血に銹びたる刀を持つさへあるに、女を試し召さるゝか。

官翁　サア、それは。あやまりました。

與三　誤まりも〳〵、御老體には似合ぬ近頃の誤まり。

官翁　ウム。

トきめる。

遊軒　親人、お年寄りの、お引きなされい。

ト官翁、よほ〱下に居る。

與三右どの、如何にもお勅使前で、血をあやさうと致したは、親官翁が不調法。それとても手前の不調法でござる。

與三　イヤ、あやまらせうと申すではござりませぬ。

遊軒　イヤ、あやまりましてござる。あやまりも、あやまりも、近年の大あやまりでござりまする。

喜蝶　父さん、お前は。

ト切りにかゝる。遊軒留めて

遊軒　雁平、女めを試せ。

雁平　ハッ。

ト深雪に切りにかゝる。立廻りにて留め

雪深　こりや、なんとする。

雁平　切れ味、試みる。

ト立廻りにて、與三右衞門、雁平を見事に切る。

官翁　與三右、こりやなんとする。

與三　なんとも致さぬ。

官翁　勅使守護の家來を切るからは、覺悟であらう。

與三　此奴、切つても苦しうない。

官翁　苦しうないとは。

與三　不義者でござる。

官翁　不義者とは。

木幡　その證據は、爰に居りまする。

ト出る。

遊軒　不義の證據、見ませう。

木幡　不義の證據はこの文、あの雁平めが、わたしに惚れてこの附け文。官翁さま、お前も最前御存じ。但し、この文、封を解いて、中の名を改めませうかな。

官翁　ア、コレ〱、成る程、身共も居つた。家來雁平めが、こなたに不義を働らく。さて〱憎い奴と思へども、悴が歸つたら手討にもと存じて居つた。與三右、よく切り召された。こなたの手にかけるは、雁平めが仕合せサ。

木幡　さう仰しやればこの文、封を解くにも及びませぬ。

官翁　憎くい雁平め。

與三　ハテ、切れたワ。右手の脇より肋にかけて、すつぱり、天晴れの業物、錆には依らぬものでござります。

ト遊軒に渡す。

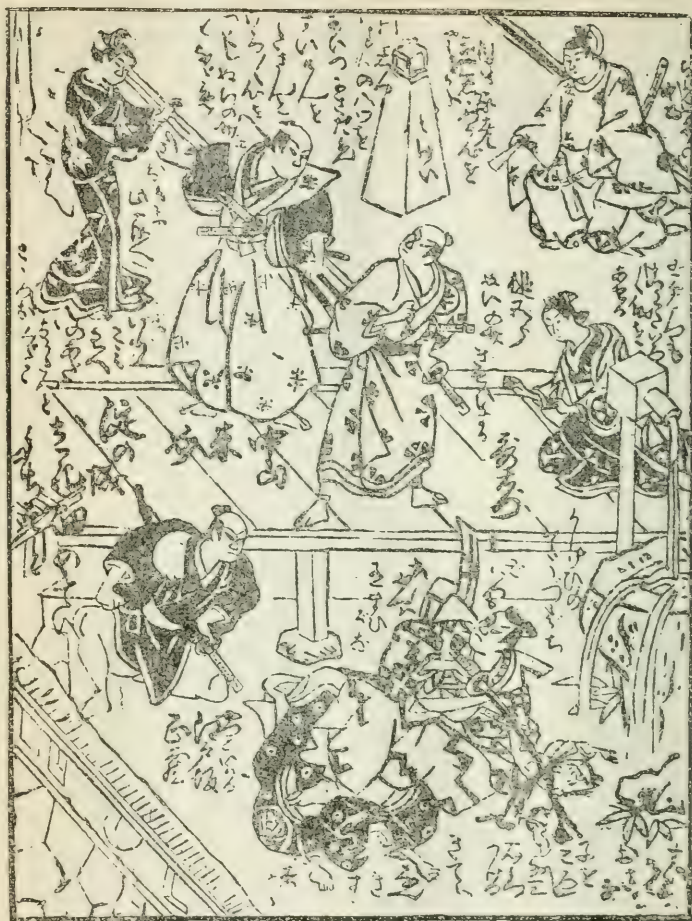
遊軒　いかいお世話でござる。

ト不承々々に取る。

與三　いよ〳〵女はお側の伽。
喜蝶　父さん、どうで。
　ト また寄る。
遊軒　此奴、虎の子を飼ふやうな娘。與三右どの、この女めを、しかとこなたに預けたぞ。
與三　預かりました。
官翁　忰、次手にこの虎の子も。
遊軒　ハテ、何程の事がござらう。遊軒親子にちつとでも、指さす奴があると、與三右どのの身の上。
官翁　それで落ちついた。
中將　サア、皆奥へ參れ。
遊軒　最早お茶の湯の刻限、間もござりますまい。
與三　女房、御案内申せ。
木幡　サア、〳〵お出でなされませい。
皆々　先づ、お入りなされませう。
　ト 唄になる。辨の中將、遊軒、官翁、入る。與三右衞門、深雪、殘る。喜蝶、泣いて居る。
深雪　何を云うても勅使の守護、家の破滅を思うて、エヽ、口惜しい。
喜蝶　折角思ひ思うて、付け覦うたに、仕損じ、剰さへ。

小市　女房去つた。二世までの縁切つた。
喜蝶　コレイナア。それは。
　ト 行かうとする。
深雪　コレ、待つた、遊軒が娘、弟小市に顔見合すまいぞ。
小市　例へどのやうな事があつても、顔合せぬ金打。
　ト 表にて金打する。
喜蝶　エヽ。
深雪　可愛い夫の武士を捨てさすか。
喜蝶　サア、それは。
小市　不忠不義の名を取らすか。
喜蝶　サア。
　ト 深雪、小市、喜蝶の三人
三人　サア〳〵〳〵。
小市　どうぢや。
喜蝶　ハッ。
　ト 泣く。
深雪　とは云ふものゝ、可哀や〳〵。
　ト 與三右衞門は、官翁が事に思ひ入れ。喜蝶、與三右衞門が刀にて自害する。

深雪　ヤア、こりや自害しやつたか。
小市　ヤア。
與三　内へ入ると不孝になるぞ、喜蝶、さうなくば、道は立つまい。
喜蝶　わしほど因果な者はない。夫に添ひたいばつかり、兄樣には勘當うけ、嬉しやとも〳〵敵を討つて、女夫にならうと思ひの外、敵と云ふは父さん、どのやうに添ひたう思うても、小市さまの武士のすたる事なら、必らず入つて下さんすな。もうこの世で顏は見ぬ。魂ひはお前の女房ぢやぞえ。この體は遊軒が娘、せめては敵の肉縁を、斯う……斯う抉つたれば、もう心は晴れました。この世の念は切つた程に、せめて未來で女夫になつて下さんせえ。
深雪　それ程までに、弟が事思うて居る其方、因果とて惡緣。
與三　天下のお咎めある花滿憲法に、一家となる事、上への聞えを憚り、勘當は致した。未來に遠慮はない。妹、勘當赦したぞ。
喜蝶　エヽ。
與三　小市、喜蝶は未來の妹、改めて與三右衞門が仲人、連れ添うてたもるまいか。
小市　この世こそ敵の娘、未來は結ばいでなんと致しませう。必らず〳〵冥途は女房ぢやぞ。
喜蝶　その詞を聞いたら、思ひ殘す事はない。未來は一つ蓮でござんすぞや。
深雪　せめて、この子の末期に杯。
與三　イヤ〳〵、顏を合せば矢張り敵。
深雪　ぢやと云うて、可哀さうに。
ト與三右衞門、釣花活けにゐのこ柳を活けあるを取つて、喜蝶が血を入れて、鎖を片々はづし
與三　血肉を啜つて因緣を引くといふ。其方も未來永々、小市と緣を引く杯。
深雪　わたしは卽ち待ち女郞。
與三　杯に手をさゝねば、敵の娘の仲人といふでもない。ソレ、その鎖で。
深雪　緣の鎖の引く杯、取次ぎもせず、手もさゝず、鎖で引くが二世の結び。
與三　息引かぬうち、早う。
ト唄になり、深雪、この鎖を持ち、門の外へ引いて出る。與三右衞門、手燭を持ち、此うちに、遊軒、下座

安永元年正月大阪角の芝居上演繪番附

の屋體にて官翁に囁き、入る。官翁、鐵砲にて與三右衛門を覘ふ。

深雪 小市、二世の杯。

小市 これが喜蝶の血汐。

トちつと泣いて飲む。

與三 陰中の陽、陽中の陰、コレ、この雪も内に陽あつて燃ゆる事、陰の固まる證據、水は火を消し、雪は火をかふ、人間も先ツその如く、雪の火を取る露雫と諦らめて、未來を樂しめ。これが門火。

ト梅の枝へ火を付ける。雪だん／＼消えて燃え行く。官翁の鐵砲の上へ水落ちる。官翁、鐵砲打ちつけ、入る。

小市 然らば慮外ながら。

ト深雪、鎖を内へ引いて入る。唄になり

深雪 コレ、爰に杯。

喜蝶 エ、、忝ない。

ト飲む。

與三 深雪どの、その杯、これへ。

深雪 アイ。

トまた引いて來る。與三右衛門、つく／＼見て唄になり

與三 ハ、、、、、ア、、神なる哉、妙なる哉、唐土の貨狄は柳の葉に蜘蛛のとまり、水に浮みしを見て、船を造る。いま與三右衛門は花活けの杯を見て、夜船の覺りが開けた。

深小 エ、、なんと。

與三 この花活けを今一度。

ト深雪、向うへ引いて

深雪 斯うすれば。

與三 淀川は水早く、五日七日のうちに、なか／＼船にて上る事思ひも依らず、七里半の堤を、七曲りの中へ直ぐにつけ、王城に近道拵らへるは、遊軒が心に深き企みあらんと思へども、何を云うても大内の仕官、敵討ちも家國も、この上り船の工風こそと、思ひ暮らせしこの年月、その通りに船に綱を付け、川端を引き上らば、米穀萬事運送は思ひの儘。船にて自由は櫓と櫂と、帆を卷くばかりに凝つたるが、綱を附けて引くといふ、僅かな事に心付かざるは、燈臺元暗し、秘事は睫毛であつたよなア。

深小 すりや、この通りの工風では

與三 重罪たりとも科を赦し

深雪　所領重縁、昔の通り
與三　大内への使ひは小市。
小市　ハッ。
ト内へ入る。
深雪　ソレ、上り船の工風。
ト花活けを遣る。
與三　ソレ、高札。今こそ御朱印。
ト小市取つて
小市　追ッつけ立歸りませう。
與三　辨之作が行くへも、大方今宵知れるであらう。
深雪　エヽ。
與三　この一書は、遊軒が積惡を言上申す、兼ねての認め。
ト書き物出して遣る。
小市　喜蝶、さらば。
與三　表門は氣遣ひなし、水車の桐油口より、拔け出るを油斷すな。
小市　若殿にお知らせ申さう。
深雪　一時も早う、大内へ。
與三　行け。
小市　ハッ。
ト走り入る。
與三　コリヤ妹、犬死とばかり思ふなよ。其方が命は、敵討ちの詮議の種になるぞよ。
喜蝶　兎角小市どのの事を。さらば。
ト死ぬる。
深雪　コレ〳〵、短かい縁であつたなう。
ト與三右衛門、柳を取つて
與三　ゐのこ柳。
ト喜蝶が血汐を柳に塗る。
深雪　これは。
與三　詮議の種ぢや。行け。
ト深雪を連れ、入る。唄になる。縫之助、橋がゝりより出る。
縫之　いま小市が云うた通りなれば、今宵のうちは……何を云うても皆、與三右衛門どのに……ソレ。
ト奥へ行かうとする。深雪出て
深雪　縫之助さまか。
縫之　深雪さま。
深雪　弟にお逢ひなされましたか。
縫之　委細残らず承はりました。

深雪 いぢらしや。喜蝶どのは。

縫之 コレ、泣いて居る所でない。禁庭へ奏聞の早打ち、遊軒が耳に入つては。

深雪 氣遣ひなされまするな。門々は堅めさせ、殊に水車の桶油口より拔け出まいものでもないとあつて、伏勢がござりまする。

縫之 エヽ、忝ない。卽ち源八、お舟を遣はし置いたれば、氣遣ひはござらぬ。

ト ばた／＼になる。皆々入る。官翁を與三右衛門、追うて出ろ。

與三 動くな。

官翁 待つた。官翁には何科あつて取卷く。

與三 科はその身に覺えがあらう。

ト 遊軒中將出て

遊軒 仕丁ども引け。與三右衛門、親人には、何科あつて取卷き召さるゝ。

與三 官翁は重罪人。

遊軒 重罪人とは。

與三 木幡が死骸を持て。

侍ひ ハツ。

ト 木幡の死骸、戸板にて持ち出る。

與三 今日、勅使へ茶を差上げる官翁が手前、何とも心得ぬと、取上げ見ればこの如く紫の泡。察するところ毒藥、女房が毒味。其まゝ死したるは、重罪人でないか。

官翁 すりや、木幡がその茶を飲むや否。

遊軒 覺えがござるか、親人。

官翁 微塵も覺えはない。

與三 覺えない者が、木幡はどうして死んだ。

官翁 サア、それは。

官翁 サア／＼／＼。

與三 どうぢや。

官翁 これは又、迷惑な事ではある。

遊軒 覺えのないが實ならば、この茶の毒味して、さつぱりと云ひ譯さつしやれ。

官翁 成る程。この通りでしまへば、逆磔刑は知れた事、如何にも、この茶飲みませう。

與三 七轉八倒して、早くくたばつてしまへ。

官翁 飲むは飲むが、さりとは合點のゆかぬ。

遊軒 ハテ未練な。早く飲まつしやれ。

官翁 身の云ひ譯。いま飲みまする。

與三　またしても覺悟。正しく鴆毒に極まるからは、死體は逆磔刑ぢやと覺悟し居らう。

ト官翁、茶を飲み

官翁　與三右、いま茶を飲むが否や、一段と心よい。これでも毒に極まつたか。

與三　ハ、、、、死しなの世迷ひ言。いらざる事云はずとも、早くくたばつてしまへ。…色も變らず、サ、正しく毒藥なればこそ、女房がこの有樣。官翁には麗々とハア。ハツ。

遊軒　與三右衛門、手前の父官翁は、お勅使へ毒を盛りませぬぞ。

與三　ハツ。

ト官翁、與三右衛門を引ッ捉へ

官翁　ヤイ、わりやなんと云つた。身共は何者だと思ふ。川湊遊軒が親、禁庭のお茶の根元とも云はるゝ官翁に向ひ、毒を盛つたと云うたぞよ。

與三　ハツ、與三右衛門が一生の誤まり。眞平お免されて下さりませう。

ト此うち、官翁、痒い思ひ入れあり

官翁　まだ〳〵、どの頤で吐かした。おのれのやうな奴は、手討にする。

ト切らうとする。遊軒、留めて

遊軒　コレ、お年寄りの、氣を揉まれまするな。

官翁　オヽノ〳〵

ト官翁また親仁方になる。

遊軒　與三右衛門、わりや花滿一家の肩を持つて、遊軒を討たさう〳〵とすれど、お勅使の添へ人、關白一の人も同然。何奴も此奴も、身に指でもさすと、胴と首との生別れだぞ。

ト縫之助、深雪に當てゝ云ふ。

與三　コリヤ、早いぞ〳〵。サ、大内より御沙汰のないうちは、早い。イヤ、早う御機嫌をお直し下さりませう。

遊軒　う致

ト與三右衛門を切らうとする。

官翁　コリヤ〳〵遊軒、一旦の腹立ちはあれど、官翁が身に凶事ない事、もう料簡してやれ。

遊軒　此奴、踏みのめせ。

ト砂場へ蹴る。侍ひ、與三右衛門を踏む。

もうよい〳〵、これより、拙者が手前で、茶を差上げませう。

ト官翁を見て
親人、何さつしやる。
官翁　何かは知らぬが、いから痒い事ぢやてい。
遊軒　お使には、先づ奥へ。
中將　方々、參れ。
遊軒　仕丁ども。休め。
官翁　いかう痒い事ではある。
ト唄になる。辨の中將、遊軒、官翁、入る。
深雪　コレ、與三右衞門の大腰拔け。今のはなんぢや。今のやうに踏み打擲に遭うても、こなさんは無念にはないか。エヽ、こなたはなう。さういふこなたの心底とは知らず、今まで敵討を延ばしたが殘念なわいなう。
縫之　今まで敵討を延ばしたは、遊軒が怖さであつたな。エヽ、さういふ心とは知らいで、便りにしたが殘念なわいなう。
深雪　もう頼みの綱も切れ果てた。これより奥へ踏み込み、遊軒に潰打つて、禁庭よりお許しの出るまで、命を取らねば事は濟む。サア、縫之助さま、お出でなされい。
縫之　ソレ、一時も早う。
ト此うち、遊軒、聞いて居る。

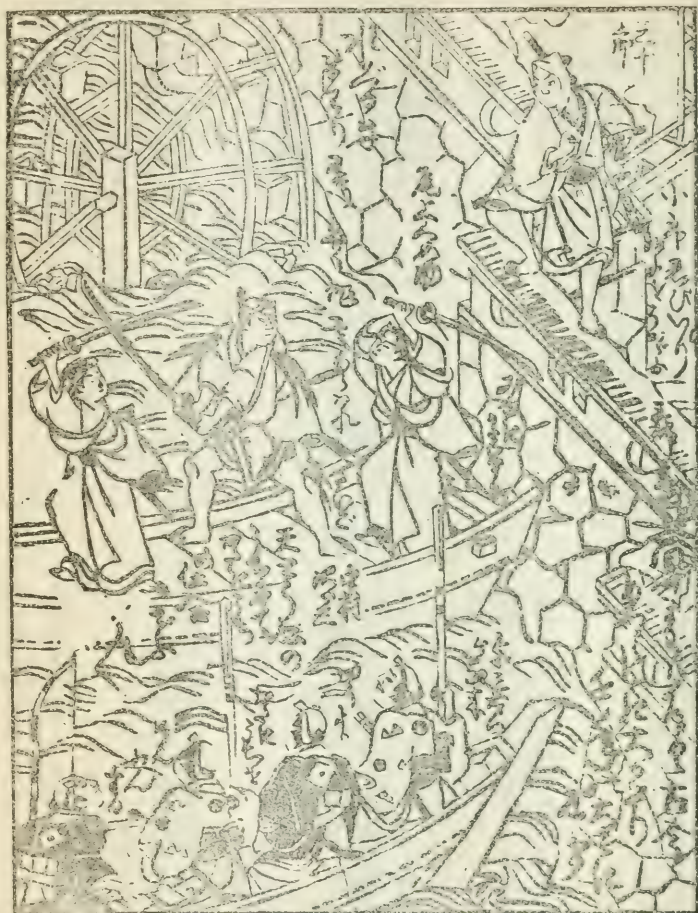
與三　ヤレ待て、遊軒ばかりは掴めうが、辨之作はなんとする。
深雪　なんと。
與三　女房木幡、首尾はもうよい。起きた〳〵。
木幡　與三右衞門どの、首尾ようござりまするか。
深雪　これは。
木幡　みな與三右衞門どのとの相談。
與三　川浦遊軒方に辨之作、匿まひ置く事、草を分つて詮議すれども、知れぬこそ道理、彼の官翁、七十有餘の老人が、人なき所で樣々の氣丈。察するところ、遊軒が家の秘藥、戌の年、戌の月、戌の日、戌の刻に誕生したる女の生血と、血筋の白髮を合せ服ましたに極まつた。
縫之　まつた源八が娘のお松は、行くへも知らぬ浪人が、生膽を取り、殊に親茂治兵衞が白髮まで。
深雪　すりや、その時の浪人は
縫之　辨之作であつたな。
與三　これを消さうには、亥の年、亥の月、亥の日、亥の刻に誕生したる女の生血に猫柳。
深雪　すりや、先刻の喜蝶どのゝ生血を。
與三　犬死でない妹が最期。

三人　追ッつけ知れる辨之作。
與三　急く所でない。心を沈めて來い。
ト皆々入る。唄になる。遊軒出て
遊軒　大抵の奴ではないわいやい。
ト奥より官翁、若い男にて出る。
官翁　悴、さて〳〵、お上にも殊ない御機嫌、只今
遊軒　ヤイ〳〵、うぬがその身振りはなんだ。
官翁　悴、身共が身振りがなんとした。
遊軒　うぬが顏、水鏡で見居らう。
官翁　悴とした事が、さて〳〵なんとした
ト親仁方のせりふにて、手水鉢にて顏を見て
ヤア、こりや遊軒さま、わたしはいつの間に、此やうになりましたなア。
遊軒　最前の茶を、フカ〳〵喫うたゆゑぢやわい。
官翁　與三右衞門が計略に乘つたか。エヽ、こりやマア、どうしたものであらうな。
遊軒　もう、おのれは、この屋敷には置かれぬわい。
官翁　遊軒さま、どうぞ好い思案はあるまいかな。
遊軒　表門は番人あり、幸ひ水車の桐油口。人の見ぬ間に急げ。

官翁　わたしはわたしぢや。お前はなんとなされまする。
遊軒　山が轉げて來ても、勅使の添へ人、花滿一家、與三右衞門が首取つて、追ッつけ行く。人の見ぬ間に急げ。
官翁　ハッ。
ト走り入る。深雪、氣味合ひに出て、遊軒が側へ行く。
遊軒　深雪、わりや、爰へ何しに來た。
深雪　わたしや、お前に逢ひに。
遊軒　なんぢや、身共に逢ひに。ハテ、よく來たな。
深雪　先刻には、憎い奴ぢやと思はしやんせうが、わたしや今では憲法さまの事は、思ひ出した事もない。お前の事ばつかり思うてゐるのに、お前は胴慾ぢやぞえ。但し又わしに、惚れたと云はんしたは、嘘かえ。
遊軒　すりや、憲法への貞心捨て、遊軒が心に從ふか。
深雪　サア、そこが去る者は日々に疎し。
遊軒　如何にも、伽さしてやらう。身が氣に入るやうに、伽はせまい。
深雪　サア、お氣に入るか入るまいかは知らねども、マア、斯う。
ト切りかけるを止めて
遊軒　此やうな伽の仕様では、ちつと間に合はぬ。

深雪　そんなら、斬う。
トまた切りかける。見得よくとまる。縫之助、出てまた切りかける。
遊軒　さて、われも入込んだなア。
縫之　深雪さまの仲人をいたしませう。
遊軒　仲人なれば、幾人でもさしてくれう。
木幡　わたしも仲人いたしませう。
遊軒　幾人でもさせませう。
與三　拙者も、仲人いたしませう。
遊軒　幾人でもさせませう。
深雪　お伽いたしませう。
トまた切りかける。見得あつてとまる。
與三　コリヤ、大内から御沙汰のないうちに、傷つけると家が立たぬぞ。
木幡　心を沈めて、お伽をさしやんせ。
トこれよりタテになる。責め太鼓になり、立廻りあつてとまる。
遊軒　あの責め太鼓は。
與三　さのみ驚ろかつしやる事はない。將監を討つて立退いたる辨之作、今宵水車の樋油口より拔け出るを、源八總角兩人いたし、川の中にて敵討、小舟を以て取卷き、いかな〳〵動かしは仕らんぞ。
遊軒　ナニ、辨之作だ。
ト行かうとする。見得になる。
與三　寄つたら蹴殺すぞ。
動くな。
トこれより道具、舞臺一面に廻る。此うち、皆立廻り。
道具一面の城、前に水車あり、三十石小船數多、皆々、高提灯にて取卷く。眞中に官翁は辨之作、禰袢。源八、禰袢、總角、白無垢にて立廻り。此うち、道具、廻りあり。
また元の屋敷になる。右の見得にて、遊軒を與三右衞門、深雪、木幡、縫之助、取卷き、元へ戻る。向うより小市、御書を持ち出る。道具とまる。
與三　小市か。
小市　ハツ。
與三　首尾は。
小市　御書。

安永元年正月大坂角の芝居上演繪番附

與三　一方を讀み上げい。

ト與三右衞門、小市、兩人にて讀む。

小市　花滿憲法儀は、鎌倉の名代として大内に於ての無禮、狼藉を騷がしたる科に依つて、一家殘らず滅亡す。

與三　然るに吟味を遂げ尋ぬるところに、川浦遊軒が惡心の上、憲法が下女深雪とやらんに戀慕し、御杯も遊軒打ち破りし由、悉く馴れ合ひたる者どもより白狀、憲法に科なき條一決せり。

小市　且つ又、花滿一家紛失の切手差上げし上、淀川上り船の工風、訴へ出でたる功により、昔の所領安堵、加增として、家中人別に三十石つゝ御加增せしめ、日本廻船の要と致すべきものなり。

與三　この度七里半の堤、川中へ築き候ふ事、王城へ近道を付けしは、謀叛の崩しと評定極まり候ふ事。

小市　且つ又川浦遊軒、花滿一家へ下し賜はる間、年來の敵、嬲り殺しに致すべきものなり。

與三　仍つて御書件の如し。

皆々　サア遊軒、遁がれぬ所ぢや、覺悟せい。

トまた見得になる。これより道具、又々廻る。

右の辨之作、源八、總角、タテしてゐる。これより、道具四五遍も、早う廻る。

見得よく右の屋敷の所にて道具とまる。立廻りあつて、遊軒を縫之助、深雪兩人して殺す。橋がゝりより源八、總角走り出る。

縫之　兄者人の敵。

深雪　夫の敵。

兩人　思ひ知つたか。

源八　辨之作も討ちとめました。

與三　出かした〳〵。これより禁庭へ奏聞せん。

ト深雪、縫之助、總角の三人。

三人　これといふも、與三右衞門さまのお庇。

與三　お勅使樣は。

木幡　先達てお歸し申しました。

與三　出かした。敵討は濟んだ、先づこの場はめでたく、お立ち〳〵。

ト打出し。

三十石艠始（終り）

岩井風呂のとみが
懐紙へ紅筆にて
團七の茂兵衛様へと
鳥渡しるせし
號の艶文

宿無團七時雨傘

草稿三幕

寛政二年四月大坂角の芝居上演繪番附

宿無團七時雨傘

口幕

堺魚市の場
芝居前の場

役名——高橋數右衛門。万力市右衛門。角力、十文龍。同、ひな川。同、千間川。親方、權兵衛。堺の大治。岩井風呂治助。茶屋亭主。川九。女郎、お富。團七の茂兵衛。作者、並木正三。

造り物、平舞臺、見付け、奥深く浪の遠見、打寄せ、爰に床几の上に團七茂兵衛、團七縞の帷子、鉢卷にて、肴籠を抱へ、打ち鍵を持つて、魚市を立てゝ居る。平舞臺に魚屋大勢、外に團七の脇に帳付け一人居る。鳴り物にて、幕開く。

茂兵　ヤア、ちやア／＼／＼／＼。

魚六　きりがれん／＼。

茂兵　ちやア／＼、鱸とすみやき八郎ぢや。

魚屋　鰆は北の間ぢやぞ。

茂兵　ちやア／＼／＼。

ト皆々やかましう云うて、値を附けると、茶屋川九出て

川九　さてもやかましい事ぢや。こなたは團七の茂兵衛どのぢやないか。ほんに團七ぢや。

茂兵　オヽ、誰れぢやと思うたら、難波新地の川九か。

川九　川九か。アイヤ、こなたは／＼。

茂兵　サア／＼、マアよいわい。後でどうなりとする。爰は人がある。やかましう云ふな。

川九　イヤ、人のあるが面白い。マア、下りてもらひませう、もらひませう。

ト引下ろし、向うへ出る。

こなさんは、男か、人か、酒飲んで、わつぱすつぱと物云うて、此方の掛けは、いつ拂ふのぢや。どうするのぢやぞいの。

茂兵　サア、よいわいやい。

川九　イヤ、よいぢやないわいの。こなさんは、どこの人ぢややら、おりや知らぬワ。向ひ側の蔦の佐兵衛どのが

連れて來て、これは慥かな客ぢや、してくれいと引合はした。この堺の戎島から、お山を連れて來て居續け。藝子呼んだり、酒飲んだり、どうやら心元ない、嵩が上がると思うたけれど、丸めた商ひはせず、雜用ばかりで、高が十枚か二十枚の、藝子、呼びついでもらへば、事が濟むと思うて居て、一節季も越さずに、もう踏んで足踏みもせず、佐兵衞は、おりや引合はしたばかり、請合ひはせぬ、掛けにやよいものを、分にも叶はぬ錢を使はしてと云うて、逆ねだりする。その上、こなさんは佐兵衞に、錢の借りもあるげな。見付け次第に面剝くと云うて居る。せう事なしに今日來たは、なんであらうと、算用が出來ればよし、さもなくば、剝いで去ぬるのぢや。難波新地の茶屋ぢやと云うて、たゞ家の下に喰はずに居らるゝものぢやないぞや。

茂兵　サア、尤もぢや。大きな聲してくれないやい。おれも如才はない。今日は魚の勘定して、其うちでちつとばかり、どうなとせうと思うて居る。

川九　イヤ、ちつとばかりぢやない。皆取るのぢや。

茂兵　さいやい。渡さゞ剝いだがよい。脫いでやるわいやい。

川九　脫がいで堪るものか。

魚屋　コレ〱、市の邪魔になる。云ふ事があるなら、市しまうて後に云へ。團七、どうぢや。

茂兵　オイ〱……サア〱、後に片付ける程に、後まで待つてたも。

川九　市の邪魔になると云ふに依つて、後まで待つてやる。必らず〱、後までに出來ぬと、打明けに剝ぐぞよ。

茂兵　脫ぐわいやい。

魚屋　團七々々、市、立てぬかい〱。

皆々　どうぢや〱。

茂兵　オイ〱……サ、、後に〱。

ト床几に上がる。

川九　エ、、アタ忌々しい。一遍そこら步いて來う。後ぢやぞや〱。剝ぐぞや。

ト云ひ〱入る。

茂兵　ちやア〱〱〱。

ト橋がゝりより、お富、數右衞門、萬力、親方權兵衞、出て

數右　なんと万力、魚市と云ふものは、賑やかなものではないかい。

萬力　イヤモウ、大坂に居て雜魚場の市は見ましたが、それよりは又、二層倍やかましいものでござります。
權兵　わしは又、佃島に居りまして、常住見て居りますに依つて、なんともござりませぬ。今度、角の芝居が南へ來たのは、お頁向き樣のやうに思うて、見たうござります。
萬力　おいらは大坂者ぢやに依つて、芝居は常住見て居るゆゑ、なんともない。シタガ慶子を見に行かうかい。
數右　イヤナニ万力、あんまり富が、不承々々にして居るに依つて、魚市を見せたら、ちと浮き〳〵せうかと思うて連れて來たが、富、其やうに嫌かいやい。
とみ　何を好い嫌らしう。とてもお山衆を買ふなら、ちつと機嫌のよいお山を、買うたがよいわいなア。アタ好かん。
萬力　コレ〳〵、如何に旦那が結構なと云うて、それはちつと長であらうぞえ。この万力が附いて居るからは、否でも應でも、旦那に抱かれて寐さゝにや置かぬ。
權兵　さうでござります。其やうにしてくれては、親方はなんになるもので。自體われは氣隨な。どうでも虫があるに依つてと思ふゆゑ、仕替へに出さうと思ふところへ、あなたが。
數右　もうその後は云ふな。富、われは色があらうがな。
とみ　イヽエ。
數右　ハテ、隱すな。蟲があらうがな。
とみ　わしが又、色があつたら、どうする氣ぢやえ。
萬力　オヽ、見付け次第に叩き殺す。
とみ　ても、すつぱりと云はんした。オヽ、好かん。早う芝居へなと行きたいわいな。
數右　コリヤ〳〵万力、なんにも云ふな。富が否がる程、惚れる事ぢや。富、色があらうがあるまいが、ぞつこん惚れた。隨分氣隨にせい。おりや又、隨分しつかうする。
　ト抱きつき、嫌らしうする。
とみ　エヽ、つツとモウ、措かんせいなア。芝居見に行かんのかえ。わしや一人行くぞえ。
　ト駈け出すを、抱へ
數右　イヤ、芝居で、此やうに嫌らしうなるものぢやない。嫌がる程猶可愛い。
　トまた抱きつき、いろ〳〵こなし。
茂兵　ちやア〳〵〳〵なんぼ〳〵。

ト市を立つるうち、顔見合す。
とみ　ヤア、お前は。
茂兵　ちやア／＼。
數右　お前はとは。
萬力　お前とは、何がお前ぢや。
とみ　お前は、サア、この月の市は、前の魚賣りはよいと
やら、よう爰に……サア、よう爰に市立てゝ、賑やかな。
わしや大抵嬉しい事ぢやないわいな。
萬力　なんの、それほど魚市が嬉しい事がある。
茂兵　イヤモウ、誰れも魚の顔見ると、嬉しいやうなもの
ぢや。シタガ、コレこの鱚めが太刀魚を一ぜん着いたを
端に着て、鰆のやうに吸ひつき、かぶりつきさらす時に
は、はらがまちをあちらからこちらへ、こづいてこまし
鱧ぢや／＼。サア、ちやア／＼／＼なんぼ／＼。
ト皆々値を附ける。
とみ　なにを。なんぼう太刀の魚が吸ひついても、此方は
北向きの鯰のやうに思うて拗ね廻るに依つて、鮑の貝の
片思ひ。氣遣ひはないわいなア。
茂兵　それでも、赤貝は喰はしたであらう。
とみ　いつかな事。海老の腰の屈むまでと云ひ交したを、
忘れて堪るものか。モ、逢ひたうて／＼。
茂兵　ソレ、そこらあたりに、めばるどもが、鯨に鯱鉾。
とみ　それぢやに依つてツッとモウ、なんにも鯛ぢやわい
なア。
茂兵　寐てからの事は、どうぢややら。
とみ　ムン、氣遣ひさんすな。鰻ほど寐てこます。
茂兵　でも、ほう／＼の金頭で、身請けの料にかゝつた
ら。
とみ　死ぬるぞえ。生き魚ぢやとばし思はぬがよいわいな
ア。
茂兵　ハテ、鰹これ……いかい苦をしあうが、一本殘つた。
數右　ハア、出來た。魚づくしの口合ひ、なか／＼聞き事
であつた、面白かつた。ナア万力。
萬力　たうどう鰒の鱚を見付け出したぞ。
數右　サア／＼、芝居を見に行かう。サア富……富十郎見
せう。おぢや。
とみ　イヽエ、わしやモウ、芝居は否や、爰で遊ぶわいな。
數右　なんぢや、爰で遊ばう。アノ、爰で／＼。爰で
遊びたがる程、おりや芝居が見たいぢや。サア／＼、手

に手を取つて、芝居見に行かう。おぢや〳〵。
とみ　エヽ、意地の悪い事ぢやなア。
權兵　コレ富、たつた今まで、芝居見に行きたいと云うたぢやないか。何思ひ出して芝居が否ぢや。サア、連れまして行きやいなう。
とみ　否ぢや〳〵、否でござんす。
萬力　親方、否な筈ぢや、蟲がけつかる。腹に付いて居る蝶と云ふ蟲が。身代の邪魔になる蟲が爰にけつかる。
數右　ナヽ、蝶であらうが、虫であらうが、構ふ事はない。腐り魚の腹綿を喰うて、鱗のお庇で、頤を養うてけつかつて、アノ大盗人の大ずりめが。
權兵　サア、おぢや〳〵。
とみ　否ぢや〳〵。
茂兵　コレお侍ひ。ちよつと待つてもらひませう。
數右　待てとは、身共が事か。
茂兵　外に侍ひ臭い者もなけりや、こなさんの事でなうて、誰れが事であらうぞいの。あんだらくさい。
數右　うぬ、侍ひに向つて、なんと吐かした。うぬがうぬが。
萬力　サア、ようござりまする。

數右　武士に向つて慮外な奴、いま一言云つて見やれ。手は見せぬ、ぶち放す。
萬力　サア〳〵、ようござります。万力が、よいと云うたら、マア〳〵待たしやりませ。
數右　サ、よいか……よか、よいてや。
萬力　ヤイ、そこな和郎。用があるなら、爰へ下りたがよいわい。
茂兵　下りやうと思うて居るのぢや。忙しない、とんぼうさくぢやわい。
ト下りよと、權兵衞、お富を押へる。數右衞門の向うへ、茂兵衞つくばひ。此うち治助、大治と連れ立ち出て見て居る。
萬力　用とは、なんの用ぢや。
茂兵　いま聞けば、魚の腸を喰うたの、腹の蝶ぢやのと、惡態吐かしたは誰れの事ぢや。
萬數　さアれば。
茂兵　おれが事か。
萬數　さアれば。
茂兵　おれが事ぢやあらうが。あの富と懇ろにしてゐる蟲ぢやと云ふ心で、腹の蝶ぢやと云ふのぢやの……さうか

さうであらう。蟲ぢやと譬かけられて、蟲にならずにも居られまい……下んせ。
數右　何を。
茂兵　富を。
數右　ヤア。
茂兵　今日は、こなんの揚げであらうが、連れで去んで、今夜はおれが内で抱いて寐る程に、さう思うてもらはう。明日、去なしやうが遲くば、晝までの花附けて、金は其方で拂うて置かんせ。よいか。
數右　厚かましい奴ではある。うぬはマア、なんと云ふ奴ぢや。
茂兵　團七の茂兵衞と云ふ者ぢや。なんとした。
萬力　團七の茂兵衞、見知つた。おりや大坂で、万力の市右衞門と云うて、人のよう知つた者ぢや。見知つてもらはうかい。
茂兵　万力の市右衞門……フン、面見知つた。
萬力　その万力の市右衞門が附いて居て、愚圖らしたと云はれては、おれが顏が立たぬ……よばれ口ぢや。團七とやら、富を退いてもらはうかい。
茂兵　さう出さうなものぢや。悲しい事は、此方がざぶぢや。また貴樣が万力ぢやに依つて、否でも應でも貰はにやならぬ。さう思うてもらはう。
萬力　オヽ遣らう。富より先づ先へ、これを遣らう。
ト胸倉を取つて、叩きかゝる。腕首捕へ
茂兵　こんな猪口才すな。
萬力　うぬ、毆つたぞや。
茂兵　オヽ毆つた。
萬力　うぬ。
ト少々立廻りあり、お富、あせるを、權兵衞、捕まへて居る。
數右　もう免されぬ。
ト拔いて切つてかゝる。茂兵衞、程よく留めて
茂兵　コリヤ、片附けるのか。
數右　うぬ、ぶち殺して。
トこれより三人、立廻り。市の者ども、喧嘩々々と喚く。此うち權兵衞、お富を連れて入ると、大勢の魚屋、取さへるを、退け〳〵と云うて騷ぎ、皆々、押し分け、引き分け、進み合うて入る。と跡に茂兵衞一人、殘りて
茂兵　何處へ失せた。富は何處へやつた。大方、芝居の方

へ。
ト行かうとする。大治、治助出て
大治　團七待て。
ト茂兵衛、振り返り、恟りして
茂兵　大治どのか。
大治　團七、また喧嘩するのか。
茂兵　團七、喧嘩しやせぬ。
治助　大治、其方の預けたいと云やるのは、この和郎か。
大治　オヽ、これぢや。
治助　大治、狹うても堺は、天上の靜かな暮らし所ぢや。大坂の道頓堀は、近年淋しいの、なんぢやの彼ぢやのと云うても、物云ひが絶えぬ。それに、この喧嘩師を匿まうて、世話せいか。あつみを子に讓るとやら云ふ譬への節、小博奕も打つ振り形。色事で侍ひや角力取りを相手に取り、暴れ歩くこんな者を、見知り越しに預けて、樂するのか。おりや、ア、怖い。變替へぢや。預からぬ程に、さう思や。
ト床几に腰を掛ける。
茂兵　親仁どの、ありや誰れでえす。
大治　ありや、大坂の島の内で、岩井風呂の治助と云うて、置き屋ぢや。
茂兵　そこへ、おれをやるのか。
大治　マア、智惠付けの爲に、おれが親分へ、廻しやら、何やらにやらにやるのぢや程に、行け。
茂兵　否ぢや。なんの爲に。大坂に行かいでも、相應にして通る。なんの爲に大坂へ行くもので。
大治　ハテ、惡い事は云はぬ。行けやい。
茂兵　否ぢやと云ふのに。
大治　なんでマタ否ぢや。
茂兵　色に離れるに依つて否ぢや。なんと平たいものか。
治助　親分の貴様にさへ、あの挨拶ぢや。連れて去んだら糊着する。マア、おりや否ぢや。とんと否ぢやぞや。
茂兵　否がる所へ、無理に行かいでも、大事ない事の。
大治　一旦行けと云ひ出したら、否であらうが、應であらうが、やらにや置かぬ。行け。
茂兵　そんなら、どうでも。
大治　オヽ、堺の地に置く事ならぬ。
茂兵　措け、行きやせぬ。なんの、さう云ふ水臭い根性な所に、なんの爲に居やう。また肝煎つてもらはいでも、おれが行きたい所へ一人で行く。こりやモウ、おれが身

をホツとして、突出すのぢやの。オヽ、突出しや。人の情も世にある程とやら。もうその時分ぢやあらう。鬱陶しからう。鬱陶しがる所に居いでも大事ない。義理も作法も知らぬ、犬のやうな者の所にや居ぬ……アノ、物知らずめが。

大治　ト云ふと、大治、茂兵衞が胸倉取つて、引きつけ人の情も世にある程とは、おれを見限つて、放すと云ふのぢやの。エヽ、こなたはなう……成り下れば、心まで其やうに下作になるものか。こなたは、おれが三代相恩のお主、湊川の家中に於て、宇田甚五右衞門さまと云ふ、侍ひの御子息の茂兵衞さま。殿樣より預かりの、二字義光の九寸五分を、盜賊に奪ひ取られ、申し譯なくお家は沒落。勘當請けて、おれが所へお出でなされ、だんだんのお頼みゆゑ、おのれやれ盜賊めを引ッ捕へ、再び歸參させませずば置くまいと、人の入込む呼び屋をしたり、置き屋をしたり、戎島で顏を賣つて、角力の頭取までするのは、みな詮議の手掛りにするのぢわいの……それに、こなたはウカウカと、色にばかり性根を取られ、今の喧嘩で、もし侍ひの刀が、こなたに當つて凶事でもあつたら、なんとするのぢや。それでは親御樣、御先祖の人々に立つか。こなたの性根の惡うなつたも、みな色ゆゑぢや。それで大坂へやらうと云ふが誤まりか。心を碎いて居るおれを、犬ぢやとは、よう其やうな事が云はれるなう、どうなとこなたの勝手にさつしやれ。エヽ、胴慾な人ぢやなう。

茂兵　大治……大治どの、さう云へばモウ、何も返す詞がない。けれども、よう思うても見たがよい。其方が親分になつて、肩で風切つてさへ知れぬ九寸五分、大坂へおれ一人行つて、何を目當にせうやうがない。同じ事なら、おりや堺に居たい。今のやうに云うたは若氣……腹が立つなら、拜みます。堪えて下され、コレ親仁どの、堪忍して下さりませ。

大治　なんぞ云ふと人を拜んで、おれに罸當てる氣かいなう。

茂兵　モウモウ、この以後、喧嘩はせぬ。どのやうな目に遭うても、人に相手にならぬと云ふ證據に。

ト矢立にて、左の腕に字を書き、出刃にて切り廻し、墨を入れる。

大治　これは。

茂兵　大勇信士、親仁樣の御戒名。堪忍と云ふ字を入れた

これば、おれが心の誓ひ。

大治　ムン、すりや、その字を見る度に。

茂兵　家の大事、この身の大事、親の事を思ひ出して、踏まれうと叩かれうと、腹を立てぬ、喧嘩せぬと云ふ心の誓言。これで心を晴らしてたも。

大治　若旦那、忝なうござる〳〵。

ト手を取り、泣く。

治助　大治々々。

大治　ヤア、なんぢや。

治助　先刻には變替へしたが、おりや、その茂兵衞どのを預かりたい。

大治　ヤア、なんと云やる。

治助　大治、貴様は聞えぬぞや。これほど懇ろにするやうにもない。さう云ふ事なら、なぜ打割つて云うてたもらぬ。いま聞けば、其方のお主ぢやさうな。さう云ふ事を知つたらば、水臭い愛想づかしを、なんの云はうぞいの。預けてたも、預かつて世話がして見たい。大坂へおこしやらぬかと云ふ事。

茂兵　治助どのとやら、忝なうござりますれど、親仁どのが、大坂へやらうと云はれたも、喧嘩から起つた事、喧嘩さへせねば、別に大坂へ行く事もないやうなものぢや。

ト治助、腰に差して居る九寸五分を抜き放し、見せる。

ヤア、こりやコレ紛失の二字義光。

大治　ヤア、すりや、それに違ひはござりませぬか。

茂兵　違ひない。

大治　よもや貴様が、

治助　サア、盗んだ物なら、こなた衆へ抜いて見せぬ。コレ見やんせと抜いて見せたところが、盗まぬと云ふ慥かな證據。こりや云はいでも知れてある事。

大治　して、これは、どこからどう廻つて、こなさんの手に入りました。

治助　サア、いつも來る刀屋が持つて來て、廉い物と云うて置いて行つたが、その刀屋が夜逃げして、行くへが知れぬ。斯う云へば、どうやらあやの抜けぬものぢや。もし治助かと思ひもさんせうが、マア盗人になつてよくば、なつてやるまいものでもないが、今の話しを聞いて、預かりたいと云ふは、これぢやわいなう。

大治　して、この九寸五分には、二千五百兩と云ふ、折紙がある筈ぢやが、どうしやつた。

治助　大治、わが身も粹方のやうにもない。刀屋から賣りに來るもの、折紙附きを廉う賣るもので。

茂兵　イヤサ、その折紙がなければ、二字義光があつても、歸參する事はならぬ。

治助　サア、そこが詮議でありさうなもの。マア、小口が知れたら、その蔓をたぐつて折紙の詮議、盗賊の詮議も、出來まいものでもないぞや。茂兵衞どの、こなたは大坂へ來る氣はないか。

茂兵　どうぞ大坂へ行きたうござります。世話して下さりませ。

大治　貴樣を男と見かけて頼む。どうぞ世話焼いてたもらぬか。

治助　オヽ、おれが預かつて、大坂へ連れて去んで、世話せうわい。

大治　エヽ、忝ない。治助、これぢや／＼。

治助　これは野暮らしい、なんぢやぞいの……おらが預かつたら、大船に乘つたやうに思や……イヤ、茂兵衞どの、あの色は、堺に殘して置いてござる氣か。

茂兵　ハイモウ、今からでも參ります。

治助　よし／＼、もうよい。色は諸道の妨げと云ふところを、ちよつと押して見たものぢや。必らず、その入れ黒子を忘れまいぞや。九寸五分が好い意見ぢや。間違うては、この刃物は遣りませぬぞや。欲しくば、こなたの身持ち次第ぢや。ナ、合點か。

茂兵　ハテ、この上は、富と顏見合しても、もの申しませぬ。

治助　コレ、云はんすないなう。もの云はぬと云うて、云はずに居る者があらうかいの。こなさんの心で嗜なんだがよいわいの……そして貴樣、どうする氣ぢや。

大治　治助とした事が、貴樣の所には、息子もあり、若い者を、どや／＼置くのも氣の毒なが。

治助　ハテ、どうなとするわいの。

茂兵　ちつと、月代もするによつて、毛剃りにでもやつてもらひましよ。

治助　剃刀持つか。

茂兵　ハイ。

治助　それ幸ひ、太左衞門橋の善太郎に頼んで、床へなりとやらうわい。

大治　そんなら、もう直に連れ立つて去んで下され。

治助　シタガ、角の芝居が爰へ來て居る。團子どのに、ち

よつと用もあり、ちよつと逢つていの。
茂兵　わしも直に、附いて行きやんしよ。
大治　いつそ今日は、見物せうかい。
治助　それもよかろ。サア、おぢや〳〵。
ト行かうとする。數右衞門、萬力、始終を見て居る。兩方より茂兵衞を引立て
萬數　うぬには用がある。うせう。
茂兵　治助さま、親仁どの、もうこれから、どんな事があつても、人に手は觸らぬと云ふは、これが證據ぢや。
萬數　ハテ、うせいと云ふに。
大治　それでこそ團七、男ぢや。
治助　出來ました。そろ〳〵行きませう。
ト治助は數右衞門を取つて投げ、大治は萬力を投げる。と後に二人、と唄になり、三人、そろ〳〵向うへ入る。
顏見合せ
萬力　お前はマア、侍ひに似合はぬ、投げらるゝと云ふ事があるものか。
數右　身は武士だに依つて、投げられても大事ないが、おのれはなんぢや、角力取りではないか。それに、なぜ蹴倒された。

萬力　どこにおれが投げられた。
數右　投げられはせぬか。
萬力　それはさうと、今の二字義光の事を聞かんしたか。
數右　思ひがけない。すりや、彼奴が、甚五右衞門が悴茂兵衞め。
萬力　こりや、思案せざなりますまい。
數右　芝居の方へ失せたに極まつた。
萬力　茂兵衞めが、大坂へ失せたれば、富は此方の自由。
數右　万力、來い。
ト向うへ走り入る。返し
造り物、平舞臺。芝居の表。水引き幕。吊り枝。一枚看板、書看板の書割り、眞中、鼠木戸、人の出入りあり。シヤギリにて道具納まる。
ト鼠木戸より大治、治助、茂兵衞、後より芝居頭取組右衞門、着附け、羽織にて、送り出る。
大治　せめて一切り、見て去んだがよいわいの。
治助　イヤ〳〵、よう思へば日足がたける。早う去んで、仕掛けた事もあり、それと、大坂でなんぼも見た狂言ぢや。

頭取　さうでござります。追ッつけ大坂で、盆替りの狂言を見せませう。
大治　わしもモウ、去ならうわい。
茂兵　去なしやるか。内へ心得て下さんせ。
大治　隨分、健で居たがよい。治助、頼んだぞや。
治助　氣遣ひしやんな。ちと大坂へ出ておぢや。
大治　オイ〳〵、頭取さん、役者衆に心得て下んせ。
頭取　ハイ〳〵、角力の時分には見に參りませう。
大治　なにを。色で暇があるものか。
頭取　ハヽヽヽヽ。
ト別れ、大治、去ぬる。頭取、内へ入る。
治助　茂兵衛、マア當分、人の噂を聞き合すまで、床の毛剃りに行たり、また町も手傳うたりしたがよからう。
茂兵　わしも、さう思うて居りまする。
ト云ふうち、お富走り出て
とみ　茂兵衛さん、今お前の顏を見たに依つて、脱けて來た。コレ、どうもならぬ事があるわいな。あの侍ひが、わしを身請けせうと云ふわいな。
茂兵　なんぢや、侍ひが身請けする。
とみ　アイナア。
茂兵　それが、どう抛つて置かれるもので。
ト行かうとする。治助、咳拂ひする。と茂兵衛、チツと素知らぬ顏する。
とみ　思案して下さんせ。この身請けが埒明くと、わしや死ぬるぞえ。お前も云はしやんした事もあり、二人の命の瀬戸ぢや。どうぞ好い思案して下さんせいなア。
茂兵　イヤ申し、治助さん、今日は、魚市の勘定でござります。抛つて置いては、帳が邪魔になります。ちよつと事譯云うて、引合して渡して參ります。
治助　茂兵衛、岩井風呂が大治に、しつかりと預かつた其方。よもや顏の潰れるやうな事はしやるまい。それとも……これに替へて、生臭物に打ちかゝる氣なら、せう事がない。コリヤ、鰹搔きにしてしまふ分の事ぢや。
茂兵　滅相な事。色は色、そんな不埒な者でもござりませぬ。
治助　イヤモウ、おりやどうなりと元々ぢや。マア、男づくを見たものぢや。
とみ　コレ茂兵衛さん、思案して下さんせいなア。
ト此うち數右衛門、萬力、權兵衛、出て
數右　思案も瓢簞もいらぬ。身請けして、身共か女房にす

る。

とみ　アタ嫌らしい、聞きとむない、嫌ぢやわいなア。

萬力　團七の茂兵衛と云ふ蟲が、大坂へ行くと宮家の女郎。例へ離れいでも、無理に離して旦那にせしめさすのぢや。

数右　身が請け出すに、ぐつとも云ひ分はあるまい。

權兵　三百兩に極めて、年季證文まで持つて來たのぢや。どなたも邪魔してもらひますまい。

治助　權兵衛どのぢやないか。

權兵　オ、、誰れかと思うたら、治助どのか。

治助　暑い事なう。この間、仕替へと云うて來たのは、この奉公人ぢやの。

權兵　オイノ、これでごんす。モウ〳〵、手にも足にもおへるものぢやない。仕替へに出さうと、相談にやつたけれども、幸ひこのお侍ひ様が、身請けせうとの事。それで、お侍ひ様の方へやる。さう思うて下んせ。

治助　目と鼻の間で金儲けする、貴様は肩のよい人ぢやわいなう。

数右　オ、、目の前で身請けする。万力、金渡せ。

萬力　ハイ。いま富を、旦那が身請けなさる。何奴も此奴も、云ひ分はないか……ドレ、金渡さうか。

ト金入れの財布、眞紅の袱紗を取出し

ソレ金、受取れ。

ト渡す。權兵衛、受取り

權兵　ハイ〳〵、こりや、いかう嵩が高うござりまするが。

数右　みだけ小判で四百兩ほどある。皆受取つて置け。

權兵　アノ、皆下さりまするか。

数右　女郎の身請けに、何程の斯程のと、値をする事もない。借銭ぐるめに請け込んで、さつぱりと濟ましてやれサ。

權兵　こりやマア、夢ではないか。こんな大氣な身請けは見た事はない。さらば年季證文、お渡し申します。

ト渡す。数右衛門、喜び、受取る。

治助　茂兵衛、早う勘定しておぢやらぬか。

茂兵　ハイ……富……斯う云ふ仕儀になつては、もう叶はぬ。

とみ　アイ、わしや覺悟極めて居ります。

茂兵　イ、ヤ、おりや大坂へ行て、稼いで見る氣ぢや。

とみ　エ、。

茂兵　爰に居やしやるは島の内で、岩井風呂の治助さまと云ふ置き屋ぢや。大治どのが世話で大坂へ行く……今まで、なんのかのと約束した事もあれど、マア、縁があらばと云ふやうなものぢや。さう思うてたも。
とみ　エヽ、そりや何云はんすぞいな……降つて湧いたと云はうか。そんならわしは、これぎりにするのかえ。
茂兵　マア、これぎりと云へばこれぎり。命があらば、また逢ふ事もあらうと云ふものぢや。
とみ　イエ〳〵、滅相な。それでは濟まぬ。生きるとも死ぬるとも一緒ぢやと、云ひ交して置きながら、イヤ〳〵、なんぼでも離れやせぬ。大坂へ行く氣なら、わしを先へ殺して置いてから行かしやんせ。どつこへもやる事は、ならぬ〳〵。
　ト縋りつき、泣く。茂兵衞、いろ〳〵思ひ入れ。
治助　茂兵衞、日がたけるが、行く所へちやつと行て來ぬかいなう。
茂兵　いま行て參ります。
とみ　イヤ〳〵、なんぼうでも、ならぬ〳〵。
　ト止める。
茂兵　ハテサテ。

　ト振り切り、入ると、お富、附いて行かうとする。數右衞門止め
數右　コリヤ、身請けした女房、此方へ寄つて居い。
とみ　そんならモウ、わしが嫌になつて退くのぢやなア。
　ト數右衞門が刀を拔き、死なうとする。
數右　どつこい、殺して詰まるものかい。
權兵　金取つたらお前の物ぢや。しつかりと止めさつしやりませ。
　ト此うち芝居の內、バタ〳〵として
頭取　表口から合點がゆかぬ。詮議せい〳〵。
木戸　合點ぢや〳〵。
　ト頭取、木戸番、皆々走り出る。
治助　頭取さん、いから騷がしいが、暴れ者でもあるか。
頭取　イヤ、大抵の事ぢやござりませぬ。三段目に、慶子さんが使はしやる、みだけ小判が四百兩、勘合の印を盜まれましたわいの。
治助　ヤア、そりや惣嫁の時に使ふ小判ぢやの。
頭取　サア、その小判は念入れて、飾り屋で一兩を五分宛で拵らへさせた。太夫元からやかましう云ふ、表は御存じの堅庄なり、迷惑する者は、わし一人でござります。そ

れと、あの軍勢催促の勘合の印がなければ、四段目の狂言する事がなりませぬ。歌右衛門さんが、えら怒りぢや。それでモウ、楽屋に変ぜ返します。

治助　ムウ、符合の印は、赤い金入りの袱紗に、眞紅の房が附いてあつたかえ。

頭取　アイ、眞紅の房で、くる〳〵巻いてござります。

治助　アノ、金入りの袋に。

頭取　アイ。

治助　ハテナア。

ト治助、額で数右衛門を数ゆると、数右衛門、萬力と顔見合せ、術なきこなし、いろ〳〵思ひ入れ。

頭取　先刻に、侍ひが小道具部屋を、うそ〳〵して居たが、どうやら呑み込めぬ。オヽ、爰に居やしやるワ……コレお侍ひ、お前は、先刻に小道具を。

数右　なんぢや〳〵。身は武士だぞ。武士に向つて、何をほざくのぢや。

頭取　でも、お前、先刻に。

萬力　コレ〳〵頭取、お侍ひ様は、おれが旦那衆でえす。芝居の小道具を取つて、なんにするもので。鈍な事云やると、すこたんめぐぞよ。

数右　オヽ、さうぢや〳〵。

頭取　万力さん、なんぼう、さう仰しやつても、此方も商賣の消しとむないにや替へられぬ。詮議せにやなりませぬ。

木戸　待て〳〵。爰に居る奴が持つて居る、この房は金入りぢや。

頭取　ドレ〳〵、オヽ、これが勘合の印ぢや。此奴が盗んだのぢや。ぶちのめせ〳〵。

権兵　ア、コレ〳〵、これは、たつた今、そのお二人の衆から、女郎の身請け……眞鍮の小判かえ。

木戸　どこへ身請け。眞鍮の小判で身請けがなるものか。

権兵　ほんに眞鍮ぢや。

頭取　そりやこそ、勘合の印も入つてあるワ。大盗人ぢや。三人とも、ぶちのめせ〳〵。

ト三人を叩きつけると、芝居の内、唄を唄ふ。幕切りの拍子木、チョン〳〵。見物、褒める聲する。

頭取　待て〳〵。憎い奴ぢやが、もう幕が詰まつた。ちやつとこの金を、慶子さんに見せにやならぬ。勘合の印も太夫元へ渡さう。

木戸　エヽ、彼奴等をマア。

頭取　ハテ、よいわいやい。
　ト云ひ〳〵、皆芝居の内へ入る。
權兵　ヤレ、怖や〳〵。すんでの事に、盜人の同類になら
　うとした。マア、この證文は此方へせうわい。
　ト引たくる。
萬力　それは。
權兵　それはとは、大事の奉公人を、勘合の印で身請けせ
　うとは、万力どの、みす〳〵な事、よう云はしやるな
　う。あんまりで物が云はれぬ。サア、富、おぢや。
とみ　イヤ〳〵、待つて下さんせ。茂兵衛さんに逢うて譯
　立てにや、ならぬ〳〵。
權兵　ハテ、戻れと云ふのに。
治助　コレ〳〵、權兵衛どん、いつそその奉公人、仕替へ
　に取らうかい。
權兵　それは忝ない。勘合の印で身請けせらるゝ時節ぢ
　や。なんぼうなりとも、いつそ切り出さう。
治助　すつかりと年切り百兩。
權兵　オッと、よいワ。呑み込んだぞ。
治助　貰うたぞよ。
權兵　遣つたぞよ。
兩人　ヨイ〳〵。
　ト指にて手を打つ。
治助　富、わが身を此方へ入れ込むが、コレ、榮耀には置
　かぬが、商賣ぢやが、なんと、すつぱりと勤めてたも。
とみ　わたしや妾を放れて、外へ行く事は。
治助　ならぬ譯も知つて居る。コレ、茂兵衛はおれが預か
　つて、大坂へ連れて去ぬるぞや……それぢやに依つて、
　大坂へおぢやらぬかと云ふのぢや。
とみ　そんなら。
治助　サアマア、大坂者のする事は、不粹かも知らぬが。
とみ　始終の譯を知つて、お前さんがわたしを。
治助　サア、斯う云ふ勤めの中にも、樂しみならでは勤ま
　らぬと、近松が云うた通りぢや。大坂へおぢやつたら、
　おもくろい事もありさうなもの。そこを見込んで呑み込
　むも、商ひがしてもらひたさ。
とみ　心得ました。わたしが根の續くだけ、日柄の上の物
　前も隨分。
治助　もうよい〳〵。コレ、衣裳は張り込む。頭の道具も、
　大源の女と張合ふ程にする。さう思や。
　ト芝居の内より並木正三、出る。

正三　もう去にまする。
　ト云ひ〳〵出る。
木戸　まそつと御見物なさりませぬか。
正三　イヤ、まだ内に待つて居ます。
手代　そんなら、お歸りなされまするか。ようお出で。
　ト手代、木戸、送り出し、直ぐ入ると、正三、治助を見て
正三　オヽ、これは治助どのではないか。
治助　オヽ、並木正三さま、爰へお出でなされますなら、お供いたしませうもの。
正三　アヽ、貴樣の爰へお出での樣子は、廻しの久七に聞いた。わしも用事は多いし、忙しければ、角の芝居の世話して居るに依つて、盆替りの狂言の請合ひと、表方に取る金があつて來たが、狂言も大方片付いた。金も百兩持つて、やう〳〵と今去ぬるところぢや。
治助　お前も御用の多いに、いろ〳〵のお世話なされまする。
正三　サア、うぶからの野郎ぢやによつて、野郎の方は、どうでも好きぢや。作者も面白いものぢやが、時々ひどうむづかしうごんすてや。イヤモウ、わしや去にます。後から靜かに。
治助　もう、お歸りなされまするか。然らばお靜かにお出でなさりませ。
　ト正三、向うへ行かうとする。
アイヤ、申し正三さま、ちつとお待ち下さりませ。
正三　なんぞ用がごんすか。
治助　申し、その今仰しやつた百兩は、持つてござりまするか。
正三　持つて居る〳〵。
治助　近頃御無心ながら、お貸しなされて下さりませぬか。
正三　なんぼ程。
治助　百兩。
正三　皆か。
治助　ハイ。
正三　ムウ、岩井風呂の治助と云うて、達引がよいと云うて、皆立てるげな。同じ町内の事なり、貸しは貸すが、此方も急にいるぞや。
治助　イヤモウ、大坂へ歸りましたら、直ぐにお戻し申しまする。

正三　して、この金は、なんにさつしやる。
治助　急な奉公人を取りましてござりまする。
正三　急な奉公人とは。
治助　ハイ、親方もそこに居られます。とんと年四年一ケ月と、そこら殘つて百兩。ちつと譯があつて、途中で何もかもしまはねば、ならぬ張合ひづくでござりまする。
正三　よし、呑み込んだ。マア、達引もよし、笑ひ顔がよい。奉公人が氣に入つた。ソレ百兩。
ト渡す。
治助　これは早速、忝なうござります。
正三　ア丶、よい奉公人ぢや。これは繁昌しませう。代物はグッと上ぢや。コレ、百兩貸した代りに、この奉公人が當つたら、大庄で立てさすぞや。
治助　それは立てませいで。
正三　名は、なんと云ふの。
治助　富と申しまする。
正三　なんぢや、富、富……こりや、當りませう。富、出やつたら、三切れ張り込まざなるまい。コレ、知つた顔おやとて、振る事はならぬぞや。
治助　權兵衞どの、ソレ百兩。

權兵　忝ない。シタガ、黑犬に嚙まれた後ぢや。また眞鍮ぢやないか、改めて見よう。
正三　そりや、なぜに。
治助　イヤ、小判に懲りて居られます。たつた今も勘合の印で、身請けをしられうとして。
正三　ハア丶、今の先藥屋で、金が見えぬと云うて居たが。
ト皆々、數右衞門を指さし、數右衞門、萬力、術なることなし。
治正　ハ丶丶丶。
權兵　こりやほんの小判ぢや。ほんの小判と云ふものは、有り難いものぢや。受取りの代りに、年季手形、こなたに渡しまする。
治助　それには及ばぬけれど、證文の出來るまで、此方で取つて置かう。
ト紙入れへ入れて
コレ富、こんな事と云ふものは、皆達引と心意氣でする事ぢや。この紙入れは其方に渡す。
とみ　アノ、この紙入れを。
治助　この紙入れの中には、其方の年季證文、金も少し入

つてある。年季證文のあるに依つて、もう逃げても走つても大事ないと云ふやうな氣が、微塵でもあつては、使うてからが役に立たぬ。どこやらの男も、色にかゝつて走る根性では、大事の世話が無足になる。振り捨てゝ大坂へ行かうと云ふのも、云ふに云はれぬ譯がある。惡い氣ぢやないぞや。其方も勤め大事に、金儲けしてくれるのも、そこに斯うぢやと思ふ事があるゆゑに依つてぢや。云はず語らず。ナウ、つゞまるところは大坂で譯も知れう。心意氣づくで、その紙入れを預けるのは、其方の心が見たいのぢや。

とみ　成る程、慥かに預かりましてござんす。

權兵　そんなら、連れ立つて去んで、請け人、呼びにやらうかい。

治助　さうせう。

正三　おりやモウ、去にましよ。

治助　お支度はようござりまするか。

正三　たつた今樂屋で、雜用喰うて來ました。

治助　大込みで、旨うござりませう。

正三　飯は旨いが、汁は辛うござる。

治助　そんなら、そこまで送りませう……權兵衞どの、富を連れて、そろ／＼行つて下され。

權兵　肝煎りの所は、この横町ぢや。サア、富、おぢや。

正三　送らいでも大事ないわいの。

治助　そこまで參りませう。

正三　これは／＼、ハテよい所で逢ひましたなう。

治助　左やうでござりまする。

ト云ひ／＼、兩方へ入る。合ひ方、メリヤスになる。跡に數右衞門、萬力、思ひ入れして

數右　万力、こりやどうせうぞ。

萬力　とんと、一も取らず二も取らずと云ふものになつた。

ト數右衞門、尻からげして行かうとする。萬力、止めて

萬力　コリヤ、こなさん、どこへ行かんす。

數右　いつそしくじり次手に、富を引ッかたげ、立退くサ。

萬力　惡い／＼。引ッ捕まへられて、死なずがいた目に遭ふものぢや。

數右　なんとしたものであらうぞ。

萬力　高が、富が行く先は知れてあり、どうなりと目論見

は出來る。せう事はないてや。

數右　納めない〳〵。そればかりでない、二字義光の九寸五分を持つて居るゆゑ、おれは夜が寐られぬ。

　ト云ふ所へ、治助戻り、様子を聞き居る。

萬力　サア、おれもあの二字義光を、岩井風呂めが持つて居るので、肝が潰れた。

數右　甚五右衞門に意趣あるゆゑに、其方に頼み、二字義光を盗ませたに依つて、たうとう家は潰れる。悴茂兵衞に九寸五分を持たせ、歸參さすと吐かすからは、盜賊の詮議もなけにや叶はぬ。

萬力　サア、そこぢやて。例へ二字義光を持つて居ても、二千五百兩の折紙がなけにや、國へ持つて行く事ならぬ。その折紙、持つてござりますか。

數右　オヽ、肌身離さず。

　ト懷中より出して見せる。

萬力　マア、これで錠は下りてあるワ。一目論見、目論見たいものぢやが。

　ト治助、出て、折紙を取らうとする。數右衞門、ちやつと引ッたくり、萬力、立廻りにて止める。三人、キッとなる。

數右　治助、わりや今のを聞いたか。

治助　こちらの耳から、こちらの耳へ、拔け通つた。

數右　百年目ぢや。

萬力　いつそ引裂いてしまはしやれ。

數右　合點ぢや。

治助　ア、コレ〳〵。

萬力　治助、あの折紙が引裂かれるが嫌なら、富を數右衞門さまへ上げませい。

數右　身が女房に富をくれて、茂兵衞めが手を切り、證文取つておこせ。それが嫌なら、これ引裂いて。

治助　待つた、待たうぞ。

數右　女房におこすか。

治助　サア。

萬力　證文書かすか。

治助　サア。

數右　引裂かうか。

三人　サア〳〵〳〵。

數萬　どうぢや。

治助　ホイ、是非に及ばぬ。どうで今度はおれが本心、ぶちまいて聞かさにやならぬ。マア、よい〳〵、その折紙

數右　其方へ納めて置かんせ。
治助　さうなきやならぬ。
　　ト懷中へ入れる。
萬力　如何にも、富と茂兵衞を、さつぱり切らして、證文取つてやらう。
治助　云ふないやい。その緣を切らうと云ふも、持つて居る物を、してやらう爲であらうがな。
萬力　おれがどん底を打明かさう……二字義光がある上にその折紙をしてやりなば、一廉の金儲けと、間の慾心起り、あの茂兵衞めや富にまで、情らしう見せるのは、みな立身がしたさゆゑぢや。今時に達引ぢやの男づくぢやのと、損のゆく出入りするたわけがあらうかい。マア、よう思うて見たがよいわいの。
數右　さう云へば、どうやら尤もらしい。
萬力　治助、われが云ふが誠ならば、富と茂兵衞が仲を、引裂くやうにするぢやまで。
數右　引裂く段ぢやない。大きい金になる九寸五分、おれが工面で、二人の奴等を追ひ退けるやうにして見せう。
治助　面白い。二人の奴等を引分け、富を身が手に入れたらば、この折紙を渡してくれう。微塵でも二人の奴等を庇ふか、おれが心に合點のゆかぬ事が、卵の毛で突いた程でもあるが最後、折紙は引裂くぞよ。
數右　そりや勝手次第、
治助　必らず番うたぞよ。
數萬　トこの以前より廻し男久七、聞いて居る。
久七　その目代には、この久七。
治助　わりや、いつの間に來た。
久七　みな口論んで、國で盜んだ九寸五分を、刀屋に賣らしたのは親分……科をこなんに塗りつけう爲、わしが思ひつきぢや。これも主を大事と思ふゆゑ。
治助　ハテ、深切な事の。
久七　これから内の立振舞ひ、おれと蔦の佐兵衞が見る目嗅ぐ、ある事ない事一々に數右衞門さまへ注進する。
治助　さう思はんせ。
數右　いつちよい目代ぢや。これで心がさつぱりとする。
治助　細工は流々、仕上げを見やしやれ。
數右　まだ云ひ合す事もあり
治助　おれも談合がある。万力、ござれ。
萬力　行かう。コリヤ久七、わりや跡に殘つて、コリヤ、ナ。

ト囁く。

久七　合點ぢや。呑み込んで居る。

數右　サア、二人ともに

治萬　ヤア、ござりませ。

ト三人、入る。と久七、跡に殘り居ると、芝居果てにて、見物、ドヤ／＼と出る。中に角力取り三人、出ると、呼びとめる。

久七　わいら、芝居見に來たか。

十文　久七か、逢はぬな。

久七　オヽ、さうしてわいら、何好よい事もないか。

ひな　ない／＼。

久七　イヤ、あるて。コリヤ、わいらに、金儲けさすワ。

三人　金儲けとは耳寄りぢや。なんぢや／＼。

久七　話して聞かさう。あの万力知つて知るか。

十文　イヤ、名は聞いて居るけれど、近年角力を止めたげなに依つて、顏は知らぬ。ナア、わいら。

二人　オヽ、おいらも見知らぬ。

久七　その万力の親方に、數右衛門どのと云ふ侍ひがある。その人が隠れて居らるゝ、富と云ふお山に、團七の茂兵衛と云ふ奴が、蟲で邪魔になる。まだ外に、此奴を生けて置くと、大きなぼくのある事があるゆゑ、その茂兵衛を消して欲しい。それを消してくれると、諸事は万力が呑み込んで、侍ひ衆の方から金が出るワ。それをわいらに分けてやるのぢや。

三人　そりや巧い。如何にも團七の茂兵衛、聞き及んで居る。其奴をしまひさへすればよいか。

久七　オヽ、おりや直ぐに去なにやならぬ。諸事は万力が呑み込んで居る程に、茂兵衛めをしまうたりや、万力が金親ぢや程に、万力にも氣に入つて、これから金貰ふやうにせい。

十文　そりや巧いワ。併し、おいらは根ツから顏を知らぬさかいで、とんと雲闇ぢやが、どんな面な奴ぢや。

久七　二人ながら、顏を知らぬか。

二人　根ツから知らぬ。

久七　そいつは詰まらぬわい……オヽ、そしたら斯うせい。帷子で知れ。團七が着て居るのは、團七縞と云ふ、赤い大きな竪横縞ぢや。

ひな　エヽ、團七の茂兵衛めと云ふ奴は、團七縞か。

久七　オヽ、彼奴が外に、その帷子着た者はない。

十文　よし／＼、さうして、その万力どのは、どんな和郎

ぢや。
久七　万力どのは、これは藍の二重格子の帷子着て居るが
さうぢや。
十文　そんなら、万力どのは藍の二重格子の帷子、團七の
茂兵衞めは、團七縞ぢやの。わいら、よう覺えて居い
よ。
二人　合點ぢや。
久七　おりや去ぬる程に、見付け次第に、直ぐにやつてし
まへ。
三人　呑み込んだ。
久七　首尾よういたら、大坂へ逃げつて來い。ヤレ、世話
やの／＼。
ト花道へ入る。
ひな　コリヤ、わいら、隨分ぬかるなよ。團七縞着た奴が
茂兵衞ぢや。
十文　それよりは、藍の二重格子に逢うて、先へ金が貰ひ
たいわい。
千間　何を吐かすやら、團七縞さへしまうたら金儲けぢや。
わいらも隨分目を配れ。サア／＼、來い來い。
ト皆々入る。唄になる、後バタ／＼にて、お富、走り
出る。後より萬力、駈け來り、お富を捕へる。
萬力　してやつた。
とみ　こりや、なんとするのぢやぞいの。
萬力　なんとするとは、其方を尋ねて居たのぢや。われが
先刻に、治助に預かつた紙入れには、年季證文と、ちと
ばかり金もあるぢやあらう。それを此方へおこせ。
とみ　滅相な。側へ寄りくさつたら、きく事ぢやないぞ
や。
萬力　きくのきかぬのと、面倒な。
ト懷中より紙入れを引出し
これを此方へおこせ。
とみ　イヤ／＼、さうはならぬ。
トせり合ふうち、草井戸の内へ取落す。
萬力　南無三方、井戸へ落し居つた。
とみ　大事の紙入れ、井戸へ落した。治助さん／＼。
ト云ひ／＼入る。
萬力　ア、コレ、取つてやる／＼。やかましい衒妻めぢや。
よいワ、濡れても水ぢや。證文は證文、金が沈まねばよ
いが。
ト云ひ／＼裸になり、井戸へ入る。

川九　おぢやいなら／＼。
　ト茂兵衛を引摺り出る。
茂兵　サア／＼、其やうにする事はないわい。
川九　よう後に遣らうと、ぬつぺりこつぺり騙したなア。十八貫目七百廿四文、難波新地の拂ひかけた錢も取らぬ。渡せ。
茂兵　さう云うたとて、無いものはどうも。
川九　無いで濟むかいやい／＼。
　ト頰かまちを毆る。
茂兵　うぬ、毆つたぞよ。
川九　オヽ、われは強し。おりや弱い。死身になつて掛け乞ふのぢやが、その面がまちはなんぢや。その目玉はなんぢや。わりや、おれを殺すか。オヽ、怖々。錢拂うて置いて殺せ。大騙りめ。
　ト蹴飛ばす。茂兵衛、思ひ入れあつて
茂兵　おのれは運のよい奴ぢや。昨夜か、今朝なら、直ぐにいがめて、息の根を止めるけれど、ちつと仔細があつて、どのやうにしても手向ひもせぬ。どうなと腹の癒るやうに、勝手次第にせい。手向ひはせぬ。
川九　イヤ、してもらひたいな。十八貫目の上へ、茶屋の拂ひさへ、よらせぬ形をして、手向ひがなるかならぬか、なるならして見いやい。コリヤ茂兵衛よ、おのりや、此方の内で呑んだり、肴喰うたり、この頰桁へ喰うたか、但し、此方の頰桁へ喰うたか。
　ト茂兵衛を、いろ／＼打擲する。
茂兵　イヤモウ、どうさつしやつたとて、借りたが不肖ぢや。どうなりと腹の癒るやうにしや。
川九　オヽ、せいでかい。
　ト茂兵衛の帶を解いて着物を脫がす。
茂兵　どうなりと／＼。
川九　十八貫目の抵當に、これを剝いでこますが、當分の蟲養ひ。
茂兵　どうなりと／＼、どのやうにさつしやつても、手ざしはせぬと云うてからは、ちつとも手ざしはせぬ。其やうに利强う云ふたものぢやない。
川九　何が利强い。十八貫目七百廿四文のところへ、帷子一枚取つてこますが、なんで利强い。アノ大盜人めが。
　トさん／＼に苛なみ、帶と着物を持つて入る。
茂兵　うぬマア、裸では去なれず。こりやマア、どうしたものであらう。

ト思案のうち、お富、走り出て
とみ　ヤア、茂兵衞さん、爰に居やしやんしたか。方々尋ねて居たわいな。
茂兵　富か。
とみ　お前のこの形は。
茂兵　新地の川九が來て、剝いで去んだ。
とみ　滅相な、裸で濟むかいな。
茂兵　濟まいでも、着る物がないもの。
ト お富、最前萬力が脫ぎ捨て置いた帷子を見て
とみ　幸ひ、好い物がある。これ着やしやんせいなア。
ト帷子を着せ、帶さす。
茂兵　富、おれが先刻、其方に云うた事、だん／＼仔細のある事ぢや。
とみ　その樣子も聞いたわいなア。コレ、わしや島の內の岩井風呂へ、仕替へに行くぞえ。
茂兵　ヤア、なんと云ふ。
とみ　イヽエイナア、岩井風呂へ仕替へに行く。もう極まつたわいなア。
茂兵　そりやマア、ほんの事か／＼。
とみ　なんの、噓を吐かうでなア。金も渡してゞあつたわいなア。
茂兵　そんなら斯うぢや。行たらば。
ト お富に囁くと、治助出て
治助　二人とも、なに話しする。
茂兵　エヽ。
ト悔りして、兩方へ退く。
治助　茂兵衞、約束が違ふと、コリヤ、鰹搔きぢやぞ。
ト匕首を見せる。
茂兵　心得ました。
治助　帳場の仕切りは、まだか。
茂兵　もう一遍引合すばかり。
治助　早うしまうておぢや。
茂兵　行て參じます。
ト入る。
治助　そんなら先へ去ぬるぞや。
とみ　コレ、茂兵衞さん。
ト行かうとするを、止めて
治助　ハテサテ、やがて茂兵衞も、大坂へ來るわいやい。
とみ　アイ／＼。申し旦那さん、ひよんな事がござんす。大事の／＼紙入れを、あの井戶へ。

治助　落しても大事ない。
とみ　大事ないとはえ。
治助　誠の證文は爰にある。
　ト懐中より取出し、見せる。
とみ　エヽ。
治助　奉公人の氣を引いて見る、これがほんの、根ざらへと云ふものぢや。
　ト治助、お富、井戸を覗き
いかいたわけの……富、來い。
とみ　アイ。
　ト向うへ手を引いて入ると、唄になり、井戸より萬力紙入れを口に啣へ、ヌッと上がり
萬力　井戸替へは、さうなかつたか、さても寒い事ぢや。シタガ、ズッシリと重たい。十兩ばかり在しますと覺えたり。
　ト押戴き〳〵
何より、證文は數右衞門さまへ上げまして。
　ト紙入れを開けると、瓦の割れ出る。中をいろ〳〵探し、證文らしき紙を出し、見て
ヤ、こりや竹田の番付ぢや。治助めが、こりや一番やりあがつたな……エヽ、忌々しい。いろ〳〵の事に寒い日する。おれが脱いで置いた帷子が。
　トいろ〳〵探す所へ、川九、茂兵兵の帷子と帶を肩にかけ、出る。
川九　これは〳〵、萬力さんぢやないか。
萬力　川九か。
川九　その形はなんぢや。
萬力　そこらに、おれが帷子はないか、見てくれ。
川九　イヽヤ、ないぞや。
萬力　爰にあつたが、面妖な。
　トいろ〳〵搜しても無きゆゑ
川九、われが持つてゐる帷子、おれに貸してくれ。
川九　滅相な。こりや金の抵當に取つたのぢや。
萬力　なんであらうと、貸してくれ。
川九　でも、これをお前に貸すと、汗だらけになつて、値打が下がる。よしにせう〳〵。
萬力　エヽ、穢ない奴ぢや。
　ト引ッたくり、着る。
川九　これは、迷惑。
萬力　おれが借りた代りに、明日こんな帷子、五つも六つ

も持つて行て遣る。
川九　そんならモウ、わたしは歸りまする。コレ萬力さん、明日帷子五つ持つてお出でえ。ほんまに持つてお出でえ。
萬力　やかましう云ふな。明日、立てに行くワ。
川九　必らず明日、持つてお出でや。待つて居るぞや。
ト云ひ〳〵入る。
萬力　どうやら見たやうた縞ぢやが。
ト奚へバタ〳〵にて茂兵衞、出て
茂兵　治助さん〳〵、これはしたり。先へ去なれたかしらぬ。どうぞ富に逢ひたいものぢやが。
萬力　オヽ、うぬが居ては、何やかや邪魔になるよつて、いつそ。
ト割り木にて叩きかゝるを、止めて
茂兵　人に手向ひはせぬと誓言立てたが、殺される事はマアなるまい。
ト少しタテあるうち、以前の角力取り三人、出て
ひな　ソリヤ、團七縞ぢや。
ト釜の沸き湯を萬力にかける。
十文　合點ぢや。
ト寄つてかゝつて萬力を喰はす。
萬力　コリヤ、なんとする。
ひな　なんとするとは猪口才な。
十文　團七縞め。
ト叩き据ゑ、十文黹、馬乘りになる。
茂兵　わいらが構ふ事ぢやない。
ひな　サア〳〵、よごんす。藍の二重格子の帷子が目印ぢや。お前は高見から見てござりませ。
十文　ヤイ團七縞、うぬを〳〵と、大抵搜した事ぢやない。
ト萬力、起き上がり、物を云はうとするを
どこへ〳〵、もうこれが往生ぢや。
ト皆々寄つて叩く。
茂兵　ムン……そんなら、團七縞を。
十文　コレ、氣遣ひさんすな。富は駕籠に乘せて、大坂へ大道筋を。
茂兵　大坂へか。
十文　コレ、萬力さん。
萬力　ヤア。
三人　なにを。

ト石にて頭を割る。

ぼツ駈けさんせ。

茂兵　合點ぢや。

ト尻からげして、向うへ走り入る。

幕

切幕

岩井風呂の場
正三内の場

役名　高橋數右衛門。岩井風呂治助。同女房、お梶。廻し、佐兵衛。同、久七。澤村國太郎。嵐三五郎。女郎、お富。團七茂兵衛。並木正三。

造り物、三間の二重舞臺。正面、納戸口、續き、三味線箱の棚の書割り、上手、障子、屋體。この見切りに暖簾を掛けあり、この暖簾、落ちる仕掛け。いつもの所に門口、岩井風呂と書きし掛け行燈。下手、茶屋格子、二重にお梶、着附け、前垂れにて、線香番して居る。側に佐兵衛、着流し、尻からげにて、二重に腰をかけて居る。踊り三味線にて幕明く。

かぢ　マア〳〵、其やうに云はすともよいわいなア。

佐兵　イエ〳〵、大抵憎い奴ぢやない。廻し仲間で云ひ合して、一度が定、懲らしたがよいてや。

かぢ　なんぼう云はしやつても、主と家來ぢやに依つて、負けうちぢや。

佐兵　そりや、主と家來との事ぢやに依つて、負けうちぢやと思うて、さう〳〵が詫び事しに行きました。今年は練り物もなし、祭も淋しいに依つて、廻しが云ひ合せて俄に出た。そりや尤も、あそこな家の事が缺けたと云ふものゝ、あれ程奉公人の揃うてある家で、祭の晩に差込みはなし、一夜さやなど俄したとて、あの後家めが其やうに云ふ事はない。

かぢ　ソレ其やうに、惡態云ふに依つて、親方も意地で腹立てるのぢや。

佐兵　サレバイナ、申し、もう當座に叱つて濟む事ぢや。大勢の廻しが一つになつて、詫び言しに行たれば、わいらはどうして來た、媚てに來たか、なんのと吐かす。ほんに、今ちつと拍子がよいと思うて、あのやうな爪の長い後家めはない。

かぢ　サア、もうよい、濟んだ事なら云はぬがよいわいなア。

ト久七出て

久七　アノ、後でござりまする。
かぢ　オイ〳〵、先刻に煙草入れをおこせと云うて來たが、持つて行つて下さつたか。
久七　アイ、持つて參りました。佐兵衛、この間は難波新地で、えらう立てるげな。
佐兵　どこで聞いた。
久七　床の善兵衛が、今日云うて居た。
佐兵　イヤ、爰の旦那はな。
かぢ　此方のは奥に。
佐兵　エ、、今のを焚きつける意見ぢやの。
久七　イヤモウ、大抵死太い者ぢやない。
佐兵　悪い呑み込みぢやわいの。あのならず者に引きついて居て、金になる數右衛門さまの方へ、行きともないと云ふは、因果な事ぢやなア。
かぢ　イヤモウ、それでこの間から、折檻やら意見やらで、あへるわいなう。
佐兵　おいらも、茂兵衛は大抵世話した事ぢやないか、大のならず者ぢやない。先度も、京へ上ると吐かして、おれに錢四百借つて、ずるぢや。彼奴、こきむくつても、取らにや措かぬ。
久七　わりや又、新地へ引合したぢやないか、その錢も遣らぬげな。
佐兵　イヤモウ、うそごうたの湧いた事ぢやない。シタガ、早う方が付いたらよからう。
久七　今夜は、今のを連れまして來て、めつきしやつきして、しまうたがよい。
佐兵　サア、おれも、その心で云うて置いた。追ッつけ、ござるぢやあらう。
かぢ　コレ、寐卷の包み、持つて行て下され。
久七　ハイ〳〵。

ト包みを取る。

かぢ　揚げにならぬかいの。
久七　イエ〳〵、あの客は、なんぼでも、揚げかふ客ぢやない。その癖、家はよいげな。一度が定、早う借つてこまそ。
佐兵　久七、どこへも差込みはなかつたか。
久七　オ、、河さくが、ざわ〳〵してあつた。

佐兵　オツと、行つてこまそ。
久七　連れ立つて行こ。來い〳〵。
ト云ひ〳〵入る。合ひ方になり、お梶、表を見て
かぢ　旦那どの、もう誰れもござんせぬ。
トこれにて、お富、泣く〳〵奥より出る。治助、煙草盆を提げ出る。
治助　いま奥で云うた通りぢや。何を云ふも彼を云ふも、みな男の爲ぢや。其方が愛想盡かされるやうに云ひさへすりや、男と云ふものは、思ひ切りのよいものぢやてや。
とみ　サア、その思ひ切りのよいのが、猶悲しうござんすわいなア。
かぢ　コレ〳〵、大きな聲して泣くと、向ひの足袋屋へ聞える。京扇屋のお松さんも、表に涼んであつた。小さい聲さんせいなう。
治助　コレ、よう聞きや。其方をおれが抱へたも、あながち商ひばかりぢやない。茂兵衞を連れて戻るものに、あれが勢もあるまいし、短氣な心が出ては、大切な詮議の邪魔になるに依つて、出した百兩は、おりや捨て物にして居る。因果のつくばいと云ふは、彼の二字義光の折紙をば、數右衞門が持つて居るを見たに依つて、引ッ捕まへようとすりや、折紙を破りにかゝる。あれが無うては、二字義光を持つて居ても、歸參の種にならぬ。とつおいつの思案のうち、二人が仲を裂いて、富をくれるならば、折紙を遣らう。さもなくては引裂くぞと云ふを幸ひ、グッと敵役になつて、如何にも二人の奴等が仲を引裂いてやらう。二字義光は、おれがのにして、褒美を貰ふ工面ぢやの、なんのかのと云ひ廻して、兎角折紙を、瑾のつかぬやうに、すつかりと取つてしまうたら、後はどうせうとまゝぢや。
かぢ　あの佐兵衞と久七が、數右衞門の目代になつて、何から何まで注進するに依つて、一向、あの短氣な茂兵衞どのには云はれぬ。
治助　それ〳〵、茂兵衞に云ふと、直ぐに數右衞門に取つてかゝる。さうすると、折紙を引裂くと、末代埋れ木で朽ち果てる。モウ、毎日々々、どうする〳〵と突くやうに云ひ居る。おれも自棄の勘八で、後の月から敵役を仕込んで、今日この頃は、茂兵衞に逢はさぬやうにして、おれも此方へ寄せぬやうにするが、茂兵衞も今は氣がもやついて堪るまい。
かぢ　さうして、今朝茂兵衞どのへ、文やらんしたか。

とみ　アイ。
　　ト　お富、泣きじやくりして
とても添はれぬ事ぢや程に、わしが事は思ひ切つて下さんせ。
かぢ　よし〳〵。
とみ　わしや又、出世ぢやさかいで、數右衛門さんの方へ行きます。もう再び顏は見ませぬ、文もおこし下さんすなと、ツッとモウ。
　　ト　膝を詰めて泣く。治助、お梶、顏を見合して、ホロリとして
治助　オヽ、よし〳〵。さうぢや〳〵。それでこそ男の爲ぢや。
かぢ　さうでござんす。なんぼう腹立たさしても、爰が女の心中ぢや。折紙さへ取戻したら、後はこちの人が呑み込んでぢやわいなう。
治助　さうぢや。おれも敵役して居ても、一人では釯が利かぬ。千法盡きて、其方を取込んだのぢや。今にでも、ひよつと茂兵衛が來て、顏を合すまいものでもない。その時に、云ひ敎へた通り、合點か。
とみ　アイ、よう得心して居ります。わたしや死身になつて申しまする。
　　ト　泣く。
治助　さうぢや。ちよつとでもこの事が知れると、數右衛門が折紙を破る。さうすると、生きても死んでもぢやぞや。
かぢ　めでたうなつたなら、後はわたしが身に替へて、女夫にする。
治助　せいで堪るものか。
　　ト　爰へ佐兵衛、茂兵衛を連れて來る。
佐兵　イヤ、ちつと男の達引を知れやい。
茂兵　サア、門中で云はずと、內へ入つて云うたがよいわい。
　　ト　治助、お富に目配せして、奧へ入る。とお富、ヂッと俯向き、思ひ入れして、後へ隱れる。
かぢ　佐兵衛どの、又やかましう云ふのか。オヽ、茂兵衛どん、ごんせ。
茂兵　ハイ、この間はお目にかゝりませぬ。床の方も、あつちこつちと忙しうて、えゝお見舞ひも申しませぬ。旦那どのは、どこへござりました。
かぢ　旦那どのは、留守でごんす。

茂兵　留守かえ。この間、三度まで參りましたけれど留守。富は、どういたしました。
かぢ　富かえ。
茂兵　ハイ。
かぢ　富は、堺へ預けにやりましてござんす。
茂兵　堺の、どこへ參りました。
かぢ　大治さんの方へ、やりましてござんす。
茂兵　イエ〱、この間さう仰しやつたに依つて、直ぐに堺へ參りましたが、大治には居りませぬ。
かぢ　それでも預けたがなア。
茂兵　この中は、京へ仕替へにやつたと、治助さんが云うておやあつたに依つて、京へ上つて肝煎り衆に聞けば、矢ツ張り内方に居ると云ふに、腹がもや〱と、一體あの富は、其やうにあつちこつち、さして下さります筈はない奉公人ぢやが、治助さんにもこの間から、どうやら味な請けになつて。マア〱、なんであらうと、富に逢はして下さりませ。
かぢ　ハテ、玆なおさんは、なんぞ内に居るものを、隱すやうな物の云ひよう。堺へやつてあるに違ひはないわいな。

茂兵　そんなら、堺へやつてあるに違ひはないかえ。
かぢ　なんの、嘘を吐かうぞいな。
茂兵　その堺へやつてあるものが、今朝爰からぢやと云うて、町飛脚が、富が文を、どうして持つて來ました。
かぢ　サア、それはな。
茂兵　措かしやりませ。この間から、大抵もみない模樣ぢやない。それでも、なんとも云やせぬ。アイ、大事の事が治助さんに賴んであるに依つて、その治助さんがもないに依つて、胸が早鐘撞くやうなわい。治助さんか、富か、どちらでも逢ひさへすりやよい。逢はして下さりませ。
　　ト此うち、お富、茶碗にて酒を吞み、いろ〱こなしある。
佐兵　コリヤ、わりや爰へぐづりに來たか。
茂兵　イヤ、ぐづりやせぬ。この文について、云ひたい事があつて來たのぢや。
佐兵　われが云ひたい事云ふ手間で、四百の錢を戻せ。
茂兵　そこどころか。
佐兵　そこどころかとは、騙りめ。おのりや、京へ行く時に、四百きりまいたのぢやな。

茂兵　四百の錢は遣るわい。なんにも云ふな。われにはいかい世話になつた事、覺えて居る。
佐兵　コリヤ／＼、口明かさぬやうに、せりふばしすな。その手ぢやゆかぬ。マア、四百の錢戻せ。
ト取りつくを、立廻りにて、見事に投げ
茂兵　なにを。痛い目好んでするやうなものぢや。
佐茂　うぬ、投げたぞよ。
ト又かゝるを、見得よく投げ
茂兵　やかましい奴ぢや。
佐兵　うぬ、なんで投げた／＼。
ト摑みかゝるを、お梶、止めて
かぢ　コレ／＼、近所へ聞えると外聞が惡い。向ひの足袋屋は家主ぢや。茂兵衞どのも惡い。靜かにしてもらひませうぞ。
ト納めるうち、茂兵衞、お富を見附け
茂兵　そこに居るは、富ぢやないか。
とみ　アイ
茂兵　先刻にから、わりやマア。
ト行かうとする。お梶、隔てゝ居ると、久七、戻り來たり
久七　アイ、後で……なんぢや、茂兵衞が佐兵衞をなんとした。
佐兵　錢をおこさぬのみならず、投げ居つた。
久七　なんで投げた。
かぢ　久七、やかましい。何も云ふ事はない。富が云ふ事があるさうな。默つて聞きや。茂兵衞どのも、富が側へ寄ると怖がる。そこから云うたがよいわいの。
久七　オヽ、側へ寄る事はならぬワ。
茂兵　富、今朝おこした、コヽ、この文は、こりや退き狀ぢやが、眞實退くか、眞實侍ひの方へ行くのか。この文はマア、なんの事ぢやぞやい。
とみ　茂兵衞さん、退き狀に、なんの事ぢやと云ふ退き文があるかいなう。もうこの世では逢ひませぬ。顏は見まいと、心の錠を卸ろして置いたのに、まいまいと何しにごんした。
茂兵　わりやマア、本氣で云ふか。氣が狂ひはせぬか。
久七　爰な奴は、人の大事の奉公人を、狂人にさらすか。
とみ　一體お前の身の上を、よう算用して見やしやんせ。例へわしが女房にならうと云うたとて、家がなうてから。とんと今までは夢中で暮らしたが、よう思うて見れば、

數右衞門さまの方へ行けば出世なり、わしが自由になる。お前に付いて居ては、いつしか術ない目をせにやならぬ。これ程知れた理窟は、ないわいなア。
茂兵　ムウ、その理窟が今日に見えたに依つて、それでわりや襟に付くのか。
とみ　アイ、マア襟にと云や襟。なんぢややら、從體ぢやわいな。
茂兵　エヽ、さう云ふ根性ではなかつたがなア。いつの間に天魔が見入つた。
　ト行かうとする。
佐兵　なんぢや。血相變へて、どうする。人の奉公人に手をかけたら、只は置かぬぞよ。
茂兵　ヤイ、それで立つか。それで立つかいやい。
とみ　アヽ、立たうとこけやうと、退いたらモウ構ふ事はないわいなア。
茂兵　構ふ事はない。おのりや、云うた事覺えて居るか。吐かした事。
とみ　覺えて居る。よう覺えて居るけれど、それもモウ無茶苦茶ぢや。わしやモウ、今が夜の明けたやうになつた。お前も、わしにかゝつて居やしやんしては、出世の妨げになる。美しう退いてしまふのが、兩方好しぢやないかいな。
　トお富、始終愁ひのこなし。お梶、俯向いて居る。
久佐　それ〳〵。
茂兵　エヽ、おのれはなア〳〵。
　ト茂兵衞、無念のこなし。
とみ　憎からう〳〵、退きしなと云ふものは、どうで滿足で居た事のないものぢや。憎いと云うて、短氣な事さんすと、お前の身の爲にならぬ。わしばかり死ぬる事は構はぬ。兎角お前の身が大事ぢや。千も萬もない、わしが氣は水臭うなつてあるぞえ。その水臭い者を、どうのかうのと、思うて下さんしたと云うて詮ない事ぢや。腹は立てさんすな。あんまりかいしよの無いので、ホッとしてとんと嫌になつた。それで京ぢやの、堺ぢやのと嘘吐いて、逢はぬやうにしたのぢや。とんと嫌ぢや。フッツリ思ひ切つて下さんせ。わしや又、これから數右衞門さまの方へ行て、ちつと榮燿して、樂せにやならぬわいなア。
　ト茂兵衞、齒ぎりを嚙み、無念がる。お富は俯向いて、手を額に當て、泣かぬ顏する。

久七　なんぢや、無念がるのは、物云ひ付けるのか。われも又、お山にあのやうに云はれても、へらへらとせりふしたがる事もない、大きなべら坊ではあるわい。

佐兵　イヤ又、富さんが云はんすが、ほんの事ぢや。昔は知らぬが、當世、客を色にするのが流行る。これが近道ぢや。客の男がようて、品がようて、金はくれて、世間の聞えようて、親方は喜んで、日柄は賣れて、節季に手づかへはなうて、よい事だらけぢや。爰のならずを色にすると、錢はなうて、無理は云うて、着る物は減らして、客は落ちて、内は修羅燃やして、節季にぎりぎりして、かゝつた事は一つもない。今は前より町の旦那衆が、ちやつと男がよいてや。古鐵買ひに見せても知れた出入りぢや。それを無念がるとは、愚痴な奴ぢや。イヤ、コリや、四百戻してくれよ。

　ト茂兵衞、腕捲りして、腕の入れ黒子を見て思ひ入れ。

茂兵　親仁樣、とんと思ひ切りましてござります。モウ、今まで、よしない犬のやうな賣女めに騙されて、大切な詮議の事も、有やうは客吹く風でござりました。

　ト腕を見て泣き、又お富を見て

おのれゆゑに今までの事、思ひ出して見ると、腹が立つて、どうもならぬけれど、何云うたとて馬の耳に風、蛙の面へ水。蛙め、蟇蛙め、もうフツフツと思ひ切つたとさう思へ。

　トお富、ちよつと顏上げて、また俯向き、袖を喰ひしばり、泣く。

嬉しいか、嬉しかろ。思ひ切つたからは、再び顏も見やせぬ……お梶さま、治助さまにお目にかゝつて、御相談いたしたい事もあれど、この氣合ひぢやに依つて、どうも大坂にはえゝ居りませぬ。直ぐに京に上つて、さらりと氣を拔いて參じまする。この間から、だんだんお世話さま。歸りましてからお目にかゝりませうと云うて下さりませ……コリヤ、この後は隱れる事はない。うぢつかずとも歩け。おのれがやうな野良犬に、拳一つ當てやせぬワ。ヨウ、野良犬め、まだ人が手でも嚙まうかと、怖がつて居るの。太い奴なう。

　ト出ようとする。

久七　コリヤ、もうそれでよいか。

　ト捉まへると、見事に投げる。

佐兵　コリヤ、錢戻せ。

　トかゝるを向うへ投げ

茂兵　治助さまへ、よろしう仰しやつて下さりませ。
ト唄になり、茂兵衞、しな〳〵と向うへ入る。あと兩人、こなし。
久七　ア痛々々。
佐兵　ア痛々々。うぬ、投げたなア。錢を戻して投げるなら投げたがよい。錢を戻さずに、投げると云ふ事があるか。犬泥坊め。
久七　コリヤ、團七はもう去んだ。爰に居ぬわいやい。
佐兵　なんぢや、もう去んだか。
久七　オ、、去んだ〳〵。
佐兵　エ、、卑怯な奴の。團七、戻せ。錢を戻せ。
ト血相して、追ひかけようとするを、久七とめて
久七　コリヤ佐兵衞、追ッかけるなッ。
佐兵　イ、ヤ、差込みに行く。
ト入る。
久七　おれも後を問ひに行く。コリヤ佐兵衞、待つて居やい〳〵。
ト入る。これにて治助、奥より出て
治助　オ、、出來た〳〵。それでこそ心中者なれ。
かち　わしや、ヂッと落ちついて居ても、氣の毒で氣の毒で、なりませなんだわいなア。
とみ　旦那さん、お家さん。
ト大きに泣く。また癪を發し、目を見詰める。
治助　尤もぢや〳〵。
かち　コレ〳〵、癪が發つたわいなう〳〵。
治助　大事ない〳〵。反らさぬやうに、ヂッと抱まへて、奥へ連れて行こ。婢、黑丸子出しや。
かち　アイ。
ト治助、お富を抱へ、いろ〳〵介抱しながら入る。返し。
造り物、三間の二重。向う、鼠壁、床の間。かむろ目。床の間に本箱。正本など澤山飾りある。右二重上手に正三、浴衣にて机にかゝり、狂言書いて居る。道具、納まる。
側に遠州行燈ともしあり。誂らへの合ひ方にて、道
トばた〳〵にて、向うより茂兵衞、走り出て、門口へ來て、ソッと覗き、そろ〳〵開けて入る。
茂兵　旦那、内方にござりまするか。
正三　オ、、茂兵衞か、よう來たの。サア〳〵上がりや。

茂兵　ハイ〱。
正三　サア、マア、上がりやいなう。この間は、すつきりと逢はぬ。岩井風呂へ行くか。
茂兵　ハイ、たつた今行て參りました。
正三　いかう目が血走つて、色が悪い。なんとぞしたか。
茂兵　イヽエ、なんとも致しませぬ。私しも今晩、ちと叶はぬ用事で京へ上りまする。
正三　もう船があるまい。
茂兵　いつそ夜道をかけて、參じませうと存じまする。
正三　よく〱急な用ぢやなう。
茂兵　それにつきまして、濱の親仁が今留守で、錢の出たのがござりませぬ。御無心ながら一兩日、四五百お貸しなされて下さりませ。
正三　オヽ、易い事ぢや、ドレ〱。
　ト取つて來て
今此方の者が留守で、四百ほか出てないが、これでよいか。
茂兵　ハイ〱、これでようござりまする。
　ト下男、戻り
下男　申し、會所へ參じましたが、髪結ひは居りませぬ。
正三　ア、明日疾から芝居へ行て相談がある。また間に合はぬ。憎い奴。
茂兵　モシ、大事ござりませずば、私しが致しませう。
正三　ほんになア。お髪結ひがある。シタガ、京へ行くに大事ないか。
茂兵　徒歩を參じますによつて、四ッになつても、夜中になつても、大事ござりませぬ。
正三　それは忝ない。コリヤ、櫛箱を持つて來いよ。
下男　ハイ〱。
　ト盥、手拭、櫛箱を持つて出る。茂兵衞、抽出しより砥石と剃刀を出し、頭、揉んで居る。と向うより三五郎、國太郎の兩人、男に箱提灯を持たせ、出て
三五　サア、お入り。
國太　マア〱、お入り。
三五　サア〱。
　ト兩人、入る。
お見舞ひ申し上げまする。
下男　お出でなされませ。角の芝居の三五郎さん、國太郎さんがお出でなされました。
正三　お出で。サア〱、ズツと〱。

國太　お許しなされませ。

　ト上がる。

正三　さて、どうでござりまする。

三五　きつい暑さでござりまする。

正三　イヤモ、堪らぬでござります。内に居てさへひどいのに、主達は舞臺で、一向であらう。

三五　イヤモ、一しきりは、くら／＼致しましたが、見物はよう參じますぞ。

正三　左やう／＼。さて、主達のお出では、彼の役の事であらう。どうぞ月見過ぎ時分に、いつそ出さうかと思ふ相談ぢやが、ちつとの不承は堪えてもらはにやならぬ。

三五　サア、それを申しまする事でござりまする。一體、狂言は名も變つて、新物ぢやけれど、する所は古手屋八郎兵衛が、心柱のやうなものでござりますな。

正三　それ／＼。

三五　そこでござりまする。マア、此方の芝居で、慶子さん、一光さん、歌七さん、これがお妻八郎兵衛、彌兵衛の所でありさうなものぢやが、その衆を措いて、三五郎と國太郎とがしたら、見物の目どが違やせまいかと、そこばかりが案じられたものでござりまする。

正三　イヤ／＼、又そんなものぢやない。そこは見物も千差萬別ぢや。高が、今して居る狂言が世話で、慶子大五郎と踏んで、女房殺しをして居る。その上、また着せにと來ると、大五郎は使はれぬ。三五郎國太郎と組むと、大五郎は使はれぬ。三五郎國太郎と踏んで、殘りの衆が餘の事すると、目も變る事ぢや。第一、華やかにあらうと思ふ。

三め　華やかなか存じませぬ。ハ、、、、。

正三　イヤサ、華やかなて。なんでも三五郎國太郎と云ふ八郎兵衛ごとは、第一、町の藪入りが喰ひ付くてや。

三五　そりやマア、是非せいなら、わたしでも大事なくば

國太　致しませうが、ほんまの八郎兵衛ならよけれど、ちつと呼吸の替つてあるだけが、氣味が惡いでござりまする。

正三　サ、どうなと／＼。

國太　あゝ仕込んだものぢやに依つて、わたしが三五郎さんに殺されにや、堪えられませぬ。

正三　サア、そこで、美しい國太郎を、グイと殺してしまうたら、見物が力落しやしまいかの。

三五　イ、エモウ、あゝ狂言が込んで來ては、そこらでは

ございませぬ。しかも、酷う殺さにやならぬ。

國太　わたしや蘇方て、血まぶれになつて死なうかと思ふが。

正三　そりやよい。さうすりや、氣が變つて、きつうよい。その方がよい。

三五　イヤ又、狂言を退けて、地で思うて御覽じませ。あれ程に根氣を盡して云ひ交した女子が、あのせりふの付けやうに、憎う云うて男を突き放したら、ほんにヤレヤレ、釋迦でも殺さにやなりませぬ。あれを殺さにや、あんまり男は大馬鹿ぢや。

ト此うち茂兵衛、我が身に引比べ、いろ〳〵思ひ入れあり

國太　わたしも、あの女子のせりふづけが、あんまり憎いに依つて、して見ようかと思うて。

正三　さうぢやわいの。一體歌右衛門にさず、女郎の親方の役、彼奴を大抵惡う仕込んで置いた事ぢやない。

三五　ありや、惡色事師をやつたのぢやなア。

正三　とんとしらやりぢや。あの寶物で喰ひ付かして置いて、女形をのぼせた心意氣が惡い趣向ぢやてや。

國太　ア、さうして、あの親方は、矢ツ張り女形を口說きますかえ。

正三　サア〳〵、マア惚れて居るぢや。ソレ、三段目の小幕に、色事師が、逢ひに來ても〳〵、留守使うて逢はさぬ所の。

三五　ハイ〳〵。

正三　あの間はお前の役が、隨分阿房らしうなけりや惡い。さうして置いて、女形の方から、どつさりと退き文が行く。それから慌て出して來たところが、女形が水臭い、ゑぐい事云うて、突き放す。この間は、親方は矢ツ張り奧に居て、留守使うて、よい氣味がつて居る。こりや歌七、憎からうわいの。

ト茂兵衛、いろ〳〵無念がる思ひ入れ。

三五　わたしやいつそ、べいさんも岩さんも、殺さうかと存じます。

正三　イヤモ、殺すからぢやに依つて、そこらあたりを滅多殺しがよい。

國太　アノ、三五郎さん、お前は、親の位牌の戒名が何やらして、無念を堪える事があるがな。そりやどうさんす。

三五　イエ〳〵モウ、あゝなつては戒名どころぢやない。

あんなところで、グイと殺さにや阿房らしい。一體わしが役は、思案して見ると、阿房らしいてな。

正三　阿房とも〳〵、極道の天上サ。マア、口明きに寳物を盗まれ、家を潰されて、お山に騙され、親方にやられて、そのお山を敵役に取られて、突き放され、イカサマ此奴、殺すばかりが性根ぢや。殺さにや、いつそ人間の脈がない。

三五　サア、殺さにや堪えられませぬ。

國太　そんなら、わたしや、蘇枋襦袢で致しませう。

三五　マア、そこへ、よろしうなされて下さりませ。

國太　イヤ、もうお暇申しませう。

正三　もうお歸りか。エヽ、東の座敷なら、松風の葛でも上げませうもの。

三國　ハイ、お暇申します。

正三　ようお出でなされました。

ト三五郎、國太郎、歸る。

さて茂兵衞、見てたも。役者と云ふものは、怪體なものおやあらうがの。すつたのもぢつたのと云うて、いぢるいぢる。シタガ、出さぬうちに狂言話しを聞かしたが、なんと、どうぢや。

ト茂兵衞、顏色變つて、向うを睨み詰め居る。正三、キッと見て思案の體。ヂッと顏を見合せ、茂兵衞、こなしあつて

茂兵　お暇申しませう。

トついと行かうとする。

正三　コレ〳〵茂兵衞。

茂兵　御用でござりますか。

正三　マア〳〵、腰かけや。

茂兵　ハイ。

ト合ひ方になる。

正三　茂兵衞、わが身の色は、どうした。

茂兵　何をぢやら〳〵仰しやります。

正三　イヤ、向ひの色はどうした。

茂兵　イヤモウ、退いてしまひましてござります。

正三　ムウ、退いたか。

茂兵　ハイ。

正三　いつ〳〵。

茂兵　イエ、この間、さつぱりと譯立てまして、美しうしまひましてござります。

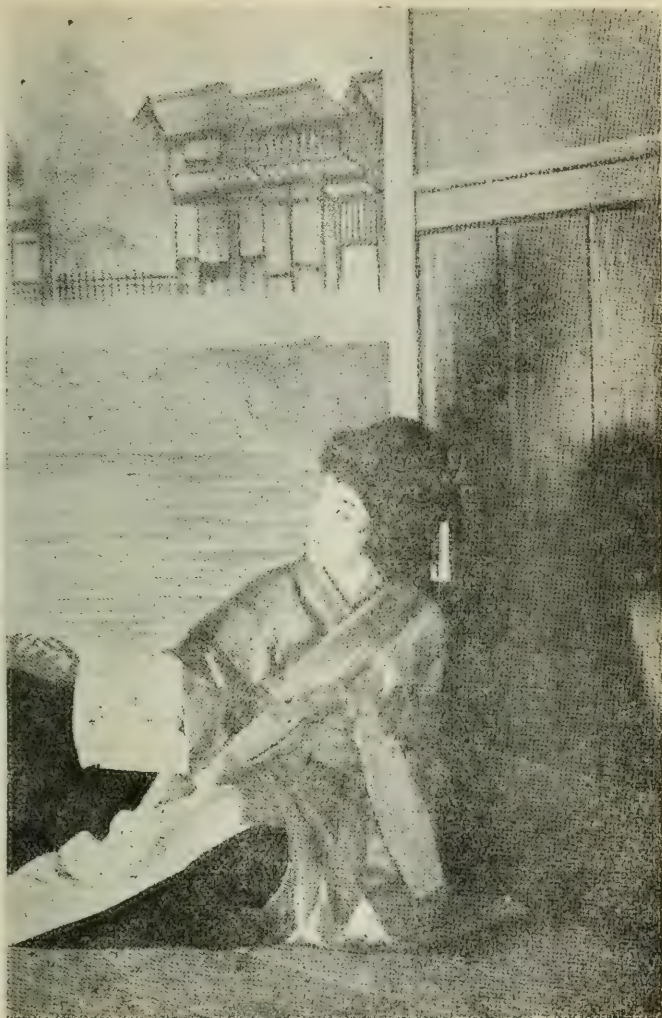
正三　ムウ、アノ、美しうしまうたか。

茂兵　ハイ。
正三　アノ、美しう。ハヽヽヽヽ。
ト苦笑ひして
美しうしまうたらよいが、おいらも覺えがあるが、常はどのやうな賢い者でも、惡洒落な者でも、色に凝つて來ると、とんと人に云はれずに、愚痴になるものぢや。其方の身の上の事も、岩井風呂の治助に大概聞いたが、相應に米も取つた人ぢやげな。愚痴になりやんなや。どれ程の腹の立つ事でも、色事と云ふものは、心の取置きやうで、その場をとんと離れて見ると、なんでもない事ぢや。サア、それが色事の間には、根ッから見えぬ。粋も甘いも知り拔いて居るおれが、惡い事は云はぬ。色事で腹の立つ事があるなら、それなりに心をトンと入れ直して、忘れてしまうて、後で思ひ出して見や。埒もない事で腹立てたと、悔まにやならぬ。それ〳〵、凝り過ぎると、歷々の身をしまふものぢやと云ふ。これは話しぢや。
茂兵　イヤモウ、お話しはキッと心得て居りまする。わたしは積が發りますと、眼が血走つてあるに依つて、さう仰しやりまする。イエ〳〵、もう今は、色事の方は無しでござりまする。
正三　イヤサ、マア、ありはせまいけれど、話して置いたら、心得にもならうかと思うて云うたのぢや。
茂兵　もうお暇申しませう。
正三　イヤ、頭、御苦勞。
茂兵　ハイ、四百借つて歸りまする。
正三　オヽ、ようおぢやつた。
ト茂兵衞、門口で手を組み、そろ〳〵入る。正三、後を見送り
どうでも彼奴の顏は、只の顏ではないが、もしお山を連れて、京へでも駈落ちするのぢやないか。アヽそれでは先度の百兩が、また延びるが、アヽまゝよ、どうなとせい。
ト納戸へ入る。返し。
造り物、返し前、岩井風呂へ戻る。數右衞門、治助、お梶、お富、佐兵衞、久七、居る。
數右　今夜は、絕體絕命、返答に依つて、直ぐに破つてしまふのぢや。
治助　サア〳〵、富を渡すまいと云ふにこそ。わしが心底

は、佐兵衞久七がよう知つて居る。こなさんに注進したであらうがな。
佐兵　オヽ、皆云うてやつたに依つて、念押しにござつたのぢや。
かぢ　富を渡さうと云うて居るのに、短氣な事さしやんすな。
數右　この折紙は、此方の命づく。滅多に破らぬ。サア、富を渡せ。
治助　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
治助　ソレ。
　ト　お富を渡す。數右衞門。引取つて
數右　慥かに受取つた。
治助　茂兵衞は、京へ上してしまふ。富は其方へ渡す。大方折紙を渡しても、よさゝうなものぢやなア。
佐兵　イヤ治助さん、先刻に茂兵衞が並木へ入つたを、おれがよう見て置いた。なんの、今頃京へ上るものぞ。舞ひ戻るは定のもの。こなさんが茂兵衞と逢うて、とつくりと彼方の味方でない事を、旦那へ見せさへすりや、それで譯は立つ。ナウ久七。
久七　オヽ、兎角こなさんの存念が、合點がゆかぬ。
治助　いつち易い事ぢや。今でも茂兵衞めが來たら、おれが味方か、味方でないかを見せませう。その上で、折紙を貰ひますぞや。
數右　そりやその時の事。
　ト　此うち茂兵衞、向うより血相して出て、門口より
茂兵　治助さん、內にか。
久七　ソリヤ來たワ。
數右　詞番うたぞよ。
　ト　お富を連れて、數右衞門、內へ入る。
茂兵　治助さん、內にか。
治助　留守ぢや。
茂兵　さう云ふは治助さんぢやないか。
　ト　內へ入る。
治助さん、氣の惡い。內に居て、留守使ふと云ふ事があるものか。何程わしが怖いもので。
かぢ　茂兵衞どの、こなさん、留守ぢやと云ふに、ツカツカと內へ入り、無遠慮千萬。
茂兵　內に居て、留守使はしやるに依つて入つたのぢや。鬼の女房にや鬼神がなると、こなさんを。

かぢ　ムウ、鬼の女房にや鬼神がなると云はしやんすから
は、そんなら、こちの人は鬼かえ。
茂兵　アイ、鬼でごんす。鬼ぢや。
かぢ　こなたはなう。
　トせり合ふ。
治助　サア、よい／＼。われがなんにも云ふ事はない。其
方へ寄つて居い。
かぢ　よい加減な事云うたがよい。
茂兵　佐兵衞、われに借つた四百の錢、戻すほどに、受取
れ。
　ト額へ打ちつける。
佐兵　ア痛々々々。
久七　わりや、なんで投げ打ちする。
　ト兩人、取つてかゝるを、見事に投げ
茂裂　寄りやがつたら、引裂くぞ。
治助　茂兵衞、わりや此方の内へ暴れに來たのか。
茂兵　なんで暴れに來るものぞ。長々世話になつた、その
禮を云はうと思うて來たのでごんす。
治助　なんぢや、禮云ひに來た。
茂兵　アイ、禮云ひに來た。治助さん、ちよつと富に逢は
して下んせ。
治助　富は留守ぢや。
茂兵　コレ、そんな古い事云はすと、ちよつと逢はして下
んせ。ちよつと逢つて、云ひたい事がある。隙は取らぬ。
ちよつと。
　ト云ふところを、髻摑んで引きつけろ。障子の内にお
富を縛り、猿轡を嵌め、數右衞門、見て居る。
治助　ヤイ、茲な恩知らずめ。うぬは、どこの牛の骨やら
馬の骨やら知らぬ奴を、大治が頼むと云ふせりふに舞ひ
上がつて、連れて戻つてから、あそこ爰の日手間にやつ
てもらひ、戻つて喰ひ潰されたも、並や大抵の事ぢやな
い。おれがなけりや、うぬ、乞食する奴ぢや。その義理
も、ちつとなりと思ひさらすなら、富には手もさゝぬ筈
ぢや。コリヤ、百兩と云ふ大枚の金出して、抱へた奉公
人ぢやぞよ。その奉公人を、うぬらが慰み物にする事は
マアならぬわい。
　ト蹴飛ばす。數右衞門、折紙を見せて頷く。
茂兵　そりやモウ、こなさんの云ふのは、重々尤もぢや。
尤もは尤もぢやが、その筈ではない。こなた、その約束
ぢやない、と云や云ふものゝ、これも役に立たぬ事ぢや。

大正十三年九月本郷座上演　市川松蔦の

お富　實川延若の茂兵衛　中村幹尾のお富

治助さん、お情ぢや、慈悲ぢや、ならう事なら、たつた一目逢はして下んせ。

治助　ならぬ。

茂兵　サア〳〵、なるまい。そこをどうぞ逢はして下んせ。コレ、二人の衆、どうぞよいやうに云うて、逢はして下され。その代りには、貴様が、先刻の仕返しには、おれをどうなりとして、逢はして下され〳〵。

ト泣く。

佐兵　オヽ、とこぼえるほど逢ひたくば、逢はしてやらう。マア、仕返しから先へして、逢はしてやらうわい。どうぢや〳〵。

久七　オヽ、おれも仕返しして置いてから、逢はしてやらうわい。

ト蹴倒す。

茂兵　富に逢へさへすりや、どうなつても大事ない。どのやうな目になりとしや。

久佐　オヽ、どのやうになりと、せうわい〳〵。

ト二人して、いろ〳〵苛なむ事あり。トヾこれを治助、止めて

治助　アマ〳〵、わいらはどうする。もし目でも廻したら、おれが難儀ぢや。みんな片隅へ寄つて居い〳〵、コリヤ茂兵衛、悪い呑み込みぢや。所詮今夜は、富に逢はしはせぬ。また家捜ししたとて、ナニ富を内に置いて堪るものか。マア、なんであらうと、去ねと云うたら。

茂兵　治助さま、治助、わりやおれを、やり事にかけたぞよ。

治助　なんぢや。さう云や何もかもぶちまけて聞かさう。嬶よ、その九寸五分持つて來い。

かゝ　アイ〳〵。

ト棒鞘持ち出て、渡す。

治助　これ覺えてか。二字義光。高は斯うぢや。おれは數右衛門さまに頼まれて、われと富とが仲を裂き、折紙を貰うたら、われをぼひまくつて、湊川の家中へ、おれが持つて行て、金にする氣ぢや。ようしたもの、富めがばりばり賣れた間は、默つて置いたが、うぬにかゝつてから、賣れやんだによつて、とつくりと因果を含めて、數右衛門さまの方へやつてしまうたが、これで又金儲け。斯うばれかゝるからは、泣いても笑うても叶はぬ程に、早う京へ上りさらせ。大馬鹿めが。

ト蹴飛ばす。

なんと、これではどうでござります。

数右　今こそ心底見えた。ソリヤ、約束の折紙。

ト抛る。お梶、手早く取つて

かぢ　こちの人、折紙が手に入つたわいなア。

治助　オヽ、受取つたか。

かぢ　受取りました。

治助　エヽ、忝ない。

ト取つて、茂兵衛の側へ持つて行て

コリヤ、折紙が手に入つたぞよ。喜べ。

茂兵　なにを。

ト九寸五分取つて、治助にかゝるを、留めて

治助　コリヤ待て。云ひ譯がある／＼。

茂兵　何を、おのれ。

ト抉る。

かぢ　ヤア、こちの人を突いたわいなア／＼。

トお梶、治助を介抱して逃げ廻りながら奥へ入る。数右衛門、富を連れて逃げて入る。久七、佐兵衛を相手に立廻り、兩人に手を負はせる。數右衛門、出て、茂兵衛にかゝる。立廻りて数右衛門、肩先、一刀切られる。よろしく見得にて、返し。

淺黄幕、かぶせる。始終、アリヤ／＼の聲、バタ／＼にて、後へ道具、出來次第、淺黄幕、切つて落す。

造り物、正面、太左衛門橋詰めの體。上手に後へ寄せ、髪結ひ床。下手、本屋根附きの町家、饂飩屋の體。遠見に道頓堀、芝居側の書割り。始終早太鼓、踊り地にて、向うバタ／＼にて佐兵衛、手を負ひ、蘇袍に出て、後より久七、同じく出る。後より茂兵衛、九寸五分を逆手に持ち、追ひ駈け出る。いろいろ立廻りあつて、トヾ茂兵衛、舞臺へへたる。伊勢音頭になる。そろ／＼花道へ行つて、氣を失ふこなし。時の鐘、ゴンと鳴る。フト氣を付けて、うろうろ本舞臺へ戻り、用水桶にかゝり、水を呑みにかゝる。久七、佐兵衛、ひよろ／＼してかゝる。また立廻りある。よき程に町人大勢、棒を持ち出て追ひ廻す事あつて、佐兵衛久七を殺し、詮方盡きて自害して、いろ／＼苦しむ。大勢出て

大勢　ソリヤ死に居つた。叩き伏せい／＼。

ト皆々やかましう云ふ。正三、棒を持つてお富と走り出て來り

正三　待て〳〵。麁相すな……エヽ、先刻にどうで碌な事ぢやあるまいと思うたが、早まつた事したなア。

とみ　茂兵衛さん、死なしやんしたかいなう。

ト泣く。茂兵衛、お富を見て、いろ〳〵苦しむ。正三に顔にて水くれと云ふこなし。

正三　なんぢや、水くれと云ふか。コリヤ、水呑まして殺しては、後がむづかしい。エヽ、もう一足遅かつた。委細の事は、治助のお内儀に聞いたに依つて、数右衛門といふ奴に、ぐる〳〵巻きにして置いた。気遣ひすなよ。

ト茂兵衛、拝む。

大勢　正三さま、こりやマアどう致しませう。

正三　エヽ、残念な。余所の町であつたなら、直ぐに一夜漬に漬らようもの。ナア町の衆

大勢　なんでござります。

正三　簡々の事を、まんざらおれが作られもせまい。マア此まゝで御検分を願はう。委細の事はお上の御裁許次第。先づ〳〵この場は、お立ち〳〵。

ト打出し。

宿無團七時雨傘　（終り）

三千世界商往來

（さんぜんせかいやりくりわうらい）

五番續

並木正三の像

三千世界商往來

竹田芝居の場
丸山廓の場
葭島の場

口幕

役名　宗の彈正。息女、湊姫。岩城主計。荒浪道丈。喜村將監。喜村釆女之介。同奴、和田平。相良軍藏。瀧川藏人。唐和和尙。吳服屋利兵衞。揚屋、才兵衞。亭主、喜右衞門。太鼓持ち、惡介衞門。遣り手、おまん。子分、吉兵衞。同、長兵衞。喜崎伴內。阿房、雲太郞。成合玄蕃。佐久間丹兵衞、傾城、逢夜。同、長門。阿蘭陀人、加比丹。山司金右衞門。

造り物、惣一面の金襖、竹田の舞臺、幕の明かぬ先に、場の中へ床几、毛氈かけあり、加比丹、外國の形にて、供を連れ、岩城主計、通詞の姿にて、場の中の床几に腰かけ居る。幕明くと、囃子方、向うへ一面に並ぶ。太鼓打ちかける。合ひ方、唄の文句にて、橋がゝりの襖明くと、禿竹野、左枝、粂野、勝野、三輪野、幾世、右六人、一樣の緋縮緬振り袖、白綸の脫ぎかけ、塗り笠、藤の花を擔げ踊り出る。これより舞臺にて、所作事樣々ある、この間、後見いづれもじやがの上下にて、行儀に居るなり。右所作、散らしになつて、三人づゝ兩方へ別れ、白囃子になる。この白囃子のうちに、樂屋より、おぼこ人形持ち出る。松屋利兵衞、口上、その外後見付き、人形を直す、白囃子とまる。松屋利兵衞、口上、向うへ座り

利兵　別してお斷わりを申し上げまする。眞柴大領久吉公、朝鮮國をお攻めなされ、めでたく御凱陣遊ばされまして、當肥前の國島原に御逗留のうちでござりますゆゑ、阿蘭陀のお客樣、京都へお上りに及ばす、直ぐにこの國にて、久吉公へお目見得なされますにつき、上々方へ竹田を御覽に入れまする。皆丸山の女郞禿ども。不調法勝ちにござりまする儀でござれば、幾重にも御容赦下されませう。

さて、御意に入れまする細工は。

ト これより、直し置きたる機關の口上あつて、段々細工動く。細工の終りに

相替らず不調法なる儀を御意に入れまするでござります。

ト刎れの太鼓打つ所へ、侍ひ一人、花道より出て

侍ひ　主計さま、これにお渡りなされまするか。

ト場の中へ云ふ。

主計　何事かな。

ト此うちに舞臺の細工は片付ける。

侍ひ　イヤ、島原の御陣屋より、阿蘭陀人只今お目見得いたさせよとあつて、御用人様方、お迎ひにお出でござります。

主計　そりや、一時も早く參らずばなるまい。ふらかんりやうはふす。

加比　てるめんとうろうす。

ト目禮して皆々花道へ入ろ。

主計　芝居興行與服所、松屋利兵衛參れ。

利兵　ハイ／＼。

ト加比丹、服より銀錢を出しやる。

主計　廓の者ども、大儀ぢや。殘らず歸つて休め。

皆々　ハッ。

加比　でつふりていぶら。

主計　ほんへらふんべら。

ト加比丹、向うへ入る。主計、付いて、その外の者皆皆向うへ入る。利兵衛、その外細工人、子供、皆々橋がゝりへ入る。

返し、道具。

廓の體。向う惣暖簾、橋がゝり一面に障子屋體。下座の方に垣結ひ廻し、その中に高い土手、上に五輪の石塔あり、宗の彈正、衣裳、上下にて、才助、下人にて、橋がゝりより付き添ひ出る。

才助　どのやうに尋ねましても、影も形も見えませぬ。

彈正　身共を始め姫も來て居れば、もう采女之介が來ぬと云ふ事はない筈ぢやが、但し、親將監と同道で來るか。

才助　大事の奉公人はほてれんにして、粒三文くれもせいで、あの和郞にかゝつて身代は滅却でござります。

彈正　サア、なんであらうと、それぐるめに身請けすればよいでないか。

才助　そのお詞を力に、太夫を妾へおこして置きましたが、此奴も見えませぬ。
彈正　どの座敷に居やらとも、引摺つて來いサ、
ト荒浪道丈、衣裳、上下にて、橋がゝりより、出て
道丈　これは彈正さま、お早い御參詣でござります。
彈正　荒浪道丈、これへ來る座敷の內に、もし傾城のやうな者は見えはせなんだか。
道丈　イヤ、左樣な者は見及びませぬ。
彈正　釆女之介は參つたか。
道丈　これは疾く參られた筈でござります。
才助　何所へ摺込んで居られる。逢ひたいものぢやが。
彈正　コリヤ〱才助、後程燒香の時は、是非顏を出さねばならぬ。それまでは奧へ來て待つて居よサ。
才助　畏まりましてござります。
道丈　姬君もお出でござりませう。
彈正　奧の空地に新座敷を建て、菩提寺の住持も相詰めたが、イカサマ、一國の大名の悴、宗の町丸が墓所が、廓にあると云ふも不思議ぢやてなア。
道丈　左樣でござります。
彈正　サア、奧へ行きやれ。

道丈　お供仕りませう。
彈正　其方も珍らしう、坊主を相手に精進酒をくれう。
才助　マア、お入りなされませ。
ト三人、奧へ入る、この間、笙篳篥と湊姬、出て、あちこち人を尋ねて居る。相良軍藏、衣裳、上下にて、後より付き出る。湊姬が後に付いて廻り、湊姬がする身振りの通りにする。
湊姬　面妖な。よもや今までおぢやらぬと云ふ事はあるまいが、何所ぞ別の座敷へでも入つて居やるか。
ト あちこちするうち、軍藏、出て、いろ〱あつて、顏を見合せ
湊姬　相良軍藏。
軍藏　お姬樣、お前は何をお尋ねなされまするな。
湊姬　好い所へ來てたもつた。アノ釆女之介はおぢやつたぢやあらうか、其方知りやらぬか。
軍藏　私しはまだ逢ひませぬが、釆女之介には、なんぞ急な御用でもござりまするか。
湊姬　アノ、それはの。
軍藏　それは。
湊姬　イヤ、マア、なんにも用はないけれど。

軍藏　采女之介に用がなくば
　ト　あたりを見廻し
お姫樣、お前の御用は私しが承りたいぢやわい。
　ト抱きつく。
湊姬　何を阿房らしい。
　ト振り放し、行かうとするを捉へ
軍藏　申し、其やうになぜピンシヤンなされまする。常々後室樣の御意には、例へどのやうな者にもせよ、姬が氣に入つた者なら女夫にせうと仰しやる。私しが立居日遣ひ、大概お前も覺えのない事はあるまいが。幸ひあたりに人はなし、ちよつと抱きつかせて。
　ト嫌らしうするを突き放し
湊姬　軍藏、其方は本氣か。不義は堅い法度ぢやぞよ。
軍藏　存じ知つて居りまする。法度でも調子でも、もう斯うなつては堪えられるものぢやない。そこは又お主の情ぢや。ちいつとばかり、エ、。
湊姬　寄るな。滅多な事したら云ふぞ。アレ、伯父樣、軍藏が。
軍藏　シイ〳〵。申し、それ云うて堪るものか。
　ト付け廻る。

湊姬　そんなら、彼方へ行きや。
軍藏　胴慾ぢやぞえ。
湊姬　聲立てるぞや。
軍藏　モウ〳〵、どうもならぬ。
　ト追ひ廻す所へ、向うより、喜村將監、岩城主計、衣裳、上下にて連れ立ち出る。
將監　それは早く相濟みました。
主計　イヤモウ、出迎ひの用人へ阿蘭陀を送ると、其まゝ氣を急いて參りました。
　ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。湊姬を軍藏、追ひ廻し、湊姬は主計に取りつき、軍藏は將監に抱きつく。矢張り箏の竽葉のうちなり。
軍藏　それはあんまりつれないわいなア。
將監　相良軍藏、なんとする。
軍藏　ヤア、將監どの……こりや堪らぬ。
　ト奧へ逃げて入る。
湊姬　將監、叱つてたも。大抵惡い奴ではないわいなう。
　ト瀧川藏人、衣裳、上下にて、奧より出る。後より、唐和和尙、伴僧を連れ出る。
藏人　これは喜村將監どの岩城主計どの、只今でござる

か。
將監　後室樣には御病氣、今日の御法事にお越しなされぬにつき、彼れこれ御機嫌を伺ひ、やう／＼只今でござる。
主計　拙者も阿蘭陀の通詞につき、やう／＼只今、久吉公より迎ひに參つたる用人へ引渡し、御法事に外れまいと、取る物も取り敢へず參上仕つた。
藏人　イカサマ、當年は久吉公朝鮮征伐の御凱陣、士卒の足休めとあつて、當肥前の島原に御逗留。阿蘭陀も直ぐに居ながらのお目見得。仕合せ者でござる。
將監　菩提寺の住持唐和和尚、大儀にこそあれ。
唐和　寺中の儀ならば、取計らひやうもござれど、遊所にての御法事、萬事不調法にござりませう。
主計　聖僧の和尚、さぞ不淨にも思はれうが、宗の大外記さまの若殿、町丸さまの墓所、廓の内にあると云ふも、因緣でがなござらう。
將監　湊姫さま、なんとお心得なされた。若殿の塚の前で申すが、町丸君は御幼少の時、阿蘭陀國より、都を視し奉つて、瓜哇の大象を贈り、久吉公よりも當家へ大切にお預けなされしところ、固まらぬ小腕に弓の射稽古、誤まつて象を射殺したる事上聞に達し、嚴しいお怒り、大膽の刑に行へよと、痛はしや象の死骸諸とも、石子詰めにお遭ひなされ、築き上げたその塚。大名の公達でも容赦せぬ見せしめとあつて、塚のぐるりに丸山と名付け、廓をお許され、諸人の入込み。家中の者も餘りなる儀と、拳を握つて居つたが、サア久吉公は名將、種ヶ島時高の娘を、久吉公親分になつて養子に遣はすと、五萬石の化粧料を添へ、こなた樣がお出でなされた。天ケ下の大將と一家になつて、當家の繁昌、賞罰の正しさに、親族を始め我れ／＼も角を折つたを、家の格式正しくせねば、この塚の御恥辱は雪がれぬ。如何にお若いと申して、上下の辯まへなく、若侍ひどもと惡ぼたえ。軍藏にまで心安くたるゆゑの事。ちとお嗜たみなされ。
ト皆々立つて云ふ。
湊姫　皆わたしが惡かつた。あやまりました。堪忍してたも。
將監　あやまらしませうと云うて申すのではござらぬ。
藏人　イヤ／＼、お姫樣も、實父種ヶ島時高どのの事を仰せらるゝので、甚だ御愁傷でござる。
將監　そりやその筈。當家へ養子にお出でなされたればこ

そ、大名高家の御緣邊もあれ、なんぼう久吉公の御養育なされても、謀叛人の娘と云つては、一生朽ち果てねばならぬ。ぢやに依つて大人しくなされいと申す事。

主計　種ヶ島高時どのは、謀叛人でござるか。

藏人　イヤ、今では左樣申せども、久吉公未だ大名の時の敵味方。さしも肥後の城主なれども、一戰に打負け、御一門悉く滅び失せました。軍は武家の慣ひ、女子には構ひないとあつて、久吉公幼少の姬君をお引取りなされ、御養育なされたは、當るも嚴しく、また仁心も深い大將でござるて。

ト湊姬、泣いて居る。

これは由ない話しで、御機嫌が損ねました。不調法の段、眞平御免下されませう。

湊姬　ナンノイノ。何事も因緣づく。親時高どの丶討死も、町丸さまの御最期に比ぶれば、まだしものお果てなされやうぢやと思うて居るわいの。

將監　左樣でござる。何事も昔の誤まりは川へ流して、產みからの當家の姬君ぢやと思し召せば、胸も開けると申すもの。隨分お身持ちが肝要でござります。

唐和　別家を立て淸めござりまするが、御燒香まで間もござりませう。暫らくあれへ御入り下されませう。

將監　イカサマ、左樣いたさう。

ト云ふ所へ、喜右衛門、亭主の形にて、惡介、太鼓持ちの形にて、出て手をつかへ

喜右　ハイ、お願ひでござります。大切な御法事ぢやと存じまして、お客樣方も無言のやうに、密やかに頼んで居りますれど、どうしても女郎衆が聲高く、張切れさうにござりまする。どうぞ常の通りに騷ぎまして大事ござりませずば、騷がして下さりませうならば、有り難うござりまする。

惡介　唄や三味線がなうて、皆悄げつて居りまする。どうぞお許されて下さりませうならば、有り難うござりまする。

主計　先達てわれ達が渡世に、構ひはないと申しつけ置いた。後程燒香の時分は、皆大門口へ追ひ出すぞよ。

喜右　ハイ、その事は畏まりましてござりまする。

藏人　イカサマ、女どもや客どもは迷惑にあらう。御燒香までは許して遣はされい。

將監　彼れどもが渡世の不勝手とあれば、供養の妨げ、慈悲を施すも法事のうち。煩惱即菩提と云ふ事もあり、苦

しうない。矢張り其方達が常の通りに舞ひ唄へ。御燒香までは許してくれるぞ。
喜右　エヽ、有り難うござりまする。
唐和　サア、御案內仕りませう。
將監　姬君には
皆々　先づお入りあられませう。
ト笙篳篥にて、皆々入る。
喜右　サア、お許しが出たからは、してやつたものぢや。
惡介　お上のお許しが出た。皆手放しで騷いだ〳〵。
喜右　許りたぞ〳〵。
ト騷ぎ唄になり、向うより、金右衞門、風呂上がりの體にて、禿に着物を持たせ、仲居おまん、鼻紙入れ帶着物を抱かへ、その外廣蓋へ錦の財布、鼻紙入れ、提げ物、持ち出る。長門、傾城の形にて、付き添ひ出る。
長門　金右衞門さん、人の賴む事は聞きもせいで、風呂どころかいなア。
金右　サア〳〵、呑み込んで居る。トツトろくに風呂にさへ入れてくれぬ。頭痛は癒つたやうなが。まん　これから又、一つ飮み直さうではあるまいかいなア。
喜右　さう思うて直ぐに銚子を出して置きました。
惡介　さらばコツプで一つ下されませうかい。
トコツプ、大燗銅、肴の鉢、品々を前へ並べる。
金右　兎角呑まねば持てるものぢやない。着せてくれ〳〵。
野邊の狐火小夜更けて。
ト唄を唄ひ〳〵、ひよろつきながら、この間に、子供、金右衞門に着物着せる。
長門　コレマア、酒どころぢやない。わしが云うた事、味ようして下さんせぬかいなう。
金右　サア、好いやうにするわいなう。いぢつておくれな小夜嵐。
ト唄ひ〳〵着物着る。
喜右　これはマア、久し振りで此方の內へ來て、何を其やうに、金右衞門さんを苛らつしやりますぞいの。
惡介　旦那、なんでござりまする。
喜右　釆女さんに逢はしてくれといふ。
ト唄にて云ふ。
その釆女さんの事で、お前の親方才助も、煩らひ附いて居る。此方も掛けの殘りもあれど、金右衞門さんの顏で、これまでは來たが、アヽ、拂ひ口のさつぱりとせぬお人

ぢやて。
惡介　今日は紙花の算用してもらはうと思うても、皆怖い衆ばつかりで取卷いて居るに依つて、釆女さんの側へも寄られる事ぢやない。
まん　こなさんもマア、お客の事は好う云うたがよい。紙花のなんのと、下さるゝ人さんではある。
喜右　イヤ〱、取る物取らにや云はにやならぬて。
まん　ほんに、世の中に太鼓持ち程、厚皮なものはないわいの。
禿一　貰ふ時には箔の付いたやうに云うて、強い爪ではある程にの。
禿二　爪の長いので思ひなしか、猿のやうな顏ぢやわいなう。
禿三　これから、猿坊さんと云はうわいなア。
三人　ヨウ〱、猿のもちさま〱。
惡介　オヽ、猿となと狒々となと云はれても、欲しうて〱身の毛がぞく〱立つやうなわい。
喜右　おりや又欲しうて、骨がカチ〱鳴るわいやい。
長門　金右衛門さん、お前は家中の衆が、皆懇ろなに依つて、あの座敷へ行かんしても、叱る者はないぢやないかえ。
金右　恐らく我れらが呼び出しに行くのに、點の打ち手はないぢや。
長門　それぢやに依つて、呼び出して下さんせいなう。
金右　呼び出してやらう程に、おれが賴んだ事はどうぢや。
長門　賴んだ事とはえ。
まん　ソレ、逢夜さんの事ぢやわいなア。
長門　エヽ、姉さんの事かえ。サア、あのやうに嫌がらんすのに、妹の口からこぢつけられもせず。
金右　其方が明かねば、此方も明かぬでえすぢや。
　ト酒呑んで居る。
喜右　イヤ又、張りの強いも程が好い。あんまりぢやと思うても、パッ〱と金を撒き散らすが、金ありの太夫さんぢやに依つて、とんと頭が上がらぬ。
惡介　斯う云ふ結構な旦那どのを、跳ね散らかすと云ふは勿體ない。長門さん、姉妹の事ぢや。意見はならぬ事かい。
まん　サア、その結構な金右衛門さんに、逢はんせぬのが勤めの意氣張り。腹は立てさんな。生中お前が金でなさ

るゝのが、結句戀の邪魔ぢやぞえ。惚れたうても惚れられぬわいな。

金右　イカサマ、逢夜も少し負け惜しみの所もあるであらうて。

長門　今にもござんしたら、好いやうにする程に、此方の事を首尾して下さんせ。

金右　マア〱、此方の方の埒が明いてからの事。おまん、一つ呑め。これからの衣裳も前垂れも、おれが續けるワ。

まん　張り强う嫌ぢやと云ひたけれど、仲居にその氣はないわいな。

金右　どう見ても、われは粹ぢや。

長門　これ程頼むのに、聞いてもくれいで、いつその事自暴呑みの相せう。

ト呑む。

金右　こりや〱持てるワ。なんでも明日まで呑み明かすぞ。

喜右　アレ〱、あそこへ逢夜さんが見えるワ。

惡介　こりや面白うなつて來たぞ。

ト皆々酒呑んで居る。トぬめり唄になり、逢夜、傾城の形、傘さしかけ、禿二人付き出る。後より、吉兵衞、若い者の形にて財布を擔げ、松屋利兵衞、呉服屋の形にて出る。

吉兵　コレ〱太夫さん、人の云ふ事を聞き耳潰して、何所へ行くのぢや。

逢夜　わしぢやてゝ足があるもの、行く所へも行かにやならぬわいなア。

利兵　イヤサ、物の分立てをして行たがよいわいの。

吉兵　おれが勝負する。こなた、構はつしやるな。

喜右　これは〱逢夜さん、遲い來やうの。

惡介　長う細う待つて居るのに、ちやつと來てくれたがよいわいなア。

禿二　其やうに忙しなう云はんすな。歩みなさる間もあるわいなア。

まん　イヤモウ、お前の遲いので、奈良漬になつてゞな。

サア〱、爰へ來て下さんせいなア。

逢夜　わしや其やうに待たれる筈はないが。

ト見て

金右衞門さん、この間はすつきり逢はぬなア。

金右　アノ、揚詰めにしてすつきり逢はぬも、割の悪いの

ぢやといな。
ト欠伸して醉ひたる心。
長門　姉さん、逢ひたいと云ふは、わしぢやわいなア。
逢夜　妹と云や堅苦しい。長門さん、なんの用ぢやえ。
長門　外の事でもないが、金右衛門さんの事でござんす。
逢夜　妹のこなさんに、取持つてと云うてかえ。
長門　サア、わたしも頼む事もあり、これさへ埒明けたら、何やかや頼んで、品に依つたら身請けもしてもらふし、又これまでの仕打ちが惡い人さんでもないさかいに、姉さんにこんな事云ふは、どうやらがましいけれど。
逢夜　長門さん、姉妹連れで勤めすりや、差合ひぢやのないんのと、そんな野暮な事ぢやない。嫌な好かん客ならば、一夜流れに帶紐解いて、抱かれて寐ても勤めの不請ぢやと思や苦にもならず、夜が明けると忘れてしまふが、此方にも商賣、どうやら思惑のある、この人ならばと思ふが否や、張り強うして浮氣か眞實、顏盡して止めにするが、どこまでも突ッ込むか、此方の胸に合ふまでは、逢ふとは云はぬぞえ。こなさんも其やうに、淺墓では男に騙されて、手の裏返すやうな目に遭はんせう。少と嗜なまんせく。
長門　其やうに云はしやんすと、どうも云ひやうがないわいなア。
金右　どこまでもこの金右衛門が、息の續くだけ行て見る氣ぢや。マア、さう心得なされ。
逢夜　わたしもお前の息の切れるまで、行て見やうわいな。
吉兵　イヤ、街妻にかゝつて、親方の息切らす事はならぬわい。
金右　イヤ、最前より強勢に呼はるは、吉兵衛ぢやないかい。
吉兵　親方、この太夫に達引があるに依つて、付いて廻るぢや。
金右　達引とはなんぢや。
利兵　イヤ、金右衛門さん、呉服屋の利兵衛でござります。爰に居る太夫どのが、衣裳が出來ぬと云うて、この吉兵衛どのが請合つて、この着て居やる襠から衣裳帶まで、ぐつすりと切つて、しかも現金の約束が、粒三文おこしやらぬに依つて、この中から、逢つたら顏の皮も着るものも引剝いてのけうと思うて居ても、今日は竹田

の芝居を受取つたに依つて、御用の事なり、取紛れてえ云はなんだ。吉兵衞どのと三つ鼎になつたに依つて、金取るか剝いで去ぬるか、二つ一つぢや。サア、返事聞かうわい。

吉兵　おれも面妖、親方の相方ぢやに依つて、よもや不自由はあるまいと、思ひ〳〵請合うたが、樣子を聞けば振つて〳〵振りつきやるげな。もう門中でも揚屋でも、でんどで顏の皮剝かにやならぬ。それとも親方の心に從ひさへすりや料簡せう。サア、返事はどうぢや。

逢夜　子供、莨。

禿　アイ〳〵。

ト持つて來る。つけてやるとのむ。

吉兵　人に物を云はして、好い加減にあんだらにせいよ。一體マア

ト側へ坐る。煙管の燒けた顏へちやつと當てる。

吉兵　熱々々。

逢夜　アノ、銚子持つておぢや。

禿　アイ〳〵。

ト金右衞門の側にある銚子杯持つて來る。

逢夜　おまんどん、久し振りぢや、吞まんせんか。

まん　ほんに久し振りぢや。一丁入れらかいな。

逢夜　先度の夜通しの二日醉ひ、今に頭痛がするわいな。

ト吞む。

金右　相がしたいなう。

まん　逢夜さん、相せうといなア。

逢夜　イヽエ、こなさんに吞まさにやどうもならぬ。

まん　又こじつけかいな。

利兵　あれぢやに依つて、吉兵衞どの、こなたを强請るのぢや。

吉兵　なんであらうと、丸裸にして渡しさへすりやよいワ。

ト立ちかゝらうとする。

金右　コリヤ默れ。待ち給へ〳〵。

吉兵　イヤサ、あんまりでごんすわいなう。

金右　ハテマア、默れと云うたらお默り候へ。

ト錦の袋に金入れたを抛り

これは如何に女性、其所に一歩が百五六十に小判が七八十兩御座候ふ。昨夜から遣ひ盡して、それぱかりにても、どうぞ貰うて給はり候へ。

ト謠のやうに云ふ。

逢夜　をかしい事ぢやなア。どう云ふ譯で金下さんすえ。
金右　ハテ、ねだりくさい。どうの斯うのと云ふ術なし。高が我れらは客、其許は女郎、お山に金遣るが法度か。
逢夜　さう云はんすりや一言もない。粹がつて下さんした金、力まずと貰うて置かう。
金右　お貰ひなされて下され。千萬祝着に存じます。
ト辭儀する。
逢夜　ほんに不思議な金貰うたわいな。
金右　イヤ、キッと恩に着るでえす。ナニ、呉服所の、貴公の借錢とて、高が着て居るだけの事なら、百兩位で剩るワ。
利兵　オヽ〳〵、半分剩ります。
金右　サア〳〵、其方の、存分貰うてお歸りなさい。
利兵　さらばお金を貰ひませうかい。
逢夜　喜右衞門さん、一つ呑まんせんか。
ト金五兩程抛りやる。
惡介　呑まいでなんと致しませう。
喜右　先づは某、一つキウッとやつて。
ト呑む。
逢夜　あんまり見事ぢや。押へうわいな。

トまた金抛り遣る。
惡介　オッと、お相いたしませう。
ト呑む。
逢夜　相とはよいわいなア。
トまた金抛る。と二人して拾ふ。吉兵衞、利兵衞、キヨロキヨロする。
逢夜　おまんどの、アノこの中誂らへてもらうた鏡は、まだ出來ぬかや。
まん　追ッつけ出來るわいなア。
逢夜　こなさんに頼む程に、これ遣つて下さんせ。
ト金遣る。
まん　オヽ、滅相な。こりや過ぎるわいなア。
逢夜　だんないわいなア。取つて置きいな。ほんに忘れた。子供に約束した芥子人形、持つて來て置いてから。
ト袂から香箱を出し
コレ、欲しがりやつた芥子人形、この中に四角な金がある。これも人形の内ぢや。皆拾や。鬼やア外、福はア内。
ト芥子人形に一歩を交ぜて抛る。
皆々　ソレ、ちやつと拾やいの。
禿　まんがちなしやんないなう。

喜右　コリヤ、一歩が降るワ。
惡介　これが拾はずに居られるものか。
ト皆々奪ひ合ひ拾ふ。小判も皆々へ撒く。
逢夜　サア〳〵、もうしまひ〳〵。金右衞門さん、これから奧座敷へ行て呑み直さう。今夜はキッと付合ふぞえ。
吉兵　見たか。興も明日も覺め果てた衒妻ぢや。
利兵　千も萬もない。サア金受取らう。
吉利　金出せい。どうぢや。
逢夜　オヽ、忙し。立てるわいなア。
利兵　サア。今受取らうわい。
ト逢夜、上下着る物脫ぎ、白無垢になる。
逢夜　子供、ソレ、あのさんへやりや。
禿　アイ〳〵。
ト利兵衞が側へ置く。
利吉　これは。
逢夜　買うた物返しさへすりや、よいと云はんしたぢやないか。
利兵　サア、さう云うた。
逢夜　それぢやに依つて返すわいな。
利兵　サア、これさへ取れば云ひ分はない。

逢夜　ト不承々々に云ふ。
金右衞門さん、お前は粹で下さんした金ぢやけれど、此方の氣では、難儀を救うてもらうたと、心の張りが殺みやんす。强い所も憎い所も、引ッ包めて惚れてもらはにや、靡いた時に甲斐がない。わたしや色はないぞえ。間夫ゆゑに强いとばし思はんすな。お前の心を見拔くまで。眞實なら付いてごんせ。わしが心の得心するぞ、わしが手に待つて居るぞえ。
吉兵　わりや外聞は思うはないか。
逢夜　借錢でお山が裸になる事が、なんの外聞。オヽ、寒。サア、皆さん、奧で呑まう。金右衞門さん、今夜は呑むぞえ。子供來いよ。
禿　アイ〳〵。
ト逢夜、奧へ入る。皆々、後にて呆れる。
喜右　ても、えらい者ぢや。
金右　けうといもの。おれが嬶にする奴は、彼奴ならでないぞ。えらい者ぢや〳〵。
トがた〳〵云ひ〳〵寢る。
吉兵　コレ、其やうに嬉しがつてばつかり居ずと、まだ外に云はにやならぬ事がある。コレ〳〵。

ト金右衞門、癇かく。

利兵　根ッから他愛がない。

喜右　金取らうと思うたに、エヽ、顋が違うた。

まん　いつそ太夫を客にして、奥で呑まうぢやないか。

喜右　金右衞門さんは、少つとの間爰に寐さして置かう。

吉兵　それがよい〳〵。

利兵　目の覺めるまで利兵衞さん、奥で呑まんせ。

喜右　この着る物は預かつてもらはう。

吉兵　金貰うたお禮酒、泡盛と出かけう。

喜右　それよからう。

ト騷ぎ唄にて、皆々入る。

長門　サア、ござりませ。

なんの事ぢや。折角賴まうと思うて居る事は脇へやつて、わし一人が跳ね出しものになつた。搖つたと云うて起きはさんすまいし、と云うて法事の座敷へ行たら。采女さんの首尾が損ねうし、エヽ、辛氣な事ではあるぞ。

トひん〳〵して入る。トめりやすのうちに吉兵衞出て

吉兵　親方々々。根ッから他愛ぢや。コレ、其やうに酒に醉うては、今夜の船の事は。

ト金右衞門、ちやと起きて

金右　シイ……エヽ、仰山な。人が聞くわいの。

ト向うへ連れ出て

留布は持つて來たか。

吉兵　さゝやき筒は持つて來ました。

金右　ドレ。

ト筒を取つて、花道へ向けて、差當て物云ふ。向うより、淺葱鐵砲袖の者、數多走り出て、花道へ並ぶ。

金右　皆、用意はよいか。

手下　殘らず四斗樽に詰めて海へ。

金右　今夜にせう。

吉兵　用意させませう。

金右　待つて居い。

皆々　心得ました。

金右　行け。

ト吉兵衞、留布を擔げ、皆々向うへ走り入る。唄になり、金右衞門、奥へ入る。と長門を彈正追はへ出て、捉まへ

彈正　サア、してやつた。

長門　彈さん、振つて〳〵振りつけても、まだ嫌らしうさ

んすかいなア。

彈正　これが嫌らしうせいで、どうなるもので。われさへ應と云や身請けする程に、親方才助と契約して置いた。大名の伯父でも、戀と云ふ曲者には、太刀も刀も打ち果てるわいやい。

ト抱きつく。

長門　尋ぬる人には逢ひもせいで、アタ嫌らしい、嫌ぢやわいなア。

彈正　われが嫌がる程、おりや猶どうもならぬ。

長門　アタしつこい。嫌ぢやと云ふのに。

ト突き放す。

彈正　否でも應でも。

トまだ取りつく。

長門　エヽ、嫌と云ふのに。

ト突き飛ばす。彈正、井戸の側へバッタリと手をかける。井戸の内より、寶物を刀の鞘に括り付け、ヌッと出す。悔りする。長門は右の形にて走り入る。彈正、不思議なる思ひ入れにて、右の寶を取り、とくと見る。

彈正　こりや、家の重寶、五三の籏。

トいろ〳〵思ひ入れあつて、また井戸の側を手で叩く、また綸子の袋を鞘に付けて、ヌッと出す。これも取つて

こりや官符の綸旨。ムウ。

ト井戸より、忍びの者一人出て

忍び　荒浪道丈さま、仰せつけられました

ト見て

ヤア、こなたは伯父御彈正さま。

彈正　其方は喜崎伴内。

忍び　南無三。

ト切つてかゝる。立廻りあつて、切り殺す。石塔の垣の中へ逃げ込む所を止めを刺す。所へ荒波道丈、出て、あたりを窺ひ、思ひ入れして、井戸の側へ寄り、井戸側を手で叩く。何者も出ぬゆゑ、面妖なと云ふ心得にて、何遍も叩く、彈正、後へ立ち

彈正　荒浪道丈。

ト悔りして

道丈　伯父御彈正さま。

彈正　其方は何して居る。

道丈　サア、拙者めは。

彈正　其方も國家が欲しいか。
道丈　なんと。
彈正　二種の寶は彈正が受取つた。
道丈　すりや、伴内を。
彈正　ぶち放してしまうた。
ト道丈、拔いて切りかゝろ。立廻りあつて、彈正、刀を踏まへ、キッと見得になつて
志しが面白い。味方に付け。
ト連判狀拋り出す。道丈、片手にて、連判狀開き
道丈　ムウ、すりや、伯父御樣にも。
彈正　知行を分けられ、家來同然に家老どもに對座する、無念やむ事を得ず、去年兄大外記が急病にて相果てたも身が仕込んだ毒藥サ。
道丈　ハテナア。
彈正　其方が心底を見拔き、味方にする。家を押領してもあらば、半國分け遣はさう、道丈、返答が聞きたい。
道丈　頼もしい御心底。疾にそれを知つたらば、合體いたさうもの。未だ跡目定まらぬ家國、後室は御病氣、喜崎伴内に申しつけ、この空井戸より寶藏までの拔け道。寶を盗ませ、預かりの喜村將監親子の奴等に腹切らせ、二種の寶を以て、家國を一呑みと思ひ立つたる道丈。如何にも合體仕らう。して、合體の印は。
彈正　家國半分遣はさうと云ふ固めの印。
道丈　二つの寶を一種づゝ。
ト官符の綸旨をやる。
彈正　兩人が所持すれば、其方も二心はあるまいがな。
ト道丈、連判狀に血判して
道丈　荒浪道丈。お味方でござりまする。
ト彈正、連判狀を取つて
彈正　出かいた、まだ申し合す仔細もある。道丈、奧へ參れ。
道丈　先づお入りあられませう。
ト唄になり、兩人、下座の方へ入る。采女之介、湊姫、奧より出る。
湊姫　コレ〳〵、其方は何所へ行きやるぞいなう。
采女　何所へ行きやるとは、お嗜なみなされませい。菩提所の住持、一家中も並んで居る所で、いろ〳〵の事をなされますわいの。
湊姫　サア、それでわしが人の見ぬ所へ、おぢや〳〵と招いたり、目はじきしても見ぬ顏して居やるに依つて、い

つその事と側へ寄つたら、ちやつと爰へ逃げておぢやつた。それ程わしが嫌かいなう。

采女　よう思うても御覽じませ。お前はお主、私しは家來。

湊姫　なんの大事ない。別に家の娘と云ふぢやなし、こちや種ケ島時高の娘ぢや。エヽ憎てらしい。

ト抓る。

采女　アイタヽヽヽ何なされますぞいの。

湊姫　わしがちよつと觸つても、オヽ痛さうなものぢや。コレ、其方を退けて外の男に、一生肌觸れぬと云ふ心の誓ひ。ソレ見や。

ト起證を出し見せる。采女之介、取つて見る。長門、出て居る。

采女　起證文の事、エヽ。

湊姫　なんと、それでも應と云うてたもらぬか。

采女　成る程、お志しは有り難うございますが、私しには

湊姫　傾城の長門とやら、深い仲ぢやと云やるのか。

采女　よう御存じでござります。

長門　しかもお腹に物云ひのある女房ぢやわいな。

采女　エヽ、出なと云ふのに。

ト切ながる。

長門　これが出ずに居られるものか。久しう顏見せさんせん依つて、今日の御法事に逢はうと思つて、大抵氣を揉んだ事ぢやないわいな。

湊姫　ムウ、其方が傾城ぢやな。

長門　それがなんとしたえ。

湊姫　ならぬぞ。ずんとならぬ事ぢや。采女之介には忝なくも、宗の大外記が娘、湊姫と云ふ女房がある。慮外ながら、大名のお娘樣がお惚れなされたぞ。其方等がやうな傾城風情は叶はぬ事ぢや。

長門　なめくさつたなう。大名の娘でも、勤めする傾城でも、抱かれて寐る蒲團の内に、高い事も低い事もござんせぬ。其所が五分なうて玉の輿。もうこのお腹には采女さんの胤がある。アイ、叶はぬ事ぢやわいな。

湊姫　采女之介、爰へおぢや。

ト采女之介、うぢ〳〵する。

主の呼ぶのに來ぬか。

采女　ハイ〳〵、參じました。

湊姫　なんと、主程きついものはあるまい。主の御諚ぢや

ぞ。お主の威光ぢや。釆女之介、わしを抱いて寐い。キ
ッと云ひつけたぞ。
釆女　委細畏まり奉つてござります。
長門　釆女さん、爰へござんせ。ハテ、ござんせと云ふの
か。
釆女　オッと〳〵。
ト長門、側へ寄る。
長門　なんと、賤しい傾城でも、男をしこなすは、ザッと
こんなものぢや。又それは外の女中の行かぬ事いな。
湊姫　釆女之介、爰へ來い。來いと云ふのに。
釆女　ハイ〳〵。
ト側へ行く。
湊姫　キッと女夫ぢや。云ひ付けたぞ。
釆女　いかい御造作でござんす。
長門　釆女さん、爰へござんせ。
釆女　オッと〳〵。
湊姫　其所動くな。
釆女　ハイ。
湊姫　サア、もそつと側へ寄りや。
ト釆女之介、息詰む。

長門　コレ、側へ寄るまいぞ。
釆女　オッとせう。
湊姫　ハテ、此方へおぢやいなう。
ト手を持つて引寄せる。その手を拂ひ
長門　なにを、アタなめた。
ト釆女之介が手を引いて、あつちへ行く。湊姫、また
手を取つて、角の方へ連れ行き
湊姫　此方へおぢや。
長門　イヤ、此方へござんせ。
湊姫　イヤ、此方へ。
長門　イヤ、此方へ。
ト引ッ張る。
釆女　コレ〳〵、腕が抜けるが、いつそ片身づゝ喰うたが
よい。
湊姫　そこな傾城、わしが戀の邪魔すると、家老どもに云
ひ付けて成敗するぞ。
長門　見事なるならして見たがよい。
湊姫　して見せう。
長門　イヤ、こなさんは。
湊姫　イヤ、其方は。

ト摑み合ふ。笙篳篥になり

采女　これは亂騷ぎぢや。

ト云ひ〳〵取押へる。ト此うち長兵衛、淺黄の鐵砲袖にて出る

長兵　親方は爰にか。金右衞門どの〳〵。

ト云ひ〳〵この中へ入るを、二人して捉まへ、振り廻し、顏を見て

湊長　エヽ、阿房らしい。

ト突き放す。

長兵　コリヤ、なんとするのぢや。

ト云うて寄るを、采女之介、投げる。此うちに、軍藏、出て

軍藏　お姬樣〳〵、こりや爰にぢや。

ト云ふを父、胸倉捉まへ振り廻す。

長兵　わりや、投げたぞよ。

ト采女之介と取違へ、軍藏を投げる。

軍藏　おのれ。

トかゝる。采女之助を女形捉まへようとする。また摑み合ふ。軍藏、姬を捉まへる。この間に、長兵衛は投捨てにして、奥へ入る。いろ〳〵して、采女之介は長門を引分け、軍藏は湊姬を引分け、四人ながらヽウ〳〵云うて居る。

軍藏　息が切れるが、こりやマア何事ぢや。

采女　なんのかのと云ふ事はない。お姬樣を奥へ連れて行て下さい。

軍藏　コレ、お姬樣、わしぢやと云うて、まんざら捨てられた男ぢやないぞえ。

湊姬　エヽ、聞きたうない。

ト平手で顏を喰はす。

軍藏　アイタヽヽヽ。

湊姬　わが身を。

ト長門にかゝらうとする。

軍藏　ドッコイ〳〵。

ト留める。

采女　コレ〳〵軍藏どの、諸事はおれが呑み込んで居る。お姬樣を連れまして行て下され。

軍藏　そんなら、最早身がお姬樣の事を、よう知つてお居やるか。

采女　なんぢや知らぬが、知つて居る。早う行かつしやれ。

軍藏　アヽ、惡事千里ぢやなア。シタガ、この事は必らず沙汰なしぢや。合點か。

采女　沙汰なしぢや〳〵。早う連れて行て下され。

軍藏　エヽ、忝ない。サア、ちよつと奥へござりませ。

湊姫　イヤ〳〵、聞かぬ〳〵。

軍藏　聞かいでも聞いてもらはにやならぬ。

ト湊姫を無理に引立て入る。

采女　コリヤ、其やうに氣を揉むと、腹の子が動くわやい。

長門　どうであんな事ぢやあらうと思うた。なんで廓へござんせぬぞ。

采女　さればいやい。來るに如才はなけれどな。

才助　揚げ代の算用がならぬに依つて來ぬのか。

ト ぬつと出る。

采女　才助ぢやないか。

才助　才助が。采女之介さま。こなさんは武士か侍ひか。この太夫を突出しに、ヌッと出すが否や、揚詰めにして外の客にはちよつとも逢はせぬやうにして、揚句の果には、ぼてれんになつたに依つて、それを強請れば金もおこさずに、揚詰めを棒に引き、こちらに結構なお客があつて、いつそ腹な物は共に身請けせうと云ふお方があれど、こなさんが邪魔になつて、才助が身代は滅却する。今日の法事には、否でも應でも來ねばならぬこなた、待つて居て火の手上げるのぢや。サア、二百九十九兩三歩、今日までの揚げ代今貰はう。取らにや置かぬぞ。

采女　尤もぢや〳〵。おれに如才はなけれど。

才助　如才があらうがあるまいが、金取らにやならぬ。

采女　さればやい。

ト右のせりふのうちに、金右衛門、長兵衛を連れて、橋がゝりの方にて囁き、長兵衛、忍び込んで走り入る。金右衛門、空を眺める。目を繰つて居るを、采女之介、見付け

采女　金右衛門ぢやないか。

金右　采女さま。

采女　好い所で逢うた。才助、金立てるぞえ。

才助　金さへ立てばよいでござりまする。

采女　サア、金右衛門、急な事がある。金參百兩いま貸してたも。

金右　滅相な。三百兩と云ふ金が、どう急に出來ますもので。

采女　ハテ、じやら〳〵云はずと貸してたもいの。
長門　貸して上げて下さんせいなう。
金右　あれば御用に立てまする。とんとござりませぬ。
采女　嘘をつくないやい。
金右　イエモウ、皆にして三文もござりませぬ。
采女　外の事ぢやない。揚げ代をやらねばどうも濟まぬわいやい。
金右　それでも、ありもせぬもの。
采女　實正ないか。
金右　ござりませぬ。
采女　ないぢやな。
金右　とんとござりませぬ。
采女　措け。太い奴ぢや。それでよいかよ。
金右　さう御立腹なされて下さりましては、迷惑でござりまする。
采女　何が迷惑。コリヤ、おれをなんぢやと思ふ。こなたの親御は算所改め、唐人船や阿蘭陀船が入ると、荷物の改め、渡海の吟味する役ぢやが覺えて居るか。われは家中へも金を貸したり、廓でも金を澤山に遣ふが、一體われが商賣はなんぢや。云はぬぞよ。少々の事は大目に見て居るが情ぢや。それに急な難儀で、貸せと云ふ金を貸すまいとは、コリヤ、われに金借りて、おれがいつ濟ました事がある。
金右　御尤も〳〵。
采女　一昨年の冬も急な入用があつて、二百兩云うてやつたらば、早速持つておこした。おりや一言の禮も云うた事はないぞよ。
金右　御尤も〳〵。
采女　その上、五十兩三十兩の端下金借つたのは、幾度と云ふ數も限りはないが、ついに返したか。サア、云うて見い。一文も返した事はないぞよ。
金右　御尤も。
采女　まだある。おれが廓へ通ふ紋日物日には、太夫が衣裳から新造の總揚げ、その外の付け屆け、雜用から仲居男の祝儀まで、おれに斷わりもなしに、内證でわれが皆拂うて置いたは、それでもおれはチッと押默つて居るぞよ。
金右　御尤も〳〵。
采女　そのおれが恩を忘れて、僅か二百兩の金を貸すまいとは、貸すな。われが貸さにや又、此方も仕様がある。

アノ不埒者めが。

金右　さう仰しやると、一言も詞がござりませぬ。どうぞ才覺して進ぜましたいが、何を云うても爰に持つて居ぬに依つて、これは困つた事ではある。

ト云ふ所へ、利兵衞、出て

利兵　これはひどう隙が入つた。

ト行かうとする。

釆女　呉服所利兵衞でないか。

利兵　釆女さまでござりまするか。

釆女　幸ひの所で逢うた。この間云うてやつた一儀を。

利兵　イヤ／＼、申し、仰しやりますな。せき／＼御狀下されますけれども、あの金の儀は、お役に立てまする事はなりませぬ。親御將監さまが御合點の事なれば、そりや三百兩や五百兩の事は、お取替へも申しませうが、内證でお借りなされまする金は、えゝお貸し申しませぬ。手短かに、ならぬでござりまする。

釆女　さう云うてたもつてはどうもならぬ。そこをどうぞ。

利兵　ハテサテ、達て仰しやるとコレ

ト狀を出し

お前から來た狀ぢや。賴み置き候ふ儀、いよ／＼首尾なし下さるべく候ふ、他へ漏れざるやうに、密かに／＼、一大事の事に候ふ、喜村釆女之介と、べつたり書いてある。お前こそ一大事なれ、こちやなんともないわいの。アタ橫柄な。

ト狀を打ちつける。

釆女　おのれは武士の書いた狀を打ちつけたぞよ。

利兵　打ちつけませいぢや。

釆女　なんで打ちつけた。

利兵　なんでとはお前。

ト せり合ふ。この間に、道丈、ソッと出て、右の狀を拾ひ入る。

金右　サア、マアよいてや。サテ斯うぢや。あなたも急に金の要る事がある。おれも困つて居る所ぢや。相應な質と云ふやうな事があるなら、貸したがよいわいの。

利兵　金右衞門さんの挨拶ぢやが、質さへあれば貸すまいではない。素で貸しては踏まれる事が、見す／＼見えてあるわいの。

金右　釆女さま、なんぞ質種はござりませぬか。

釆女　質物と云うたら衣類大小、これがどうやられるもの

で。
才助 懷中にはないかいの。
釆女 鼻紙入れに伽羅がちつと。人參が少しばかり。
長門 ある〱。キッとあるぞえ。
釆女 何がある。
長門 先刻に貰はんした、お姫樣の起證がある。持たして置いて結句修羅の種ぢや。これ質に入れさんせ。
ト懷中より取出す。
釆女 阿房らしい。これが何になるものぞ。
金右 イヤ〱、それはいつち好い物ぢや。ドレ〱。
ト取つて
これぢや〱。利兵衞どの、金はおれが返しに行かう。それまでの質ぢや。三百兩貸してもらはう。
利兵 こりや、起證ぢやないかえ。
金右 三百兩には好い質ぢや。當國のお姫樣の直筆、なんぼなりと金貸して、濟まぬ時には、親御の將監さまへ云うて見たがよい。どのやうな事があつても請け戻さにやならぬ。それを否と云ふと、お姫樣の浮名が立つて、將監さまの家は斷絕する。これ程丈夫な質はない。そこまではやらぬ。おれが請け戻しに行くわいの。

利兵 成る程、そこもある。如何にも貸しませう。三百兩で月に三十兩づゝ步がかゝるが合點か。
金右 呑み込んで居るわいの。
才助 サア、奇妙な物で金の埒が明いた。
釆女 金右衞門、いかい世話ぢや。どうでもわが身でなけりや埒が明かぬわいの。
金右 シタガ、大事の物ぢや。麁相のないやうにしてもらはう。
利兵 此方も大事質ぢや。そゝけさしもせぬ。
釆女 才助、金受取れ。
才助 ハヽ、イヤモウ、有り難うござりまする。
釆女 金と云ふと、あの顏わいの。
利兵 才助、大儀ながら此方まで取りに來てもらはう。
才助 そんなら、連れ立つて參りませう。
利兵 サア〱ござれ。
ト才助を連れ、利兵衞入る。ト半鐘打ち、笙篳篥になる。
釆女 アレ、もう追ッつけ燒香前ぢや。斯うしては居られぬ。
長門 大事ないわいなア。

ト逢夜をおまん肩にかけて、喜右衞門、禿七人、皆々出る。雜色、割竹を持つて出る。岩城主計、付き出る。
主計　最早御燒香ぢや。一人も殘らず大門口へ行て、密かに致せ。客どもは追ひ出したか。
雜色　サア〳〵、一人も叶はぬ。行け〳〵。
ト割り竹をバタ〳〵する。
逢夜　なんぢやいなア。モウ〳〵泡盛はいけぬぞ。これから金米糖に薄茶と出かけにやならぬ。
トこの間に、采女之介、奧へ主計に隱れて入る。長門、見失うたる心、雜色に隔てられて居る。金右衞門は下座の方へ、思ひ入れして入る。
まん　コレ、御法事が始まるといなア。
逢夜　御法事。ムウ、御法事よからう。薄茶より煎じ茶の焙じたのがよい。どなたか御法事なさるゝなら、よう焙じてもらひませう。
主計　ソレ、早く追ひ出せ〳〵。
ト云うて見る。
雜色　サア〳〵、早くうせう〳〵。
ト叩き立てる。
禿　行くわいなア〳〵。

雜色　行けと云ふに、うせぬかい。
ト割り竹にて叩き立てる。皆々怖がり、逢夜を捨て、橋がゝりへ入る。雜色は逢夜を見落して、皆々追ひ立て、橋がゝりへ入る。と合ひ方になり
逢夜　これはどうぢや。今の割り竹さん、一人取殘してあるわいなア。分け隔てさんすは、氣の惡い割り竹さんぢやなア。ハア、そこらあたりがクル〳〵舞ふがな。ヨウヨウ、廻つて〳〵。モウ〳〵どなたの御意でも、爰動きやせぬぞ。モウどうもならぬ。
ト云ひ〳〵轉げる。雲太郎、阿房の形。木綿布子、脚絆、尻からげ、これに狀箱、澁紙にしたみかけ、手拭横鉢卷にして、向うより出て內へ入る。あちこちキヨロキヨロ見廻し、逢夜が寢て居るを見て、側へ寄つて耳の端で、一文笛を吹く。逢夜、ズッと起きて、あたり見廻し、向うへ連れ出る。雲太郎、首に掛けて居る狀箱を渡す。逢夜、狀箱を明ける間、雲太郎、懷中より燒餅を出し喰うて居る。この間、下座石塔のある所より、金右衞門、見て居る。逢夜、狀を讀む。金右衞門、五輪の塚の上へ上がり、懷中より延べ鏡出し、上より映し見て居る。

逢夜　阿房よ。もう返事はせぬ。刻限は丁度好い程に、待つて居ると云へ。
雲太　アイ。
逢夜　早う行け。
雲太　ホイ。コレ、足が擂粉木になる。
ト云ひ〳〵燒餅を嚙りながら、向うへ入る。
逢夜　マア、これはよいワ。時に、これさへ手に入ればト金右衛門と顏見合せ、チッとなる。
金右衛門さん、お前、其所に何して居さんす、
金右　あんまり醉うたに依つて、ちと風に吹かれうと思うて。
逢夜　ハテ、をかしい所で涼んだものぢやなア。
金右　貴樣は靡いてくれず、外の女子を抱いて寐る氣はなし、いつそ大名の石塔になと抱きついて居るぢや。
逢夜　この九州の沖には、松浦小夜姫さんとやらが、男を慕うて比禮振山の石にならんしたと云ふが、お前も石になつてくれる氣かえ。
金右　石は愚か、木片にでもなる氣ぢやけれど、誰れも石にしてくれる者もなし。
逢夜　談合せうかえ。
金右　もう大概ならしてもよからう。
逢夜　爰へごんせ。抱き下ろしに行かうかえ。
金右　イヤ、此方に手も足もあるでえす。抱いてもらうて轉けたりや、大事の赤貝に開帳させる事ぢや。
逢夜　折角抱いて上げうと云ふに、お氣に入らざ御勝手。こちや醉ひ醒しに爰で寐轉ぶぢや。
ト笙篳篥になる。と彼方向いて枕して寢る。金右衛門、塚の上より下りて、思ひ入れして、抱きつかうとして
金右　抱きつきたいけれど、また跳ねられたら怖い。措きませう。
ト坐る。笙篳篥合ひ方。逢夜、起き上がり、あたりを見て、思ひ入れ、いろ〳〵あつて、後より抱きつく。
逢夜　オヽ、寒。
金右　オ、寒。
逢夜　金右衛門さん、疑ふではないけれどな。
金右　心中見せいか。
逢夜　マア、そんなもの。
金右　指なりと腕なりと。
逢夜　イヽエ、其やうな小さい心中は嫌、わたしの心中は、これを。

ト後より抱きながら、懷劍にて咽喉笛掻かうとする。
金右衛門、留めて

金右 ちつとこの心中は見せ憎い。

逢夜 お前、今の狀を。

金右 阿蘭陀渡りの延べ鏡、蟻の匍ふまでそつくりと映して見た。

逢夜 眞實女房に持つてくれる氣か。但しは否か。聞きたいわいなア。

金右 合點のゆかぬ女子ぢやの。イヤ心の底が知れぬわの、それなら否、これなら應と、はし選みする氣なら、初手から惚れやせぬぞや。

逢夜 例へわたしの本性が、どのやうな者にもせよ。

金右 地獄の底まで見屆けるが男の役。

逢夜 金澤山な金右衛門さんと、見込んだが此方の意氣張り。

金右 底意の知れぬ女郎に、惚れ拔いたが此方も意氣張り。

逢夜 お前の商賣。

金右 其方の身の上。

逢夜 女夫になつて合體したら

金右 互ひの爲にもなりさうな事。

逢夜 必らず二世かけて

金右 親方へ直ぐ行て

逢夜 身請けさんすか。

金右 女房ども。

逢夜 こちの人。

ト抱きつきさうにして

金右 イヤ待て。行て來う。

トつゝと行く。唄になる、金右衛門、橋がゝりへ入る。
逢夜、思ひ入れいろ／＼あつて

逢夜 これもマア、此方の思ふ壺へは行たが。

ト篳篥の樂高う聞える。合ひ方止む。逢夜、橋がゝりの障子屋體の内へ忍ぶ。唐和和尚、同宿を連れ、燒香持ち出て、塚の前へ直す。彈正、上下にて出て、湊姫、將監、主計、藏人、釆女之介、軍藏、道丈、皆々上下にて出て、よろしく並ぶ。

和尚 御燒香の刻限でござりまする。

湊姫 マア、彈正さま、御燒香なされませい。

彈正 イヤ／＼、身は家來分の事。先づ其方いたされい。

湊姫 然らば左樣いたしませう。

ト立つて燒香する。その次彈正なり。

彈正　雁平、申しつけた持物て。

雁平　ハア、。

ト三方に菓子を積み持ち出る。始終筆算葉ない。彈正、これを供へ燒香する。

將監　傳助、申しつけた物持て。

傳助　ハア、。

ト同じく三方に盛り物積んだるを渡す。これを供へ燒香する。

軍藏　申しつけた物持て。

侍ひ　ハア、。

ト同じく三方に盛り物出す。同じく供へ燒香する。

采女　和田平、申しつけた物持て。

侍ひ　ハア、。

ト花瓶に花を立て、右の侍ひと同じやうに持ち出て渡す。受取り供へ燒香する。和尚、拜むうちに、垣の内に死骸のあるを見付けて

和尚　ヤア、この内に死骸がござりまする。

將監　ナニ、垣の内に死骸があるとは。

藏人　こりや、正しく喜崎伴内が死骸。

彈正　伴内が爰に殺され居るは心得ぬ。キッと吟味しやれ。

主計　思ひがけない死骸が。

藏人　この場にはどうして。ハテ心得ぬ。

ト橋がゝりより、股立ちの侍ひ四人、ツカ〳〵と出て、將監が前に詰めかけ取卷く。佐久間丹兵衞、衣裳上下にて出る。

皆々　これは。

丹兵　將監どの、寶の儀に付き、後室樣より火急のお召し。

將監　アノ、寶の儀に付き

皆々　お召しとな。

ト向うより

呼び　毛利基成さまよりのお使者。

藏人　思ひも依らぬお使者。

主計　思ひも依らぬ火急のお召し。

將監　伴内が最期の體。

彈正　詮議は道丈、申しつけたぞ。

道丈　畏まつてござりまする。

丹兵　將監どの、早く〳〵。

采女　お覺えがござりまするか。
將監　少しも案じる事はない。何れもはお使者の樣子聞き
　屆けて、知らせを待つぞ。
采女　畏まつてござりまする。
道丈　死骸を奧へ持て。
彈正　軍藏、使者を出迎へ。
軍藏　お使者、こちらへお通り申されませう。
　ト引ッ張りにて、笙篳篥、將監を四人の侍ひ、詰めか
　けながら丹兵衛付き添ひ、橋がゝりへ入る。死骸を同
　宿に持たせ、道丈奧へ入る。向うより、成合玄蕃、衣
　裳上下にて出る。右何れも一時なり。
軍藏　お使者、御苦勞に存じます。
玄蕃　毛利基成が家來、成合玄蕃と申しまする。其許の御
　家名は
軍藏　相良軍藏と申しまする。イザ、これへお通りあられ
　ませい。
　ト玄蕃、本舞臺へ座る。
藏人　お使者御苦勞、即ちあれにお渡りなさるが當家の
　息女湊姫、伯父御宗の彈正。斯く申すは瀧川藏人と申す
　者。

主計　拙者は岩城主計。これなるは家老喜村將監の子息、
　采女之介、お使者の口上一通り
皆々　承りたう存じまする。
玄蕃　使者の趣き餘の儀でござらぬ。先月二月一日、當家
　より密かに使者を以て仰せ申さるゝは、湊姫さま未だ御
　緣邊の取結びもなきゆゑ、幸ひ毛利基成は、未だ無妻に
　て罷り在りますれば、湊姫さまを此方へ嫁に下さるとの
　儀、隣國のよしみと申し、主人も甚だ大慶。いよ／＼妻
　に申し請けませうと、堅くお使者へ返答仕つてござる
　ゆゑ、改めて玄蕃、結び入れに伺候仕つた。今日より
　は御一家中。以後は別懇に申し談じませう。
湊姫　コレ／＼、玄蕃とやら、マア待ちや。これは思ひも
　依らぬ事を聞く。わしを基成さまへ嫁にやらうとは、藏
　人、覺えがあるか。
藏人　毛頭覺えござりませぬ。主計どの、御存じか。
主計　一切左樣の儀は承りませぬ。
湊姫　例へ覺えがあつても、外へ嫁入りする事はわしや否
　ぢやぞや。人に得心もさせずに、何者がマア。
軍藏　イヤ、そりや後室樣より、彈正さまへ御内意あつて、
　遣はさるゝ事サ。

藏人　彈正さま、お覺えがござりまするか。
彈正　成る程、無い事でもない。
主計　何ゆゑ左樣の使者を遣はされました。
彈正　後室のお指圖、隣國と云ひ、當時發向の基成どのゆゑ、一家とならば互ひに。
藏人　イヤ／＼、伯父御さま、大外記さま御死去の後は、定老喜村將監、こなた樣、斯く申す藏人、立會でなければ國の政道は紀しませぬ。後室樣さへ家老どもへお願ひなさるゝ政道。お一人の心を以てお計らひなされては濟みますまい。
主計　跡目の無いこのお家、姬君を外へ遣はされ、當家の跡目は誰れが納めまする。
彈正　默れ。跡目の儀は立會ひの評定。善にもせ惡にもせよ後室の計らひ、身共は知らぬ。一旦契約いたされたれば後へは返らぬ。後室の詞をなきものにしても大事なくば、使者へ變替へせいサ。
軍藏　こりやなり憎さうなものぢや。
藏人　玄蕃どの、ちよとお目にかゝりたう存する。
玄蕃　拙者にな。
藏人　如何にも。
玄蕃　如何やうの儀でござりまする。
藏人　お聞きの通り、後室の御意と申しても、畢竟女儀の事。跡目の評議最中のうち。それは格別、差當つて、本人が不得心にござる。先づ今日はお歸りなされい。姬にもとくと申し聞かした上の儀に仕らう。お歸りなされて下されい。
玄蕃　なりませぬ儀でござる。此方より申し入れたと云ふではなし、契約いたした上で、使者に參つたこの玄蕃。あの方に間違ひな儀がござつて、遣らうとも遣るまいとも知れませぬと、生面下げて立歸りさうな玄蕃ぢやと思し召すか。云ひ入ればかりぢやない、直ぐ湊姬さまのお供して立歸らねば武士が立ちませぬ。御用意なされて、只今お渡しなされいサ。
藏人　ハヽヽヽヽ、例へ姬を遣はすにもせよ、結び入れの使者に直ぐに渡すものがあるか。瀧川藏人、左樣な儀を聞いて居る者ではござらぬぞ。
玄蕃　ハヽヽヽ、御家老達の思案の辨が、知れた／＼。達て只今連れて歸らうと云ふには、深い思案のある事。其所へ心も付かず、出放題の云ひ分。アヽ、國の政道もさこそと、お笑止に存する。

主計　ヤア、過言なる一言。只今お供せうと云ふを、家國の爲とは、お國の政道がどうして笑止な。今一言お云やると手は見せぬぞ。
玄蕃　身が家來、云ひつけた器を持て。
侍ひ　ハア、。
ト箱を持つて出る。
玄蕃　驚ろくまいぞや。連れ歸らうと云ふが、このお家の爲ぢやと云ふ仔細は、この箱サ。
藏人　この箱。
ト蓋を取る。利兵衞が本首出る。
藏人　ヤア、。
玄蕃　イヤ驚ろくまい。まだ段々に膽の潰れる事があるぞ。
藏人　こりや、吳服所松屋利兵衞が首。
玄蕃　ドリヤ、ま一度悔りさせうか。これを御覽じ。
ト起證を出す。藏人、取つて見て悔りする。
藏人　ヤア、これは。
玄蕃　また悔りであらうが。
主計　藏人どの。何がな。
藏人　イヤ、御覽なさるゝ物ではござらぬ。

玄蕃　ぢやに依つて連れ歸るのが、お家の爲ぢやと云ふ事サ。
藏人　湊姫さま、ちよつとこれへお越しなされい。
ト湊姫、側へ來る。
これを御覽じ。
ト見せる。
湊姫　ヤア、これは。
藏人　お覺えがござるか。
湊姫　成る程、覺えがあるわいの。
藏人　あれへお出でなされい。
ト湊姫、元の所へ坐る。
采女之介どの、これへ出さつしやれい。
采女　畏まりました。
藏人　これ覺えがござるか。
采女　ヤア、これは。
藏人　覺えがあるか。
采女　これは最前、利兵衞へ渡した
藏人　もうよい〳〵、覺えがあればあれへござれ。
ト采女之介、俯向き、元の座へ行く。
玄蕃どの、如何にも此方に覺えのある儀。して、こなた

のお手へは、どうして入りました。
玄蕃　これなる利兵衞めが、身共に渡しましてござる。
藏人　アノ、利兵衞がこなたに。
玄蕃　憎い奴。その書き物を身共に見せ、こなたの主人はいかいウツソリぢや。斯樣の事のあるも知らず、使者に立つ玄蕃どのは大だわけ。主人は阿房の棟梁と、素町人めが雜言、堪忍ならずと右の仕合せ。もしこの事露顯いたさば、こなたのお家も立たす、主人が武士も立たず、一大事と存ずるゆゑ、今日推して參つたは、先づ姬君を一旦此方へ遣はされ、その上では兩人ともに、無事に納まる思案がござらうに依つて、今日連れ歸らうと申す玄蕃が、誤まりではござるまいかな。
藏人　御尤も。お志し近頃忝なう存ずるが、斯樣の仕儀でござれば、よもや姬が參らうとも申すまい。
玄蕃　そこは御家老の役。御得心參るやうに、とくと御意見なされい。
藏人　もし命にかけてと申さば。
玄蕃　合せ物は離れ物、大名高家に限らず、緣が無ければ退き去り致すと申す事が、世間にない慣ひでござらぬ。
藏人　イカサマ。
玄蕃　主人の武士さへ立つたらば、いま退き去ると云ふ事に及べば、湊姬さまに疵も付かず、お供いたした拙者が武士も立ちまする。去ると云ふ字は、好く拵らへたものでござる。
藏人　お姬樣、又ちよつとこれへお出でなされませい。
ト湊姬、悄々側へ來る。
こりや一旦お越しなされずばなりますまい。後室樣が御契約なされたとあれば、どれからどう廻つて、幾人腹を切るも知れぬ。お前のお心一つで、大勢の者の嘆きとなる。御得心が參つたか。
ト湊姬、しやくり上げて泣く。
主計　すりや、姬君は嫁入りなさるゝかな。
藏人　一旦遣はさにや濟みませぬ。
主計　ハテナア。
ト采女之介と湊姬とを見て、思ひ入れあつて
玄蕃　恐らく玄蕃がお詰合ひ申すからは、長うて十日。ハテ、そこが退去り、後は世間廣う。
ト主計、采女之介が方を見て、思ひ入れ。玄蕃、藏人、思ひ入れ。
こりや、申さいでも知れた事。御得心か。

湊姬　例へこの身は愚か、兩國の騷動もいとはねど、大切なと思ふ。

ト采女之介を見る。皆々思ひ入れ。

腹切ると云ふのが悲しいばつかりで、暫しのうちの事なら行かう。やつてたも。

藏人　御得心が參つたか。

湊姬　誰が身の上にも凶事のないやうに、藏人、キッと預けたぞ。

藏人　藏人が一命かけて、お預かり申しました。

軍藏　出から行つても畔から行つても、遣る者は遣らねばならぬ。ハヽヽヽ。

ト奥より侍ひ出て

侍ひ　彈正さま、その他御家老中、大切な詮議がござれば、采女之介さまを御同道にて、只今お出で下されと、道丈どの御意でござります。

彈正　詮議とは心元ない。皆參れ。

玄蕃　お乘り物持て。

侍ひ　ハツ。

ト乘り物舁いて來る。

玄蕃　イザ、お召しなされい。

ト湊姬、悄々と乘り物へ乘る。

主計　イヤお姬様、云はぬは云ふに優ると申す。藏人がお請合ひ申すまでは、斯く申す主計めも同腹中。後の儀はナ、お氣遣ひなされますな。

彈正　姬を遣はせば後室の詞も立つ。使者、大儀にこそあれ。

玄蕃　然らばお暇申し上げませう。

彈正　歸られうか。

玄蕃　何れも。

皆々　おさらばでござりまする。

ト雀篳篥になり、皆々奥へ入る。乘り物は花道へ行きかける。軍藏、後へ戾り、あたりを覗ひ

玄蕃　親方。

軍藏　シイ／＼。上首尾々々々。姬はどうやら斯うやら。

玄蕃　首尾ようしおほせたら約束の

軍藏　ソリヤ、褒美の百兩。

玄蕃　忝ない。

ト此うち、逢夜、障子の內より出て居て、軍藏を井戶へ切り込む。

とまつたか。

逢夜　阿房が狀で待つて居た。種ヶ島時高の息女、手に入るからは

玄蕃　大願成就して、其方の手番ひは。

逢夜　もう軍用金に事は缺かぬ。氣遣ひせまい。

玄蕃　諸事は追々。

湊姫　ヤア、そんなら。

ト逢夜、乘り物の戸ピッシヤリと閉し

逢夜　乘り物やれ。

ト唄になり、皆々向うへ入る。藏人、手を組んで思案の體。奴和田平、モヂ／＼して付いて出る。

和田　モシ／＼、藏人さま。

藏人　わりや釆女之介が家來、和田平ぢやないか。

和田　ネイ、ちとお前樣へお願ひの儀があつて參りましてござりまする。

藏人　身に願ひとは。

和田　下郎の私し、御家老のお前樣に、直にお願ひ申すは、何とやら憚り多くも緩怠らしくもござりますれど、雁は八百矢は三本、申して見ねば埒が明かぬでごわりまする。憚りをも顧みませず、ちとんばかりお願ひの筋、お聞き屆け下さりませうならば、千萬有り難うござりまする。

藏人　町人百姓の願ひも聞き屆けるが慣ひ。殊に一合取つても釆女之介が家來。品に依つて聞き屆けてくれう。願ひはなんぢや。

和田　お有り難うござりまする。下郎めが願ひと申すは、他の儀でもござりませぬ。最前ちよつとあれなる末座にて、樣子をちらと承りましてござるが、何とやらむづかしい首が出るやら、お姫樣も他國へお出でなされたとやら、どうかむづかしい詮索の、詰まる所は釆女之介が身の上に、かゝりました樣子になりまして、嘆かはしく存じまする。斯う申さば、どうやら異なものでござりますれど、その書いた物を預かりまして、憚りながら下郎めが、ちゝとんばかり詮議が致して見たうござりまする。御家老樣の持つてござる物、惡うはなされて下さりますまいとは存じますれども、宛名のありました物かと存じますれば、どうかから夜の寐られぬやうなものかと存じます。私しにお預けなされて下さりませうならば、千萬有り難う存じまする。

藏人　ハテ、下郎に似合ぬ優しい頼もしい所のある者ぢやなア。すりや、主人釆女之介が大事になりさうなものぢ

やに依つて、われが預かつて詮議がしたいぢやまで。

和田　いつぞや親殿樣がお果てなされた時も、なんだか無茶羅苦茶羅、孛風を掻き亂したやうな詮索。下郎めが心にも、お歴々さまのうちに、甚だ濟まぬ心持ちもござりまする。その書いた物を預かりまするを御緣に致し、お家のお爲になる筋とござらば、乘り出して詮議も致し、憚りながらお見出しにもあづかりたう存じまする。

藏人　如何にも預けてくれう。其方が賴もしい志しに愛でゝ、大切な書いた物を預ける程に、この後、家國の爲になる事を致せ。合點か。

和田　エヽ、有り難うござりまする。

ト侍ひ四人、俵、莚、手桶を持ち出て、橋がゝりの方へ行かうとする。

藏人　コリヤ〳〵、わいらは何所へ行く。

侍ひ　藏人さまでござりまするか。私しどもは葭島へ、土壇を築きに參りまする。

藤人　土壇を築くとは、何者を成敗するのぢや。

侍ひ　喜村釆女之介どのを、御處刑でござりまする。

藤人　ナニ、釆女之介を仕置とな。

侍ひ　痛はしい儀でござりまする。

ト皆々入る。と和田平、身拵らへして、行かうとする。

藏人　コリヤ待て、わりや何所へ行く。

和田　旦那をお仕置とござるゆゑ、踏み込んで詮議いたしまする。

藏人　待て。すべてお前の仕置と云ふは、喜村將監、斯く云ふ藏人、伯父御彈正どの、三人立會ひ詮議の上でなければ、科人の一命も取る事ならぬ。まして釆女之介は將監の子息。我まゝに仕置がならうか。いま踏み込んで狼藉に及ぶと、却つて難儀を仕出し、禍ひの元であらうが。

和田　ぢやと申して、どうこれが聞き遁がして居られませう。

藏人　そりや身が詮議する。氣遣ひな事はない。必らず何事に依らず、差出る事はならぬぞ。

和田　イヤ、差出は致しませぬ。

藏人　イヽヤ心元ない。もし身共を差措き、横合ひから差出るが否や、釆女之介が越度になる。それ合點か。

和田　主人の身の上凶事さへござらねば、毛頭一言も申しませぬ。

藏人　必らずさうぢやぞよ。
和田　とんと差出ぬでござりまする。
ト唐和和尚、出て
唐和　藏人さま。
藏人　和尚。して釆女之介は。
唐和　裏道から葭島へ。
藏人　ナニ、裏道から
唐和　縛られて
和田　そりやこそな。
藏人　近道はこれ。さうぢや。
ト向うへ走る。
和田　これが差出ずに居られるものか。
ト云ひ／＼向うへ走り入る。返し。
道具替り、葭島の體になる。蛙鳴く。侍ひ皆々土壇を築く。彈正、出て床几にかゝる。釆女之介、白無垢にて、縛られ出る。後より、道丈、白襦袢、纐襷にて出て
道丈　釆女之介、その身になつて思ひ知つたか。最早遁がれぬ。覺悟いたせ。
釆女　道丈どの、思ひ知つたかとは、覺えもない無成敗。思へば／＼口惜しいわいなう。
ト後の葭の間より、藏人、和田平、二所よりヌッと出る。
道丈　科極まつてなんの吠え面。ソレ、土壇へ直れ。
藏人　待つた。さうはなりますまい。
道丈　藏人、何ゆゑ留め召さるゝ。
藏人　釆女之介には何科あつて成敗はなさるゝ。
釆女　身に取つて毛頭覺えはござらぬ。
和田　旦那どの、覺えないか。覺えがなけりや無成敗だ無成敗だ。
藏人　コリヤ／＼、和田平、扣へて居らぬか。
和田　ヘイ／＼。
ト下に居る。
藏人　伯父御樣、定めて御評定なされての儀でござらう。
彈正　オヽサ、とくと詮議を糺し、云ひ譯ないゆゑの事サ。
道丈　淺ましい者の手にかゝらうよりは、道丈がこの刀は拜領の正宗。切れ味を試み見る。身が手にかゝるは仕合せと云ふもの。喜び召され。

和田　なんの喜び。科があれば武士らしう腹を切る。貴樣の手にかゝつて誰れが喜ばう。あんだら云はしやんな。
藏人　コリヤ／＼、また差出居るか。
和田　ヘイ／＼。
藏人　して、その科の次第承りたい。
彈正　喜崎伴内が死骸詮議すれば、殺し手は采女之介。
藏人　そりや品に依つたら、人を殺めまいものでもない。
和田　さうでござりまする。武士が堪忍ならぬと云ふも、人も殺さいでぢや。五人十人切つたと云うて何程の事。
藏人　コリヤ／＼、また差出居るか。
和田　ヘイ／＼。
藏人　采女之介、何ゆゑ伴内を切つた。
番人　微塵も覺えはござらぬぞ。
道丈　官符の綸旨、五三の旗、二種の重寶紛失いたした。
藏人　ヤア。
　　ト彈正、狀を出し
彈正　「頼み置き候ふ一儀、いよ／＼首尾よくなされ候はば、勿論他へ洩れざるやう、密かに／＼一大事にて候ふ、喜村采女之介」宛名は破つてある。この狀が伴内めが懷中にあるからは、正しく寶を盜ました頼み手は采女之介。後々の難儀を思うて、伴内を殺したに違ひはない。
和田　暗い／＼。我が預かりの物を云ひつけて盜ませ、我が難儀を我が手で拵らへるたわけがあらうか。こりや三つ兒でも知つて居る事ぢや。
藏人　コリヤ／＼／＼、また差出居るか。扣へて居らぬか。
和田　ヘイ／＼／＼。
彈正　直筆と云ひ一言の云ひ譯なければ、道丈が詮議、一一理に當る。不便ながら遁がれはないサ。
采女　山司の金右衛門に渡した狀が、どうしてあの死骸に。
道丈　但し云ひ譯があるか。
采女　サア、それは。
道丈　サア／＼。
　打ち首ぢや。覺悟せい。
　　ト寄らうとするを突き退け
藏人　イヤ道丈どの、今一應この詮議、藏人が仕直しませう。
道丈　そりやならぬ。現在の盜賊を。
藏人　今切つて、何物を捕へて詮議するのぢや。

道丈　サア、それは。
藏人　討たす事能りならぬ。
道丈　イヽヤ、詮議は親將監を捕へてする。彼奴は一家中ゆゑの見せしめ、邪魔すると御身も正宗の相伴さすぞ。
藏人　アノ、身共をや。
道丈　知れた事。
藏人　こりや、面白いわい。
ト身繕ろひする。
道丈　相手になりや、カウ。
ト打つてかゝる。少しばかり立廻りあり
主計　何れも。一大事が出來いたしした。
ト出る。
彈正　主計、一大事とは。
主計　只今誠の玄蕃どのお越しなされ、最前の玄蕃は騙りでござる。
彈藏　ヤア、。
主計　その上、二種の寶紛失。寶藏の預かり喜村將監、追ッ取り廻して詮議最中。またその上に阿蘭陀船に積み來りたる荷物、一つも殘らず奪ひ取つて、船は空殻でござる。

皆々　ヤア、。
主計　この儀、阿蘭陀人久吉公へ申し上げしゆゑ、不吟味の誤まりは、皆この方お家の科、彩しき荷物、何れへ奪ひ取りたるとも知れず、お咎めに依つて、館は上を下へと返します。早くお歸りなされい。
彈正　こりや其まゝにして置かれぬ。主計續け。
ト主計を連れ、彈正、走り入る。
藏人　何にもせよ。
ト行かうとする。道丈、采女之介を切らうとする。
さうはならぬ。
ト留める。
道丈　殺らされたいか。
藏人　最前の使者は。
ト行かうとする。
道丈　今が最期ぢや。
ト采女之介を切らうとする。
藏人　さうはならぬ。
ト留める。
道丈　うぬも一緒に。
ト立廻り。

藏人 阿蘭陀船か。
ト行かうとする。
道丈 最期ひろげ。
ト釆女之介を切らうとする。
藏人 そりやならぬ。
ト留める。
釆女 コレ、私しの身にお構ひなくとも、一時も早うござりませい。
藏人 爰も氣遣ひ。寶の紛失。
ト行かうとする。
道丈 今が最期ぢや。
ト切らうとする。
藏人 さうはならぬ。
ト兩人立廻りにて、留めて
和田 藏人さま、この場は下郎めにお預けなされ、一時も早う御詮議なされませい。
藏人 出かした。今こそ其方に預けたぞ。
和田 忝ない。
藏人 盜賊め。
ト云ひながら走り入る。和田平、釆女之介が繩解いて後に圍ふ。
道丈 ソリヤ。
侍ひ 動くな。
ト和田平を圍ふ。
和田 寄りやアがるな、毛才六めが。今までは、すつたのこつたのと愚圖ついて居たが、もう自暴ぢや。大手振つて行く。邪魔ひろぐと一々摑み殺すぞ。
ト軍藏、煤だらけになつて出る。
道丈 御身は相良軍藏でないか。
軍藏 思ひも寄らぬ所へ切り込まれ、拔けて出た所が館の内。寶の詮議やら阿蘭陀船やらで交ぜ返す。こりやなんぢや。
道丈 御身の面はなんぢや。
軍藏 なんぢやとは、夢見たやうな目に遭ふ事ぢや。
道丈 釆女之介を殺らすに邪魔ひろぐ下郎め。御身も加勢して打ち殺せ。
軍藏 合點ぢや。
和田 ハヽア、猿松めが寄つて來たワ。お身は最前、寶の盜賊は釆女之介ぢやと云やつたぞや。
道丈 おんでもない事。

和田　館の知らせは今の事。それに遙か前から寶の失せた
を、御自分はどうして知つた。
道丈　サア、それは。
和田　べら坊どもを締め上げたら、何もかも樣子が知れう。
若旦那、小袴はずとござりませい。
道丈　うぬ。
　ト寄るを取つて投げる。采女之介は向うへ走り入る。
　和田平、花道の小口に立ち塞がり
和田　笠の臺に緣のないとんぼめら、一々そこへ直りやア
がらう。
　トこれよりタテになる。蛙の鳴き聲する。此うちに、
葭原の中へ侍ひを投げ込む。と鶩大分出る。タテの邪
魔になる事あり。つまり、軍藏は逃げる。その外は皆
皆葭の中へ逃げ入る。道丈、切つてかゝるを抉り殺す。
これまでのタテ樣々あり。道丈、バツタリと倒れると、
和田平、道丈が懷中を探し
和田　こりや、官符の綸旨。
　トまた探し見て
綸旨ばかり持つて、今一種の五三の旗は。
　ト思ひ入れして、道丈が刀を取つて
こりや正宗。これも詮議の一つ。
侍ひ　動くな。
　ト取卷く。
和田　また死に出居つたな。よいワ、毒喰はゞ皿舐ぶれぢ
や。オヽ、起き上がらぬやうに一々引導してくれう。
侍ひ　ソリヤ。
　トこれより大タテ樣々あり、一人々々切られるやうに
思ひつきあるべし。段々大タテあつて、皆々切り倒さ
れる。
和田　旦那の行く先が心元ない。
　ト行かうとする。うぬとかゝるを切る。首は場の中へ
飛ぶ。和田平、よろしくあつて、向うへ走り入る。よ
ろしく、

幕

二つ目　朝鮮國の場

役名――柏木隼人。大矢助解由。東榮夫人。英榮。
錦沙。珊珠卜。梅入夫。赤猛澤。背釼貞。高麗泂。
熊非彈正。鹿島權藤太。大立左馬之介。せらい權

平。山司金右衛門。

造り物、二重舞臺、唐土の體。橋がゝり唐の城の心。下座、障子屋體、唐樂にて幕明く。二重舞臺の上に、彈正、權藤太、甲冑にて床几に腰かけ居る。下の段眞中に、東蓉夫人。左馬之介、陣羽織にて、東蓉夫人に刀を差しつけて居る。下の段上の座に、梅入夫、びんとこなにて、唐團扇持ち、坐り居る。赤猛澤、背劉貞、高慶劉、びんとこな、銘々唐團扇持ち、梅入夫附き添ひ居る。珊珠慶、見付けの柱の向うに、びんとこなにて、立ち寒がる。同じく後に、芙蓉、錦沙、仕出しにて、立ち寒がる。日本の軍兵、弓矢にて、取卷き居る。

權藤　異議なく城を明け渡せばその通り。さないと云ふと、東蓉夫人は芋刺しぢやが。

珊珠　サアそれは。

彈正　サア〳〵、どうぢや。

珊珠　朝鮮國は斯程まで、運命に盡き果てたか。エヽ。
ト地團太踏み、大泣き。

東蓉　コレサ、珊珠慶、妾が事は構はずとも、其方衆の難儀にならぬやうにしてたも。とても夫に別れたこの身、草葉の蔭の我が君に、早うお目にかゝりたいわいなう。

珊珠　なぜ左樣に思し召します。とても日本の武勇には叶はぬ。早く降參すればよい事。乾隆大帝の討死。斯やうに難儀いたすも君の大馬鹿ゆゑ。なんと何れも左樣でないか。

赤猛　主人〆相丞も、この度の軍にお出でなされたは、無分別と云ふものでござる。

背劉　乾隆大帝の命に背きて、軍にさへ出ねばよい事を。大きな無分別でござる。

高慶　我れ〳〵までさまよひ歩くは、皆主人右相丞のたわけ盡さつしやつたゆゑでござる。

梅入　そこで身共が、日本へ返り忠を致したゆゑ、各々も安閑なと申すもの。

皆々　左樣でござる。

權藤　出かした〳〵。如何ほど朝鮮國に働らくと云ふとも、大領久吉公の御權威を以て、打ち潰すに手間隙いらうか。熊井彈正どの、左樣でないか。

彈正　鹿島權藤太の仰せの通り、武威盛んの日本、なか〳〵われ達が及ぶ事でない、久吉公御凱陣をなされたれども、

當〻しつぱらいには小西彌十郎どの、加藤虎之助どのお出でなされ、この國の大名どもは殘らず城を明け渡し、女ども家來どもは追放仰せつけられる間、有り難いと三拜せいサ。

楪葉　珊珠慶、達て拒むと夫人が命がないが、返答はどうぢや。

珊珠　イヤ、全く拒みまする心底はござらぬ。主人討死、所詮運盡きたる我れ〳〵。東蓉夫人をお助け下さらば、仔細なく城を明け渡しませう。

兩人　しかとさうぢやなア。

珊珠　關帝菩薩も照覽あれ。毛頭僞はりはござりませぬ。

彈正　ソレ、夫人を赦せ。

ト左馬之介、ハツと東蓉夫人を突きやる。東蓉夫人、泣く。

梅入　驚く事はござらぬ。兎角命は物種ぢや。城を明け渡し出ても、また誰れぞ小優しい者が女夫になるし、惡うはせまい。落ちついてござれい。

芙蓉　アレ、姉さん、あのやうな事を云ふわいなア。なぜにお前は其やうに、腑甲斐ない心にならしやんした。わしや腹が立つて〳〵ならぬわいなア。

ト錦沙、ツカ〳〵と梅入夫が前へ行て、胸倉取る。

錦沙　コレ兄樣、日頃から惡人ぢや〳〵と云へど、親は泣き寄り、妹のわたしは今まで、それ程の惡人ぢやとは知らなんだ。今度の軍の破れは、こな樣が日本へ内通したに依つての事ぢや。云はゞこなたは主殺し。なんとしたら腹が癒やうぞ。エヽ、こなたはいなう。

ト梅入夫、錦沙を突き倒し

梅入　おのいらが知つた事ぢやない。兎角城を明け渡しまする間、よろしうお執成しを頼み上げまする。

楪葉　身共等は先立ち吟味の役。追ッつけ小西彌十郎どの、加藤虎之助どのが參られやう。家來、東蓉夫人を引立てい。

皆々　ハア、。

ト東蓉夫人を引立てにかゝる。珊珠慶、皆々を毆り退け

珊珠　ちつとでも指さいたら、一々首が飛ぶぞ。女房、暇くれた。

錦沙　わたしに何見落しがあつて。

珊珠　叛逆人の妹ゆゑサ。

錦沙　叛逆人の妹とは。

珊瑚　東雲夫人に戀慕しかけ、おのれが戀の叶はぬ意趣に日本國の軍を幸ひ、內通の返り忠。畜生と緣を組む事ならぬわいやい。

芙蓉　錦沙さま、兄樣と女夫にならうともなるまいとも、お前の心一つでござんすがえ。

錦沙　成る程、さつぱりと心の潔白。夫婦の緣を結んで見せませう、その緣の結びやうは。

ト梅入夫を一かせ切る。梅入夫、錦沙を膝に引敷き

梅入　うぬは早に手を負はせたぞよ。

錦沙　なんの兄。只一討ちと思うたに、仕損じて口惜しいわいなう。

梅入　珊瑚姬を閨へ。

皆々　動くな。

珊瑚　もう、さう出にやならぬ所ぢや。骨が舍利になつても、うぬらに夫人を渡さうかいやい。

梅入　初めから夫人に惚れて居るゆゑに、日本國へ內通して、主人は討死させたわやい。

赤猛　夫人を渡せ。

珊瑚　小癪な雜人輩。寄つたら一々打ち殺すぞ。

梅入　ソリヤ。

ト珊瑚慶にかゝる。立廻りのうち、常の侍ひ大勢込み入り、弓と矢番ひ圍ふ。

侍ひ　動くな。

皆々　これは。

ト右のうち、權平、金右衞門、火事羽織、野袴にて出る。

金右　御上意。

皆々　御上意とは。

ト兩人入る。二重舞臺へ上がり、この間侍ひ、弓矢番へながら、橋がゝりの方へ寄つて扣へる。兩人、床几にかゝる。

權平　先達て鹿島村藤太、熊井彈正、先觸れ致したるが如く、城內受取りの役、斯く云ふは小西彌十郎が家來、大矢勘解由。

金右　身は加藤虎之助が家來、柏木隼人と云ふ者。いよ〳〵仔細なく城を明け渡すぢやまで。

梅入　毛頭相違はござりませぬ。

錦沙　其方を。

ト梅入夫にかゝる。立廻りにて

梅入　小癪な奴の。

ト突き放す。
錦沙　エヽ、口惜しい。
權平　見れば劍戟するは、城内を明け渡すを、野心ばしあつての事か。
珊珠　イヤ、日本へ對し、野心を差挾みませうやうはござらぬ。あれなる梅入夫と申す者は主殺しゆゑ、刑罪仕るのでござりまする。
金右　唐土の掟は知らず、日本の政道は主殺しは逆磔刑。
梅入　イヤ／＼、私し主殺しの覺え嘗てござらぬ。
東蓉　覺えないとは畜生め。日本の政道、逆磔刑とやらにかけたいわいやい。
錦沙　夫人樣に心をかけ、日本へ内通し、お主を殺さしたと、たつた今云やつたぢやないか。
芙蓉　お主に戀慕して内通したが、主殺しではあるまいか。
梅入　オヽ、日本へ内通した。討死はせう事がない。
珊珠　その頤を引裂いて。
金右　待て。此方へ内通して、主人が討死は、唐土の爲には不忠。久吉公へ一旦功を立てたる者、汝に依つて拔群の忠臣。手向ひなさば女どもは擊ち殺せ。
侍ひ　やらぬぞ。
珊珠　すりや主殺しでも、一旦日本へ内通した功に依つて、討つ事は叶はねか。
金右　くどい。
東蓉　珊珠處。
珊珠　夫人樣。
錦沙　こちの人。
芙蓉　兄樣。
四人　エヽ、口惜しい。
ト身を顫はして泣く。
梅入　先達てお願ひ申したる夫人が身の上、内通いたしたる功に、拙者に下さりませうならば、有り難うござりまする。
金右　願ひ聞き屆けた。内通の功に依つて、夫人は遣はす間、勝手に連れて立退け。
珊珠　イヤ、さうはなりますまい。
金右　なんと云ふ。
珊珠　家來の身として、主に心をかける梅入夫。夫人を渡しまする事罷りならぬ。
金右　すりや、日本の下知を背くか。

珊珠　左樣ではござらねども。
金右　日本の命令、出でゝ再び返らぬわやい。
珊珠　おやと申して。
金右　異議に及はゞ、ソリヤ。
侍ひ　やらぬ。
ト弓矢番ふ。珊珠慶、東蓉夫人を圍ふ。
金右　射留めさゝうか。
珊珠　サアそれは。
金右　サア〳〵〳〵。どうぢや。
ト珊珠慶、ハッと當惑。
梅入　叶はぬ事ぢやてや。これぢやに依つて、日本へ內通いたした。
高慶　イヤハヤ、御發明でござる。
錦沙　こちの人、當惑の體で居やしやんすは、夫人樣をあの惡人に渡す心か。それでは濟むまいがな。
芙蓉　兄樣、お前はどう心得て居さしやんすぞいなア。
珊珠　うろたへもせぬ、腰も拔けもせぬ。夫人樣を渡さにやならぬ。
錦沙　エヽ。
ト東蓉夫人、珊珠慶が胸倉取つて、振り廻し

東蓉　滋な不忠者め。何とした天魔が見入つた。日本國は夫の敵、受取りに來るならば明け渡した後、梅入夫をズタズタに切り苛なんでくれるかと、それを樂しみにして居たわいやい。それに城を渡すのみか、日本の威勢に恐れ、自らを梅入夫へ渡さうとは、それで我が夫樣へ立つか、不忠者め。
ト叩き
其方ばつかりは、さう云ふ者ではなかつたが、淺ましい心になつてくれたなア。
ト珊珠慶、劍を拔き、腹へ突き立てる。
錦沙　ヤア、こな樣はなんで死ぬるのぢや。
東蓉　今のやうに云うたのが腹が立つて、それで死ぬるかいやい。
珊珠　主の敵を討たんとすれば、日本より加勢の梅入夫。夫人樣を渡すまいとすれば、却つて夫人樣のお命。日本の威勢程强いものが世にあらうか。御兩所樣、數ならねども拙者も臣下、一太刀なりとも久吉公へ、刃向ひたいが蟷螂の斧、なか〳〵我れ〳〵が思ひも寄らぬ事。お願ひと申すは、夫人をこれなる梅入夫が手に渡せば、女の操もすたり、所詮生きてもござるまい。主人の死ぬるを

なんと見捨て置かれうぞ。日本へ野心あるこの腹を切り、肋は久吉公への貢ぎ物。志しを不便と思し召し、夫人が儀をお願ひ申す。慈悲ぢや情ぢや。どうぞ安穩でござるやう、お願ひ申しますわいなう。

ト苦しむ。

東蓉　それ程までに思うてたもるか。其方に別れ、なんとせう。

芙蓉　お前に別れ、なんとしませうぞいなう。

ト錦沙も泣く。

梅入　とても叶はぬと思ひ、くたばるとはよい思案。ドレ夫人を。

權平　梅入夫待て。

梅入　イヤサ、お約束の夫人を。

權平　待ち居らう。最早夫人を遣はす事罷りならぬ。

梅入　そりやなぜな。

權平　なぜとは不屆き者めが。主の妻に戀慕して、その意趣に內通したは、日本への內通ではない。おのれが戀を叶へん爲、なりや、久吉公へ忠でも功でもない。訴人の科は半分は身に報ふが日本の政道。キッと申しつけやうのある奴なれど、其まゝ差赦す。芙蓉夫人はマア改めて、此方へお取上げなさるゝ。さう思へ。

梅入　すりや、內通の褒美は僞はりかな。

權平　吐かすまい。善でも惡でも、日本の武勇を用ひて粉微塵にする朝鮮國。こまごま言吐くと矢先で射殺さうか。

梅入　サアそれは。

權平　サア〳〵、こな大泥坊めが。

梅入　なんの事ぢや。

金右　家來ども。城內の道具、殘らず引出せ。

侍ひ　ハア、。

權平　イヤ〳〵隼人どの、拙者に答へもなく、其許の家來に云ひつけ、城內の物引出さうとはな。

金右　ハテ、異な事で咎めさつしやる。明け渡す城の物を、家來に運ばすが何と致した。

權平　其許主人は虎之助、手前主人彌十郎、同じく久吉公の御家人なれども、この度の戰ひに功石を爭ひ、互ひによからぬ仲。家來の我れ〳〵まで爭ひまするゆゑ、毎日毎日代る〴〵、本役と横目との役。今日は拙者が當番、其許は横目役。手前が口出さぬに、横目の其許が我さゝの采配。但し虎之助どのが仰せつけられたか。

金右　イ、ヤ、申しつけはせねども、生ぬるい貴殿の指圖、

加勢して遣はさうと存じても、さう性根を廻さるゝと、せう事がない。

權平　この城の裏門より、眞一文字に左へ行けば、直ぐに海手。大仰なる物は先達て、裏門より人數を廻し持ち出す手筈。人には相應の智惠もある、お世話には及びませぬ。

金右　明日は身共が本役。その時一言でも水さす奴があらば、打ち放す分の事サ。マア、今日は貴殿の心任せ。

權平　家來ども。城中の物悉く持ち出して運べ。

侍ひ　ハアヽ。

ト侍ひ皆々奥へ入る。

權平　珊珠慶とやら、敵ながらも日本へ野心殘すが、即ち主命を重んずる武士の魂ひ。其方が志しに愛でゝ、夫人を始め女どもは、殘らず陣所へ召され、品に依つて思ふ奴を後日に召捕り、仇を報はすまいものでもない。氣遣ひはない程に、心措きなう臨終いたせ。

珊珠　エヽ、忝ない。

金右　これからは横目の役。一々帳面に記し、數を改めう。

權平　横目の役なれば、しつかりと帳面に附けたがよい。

金右　此方の役目。其方の采配は受けぬぞ。

トそろ／＼奥より荷を出す。侍ひ一人出て

侍ひ　仰せつけられました如く、嵩高なる物は殘らず、皆皆裏門より出しましてござる。

權平　出かした。荷物を。

ト奥より荷物を出し、だん／＼に向うへ舁いて入る。金右衛門、一つ／＼手帳につけて居る。珊珠慶、荷物の出るを見て、口惜しき思ひ入れ。三人の女形、介抱しながら泣く。右の荷物行く間に

赤猛　こりやモウ、今日より手前どもは宿なしでござる。

背劍　拙者どもも宿なしでござる。濟まぬものぢや。

トぼやく。

梅入　濟まぬ者は身共ぢや。折角進して願うたる夫人は取上げらるゝ。日本も當にならぬてや。

權平　當になるやうに、其方にはまだお尋ねなさるゝ仔細がある。御陣所へ參れ。

梅入　アノ拙者に。

權平　うせずば縛しあげて行くぞ。

梅入　ハテ、お尋ねならば參らうわサ。

金右　横目の役、追放の女は殘らず身共が連れ參らう。

珊珠　萬事よろしくお願ひ申す。

金右　請合うた。氣遣ひすな。日本の武士の詞は金鐵。
珊珠　エヽ、忝ない。
權平　梅入夫、歩め。
梅入　サア、行きます。
金右　女ども參れ。
女三　これを見捨てゝは。
珊珠　未練な。大切な敵があるかや。
女三　それでも。
金右　安堵して往生せよ。
珊珠　ハア、。
侍ひ　行けと云ふに。
梅入　行くわいなう。
ト唐音になり、荷物向うへ入る。梅入夫を權平附きて送り行く。金右衛門、三人の女ども追ひ立て入る。珊珠慶、後にて遙かに見送り／＼、名殘惜しげなる體なり。
珊珠　日本の武士は頼もしい。小西加藤のよからぬ仲も、某が腹一つで、主人の敵も丈夫に討たせんとある二人の詞。かゝる侍ひが朝鮮にあれは、斯くやみ／＼と諸大名の城は明け渡すまいもの。ハテ、是非に及ばぬ。

赤猛　詰まらぬ者は我れ／＼ぢや。なんであらうと出て行かざなるまい。
高慶　とても出て行くならば、梅入夫の仇敵、其奴をしまうて行かうかい。
背刻　こりや、いつち好い思案ぢや。しまつて取らつしやれ。
赤猛　珊珠慶、覺悟ひろがう。
珊珠　うぬらも惡人の荷擔人、一々冥途の供をさす。覺悟ひろがう。
三人　さう吐かしや、うぬ。
ト打つてかゝる立廻りあり、此うち、隼人、勘解由、火事羽織野袴にて出て
兩人　御上意。
三人　ナニ、御上意とは。
赤猛　城を明け渡す時節に、刃傷の體は、野心を差挾むか。
高慶　さう云ふ御兩所は、どなたでござる。
隼人　城受取の役人、加藤虎之助政清が家來柏木隼人。
勘解　斯く云ふは小西彌一郎が家來、大矢勘解由と云ふ者。先達て熊井彈正、鹿島權藤太、檢分に參つたであらう。
兩人　サア、早く城を明け渡せ。

ト珊珠慶、劍を杖につき

珊珠　待つた。先程柏木隼人どの、大矢勘解由どの、御兩所樣お出での上、城内の道具殘らず裏表よりお引取りなされた。

赤猛　それに又ぞろや柏木隼人どの、大矢勘解由どののお出でとは、こりやどうぢや。

隼人　待て。先達て隼人勘解由、參つたとは心得ぬ。

勘解　案内せい。

三人　ハア。

ト皆々奧へ入る。珊珠慶、劍を杖に突きながら苦しみ、不思議の體にて、向うを眺め、立つたり居たり、いろいろあり、右の五人殘らず走り　で

勘解　財寶は申すに及ばず、衣類道具に至るまで

隼人　城内は空殼同然。

赤猛　箸片しないやうにしたのは

背劉　最前の役人は

勘解　兩人の名を騙つてうせたか

隼人　この頃山司金右衞門と云ふ盜賊、三千世界へ船を浮べ、國々島々を騙り盡す。

勘解　この度の朝鮮攻めを幸ひに、この國へ入込んだとの風說。

珊珠　すりや最前のは盜賊、それに夫人樣を渡したは。

赤猛　衣裳を剝ぎ取らう爲か。

高慶　梅入夫も。

三人　ヤア、。

珊珠　エヽ騙られたか。口惜しいなア。

勘解　程は行くまい。

珊珠　裏門が海手へ近道。

隼人　案内せい。

ト珊珠慶、死ぬる。これにて皆々、バタバタにて奧へ入る。返し

造り物、向う一面の浪幕、大風少々、ドロドロにて雨の音する。金右衞門、鐵砲袖、黑い頰冠りにて、束蓉、大人、芙蓉、錦沙、三人の衣裳を肩に掛け、囁き竹を持つて出る。あたりを見廻し、囁き竹にて、物云ふこなし。

大勢　もう船へ積みませうか。

ト留布通りにて物云ふ。

心得ました。

ト橋がゝりより、淺黄襦袢、手覆、脚絆にて三十人ばかり、銘々荷物をかたげ出る。この人數中通り殘らず、立役殘らず、若い衆、床、道具方、表方、殘らず出る。繰返しにて、凡そ百人ばかりに見せる。一人々々、金右衛門、手帳に附ける。右の通りにして、だん／＼殘らず、向うへ走り入る。金右衛門、權平、びんとこなの衣裳を繩で括り、擔げ出る。金右衛門、蘆原の中より、草刈り籠に大人參を一杯入れしを取出し、脊負ふ。この間凄き雨風、權平と顏見合せ

權平　まんまと首尾よう。

金右　今日は大儀ぢや。

權平　荷は皆積んだか。

金右　オヽ、彼方で分けう。

權平　これも序手に。

トびんとこなを籠の上へ乘せ

もう何にもないか。

金右　まだ芦原の中に大人參が。

權平　合點ぢや。

ト權平、蘆原の中へ入る。花道より金右衛門、種ヶ島どつさり放す。蘆の中にて、掛け煙硝燃える。金右衛門、算盤をパチ／＼と置く。よろしく　幕

三つ目　ちやぐちう國代官屋敷の場

役名――可慶館徳源司。伯母、慾滯。甥、岩子。娘、四蘇。魏高。制林齋。娘、蘭客。同、金絲逋。妾屋芙蓉。合悦。田樂和尚。一先城方金才。川齋。頓齋。小人島の幽靈。脊高島の幽靈。仙鄕國の幽靈。山司金右衛門。

造り物、唐仕立て二重舞臺、納戸、瓦燈口、その外繪やうの貼り壁。眞中に關羽の像、掛け物にして、壇を築き飾りあり、傍へ物いろ／＼、瓔珞を上より下げ、瑠璃燈兩方へ下げあり、橋がゝり唐の塀、土藏塀越しに二ヶ所程見える。すべて代官位のかゝりなり。幕明くと、岩子、唐の帳箱扣へ、大帳繰つて居る。荷物少々あり、唐人二人居る。

唐一　モシ、わたしは遠い島から參つた者でござります。どうぞ早う印形をなされて下さりませ。

岩子　ア、忙しない、せんぐりおいぐりに印形渡さにやならぬ。忙しう云やんないの。

唐二　此ちやぐちうは唐中の元締、諸方の島々から荷を仕立て、内方へ持つて來て、極めの印形を貰うて去ぬる。今年一緒に船に積んで、日本へやつてもらうて、來年その印形に合して算用ぢや。貰ふに依つて、其方の國ばかりの算用ぢやない。疾から來て居るこちらへ、まだ印形を下さりませぬ。其やうにまんがちに物を云はしやんないの。

唐一　サア、あなたもお取込みぢやけれど、此方の國は遠いに依つて、風のよいうちに早う去にたいわいの。

慾瘤　岩子々々。

ト云ひ〳〵慾瘤、唐の花車形の形にて、唐の櫛を持ち出て

まだ帳をしまはぬかいやい。

岩子　伯母者人、今日は又、ゑんぼんと國から、荷物をいかい事持ちつけて、やう〳〵この二人が殘りました。帳面合して印形をやらうと思へど、個數が合はいでどうもならぬ。

慾瘤　それもキリ〳〵したがよい。日本へ積み出してから個數が合はぬと、此方の仕落ちになる。へらついて居るに依つてぢや。

岩子　イヤモウ、忙しう云うて、どうもならぬ。

唐一　阿母樣、私しが國は遠うござります。どうぞ早うお願ひ申し上げます。

慾瘤　コレそこな人、例へ五百里六百里ある所でも、爰の一里は日本ではたつた六丁ぢやげな。仰山に云はしやんな。此ちやぐちうで、國元の長者と云はれて、昔から諸國の荷物は、此方へ持ち込んで、此方の印形の据らぬうちは、日本へ積む事はならぬ。其やうに忙しう云やると、根から判をやらぬぞや。

唐一　イヤ、忙しうは申しませぬ。

唐二　ソレ見やしやつたかの。あなたの指圖次第にせにや、あかぬ事ぢや。

岩子　今日は年に一度の關帝祭りで、取込んで居るけれど、遠い所から來た者ぢやと云ふに依つて、印形をしてやる。それ〳〵。

ト證文に押切り判を捺してやり

先刻に改めた通りの色數が書いてある。二人ともに持つて去にや。

唐人　ハイ〳〵、忝なうございります。
慾溜　來年日本から戻り船の時、その證文持つて代り取りにおぢや。
唐一　ハイ〳〵、そんなら來年參じませう。
唐二　忝なうござります。ヤレ〳〵、隙を入れた事ぢや。
　ト二人ユヒ〳〵、橋がゝりへ入る。
慾溜　惣じて今朝からの荷物は、皆藏へ詰めたか。
岩子　皆改めて詰めさしました。
慾溜　今日の關帝祭りに、嘉例ぢやに依つて、一家の制林齋どのを呼びにやつたが、魏高はまだ戻らぬか。
岩子　まだ〳〵。
慾溜　また野良乾いて居おるものであらう。もう追ッつけ㛮の衆が見える。そこらも早う片附けて置きや。男ども〳〵男ども。
男二　ハイ。
　ト出る。
慾溜　その荷物、藏へ持つて來い。
二人　ハイ〳〵。
慾溜　さても〳〵、忙しない事ではあるぞ。
　ト云ひ〳〵、男に荷物持たせ、慾溜、奥へ入る。

岩子　あの和郎程、いら〳〵云ふ人はない。先づ爰らも片附けて。
　ト云ひ〳〵片附ける。
四聲　魏高さん〳〵。
　ト唐の娘の形にて出る。
オヽ、岩子さん。
岩子　四聲か。
四聲　魏高さんは、どこへおぢやえ。
岩子　イヤ、魏高は關帝祭りの嘉例ぢや依つて、一家の制林齋どのを呼びに行たが、なんぢややや。
四聲　ムウ、まだ戻らずかえ。
岩子　魏高がまだ戻らぬのが、それ程氣にかゝるか。
四聲　面妖。外へ出ると、遂う戻らんす程にの。
岩子　なんぢややら、魏高が事と云へば、兎角引ッついて居たがつて。
四聲　こちや奥へ行こ
　ト行かうとする。岩子、ひん抱へ
岩子　ドッコイ〳〵。
四聲　また悪い事さしやんする。あれな、母さん、岩子さんが。

岩子　シイ〳〵、やかましい。伯母貴の耳へ入るのは構はぬが、男どもが聞くわいの。
四聲　そんなら、𠑊放さしやんせいな。
岩子　これがどう放されるもので。
四聲　エヽ、ツヽと放さしやんせぬと咬むぞえ。
岩子　咬みなさいえ〳〵。
四聲　エヽ。
ト咬む。
岩子　アイタヽヽヽ。
ト放す。
四聲　サア、痛くば側へ寄らしやんすな。
ト岩子、手を舐ぶる。
岩子　君の齒形は蜜を舐ぶるやうな。
四聲　エヽ、アタ嫌らしい。
ト逃げうとするを、また捉まへ
岩子　なぜ其やうにピンシヤン〳〵するのぢやぞいなう。自體親仁の居られた時から、其方とおれと女夫になり、この家を繼ぐのぢやと思うて居たところに、親仁がどううろたへたか、あの魏高を商人から貰うて、この跡目ぢやと遺言して死なれたに依つて、伯母貴もおれも算用が食ひ違うた。併し、この家を繼ぐには清道の都へ、三百枚の印子を上げて、繼目の手形を貰うて、目見得せねば主になる事がならぬ。茲ぢや、其方さへ應と云や、ハテ、家の娘と女夫になつて、おれが目見得する。三百枚も心當てして置いた。伯母貴は諸事呑込んで居るわいの。
四聲　どのやうに云はしやんしても、否ぢや〳〵。あれな。
岩子　アヽ、シイ〳〵、エヽ、よう聲立てる娘ぢや。なんぼう魏高が事を其方ばかり思うても、ありやわが身を嫌がつて居る。てかけ彦の合慽が娘の、芙蓉と云ふ者にのぼつて、夜も晝も漬かり込んで居るが知らぬか。
四聲　サア、それも薄々聞いて居るわいの。
岩子　聞いて居るならあのやうな、水臭い男に添はうよりこの岩子に靡き給へ。マアちよつと口々。
トいろ〳〵からしう抱きつく。振りはなす所へ、慾痴、出る。取違へ、慾痴に抱きつき、顔見合せ恟りする。
慾痴　こりや、何しをるぞいやい。
岩子　エヽ、古箱の匂ひがする。
ト𥡴ながる所へ魏高、唐の色事師の形、鐵砲袖、襟袈裟、下に羽織にて、制林齋、中親仁、右の姿にて、箱

を持ち出る。

制林　おれも行かうと〳〵思うても、つい隙が入り

魏高　また母者が、やかましうござります。

ト云ひ〳〵内へ入る。

制林　今日は忙しうござらう。

慾瘤　オヽ、制林齋さま、ようござりました。

制林　この間は逢ひませぬ。

四聲　伯父樣、ようござんした。

制林　オヽ、四聲か。

ト上座へ行き

今日は毎年の關帝祭り、また舞の樂はわせぬか。

慾瘤　イヤ、まだでござんす。

四聲　魏高さん、きつう隙が入つたが、お前はどこへ行かしやんした。

魏高　ハテ、制林齋さまを迎ひに行て來たわいの。

四聲　イヽエ、伯父さんの所まで、なんぼ程遠いものであらう。お妾の所へ寄つて居やしやんしたものであらう。

魏高　これはいかな事。母者人もそこにござる。ツカ〳〵と滅相な事云ふ人ぢや。

四聲　なんの滅相な事がある。お前が戻らしやんせぬと、

内ではアタ嫌らしい

ト岩子、打出し

岩子　イヤ〳〵それは有うちな事ぢや。別に魏高も木竹ではあるまいし、妾の妾は賣り物の事ぢやに依つて、馴染みもありさうなものぢや。

魏高　コレ〳〵、岩子どの、こなんまでが同じやうに、わしや其やうな妾屋とやらへ行た事はごんせぬ。四聲もいろ〳〵の事云ふわい。

慾瘤　イヤ〳〵、隙の入るには、どうで碌な事ぢやあるまい。

制林　イヤ〳〵、今日隙の入つたのは野良ぢやない。昨日こちの内へ、清道の都の御家來、可[illegible]德司と云ふお侍ひが見えて、今度乾隆皇帝さまより、龍の玉をお尋ねなされ、其方が家に持ち傳へたと聞き及び、求めに來た、差上げいと仰しやるに依つて、成る程と契約して、印子五百枚に値段を極め、今日渡す筈ぢや。お出でを待つても見えぬに依つて、關帝祭りは遅なはる。それで、もし留守の間へお出でなされたら、妾へ向けてござつて下されと、云ひ殘して來た。それで隙が入つたのぢや。

慾瘤　印子五百枚とは、結構な針目でござんすわいの。

制林　何時買つても、五百枚や六百枚にはなるものぢやて
や。
慾瘤　イヤモウ、其方と云ひ、此方と云ひ、打揃うて、め
でたい家でござんすてや。
ト此うち四聲、魏高に紙を丸め、打ちつけたり、いろ
いろあり、岩子、四聲にいろ／＼思ひ入れのこなし。
四聲、紙を打ちつける。岩子に當る。戴いて咬むと、
四聲、腹立てる。魏高は氣の毒な體。
制林　阿母、それはさうと、魏高が繼ぎ目の願ひは、まだ
でえすか。
慾瘤　まだでごんす。
四聲　伯父さん、よう云うて下さんした。アノ、誰れでも
魏高さんの繼ぎ目を、遲い事ぢや／＼と云うてゞござん
す。
慾瘤　ア、、イヤ／＼、マア／＼、繼ぎ目は遲うて遲から
ぬ事ぢや。三百枚も印子の入る事ぢやに依つて、ナウ魏
高。
魏高　サア、そこはさうなれども。
岩子　成る程、コリヤ魏高、貴樣の云ふは當世ぢや。三百
枚もいる事ぢやに依つて、伯母貴の心を兼ねて、マア見
合はしてくれいと云やるのは、とんとそれが當世と云ふ
ものぢや。
魏高　誰れがそんな事云うたぞいの。
四聲　イエ／＼、こりや早う繼ぎ目させまして下さんせ。
岩子　コレ／＼、あれ程魏高が斟酌して居るもの、側から
其やうに云ふと、結句術ながるわいなう。
魏高　誰れがいの。
岩子　わが身がいの。
魏高　これは又。
岩子　イヤ／＼、それがよい。當世ぢや／＼。
四聲　滅多無性にこぢつけぢや。アタ阿房らしい。
岩子　へ、、誰れも阿房らしい。
四聲　一體マア、魏高さんが内に居やしやんせぬから起つ
て、此やうな阿房らしい者が
ト岩子を見て
エ、好かん。阿房らしい。
魏高　人の覺えもない事を阿房らしい。
ト四聲に拗ねる。
岩子　折角人に息精挘まして、阿房らしい。
魏高　阿房らしい。

四聲　阿房らしい。
岩子　阿房らしい。
　ト拗れ合ふ。
制林　これは皆舞姫の悪い事ぢや。
慾瘤　皆狂人のやうな奴ぢや。
制林　これは舞の衆は、もう見えさうなものぢやがな。
　ト云ふ所へ金右衛門、日本姿。金糸連、蘭香、唐子仕立てにて金の團扇を持つて出る。金右衛門は茶碗の箱を持つて出るなり。
金右　ハテ、思ひも寄らぬ娘達、何にさゝれたなう。
蘭香　見て下さんせ。爰は所の支配ぢやに依つて、關帝祭りには籤取つて、所の者が舞姫の役に出ねばならず、來る道々も恥かしいに依つて、早う行きたいわいな。
金糸　そればかりぢやない。外にあのさんは、まだ嬉しがらんす事があるわいな。
金右　皆まで云ふまい。魏高の顏が見たさに、役に指されたのが嬉しからうがの。
蘭香　ナニ、てんがう云はんす。そんな事ぢやないわいな。
金右　この中からの目遣ひ。三寸俎板、やるものぢやないてや。もうそろ／＼はじけくさつて。
　ト尻を叩く。
蘭香　悪い事をさんすないな。
　ト云ひ／＼内へ入る。
兩人　いま參じました。
慾瘤　これは舞の衆、待ち兼ねて居たわいの。
四聲　誰れぢやと思うたら、舞の衆は金糸さま、蘭香さん。
蘭香　籤に中つてせう事なしに來ましてござんす。舞は不調法な程に、堪えて下さんせ。
金糸　母さんも、よう心得てくれと云うてござんした。
慾瘤　金右衛門どの、こなたはどこをのら／＼して居た。
金右　イヤモウ、あんまり持てぬに依つて、ぶら／＼歩いたら、これ見やんせ、向うの道具店で、この茶碗買うて來た。南京の山じめと云ふ土で焼いたものぢや。今は日本にも、爰の拵ゑ物が渡つて樂焼をする。この土の焼いたのを、こもがへと云うて、彼方では甚だ金目なものぢや。コレ、この縁から糸底の鹽梅、どうも云へたものではない。この掘出しで一服立てゝ飲まうと、樂しんで戻つたが、なんと好い茶碗であらうが。

ト茶碗を見せる。

魏高　それは好い物が手に入りましてごんす。日本の茶の湯と云ふものは、どう見ても人柄のよいものぢや。隨分精出して見ても、覺えられる事ぢやない。

金右　こなさんは京肌で、手前がよいに依つて、教へるにも力がある。隨分精出さんせ。追ッつけ眞の臺子と云ふ事を教へてやらう。

魏高　お前の留守にでも、それ〳〵、其やうに釜を沸らして置くぞえ。

金右　忝ない。この内に炭でもして置いてくれる者は、こなさんでなければない。さらば一服たべかけうか。

ト風呂へかゝり、右の茶碗にて茶を立てる。

制林　エヽ、あれが日本から吹き流されて來た、金右衞門と云ふ人か。

慾搐　此方の大きな喰ひ潰しでごんすわいの。コレ、今日は關帝の祭りぢや。ちつとこなたも、内の事手傳はしやれ。

金右　とんと唐の事はたべつけぬに依つて、氣に入るまいかと思うて。

岩子　イヤ、氣に入つても入らいでも、させにや置かぬ。イヤモウ、日本の者ほど死太い者はない。このちやくちうへ吹き流されて、呆た面構へて居たのを、滿道の都へ申し上げたれば、此方の内へお預けなされて、殘りの船頭は皆日本の元船へ置いて、毎日食はして置く米も堪るものか。それによし〳〵と喰ひ潰して居ながら、毎日毎日野良かわいて、茶の湯置いてくれよ。我が物いらずに炭焚いて、釜もどこぞでは焚き割つてしまふであらう。取上げるぞ。アレ見やしやれ。此やうに云うても、蛙の頬へ水かけたやうに、まじまじと、あの面わいの。

慾搐　日本の面は頬の皮が厚い。コレ、孤がへか延がへか知らぬが、日本でこそ重寶すれ、南京の土で焼いた物は此方の擂粉鉢から犬の五器までが皆南京ぢや。エヽ、大きなべら作ではあるわいの。

岩子　ハテ、べら作ぢやに依つて、吹き流されて來たものぢや。

魏高　こなさんも、其やうに云はいでも大事ない事ぢや。

岩子　なんの、云うたらなんぢや。面妖、あのならず者の事を云ふと、贔屓する程にの。

魏高　面妖、あの人の事と云ふと、やかましう云はんす程にの。

岩子　イヤ、われが贔屓すりやする程、おれは怪體が悪い。

ト四聲にかけて

オ、、忌々しいわい。

魏高　たつた一人唐へ來て居て、人の贔屓がなうて、あの人も立つものか。おりやまた金輪際贔屓します。

岩子　おれが又、ぼひまくつて見せう。

魏高　わしがぼひまくらすまい。

岩子　なんでわりや、强う突ツかゝる。

ト胸倉持つて

魏高　誰れが突ツかゝつた。

岩子　われがいやい。

ト振り廻す。摑み合ふ。皆々取さへる。金右衛門、制林慾痴も取さへる。この間慾痴は知らぬ顔で、金右衛門、蹴倒すを、岩子は退け／＼と云ふうちに、四聲に抱きつく。嫌がる。蘭奢は魏高に抱きつく。四聲、振り放す。金右衛門、蘭奢に抱きつかしてやる。始終喧嘩を取さへる顔にてするなり。この中へ、田樂和尚、唐僧の姿にて、弟子坊主一人連れ、拂子持ち、殊勝げな顔にて、内へズツと入る所を、岩子、魏高、慾痴、金右衛門、寄つてかゝつて踏みのめす。

和尚　アイタ／＼。

制林　オ、、コリヤ／＼、和尚様ぢや／＼。

岩子　これは麁相な。

ト慾痴も側へ寄り、此うち金右衛門は先の所へ、ちやつと直り居る。

慾痴　モシ／＼、人違ひぢや／＼。堪忍なされませ。

制林　どこも痛みは致しませぬか。

和尚　イヤ／＼、既に佛の御言にも、犬も歩けば棒に遭ふとお說きなされた。出家侍ひ大畜生と云へば、踏まれるもコレ、悟りのうちでござる。

制林　役にも立たぬ事を競り合ふに依つてぢや。和尚様がお參りなされたら、早う祭りを始めたがよいわいの。

慾痴　モシ、早うお始めなされて下さりませ。

和尚　して、舞の衆は來たか。

蘭奢　アイ、疾から參つて居ります。

和尚　オヽ、これな娘御達、御苦勞でえす。サア／＼、そんなら始めませう。

慾痴　サア／＼、娘も勤めや。

ト弟子坊主、太鼓。慾痴、木魚。制林齋、鉦。小さき

半鐘と太鼓は弟子坊主打つなり。和尚、拂子持つて、眞中に鷹爪らしく立つ。蘭香、金糸迸、唐子姿にて兩方へ立つ。

和尚　關帝ぼさぶうちらしぢんめんや。

皆々　ぶうちうらしぢんめんや。

ト右の囃子、鐵元の鳴り物のやうに囃す。唐子、團扇を持つて踊る。和尚はヂツとして居る。金右衛門は茶の湯しい〳〵これを見てをかしがる。右のうち岩子、四聲を向うへ手を持つて引摺り出す。いろ〳〵嫌らしうして、拜む〳〵と抱きつく。四聲、嫌がり振り放す所を、魏高、出て割つて入り、睨むと、岩子、ちやつと元の所へ坐る。四聲、魏高に眼にて云ふこなし。蘭香、割つて入り、魏高を叩く。二人ちやつと元の所へ坐るを、蘭香、魏高を留めて濡れる。人が見て居ると云ふ思ひ入れして、振り切り元の所へ坐る。蘭香もちやつと坐る。金右衛門、見て居て、嬉しがり樂しむ。鳴り物の切れに、和尚、鐵元の導師の音聲にて

和尚　そぼれん〳〵れんす、がんしてれつく、げんさいわべかす、いろんことしんしやくべれん、つぴぢん〳〵しやくんべれん、かうこんつひんもうずかす、まゝいんまいんのみやうがんにかなふべれん、ぱアぱかほうちうきうべれん〳〵。

ト鐵元のやうに云ふ。またお經のやうに、皆々云うて、右の鳴り物早める。四聲、魏高を連れ出し、蘭香、押退ける。岩子、鉦を耳の側へ持つて打ち叩き廻す。皆せり合ひ叩き合ふ。この間に和尚、唐音使ひ、右の中へ入り、唐音にて靜めるを突きこかす。唐音にて腹立てる。四聲、和尚の胸倉取つて振り廻し、顏見て違うたと云ふ心にて、突きこかす。その間に蘭香、魏高が胸倉持ち口說く。魏高、振り切り、和尚、唐音にて挨拶する。岩子、四聲にかゝる。皆々摑み合ふ。鳴り物早うなり、慾痴も制林齋も、この中へ入り、何事ぢやと云ふ身振り。摑み合ひにて、鳴り物納まり、此うちに彳源司、けしつきの野袴、羽織にて、供連れ出る。

慾痴　コリヤ、何の事ぢや〳〵。

和尚　イヤ〳〵、この關帝祭りは、大抵の所でやめるものぢや。マア〳〵、これぎりにしまひませう。

供男　賴まう。國見の長者宅はこれか。

慾痴　アレ〳〵、案内がある。魏高、出いやい。

魏高　ハイ、どれからござりました。
ト表へ出て云ふ。
供男　この所へ制林齋は來て居めさるか。
魏高　成る程、來て居られます。
德源　もうよい／＼。許しやれ。通り申す。
ト内へ入る。
制林　オヽ、これは可慶館までござりますか。
德源　林齋、昨日は逢ひ申した。
制林　マア／＼、お通りなされませ。
ト德源司、上へ通る。と皆々次第に並ぶ。
德源　其方へ參つたところ、これに苦ると云ふ傳言ゆゑ、直ぐに參つた。龍の玉を差上げる儀を、早飛脚にて國王へ申し上げたところ、殊ないお喜び、一時も早う持參いたすやうに仰せ越された。尙追ひ／＼に御褒美も下されるであらう。
制林　イヤモウ、有り難い仕合せでござります。卽ちこれに持參いたしましてござりまする。お改め下さりませ。
德源　ドレ／＼。
ト箱を出す。德源司、蓋を開き、袱紗を解き改める。この間に和尙、金右衛門が茶の湯の手前を見て、感心して居る。金右衛門、和尙に一服差出す。和尙、戴いて飮む。慾瘤玉を見て居る。岩子、魏高、四牌は玉を見て居る顏にて、口舌のこなしあり、陶香、魏高が袖を引き、少し濡れるを、四牌、悋氣の模樣。岩子、それを見て腹立てる。この思ひ入れのうち、德源司、玉を見て
德源　天晴れ、都より御所望なさるゝも無理でない、夜光の玉と云うても苦しからぬ重寶。ナニ、その印子を持て。
供男　ハア。
ト錦の袋を持つて來る。德源司、内より印子の包み五つ取出し
德源　契約の通り印子五百枚、卽ち國王の御判が据りある。有り難う頂戴しやれ。
制林　これは有り難うござります。
德源　差上げて御意に叶うたらば、如何やうの出世になららも知れぬ。身も大慶に存ずる。
制林　直ぐにお歸し申すも、餘り無下ならござります。爰は私しが一家どもの宅で、今日は關帝祭りでござります。どうぞ奥で御酒一つ、お上がりなされて下さりませ

ぬか。
德源 イカサマ、この家も諸國の荷物改めの代官、制林齋の一家とあれば、後日にお召し出しなさるゝ事もあらう。その時はよろしく推擧いたしてくれう。
慾瘤 兎角よいようにお願ひ申します。
德源 然らば、暫らく休息いたさうか。
慾瘤 それは有り難うござります。
德源 コリヤ、後程迎ひに參れ。
供男 ハア、。
慾瘤 コリヤ娘、御案内申せ。コリヤ／＼、コリヤ娘。
四聲 アイ。
ト悧りする。
慾瘤 何をキョロ／＼する事がある。御案内申せやい。
四聲 サア、行くわいな。
制林 隨分御馳走申して下され。
德源 然らば參らうか。
制林 サア、お出でなされませ。
慾瘤 ヤレ、行けいやい。
ト四聲、魏高に心意氣あるを、無理に奥へやる。德源司、制林齋、連れ立ち、奥へ入る。
魏高 サア、和尙樣も、奥へお出でなされませ。
和尙 イヤ／＼、もうおれは、珍茶を飮んだに依つて、滿腹しました。もう歸りませう。
慾瘤 それ／＼、大事のお客がある。坊主は邪魔ぢや。雛の衆も連れて去んでもらひませう。忙しいぞや／＼。
ト箒で掃き出す。
和尙 どうでこんな事ぢやあらうと思うた。サア、二人ながら連れ立つて歸らう。おぢや。
蘭香 そんなら魏高さん、明日來る程に、先刻に云うた事覺えて居てや。
和尙 ハア、拙が呑み込んで居るわいやい。イヤ、お茶忝なうごんす。
金右 叉ござりませ。
和尙 サア、おぢや。これはしたり、よい加減うづかせいやい。
ト云ひ／＼、蘭香、金糸連を連れ入る。この間岩子、五百枚の金を欲しき思ひ入れ。
慾瘤 ヤイ魏高、何をうつかりとして居る。われもちやつと奥へ行て、料理の拵らへもせい。コリヤ、豚の南蠻煮から先へ出せ。

魏高　アイ、呑み込んで居ります。
慾瘤　コリヤ〳〵、鷄は料理が安うなるぞ。
魏高　サア、ようござります。
慾瘤　コリヤ、羊の茶碗蒸しをせいよ。
魏高　サア、ようござります。
慾瘤　吸ひ物もせいよ。
魏高　ようござります。
慾瘤　なんのよい事があるか。
ト箒で叩き立てる。
魏高　ハイ〳〵。
ト云ひ〳〵入る。金右衛門は二重舞臺に茶具片附ける。
岩子　サア〳〵、忙しい〳〵。
ト祭りを片附ける。
伯母貴、餘ッぽどの大身と見えるわいの。
慾瘤　なんでも馳走して置いて悪い事はない。なんぞ思ひつきはないか。
岩子　あるぞ〳〵。彼奴は日本の者ぢやに依つて、歌の風がサラリと變る。彼奴にしつぽくをさゝうぢやあるまいか。

慾瘤　これはいつちよい。コレ、ならずどの、お客がある。しつぽくを料理してもらはう。
金右　ア、おりや虎の料理は不案内に依つて、間に合ひますまい。手傳ひ事なら手傳ひませう。爰のしつぽくは知らぬでごんす。
慾瘤　サア、知らぬさかいで、さして見るのぢや。兎角こみづぼつかりつくわい。
岩子　知らん顔して居やんせ。よいやうにする。
ト岩子、金右衛門が手を取つて、小手招きしながら、舞臺向うへ連れ出し、顔を眺め
岩子　貴様なんぢや。水汲めと云はうが、使ひに行けと云はうが、米も洗はにやならず、釜の下も焚かにやならず、風呂も沸かさにやならぬ。吹き流された者は預かつた内の下男ぢやぞよ。
金右　ハテ、そりや預けられる時に、上から云ひつけたのを、よう覺えて居ます。
岩子　イヤ、免せぬわいの。此方の釜で此方の炭で茶の湯ばつかりして、竪な事を横へもぬからしませぬわいの。コレならず、早い事を云うて聞かさう。此方の内は、このちやぐちうの代官をして、諸國の荷物を預かつて、此

方の掴らぬ物を、日本へやる事はならぬワ。毎年日本へ船が出る。よいか。貴様がコリ〳〵働らくと、願うてその船に乘せて、日本へ歸してやるワ。よいか。さうづう〳〵すると、百年經つても船に乘せはせぬ。よいか。聞えたか、べら坊。

金右　サア、そりやモウ、去にたいが一ぱいぢやに依つて、働らく事は隨分働らきます。

ト不請々々に云ふ。

岩子　また働らかいで堪るものか。

慾痴　マア〳〵、その茶の湯とやらをお客へ一ぱい、ごしごしと立てゝ上げませい。

金右　ア、。

慾痴　今日買うて來たその茶碗でぢやぞ。

金右　ア、。

岩子　まだいの。コレ〳〵、これも持つて來たり。

ト茶碗に腰辨當、金右衛門に持たせ

慾痴　いつそ稽仕さそう。ならずを連れておぢや。

金右　エ、、日本では、とびくらにもはねくらにも、負けずに人に腰かゞめさす金右衛門が

岩子　なんぢや。

金右　ア、、唐のこつちや。儘よ。

ト唄になり、思ひ入れあつて、三人奥へ入る。このめりやす、唐のめりやすなり。魏高、奥より茛盆提け出る。

魏高　さても〳〵おとましい事。ほつとした。時に、あの岩子は、どうでも四聲を

ト思案して

おれにこの家の繼ぎ目をさせぬのは、生さぬ仲ぢやに依つて、どうも母が。

ト思案の所へ、橋がゝりより、芙蓉、唐の婆者の形にて、走り出て、內へ入り見て

芙蓉　ヤア、魏高さんか。

魏高　其方は芙蓉か。

芙蓉　逢ひたかつた。

魏高　どうして其方は爰へ來た。

芙蓉　わしや內を拔けて來たわいな。

魏高　ヤア、、そりやどうして。

芙蓉　お前と云ふ者あるゆゑ、勤めの邪魔になり、こちらに身請けの仕手があると云うて、モウ父さんが、その相談にかゝつて居さんすが、お前を退けて外の人の所へ行

く氣はない。それで內を拔けて來ましてござんす。どうぞ思案して下さんせいな。

ト四聲、出て、聞いて居る。

魏高　思案と云うて、駈落ちか心中せうより外の事はない。どうぞ隱して置きたいものぢやが。

四聲　斯う云ふうちに、追手が來てはどうもならぬ。どうぞ早う連れて退いて下さんせいな。

魏高　サア、それも連れて退からうが、マア當分

四聲　わたしが匿まひませう。

兩人　ヤア。

ト四聲、魏高が胸倉持つて

四聲　魏高さん、知つて居るぞえ。ありや妾屋の芙蓉どのであらうがな。

魏高　サアそれは。

四聲　お前が馴染んで居やしやんす事は、疾から聞いて居るけれど、云ひ號けのわたし、妾てかけはある習ひ、なんの、女夫にさへなつて下さんすなら、悋氣してよいものか。また旦御の氣に入るやうに、敎へてもらはうと思うて居る。それに常住口でばつかり堪能さして、寢つきになんのかのと、イヤ腹が痛いのなんのかのと、芙蓉どのに心中立て。わたしがそれ程うるさくば、いつそ殺して下さんせ。お前は心强い、胴慾なお方でござんすわいの。

芙蓉　さてはお前が云ひ號けの四聲さんか。今まではさぞ腹が立つたでござんせう。なんの〳〵誓文、お前を遠ざけるわたしが心はないけれど、斯うなつた緣ぢやと思うて、堪忍して下さんせ。

ト岩子、出て聞いて居る。

魏高　尤もは尤もぢやが、爰をよう聞いてたも。死なしやつた長者どのが遺言には、おれと其方と一つにして、この跡式を讓る契約。ところを今の母者人が、兎角憎んで甥の岩子に、この家を遣りたいと云ふ心底は、常の仕方で知れて居る。今のうちに其方に手をかけては、その憎しみで岩子が、どのやうな事をせうも知れぬ。印子三百枚、國王へ差上げて、跡目の手形さへ貰へば、この家の主。そとでは表向きで祝言するのに、ぐつとも點の打ち手はない。その時は芙蓉が事も打割つて、話さうと思うて居た。さら〳〵其方を嫌ふのではない程に、疑ひを晴らしてたもいの。

芙蓉　常にもその事ばかり云うて、わたしは妾にする心で

ござんすわいな。
四聲　さう云ふ事と知らず、恨んだが恥かしい。堪えて下さんせ。
魏高　なんの堪えるの堪えぬのと云ふところか。二世かけて女夫ぢやわいの。とは云ふものゝ、三百枚と云ふ印子がなければ。
岩子　おれが貸してやらう。
魏高　ヤヽ、岩子どのか。
四聲　お前は。
岩子　悔りする事はない。ソレ、印子三百枚。
ト抛り出す。
三人　これは。
岩子　國王へ持つて行て、繼目の手形を貰うておぢや。
魏高　さうして、この印子は。
岩子　伯母が持つて居る鍵を盗んで、藏からソッと出して來たのぢや。
魏高　アノこなさんが。
ト云ふ所へ、合慢、出て來る。
合慢　大方爰に居おるであらう。
ト内へ入る。

芙蓉　コリヤ、けつかるワ。
芙蓉　ヤア父さん。
合慢　コリヤ〳〵、もう隱れても動かしやせぬワ。イヤコレ、魏高どの、貴樣は此方の娘が蟲になつて、まだ邪魔がし足らいで、聢落ちさしたのぢやな。コレ、誰れぢやと思ふ。妾屋の合慢ぢや。娘を賣つて喰ふ商賣を、貴樣達に引ッかけられて堪るものか。千も萬もない。サアサア、來い〳〵。
ト芙蓉を引立てうとする。岩子、合慢を突き飛ばす。
合慢　コリヤ、なんとするのぢや。
岩子　芙蓉は聢落ちぢやない。身請けするのぢや。
合慢　ヤ、なんと。
岩子　魏高が身請けするが、云ひ分あるか。
合慢　面白い。娘が身請けは、印子二百枚ぢやぞや。
岩子　ハテ、二百枚そこらの事なら出さうわい。
合慢　こりや珍らしい。ドレ、受取らう。
岩子　魏高。ソレ、二百枚渡してこましや。
ト また懷より出す。魏高、取つて
魏高　忝ない。ソレ、印子二百枚。
合慢　ヤア、、こりや印子ぢや。

岩子　なんと、云ひ分があるか。
合慢　ハヽヽ、斯う御勘當になさるゝに、なんの〳〵云ひ分がござりませう。
岩子　云ひ分なくば、證文書け。
合慢　書きませいでは。
ト矢立出し、鼻紙にて
サア、芙蓉と親子の縁切り證文。
ト取つて見て
魏高　アイ〳〵。
ト取つて置く。
岩子　大事の物ぢや。ソレ、取つて置きや。
合慢　そんなら、もうお暇申しませう。モシ、岩子さま、まだ好い娘がござります。ちつとお出でなされませ。
岩子　小言云はずと、キリ〳〵うせやアがれ。
ト踏み倒す。
合慢　イヤモウ、痛うても、取る物取つたらよいわいの。
ト迯げて入る。
魏高　だん〳〵のお世話、忝ないが、どう云ふ心でこの印子を。
岩子　シイ〳〵、聲が高い。

ト手を打つて
我折つた。さりとは〳〵三人の心底を聞いて、ほんに涙がこぼれる。今まで芙蓉に引かれて、買うても買うても逢はぬに依つて、魏高にあゝ逆つては、家の娘も捨てるであらうと、一聲に惚れた顔して口說いたは、其方がそウ何とぞ云ふか、そこでは意見して女夫にせうと思うての事。家の跡目がさせたいばかり。その三百枚で継目の手形さへ取つて來れば、もう伯母がてんてこ舞ひしても叶はぬ事、三人の志しを聞いた依つて、おれが心も明かして聞かすのぢや。ハテ、これ程の遣ひしたと云うて、見える身代ぢやなし、知れてからが跡目さへ繼ぎや、我が物取るに、誰が鬮の打ち手があらうぞいの。
魏高　さう云ふ心のこなたであらうとは、うろたへた神も知らぬ事ぢや。今まで惡う思うて居た心が勿體ない。諸事これぢや。忝なうごんす。
ト拜む。
四聲　嫌らしい〳〵と思うて居たのは、矢ツ張りわたしが爲に惚れて下さんしたのか。
芙蓉　岩子さん、お前の心を聞いて、何にも申しませぬ。
四聲　エヽ、忝なうござんす。

ト拜む。
岩子　さう拜まれると、結句術ない。
魏高　拜まにやならぬ。モウ跡式は取る、芙蓉が身請けはする。四聲は女房に持つ。これより嬉しい事が、どこにあるものでいの。
岩子　わが身達疑ひが晴れさへすりや、おりやモウ今死んでも本望ぢや。ソレ、その袋へしつかりと入れて、首に掛けて居や。
ト渡す。
魏高　イヤモウ、繼目をする大事の印子。粗末にしてよいものかいの。
ト首へ掛ける。
四聲　何から何までお世話。どうも禮の云ひやうがござんせぬ。
岩子　とてもめでたい次手ぢや。二人ながら魏高を連れて、あの小座敷へ。
ト三人、モヂモヂする思ひ入れ。岩子、顏で思ひ入れして
エヽ、埒の明かぬ生娘ではある。何やかや話しの仕様は、芙蓉に敎へてもらふと云うたぢやないか。

四聲　サア、それはさうぢやけれど、どうやら。
岩子　伯母が見りややかましい。芙蓉、粹のやうにもない、引ッ張つて行けいやい。
芙蓉　サア、四聲さん、お前は本妻、わたしは妾、大事ないわいな。
岩子　魏高、急に恥かしがる娘ぢや。わが身がモヂついて居ては濟まぬわいの。
魏高　ほんになア。なんの、別に三人ながら側に居るのに、滅相な事して堪るものか。ナウ岩子どの。
岩子　其方の物ぢや。御勝手になされ。
芙蓉　そんな事云ふ手間で、ちやつとござんせいなア。
魏高　四聲、行こか。
四聲　どうなりと。
魏高　てんぽの皮。行つてくれう。
四聲　サア、ござんせいなア。
ト唄になり、魏高、岩子に斟酌の思ひ入れ。岩子、脇見して居る思ひ入れあつて、二人を連れ、障子屋體へ入る。岩子、後見送り、あたりを見て
岩子　どうやら斯うやら、銅脈は掴ました。さて、誠の五百枚は、重々とこれにお渡りなさるゝぢや。時に、三百

枚は毎月、この二百兩は芙蓉めを斯うするわえ。慎はしめるわえ。彼奴はほいまくるワ。跡式はしてやるワ。どうしてもおれは孔明ぢやわいやい。

慾痴　盗人がある。男ども、一人も動くな。詮議せい〳〵。

ト ばた〳〵する。岩子、うろたへる。

一人も動くな。共吟味ぢやぞ〳〵。

ト 岩子、右の印子をば釜を見附け、湯を風呂へ明けて、火を消し、鑵子の中へ印子を入れて、元のやうに掛けて置く。奥より徳源、制林齋、慾痴、金右衛門、男ども出る。

慾痴　一人も動くな。詮議があるぞ〳〵。

ト 魏高、四聲芙蓉も出る。

岩子　伯母者人、詮議があるとは、なんの詮議ぢや。

慾痴　大抵の事ぢやない。今日可愛館さまから制林齋さまが、受取らしやつた五百枚の印子が、今の間に無いわいやい。

皆々　ヤア、。

ト 思ひ入れ。

徳源　大切な國王より下された印子。制林齋、とく吟味しやれ。

制林　吟味の段ぢやござりませぬ。コレ、家内の者の内に、盗人のある事は知れてある。詮議してもらはうぞ。

岩子　これから銘々身晴れぢや。誰れ彼れと云ふ容赦はない。

ト 關帝の繪像を取つて來て

魏高、ちよつとおぢや。

魏高　なんでごんす。

岩子　これから家内の者、下男まで潔白を見せにやならぬ。誓文に、この關帝の像を、銘々踏んで、覺えのない者は滿足なり。覺えのある者は血を吐くが繪踏みの罰。サア、おれから踏んで見さう程に、わが身も踏みや。

ト 踏まうとする。

魏高　コレ〳〵待たんせ。踏ます事はならん。

岩子　なぜ踏まさぬ。

魏高　イヤサ、先刻のそれぢやに依つて、こなさんにそれを踏ましては、どうもならぬわいの。

岩子　なんの、別に心に覺えもない事なら、踏んだと云うて罰は中らぬわいな。

魏高　それでも、どうもそれは。

慾痴　そこに居る女子は、ついに見た事もない和郎ぢやが、

其方は誰れぢや。

芙蓉　イヱわたしは。

四聲　イヱ、こりやツイ近所のわたしが友達で。

岩子　なんの隱す事がある。ありや馴染みの芙蓉と云ふ妾ぢや。

慾瘤　ヤア、。

岩子　いま踏んで見せる。

魏高　イヤ〳〵、なんぼでも踏ます事はならぬ。

トせり合ふうち

慾瘤　待て〳〵、魏高、われが首に掛けて居る紅の紐緒は慥かに。

魏高　ヱ、。

トちやつと隱す。

慾魏　それ出せ。出し居らう。

岩子　もうよい〳〵。おれ次第にして置かんせ。もう踏めと云うても踏みやせぬ。勿體ない。これ直して置いて下んせ。

ト渡し

魏高　もう遁がれぬ。盜んだ印子、そこへ出せ。

魏高　盜んだ印子とは、なんの事ぢや。

岩子　ハテ、先刻にわれが盜んで、懷に入れて居る印子を出せと云ふ事ぢや。

魏高　コレ〳〵、麁相な事云ふまい。先刻にこなたの下されたのは、內の藏の印子を盜んでもらうたのぢや。

ト岩子、魏高を捻ぢつけ。四聲、芙蓉、これはと寄るを

慾瘤　寄るな。寄つたら、同罪ぢやぞ。

ト留めて居る。

岩子　ヤイ、盜みひろぎながら、おれに科をあぶせかけるか。皆も聞いて下さりませ。最前此奴が妾を呼んで、その芙蓉を身請けの相談して居おる。おれが見附けたに依つて、その金はどこから取つて來たと咎めたれば、うぬ吐かさぬか、これは母御人の鍵を盜んで藏から盜んで來た、どうぞ見遁がしにしてくれいと、だん〳〵頼む。若い者の事なり、高が三十枚か五十枚の事で人を損ねる事ぢやと、如何にも見遁がしにしたが、大枚の五百枚と云ふものを、死太う、よう盜んだなア。可愛館さまもこれにござる。この事が國王のお耳に入ると、荷物支配のこの家へ祟りが來て、このちやくちうに居られまいやら知れぬ。うな、家を潰しにうせたか。

ト叩いて
サア、持つて居る印子を爰へ出し居らう。
ト四聲、ツカ〳〵と行て
四聲　コレ、岩子どの、こなさんは先刻に、藏の金を五百枚盜んでやる、縫目の手形を取つたら、我が物を取る事ぢや、大事ないと云うて渡して置いて、今さら其やうな事云うて、それが濟むか。
岩子　誰れがいやい。おりや口も腐れ、そんな事云うた覺えはないぞよ。
四聲　イヤ〳〵、そんな事は云はさぬ〳〵。
芙蓉　わしも證據ぢや。云ひ譯さんせ〳〵。
四聲　あんまりでござんすわいなア。
魏高　岩子、そんなら最前のやうに云うたは、おれを斯うせうと思ふ、落し穴を拵らへたのぢやな。
岩子　盜人猛々しいと、マア、うぬが持つて居る印子を出せいやい。
ト魏高を首筋掴み、懷の袋を出し
ソレ、この袋であらうがや。
ト拋る。
制林　オヽ、これぢや〳〵。

ト内を見て
こりや三百枚はかないワ。
岩子　後の二百枚は、その貴女が身請けにやつたのぢや。
制林　ヤア、。
岩子　どう掏摸め〳〵。
ト金右衛門、割つて入り、岩子が手を捻ち上げる。
金右　イヤ、なんともしや致しませぬ。
岩子　アイタヽヽ。なんとひろぐ〳〵。
ト突き放す。
岩子　うぬは、なんでしやしやり出るのぢや。
金右　イヤサ、岡目から見て居れば、こなたばかり嵩にかかつて物云ふに依つて、云ひ伏せられる若い人の事ぢや。聞く樣子が僞はりがあると見えるに依つて。
岩子　なんぢや〳〵。何が僞はり。預けられたなら預けられたやうに、ちよ〳〵となつて居いで。但し此奴が盜みしたを、譯のあると云ふ證據でも知つて居るか。われが手合ひで盜ましたか。委細を知つて居るかいやい。
金右　イヤサ、さうではなけれども。
慾瘤　ならず者の癖に、すッ込んで居やうてや。
金右　イヤ、構ひは致さぬて。

ト釜の方へ寄る。

岩子　コリヤ〳〵、わりや下男同然の者ぢや。此方へ寄つてくれな。其方へ寄れ。其方へ寄れいやい。

ト無理に金右衞門を脇へ寄せて

これから茶の湯のなんのと、あの釜の側へ寄ると、胴腰なやすぞ。

魏高　岩子。

岩子　なんぢや。

魏高　エヽ、口惜しい。

岩子　茲な大泥坊めが。

ト蹴飛ばす所へ、合慢、出て

合慢　魏高、そこに居るか。お上へ連れて行て磔刑にかける。うせう。

ト岩子、引退け

岩子　此方に詮議の最中へ、何吐かすのぢや。

合慢　オヽ、魏高は磔刑にかける。先刻に芙蓉が身請けに渡した二百枚の印子、改めて見たりや、鉛が包んで、この通りの銅脈ぢや。

皆々　ヤア、。

制林　待て〳〵。それが似せなりや、この三百枚も。

ト見て

ヤア、第一先刻の御判の据つた包みとは違うてある。内は皆鉛ぢや。

岩子　エヽ、聞えた。ほんの印子はたぼ〳〵して、鉛を拵らへて二杯やり居るのぢや。ても怖い奴ではある。

合慢　ちやぐちうの代官もする者が、鉛を使ふと云ふ事を、引摺り廻して觸れ歩く。うせいやい。

ト魏高を引上げる。金右衞門、合慢を投げる。

また投げ居つたぞ。似せ物使うて、投げても大事ないか。うぬは何處の毛才六ぢや。

金右　其やうに仰山に云やんな。貴樣も不念ぢや。受取る時は改めて去んだがよい。持つて去んで、今さら磔刑呼はりして、もし渡した時はほんの印子で、其方で摺替へて來たと、此方から強請つたらどうしやる。

合慢　サアそれは。

金右　高が女子を連れて去にや元々ぢやないか。あんまりどんどこ云やんないの。

慾痾　性も懲りもない、よう差出るすりこがしぢや。わが身に構うてたもと、誰れが云ふ。

金右　イヤサ、構ふのぢやない。

慾痴　すッ込んで居や。すッ込まんのか。すッ込みくさらぬか。

ト側へ突ッかけ〳〵云ふ。金右衛門、後へ寄る。

岩子　また釜の方へ寄り居る。此方へ來て居れと云ふのに。

ト引退ける。

金右　さう云ふ事もないわサ。

慾痴　この、ならずめが。

岩子　釜の側へ寄つて見され。べら作めが。

合慢　娘さへ連れて去にや云ひ分はない。サア、うせう。

ト芙蓉を引立てる。

四聲　ア、コレ、それやつては。

慾痴　ヂッとして居いと云ふのに。

合慢　吠える事はない。うせうと云ふのに。

ト芙蓉を無理に引立て入る。

岩子　サア、これからほんの五百枚は、どこへやつた。眞直に吐かせ。

魏高　ア、、おのれはなア。

岩子　吐かさにや、斯うするわい。

ト踏みのめし叩く。四聲は慾痴押へて居る。始終、德源司は煙草のんで居る。金右衛門、氣の毒なる思ひ入れ。この間に風呂の火消えたるを見て、ホッと眺め思案して居る。此うちに唐樂になり、橋がゝりより方金才、唐冠、びんとこな、刺貫にて、官人數多、清道の旗を立て出て

官人　一先城方金才さまのお入り。

皆々　ヤア、殿様ぢや〳〵。

トそこらの物を片附ける。金右衛門も不思議なる體にて、片脇へ寄る。德源司は矢張り元の所を動かずに居る。四聲は魏高を介抱する。方金才、通り、二重舞臺へ上がり

方金　清道の都、乾隆皇帝の臣下、一先城方金才ぢやが、後家はどれに居る。

慾痴　ハイ〳〵、これに居りまする。

方金　先達て日本より吹き流されたる、金右衛門と云ふ者、所の代官なれば、この家へお預けなされたが、して、金右衛門はどれに居る。

金右　イヤ、日本の金右衛門、これに居りまする。

方金　金右衛門とはおことよなア。人相骨柄、威あつて猛く、日本の威風顯はれ、ハテ、逞ましい面體ぢやなア。

金右　して、御用とは、如何やうな儀でござりまする。
方金　乾隆皇帝よりの勅使。
金右　ヘッ〳〵。
方金　金右衛門儀、この國へ吹き流され、暫らく預け置くところ、茶の湯に詳しく、日本の行儀を學び、古今茶道の名人とあり、國王にも茶の道を好みましませども、日本の行儀、千の利休とやらんの作法、なか〳〵その智に及ばず、金右衛門茶の道に達したるこそ幸ひ、唐土に止まり、專ら茶の道を敎へ、口傳悉く傳ふべし。恩賞として大名に取立て、此ちやぐちう國を宛て行はるゝ間、有り難うお請け申されてよからう。
金右　ムウ、すりや私しの茶道がお聞きに達し、唐土に止まれよとある儀でござりまするか。
方金　當國を宛て行はるれば、辭退はあるまい。
金右　何がさて、何國に居るも出世がしたさ。委細畏まり奉りましてござりまずる。
方金　申しつけた物持て。
官人　ハア、。
　ト臺に唐冠と團扇を乘せて、持つて來る。
方金　お上より下し賜はる恩賞の印。イザ、冠召され。

金右　すりや、これを着ませうかな。
方金　早く〳〵。
　ト金右衛門、右の姿にて、冠を着て唐團扇を持ち
今日よりはこの國の主。我れ〳〵どもが朋輩の大名。
　ト下へ下りて、下座の方へ床几を立てさせ
サア、供の官人も召され參つてござる。イザ、御同道申しませう。
金右　然らば裝束は、彼の地で仕りませうか。
方金　その儀も申し附け置きました。サア、イザ、お越しなされい。官人ども。
官人　ハア、。
金右　イヤ〳〵、暫らくお待ち下されませう。ちとこれに用事もござりまする。お待ち下さりませい。
方金　御用ござらば何時までも相待ち居りませう。お心措きなう。
金右　流人同然の拙者、用意もござらぬ。印子を少々仰せつけられい。
官人　ハア、。
方金　用意の印子を持て。
　ト袋入りの印子を持つて、金右衛門に渡す。

如何程なりともお使ひなされい。

金右　過分に存じまする。ナニ、慾瘤、岩子、それへ出やれ。

兩人　ハイ〳〵。

ト側へ來る。

金右　吹き流されて以後は、だん〳〵心遣ひであつた。當座の褒美として印子を遣はす。兩人、受取れ。

ト出す。

慾瘤　これは〳〵、有り難い事でござります。畢竟私しの所も役人の事なり、吹き流されてござるを預かりまするも役目。これを貰ひまするのも、冥加が恐ろしうござります。

岩子　それ〳〵、今日からは、此ちやぐちらの殿様、代官を致して居りますれば、お前様の下役人でござりまする。この上ともに諸國の荷物を、日本へ積み出しまする船の運賃を、半減せうで拂ひますやうに、ナウ伯母貴。

慾瘤　ハテ、お馴染みの事ぢや。そこらはよいやうになされて下さりませうぞいの。

金右　イヤモウ、荷物積み出しの事は、今まで見聞き致して居る。勝手のよいやうに致してくれる。氣遣ひしやるな。

兩人　それは有り難うござりまする。

金右　水を汲めと云はうが、使ひに行けと云はうが、米も洗はにやならず、釜の下も焚かにやならず、吹き流された者は、下男同然に風呂も沸かす筈を、ずう〳〵茶の湯ばかりして居るべら作を世話にした事ぢや。惡う思うてよいものか。

岩子　ハヽ、なんとござりませう。

金右　そこの家に居て始終手馴れたる茶の具道具、殘し置くは如何にしても心惜い。茶の道に依つて出世いたしたれば、手馴れし道具は悉く求めたい。賣つてくれまいか。

岩子　これはハヤお詞とも覺えませぬ。お前は殿様、此方は代官。家内の物を皆おこせと仰しやつても、上げませねばならぬ。ナウ。

慾瘤　それにマア、これを貰ひましては心が濟みませぬ。こりやモウ、よしになされて下さりませ。

金右　イヤ〳〵、例へ、役目に上下あつても、我まゝをせぬが日本の政道。平に受納しやれ。

慾瘤　あのやうに仰しやるが、岩子、どうせう。

岩子　お志しぢや。貰うて置かつしやれ。
慾瘤　戴きますでござりまする。
金右　いよ／＼茶の具は持參いたすぞ。
岩子　イヤモ、何なりとも持つてお歸りなされませ。
慾瘤　何でも差上げまする。
金右　過分々々。
　ト二重舞臺へ上がり、釜に手をかける。岩子、見て悔りし、其まゝ捉まへ
岩子　アヽ、モシ／＼、この釜をなんとなされまする。
金右　ハテ、茶具は殘らず此方へ取るのサ。
岩子　滅相な。外の物は格別、この釜ばかりは渡す事はなりませぬ。
金右　此方へ取るのサ。
岩子　イヤ、こればかりはならぬ。
金右　ハテサテ。
　ト揉み合ひ、釜を打ちあけると、内より印子五包み出る。
制林　ヤア、こりや最前受取つた、御判の据つた五百枚ぢや。
岩子　それを。
　ト金右衛門、手を捻ぢ上げ
金右　五百枚の印子が出るからは、魏高に云ひ分はあるまいがな。
制林　なんの申し分がござりませうぞ。
金右　おのれが盜みながら、難儀を拵らへ追ひ出だし、この家を横領せうと云ふ、唐土ではその手で行かうが、日本では見飽く程見て居る事。大盜人めが。
岩子　それ知つたら、モウ。
　ト立廻りあつて、見事に投げる。岩子、逃げうとする。方金才、直ぐに立廻りにて、押へ繩かける。
方金　金右衛門どの、日本の繩捌きは、斯やうなものでござるか。
金右　お手際、見事でござる。
方金　とても事に白狀せい。金右衛門どのへの晴れに、聞き傳へた日本流は、こんなものであらう。
　ト劍の鐺でこじる。
岩子　アヽ、申します／＼。
方金　サア、云へ。
岩子　高は娘の四聲と女夫になつて、魏高めを追ひ出して、この家を丸呑みにせうと云ふ談合。相手はそこに居る伯

母貴でござりまする。
慾瘤　ヤイ〳〵〳〵、滅相な事云へ。おりや、ちよつと行て來る所がある。
ト駈け出さうとする。同じく方金才、取つて投げ、縄かける。
制林　さても〳〵恐ろしい奴等ぢや。
魏高　私しが難儀を遁がれましたも、偏へに金右衛門さまのお庇。
四際　エヽ、有り難うござりまする。
制林　こんな時には何も彼も改めたがよい。この印子も念の爲ぢや。
ト改め見て
ヤアヽ、これも銅脈ぢや。
魏高　なんと云はつしやります。
制林　こりや又一層、鉛と土とが入つてある。
皆々　エヽ。
制林　可慶館さま、しつかりと御判の据つた包みが、皆銅脈でござりまする。こりや、どうでござりますぞいなう。
ト徳源司、悠々と包みを見て
徳源　こりや此方の印形でない。
制林　でも最前。
徳源　最前とは、最前渡した包みの印形と、抜群の相違してある。こりやコレ今のうちに摺替へられたものと見える。何にもせよ、此方は大事の御用。龍の玉は持つて歸る。
ト箱を持つて立つ。
制林　アヽ、モシ〳〵、さう仰しやつては濟みませぬ。二人ながら留めてくれいやい。
四際　モシ、それでは。
徳源　なんぢや。一旦渡した包みを似せぢやと云うて、二杯取らうと云ふのか。
制林　それでもお前。
徳源　憎くい奴の。今一言吐かして見よ。手は見せぬ。打ち放すぞ。大盗人めが。
ト行かうとする。
金右　イヤ、コレ〳〵、暫らく待たつしやれ。
徳源　身共が事か。
金右　其方の事ぢや。
徳源　イヤ、急用事で罷り歸る。

金右　イヤサ、呼びかけたれば、一寸も先へはやらぬ。詮議が残つた。止らうてや。

ト徳源司、思ひ入れあつて、後へ戻り

徳源　残つたとは、何の詮議が、どう残つた。

金右　先づ其許は、何れの領主で、名は何と云ふ。

徳源　身共か。

金右　如何にも。

徳源　四百餘州に何萬何千と云ふ國郡の領主、名を云つたとて覺えはすまい。清道の都、乾隆皇帝の家臣、可慶館徳源司と云ふ者ぢやが、それが何とした。

金右　アノ、御自分が。

徳源　如何にも。

金右　ハヽヽ。ハテ、唐土にも騙りがあるな。

徳源　なんと。

金右　蛇の道は蛇。外の事は不得手にあらうが、この筋一通りは三寸俎板、折るものでない。よい加減に出直せ。

徳源　日本野郎の素町人め。身を騙りぢやと云ふには、なんぞ慥かな證據があるか。

金右　コレ〳〵、すりや、いよ〳〵可慶館に相違ないか。

徳源　おんでもない事。

方金　金右衛門どの、天晴れの御眼力、驚ろき入りました。騙りを商賣にする程あつて、押しの強い大盗人。コリヤヤイ、いま其方が云つた可慶館徳源司と云ふは、身が弟ぢやわいやい。

徳源　ヤア、。

金右　兄の身共がこれに居るに、四百餘州の内に、可慶館が二人あらうか。

徳源　サ、それは。

金右　折角仕込んでうせたが、悪い所へ挾まれて、最早動きは取れぬと思へ。

徳源　サ、それは。

金右　ハテ、不仕合せな騙りめぢやな。

ト徳源司、右の袖を制林齊が前へ踏み直し、手を打ち拂ひ、向うへ行かうとする。

金右　ヤイ〳〵、騙りめ、どれへ行く。

徳源　去にます。

金右　なんと。

徳源　大枚の代物。好い仕事ぢやと思うて仕掛けたけれど、騙りをしくじつたに依つて、代物戻して去にます。

金右　一寸もやる事ならぬ。この所は今日より身が領地、

日本の政道始め、厳しい所を見せしめにする。動かす事はマアならぬ。

ト徳源司、後へ戻り、のさばり返つて

徳源　日本の政道面白い。唐の騙りは、ずんど骨が堅い。すべよう去なしやればよし、悪うちくねると、何奴も此奴も胴ばかりにして置いて去ぬるぞ。

金右　政道始めに、三寸縄に縛し上げる。腕廻せ。

徳源　アノ、見事おれに縄かけるか。

金右　腕廻せ。

徳源　縄かけいよ。

金右　腕廻せ。

徳源　モウ、うぬ。

ト抜いて切つてかゝる。立廻りあつて、いろ／＼立廻りのうち、方金才、徳源司が刀打ち落す。金右衛門、附け入る。徳源司、金右衛門が差して居る刀を抜いて、奥へ駈け込む。

金右　南無三。

ト金右衛門、續いて駈け込む。

方金　なか／＼手に餘る曲者。金右衛門どの一人にては心元ない。官人ども、皆込み入つて曲者を召捕れ。

官人　ハアヽ。

ト皆々方金才とともに駈け込む。大騒ぎにて、奥バタバタして、建具の道具を抛り出す。舞臺の人數皆うろたへる。

四聲　怖いわいな／＼。

魏高　怖い事はない。おれにデッと引ッ附いて居や。

制林　こりやマア、何としたものであらう。

ト箱を持つてうろたへる。

慾瘤　コリヤ／＼、どうぞこの縄解いてくれいやい。

岩子　縛られて居て、どう解けるもので。魏高、コリヤ、解いてくれ。

魏高　エヽ、知らぬわい。

ト男、奥より走り出て

男　ヤア、えらいワ／＼。

岩子　コリヤ／＼、奥の騒動はどうぢや。

男　大抵の事ぢやござりませぬ。抜身を振り廻す。取つて投げる。何もかも打ち砕いて、いま蔵へ逃げ込んだと云うて、皆々寄つて蔵を毀つて居りますわいの。

皆々　ヤアヽ。

慾瘤　蔵を毀たれて、どうなるものかいやい。

岩子　サア、藏の毀ちぢやワ。

ト皆々うろたへる。男走り入る。奥バタ〳〵して、藏の壞ちしを抛り出す。

制林　此やうな時には、箱で持つて居やうよりは、懷へ入れて置くがよい。

ト箱の蓋を明けて

ヤア、龍の玉は無うて、こりや橙ぢや。

慾瘤　サア、玉が橙になつたぞ。

トうろたへる。

岩子　あやまつた程に、解いてくれいやい。

四辟　否ぢやわいの。

ト突き飛ばす。皆々外へ出たり、内へ入つたり、うろたへ、いろ〳〵ある。右の間、藏の壞ちしを奥より抛り出す。騷がしうする。皆々ホツと吐息ついて、舞臺に坐る。

四辟　魏高さん、こんな怖い所に居ずと、逃げさしやんせぬかいなア。

魏高　内を抛つて、どう行かれるもので。

制林　玉取返さにや去にやせぬぞ。

岩子　この形では、外へは逃げられず、伯母貴、どうせう。

慾瘤　アレ、奥はヒツソリとなつたぞや。

岩子　ほんになア、今までやかましかつたが、ヒツソリとなつた。

制林　もう曲者めは縛られたと見える。なんであらうと、これから。

ト奥より男出る。

男　そこにござりますか。

岩子　どうぢや〳〵。騙りめは括られたか。

制林　縛られたか〳〵。

男　イヤ、そこどころぢやござりませぬ。奥には鼠の子一疋居りませぬわいの。

皆々　そりやどうして〳〵。

男　藏を殘らず壞つて、中の荷物を抛り出し、せんぐりにどこへやら持つて行て、もう藏の中には箸片しないやうにして、皆一人も殘らず逃げて去にましたわいの。

皆々　ヤア、。

トせんぐりに奥へ入つては出、出てはうろたへる。

魏高　ほんに、藏を壞つて、内には何にもない。

慾瘤　國々から寄つた荷物を、どこへやら持つて行た。

制林　おれが玉は橙になつた。
皆々　こりやどうぢや。
岩子　待たしやれや。そんなら金右衞門と云ふ奴が、吹き流されたと云ふも拵らへ事で
魏高　玉を買ひに來た奴も同類で
四郎　都からお取立ての、迎ひと云ふ者も云ひ合せで
愁嶺　こちらを縛つて騷動を拵らへ
制林　藏を壞つて、諸國の荷物も家内の物も
岩子　引ツ淩つて持つてうせた。
四郎　そんならすつぺり。
岩子　唐を裸にしにうせたのぢや。
皆々　ヤヽ〳〵。
ト膽潰す。返し。
右の形に引ッ込み、一面の海になり、東の上の方に遠見の番所あり、安い唐人の形にて、頓齋、凡齋、遠見して居る。火少しあり、大風、雨降る凄き體。
凡齋　今宵は手强い風でござる。
頓齋　此やうに風が吹けば、一杯飮まにやどうも居られぬ。せめて泡盛はないか。
凡齋　遠見の番所に酒の粕もあるものか。エヽ、忌々しい役目ではある。
ト大風、雨の音する。金右衞門、黑き鐵砲袖、黑い頰冠りにて、留布をかたげ出る。舞臺の眞中にて、方々見廻し、遠見の番所を見て、思ひ入れして、舞臺の眞中より、留布にて番所へ物云ふ體。
凡齋　なんと云やる。
ト顏見合せ
頓齋　イヤサ、お身は何と云ふ。
凡齋　何をおれが顏が阿房らしい。そげだつた拙い面ぢやとは、おれが顏が貴樣の構ひになるかい。
頓齋　お身の方から阿房らしい、そけだつた面ぢやと云ふではないが。逆ねだり取措け。
凡齋　逆ねだりとは、われが事ぢや。物云ふな。
頓齋　オヽ、云へと云うても云やせぬ。
凡齋　おれも云はぬ。
頓齋　云ふな。
ト二人、睨み向つて居る。金右衞門、留布を橋がゝり、切り幕の内へ向けて物云ふ。内より大勢の聲にて
大勢　皆ようござる。

トまた思ひして、右の番所の方へ物云ふこなし。
頓齋　なんぢや。身共をべら坊ぢや。もう腹に据ゑ兼ねるぞよ。
凡齋　おのれがべら坊めと云うて置いて、直ぐに逆ねだりするか。もう堪忍がならぬぞよ。
トまた留布をさして云ふ。
兩人　なんぢや。盗人ぢや。
凡齋　おのれが物、いつ盗んだ。
頓齋　おのれが吐かしたぢやないか。
凡齋　おのれが吐かしたわい。
頓齋　おのれが吐かしたわい、
トまた留布をさしつける。
兩人　大馬鹿とは。
頓齋　もう料簡が。
ト劍を拔きかゝる。凡齋、抑へて
凡齋　わりや拔いたな。
頓齋　おのれ、捉まへたな。
凡齋　斯うしてこまそ。
ト摑み合うて火を消す。
頓齋　おのれは。

ト喰はす。
凡齋　南無三、火が消えた。
頓齋　喧嘩は喧嘩、怪我してはならぬ。
凡齋　もう、おりや下りる。
頓齋　おれ一人居る事は否ぢや。
凡齋　サア、下りい。
頓齋　われから下りい。
凡齋　われから下りい。
頓齋　一緒に下りよう。
ト二人引ッ込む。金右衞門、また思ひ入れにて、留布を橋がゝりの方へ向けて云ふ。
大勢　心得ました。
ト橋がゝりより、淺黄の襦袢、頰冠り、帶脚絆で、中通り部屋から囃子、若い者、表方殘らず三十人許り、銘々荷物をかたげ、だん／＼に出る。金右衞門は眼鏡をかけ、手帳と矢立を出し、つけて居る。一人々々金右衞門が前にて、荷物の口をちよつと解き見せる。帳につけさせ、花道の方へかたげ行く。だん／＼右の通りにして、人數を繰り廻し百人ばかりに見せるなり、人數一面に向うへ入り切つてしまふと、金右衞門、手帳を

繰つて見て、小さき算盤を出し、置き〳〵花道の方へ行く。始終大風、雨車、花道の眞中にて、ドロ〳〵にて春高島の幽靈セリ上ぐる。金右衛門を恨めしさうに見る。金右衛門、見て

金右　また出をつたな。エヽ、島の奴等は、なぜ其やうに執念深いぞい。

幽靈　五年以前此方の國へ來て、よう騙して何もかも取つたなア。われゆゑに島は皆、飢ゑて死ぬるわいやい。代物戻すか、金くれるか、算用しておこせ。

ト凄き體にて云ふ。金右衛門、忌々しいと、ぼやき〳〵本舞臺へ來る。小人島の幽靈出る。金右衛門、ギックリと止り

金右　また出くさつた。けたいの悪い。

ト ぼやき〳〵、帳繰つて居る。

小人　金右衛門、覺えて居るか。一昨年の冬、此方の島へ來て、ちよぼくさ騙して島中の荷物を船に乘せて、よう夜抜けをしたなア。小人島はわれゆゑに、ばつたり〳〵飢ゑ死ぬるわいやい。約束の金おこせ。それが否なら荷を戻しくされやい。

ト凄う云ふ。金右衛門、面倒なる思ひ入れにて、橋がかりへヂリ〳〵と行く。腹に穴の明いたる唐人の幽靈出る。

唐人　仙郷國ぢや。覺えて居るか。酷いぞよ。われが來ぬ先は、此方の國ほど寶の澤山な好い國はなかつたのに、ようも〳〵騙して引ッ浚うて去んだなア。われが去んだ後は、首を締めたり身を投げたり、エヽ、胴慾な。約束の金おこせ。

春高　荷を戻すか、金おこすか。

小人　サア、戻せいやい。

ト金右衛門を三方より取卷き、突き廻す。

金右　三千世界を驅け廻るおれぢや。うぬらが阿房で騙された事を、誰れが知つたもので。馬鹿めが。

ト ぼやき〳〵、帳を持つて、花道の方へ行かうとする。

春高　代物で戻せ。

ト 附いて行く。

小人　約束の金おこせ。

唐人　金遣らうと云うたぢやないか。

春高　おこし居れ、戻しやれ。げるめいすぽろん。

小人　ひらんだらん。

唐人　げれつてれつ。

春高　はるまん〳〵。

ト金右衛門、少し後髪にて、向うへ歩き憎い思ひ入れ。忌々しいと云ふ事を、ぼやき〳〵、裸金を五十兩ばかり出し、舞臺へザラリと抛る。三人、ツカ〳〵と金の側へ寄る。キッと眺めて

金右　カウツ。

ト算盤持つと、三人一時にバッタリと小判へ手をかける。金右衛門、肩にて笑ふ。よろしく、

幕

四つ目　小豆島の場

役名――喜村釆女之介。傾城、長門。阿房、雲太郎。薪屋、お傳。米屋、傳兵衛。大工、槌兵衛。家主、拔助。父、九郎助。種ケ島時高。相人久五郎。大手役の三實ハ加藤虎之助。阿蘭陀の黒ん坊。捕り手、辨内。女房、小女郎實ハ傾城逢夜。小豆島の門兵衛實ハ山司金右衛門。

造り物、平舞臺、本疊敷き、疊の下に切り穴。よき所に米櫃。向う赤壁、納戸口、佛壇、下座障子屋體。橋がゝり、隣りの貸家。向うに井戸、すべて貧家の體。小女郎、渡り物の衣裳、前垂れ、羊の腹ごもりの皮にて、縫ひ物して居る。その前に珊瑚樹の鉢植、唐織り錦の卷き物四五本、虎の皮二三枚、小さき箱、いろ〳〵ごつちやに並べあり、雲太郎、阿房にて、結構なる衣裳、胸前置き。拔助、お傳、傳兵衛、槌兵衛、何れも掛取りの形にて、口々借錢を乞うて居る。

傳兵　取らにや置かぬぞ。

雲太　無い物がどうやられうぞい。

皆々　無いと云うて濟むかいやい。

ト舞臺を叩き、せりふして居る見得にて、幕明く。

雲太　和御寮達は無法な和郎達ぢやぞや。此方が有つて遣らぬぢやなし、顎の缺けて取れる程、事譯云ふのに耳は無いかい。

傳兵　耳も口も有るに依つて云ふわい。僅かな錢を、今日遣らうの明日遣らうのと、釣りつける程釣るぢやないか。

雲太　サイナウ、釣るの釣らぬのと狐ぢやあるまいし。貴様も又、取らうと思ふなら、頭でかけぬがよい。一家仲で其やうにめぎやんな。
槌兵　なんでこちらが一家ぢや。
雲太　ハテ、かゝりや繋がる一家ぢやわい。
披助　黝るかい。此やうな聲立てゝ、近所の手前、外聞悪うはないか。
雲太　ヘン、隣りは空家なり、耻を耻と思ふ事がない。でん　コレ、おかさん、これ程に喚くに、知らぬ顏で總ひ物どころぢやないワ。割木の代から味噌醤油、油まで仕送つた、三十五貫八百七十三匁拂うてもらはう。
傳兵　鼻の下を養うた米代を拂はいでもよいか。三百五十八匁八分八厘今渡した。
槌兵　宿替への普請戸障子まで、やり仕事に合して、コリヤ、山にかけたのが十八貫七十六匁、受取らうかい。
皆々　サア、いま渡せ〳〵〳〵。
　　ト舞臺を叩き、やかましう云ふ。
披助　ヤア、何れも、さなせそ〳〵。強きを破るは事の元。この家主、つら〳〵彼奴が眼付きを見るに、借錢乞ふをへちまとも思はぬ、大悪黨の衒妻と見て、某皆に成り代り、一問答仕らん。その時家主、大音あげ。
雲太　てん〳〵てつこんつとん〳〵。
披助　ヤア小女郎、此方にばつかり物云はせ、家賃もおこさず横倒し。家ときつけて追ひ出すが、返答如何にと呼はつたり。
皆々　エヽ、何を盡すのぢや。
　　ト突き飛ばす。
小女　お前方も、悪黨ぢやの衒妻ぢやのと、お世話なされた上に、損させましてよいものか。皆あげます積りで居るのに、やかましう云はしやんすに依つて、わたしもどうも仕樣がないわいなア。
皆々　なんぢや拂ふ。
小女　拂ふわいな。
披助　イヤ〳〵待て暫し。お内儀、御諚を悖くは如何なれども、拂ひを取つて濟ましさへすりや、この家主を始め、物云ふ者一人もない。ナウ。
でん　それ〳〵、そんなら受取りませうかい。
槌傳　さらば受取りませう。
小女　先刻にから、そこに積んであるに、なぜ持つて去なしやんせぬぞいなア。

拔助　どこにあるぞいなア。
雲太　そこへおれが積んで置いた。
皆々　どこにいなう。
雲太　エヽ、錢ぢやない、その道具、代りに遣るのぢや。
皆々　アノこれを。
小女　お前方の掛けて置かしやんした錢や銀が、百層倍でも買はれぬ代物ぢや。其方で賣るなとどうなとして、錢の代りぢや、持つて去んで下さんせ。
拔助　この書付けは何ぢや。うにこうる一本、虎の皮三枚。
傳兵　ハテサテ大きな珊瑚樹の。
でん　なんぢや、付け札に蜀紅の錦としてある。ても結構な巻き物ぢやの。
小女　それでも足らざ、コレ〳〵、爰に伽羅が一株ござんす。これも持つて去なしやんせ。
ト箱より出し抛る。
拔助　アノ、それが伽羅か。
雲太　まだある。これが鐵を吸ふ磁石ぢやが、大抵えらいものぢやない。これも遣るぞ。
小女　帳消して下さんしたとて、まんざらお前方へ損も行くまいぞえ。
雲太　皆やかましう云ふ程あつて、結構な富に當つた。なんの嚊さん、こな樣はいつち爪が長い。嬉しからう。
でん　嬉しうなうて。僅か三十五貫か六貫かの錢で、此やうな大枚の代物貰ふ事ぢやもの。
雲太　まだしもぢや。おりやいつち惜しいのは磁石ぢや。これが鐵を吸はずに、爪を寄せうものなら、貴樣に賣つてつけたものぢや。
でん　イヤモウ、戴いて去なにやならぬわいな。
雲太　そんなら受取りするか。
でん　する段か。この上に帳も消し、醤油も割木も米も味噌も仕逐つて進ぜませうと、云ひたいがならぬ。否ぢや、小女郎さん、イヤおかさん、爰なやうな貧乏な内に、こんな大枚の代物。わしやマアえゝ受取らぬ。矢ッ張り錢が欲しいわいな。
小女　サア、その錢があれば如才はないけれども。
でん　云はしやんな。せめて錢の五百文と一貫と出して置いて、泣き事云うたがよいわいな。
雲太　錢が五百ありや、茶粥は食はずに、飯食ふわいやい。

傳兵　大枚な金目の代物を持つて、五百の錢がないと云うて理窟が詰まらぬ。
槌兵　金積んでも買はれぬ代物を、五百寄せたやうに取つて來て、錢がないと云うて人が合點するものか。
でん　イヤ〳〵、思ふ程氣味が惡い。錢を貰ひませう。
小女　ハテサテ、お前方もマア、得のつく代物を遣らうと云ふのに、無いもせぬ錢くれとおしやんすのは、わしを困らすのぢやぞえ。
でん　イヤ、氣味が惡うごんす。
雲太　なんの氣味が惡からう。此方の內で錢を取らうと云うて、百年かゝつても一文も出やせぬ。花色小紋の布子をして下さんせとせぶるけれども、飯買ふ才覺がならぬに依つて、これ見たか、世に澤山な錦の着る物ゆゑ、鼠のおだれはかする事のならぬ身代ぢや。せめて貴樣達のやうに、繼ぎのあたつた木綿物でも着るやうになつたら錢も拂はう。この着物が木綿になるまでは、錢氣はないと思うたがよい。大概お前さんの形で知れてあるのに、いかいたわけ者ぢやなア。
小女　雲太郎が申す通り、わたしもどうぞ賃仕事でもして、木綿物も着ずば、せめて紬なりとも着たうござんすわいなア。一生のうちに他所行きに、せめて花色の木綿が着て暮らしたい。お前方は常住着てござる。羨やましうござんすわいなア。
拔助　皆聞かつしやれ。味な事云うて悔む內ぢやなう。
ト此うち豆腐屋出て、豆腐箱出す。
豆腐　アイ、豆腐持つて參りました。
雲太　オイ、きらずも入れてあるの。
小女　雲太郎、肴も買うてあるのに豆腐炊くか。
雲太　へゝ、女賢しうて牛賣られぬと、旦那樣が二日醉ぢやと云はんしたに依つて、八はい豆腐にきらず汁と出かけるのぢや。
小女　ほんに、こりやよう氣が附いたわいやい。
雲太　食ふ物一通りは、さすものぢやない。
小女　豆腐屋さん、置いて去んで下さんせ。
豆腐　錢持つて歸りませう。
小女　後に持たして上げやんしよ。
豆腐　イエ〳〵、ちつとの間も掛けではえゝ賣りませぬ。錢がなか持つて歸りませう。
雲太　アヽ、コレ〳〵、わからぬ和郎ぢやわいなう。たつた十三文ぢやないかえ。

小女　待ちや〳〵。
　ト紋縮緬持つて來て
爰に紋縮緬が六本ある。これ豆腐屋樣に進ぜや。
　ト雲太郎、括りながら持つて出る。
雲太　豆腐屋、渡りの紋縮緬ぢや。五丈物が六本あるが、十三文の代りに遣れば一本が二文のちつと上につく。不請ながらこれ取つて下され。
豆腐　この間、油揚げの代に貰うた鼈甲は大事もなかつた。一本二文にはちつと見憎いが、縮緬の地は好いかえ。
雲太　渡りぢやわいなう。
豆腐　そんなら持つて歸りませう。
小女　それは忝なうございんす。
雲太　ヤレ〳〵、マア、代物は捌けたぞ。
拔助　なんぢや、一つも合點がゆかぬ。お內儀、マア爰の門兵衞が商賣はなんでえす。
小女　お前、なんと云うたら、道具や絹布の仲買ひぢやわいの。
拔助　どれ程廉う買ひ廻すか知らぬが、紋縮緬一本を、二文づゝでやると云ふは、根から呑み込めぬ。

でん　この度金右衞門と云ふ者が、唐へ渡つて方々の島々を、山木かけて根きり引浚へて廻るげな。凡そ山司ぢやと云うて、山司の金右衞門と云ふ關取りなり、三千世界を騙つて廻る大騙りぢやと云うてな、久吉さまからお尋ねの配符が廻つた。
傳兵　それ、なんでも唐の物を澤山に賣る者があらば、注進せいとあるお觸れぢや。
傳兵　どうやら爰の內も小氣味の惡い。もしそんな筋ぢやないかの。
拔助　サア、この家主も、門兵衞が磔刑にかゝらうが、火炙りに遭はうが、それは構はぬが、その間の物入りが否や。
小女　モシ〳〵、お家主樣、お前までが同じやうに、其やうな氣味の惡い事云うて下さんすな。こちの人が聞かれたら、大抵の事でございんすまいぞえ。
拔助　でも、こなた無商賣の喰ひ倒しで、毀れかゝつたやうな內に結構な着物を着て、とんと雪隱で雛祭りするやうな。そこを思へば片すか。
でん　かいすか。
傳兵　まいすか。

拔助　りんすか。
槌兵　烏か。
拔助　雀か。
槌助　鯑か。
拔助　鯣か。
傳兵　エヽ、爰な和郞は。
拔助　エヽ、調子に乘つてさやした。
槌兵　すづくしでやつてのけた。
でん　すッ込んで居や。
槌兵　こいつも盡しぢやなア。
でん　やかましいわい。
雲太　おのれがやかましいわい。
ト後へ寄る。
でん　千も萬もない。この小豆島へ放れてあつても、御領分ぢやに依つて、何時尻が來うやら知れぬ。氣味の惡い物取らうより、疊や建具やを引ッ外して持つて去なうぢやあるまいか。
槌兵　こりやいつちよい思案ぢや。おれが内で市してやらう。
傳兵　それがよからう〳〵。

拔助　アヽ、おれも其うちぢやぞ。
傳兵　呑み込んで居るわいなう。
拔助　よし〳〵、家主が呑み込んだ。屋根と根太とは此方の物ぢや。後は皆賣つてしまはしやれ。
でん　マア、あの佛壇から先へ。
傳槌　合點ぢや。
ト行かうとするを、小女郞、立ち塞がり
小女　借錢は借錢、主の留守に滅相な事さんすと、きく事ぢやないぞ。
拔助　だんない。引退けて行かつしやれ。
ト行かうとする。雲太郞、鉢卷にて棒振り廻し
雲太　おのいら、よい加減がよからうがな。この雲太郞が一番留めた。其まゝで歸らばよし、去なぬが最後、一つの行燈蹴破つて、明日の晩から事をかゝすぞ。
ト睨む。
でん　大馬鹿め。
ト引摺り退け、道具にかゝらうとするを、門兵衞、右のうち戻りかゝり、ズッと入る。皆々を取つて投げる。
雲太　ヤア、旦那さん。

門兵　嬶、また掛取りか。
小女　よう戻つて下さんした。イヤモウ、大抵な事ぢやないわいなア。
門兵　サア、よいてや。知れた出入りぢや。默つて居や居や。
雲太　サア、もう韋駄天ぢやぞ。奧さんは女子、女房なり、おりや、あるに甲斐ない大はつたんの男なり。今までは負けて居たが、もう負けぬぞ。借錢乞うて見ぬかい。アア心よやなア。
門兵　そりや、なんの眞似ぢや。
雲太　こりや中村歌右衞門の眞似ぢや。
門兵　たわけめ。さうして、大事の代物、そこら中に取並べ。これもキリキリ直し居らう。
雲太　オツトシヨ、見さつたかな。遣る時は取りもしさらいで、目の正月ぢや。
　ト寶物一つ〳〵四人の額へ突きつけて、片附けろ、と四人して門兵衞に突ッかけ
拔助　わりや家主を
皆々　投げたぞよ。
拔助　家賃おこせ。今おこせ。
皆々　いま拂へ〳〵。
門兵　嬶、脇差おこしや。
小女　アイ〳〵。
　ト取つて來る。皆々顏見合ひ、氣味の惡い思ひ入れ。門兵衞、氣色してズッと拔く。皆々顫へ、そろ〳〵逃げ支度する。門兵衞、鼻紙にて拭ひ、この間、皆々門へ出ようとする。雲太郞、門口へ棒突ッ張り、斜に構へ睨む。門兵衞、刀を納め
門兵　お家主、ちよつと逢ひたい。
拔助　ハイ。
雲太　御意ぢや。出ませい。
拔助　ハイ。
門兵　ちよつと御意得よう。
拔助　イヤモ、御意得ますまい。
門兵　うせう。
　ト棒にて舞臺を叩く。
拔助　ハイ〳〵。
　ト悧りして、門兵衞が側へ寄る。
門兵　お家主、貴樣、不埒な人ぢやぞよ。抑々家借つてから此方、貴樣に一文も損をさゝぬと云ふ心ぢやけれど、

無いに依つて遣らぬワ。
拔助　成る程。
門兵　又あつても遣らぬと云うて、どうも仕樣はあるまいがの。
拔助　成る程。
門兵　家賃の滯りは滯り、ついぞ貴樣、此方の內へ折見舞ひはせず、ごまめ一疋持つて來た事はないぞや。
拔助　成る程。
門兵　けれう、おれが爰に居りやこそ。コレ、空家にして置くと家が損ねるわいなう。
拔助　成る程。
門兵　それに、同じやうに躍り狂うて、なんの眞似ぢや。無い。一文も無い。家主の役ぢや。掛取りに斷わり云うて、早う去なさつしやれ。不埒な和郎ぢやわいの。
拔助　だん／＼誤まり入りましてござります。コレ、掛取り衆、聞かしやる通りぢや。みな此方が惡い。もう去にましよ。
でん　何を云はしやるぞいの。錢取らいで、どう去なれるものぢや。
傳兵　オヽ、嚇さうがどうせうが、錢取らぬうちは居催促ぢや。
槌兵　なんの怖い事があるぞ。グッと云うて、貴樣も家賃取りやいの。
拔助　イカサマ、そこもあるわいなう。こりや、取る方にせう。
皆々　サア、拂うてもらはう。
ト喚くうちに、門兵衛、脇差引拔く。皆々ワッと云うて逃げうとする。
雲太　ドッコイ、鐵の棒換ぢやわいやい。
ト斜に構へる、皆々顫ふ。
門兵　久し振りで、酷い目見ずばなるまい。
小女　どうなと片のつくやうにさしやんせい。
門兵　ドレ、いつそ束にして行かう。
ト振り上げる。
皆々　アヽ、モシ／＼、お助けなされて下されませい。
ト仰向けになり拜む。
雲太　思ひ知つたか。
皆々　知りました／＼。
雲太　そんなら、あやまつたか。
拔助　あやまりました。

雲太　今から家賃遣りやせぬぞ。
拔助　取りませぬ〳〵。
雲太　油も薪も仕送れよ。
でん　仕送ります〳〵。
雲太　米は明石米をふりぬきにして持つて來るか。
傳兵　參じまする〳〵。
雲太　追ッつけ普請をするが、するか。
槌兵　なんでも致します。
雲太　きせ銀ぢやぞ。
皆々　心得ました。
雲太　もう受取りは取らぬぞ。
皆々　アイ〳〵。
雲太　エヽ、お慈悲ぢやと思うて、ソリヤ。
　ト門の戸を明ける。
　おのいらを。
　ト皆々ワッと云うて外へ出て、逃げて入る。槌兵衞ばかり、出られぬ思ひ入れにて
槌兵　アヽモシ、お免されて、去なして下されませい。
雲太　これ程戸を明けて置くのに、早う去に居れやい。
槌兵　それでも去なれませぬわいの。

門兵　此奴、どうでも物云ひつけるのぢやな。モウうぬ。
槌兵　アレエ、。
　ト泣く。
雲太　鈍な奴、外へ出居れやい。
槌兵　氣は出る氣でも、體が出ぬわいなう。
門兵　死太い奴の。
槌兵　アレエ、。
小女　待たしやんせ〳〵。聞えた事があるわいの。あの人は宿替への時に、古釘や道具買つた人ぢやわいなう。內が古釘屋ぢやに依つて、體が常住鐵にまぶれてある。それでこの磁石が吸うて、なんぼでも放さぬのでござんすわいな。
門兵　エヽ、それで讀めた。
槌兵　それは情ない。どうぞ〳〵、去ぬるやうになされて下さりませ。
雲太　なんと聞いたか。斯う云ふ不思議な物を遣らうと云ふのに、取りあがらぬ罰ぢや。
　ト磁石を持つて
おのれ、掛を乞うたがよいか、これがよいか。どんなものぢや。

ト磁石を使ふ。槌兵衛、あちら向いたり、こちら向いたり

槌兵　ア、、モシ〳〵、御堪忍なされて下さりませいなう。

雲太　これ程苛なんだら、もう料簡してこまそ。おのれが懐中は何ぢや。

ト槌兵衛、懐中より五百兩包みドッサリ落す。

槌兵　ア、モシ、それは。

雲太　五百目包み置いて行け。但し否か。

槌兵　アイ〳〵、どうなと致しませう。

雲太　致しませいぢや。重ねてうせたら、また磁石ぢやぞよ。大盗人めが。

ト突き飛ばす。外へ出る。

槌兵　エ、、おのれ。

雲太　そこで磁石が裏を使ふぢや。

ト表をさし、槌兵衛、ホウ〳〵と云うて、走つて立つて走り入る。

小女　われもマア、去なすなら只去なせ。金を取ると云ふ事があるものか。

雲太　ヘン、こんな時に儲けにや儲ける時はない。先づ五百目はしてやつた。

ト包みを開き

こりや何ぢや、古釘ぢや。忌々しい。

小女　道理で、ぶんと體が磁石へ寄ると思うた。

雲太　彼奴が轄はずみは、ついくれ居つたと思うた。今度は此方から出かけて、店中を引ッくり返してくれう。

門兵　彼奴等に白い歯を見せると、めだれ見さつてどうもならぬ。さても方々駈け廻つて、ほつとりと草臥れた。

コリヤ、阿房よ、酒の燗せい。

小女　ほんに、鯛が買うてある。雲太郎、酒があるか。

雲太　なにお小賢らしい。けれう、肴屋が人參一斤で、鯛を賣つてくれたればこそ、あの人參と云ふものは八百屋で廉いものでごんすわいの。生でさへ廉い物、此方の内にある我樂多ではゆかぬ。なんぞもそつと値の高い、大根か蕪と云ふものがあればよいけれど。

小女　寶の持ち腐らしと、辛氣な事であるぞ。

門兵　辛氣がらすまいと思うて、持つて戻つた、われが藥ぢや。取つて置け。

ト小判五十兩ばかり出す、

小女　こりや金ぢやござんせぬか。

門兵　ちやんばの鯨五十本、鼈甲三十枚、賣り口があつて持つて行て、五十兩取つて來た。これでマア三日と四日の小遣ひはあるであらう。
小女　ある段かいなア。五十兩ありや隨分始末して、日に五兩づゝ遣うても十日は樂ぢや。雲太郎、ソレ、金一兩持つて行て酒買うて來い。
　ト一兩抛り出す。
雲太　久し振りで阿蘭陀のばらんず見たワ。
門兵　もう、そろ／＼代物も捌けて來る。これからが金儲けぢや。シタガ、これまで儲けた金も、五萬兩や七萬兩と云ふ事があらうか。爰へ宿替へてからも、千兩や二千兩の金は入つたが、とんと淵へ汐入るやうな身代ぢや。
小女　マヽ、よいわいなア。長うもない浮世に、有りたけをくわつ／＼としてしまうたがよい。先度は丸山で遣はしやんしたやうな事、せうと云うても出來もせんがの。
門兵　それもさうかい。これは／＼、まだ日も碌に暮れんに、蚊が出さる程にの。
　トばた／＼する。
小女　ちやつと蚊燻べせうわいな。
門兵　伽羅の挽き屑があるか。

小女　まだ大分ござんす。雲太郎、その伽羅の鋸屑を持つて來てくれ。
　ト云ひ／＼穢ない大和風呂を舞臺へ直し、煽ぐ。
門兵　勇太夫は内にか。
小女　晝寢してござんす。
門兵　おれもトロ／＼やらうかい。
小女　奧に朱唐紙の紙帳が吊つてある程に、猩々緋の布團でも裾に置かしやんせ。
門兵　また宿替へしてこまさう。忌々しい蚊のある所ぢや。
　ト云ひ／＼奧へ入る。雲太郎、革籠持ち出る。
雲太　又アタ臭い物で燻べるのかえ。
小女　この又、小豆島ほど、蚊の多い所はない程にの。アモウ、此方の内に無い物は錢。澤山な物は伽羅の挽き屑ばつかりぢや。
雲太　ドリヤ、酒買うて來う。
　ト貧乏徳利提げて、ぱつてう笠着る。小女郎、くすべる。
小女　雨も降らぬに、なんで笠着て行くぞ。
雲太　油揚も買うて來にやなりやんせぬ。

小女　油揚買ふに笠着にやならぬか。

雲太　ぐち物ぢや。この理窟を知らぬか。

小女　また疎な事ぢやあるまい。

雲太　油揚を藁で括つて提げて居るが最後、鞍馬山の太郎坊の丁稚あがりが。

　ト鳶の者の身振りする。

など〻出かけるや否や、一散に飛び下りる所を、笠の下へちやつと手をあげるぢや。コレ、諸葛孔明、陳平張良が、かん〴〵の謀り事でえすわい。

小女　そんな事云はずと、キリ〳〵行てらせいやい。

雲太　少しお米が納まつたと思うて、強う遣ふの。行てこまそ。

　ト表へ出ようとして、笠が詰まつて出られぬ思ひ入れ。小女郎、蚊燻べしながら、これを見て笑うて居る。雲太郎、いろ〳〵あつて、筋かいに笠押して出る。

ハア、、この理ぢやな。

　ト表で云ふ。唄になる。大手役の三、ならず者の形にて出て

三　大方爰らぢやが。イヤコレ、若いの、小豆島の門兵衛さまと云ふは、どこでごんす。

雲太　葬禮のかざのする所ぢや。

三　葬禮のかざのする所とは。

雲太　此奴も愚鈍者ぢや。

三　コレ〳〵。

雲太　葬禮のかざぢや〳〵。

　ト云ひ〳〵橋がゝりへ入る。

三　なんの事ぢや。門兵衛さまの所は葬禮のかざ。

　ト鼻いからかし

成る程、葬禮のかざぢや。うまい匂ひがする。ヤア、爰ぢや〳〵。

　ト内へ入る。

内にござりまするか。私しは大事ない者でござりまする。お前は門兵衛さまのお内儀さんか。

小女　アイ、女房でござんす。

三　これはしたり、ハテサテマア。イヤ〳〵、どこもかしこも、ムウ、綺麗な事の。門兵衛は留守かえ。留守でも大事ないが、ハテ、これはお廣い事の。

　ト云ひ〳〵、そこら見廻す。小女郎、不思議さうに

小女　モシ〳〵、門兵衛は今休んで居られまする。なんぞ用事なら、わしに云うて下さんせ。

三　アイ、マア、さして用事もないけれど、ハア、約束の物、どうしてくれてぢや知らぬ。
ト云ひ／＼、また方々見歩く。
小女　モシ／＼、さして用事もなかゝ、後にでもござんせ。人の內をウソ／＼と。早う去なんせ。阿房らしい。
ト蚊燻べ急に煽ぐ。
三　わしや蚊ぢやごんせぬわいの。成る程、門兵衞さまのお內儀さん程あつて、きつい者ぢや。さうしてマア、艶々と美しい事わいの。
ト側へ寄りかける。
小女　構うて下さんすな。
三　うまいかざの蚊燻べなう。
小女　早う去なんせ。
三　なんのお前、其やうに云ふ事がある。又わしぢやとて、其やうに云はんすものでもない。ても、むつちりと旨い腰つきぢやなア。こりや、どうもならぬ。
ト抱きつく。
小女　滅相な。こりや何するのぢや。
三　蚊燻べに取逆上して夢中になつて來た。
小女　放しやらぬか／＼。

トいろ／＼抱きついて居る。九郎助、出で、三を突き退ける。
三　ツイちよこ／＼と。
ト顏見て悧り。
九郎　わり樣は誰れぢや。
三　エヽ、わしは。
小女　父樣、大抵胡散な者ぢやござんせぬ。來るからウソ／＼と、そこらあたりを見廻して、さうして、いろ／＼のてんがうするわいなア。
九郎　一體わり樣は、どこの人ぢや。
三　イヤ、わしは大坂の者でごんす。
九郎　その大阪の者が、何用あつて。
三　その用は。
九郎　その用とは。
三　ハヽヽ、イヤモウ、面目次第もない。わしや門兵衞さまを賴み、匿まはれに來たのでごんす。お內儀樣にちよびかはしたも、養うてもらふしほにもならうかと思うて。大坂の者と云ふ者は滅相な。ハヽヽ。
九郎　人の云ふやうに云はるゝわい。そりやハヤ、あれも匿うする者ぢやに依つて、養うてやるまいものでもない

三　が、大坂はどこで、なんと云ふ人ぢや。
　わしや辰巳屋善右衞門と云ふ、炭屋と兩替屋とする者、であればよいけれど、そこからズッと遠いの。オ、、天滿の二十丁目、安治川の上鹽町と云ふ所がごんす。その横丁に高麗橋と云ふがかゝつてあつて、橋の四五丁南に、長栖と云ふ所がある。その島の内にて通者立つて居る者でごんすが、最早だん／＼拍子が悪うて、こりや門兵衞さまの所へ行て頼んだら、まんも直らうかと思うて、三十石の乘合ひに乘つて兵庫まで來て、播磨廻りして見たが、妙國寺の中の蘇鐵を見たが、大きな物。

九郎　ムウ、そんならいよ／＼門兵衞を、頼みにかゝつて匿まはれに來た粹方か。

三　さうでごんす。

九郎　ハテナウ、匿まはいでなんとせう。

三　忝なうごんす。その代りは大坂の芝居は、何時でもわしが持ち場ぢや。

九郎　さうであらう。表の隣りに入り口がある。あれから裏の座敷へ、わしが案内しませう。

　　ト二人連れ立ち

三　よろしう頼みまする。イヤモウ、大坂の芝居、團十郎、菊之丞、この二人が伊兵衞佐兵衞の頭で打割り据ゑるぢや。

　　ト云ひ／＼外へ出て、九郎助、突き出し、後ピッシャリ。

九郎　大盗人め。

三　大盗人とは。

九郎　おりや大坂に久しう居て、所の案内よう知つて居る。どこの國にか天滿二十丁目、安治川の上鹽町と云ふがあつて堪るものか。高麗橋に長栖があるやら。島の内があるやら。イヤ、ほんにおかしいわい。

三　そんならみんな違うたか。

九郎　三十石の乘合ひで、どう海が渡られるもので、播磨廻りに妙國寺の蘇鐵があつたとは、わしはハテ聞いた事がない。

三　蘇鐵もない嘘を吐いたか。しまうた。

九郎　あんな奴は何盗まうも知れぬ。わが身は膳拵らへて來てたも。

小女　ほんに夕飯がまだぢや。

　　ト思ひ入れして、佛壇の方を見て、いろ／＼。九郎助、奥の方へ心遣ひ、兩人顔見合して

ドレ、飯拵らようか。
ト唄になり、小女郎、入る。
三　なんの事ぢや。口の酸うなる程叩かせ居つて、一體おれもおれぢやて。あんまり並べ過ぎたと思うた。エヽ、忌々しい。
ト思案をして、九郎助、門口へ耳寄せ、聞いて居る。
去んでくれう。
ト足音して、ソッと隣りの空家へ入る。九郎助、ソッと出て、あちこち眺め居る。思ひ入れのうち、小女郎、膳を持ち出で、九郎助が居ぬゆゑ、どつちへ行きしと父様々々と呼び、そこら眺め、ソッと佛壇へかゝらうとする。九郎助、入る。
九郎　娘。
小女　エヽ。
ト恟りして、佛壇の戸をさす。
九郎　ハテ、きよと〳〵しい。その膳持つて、佛壇へ何ぢやな。
小女　イエサ、今日は先の父さんの命日なり、母さんの通夜ゆゑ、お膳を据ゑようと思うて。
九郎　成る程、其方の母へおれは入り聟。先の親仁どのゝ命日なりや、先へ膳を据ゑうちぢやが、佛樣に鯛の燒き物据ゑるか。佛壇へ魚供へるか。
小女　ほんになア、わしとした事が、お前に据ゑる膳を取違へて。イヤ、こりやいつそ仕直して參りませう。
九郎　アヽ、コレ〳〵、だんない〳〵。爰へたも。
ト坐り
其方は奥へ行て、門兵衞起し、夜食喰はしや。
小女　イエ〳〵、お給仕いたしませう。
九郎　ハテサテ、おりやツイに給仕さした事があるかいの。
小女　そんなら、こちの人起して飯進ぜう。
九郎　さうしや。
小女　茶の下が燃えてあるが知らぬ。
ト云ひ〳〵入る。あと合ひ方、九郎助、思ひ入れあり
茶はおれが酌みに立つぞや。
ト思ひ入れあつて、あたりを見て、疊をソッと上げうとする。小女郎、出かけて見て居る。
小女　父様。
ト九郎助、恟りする。
九郎　ヤア娘、恟りさしやつた程にの。

小女　てもマア、お前、飯食ふのに、疊を上げて何さしやんす。
九郎　サアそれは。
小女　それは。
九郎　イヤ、疊の下へ箸を片し落したに依つて。
小女　そんならツイ取れと云うたがよいわいな。ドレ〳〵。
ト寄らうとする。
九郎　イヤア、取つたわいなう。
小女　今の間にかえ。
九郎　オイナウ。
ト歩き、一人走り出て
歩き　九郎助、内にござりますか。云ひ渡す事がある程に、庄屋どのまでちやつとござりませ。急用でござります。
九郎　オイ〳〵、そこへ行かう〳〵。
歩き　今でござります。ちやつとござりませ。
ト小女郎、九郎助、二手に別れ、思案して居る。
小女　イヤ〳〵、なんぼう云うてもなさぬ仲。嘆きに目がくれ、滅多に云はれぬわいの。
九郎　慥かに。
小女　慥かに。
九郎　大方。
小女　大方。
ト云ひ〳〵、顏見合せ、キッとして
九郎　行て來ませう。
ト唄になり、歩き、サアござりませと、九郎助を連れて入る。小女郎、思ひ入れあつて、佛壇より、時高を出す。百日鬘、謀叛人の形にて、上座に座る。
小女　お氣嫌にござりませう。
ト膳を据ゑる。
時高　小女郎、だん〳〵心遣ひ、過分にこそあれ。天が下を横領せんと謀る種ケ島時高、澁の穗にも怯ぢるとは。地中にうづくまる龍、蚯蚓と同じう暮らせども、時を得て天上する大望成就の上は、日本半國は宛行ふとも苦しからぬ其方が魂ひ。女には稀れなものぢやなア。
小女　數なりませぬ私し、御謀叛のお力と申すは慮外ながら、それにさへ隱し包むは、兼ねてお話し申した身の上。軍用金にはお手間へ申させませぬ。そつともお氣遣ひなされますな。
時高　忍び〳〵に一味連判も、過半は調うたは、奪ひ置きたる寶の庇サ。

小女　都よりお前の行くへ、草を分けても詮議の最中。この上ともに、見咎められぬやうになされませ。
時高　合點ぢや。
ト久五郎、六十六部の形。笈を脊負ひ出る。後より捕り手大勢附き出る。久五郎、キッと目を附ける。と捕り手チッと後へ寄る。右合ひ方のうちなり。右の通り二三度あつて、久五郎、門口に立ち
久五　大乘妙悲守護、四國の修行者に御報謝にあづかりたい。報謝々々。
ト小女郎、物音に時高を佛壇の押入れへ入れて入る。
門兵　アレ、何とやら云うて居るわい。
ト云ひ／＼出る。
暮れてから表に人のあるのに、不用心な。
ト表の方へ出て、久五郎を見て
ホウ、四國さうなの。
久五　御亭、御報謝にあづかりたい。
門兵　今日は女房が親の日ぢやげな。手の内進ぜうか。
久五　手の内報謝望みにない。行き暮れた修行者、一宿が賴みたい。
門兵　宿貸せでえすか。
久五　如何にも。
門兵　そりやハヤ、貸すまいものでもないが、ハテ、横柄な四國ぢやの。
久五　日本を股にかける浮雲流水の大行者。將軍大將より乞食非人まで、人界の生は同體。敬せず知らず、木を切つて投げ出すが修行者の道德。是非一宿いたしたい。この家を見掛けて。
門兵　如何にも。
ト捕り手寄らうとする。久五郎、睨むと後へ寄る。門兵衛、見て
ハテナア。この家を見かけてと云ひ分が面白い。泊めて進ぜう。
久五　一宿仕らうか。
門兵　小豆島の門兵衛と云ふ者ぢや。泊めかゝつたら泊めにや置かぬ。マア、入らつしやれ。
久五　先づ以て忝ない。許さつしやれ。通るぞ。
門兵　ハテ、横柄な者ぢやなア。
ト久五郎、内へ入る。門兵衛、後を見る。捕り手皆々囁き、橋がゝりへ入る。門兵衛、思ひ入れあつて
マア、笈を下ろさつしやれ。手傳うて進ぜう。

ト笈を下ろす。

久五　お世話頼む。

門兵　草鞋取つたがよい。

ト久五郎、草鞋取り、上の方へ通る。

泊めるからは不自由はさゝぬ。マア、湯でも使はつしやれ。コリヤ、飯拵らへよ。

久五　イヤ／＼、心遣ひは無用。一河の流れも他生の緣。この恩德には、我れ大願成就せば、現當安穩福不可量に至らすであらう。過分々々。

門兵　見たところが屈竟の男。未來を賴む四國でもごんすまい。敵討と云ふか、なんぞ深い望みがあつてと云ふやうな事かい。

久五　推量の通り、大願あつて遍歷する廻國。强ち佛を信ずるにも非ず。

門兵　サア、さう見ました。おれも廻國どころぢやない。その十層倍も踏み延ばして居た者ぢや。

久五　見掛けて賴むとはその事。六十六ヶ國の廻行は勸化もならうが、日本の外、三千世界の勸化が致したい。施主に附いておくりやれ。

門兵　ムウ、見掛けてと云ふ一言と、今の詞と相違するが、すりや、三千世界飛び廻る者ぢやと知つてか。

久五　ナニ、脇へも薰ずる名香、匂ひを知るべに尋ね來る。

門兵　アノ、蚊燻べの匂ひを。

久五　甘泉殿に武帝の焚きし反魂香。天竺の栴檀白檀、海中に入つて沈となる。天より降りし天の焚きさしと云ふも、蘭麝待も柴船も、皆元來は緋麝香。古木と新木と、その木の善さと惡しきとに名を附けたる物。今の匂ひは天竺唐土、島々の拾ふを集め、香を交へれども、それ／＼に聞き分けるゆゑ、御亭主の渡世も心憎く存じて、一宿の無心。

門兵　ハテナア、凡そこれを聞き分ける者は、貴人高位のその道に、深う心がけた人でなけりやゆかぬ事を、大願のあるとは……ハテナア。

久五　夜とともに國々の事。

門兵　話し合うて見ましたら

久五　貴殿の商賣。

門兵　こなたの大願。

久五　施主について下されうか。

門兵　出世の筋なら品に寄つたら

久五　猶しも御芳志、忝ない。

門兵　爰は端近、マア二階へ。
久五　然らば休息仕らう。
門兵　修行者どの。
久五　御亭主。
門兵　更けてから逢ひませう。
　ト唄になり、久五郎、中二階へ上がる。門兵衛、思ひ入れあり
　おれが商賣を……大抵の者ではないが、なんぢやなア。
　ト思案する。小女郎、出て
小女　こちの人、膳を据ゑて置いたが、何して居やしやんすぞいな。
門兵　ちつと爰に用があつて。
小女　お汁が冷めるわいなア。
門兵　女房ども、ちよつと。
　ト向うへ出る。
　いま六十六部を泊めたが、どうやら來た時の樣子、詞のとりなり、おれが遣繰りを知つて居るやうな五音ぢやが。
小女　そりやいつち大事の事ぢや。ひよつと代官所へでも云うて行たりや、ひよんなものぢや。どうせうと思はんす。
門兵　イヤサ、滅多にあつちの體も、綾拔けのしたものぢやないて。
　ト小女郎、守り袋を拾ひ、不思議さうに見て
小女　この守り袋は。
門兵　そりや今、六部が落したのぢや。
　ト小女郎、手早に中をちよつと見て
小女　ヤア、そんなら。
門兵　なんぢや。
　ト小女郎、ちやつと懷へ入れ
小女　なんでもごんせぬ。
門兵　おれを抱へて、大石でもせうと云ふやうな横柄さ。もし配符の廻つた種ケ島時高。
小女　エヽ。
　ト悔り。佛壇の内へ心遣ひ
門兵　ハテ、ようキヨトキヨトする者ぢやぞ。アヽ儘よ。よい事ならよいぢやあらう。サア、飯を食はうかい。
　ト小女郎、いろいろ思案して居る。
　コリヤ……コリヤ女房ども。
小女　ハア、ハアイ。

門兵　飯食はさぬかやい、
小女　サア、あげるわいなア。
門兵　來いやい。
小女　行くわいなア。
ト唄になり、二人連れて入る。と九郎助、長門を連れ出る。
九郎　思ひがけない所で逢ひましたなう。
長門　よい所に居て下さんしたので、危ない所を遁がれたわいなア。
九郎　まだそればかりぢやない。こなたに逢はす者がある。ちつとの間待つて居やしやれ。
長門　アイ〳〵。
ト九郎助、そろ〳〵内へ入り、あたりを見廻し、疊上げる。下より采女之介、出る。
九郎　定めてお氣詰まりにござりませう。
采女　この間からの介抱、忘れは置かぬ。嬉しいぞや。
九郎　これは有り難いお詞にあづかりまする。いつぞや葭島での御難儀、折よう參り合し、私しが方へお供いたして立歸り、匿まひ申しましても、聟や娘が心を疑ひまして、鼠の子にも知らせぬ隱し所。お身の上の難儀も、御恩を受けました私し。何事も今暫らく。早速ながら、ちつとお前に逢はせまする者あつて出しました。心らず密かになされませ。
ト采女之介を連れ、表へ出て、長門に逢はす。
長門　采女さまか。
采女　其方は長門。
長門　逢ひたかつた。
ト取りつく。
九郎　シイ。門ぢや。靜かに云はつしやれ。
采女　思ひがけない。どうして爰へおぢやつた。
長門　お前に別れてから、さま〴〵の憂き苦勞。よう僞で居て下さんした。
九郎　私しが庄屋どのから戻る道で、何かは知らぬが頓黒な奴が、長門どのを手籠めにして居おつたに依つて、乞食の追剝ぢやと思うて、蹴倒して置いて連れて參りました。
長門　まだ黒ん坊めが付け歩くわいなア。
采女　加比丹ていこうが殺されたも、元の起りはわが身ゆゑ、黒坊主を大事にかけると云ふが、その意趣晴らしに、おれが行くへを詮議すると見える。

長門　何云はしやんす。ようそれどころぢやあらう。阿蘭陀人が死んで、かけ構ひがないに依つて、わたしに惚れたと云うて、大抵うるさい事ぢやないわいなア。
釆女　それはどうもならぬ。
九郎　庄屋からはお前の詮議と、謀叛人の詮議と、搗て〻交ぜて、もや〳〵致して居ります。詮議の來ぬ間に、どうぞ仕樣がありさうなものぢやが。
ト黑ん坊、ウロ〳〵出て
黑坊　コリヤ、見つけたワ。
ト二人を捉まへろ。
九郎　炭團の化け物め。うせ居つたか。
黑坊　親仁め、ようえらい目に遭はし居つたな。長門めを捉まへる次手に、おのれを捉まへたは、鰯網で鯨を取つたやうなものぢや。代官所へ注進して、長門はおれが抱いて寢る。でれぶくばるまんぼう。
九郎　聊爾したら爲にならぬぞ。
黑坊　こま言云はずと、うせう。
ト引立てる。九郎助、立廻りあつて、黑ん坊を井戸へ抛り込み、然家の戶乘せる。
釆女　其方は長門を、よう知つて居やるなう。
九郎　知つて居る筈ぢや、實の娘でござりますわいなう。
釆女　ヤア。
ト疊の切り穴より、黑ん坊、ぬつぽり出る。
九郎　元私しは山城の國小栗栖の百姓、庄屋脇もして居りましたが、代官とちと口論して、妻子を連れて九州へ下りましたが、母は死ぬる、寶は身の差合せと、娘を長崎の廓へ勤め奉公に賣りまして、私しはお前の親御樣へ、足輕にありつきました。
ト黑ん坊、表へ出て捉まへろ。九郎助、黑ん坊を押へ
九郎　面妖な。井戸へ打ち込んだ奴が、どこから拔け居つた。黑坊、お主は魔の者かいなア。
黑坊　なんぢやあらうと、うせあがろ。
ト引立てる。また立廻りあつて、九郎助、黑ん坊を井戸へ蹴込む。
釆女　さうして、どうぢやいなう。
九郎　サア、其うちに娘にお前が迷ひなさると聞いて、あれに意見しても、死ぬると云ふ一向の事。見ぬがよいて思うて、國を去つて、あの小女郎めが母親の生きて居る時、入り聟いたしましたてや。
長門　廓の慣ひで親に逢ふ事もならず、いつともなしに他

人向きになりましてござんすわいなア。

采女　これはしたり。

ト右のうち黒ん坊、切り穴から出て來る。

黒坊　うぬを。

ト か ゝ る を、また井戸へ入れる。

九郎　どこから拔け居る知らぬ。

長門　とても の事なら父樣、采女さまと一緒に置いて下さんせいな。

采女　覺えのない事ながら、かぴたん殺したも寶の紛失も、皆采女之介が科となつて、何を斯う云ひ譯の筋がない。所詮名乘つて出て潔よう腹切る心。

長門　お前が死なしやんすのに、なんの生き長らへ居ませう。お前より先へわたしが。

ト 剃刀出して、死なうとする。留める所へ、黒ん坊、大廻りにて、表へ出る。

采女　これは短氣な。

黒坊　ドッコイ、われを死なしてよいものか。

九郎　また出くさつたなア。

黒坊　うせあがれ。

ト 引立てるを、九郎助、取つて投げると、此うち長門、持つて居る剃刀にて一かせ切る。切り居つた。こりや堪らん。

ト 九郎助、戸にて叩き立てるゆゑ、黒ん坊、橋がゝりへ逃げて入る。

九郎　マア、あれで氣遣ひないが、なんぼう夜でも門中、コレ、短氣な事なされますな。娘も短氣起すな。命に替へてお身の明りは立てまする。マア〳〵、私し次第になされませい。

ト 内を覗き、ソッと二人を連れて入る。表の戸さし氣ぶさいな事もある。今夜中にお供いたしまする。マア、二人ながらこの中へ。

ト 疊の切り穴へ二人を入れる。右のうち、三、隣りの貸し家より出て、思ひ入れあつて頷き、右の井戸の内へ入る。

お尋ねの多いこそ幸ひ、なんでも一人捕つて出したら、この紛れにこちらは遁がれさうなもの。先刻に小女郎が……なんでも。

ト 佛壇へかゝらうとする。小女郎、ズッと出て

小女　父さん、何さんす。

九郎　イヤ、何もせぬ。

小女　何もせぬ者が、佛壇は何とさしやんす。
九郎　イヤ、今日は死なれた親御の命日ぢやに依つて。
ト小女郎、疊を上げうとする。九郎助、ちやつと乘つて
こりや何するのぢや。
小女　イヤ、何もするのぢやない。
九郎　それに。
小女　この疊の引合ひへ簪を。
九郎　ナニ、簪を。
小女　父さん、云はんせ。
九郎　なにを。
小女　お前の胸にある事。
九郎　娘、出せ。
小女　分け隔てするお前の心底。お前の方から、マア見たい。
九郎　見せたらどうする。
小女　わしが見せたらどうさんす。
九郎　知れた事、金にする。又おれが見せたら。
小女　注進して褒美にする。
九郎　さう云や、われを。

ト立廻りになり、門兵衞、出る。雲太郎と四人顏見合せ
門兵　こりやなんぢや。また親子喧嘩か。なんのこつちや。
小女　アノ、これは。
門兵　阿房め、わりや見て居たか。
雲太　アイ。
門兵　なんの喧嘩ぢや。
雲太　親仁の物を見ようと云へば、縮かまつて見せられぬと云ふ。娘のを出せと云や、質過ぎて出されぬと云ふ。出せ見よう、縮かまつた臭い。その喧嘩ぢや。
門兵　何を吐かすのぢや。マア、何から起つた事ぢや。
九小　アノこれは。
雲太　なんぢや。
九小　なんぢや。
雲太　なんぢや。
九小　なんぢや。
門兵　何事ぢや。
ト黑ん坊、辨内、侍ひ大勢連れ出て
辨内　ソリヤ、踏ん込め。

ト侍ひバラ〳〵と入る。
皆々　動くな。
雲太　そりや盗人ぢや。
ト云うて奥へ入る。
門兵　見ればお代官樣、何ゆゑ私しが所へ踏ん込ましやりました。
辨内　吐かすまい。お尋ねの采女之介と云ふ者、この家に匿まうたる由、注進あつて向うた。早く渡せ。
門兵　思ひも寄らぬ。私し方に左樣な者、匿まうた覺えはございませぬが、そりや誰れが注進いたしましたな。
黑坊　おれが注進した。おのいら、一つになつて匿まうて置いたを、とつくりと見て置いた。親仁め、ようちよびりやり居つたな。
辨内　所々に謀叛人あつて、武智が殘黨種ケ島時高なんど、徒黨を集めて徘徊する時節、一人にても召捕らば、我れ我れが手柄、サア、采女之介を早く出せ。
門兵　男どの、こな樣、なんぞそんな者匿まうた覺えがあるか。
九郎　なんの覺えがあらうぞえ。
門兵　さうありさうなものぢや。お代官樣、こりや人違ひでございませう。外を御詮議なされませい。
黑坊　イヤ、人違ひぢやない。この内に居る。
門兵　先刻にから奇妙な者が居ると思や、われが恰好は、どうやら。
黑坊　阿蘭陀に付いて來た黑ん坊ぢやが、なんとした。
門兵　ハテ、妙な者が注進したなア。
辨内　采女之介が加比丹を殺して退いたとあるゆゑ、詮議の爲に往來を許したのサ。
黑坊　山司金右衞門と云ふ奴が、島々を騙つて、長崎の關を破つた大騙りめ。その目明かしに許してもらうた往來。最前井戸へ抛り込まれて、拔け穴見て置いたワ。采女之介はその疊の下に隱れて居るに違ひござらぬ。
辨内　引まくつて吟味せい。
ト九郎助、疊へ乘つて
九郎　ハア、イヤ、この疊の下には何もございませぬ。それよりは、お代官の手柄になるものは、この
ト佛壇の前へかゝる。小女郎、突き放し
小女　そりやなりませぬ。
九郎　背に腹は替へられぬ。
小女　さう云はんすれば、疊の下を。

ト明けうとする。また九郎助、坐り

九郎　イ、ヤ、そりやならぬ。

小女　もう破れかぶれぢや。疊の下を改めさせにや置かぬ。

九郎　玆な不孝者めが。

小女　不孝合點。此方も脊に腹ぢや。

九郎　イ、ヤならぬ。

辨内　隱すは曲者。ソリヤ、家來ども。

侍ひ　腕廻せ。

門兵　お待ちなされませ。舅どの、覺えがない事なら、見せたがよいわいの。

九郎　イヤサそれでも。

辨内　覺えがあるか。

九郎　イヤ、存じませぬ。

門兵　妙な事に意地張らつしやる。見せさつしやれいなう。

辨内　踏みつけて繩かけうか。

九郎　サ、それは。

辨内　サア／＼／＼。

門兵　エ、、面倒な。

ト九郎助を引退け、黑ん坊、侍ひ寄つて、疊をあげる。下より三、出る。

皆々　ヤア、。

九郎　こなたは。

三　サア／＼、コレ、親仁どの、何にも云はしやんな。おりや上方で失敗つて來て、爰へかゝりに來た者ぢや。門兵衞どのにも沙汰なしにして、おれをこなたが匿まうて下さつた。それぢやに依つて、下家に置いてもらうたのサ。

九郎　さうして二人は。

三　サア、二人ぢやない。おれ一人匿まうてもらうたに依つて、爰へ出て斯う云ふは、まんざら敵役でもないと思うて、今のもな、どうで惡うはしてあるまいと思うて、マア／＼、落ちついたがよいわいな。

黑坊　ても面妖な。

門兵　そこな黑い和郎。ちよつと逢はう。

黑坊　用があるか。

門兵　お尋ね者は居んぞや。

黑坊　サアそれは。

ト門兵衞、黑ん坊が横面毆り、摑んで抛る。

門兵　泥坊めが。炭團見るやうな面さらして、門兵衞が內をなんで荒した。小豆島の門兵衞ぢや。どなたであらうが、覺えもないに狼藉なさるゝと、ちつと手ばなした男でえすぞ。
黑坊　覺えがなくば家搜しせい。
門兵　勝手にさつしやれませ。仔細がなけりや、聞きませぬぞや。
辨內　踏ん込め。
ト侍ひ、ハヽアと、黑ん坊も共に駈け込む。小女郞、佛壇の側に居て思ひ入れ。九郞助は三に思ひ入れあり
侍ひ出て
侍ひ　何者も居りませぬ。
ト黑ん坊、出で、
黑坊　門兵衞に繩かけさつしやれ。
ト侍ひかゝる。門兵衞、兩人を取つて投げ
門兵　門兵衞には、なんで繩かけるのぢや。
黑坊　奧には天竺の產物、島々の道具織物。疑ひもない、わりや山司金右衞門ぢや。
辨內　金右衞門でなくば親子ともに、役所へ參つて云ひ譯せい。
門兵　どこまでも行て云ひ譯して見せう。
三　釆女之介とやら、匿まうてないと云ふ證據は、どこまでもおれでえす。
辨內　サア、親子とも役所へ參れ。
門兵　舅どの、行かざなるまい。
九郞　行くは行くが、今のは。
三　サア、えいてや。おれも證據に付いて行かう。
九郞　そんなら行きませう。
門兵　女房ども、留守をようしや。
小女　アイ〳〵。
侍ひ　サア、步め。
門兵　ハテ、仰山な。
ト唄になり、この引ッ張り思ひ入れあつて、一件橋がかりへ入る。あと合ひ方、小女郞見送り、思ひ入れあつて、佛壇より時高を出す。中二階より久五郞、そろそろ出かけ、見て居ろ、
小女　時高さま。
時高　もうこの家には居られぬわいやい。
ト小女郞、石の段より勘合の印出し
小女　軍勢催促の御勘合の印。

ト渡す。

時高　落ちつく所は後より知らさう。

小女　人の見ぬうち早う。

ト時高、行かうとするを、久五郎、ツカ〳〵と出て、勘合の印チッと握る。兩人キッと見得。

久五　山司金右衞門の女房、久しいなア。

小女　すりや、今宵泊つた四國と云ふは、こなた樣か。

久五　如何にも。

ト小女郎、恟りして思ひ入れ。

時高　何ゆゑ勘合の印に手をかける。

久五　種ケ島時高、昔の欝憤を散せんと、徒黨を集め、謀叛の旗上げすると聞く。出かす〳〵。

時高　さいふ汝は何者ぢや。

久五　信長を討ち、一旦日本の主となりし、武智日向守惟任が一子、武智左馬五郎光義。

時高　なんと。

久五　しをらしい志しに免じ、味方してくれう。勘合の印渡して、身に血判せい。

時高　ハ、、、主殺しの悴め、時高に向ひ緩怠なる一言。召抱へてくれう程に、身に一味して血判せい。

久五　異議に及ぶと命がないぞ。

時高　味方に附け。

久五　金印渡せ。

時高　血判せい。

久五　命がないぞ。

時高　汝が。

久五　其方が。

兩人　なにを。

ト詰め合ふ。眞中へ小女郎、割つて入る。

小女　待つた。如何にも血判させませう。

兩人　そりや何れの血判ぢや。

小女　その血判は……斯う。

ト時高が刀を抜き、ポンと時高の首切る。

久五　心を合す時高の、首討つ女、其方が心底は。

ト合ひ方になり、小女郎、靜かに一腰差して、久五郎が手を取つて、上座に連れ行く。久五郎、米櫃に腰かける。小女郎、遙かに下つて辭儀する。中二階の障子明け、三、聞き居る。橋がゝりより門兵衞、戻り、小女郎が表へ錠を卸ろしたるゆゑ、入られぬ思ひ入れにて、聞いて居る。

小女　大等院殿元保覺入大禪定門。こりやお前の親御樣の御戒名でござりまする。
久五　父が法名、よく知つた其方は。
小女　わたしは武智の御譜代、大矢作右衞門が娘でござります。
久五　すりや其方が、大矢作右衞門が娘。ハテナ。
小女　お痛はしや惟任さま、天が下を掌握なさるゝと雖も、僅か三日中に眞柴久吉に打負け最期あり、親作右衞門も追放、母の閨屋がわたしを連れて、退きましてござります。
久五　それに又、種ヶ島時高に心を通はしたる仔細は。
小女　殿樣、お前のお行くへを樣々と尋ねますれども、生死の程も知れず、せめて我が君の仇久吉を、一太刀恨まうと存じまするより、幸ひの時高に叛逆の一味して、今の夫、山司金右衞門は三千世界を駈け廻る海賊の棟梁、軍用金の心當てに、夫婦となつても心は明かさぬ忠義の金鐵。今日只今あなたに廻り逢ひますからは、あつて益なき種ヶ島時高、素直にお味方申さぬを見拔いて、門出の血祭り。念力通じて有り難いお目見得を致しまする段、冥加に叶ひ、喜ばしう存じ奉りまする。

久五　さほどの者が、軍勢催促の金印、時高に渡したは。
小女　ありや似せ物。
久五　なんと。
ト小女郎、懷より金印出し
小女　時高が奪ひ取つた金印は、直ぐに摺替へ、肌身を離さず所持して居りまする。イザ、お受取り下さりませう。
久五　すりや、これが誠の金印。大願成就。エヽ、忝ない。
小女　天正十年小田信長、西國毛利追伐の嚴命に、御父武智公、眞柴と口論に及びしを依怙贔屓あり、大將扇を以つて父御の顏、丁々と打ち据ゑられたる御無念。時日を移さず本能寺へ押寄せ、信長を討つて喜悦の眉を開きし間もなく、眞柴久吉西國より引返し、天王山にて戰ひしが、御運拙なく一戰して破れ、勝ち誇つたる久吉が軍勢、短兵急に取拉がれ、味方は散々、逃げ行く先は小栗栖の藪續き。野武士の者ども竹槍にて、殿樣の脇腹突き通す。流石の大將、深田の中へ眞逆樣。親作右衞門駈けつけ、引立て行けども、目もくらみ無念の御最期。その時の事思ひ廻せば、爪は頭へ拔け通り、腹綿を裂くと云

久五　ふとも、これ程にはござりますまい。殿樣、わたしや口惜しうござりますわいな。
久五　さぞその時は親人も、無念にあつたであらうと、思ひ廻せばヱヽ。
ト無念がる。
小女　その御無念思し召せば、謀叛を思し召されませぬか。
久五　諸大名は過半味方に付け置いた。謀叛一味の連判。
ト出しかけ、見せる。
小女　すりや、諸大名は過半お味方か。
久五　一時延びれば一時の不孝。片時も早う用意して、合圖を定め、都へ攻め入り、久吉が首取るは我が手裏にあり。天が下の主、武智左馬五郎光義。
小女　ハアヽ、天晴れ大將、もう思ひ殘す事はない。冥途の餞別申し上げませう。
久五　餞けとは。
ト小女郎、懷より竹のひつそぎ取出し
小女　その餞けとは、カウ、竹を腹へ突ッ込み。
ト我が腹へ突き立てる。
久五　小女郎、そちやなんで死ぬる。

小女　あるに甲斐なき女の身。足手纏ひは軍の不吉。二つにはこの事早う、殿樣始め未來に居りまする作右衞門へも、告げ知らせ喜ばせ、三つにはこの竹槍は、卽ち大殿樣を突き留めた竹槍。まッ此やうに御最期の苦しみを、お目にかけるが謀叛の臍を固めさしまする爲。
久五　すりや、まッ其やうに親人樣も。
小女　四苦八苦のお苦しみ、舌も廻らぬ御遺言に、武智程の武士が、土民の爲に見苦しい、最期を遂ぐるも久吉ゆゑ。何卒一子を守り立て謀叛の起し、久吉が首を位牌に手向けてくれよ。それまでは修羅道の巷に迷うて浮まぬぞよ、作右衞門々々々と、口惜し涙と諸ともに、七轉八倒なされた時は、涙に五臟をば絞り、只大聲あげて泣くより外の事はござりませなんだといなう。
久五　無念に無念を重ぬる眞柴久吉。うぬ、討たで置かうか。
ト大泣き。
小女　最前お前の落しなされた守り袋、古金襴の二重鶴、臍の緒の書付けには、元龜元年庚午五月五日の誕生、土岐氏と記されしは、武智さまの先祖の苗字。又この傍らの女の守り袋は、武智さまの御所持。この合ひ紋にて

廻り逢へど、殿様の血汐を塗つて下された守り袋、いま又お前の守り袋に、わたしが血汐を塗れば、親御様の無念、わたしが無念。凝り固まつた血汐の守。これを見る度御無念を、お忘れなされまするなや。

ト渡す。

久五　すりや、これが親人の血汐か。

小女　思へば〳〵。

兩人　エヽ。

ト手を取り合ひ泣く。此うち門兵衞、表をこぢ明けてツカ〳〵と入つて、二人が眞中の守り袋を捉へ、キッとなる。

門兵　待て女房。主人に夫を見替へるは武士の魂ひ。これまでおれに明かさなんだ、志しは感心したが、二重鶴の古金襴と、今云うた年號月日、此方に覺えある事ぢやが、コリヤ、氣を慥かに持つて、これを見い。

ト守り袋を出す。小女郎、取つて

小女　ヤア、こりや見覺えある二重鶴。中の書付けは。

ト出して

門兵　元龜元年庚午。

小女　五月五日の誕生。

門兵　土岐氏としてあらうがな。

小女　これはどうして。

門兵　死んだ母より親の筐。人に見せなと譲られた、臍の緒ぢやわいやい。

小女　エヽ。

ト以前の守り袋を見て

こりや武智さまの守り裂れと。しつくり合うて。

門兵　手も同筆であらうがな。

ト久五郎の守を見て

小女　裂れの模様は似たれども、よく〳〵見ればこれは今織り。

門兵　書付けの手は拔群違うてある。

小女　逢ひたい〳〵と思ふので、見紛うたか。

門兵　そんなら、おれが左馬五郎。

小女　似せ者にうか〳〵と、勘合の印を渡したか。ヤアヤアヤアヤア。

門兵　ハテ、思ひも依らぬ素性を聞くなア。

ト此うち久五郎、捕り繩、十手にて

久五　樣子は聞いた。何れもお來やれ。

ト三、烽火あげる。遠責めになり、久五郎に付いて來

た侍ひ、殘らず込み入り、門兵衞を取卷く。

皆々　動くな。

三　相人久五郎、大儀々々。

門兵　これは。

久五　いつぞや長崎にて加比丹を討つて立退くその罪、古主釆女之介どのにかゝりしゆゑ、伏見の御所へ名乘り出でたるに、例へ本人出たりとも、釆女之介は傾城狂ひに身持ち放埒のお咎め。これを償はんと思はゞ、相人となつて、所々に徘徊する謀叛人を吟味いたせよとの嚴命。承つて嗅ぎ歩く久五郎。關を破つて島々國々を騙る山司金右衞門、本名は武智が悴左馬五郎、手盛りを喰うて謀叛人時高を殺し、勘合の印を身に渡したは天命。何もかも一時に相知れた。遁がれぬ所ぢや、腕廻せ。

三　釆女之介は助け遣はす。謀叛人の讒譏する身を誰れとか思ふ。朝鮮國にて久吉公の、お馬先に立つたる加藤虎之助政淸とは、身が事ぢやわやい。

久五　とても遁がれぬ。尋常に腕廻せ。

ト　この間遠責め。門兵衞、ヂッとして居る。小女郎、苦しきこなしいろ〱あり、門兵衞の手を取つて

小女　免して下さんせ、堪えて下さんせ。女の鼻の先智恵、尋ねるお主は現在我が夫。女夫の仲に隔てもなう、疾に打割つて云うたらば、斯うはなるまいもの。忠義ぢや忠義ぢやと連れ添ふ夫を騙して、金貯へた罪で、不忠者の第一となつてこの死ざま。お主へは不忠、夫へは義理知らず、未來で父樣や母樣に、なんとマア云ひ譯せう。わしやなんと云ひ譯せうぞいなう。

ト　泣く。

門兵　ア、何事も天命々々。町人の淺ましさは、守り袋に氣も附かず、逞ましう金銀を集め、榮耀榮華を一生の樂しみと思うたは、親人に對して大不孝。今より武智左馬五郎謀叛の棟梁、日本が味方せずば、三千世界の島々國々、片ッ端に味方に附け、一刻にも打ち潰し、久吉が首を取る。この通り草葉の蔭で親人へ云へ。

小女　エヽ、忝ない。とてもの事なら、罪は堪忍して下さんせ。

門兵　夫婦は二世、主從は三世。

小女　それが未來の引導。こちの人、御主人樣、さらば。

ト　刀を咽喉へ突き立て死ぬる。矢張り遠責めなり。

三　相人久五郎、山司金右衞門に繩かけて遣はせ。

久五　畏まつてござります。

ト身繕ろひする。
サア、最早遁がれぬ山司金右衛門、久五郎が繩かける。
腕廻せ。
門兵　武智左馬五郎、汝等如きの手に合はうか。ならば手柄に捕つて見よ。
久五　捕るぞ。
門兵　捕れよ。
久五　捕つた。
ト立廻りにて、門兵衞、返し壁へ入る。
南無三拔け道。家來ども、裏道を圍へ。
家來　ハア丶。
ト皆々奥へ入る。後に久五郎、殘り
久五　この小豆島は四方海上、水練に達したる金右衛門め、海へ飛び入らば、なか／＼行くへは。
トふつと見て、磁石を取り
こりや北海の磁石を吸ふ事、牛を以て引くより速かなるこの磁石を。
ト思案して、小柄を取出し
こりや鐵の小柄。
ト磁石吸ひつく。

ソレ。
ト持つて入る。雲太郎、欠伸しい／＼出る。
雲太　なんぢや、借錢乞ひが來ぬやうになると、謀叛人のまた會合になつた。此やうに謀叛人を取込んで、食はす物があるか知らぬ。
ト黑ん坊、戻り、内へ入る。雲太郎、行き當り
雲太　ワア、イ。
ト悄りする。
黑坊　おのれ、采女之介か。
雲太　おのれ、吹矢の手間取りか。
黑坊　姿を變へて逃げうとは、太い奴の。
雲太　黑い奴の。
黑坊　うせう。
ト引立てうとする。雲太郎、棒を使うて寄せつけず。この間井戸の内より采女之介、頰冠りして逃げうとする。
長門　コレマア、待つて下さんせい。
ト采女之助、振り切る。九郎助、戻り見る。黑ん坊、見附け
黑坊　ヤア、そこに居るか。

ト逃げうとする。九郎助、黑ん坊を投げ、また直ぐに釆女之介、投げる。釆女之介、向うへ走り入る。皆々追ひかけ行く。返し

造り物、一面の葭原になり、門兵衞、血刀提げて、葭を分けてスッと出る。暗がりの心にて、そろ／＼と向うへ出る。久五郎、同じく暗がりの心にて、ヌッと出る。遠責めの間、互ひに探り合ひ、所々にて立廻り、始終暗がりの模樣、よき所にて久五郎、門兵衞を捕へ、小柄を齊物に縫ひつける。門兵衞、切り拂ふ。つまり久五郎、左の腕へ少し疵つく。門兵衞は橋がゝり、浪板の切り穴へ飛び込む。久五郎、わざとこけて居る。よき程に起きて腕を括り、葭の束れ取つて、懐より磁石を出し、この葭の束れへ結び、浪板の所へ置く。葭の束ねたるは淺き所へ浮いたる心にて、舞臺より花道の浪板の所を浮いて行くを、久五郎、これに目をつける。捕り手、提灯持つて二三人出て

捕手　して、金右衞門は。

ト久五郎、この葭の花道へ指して行くを見て

久五　船廻せ。

ト氣短かう云ふ。

捕手　ハッ。

久五　早う／＼。

ト皆々入る。久五郎、この葭の流るゝを見て、そろそろ付いて入る。拍子木、氣味合ひの久五郎。

幕

五つ目　舞子の濱道行の場

役名――山科中將。早見兵內。大館源吾。喜村將監。喜村釆女之介。傾城、長門。乾隆王の靈。山司金右衞門實ハ武智左馬五郎光義。

造り物、向う一面山、前に小松原、西の方、浪打ち際の模樣にて、幕の內より百姓大勢、鍬、箒持ち掃除して居る。この見得、在鄕唄にて幕明く。

百姓　ヤレ／＼、今朝からかゝつて、海道の掃除しまうたから、もう日の暮れるのに、お勅使のお通りは遲い事ぢや。

同　サア、肥前の國より都のお勅使のお歸りとやらで、忙しいのに道の掃除。迷惑な事ではあるぞ。

同　イヤモ、久吉さまが唐へ軍に行て戻りやしやるの、お勅使のお通りなさるのと、百姓は亂離骨灰ぢや。

同　アレ／＼、向うへ大勢の供廻り。お勅使がござつたさうな。

同　爰に居て叱られうより、庄屋どのへ知らせませう。

皆々　ムウ。さうせう／＼。

ト皆々入る。行列大勢、後より將監、衣裳、野袴。兵内、衣裳、上下。その外長刀持ち、笠持ち、仕丁、大勢出る。

兵内　お乘り物立てい。

舁き　ハアヽ。

ト乘り物立てる。

兵内　我が君へ申し上げまする。この所が播州舞子が濱、日は入相に及びますれども、音に聞えた景色、御覽遊ばされませう。

將監　誠に、九州より都まではる／＼の道中。お乘り物の内もさぞ御退屈。夜中ながらも當所の松原御覽あつて、暫らく御休息あられませう。

ト乘り物の内より、中將、冠、裝束にて出る。

中將　この所が聞き及びし舞子の濱とな。思ひなく斯く配所の月と古人の詞。この度眞柴大領久吉、朝鮮の歸陣の砌り、持參せし官符の綸旨、五三の旗もろともに、受取りの勅使に罷り下つたが、阿蘭陀加比丹ていこうを手にかけしは、喜村釆女之介が仕業とあつて、親將監は囚人なれども、某が推擧に依つて、都へ同道して立歸る。釆女之介が行くへを尋ね出し、親子とも身の云ひ譯してよからう。

將監　公の御憐愍、有り難う存じ奉ります。阿蘭陀人を殺せしは、悴釆女之介が誤まりなりと、この將監まで死罪に及ぶべきところ、中將さまのお情にて、都へのお供を仰せつけられ、親子が身の上を推擧なし下されんとは、冥加もなき仕合せでござります。

中將　して、釆女之介が行くへ、尋ね出す手がゝりはないか。

將監　長崎表を立退きましてより、在所も知れず、ましてこの將監は囚人の身の上。尋ね出す手がゝりとてもござりませぬ。

中將　何分上京の上、とくと行くへ尋ねてよからう。

將監　何事も中將さま、偏へにお執成し、願ひ奉りまする。

ト向うバタ〳〵にて、源吾、羽織、野袴にて走り來る。

源吾　お勅使樣、これにござりまするか。伏見御城内より火急の御狀。

ト狀箱を差出す。

兵内　久吉公の御家來、大館源吾どの。

將監　慌しい長途のお使ひ。

兵内　昨夜子の刻、聚樂の御所にて、關白久次公には御落命。

二人　ヤア、。

ト此うち中將、狀を讀む。

源吾　久次公には例の御酒宴のところ、近習の武士も前後を知らず、醉ひ伏せし折を窺ひ、何者とも知れず、御寢所へ忍び入り、久次公のお首を討つて立退きました。

中將　城内よりの書中、源吾が詞。武將久次の横死は、國家の大事。乘り物急げ。

兵内　お乘り物、早く〳〵〳〵。

皆々　ハア、。

ト乘り物を舁き上げろ。皆々附き添ひ、向うへ入る。

橋がゝり臆病口より、捕り手大勢出で、騒き合ひ、三方へ別れて入る。太夫、三味線を突き出し、道行の口上あり。

〽梢吹く、嵐の音の身に沁みて、下行く水の音までも、もしや我が身の追手かと、心も空に遠近の、胸驚ろかす鐘の音。

ト長門、走り出てこけ、釆女之介、續いて出で、抱き起す。

長門　釆女さま、お前に怪我はなかつたかえ。

釆女　今のは慥かに追手の者。

兩人　ひやいな事であつたなア。

〽いざと互ひに手に手をば、取交したる顏と顏、ばらつく鬢の縺れ合ふ、葉越しの月の影薄く、暗き思ひに立ちとまり。

釆女　世に便りなきは釆女之介が今の身の上。附き慕ふ志しは嬉しけれど、無實の罪を其まゝに、名乘つて出るこの身の上。未來は必らず一つ蓮。この世の縁は、思ひ切つてたもいなう。

〽さらばとばかり云ひさして、後は詞も曇り聲、長門は胸も瀧津瀬の、落つる涙を押止め、思ひいや增すわたし

をば、捨てゝお一人行かうとは、そりやあんまりちや胴慾な、粋なお前にくど／＼と、云ふは今更愚かなと、叱らしやんすは知れた事、そも逢ひ初めし初床に、恥かしいのはどこへやら、わたしが先へ帯解いて、肌着の絹もしつぽりと、口から口へ二世までと、浮名の立つが嬉しうて、無理を云うたり云はれたり、残る口舌は明日の文、我が筆ながら引裂いて、咬んで捨てゝも氣も濟まず、また逢ふまでは身仕まひの、櫛も鏡も手に附かず、案じ雲らぬ眞實は、お腹に重き岩田帯、嬰兒を產んだに添へ乳して、てうちあわゝに飯くゝめ、二人並んで愛らしい、顔を見ようと明暮れに、樂しむ甲斐も情ない、酷い心と縋りつき、かこち涙ぞ果てしなき。

釆女　この釆女之介も、我が子の顔を見たけれど、月日を待てど親將監の御難儀。思ひ切つてたも。

長門　イヤ／＼、なんぼでも、離りやせぬ／＼。

釆女　親人のお身の上、家の大事にや替へられぬ。未練な事を。

ト未練々々と振り放し、行くをやらじと褄裳裾、扣ふる袂烏羽玉の、綾なき思ひ小笹原、後を慕うて行く空の、苦は色かゆる松風の、音も烈しき夜の道、ほくそ頭巾に顔隱し、褞袍の上に大だらを、さしも不敵の左馬五郎、木の根岩角いとひなく、踏み出ず前後に捕り手の大勢。

トこの淨瑠璃にて、金右衛門、のら／＼と出る。捕り手大勢、前後を圍ひ、かゝらうとする。金右衛門、目を附ける。金右衛門、後へ寄り、本舞臺へ來る。

捕手　ソリヤ。

ト捕り手かゝる。立廻りにてよろしく留め

金右　往來の旅人に向つて尾籠の振舞ひ。悪く寄つたら手は見せぬぞ。

捕手　產物の盗人、山司金右衛門に極まつた。

金右　ヤア、盗人とは慮外な奴の。

ト少し立廻りあつて、大勢を切り散らし、追ひ込む。

面體を知られし上は大望の妨げ。時日を移さず眞柴久吉が首取つて、親人の恨みを晴らさん。

ト行かうとする。ドロ／＼にて、舞臺先一面に掛け煙硝あがる。金右衛門、向うへ行かれぬ思ひ入れあつて

ハテ心得ぬ。途中の狼藉を遁がれ、伏見の城へ忍び入らんと行く道筋、土地に陰火燃え上がつて、草木も動揺せしば……妖邪、虚に乘ずる時は、栴檀柳の類も人の魂ひを奪ふ。但しは野狐の仕業か。何にもせよ、この光義を

誑らかさんとは、愚かな奴の。
ト又行かうとする。ドロ〱頻りに鳴り、下より
乾隆　足下對顏將來々々。
ト乾隆王、白き唐冠、白き裝束、王の形にて、セリ上がる。金右衞門、見て
金右　草叢の内より、唐音を以て我れを呼びかけ、異形の姿を顯はしたは、狐狸の障化に極まつた。摑み拉いで化けの皮、ひツ剝いでくれう。
乾隆　一天四海を掌握せんと謀る武智左馬五郎、血氣に逸る勇士を咎め、假に姿を顯はせしは、我が本國の恨みを晴らさん爲。
金右　我が本名を知つて、力を添へて恨みを晴らさんとは。
乾隆　眞柴久吉の爲に、國民悉く日本の奴となり、戰場の巷に屍曝せし朝鮮國の、乾隆王が魂魄、假に姿を顯はし、久吉を亡ぼす汝に力を添へん。喜べ〱。
金右　愚か〱。例へ久吉鐵城に籠り、數萬騎にて宿直するとも、我が勇力を以て、城門櫓も踏み破り、首捻ぢ切つて父が供養に手向けん事、方寸にあるわいやい。
乾隆　イ、ヤ、血氣に逸る匹夫の勇、危ふし〱。軍慮する眞柴久吉、計略なくしては大望成就思ひも依らず。我が蠻國の術を以て、勇力自在を汝に預くるこの一卷、月を重ねて三十六月を以てより、一千日三ケ年のうちに事を謀らば、大望成就案の內。久吉を討取つて、我が國の恨みを晴らさん。喜ばしやなア。
ト一卷を差出す。
金右　すりや、この一卷を授かつて、術を受くれば三年が間は、この身に自在通力あるとな。
乾隆　勇氣勝れし左馬五郎、通力自在を授かる上は、龍に翅を生ずる如く、何事も心の儘。
金右　蠻國に用ゆる秘文にもせよ、武略に長ぜし日本人、目のあたりなる印なくんば心元ない。
乾隆　眼前我が見する咒文の奇特。速是招方還來々々。
ト又ドロ〱にて、向うより以前の行列、乘り物舁き、後じさりして出る。本舞臺へ乘り物直し、供廻り殘らず、ウンと悶絶する。
兵内　こりやどうぢや。お乘り物の行列、行く先は眞暗になり、山も海も震動して
將監　五體も竦み、東西とても辨まへ難き夜の道。
兵内　お供廻りが有樣と云ひ、ハテ、小氣味の惡い。

ト乘り物の内より中將、出て

中將　合點のゆかぬ今宵の天變。大切なる五三の旗、官符の綸旨も所持せし急ぎの道中。松明の用意いたせ。

ト此うち金右衞門。そろ〳〵向うへ出で、中將が首筋引ッ掴み、グッと締め殺し、懷の旗と綸旨を取り、死骸を蹴飛ばす。何れも闇の心にて

兩人　ヤア、こりや中將さまが。

ト慟りして寄るを、金右衞門、兩人の首筋を兩手に掴み、双方一度に締め殺す。兵内、將監、いろ〳〵苦しみ死ぬる。金右衞門、三人の死骸を波打ち際に打込む。

金右　二種の寶手に入りしは、大望成就の印か。ハテ、心地よやなア。

始終ドロ〳〵なり。

乾隆　やみなん〳〵。授くる術は通力自在とは雖も、三年年數經てば、忽ちこの術消え失せる。必らず三年を過ぐべからず。とくとこの旨、心得たるか左馬五郎。

金右　なに三年とは事延引。一時に悪藥を討ち潰し、本意を遂げて朝鮮國の、恨みを晴らすこの一軸、光義慥かに受納いたした。

乾隆　都へ送る路次の乘り物……乘輿再來々々。

ト招く。

〽唱ふる秘文に左馬五郎、不敵にもまた乘り物に、夢か現か家來ども、只茫然と立ち上がる、影も怪しき幽王の、ありし姿は一陣の、風に燃え立つ妙火のうち、氣もうつかりと後備へ、お先參れの聲々に、行列揃へて陸尺が、踏み出す足もしつとん〳〵、都を差して、行く

ト乾隆、下ろ。行列、向うへ行く。

〽空の、道なき道の暗紛れ、長門は夫見失ひ、尋ね迷うて伏し沈む。

ト長門、走り出で

長門　釆女さまいなア〳〵。

ト方々尋ね歩く。黑ん坊、出で

黑坊　ヤア、そこに居るは傾城の長門。よい所で逢うたなう。

長門　ヤア、其方は黑ん坊、また來たかやい。

黑坊　オヽ、來た段か、そもじに逢はうと思うて、おれは大抵の黑ん坊する事ぢやないわいなう。人の通らぬこの松原、日頃の思ひ、ちよつと爰で。

ト抱きつく。長門、突き飛ばし

長門　エヽ、穢らはしい。穢ないわいやい。

黒坊　なんぢや。穢ない。
〽なんぢや穢ないとは曲がない、そもじを鼻に持つたなら、長町裏で世帯して、つがつぼむきずもいとやせぬ、雲助したり板屋橋・油しめとはまだな事、厄拂ひにも行く心。
〽ヤアラめでたいな、我れ等がじんばり申さうなら、鶴は千番龜は萬番、我れらが體は地黄丸、夜はつけ詰め晝は入り詰め、この黒ん坊がせつたら負うて、拙が故郷の西の海へ、さらりこつかこう。
ト寄り添ふ。長門、突き退ける。
これ程に思ふのに。
〽深山烏が黒ん坊も、れこさの道は知るものをと、わ我身をとんと黒ん坊、舐りつきたい鼻息なり。
コレ、黒いのは味がよい。一黒二赤と云うて、二番と下がらぬ黒筋ぢや〳〵。
長門　エヽ、嫌らしい。放しやれ〳〵。
黒坊　放す事はならぬ。ツイちよこ〳〵と。
長門　アレイ。誰れぞ來て下さんせいなア。
〽あせる長門を無理無體、聲立てさせじと腰帶を、口へ捻ぢ込み猿轡、なんと詮方長繩手、それと見るより雲太郎、張り棒片手に黒ん坊が、弱腰はつしと薙ぎ倒し、つッぱだかつて力足、心地よくこそ見えにけり。
長門　オヽ、雲太郎。よい所へ來てたもつた。嬉しや〳〵。
雲太　おれが來るからは、氣遣ひな事はない。暗がりで黒ん坊めが色事、喰はした雲太郎が手並。腰骨に覺えたらとッとゝ歸れ。
黒坊　阿房めが、いらざる所へ出しやばつて、色事の妨げ。長門を渡せ。
雲太　火炙りの化け物見るやうな形で、長門さんに惚れたとは、臍が宿替へするわい。
黒坊　邪魔ひろがずと、女を渡せ。
雲太　べかこう。
黒坊　エヽ、面倒な。
〽えゝ面倒なと立寄つて、かゝるを支ゆる雲太郎、張り棒押取り滅多打ち、がむしやの黒ん坊引つたくり、脛で蹴返し踏み飛ばし、逃げ行く長門を鷲摑み、小脇にしつかと駈け出す、腰卷摑んでコリヤ〳〵〳〵、尻居にくつしやり棒の先、さアしてやつたと片手投げ、右と左へくる〳〵〳〵、苦しむ黒ん坊、打ち寄する、浪の深手へ投げ込み打ち込み石礫、足を早めて。

ト雲太郎、黒ん坊を海へ投げ込み、長門を連れ、向うへ走り入る。

幕

切　幕

島田勝家館の場

役名　眞柴久次。御臺、梅町御前。島田大膳太夫勝家。同女房、渚の方。喜村釆女之介。傾城、長門。百姓、九郎助。奴、文字平實ハ郡主膳。阿蘭陀の黒ん坊實ハ小西彌十郎。北條氏直實ハ後藤又兵衞基次。萬歳、才若實ハ岸田治部少輔道成。同、徳若實ハ大矢勘解由。岩代監物實ハ鹿島權藤太。横川藤内。相人久五郎後ニ眞田左衞門幸村。花山和尚實ハ武智左馬五郎光義。

幕の外にて、兩方の花道、眞中の花道、三方より

大經　大經師暦、慶歴元年大經師暦。

ト賣り出る。

三島　正安元年三島暦。

伊勢　文永元年伊勢暦。

ト右の通り、賣つて出る。舞臺にて三人。

大經　ヤイ／＼待て。暦賣り。わいらは聞いて居れば、正安元年とやら、其方の者は文永元年とやら云うて、わいらはマア何所の者ぢや。

三島　何所の者であらう。忝なくも御免の三島から出る暦賣りぢや。

伊勢　なんぢや。味いな暦賣りが湧いて來た。おれは忝なくもこの度お上より、文永元年と年號お改めなされ、即ち伊勢の長官へ仰せつけられ、直ぐに諸國へ暦賣出せとの仰せを受けて、コリヤ、この通り廣める伊勢の暦。御免の提げ札を持つて、文永元年の暦賣りぢや。それがなんとした。

トこの間、横川藤内、上下にて、股立ち取つたる侍ひにて、家來に金棒突かせ、この體を見て、窺うて居る。

大經　いよ／＼胡亂な事を云ふ奴ぢや。この度大經師へ仰せつけられ、慶暦元年と年號が替つて、暫時に諸國へ觸れ流せと、コリヤ、この通り御免の提げ札を以て賣り歩く大經師暦。それに正安ぢや文永ぢやのとは、どうでもわいらは正しく紛れ者ぢや。この通りでは濟まぬ。さう思へ。大經師暦お定まりのぢや。斯う云ふ事を見出し聞

き出し、金にするのが大經師の日付けぢやわい。
三島　さう云ふわいらが紛れ者ぢや。正安元年と仰せつけられ、この通り御免の提げ札を持つて賣り歩く三島暦。二人とも似せ暦に極まつた。その暦取上げて縛し上げる。さう思へ。
伊勢　それ〳〵、さうおのれらが吐かすが騙りぢや。縛し上げて吟味する。
大經　さう吐かすも矢ッ張り似せ暦ぢや。本屋仲間の年玉さへ嗅ぎ歩き、聞き歩いて强請つて金取る大經師ぢや。わいらも金出して降參せい。內證で濟ましてやるワ。
三島　さう吐かすおのれが大騙りぢや。
三人　イヤ、おのれらを吟味する。うせい〳〵。
　ト三人揉み合ふ。藤內、いろ〳〵毆りこかし
藤內　鎭まり居らぬか。鎭まり居らう。
　ト三人、ハイ〳〵と扣へる。
伊勢　お役人樣、お聞きなされて下さりませ。大切な暦に似せ物が付きましてござります。
大經　おのれが似せ者ぢや。
三島　イヤ、おのれも似せ者ぢや。
藤內　默り居らう。
　ト三人、ハイ〳〵と鎭まる。
　身共は斯樣な事を糺す役目ではなけれども、仔細あつて暦の事は聞き逭がしにならぬ。最前よりの樣子はとくと聞き屆けた。三方ともにお上に依り、御免なされた年號の暦に違ひない。
伊勢　エヽ、そんなら三方ともに。
藤內　御免の提げ札、確かな證據。同じ暦に年號は別に、早く諸國へ廣めい。
三人　畏まつてござります。とは云ふもの〻、なんの事ぢや、譯が知れぬ。
藤內　身共はこれよりこの樣子、評定所へ申し上げねばならぬ。家來ども參れ。
家來　ハア、。
　ト藤內、家來を連れ入る。
三島　サア〳〵、譯は知れぬが譯は立つた。
伊勢　なんであらうと、これからは銘々捌きぢや。
大經　どの年號用ゆるか、根比べに廣めて見よう。
三島　さうせい〳〵。
伊勢　文永元年伊勢暦。
大經　慶暦元年大經師暦。

三島　正安元年三島暦。

ト三方へ別れて入る。太鼓入り踊り三味線にて、幕明く。

造り物、結構なる館の體。上の座、雛乘り物、雛祭りの道具飾りある。下座の方、五月幟兜飾りある。長門、傾城の形。腰元、篝火、寄生木、雛の膳立てして居る。渚の方、衣裳、裲襠、襷かけ、黑き手拭して、餅搗きの臼取り。岩城監物、小手、脛當の衣裳、上下凜々しく股立ち取つて、鉢巻締め、餅搗きの杵を持つて、側に居る。腰元、小姓、大勢、揃ひの形にて踊り居る。采女之介、衣裳、羽織、着流し、片脫ぎかけになり、音頭取つて居る。見得好き踊りにて

監物　ヤレ／＼忙がしい。如何に殿様の御遊興とは申しながら、盆も正月も一時とはこの事ぢや。さて、これからは身共が役目。まだこしきは上がりませぬかな。

勝家　島田大膳太夫勝家、こしきそれへ持參せう。

ト勝家、衣裳、上下にて、こしきを持ち出て、後より小姓大勢差添ひ持つて出る。

監物　殿様、こしき上がりましてござりますかな。

勝家　上がつた／＼。ソレ、小姓ども。

小姓　ハア、。

ト蒸籠受取り、臼へ入れる見得。

勝家　今日は武將久次公の御簾中様、梅町御前さま、先達て當屋敷へお入り、何がな御馳走に趣向、五節句を一時の戯むれ。其方達は祝儀の餅搗き。コリヤ、其方達は雛の料理、粽の拵らへ、早う／＼。

皆々　畏まりましてござります。

ト太鼓、鼓の拍子になり、これに合せ餅搗き。渚の方、臼取り。長門、篝火、寄生木、雛の膳を拵らへる。また餅搗きの拍子早める。向うより、德若、才若、大和萬歲の形、米袋持つて出る。舞臺には皆々雛の膳据ゑる、と鼓打つ。

德若　どなたも御息災にござりまする。

才若　御健勝にござりまする。

勝家　オヽ、幸ひの所へ大和萬歲、餅搗きは暫らく休んで萬歲を早う舞はせ／＼。

采女　御祝儀の萬歲、早う／＼。

ト萬歲唄になる。

德若　先づ當年より暦の表、慶暦。
ト鼓を打つ。
才若　正安。
ト鼓を打つ。
德若　文永なんど
才若　年號三つ出し給ふ、誠にめでたう候ひける。
德若　新たに內裏をたつてにいゝて、關白職の御勅し。
才若　大老の御屋形、殿作りのかや柱の數は十二本。
德若　壹本の柱は伊勢天照大神。
才若　貳本の柱は二王二天を象つたり。
德若　三本の柱は榊の神明。
才若　四本の柱は四天王。
德若　貞光、季武、綱、金時、まだある夜の內月の都を。
才若　ヤイ／＼、そりやなんの眞似ぢや。
德若　ハテ、四天王と云ふに依つて、貞光季武綱金時ぢ
や。
才若　阿房め、その四天王ぢやない。持國增長多門廣目
ぢや。
德若　なんぢや、廣日に御報謝戴かして下さりませ。
才若　アレ、まだいの。

ト扇子にて叩く。
德若　ソレ、五本の柱は牛頭天王。
才若　六本の柱は六地藏。
德若　七本の柱は七難衆滅七福衆生。
才若　質請け利上げは三月で六日、古手屋呼んでは布子の
遣繰り、どうやらそろ／＼背中が痒なる。さりとはほん
ほにうるさいこつたに。
德若　ホオ、。
ト末廣を錫杖のやうに遣ふ。
才若　ヤレ、野良如來佛さんまあみ。
ト顏見合せ
兩人　ハア、、。
德若　オ、、阿房らしい。他愛もない事云うて、愚鈍にし
をるがな。
才若　ヤア、其方は愚鈍か。
ト鼓打ち、拍子取る。
德若　尻を振つて。
才若　腰を振つて。
ト拍子に尻振る。
兩人　びりびんやびり／＼びり／＼のひつとこせい。

徳若　當御代は榮えましんます。

ト萬歳唄になる。

才若　卯月末の花笠。

徳若　思ひ〳〵の玉襷、壺に入れて田を植ゑ

才若　田唄を唄うて植ゑ給へば、はべろふ

徳若　あつちやこつちや〳〵

才若　田唄を唄うて

徳若　ハツアイヤ。

才若　ぞんぶり〳〵〳〵ぞちよちよんぶり〳〵〳〵ぢよ。

徳若　今年や世がようて穗に穗がびり〳〵びん。

才若　びりびんやびり〳〵びん。

徳若　米も枝葉が麥には、ア、エ、とびり〳〵びん。

兩人　ひりひんやびり〳〵びんひりひんのひつとこや。

才若　四方に四萬の

徳若　藏を建てゝ、樂しうなれとぞ祝うた。ハ、、、、おめでたうござります。

監物　萬歳の役目、兩人ともに大儀〳〵。

ト兩人、ハツと入る。

勝家　出かした〳〵。先づこれで正月の儀式は濟んだ。三月は雛祭り、五月は幟、七月は踊り、七夕の祝儀、七夕祭りと盂蘭盆と打混じて、踊りにせい。早う〳〵。

ト皆々ハアと太鼓入り、踊り三味線になる。

釆女　サア〳〵、盆も正月も一時とは妾の事ぢや。さらば是らで仕組み踊りが所望ぢやが、合點か。

皆々　オ、さて合點ぢや。

トこれより、皆々面白き踊りになる。と向うより

呼び　御上使。

皆々　御上使のお入りとござります。

ト鳴り物止む。

勝家　御上使とは、久吉公の御上使であらう。皆出迎へ。

釆女　ハア、。

ト花道より、北條氏直、素袍、かけ烏帽子。後より、花山和尙、出家の形にて、文字平、奴の形にて、侍ひ付き添ひ出て、渚の方、長門は右の間へ入る。

勝家　大領久吉公の御上使、イザ

釆女　お通り下されませう。

氏直　御隱居久吉公の御上意を承り、北條修理太夫氏直、推參仕つてござる。上使なれば罷り通る。

皆々　ハツ。

ト氏直、上座へ通り床几にかゝる。花山和尙、拂子持

ち、椅子に腰かけ、下座に扣へて居る。皆々並よく座に着く。

氏直　御隠居久吉公の嚴命、謹んで承はられい。

勝家　ハア。

氏直　島田大膳太夫勝家、いま天下の大老として、武將久次を補佐し、政道正しかるべきところ、驕りに長じて館に四季の華麗をかけし、五節句の遊びとやら、畢竟謀叛の振舞ひ。君の御不審大方ならず、かゝる振舞ひは、正しく天魔ばじゆんの障化ならんとあつて、稀代の聖を差越さるゝ。正しき魂ひあらば、有り難く承はつて、キッと返答申されいよサ。

ト花山和尚、靜々勝家が前へ出て

花山　拙僧儀は、御菩提所大雲院の寺中、花山と申す沙門でござります。大領久吉公の嚴命に依りまして、畏れながら當時大老たる、島田勝家公の御人相を伺ひ奉るに、この上もなき身の幸ひと、御意に任せ、憚りながら伺候仕つてござります。

勝家　ムウ、大雲院の寺中、花山とはお身よな。聖の高名は聞き及べども、逢ふは始めて。島田大膳太夫、叛亂も せず、常の通りなれども、御上意を以て祈禱、大儀に存ずる。

花山　ハッ／＼。

氏直　ムウ、すりや狂氣でもないぢやまで。

勝家　イヤ、モウ、ずんと本性でござりまする。

氏直　狂氣でなくば、何ゆゑの遊興でござる。

勝家　天地陰陽二つに別れて四季となり、四季は通じて十二月、五節句は朝夕の行事。節會は君の御役日、その下に居て政道を糺す島田勝家。館に四季を飾り、常に五節句の儀式をなすは、天地五行の恩を忘れず、民の安全を祈る政道の第一。遊興と御上聞に達しましたは、正しくこの勝家をなき者にせんとする、佞人讒者の業と存ぜられまする。

氏直　ハ、、、口悧巧には、ハテむづかしい申し披き。この氏直は文盲短才、陰陽が別れて四季となり、五季になるとやら、碌々存せねば無益。この儀はそれにもせよ、この程聚樂の御前の一大事。この上もない騷動が、貴殿の耳へは入りませぬか。

勝家　聚樂の御前の一大事とな。

氏直　何者が入込んでか、武將久次公を討つて立退いた事サ。

勝家　そりや、よく存じ罷り在る。
氏直　存じながら又何ゆゑ、諸大名の會合にも立會ひ召されぬ。
勝家　して又、諸大名の會合で、久次公を討つて立退いた曲者めが知れましたか。
氏直　知れぬゆゑの詮議サ。
勝家　用心堅固の御所へ忍び入り、武將を討つて立退く程の曲者、評定位で詮議がならうか。差當つて梅町御前さまの御嘆きを留めん爲に、この館へお供申して、お慰め申すが拙者が忠義でござる。
氏直　すりや、久次公の敵は所詮知れまいと、高を括つて樂しみ召さるな。
勝家　島田勝家、五體は爰にあれども、眼の光は六拾餘州を見張つて居る。
氏直　ヤア、大雜把な過言。それ程の御身が、何ゆゑ科人を其まゝにして踊り狂ふ。
勝家　科人とは何者。
氏直　あれに居る喜村將監か忰釆女之介。家來ども、ソリヤ。
家來　動くな。

ト釆女之介を取卷く。
勝家　待つた。身が捕へ置いた釆女之介を、餘人の詮議は賴まぬ。
氏直　どこへ〳〵。天が下の重寶、官符の綸旨、五二の旗、勅使御持參にて九州より京都へお歸り。その供は喜村將監、何國へ行たともお行くへ知れず、察するところ喜村將監、お勅使を殺し、奪ひ取つて立退いたに違ひない。その忰釆女之介阿蘭陀人の騷動より、科に科を重ねた奴。キッと拷問いたす筈を、彼奴が馴染みし丸山の傾城、長門と云ふ女郎まで引摺り込み、馬鹿を盡すが、それでも詮議か。返答あらば云つてお見やれ。
勝家　拷問も遊興も、詮議する者の一流細工。仕上げは後日の事サ。
氏直　イヽヤ、その仕上げ今見よう。
勝家　イヤ、小積な。
ト兩人、詰め合ふうち
梅町　兩人ともに待つた。久吉公の御上意。
ト腰元に制札持たせ出る。
氏直　これは久次公の北の方樣、御上使なれば
梅町　上座苦しうない、役目大儀。

兩人　して、御上意とは。
梅町　我が夫不慮の御最期は、正しく謀叛の仕業。島田勝家病氣と云うて、駈けつけなんだは御不審。わしが心を和めんと、呼び寄せたるを幸ひ、この間より滯留は、勝家が奢り試せと、舅君さま久吉公の御上意。いま兩人が爭ひは、尤もなやうでも、妾はえゝ得心せぬわいなう。例へ二品の寶詮議にもせよ、一旦采女之介は勝家へ預けなされたれば、何れも勝家が心任せ。また勝家が身の上の詮議は、氏直に仰せつけられたれば、氏直が心任せ。外に構ふ事はない。銘々の受取つた詮議ばかりをしたがよささうなもの。梅町がこれで、詮議の筋を見物せうわいなう。
兩人　御意御尤もに存じまする。
梅町　采女之介、隨分云ひ譯の立つ工風を。勝家、其方は氏直へ云ひ譯しや。その外の事は詮議の筋は、同役でも差出ぬのが武家の作法。キッと云ひつけたぞよ。
氏勝　畏まつてござりまする。
勝家　二品の詮議かゝる采女之介、忽せに差置くも、この勝家が所存あつての事。寶の詮議は岡目八目、品に依つて大切なる、久次公を弑せし曲者の、詮議するがこの身の潔白。

ト花道より、黑ん坊、菰包みを持ち出る。後より、侍ひ大勢付いて出る。

大勢　下がり居らう。
黑坊　てれめんてい。
大勢　下がり居らう。
黑坊　ほんてんきやん。
大勢　おのれ、下がり居らぬか。
氏直　ヤイ／＼家來ども、見れば異形の奴ぢやが、御上使の前と云ひ、御前樣もお渡りなさるゝ。騷がしい、早く引立てぬか。
大勢　下がり居らう。

ト引立てる。

勝家　家來ども待て。見れば外國の人物、何用あつて爰へ參つた。

ト采女之介、見て

采女　ヤア、そちや黑すか。何用あつて爰へ來た。

ト黑ん坊、見て、キョロリとして居る。

イヤサ、何用あつておのれマア。
監物　お待ちなされい。そりやこなた、よくお存じか。

釆女　成る程、よく存じて居りまする。
勝家　然らば樣子尋ねて見い。
釆女　ヤイ黑す、コリヤ、物を云へ。釆女之介ぢやが、見忘れたか。
監物　ヤイ、物を吐かせ。どうぢや。
黑坊　てれめんてい。
兩人　何がなんと。
監物　なんの事ぢや。
文字　イヤ〳〵、釆女之介さまとやら、この者の顏、よう御存じのやうに思し召せども、この黑すと申す者は、十人が十人、同じ面體同じ黑ん坊。日本人同然に思し召すゆゑ、人違ひでござりまする。
釆女　身は黑いを目當にする。人違ひであつたか。
勝家　ヤイ〳〵、下郎、そちや外國の事委しいか。
文字　ネイ。
氏直　身が家來文字平、彼奴は泉州堺の港へは、外國の商ひ船入込むゆゑ、自然と蠻語を通じ、横文字を見分くる。北の方の御前と云ひ、大切な詮議の場所、近う寄つて尋ねて見い。
文字　畏まつてござります……あぼけんでへあさかるこぼる。
黑坊　おぼけんぼるかんじやら。
文字　この黑すと申すは、日本の海まで八千六百里、天竺昆崙山の麓に、アコリと申す所の外國。穴に棲んで猿の如く、よく海に入つて自由をなすゆゑ、詞も阿蘭陀の者と同じ、横文字を用ひまするが、お願ひの筋あつて參つたと申しまする。
勝家　見れば、刀やうの物を包み、所持して居ると見える。監物、改めい。
監物　畏まつてござりまする。ヤイ黑すとやら、その包み見せい。
　　ト取りにかゝるを、突き退け後へ隱す。
　　隱すは曲者。ソリヤ。
　　ト家來どもかゝるを、取つて投げ、監物、かゝるを立廻りにて、抜き放し
黑坊　あんぼろいーぼろんさきや。
監物　それを。
　　トかゝる。
黑坊　そぼれんきやらんごんろんじんまんせんぼ。
監物　何を吐かすのぢや。一向譯が知れるものぢやない。

文字　文字平とやら、何を吐かすのぢや。
文字　天晴れ業物、この刀覺えがあるかと申す事でござりまする。
勝家　ムウ、その刀これへ持て。
監物　サア、早く渡せ。
ト黑ん坊、キヨロリとして居る。文字平、側へ行き
文字　そばてんきやんほか〳〵。
黑坊　はるてらんかんなんほろん〳〵。
ト書いた物添へて刀渡す。
監物　ハテ、よく馴付いたものぢやなア。
ト刀を受取り、勝家へ渡し扣へる、
勝家　ムウ、縁頭、目貫、同じ模樣の吉野山。
ト釆女之介、見て
釆女　そりや私しが差し料。その刀がどうして。
ト不審なこなし。
勝家　切尖に血汐の銹。ハテナア。
ト思案する。
氏直　さてこそ〳〵、久次公を討つたるは釆女之介。家來ども、圍へ〳〵。
家來　動くな。

勝家　ハテ、騷がしい氏直。釆女が詮議は勝家の役。其方は構やんなと云ひつかつたでないか。
氏直　ぢやと申して、彼れが刀に血のあるゆゑ。
梅町　サア、その刀の血は、誰が血ぢや知つて居るか。
氏直　サア、その儀は。
梅町　誰が血汐やら知れぬもの、刀の請け繩かけて糺明さすも、事を糺すも勝家が役。こなたは勝家の詮議ばかりぢやわいの。
勝家　氏直どの、この詮議は拙者が役目。貴殿には扣へさつしやれ。
氏直　成る程、拙者は貴殿の詮議、釆女之介に構ひはせぬ。これから貴殿が釆女之介を詮議するを見ようわい。
勝家　釆女之介、すりや、この刀は喜村の家の、差し料に相違ないか。
釆女　父將監が讓り、家の差し料、闘鷄丸に相違ござりませぬ。
勝家　刀に添へたる一書は、阿蘭陀の横文字。奴、讀上げい。
文字　ハア。
ト右の書面を見て

この訴狀を見れば、彼奴は阿蘭陀加比丹ていからうが家來、島にて遲れ、後より便船を以て着したとござりまする。

勝家　和言に直し讀み上げい。

文字「主人加比丹ていからう、日本の地へ渡り、九州喜村家の支配を請け、逗留のうち主人、敢へなき最期と聞くより駈けつけ候へども、朋輩の黒ん坊も行くへ知れず、うか〳〵上方まで參り候ふところ、御所の騷動、その節曲者に出合ひ、右の刀を取り候ふ間、持參仕り候ふ、この褒美として主人の敵、御詮議下され候はゞ、有り難く存じ奉り候ふ。」横文字和言に直し見れば、斯くの通りでござりまする。

勝家　訴狀の表、刀の血、すりや武將を討つた曲者は、釆女之介。

釆女　お粗相仰せられますな。毛頭覺えばござりませぬぞ。

勝家　して又、この刀の云ひ譯立つか。

釆女　その刀は紛失いたしたと申す事は、こなた樣にも。

勝家　そりや、其許が紛失いたした刀と云ふには、なんぞ慥かな證據ばしあるか。

釆女　サア、それは。

勝家　證據がなけりや云ひ譯は立たぬがや。

釆女　都へ上る時より、これまでの申し譯、切腹してなりとも喜村の家を立てたいと思ふ覺悟。思ひも依らぬ親將監も行くへ知れず。二品ともに紛失と聞いては、惜しからぬ命長らへ、斯程無實の重なる難儀、死遲れた釆女之介。さうぢや、南無阿彌。

ト腹切らうとする。

梅町　釆女之介待て。家を立てる爲に切腹も、科人の云ひ譯なさに、死ぬる命に二つはないかや。

釆女　ぢやと申して、これがマア。

梅町　死なねば立たぬこの場の云ひ譯。又生きて喜村の苗字は引起されぬ。身の明りが立てたくば命を捨てずに死んだらよからう。

釆女　命を捨てずに死ぬとはな。

梅町　その制札を持て。

ト腰元、ハッと梅町に制札渡す。

コレ、この制札の表を見や。この花江南の所無なり、一枝竊盜の輩に於ては、天永紅葉の例に任せ、一枝を切らば一つの指を切るべし。舅大領さまには吉野初瀨の櫻

を庭に移し、古しへ義經の須磨の櫻を惜しみ、辨慶に命じて建て置きし制札の心は、後の榮華を極めんと、思ふの心ない事ならば、子孫を斷つが天晴れの云ひ譯。この制札の一枝と云ふ文字の心。

采女　一枝切つてと申して、この采女之介、一子とては。

梅町　イヽヤ、無いとは云はれまい。傾城長門が胎内には、其方が胤を懷胎。腹な子を切つて潔白を見せよと、即ち大領久吉の御賢慮。

采女　ぢやと申して、湯とも水とも知れぬ者を。

梅町　ハテ、何にもせよ懷胎とあれば、其方が子に相違はない。その一子を切るには、その母を切つてしまへば、自然とその子を切ると云ふもの。

采女　そんなら傾城長門ともに。ハア、

ト俯向く。

梅町　一枝切らんと思へば。二つの命。それゆゑにこそ、一枝を切れば一つの指を切るべしとの制札。解きおふせたらば一時も早う、一つの枝を切るべき用意ぢや。

采女　ハツ、委細畏まつてござります。

氏直　アイヤ〱、御前樣。そりや餘りなる御成敗。現在主君を殺した、大罪人の身替りに、まだ何ぢややら知れもせぬ、腹な餓鬼めで濟ますとは、依怙贔屓の沙汰かと存じまする。

梅町　ハテサテ、覺えの惡い御上使。采女之介が詮議は勝家が役。其方の構ふ事ではないが。

氏直　また失念仕つた。もうフッツリと申さぬ。聞いた事は聞いたやうに、立歸つて我が君へ申し上げる分の事サ。

勝家　久次公を討つたる曲者、腹な子とは申されまい。

梅町　采女之介が久次公を、討たぬと云ふ證據は、即ちあの刀。

勝家　そりや又何ゆゑな。

梅町　武將を殺した程の曲者が、血の付いた刀の詮議になる程、これは重代の差し料と、我が手に科綱はすたわけ者があらうか。勝家、よしや采女之介が曲者なりとも、この館より預かりの、采女之介が忍び出て、御寢所へ入つては、第一其方の身の上ぢやぞ。

氏直　天晴れ御賢慮。預かりの采女之介、忍び出でし仔細があらう。勝家、科人はお身ぢやぞ。

勝家　身が忍び出したとは、なんぞ慥かな證據があるか。

氏直　その證據は、其奴が訴狀サ。

勝家　それゆゑに、采女之介は科人ぢや。
梅町　イヽヤ、その黑すにも詮議がある。
氏勝　詮議とはな、
梅町　すべて、黑すは阿蘭陀人、每年商ひの時連れて來るゆゑ、日本の詞、文字までも通じて、長崎にては日本人と、膝を並べて話しする者でなければ、船よりは上げぬが阿蘭陀の作法。それに最前より和言は用ひず、蠻語ばかりで人の耳を瞞ますは、正しくこれは合ひ詞。
ト黑ん坊、ギックリする。
サア、この座席に通詞はなくとも、よう知つた者がありさうなものぢやがなア。
ト思ひ入れ。
勝家　この席に彼れが心底を好く知つたと。ハテ、何者であらうな。
梅町　傾城長門、おぢや。
長門　御用でござりまするか。
梅町　アレ、あの者、其方見知つて居るか。
ト長門、黑ん坊が側へ寄つて、恂りして飛び退き
長門　ア、うるさい。又かいやい。
黑坊　くん〳〵てれつくきや〳〵ぼう。
長門　放さぬか〳〵、
ト捻る。
黑坊　アイタヽヽ、ひねってもらふ程猶有り難い。
梅町　ソレ、監物。
ト監物、引廻して
監物　御上意ぢや。動くな。
黑坊　きよろんぽへん〳〵。
トこの間、長門、采女之介に取りつき居る。
監物　どこへ。きよろんぽ、大騙りめ。
梅町　今の一言は日本詞。長門を見付け、思はず白狀した曲者。刀を持參し、采女之介に科塗る心。こりや賴み手があると見ゆる。サア、眞直に白狀せい。
黑坊　イヽヤ、賴み手もなんにもない。
監物　それが卽ち日本詞。
黑坊　サア、それは。
監物　腕廻せ。
皆々　サア〳〵〳〵。
黑坊　もう百年目ぢや。
トかゝる。監物立廻りにて、見事に捕り繩にて縛る。
此うち、九郎助、百姓大勢連れ出る。

百姓　親仁どの、なんであらうと村中は、こなたが立ちやぞや。
九郎　久し振りで村へ戻つて、和御寮達の爲になる事ぢや。云ふワ〳〵云ひすくめる。氣遣ひな事はない。おれに引添うておぢや。
ト百姓、種々やかましう云うて本舞臺へ來る。
侍ひ　ヤイ〳〵、騒がしい。下がり居らぬか。
九郎　イヤ、下がるまい。云ふ事云ひに來た親仁、一寸も後へは寄らぬ。
百姓　オヽ、願ひに來たのぢや。
釆女　ヤア、其方は九郎助ぢやないか。
長門　父さんぢやないかいなア。
ト花山和尙、少し思ひ入れあつて
九郎　二人ともに健であつたか。アヽ、嬉しやこれで落ちついた。
勝家　ヤイ〳〵、傾城が父さんと云ふからは、長門が親ぢやな。
長門　眞實の父さんでござんする。
勝家　ヤイ、身は島田大膳太夫。願ひあらばその役々の者に頼まぬぞ。

九郎　イヤ、こなさんに願ふのぢやない、久次さまの御前さま、北條氏直さまと御兩所の、御出でなさるゝと聞いて、無理に通つてお願ひ申すのぢや。
氏直　アイヤ、身が北條氏直。して、願ひとはなんぢや。
百姓　サア、氏直さまのお聲がかゝつたぞや。
九郎　よい〳〵。一から十まで云ひ並ぶる。コレ島田どの、こなたは又、なんの爲に釆女之介さまや、娘を擒にさつしやる。イヤ申し、私しは元小栗栖村の百姓、樣子がござつて九州へ引越し、娘を丸山に賣つて、それから方々を駈け廻つて。イヤマア、こんな事云うて居ては濟まぬ。高は釆女之介さまは主筋ぢやに依つて、取戻しに上つたところが、元の小栗栖村へ寄つて、村中一統のお願ひ。卽ち私しめは武智日向守を、竹鎗で突き留めた百姓でござります。
ト花山和尙、ギツクリする。
氏直　その百姓が、願ひとは何事ぢや。
九郎　私しは久吉公へ對しては、大忠臣と申すは、彼の武智を久吉さまが、粉微塵に追ひ立てさつしやれました時、なんでも若い時ではあり、御奉公は爰ぢやと、竹の先を尖らして、村中は力み返つて、落人遲しと待ち設けて居

りました。案に違はず裏の藪蔭に、馬乘りの大將軍、疲れた體で藪際に、馬を寄せて休んで居る。ヤレ落人ぢや取卷けと云ふうちに、後に廻つて藪越しに横腹すつぽん突き。七轉八倒の斷末魔を、胴骨へ突き拔く程に、抉り續けたが、それなりに苦しんで、泥田へ落ちたを見捨てにして歸りました。久吉公より御褒美として、小栗栖村は免された年貢なしの掟。釆女之介さま、お前に別れて仕樣はなし、内へ戻つて見たところが、娘は死ぬる。鄰は駈落ち。心覺えのこの竹鎗、不思議にと持つて、小栗栖村へ戻つて見れば、村中が皆々泣き叫び一統の願ひ。私しもお前の事、村の願ひと引請けて、この竹鎗の先を持つて參りました。

氏直　ヤイ〳〵。武智を其方が突き殺した話しは問はぬ。願ひの筋を申せサ。

九郎　イヤ、高は年貢なしと仰せつけられた村を、その島田どのが村中へ課役をかけて、三年の年貢を一度に取立て、否と云ふ者は水牢へ入れさつしやるゆゑ、村の者は作りもようせず、運上ばつかり取られて居る所へ行き合したゆゑ、願ひの腰が固まつた。奢りに長じて下を痛める根性で、釆女之介さまに詮議があるとて、大方我が科をあの人に塗つて、逃げる積りか、さうはならぬ。右の通り申し上げ、釆女之介さまの申し譯して、お家の起つ願ひをせうと思うて來た。また此方の村ばかりぢやない、段々と取上げた村中が願ひに來る。なんと皆、これでよいかいの。

百姓　よい段ぢやない。アイ、どうぞこれまでの通りに、年貢御赦免下されましたなら、有り難うござります。

氏直　ドレ〳〵、そろ〳〵身共が役目にかゝらうか。島田勝家どの、彼の者の申したに違ひはないか。

勝家　イヤ、その儀は。

氏直　久吉公朝鮮征伐の留主を考へ、御赦免地の年貢運上を取立て、町人百姓を虐げ、奢りに金銀を費す事、早先達て上聞に達したわいやい。

勝家　全く以て。

氏直　奢りでなくば、取立てた金銀は何所へやつた。

勝家　サア。それは。

氏直　もし貯へあらば、軍用金の拵らへなりと、久吉公にはお疑ひ。

梅町　その疑ひから、久吉公を討つたる場所へ、駈けつけぬ御不審。

勝家　すりや、この勝家を。
氏直　返答があるか。
勝家　サア、それは。
氏直　サア〳〵。家來ども、圍へ。
家來　やらぬぞ。
花山　イヤ、暫らく。御上使へ申し上げる。この詮議の儀、暫らく愚僧に預け下されうならば、有り難うござりまする。
氏直　大切な詮議、教化して悪人を善人にするなどと、出家の知つた事ではない。
花山　ハヽヽヽ、罪の疑はしきは輕きにせよとは聖賢の教へ。身不肖なれども久吉公の嚴命を承り、島田どのの人相を、考へ見るも詮議の一つ。善悪は沙門が一つの人相を以て、キッと分ちお目にかけまする。只管願ひ奉ります。
ト梅町に云ふ。
梅町　萬卒は得易く、一將は求め難し。願ひに任せ、沙門に預ける。必らず萬事大切に。
花山　委細畏まり奉つてござります。
九郎　釆女之介さまの身の上は。
釆女　御不審のかゝつた釆女之介、申し開くまでは餘所へ行かぬ。
九郎　そんなら、おれも爰に居りませう。
氏直　小栗栖の百姓ども、九郎助ともに暫らく扣へい。
百姓　畏まりました。
氏直　文字平、連れて行け。
文字　畏まつてござりまする。
梅町　黒す。これへ引かせ。
ト監物ハッと云うて、舞臺の向うへ引出す。
九郎　また爰へうせ居つたか。
梅町　島田勝家、その黒すは其方に預ける。
勝家　アノ、拙者に黒すを。
梅町　横文字の訴狀、刀の血、釆女之介を無理に科人に拵らゆる、サア、その黒すは其方に預ける。釆女之介はわしが預かる。とつくりと詮議ぢや。
勝家　ハッ。
梅町　サア、釆女之介、長門、奥へおぢや。
釆女　畏まりましてござります。
監物　文字平、百姓どもを連れて部屋へ參れ。
梅町　二人とも後に。

氏直　御前樣には皆々先づお入りなされませう。

ト唄になり、梅町、氏直、釆女之介、長門、奥へ入る。黑ん坊、文字平、九郎助、百姓ども、橋がゝりへ入る。黑ん坊、ウロ〳〵あたりを眺めて居る。勝家、思ひ入れあつて、黑ん坊が繩を解く。顏見合せ、行けと顏にて云ふ。黑ん坊、橋がゝりへ入る。花山和尙、顏見合せ、ザツとなる。

勝家　この頃聞けば、大雲院の客僧花山と云ふ者、天文易に委しく、人相を見て吉凶善惡を指すに、當らずと云ふ事なしと傳へ聞いた。いま黑すが繩を解いて遣はした島田が胸中、善と見ゆるか惡と見ゆるか、返答が聞きたい。

ト花山和尙、勝家が顏つく〴〵見て、思ひ入れ。

花山　覺えたる秘術の人相、萬人の胸中を見拔く我れ。天が下の大老島田大膳太夫どの、よもやと思ひ、最前より見る程、正しく謀叛の兆し顯はれ、主人を殺す相あるは、ハテ怪しやなア。

勝家　すりや、身共が主人を殺す相あるを見極めたか。

花山　毫も迷はぬ我が秘術。

勝家　沙門、覺悟して居るであらうな。

花山　ハヽヽ、高家を恐れ媚び諂らひ、包み隱すは出家にあらず、また他言も仕らぬ。この上一命を取らるゝとも、別に怨みも致すまい。

勝家　イヤ、そりや妄語、僞はり。

花山　僞はりとは。

勝家　身を捨つるを捨つるにはあらず、身を立て家を立て、起すべき沙門と見た目は僻目か。

花山　何がなんと。

勝家　某が見る人相は、斯くの通り。

花山　ハテ、人相御覽なさるゝぢやなア。

ト勝家、向うを睨む。

勝家　一旦思ひ立つたる大望、飜へさぬが武士の魂ひ。今宵の有樣、最早急に立てねばならぬやうになつたわい。

花山　ハテ、天晴れの骨柄。併し、朝鮮まで切り從へる眞柴の鎗先、一人の力では、なか〳〵心元ない。

勝家　哀れ大膳太夫が味方に付かばと、思ふ者は覺えない。

花山　良禽は木を選んで棲む。

勝家　その木は何者。

花山　櫻の花山。
勝家　ナニアノ櫻の花山となる。
花山　炭の折れか木の折れかと、云ふべき出家に。
勝家　して、その木は何れに。
花山　何國と定むる土地もなく、只一陽に兆す時を得て。
勝家　花は三芳野。
花山　人は武士。
勝家　受戒を授くる血判。
花山　受取るも日本半國。
勝家　すりや、貴殿は。
花山　シイ。
ト兩人、あたりを見て
花山　島田どの。
勝家　花山和尚。
兩人　後刻御意得ませう。
ト唄になり、花山和尚、勝家、別れ入る。梅町、出て思ひ入れあつて、爰にて雪洞出す事あり
梅町　いま二人が胸中を、探り合ふ詞の端。良禽は木を選んで棲む、その木は櫻の花山。ムウ、あの沙門が名は花山、花山の所を讀みと聲、

ト思案して
大領さまより仰せつけられし、これも櫻の高札。この花江南の所無なり、江南は都の南、一枝を切らば一つの指を切るべし。すりや城の南に當つて、櫻の咲きし所こそ、彼の者の隱れ家。一枝折らば敵も知れ、天下も治まると ある大領さまの思案の高札。花山和尚が詞と合體したは 名將と云はうか。ハテ、今に始めぬ御賢慮ぢやなア。
ト久五郎、右のうち、櫻の花一枝、花活けに活けて持つて出て居る。
さは云へ今は正月上旬。櫻のあるべきやうもなし。
久五　その花御覽に入れませう。
ト顔見合せ、思ひ入れ、あたりを窺ひ
梅町　相人久五郎、大領久吉公の御前にて、承はる詮議の筋は。
久五　文字は替れど、天永紅葉の例に任せ、この制札は天下の公用をば、直ぐに仰せ渡されたる事を含み、お書きなされし制札。筆を染つて書き出すは拙者。江南に當つて一つの庵を結び、時ならぬ櫻の盛り。一枝手折つて上覽に供へ奉りまする。
ト見せる。梅町、取上げて

梅町　ムウ、返り咲きにもあらず

久五　臺に房々たる色を結ぶは

梅町　正しう造り花。

久五　この木の元が詮議の手がゝり。

梅町　高札にしつくりと合うたからは

久五　大領の仰せつけられたる通り計らひませうが、して、
彼の三人の血汐は。

梅町　それも追つて遣はさう。

久五　釆女之介がこの制札の心を以て、一枝さへ切れば

梅町　その時こそは本領安堵。相人久五郎、この度の大事
に依つて、久吉公よりお墨付。

ト遣はす。久五郎、取つて披き

久五　久吉が譜代の忠臣、河内一國宛て行ふ。今より眞田
左衞門幸村と改名すべきものなり。

トヤア、と惘りする。

梅町　いよ〳〵忠心を勵んでよからう。

久五　體を藥研で御ろしても、二品の御寶を

梅町　一時も早う、あれへお行きやれ。

久五　櫻の正體、お目にかけう。

梅町　吉左右待つぞや。

久五　畏まつてござります。

ト忍び一人駈け出し

忍び　樣子は聞いた。この通り。

ト行かうとする。久五郎、引廻して締め殺す。

梅町　死骸を空井戸。

ト久五郎、ハア、と蹴込む。

久五　御前、首尾よう。

梅町　其方も首尾よう。

ト制札渡す。

久五　おさらば。

梅町　行きや。

久五　ハッ。

ト唄になり、久五郎、制札を持つて花道へ走り入る。
梅町、思ひ入れ。

梅町　マア、これでこちらは。

ト思案して、手を叩く。腰元出て、驅き、畏まりまし
たと入る。

時に今一つの事も、三人の血汐を。

ト思案のうち、勝家、奧より出て、顏見合せ

勝家　御前樣、火急のお召しとござるゆゑ、御寢所へ行て

見ますればお出でもなし。して、お召しとは、矢張り御詮議かな。

梅町　今宵三更の鐘を限り、云ひ譯立たねば其方の身の上。氏面が詞、表面は作れども、わしは心合點でないわいなう。

勝家　御譜代の勝家とて、お志し忘れは置かぬ。曇りなき身の云ひ譯は、腹掻ッさばく分の事と、覺悟極めて居ります。

梅町　オ、仰山な。腹々と、人がどのやうに思うて居やうも知りもせずと、其方の身の上が氣遣ひなばつかりで、わざと爰に逗留するも、心は其方の側に居たさ。ちつと推量してくれたがよいわいの。

勝家　久次公の敵、討ちたいと思し召さるも重々御尤も。

梅町　何云やるやら。この敵は所詮討たれぬと、錠御ろして居るわいなう。

勝家　大切な敵、討たれぬとな。

梅町　サア、それにつけても、其方に話したい事がある。なんと、わしが願ひを聞いてたもらぬか。

勝家　ナニ違背仕りませう。して、隱密の御用とはな。

梅町　アノ、それはな。

勝家　それは。

ト合ひ方になり、梅町、勝家の手を取つて、チッと尻目で眺める。勝家、思ひ入れ、手を脇へ挾み

勝家　これは。

梅町　惚れて居る。

勝家　なんと。

梅町　どうぞ叶へて。

トちつとして云ふ。勝家、氣を替へ、振り放し行かうとする。梅町、向うへ立ち

梅町　勝家。

勝家　なんと。

ト梅町、指をポンと切る。勝家、恟りする。梅町、勝家が側へ寄る

恥かしうて〳〵、身を切られるやうなれども、云ひ出すからはどうも。

ト勝家が顔を見て

可愛い事ぢやと思うて下されいなう。

ト渚の方、出て見て居る。

勝家　玆な人面獸心。久次公の御恩も忘れて。

梅町　畜生となりと犬となりと、どうなと云うて、氣に入

らずとも、其方の手にかゝつて死んでなりとも、たつた一度の情を。

ト勝家、突き退け、背打ちに叩き据ゑ

勝家　主でない、家來でない。詞を交すも穢らはしい。

ト行かうとするを捉まへて

梅町　コレ、武夫は物の情を知ると云ふ。

勝家　コレ、武士は物の情に、畜生の交はりは島田大膳太夫、マアすまいわい。

ト突き倒し、奥へ入る。續いて行かうとする。渚の方、出て、梅町が胸倉を取つて引据ゑ。

渚　コレ、御前樣、梅町さま。エヽ、こなたは〳〵。なんぢややら表向きは堅い顏して仔細らしい事の有り條。今の今まで斯う云ふ心であらうとは思はず、夫の身の上詮議の爲、逗留してござると、心を盡したが口惜しいわいなう。畜生と云はれうが、人でなしと云はれうが、そんならこれまで夫勝家どのに、心をかけて居たのぢやな。我が若樣の御恩を忘れ、こなたの氣に引比べ、勝家どのまで犬猫の名を取らさうと思うてかいな。エヽ、こなたは、こんな勿體ない事云ふやうには、なんとした天魔が魅入つて、淺ましい心にはおなりなされて下されましたぞいなう。

梅町　道理ぢや〳〵。面目ないと云はうか、恥かしいと云ふも、みんな云ひ譯の捨て詞。恥も恥辱も打込んで、これまで思ふ數々を、口へとては、えゝ出さず、心でくよくよ戀ひ慕うて、その苦しみが積り〳〵て、云ひ出した戀。我が若樣のござる間は面伏せ。もうこの世にござらぬからは、誰れ憚る事もない。思ひ切らぬ。どうも思ひ切れぬわいなう。

ト泣く。

渚　エヽ、こなたはなう。あんまりの事で、どうも仕樣がないわいなう。

ト九ツの鐘鳴る。

梅町　どうぞ其方の取持ちで、勝家に逢はしてたもいなう。

渚　エヽ、厚かましい。わたしの夫を、こなたのやうな畜生に、逢はす事はならぬわいなう。

ト行かうとする。立廻りにて、梅町を當て、入る。和らかなる合ひ方になり、勝家、そろ〳〵出て、梅町、起きて顏見合せ。

梅町　ヤア勝家。

勝家　御前樣。
梅町　南無阿彌陀佛。
　ト死なうとする。
恥かしい勿體ない事ながら、久次さまの御最期も上の空。後家になつたらこの戀の叶ふ瑞相と、現在の夫の御最期を、表には嘆けど、心は嬉しく思うて居るものを、常々の心遣ひ、よもや知らぬと云はれまい。もうなんにも云はぬ。せめて未來でなりとも叶へてたも。
　ト死なうとする。
勝家　コレ、死ないでも大事ない。
梅町　イヤ〳〵、どうも生きては居られぬ。
勝家　戀が叶うても死ぬるか。
梅町　ヤア。
勝家　骨髓に通つて忝ない。
梅町　ヤア〳〵、そりやマア、ほんかいなう。
勝家　嘘かほんかは、お前より拙者が疾から。
　ト梅町に取りつき、チッと締める。
梅町　ほんかいなう。
勝家　ア、面目ない。
　ト顔を扇にて隱す。

梅町　夢ではないか。
　トいろ〳〵せき上げる體にて、たゞ嬉しと抱きつく。
勝家　さうなされて下さると、身節が碎けるやうな。
梅町　コレ、それ程までに心があるなら、何ゆゑ色目にも出して下されぬ。男と云ふものは、ほんに氣强いものぢやなう。わしにばつかり
勝家　イヤモウ、恥しうてこの顏が。
梅町　其方ばかり恥かしうて、わしや恥かしうはないか。
そりやあんまり、胴慾ぢや〳〵。
　ト勝家、燭臺の火を消し、梅町の側へ寄る。黑ん坊出て、聞き耳立てる。梅町、勝家が手を取つて、思ひ入れある。しつくりと抱きつき
梅町　顏も見せずに、エヽ、辛氣な事ぢや。
勝家　暗いので物も云はれる。御前樣、日頃から聚樂の御所へ相詰め、晝夜相勤むるは、忠義ばつかりと思し召すか。
梅町　そんなら其方もわしに。
勝家　御前樣、眞實勝家に。
梅町　現在我が君樣の御最期を、喜ぶ心を推量しや。
勝家　すりや、眞實帶紐解いて

梅町　寢てたもるか。
勝家　寢いでわいなう〳〵。
ト抱きつく。黒ん坊、堪えられぬ思ひ入れ。
黒坊　ヨウ〳〵勝家さま、こちやどうも堪えられぬ。
ト兩人愕り。
梅町　さう云ふは何者。
ト此うち、渚の方、窺ふ。
黒坊　暗がりに黒ん坊、日頃のお願ひ、御遠慮には及びませぬ。あなたから暗がりの据ゑ膳とは有り難い。併し、この暗さではなア。
勝家　仔細あつて黒ん坊めには遠慮はない。御前樣、三年以前、お能を勤めました時の事御存じか。
梅町　その時其方は太鼓の役、誓願寺の夕影の頃が、殊の外お氣に入り、その男振りが猶身に染む程、可愛かつたわいなう。
勝家　その時正面の御簾上げさせ、裲襠姿の美しさ。ゾツとする程思ひ込んで、日々の御前勤め、久次公と月花を、一緒に詠めてござるを見て、ア、美しやなと登城の度々、夜に增し日に增し戀慕の闇。今天下の大老となつて、何暗からぬ勝家が、心に任せぬ事はこればつかりと、思ひ廻せば廻す程

梅町　武將久次公が亡いならばと、思やつた事もあらうなう。
勝家　勿體ない、塵が積つて山となる。御前樣。
梅町　ヤア。
勝家　拙者めはこなたに、嚴しい心中立てましたぞや。
梅町　この心中はこの通り。
ト一通取出す。
勝家　この一通は。
梅町　横文字の文通。宛名はなけれど島田の家の判。
勝家　その一通、どうしてお手には。
ト黒ん坊、體を撫で廻す。
梅町　久次公の御最期の場所に。
勝家　ムウ、それを今まで。
梅町　諸大名の會合に、詮議の手がゝりを探せども、隠しおほせたこの一通は、なんと嚴しい心中であらうがの。
勝家　戀から起る武士の慾心、毒喰はゞ皿と、この日の本を勝家がと、思ひ込んで忍びを入れ、その時渡した釆女が一腰。
黒坊　受取つて御前へ忍び、なんの苦もなくこの黒すが。

梅町　久次公は、そんなら其方が。

勝家　シイ……最前沙門が人相伺ひ、主君を殺す相ありと云ひしが、その根本はこの戀ゆゑ。忍びの術を得たるを幸ひ、黒すに云ひつけ、久次公を討つて捨て、その科を釆女之介に塗りつけんと、思ひ込んだる事ぢやもの。この念が屆かいでなんとせう。

トこの間、梅町、そろ／＼表の方へ行く。渚の方、手燭を裲襠の内へ隱し窺ふ。此うち、花道戸屋の小口に、上下侍ひ四人、梅町の先に提灯を持ち、戸屋の前に中腰になつて、キッと詰めて居る。梅町、花道中程まで行き、勝家、暗がりの思ひ入れ。

勝家　御前々々。

ト尋ねる。黒すも尋ねる。渚の方に行き當る。

御前樣、いよ／＼二世までの夫婦でござる。品に依つたらば久吉も。

ト渚の方、手燭さしつける。兩人、恟り。

渚　勝家さま。

勝家　すりや、最前から。

梅町　久次公を討つた曲者が知れた。

勝家　ヤア。

梅町　謀叛人は勝家。

ト勝家、それでも行かうとする。渚の方、勝家の胸倉を取り

渚　御前樣、お赦されて。

ト勝家が振り放すを取りつくを引きしやなぐり

エヽ、知らなんだわいなう。

ト云ふうち、黒ん坊、梅町にかゝる。ちよつと當てる。黒ん坊、縛げる。

梅町　皆、供せい。

侍ひ　ハア。

ト向うへ入る。勝家、キッと見て睨む。

勝家　妻戀ふに在所を知られうと云ふ譬へ。鹿を追ふ獵師山を見ず。エヽ、口惜しやなア。

渚　御主人を殺す大惡人とは知らなんだ。エヽ、こなたはなう。

勝家　ほッついて有無を云はさず。さうぢや。

ト行かうとする。渚の方、留める。立廻りあつて

渚　追ひついて御前樣を、殺さうと云ふ心ぢやなア。

勝家　知れた事。爰放せ。

渚　イ、ヤ、放さぬ／＼。

ト揉み合ひ、立廻り。

勝家　エ、面倒な。もう絶體絶命ぢや。

ト諸の方を殺す。諸の方、ウンとこける。遠攻めになり、勝家、キッと見得。黒ん坊、惻りして居る。

勝家　黒す、ヤイ、コリヤ、死骸片付けい。

黒坊　畏まりました。

ト片付ける。

勝家　我が叛逆顯はれしゆゑ、取卷きたるあの遠攻め。斯樣の事もあらんかと、五節句儀式に倣らへ、五月の兜はスワと云はゞと用意し、旗指し物武具馬具まで、一切に備へあれば、門々を固め討手を防げ。この勝家は先つ上使に立つたる北條氏直を討取り、軍の手始め。其方は矢の用意せい。

黒坊　畏まつてござります。

ト走り入る。勝家、こなしあつて、奥へ駈け込まうとする。監物、采女之介、左右に別れ、取つて、立廻り。

監物　動くな。

勝家　コリヤ、采女之介、岩城監物。うぬらも久吉の廻し者ぢやな。

監物　云ふにや及ぶ。おのれ天下の大老たる身を以て、萬民を虐げ苦しめ、軍用金を貯へる條

采女　御上聞に達し、實否を糺せとの嚴命を蒙むり、入込みしも久吉公の御賢慮。

監物　姿をやつし入込みし我れは、朝鮮國へお供したる、鹿島權藤太秀盛。謀叛人島田勝家、尋常に腕廻せ。

勝家　イヤ、小癪なうづ蟲めら。久次を討取つて、天下を掌握するこの勝家。追ツつけ大領久吉も、某が刀の錆。首を洗つて待つて居よと云へ。

采監　イヤ、慮外な奴の。

ト一間より

文字　汝が討つたる武將久次、島田勝家、對面してくれん。

ト奴の形にて、後より、氏直、付き出る。矢張り靜かに遠攻めなり。

勝家　ヤア、最前は面體に痣を拵らへ、文字平と名乗りたる奴。痣も取れて、よく見れば久次。こりやどうぢや。

文字　其方が心底、合點ゆかずと思ふより、面體似たる近習櫻井頼母を、久次に仕立て置きしに、誠の久次と心得、討取りしは汝が天命。痣を拵らへ、魚の鱗を眼中へ入れ、眇目となつて聲を替へたれば、見紛ひしは尤も。今斯う知れた謀叛人、なんと思ひ知つたか。

勝家　ムウ、すりや久次と思ひ討取りしは、櫻井頼母であつたよなァ、エヽ、無念やなア。

氏直　汝が胸中探らん爲、今日の上使、久次公を下郎と仕立て、この館へ入込み樣子を見るに、梅町御前の色香に迷ひ、おのれが謀叛をおのれと顯はす運の盡き。最早遁がれぬ、覺悟せい、

文字　いま久次がこの形は、取りも直さず父此下藤吉、眞柴の系圖顯はす吉例。これも偏へに父大領の謀り事。斯く八方を取圍めば、所詮遁がれぬ網代の魚。併し忠功の家筋に免じ、切腹を許しくれん。潔く自滅せよ。

氏直　異議に及ぶと我れらが

監物　踏みつけて繩かけうか。サア〳〵どうぢや。

トこの時、鐵砲の音する。久次の文字平、ゥンとこける。釆女之介、監物、惘りする。

釆女　南無三、久次公を。

ト一間より。

花山　けい〳〵きつたしおんらいさんばら〳〵。

トどろ〳〵にて、釆女之介、監物、悶絶する。

勝家　これは。

ト花山和尙、初めの形にて、種ヶ島提げ出る。

花山　思ひ立つたる大望、暫時に露顯し、絶體絶命の場所と見たるゆゑ、久次を討つて捨てしは、最前の人相、謀叛の骨を見拔いたる沙門が寸志。勝家、安堵召されい。

勝家　ハヽ、心地よやなア。

氏直　花山和尙、まんまと首尾よう參りました。

勝家　ムウ、すりや北條氏直も、謀叛の一味であつたよな。

氏直　兼ねて某し謀叛の兆し。この度都在番を幸ひ、久吉親子を討取らんと思ふより、花山和尙の味方となり、聚樂の御所を燒討ちにせんと計る折節、何者とも知れず久次を討つたりとの注進、これ幸ひと樣子を見れば、久次は安泰。島田勝家評定の時、駈けつけぬは樣子あらんと、久次を蕩し込み、下郎に姿をやつさせ、上意ごかしに其方を科に落し、久次が最期、日頃の本望。エヽ、喜ばしやなア。

花山　最前罪に取つて落し、殺さんと思ひしに、不思議なる謀叛の樣子。戀に迷ひ、叛逆の思ひ立ちし勝家、我が幕下に屬し連判狀に血判せい。ヤア〳〵アフリ、國のはりしやは居ないか。連判持參せい。

黑坊　ハア、。

ト連判狀を持ち出る。勝家、見て
勝家　すりや、黑すも先達てより一味せしよな。
黑坊　云ふまでもなく、其方が下知に從ひ、忍び入つて久次をば、味方に招かん花山和尙の謀り事。一時も早く血判々々。
ト一卷差出す。
勝家　血判いたし味方に付からが、この勝家を遁がすまじと、四方より攻め寄するゐの軍勢。
花山　イ、ヤ、その儀は氣遣ひない。鐵桶の如く圍むとも、圍みを引かす我が妙術。眞柴が軍勢退くるは案の內。けい〳〵きつたしおんらいばら〳〵。
ト印を結ぶ。ドロ〳〵頻りに鳴るうち、エイ〳〵オ、と遠攻めを打切る。
勝家　ハテ、天晴れの妙術。して、謀叛を思ひ立たれし、花山和尙の本名はな。
花山　先年小田信長を討つて、三日天下を治むると雖も、久吉が大軍に打負け、小栗栖にて落命せし、武智日向守が悴たる、左馬五郞光義とは我が事なるわい。
ト帽子・衣を脫ぎ、下は裁き髮かつらになる。九郞助、そろ〳〵出て見て居る。

勝家　今まで出家の形と見えしが、忽ち異形の姿となりしは、ハテ、怪しやなア。
花山　我れ山司金右衞門と云ひし時、國々島々を巡つて、數々の寶を奪ひ取り、榮耀を極むると雖も、武智の悴なる事を知らず、仇に暮らせしこの年月。女房が忠死に依つて、我が俗性知つたる上、朝鮮の王亡靈となつて、三年に限る我が妙術を與へたれば、最早天が下に敵する者はない。快く血判せい。
九郞　ヤア、われは聟の金右衞門。叛逆人の樣子も何かも皆聞いた。注進して釆女之介さまの出世の種。さうぢや。
ト行かうとする。花山利尙、印結ぶ。ドロ〳〵にて、九郞助、苦しみ轉ける。和尙、踏まへつけ、九郞助が竹鎗を取る。
花山　親武智を竹鎗にて突きとめたる土民とも知らず、聟となり舅となり、敵を側に置きながら、倶に天を戴きし我が無念。父が最期の苦しみを、思ひ知つたか老ぼれめ。
ト和尙、竹鎗にて酷う抉る。
九郞　エ、、口惜しや。
ト苦しみ死ぬ。

花山　ソレ、兩人。
　ト九郎助を突きやる。
氏直　軍始めの血祭り。
　ト兩人、久次九郎助が首を一度に打ち落す
勝家　やがてこの日本は
氏直　武智公の一天下。
兩人　おめでたう存じまする。
花山　蠻國を往來したる通路を以て、異國の島々を味方に付ける我が計略。連判取るは黑すが役。仕負ふせしか、なんと。
黑坊　仰せを受けて蠻國へ、密々通路して、異國の一味連判は取り置いた。堺の沖へ追ひ／＼兵船相見えまする。
　ト長門、出て窺ふ。
花山　其方は直ぐにこれより、堺の浦へ立越え、異國の者に一時にかゝれと下知をなし、有無を云はさず都へ押かけ攻め登れ。
黑坊　畏まつてござります。
氏直　ア、暫らく。堺津の國のうち、前々に關所の据つて、なか／＼容易くは通られぬ。案内知らぬ異國の者ども、船場の關所が第一心元ない。

黑坊　誠に。
花山　コレ、爰に奪ひ置きたる五三の旗。この旗を押立て關所を通らば、久吉が軍勢と心得、關所を通すはいと易い。
黑坊　朝鮮に殘し置いたる日本の軍兵と云はゞ、一杯喰つて關所は容易く。お氣遣ひなされますな。
　ト受取る。
長門　その寶ゆゑ夫の難儀。將監さまも其方が殺したな。舅の敵。
　ト和尙に懷劍にてかゝらうとする。ドロ／＼にて後へ寄る。勝家、長門が首切る。
黑坊　エヽ、口惜しい。せめてこの胴なと舐つて腹癒よ。
氏直　急ぎの御用、早く行け。
黑坊　畏まりました。
　ト長門が胴を擔げ入る。
勝家　三つの首は三千世界。
氏直　吉左右めでたい。
花山　異國の兵、船着次第、直ぐに久吉が館へ攻め寄せて、日頃の鬱憤。父が存念。術を與へし朝鮮の志しを立てさせてくれう。ハテ、心地よや、喜ばしやなア。

ト此うち勝家、三つの首を一つ所へ寄せ、血汐を鉢へ受け、右の櫻の枝を鉢へ入れると、ドロ／＼になり、和尚、不思議なる見得。

ハテ訝かしや。怪しき臭氣、我が體を絡むは、ハテナア。

トどろ／＼にて、活けある櫻散る仕掛けにて、バラ／＼となる。鉢の中より、掛け煙硝上る。

勝家　さてこそ、時ならぬ櫻の盛り。血汐に取られ散り失せしは、犬死でない三つの命。

ト萬歲才若、德若、奧より出て、

才德　詮議の落着大方に

勝家　相知れた。ソレ、合圖の狼煙。

才若　天下泰平。

德若　朝鮮追伐。

ト兩人、狼煙上げると、遠攻めになり、德若、素袍脫ぐと、下に小手脛當。釆女之介、監物、一時に起きて

皆々　動くな。

ト和尚を取卷く。

花山　こりやどうぢや。

勝家　武智が悴左馬五郎、術を以て官符の綸旨、五三の旗を奪ひ取つたる事、天文博士が訴へ。この術は朝鮮の王、亡靈となつて傳へたれば、その魂魄の殘る事三年にして、なか／＼人力の及ぶ所にあらず、この術を挫くには、午の年の者の頭の血を以て穢せば、亡靈の極陰陽の盛んに抑へられ、消え失せる事疑ひなしと、安倍の晴明が古き曆の年號三つに分け出し、五節句の儀式を三度して、三人の午の年、一ケ年に一人づゝ犧牲に供へ、聚樂の御所にては三年目につゞめる、御祈禱あるとは知らざるか。

花山　すりや、我が術を挫かん爲の謀計よな。

勝家　おんでもない事。

花山　人間五體を見通す我が妙術。正しく主を殺し、叛逆の相ある勝家。ハテ、訝かしい謀計に落入つたよな。

勝家　愚か／＼、某が叛逆人と見極めたるは、汝が親の日向守が、骸骨を所持したるゆゑ、主殺しの叛逆人と、人相に顯はれしは、この髑骨を所持せしゆゑ、武智が惡相サ。

光秀　すりや父武智が骸骨を懷中したか。

釆女　其方の女房が所持したる骸骨差上げ、命を捨てた九郎助が忠義ゆゑ、某は本領安堵。

才若　萬歲となり入込んだは、岸田治部少輔道成。

德若　某は大矢勘解由義行なり。
監物　博士の秘文を懷中したれば、一人も胸中を悟る事は思ひも依らず。
道成　最早遁がれぬ左馬五郎。
皆々　覺悟々々。
花山　小積な奴等。眼前の謀計は廻らすとも、三年の年數滿たざるうち、汝等が計らひにて、この術の消ゆべきや。雲に跨り風に乘り、三千世界を三年に併吞する。惡く寄つたら蹴まくるぞ。
　ト氏直も睨みながら慄ふ。
氏直　どうやら心細くなつた。兎角この場を切り拔ける妙術を、敎へて下されいなう。
花山　氣遣ひな事はない。出口々々は外國の忍びの者。この館も取卷かせ置きたれば、指も差させぬ。日本の大將久次を、鐵砲で擊ち殺したれば、大將のなき小雀等、何程の事があらうふぞ。
氏直　エ、、黑すめが早く歸り、吳國の者ども、一統に攻め上つてくれいでなア。
　ト辛い顏して慄うて居ろ、ト一間より
久次　誠の久次對面せう。

　ト久次、大將の形。黑ん坊、胴丸の上に着付けの上下にて出て
氏直　ヤア、こりや久次、黑すのその形は、こりやどうぢや。
才若　汝等一味の黑すめは、昨日討ち取つて捨てたわいやい。
氏直　ナニ、黑すは討つて捨てた。
德若　それゆゑ、我れ〳〵姿を替へ、入込んだのぢや。面體は漆を以て黑くなし、討殺したる黑すめになつて、入込ましたるは小西彌十郎。
勝家
氏直　ヤア、。
久次　最前鐵砲にて擊取りし久次は郡主膳。皆秘文の守にて、胸中は知るまい〳〵。
黑坊　先年某、堺の町人小西如情が忰ゆゑ、韃國の事に委しく、五體に漆をさいて、入込んだ。黑すめは昨日捕へ、何もかも白狀させ討ち殺した。最前五三の簾を渡したるは天命。なんと思ひ知つたか。
勝家　サア、今一種の官符の綸旨。
皆々　早く渡せ。
氏直　段々締め寄すやうになつて來たが、どうぞ首尾よう

落ちたいわいの。
花山　官府の綸旨は、妙術を以て封じ置きたれば、おのれらが手に入らうか。術を挫かんなんど片腹痛し。氏直、氣遣ひな事はない。身共にヂッと引添うて居よ。
氏直　切り抜けさして下されいなう。
皆々　繩かゝれ。
トかゝる。花山和尚、印結ぶ。ドロ〳〵にて、四人タヂ〳〵と、後へ撞と坐る。
花山　氏直、氣遣ひすな。
氏直　これぱつかりが、まだしもぢや。
花山　久次、われを。
ト久次、九郎助が首を突きつけ、タヂ〳〵と後へ寄る。また勝家にかゝる。勝家、長門の首突きつける。また後へ寄る、
勝家　踏み据ゑて繩かけい。
皆々　やらぬ。
ト取卷く。
花山　けい〳〵きつたしぢんらいきんぼら〳〵。
どろ〳〵にて舞臺の燭臺差込み、花道の蠟燭一面仕掛けにて消え、眞暗になる。

皆々　これは。
勝家　彼れが術未だ殘りあるうち、暗ましの秘文、搦め捕れ。
ト皆々探り、捕つたと云うて同志打ちして名を問ひ、又探り當て、立廻りあつて騒ぐ。尋ぬる思ひ入れ。この間は皆々少し立廻りあつて、右のうち和尚、氏直が手を取つて、花道へ行く。氏直探へながら付いて行く。好き所にて
花山　氏直、其方は我が隠れ家へ行て、櫻の木を燒き拂へば、官符の綸旨は灰になる。
氏直　隠れ家の所も知らず、この遠責めが、どう拔けられう。
ト怖がる。和尚、一卷差出す。
花山　なんと、心持ちは。
氏直　今の一卷懷中へ入れるや否や、六根堅まつたは、世界我れ一人の如し。魂ひ金鐵の如くなつたわい。
花山　それこそ亡靈に傳へ請けたる妙術の一卷。所持すれば通力自在。
氏直　心に堪ゆる貴殿の隠れ家。
花山　早く綸旨を燒き捨てい。

氏直　して、こなたは。
花山　徒黨を招き御所を夜討ち。
氏直　尤も。
花山　ぬかるな。
氏直　ござれ。
ト花山和尚、靜々戸家の内へ入る。氏直、花道の眞中に居る。
徳若　曲者は。
皆々　相知れませぬ。
勝家　松明持て。
ト奥より、藤内、外に侍ひ二人、陣羽織に銘々松明持ち出る。と舞臺の火殘らず灯る。
皆々　銘々持參してござりまする。
侍ひ　仰せつけられました三人の血汐の松明。
氏直　妙術の一卷、まんまと首尾よう。
勝家　後藤又兵衛、大儀々々。
氏直　最早術も消え失せたる、印は灯火。
徳若　これより官符の綸旨ばかり。
勝家　久五郎に申しつけある。氣遣ひない。
ト唐人大勢出て

唐人　左馬五郎どのゝ術を挫くからは、この家の奴輩、討つて取れ。
ト大勢ドンチャンにて、皆々切り結び入る。これより黒裝束の相手にして、徳若才若、大タテあつて追ひ込む。返し、二重舞臺引分ける。
造り物、向う金襖、欄間付きの二重舞臺を押出す。内に、勝家、陣羽織にて、床几にかゝる。久次も床几にかゝる。前に長門の死骸、釆女之介監物居る。
勝家　天文の博士、占部淸澄老人に依つて、年號を三つ觸れ流し、月を以て年に替へ、日を以て月になす稀代の加持。勝家が館の儀式も、五節句に年中行事を縮め、三年を一時に、立て申したる三人が忠義の最期。然るにこの死骸、時を移せども温まり冷めず、屍の呻くは、正しく懷胎の忰、臨産の時を得しは疑ひない。釆女之介、早くその死骸の腹あばいて見やれ。
釆女　畏まつてござりまする。
ト死骸の腹を割く。赤子の聲して、三つばかりの子、眞赤になつて歩く。
ヤア、生れて直ぐに手足を伸し、駈け廻るは、正しく鬼

子。エ、、淺ましき誕生ぢやなア。

ト勝家、つく／＼見て

勝家　ハア、、奇妙々々、全く奇怪の業にあらず。これ即ち天下泰平國土安穩の平産。喜べ／＼。

監物　斯程稀有の平産が、泰平の誕生とはな。

勝家　武智が妙術、三人の血汐を以て計らふとは雖ども、彼れは不思議ある邪法。此方は不思議なき正法。三年の術消ゆるか消えざるか、日本神國の不思議を試す我が君の威勢。この悴、疵口より出生せしに、自然と三歳の形を現はすは、我れ／＼も知らずして、はや年は月になり、月は日になり、日は時になり散じ、三年の數立つたる印。今こそ武智が妙術ば消ゆべき印、違ひはない。日本の威徳武將の勳し。エ、、忝なや、有り難やなア。

久次　成人の後は、天晴れの武士ならん。我が譜代の臣下として、高知を別に宛て行はん。

勝家　母が名は傾城長門、其方が苗字の喜村と、母が名を一つに合せ、成人の後は喜村長門と名乘るべし。眞柴の忠臣。オ、、頼もしい／＼。

釆女　エ、、有り難い烏帽子親。喜村長門と名を呼んで、御用に立てる我が悴。

久次　かゝる奇瑞を見る上からは、相人久五郎、役目も仕負せて歸るであらう。

勝家　八方を取圍めば、例へ飛鳥の翼あるとも、切り拔けること思ひも依らず、久次公御治世は萬年。アヽラ喜ばしやなア。

返し。

右のなりにて、舞臺、後へ返す。

造り物、下より櫻の座敷上がる。久五郎、櫻に血汐をかけて居る。梅町御前、長刀突き、鉢卷にて立ち居る。

久五　いま早打が持參せしこの血汐は、三人の頭血を合せし、穢れに花の散るは

梅町　官符の綸旨、櫻の下にあるに極まる。眞田、掘りや。

ト久五郎、綸旨を取出す。

幸村　これこそ神代より傳はる、護國の道路の綸旨。

梅町　寶は揃うた。エ、、有り難い。

返し、この道具また後へ下がる。

造り物、結構なる御殿をセリ上げる。花山和尚、獅

子皮にて、衣の下に着込み、腹卷き、眞中に居る。
兩方に氏直、德若、才若、居る。

德若　何國まで逃げるとも、左馬五郎。

才若　遁がれぬ所ぢや。尋常に

皆々　繩かゝれ。

花山　空には日月星の三光、三つ並んで顯はれしは、さては最早三年の年數、彼れが計らひに依つて經つたるか。

氏直　久吉公に先祖の恨みある、北條氏直と云ひしは、誠は後藤又兵衞元次、計りに計つて妙術の一卷は、血汐に穢し燒き捨てたぞやい。最早覺悟せい。

花山　我が大望今月今日、一時に滅ぶるか。エヽ、殘念やなア。

返し。

この形にて元へ戻り、久五郎、梅町を見せながら又元の勝家の居る所になる。

勝家　遠責め近付きたれば、最早大領さまもお出でなさる。叛逆人に疵つけぬやう、

ト此せりふ何なりとも云ふうち、又元の通り。久五郎、梅町の所になる。兩人何なりともせりふ云ひ〱、又元の和尙を取卷きし所になり、これは三段をしつかりと見せる爲なり。

道具とまる。

皆々　サア〱、叛逆人、覺悟せい。

花山　寄つたら蹴殺すぞ。

ト口上、東西〱、日も晩景に及びますれば、先づ今日はこれぎり。と打出し

幕

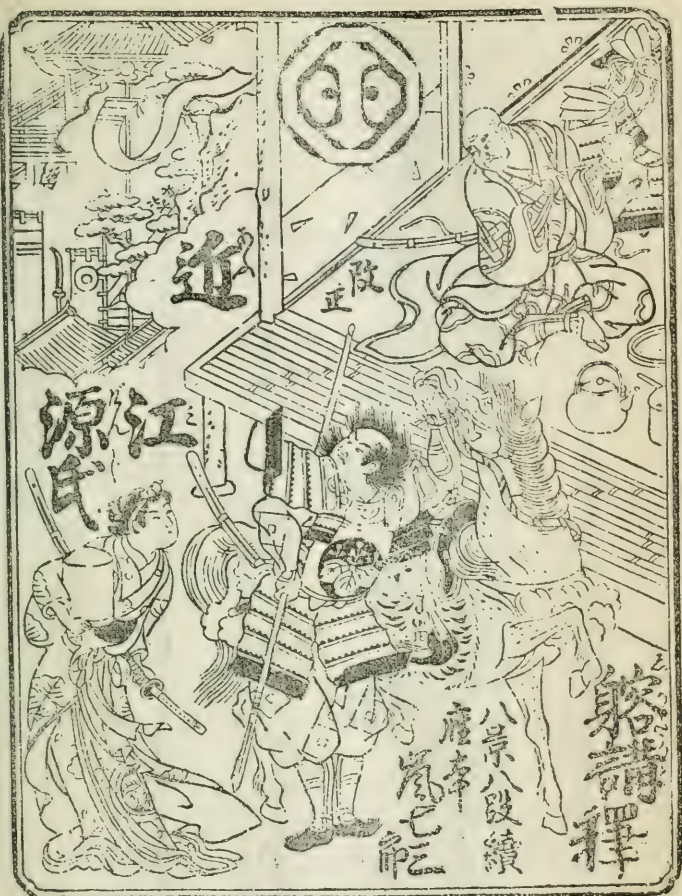
三千世界商往來（終り）

今度片岡造酒頭爲條文中候處
濡の水上は宇治の方の花香にはつたりの茶請は
澤庵漬の功者四斗樽に益五斗兵衛が酔興

近江源氏[身+容]講釋

八景
八段

芳墨令披見候仍以仰越候難題之旨
さつま芋むし返に燥はまつた段道の身請は傾城
をお姫さまの御入部とは永來鐵砲佐々木が計略

再　演　繪　番　附　表　紙

近江源氏鞜講釋

大序　鎌倉御所の場

役名――北條相模守義時。文覺上人。比企判官頼員。片岡造酒頭春元。漁師の女、おなべ。同、おしま。同、おふな。同、おかく。

造り物、通りの二重舞臺、向う一面の金襖、半簾。眞中に二疊臺、これに北條義時、金烏帽子裝束にて居る。文覺上人、僧衣にて片脇に居る。比企判官、素袍立烏帽子にて下の方に居る。その外大名大勢、烏帽子素袍にて、双方に並よく居る。天王立にて、幕明く。

〽梅林を僞はりて隨軍を泡し、鳳角を吹いて萬卒の英氣を奪ふ、むべなるかな良將帷幕の元、千里の外に凱歌を唱ふ、北條前の遠江守平の時政、威權四海に上もなき、今の鎌倉山颪、草樹も靡きし時津風、頃は建長三年八月上旬、二代の武將左衞門の守頼家、江州坂本に於て御謀叛の催しありと、間者の訴へ隱れなく、時政の命に依つて、嫡子相模守義時、評定の間に出で給へば、當家の歸依僧文覺上人、僧衣ながら義時を助け、昵近の武士比企の判官頼員、袖を連ねて結ばるゝ。

ト銘々よろしく平伏する。義時、こなしあつて

義時　何れも出仕、大儀々々。方々も存じの通り、將軍逝去の以後、左衞門の守頼家、御母公宇治の方諸とも、都に安座を占むるところ、この度江州坂本を居城と定め、北條家を亡ぼさんと企てある由、日毎の注進なれど、正しく頼家は頼朝公の惣領なれば、忽せに打置くといへども、嫩を刈らずんば斧を用ゆるの悔あらん。方々の所存、殘さず申されてよからう。

〽凜然たる義時の、詞に判官進み出で。

判官　坂本の城へ籠つた頼家公は、頼朝公の胤とは申しながら、宇治の方の腹から出た妾腹。僻み性根があつて、時政公の威勢を嫉み、鎌倉を亡さんなどとは、大佛の柱を蟻がせゝると申すもの。短兵急に討手を上し、頼家親子が首を、由非ケ濱に曝すが、萬民の見せしめでござり

ます。

へおのが無法に君臣の、禮儀忘るゝ傍若無人、文覺御前に打向ひ。

文覺　賴家公北條を怨み、叛逆の聞え隱れなければ、直ちに討手を上し、攻め亡ぼさん事は易けれども、さある時は時政公には、君臣の禮儀を、思し召さずと申すもの。賴家の逆心を止めん爲、先達て片岡造酒頭を招き、申しつけ置いたる有無の返答、今日義時公の御前に於て致させませう。

義時　片岡造酒頭は賴家が家來なれど、鎌倉の威勢と、父時政が仁心に押へられ、鎌倉に從ふ。今日この所へ招き、有無の返答いたさせてよからう。

判官　油斷のならぬ造酒頭。今日の評定にも、お次まで呼び寄せ置きましてござりまする……ナニ、奏者の面々、片岡造酒頭を、御前へ通し召されい。

大名　ハア、。

ト一人入る。

へ奏者の知らせに次の間より、京家にその名隱れなき、片岡造酒頭春元、仁義も厚き立烏帽子、大紋の袖たぶやかに、遙か末座に平伏す。

造酒　ハツ、お召しに依つて片岡造酒頭、出仕仕つてござりまする。

ト下座より出て、こなしあつて

ト平伏する。義時、こなしあつて

義時　造酒頭、先達て申し渡せし有無の返答、時政の仰せを猶豫に及ぶは、鎌倉を蔑ろの致し方。但し逆心の計略調ふ間、數日を延し、事を計らん企みなるか。返答はナナなんと。

へなんと〳〵と猛將の、烈しき詞ちつとも憶せず。

造酒　こは義時公のお詞とも存じませぬ。時政公より主人賴家へ、仰せ越されましたる有無の返答とは、時姫を戻すか、宇治の方を心に從はすかとの御難題。兩方ともに大切の儀ゆゑ、造酒頭も猶豫いたし居ります。

文覺　有無の返答なくば、軍勢を差向け、賴家親子を討取る評定。但し造酒頭も江州へ立歸り、時政公へ弓引く所存か。さつぱりと返答なせ。

造酒　ハ、、、賴家公微弱にして、武將の器にあらざるゆゑ、時政公へ奉公を願ひ、主從の杯まで下し給はる造酒頭。鎌倉の御家來が、坂本の事が如何やうになりませうと、構ひませうやうがござらぬ。この上ともに忠義を

勵み、恩賞加增の御願ひ、何事なりとも仰せつけられ下さりませう。

義時　此方に從ふ所存ならば、父の心をかけられたる宇治の方を、差上げうとはなぜ請合はぬ。

文覺　時姫の緣切つて返すか、さもなくば宇治の方を差上げるが、奉公の手初めサ。

造酒　宇治の方を差上げませうと申した事ゆゑ、時政公の御機嫌に入り、相勤むる造酒頭。併し時政公は、宇治の方とは云はゞ姬、貞女兩夫に見えずなどゝ、道を守り承引せぬ時の工風いたし、それゆゑ猶豫仕ります。

判官　どこへ〳〵。先達て噂のある、男狂ひの助平後家、宇治の方の身持ち、淫亂惰弱と聞えてはあれど、時政公もお年の上、その淫亂がお望みとある。有り難いと思うて、早く鎌倉へ引摺つて來やれ。

造酒　ヤア判官、詞が過ぎる。宇治の方を淫亂惰弱とは、出る儘の雜言、扣へ召され。

判官　イヽヤ扣へまい。宇治の方の身持ち、江州比良の山の手へ下屋敷を建て、門前を通る程の者は、袖乞ひ非人はつち坊主までも、男でさへあれば引摺り込んで、お寐間の相手、夜晝なしのふんすん〳〵、湖をかへほすと、東海道で隱れない。

造酒　まだ〳〵慮外を吐くと容さぬぞ。

　ト きつと云ふ。

判官　ヤア、疑ひのかゝつた京家の武士、判官に向つて容さぬと云うて、なんとする。

造酒　その舌の根を切り下げて

　ト 反り打つ。

判官　小癪な事を。

　ト 双方キッとなる。

文覺　待つた。御前に於て尾籠の振舞ひ。何程に陳じても、宇治の方の放埒は隱れないぞ。

造酒　三衣を着し、長久武運の加持祈禱を相勤むる御出家に、似合はざる女の采配。して、宇治の方を淫亂惰弱とは、證據あるか。

文覺　ヤア、文覺をさみする片腹。證據を出して面縛させん。ソレ判官。

　ト 判官へ思ひ入れ。判官、下手に向ひ

判官　訴訟の者、これへ出ませい。

〽證據あるかと一口に、やり込めれば急き立つ文覺。

ト内より。

皆々　ハアヽ。

〽ハツと白洲へ賤の女ども、近江蕪の丸顏を、おたがの生れ杓子づら、蜆貝かやどれ合ひは、ぬらりくらりの鰻賣り、瀨田けの延びた娘連れ、腰鯯々と所がら、源五郞後家の昆布卷で、あらで髮さへ櫛卷の、泪はらく銘々に、男取られし身の願ひ、皆々御前にうづくまる。

ト皆々橋がゝりより、思ひくの女形の拵らへにて出て

皆々　ハイく、お慈悲で銘々の連合ひ男を、取返して下さりませ。

〽お慈悲くと女子ども、男の顏を湖の、深き願ひぞいぢらしき。

ト皆々、捨ぜりふワヤく云ふ。

判官　ヤア、われ達が願ひの筋は聞き屆け置いた。銘々夫を取られし樣子、これにて申し上げい。

〽仔細を語れと判官が、詞に這ひ寄るつぼく口。

なべ　ハイく、私しが男は、草津の姥が餠屋へ雇はれて、朝から晩まで杵を持ち、餠搗く事の達者もの。小豆を買ひに大津へ行き、それから直ぐに行くへは知れず、聞けば比良の館へ呼び込まれ、今に戻らず、ほんに辛氣な一人寐の、淋しさ餘つてお願ひでござりまする。

しま　私しは高宮のおしまと申しまして、連合ひは淺右衞門と申しまする帷子賣り。宇治の方とやらが引摺り込んで、お慰み。夜晝勤めましては男の地が損ねうと、案じてばかり居りまする。

ふな　一人娘に取りました、聟は瀨田の漁師、鰻搔きに行たのを屋敷へ引入れて、戻さつしやれぬは持ち料の出刃で、腹を割かしてござるのか存じませぬ。

かく　石場の茶屋で源五郞と云や、隱れのない肴屋、鮨の飯をば炊かうと思ひ、米洗うて居るうちに男を取られ、比良の屋敷へ尋ねに行たら、商賣がらで押しやうがよいやら、今に戻さず、如何に鮨屋ぢやと云うて、漬詰めにしてもらうては、蓼や山椒の辛い目にあはしやろかと、それが悲しうござります。

ト泣く、

なべ　我れくが男、返して下さるやら

皆々　お願ひ申しますわいなア。

文覺　造酒頭、あれ聞いたか。男を取られし女どもが願ひ。淫亂の證據明白なれば、申し譯の筋はあるまいがの。

造酒　例へ宇治の方放埓にもせよ。下賤の者と、不義戯むれあらうや。この上は造酒頭上京いたし、實否を糺したその上で、宇治の方を供奉し、時政公へ差上げませう。
判官　ならぬ〳〵。昨日今日まで賴家の家來、俄かに宇治の方を差上げうとは物臭い。この判官が直ぐに立越え、引立て歸る。
造酒　ヤア、過言なり判官、一旦仰せを承つた造酒頭。奉公の手初めと、御意のかゝつた身共を差措き、狼藉千萬、扣へ居らう。
判官　イヽヤ、この判官が實否を糺す。
造酒　イヤ、ならぬ。
判官　何を緩怠な。
ト双方キッとなる。
義時　宇治の方の身の上は、造酒頭が鎌倉へ忠義の手初め。急ぎ立越え召連れ下らば、時政公にも御滿足に思し召されん。上京の用意いたせ。
造酒　ハッ、委細畏まつてござりまする。
文覺　判官には坂本の城外檢分の役、片岡諸とも江州へ立越え、萬事飛脚を以て注進召され……男を取られし女どもは、比良の館に程近き、知るべ〳〵に相待つべし。銘銘が夫ども、詮議いたして渡しくれう。女どもを召連れ出立の用意。
判官　ハッ。
義時　假初めならぬ大切の役目。賴家謀叛に極まらば、時日を移さず、義時直ぐに發向せん。國家の騷動。民の煩らひなきやうに、諸事穩便に取計らへ。兩人、キッと申し渡したぞ。
造酒　ハッ、畏まつてござりまする。
文覺　兩人都へ發足の趣き、時政公へ言上いたさん。
義時　ナニサマ、萬事の評議は貴僧の執達、何れも退出。
ト義時御座を立ち給へば、皆退出の諸大名、これ合戰の初めとは、したり根強き鎌倉御所、後の世までも。
ト皆々立つ。造酒頭、判官、双方氣味合ひ。文覺制する。皆々よろしく、この途端、三重、　幕

二段目　比良別業の場

役名――宇治の方。腰元、青柳實ハ三浦之助義村。片岡造酒頭春元。腰元、おさゐ。同、蔦ケ枝。同

櫻木。同、卯の花。浪人、後藤兵衞。野手のしよん兵衞。白船狆右衞門。比企判官賴員。佐々木四郎左衞門高綱。

造り物、一面の高塀、眞中屋敷門、比良の館別業の體。なまめいたる合ひ方にて、幕明く。

〽近江路や、比良の館は賴家の御母堂、宇治の方おしつらひの閑居にて、女中ばかりの御養生、誰れ憚らぬ御身持ち、後家のくづれし惡性は、上つ方とて一方の、一人で足らぬお好みに、表門明けお腰元、男見る役留守居役物見に顏のなまめかし。

ト門の内より腰元櫻木、同じく卯の花、出て來り

櫻木　なんと卯の花どの、今日は通りが薄いぢやないか。今朝からやう〳〵五人はか釣らぬぞや。

卯の　サレバイナウ。わしもそれで氣を配つて居る。あの又おさゑや梅ヶ枝は、何所まで行た事ぢや知らぬ。靑柳どのが又やかましからう……アレ〳〵、あそこへ達者さうな六十六部が來た。止めて見ようではないかいなう。

ト櫻木も向うを見て

櫻木　ほんになう。さうしやいなう。

ト合ひ方になり、向うより、六部、出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。と卯の花、櫻木、向うへ出て、

卯の　コレ六部どの、報謝進ぜうわいの。

櫻木　報謝請けてたもいなう。

ト六部、思ひ入れあつて

六部　これは〳〵、報謝とは忝ない。これから先に宿屋がござるか。次手に敎へて下さりませ。

卯の　敎へるまでもない。宿も報謝するわいなう。

六部　ムウ、報謝宿もさつしやるか……そんなら泊めて下さりませ。

櫻木　泊めるばかりぢやない。寐てからこなたに。

ト囁く。

六部　エヽ、アノ、そのお方をわたしに。

ト氣味惡きこなし。

兩人　嫌かいなう。

六部　そんな滅相な。

兩人　否でも應でも泊めにやならぬ。

ト無理に門の內へ引立て入る。

〽無理に引込むその所へ、おさゑ、梅ヶ枝、引添うて、連れて戻つた順禮の、笠の印や龍の丸、水澤山な荒男。

ト橋がゝりより、おさゑ、梅ヶ枝、順禮を捨ぜりふ云ひ云も引ッ張つて出て來る。順禮、キョロ〳〵して

順禮　マア〳〵待ちめさアや。めんどのに似合はぬ、おつかない足だア。おらは旅くんだびれで、足がもとおり申さないよ。とくらと譯を云つて連れめさア、やんたで引摺り申したで、股が摺れて歩まれ申さないに、見たくつてもない、したね女郎衆だによ。

さゑ　道々も云ふ通り、なんであらうと、惡い事は云はぬ。わしらがする通りになつて居たがよいわいなう。

梅枝　何を云ふのやら、譯は分らず、ひよんな者を連れて戻つたなう。

ト この時、腰元青柳、門の内より出て

青柳　コレ〳〵、こなた衆は今朝から出て、何所へ行て居やつたぞいの。

梅枝　あんまり今日は何もないに依つて、少と外を探して見ようと思うて、おさゑどのと出て行つたのでござんすわいなア。

さゑ　どうやら斯うやら、この人を捉まへて來たが、何を云ふやら譯が知れぬわいなア。

ト 櫻木、卯の花、出て來り

卯の　コレ〳〵、青柳どの、今の六部は如何にしても、お上のお氣には入りそむないが、いつそ去なしてしまはうかいの。

櫻木　見掛けは達者さうなが、あの事を云うたれば、去にたがつて、どうもならぬわいの。

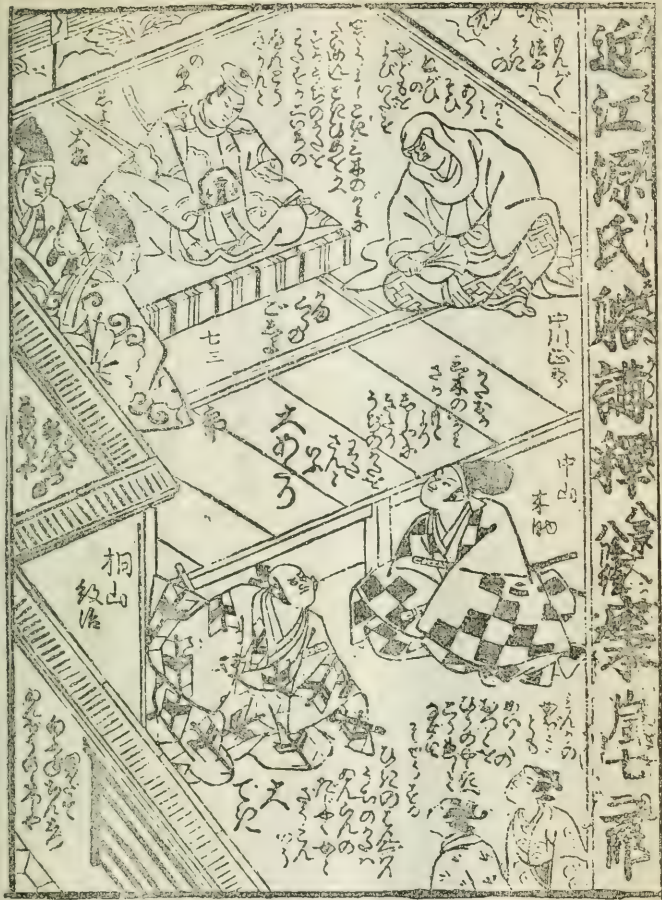
青柳　ハテサテ、お氣に入らずば入らぬ時の事。マア、そな者と今朝からの者と、一緒に泊めて置いたがよいわいの。

ト 此うち、順禮、火打を出し煙草のみ居る。

卯の　イヤモ、男釣るのもホッとした。宇治の方さまはお氣合が惡いと仰しやつての藥せんさく。此やうに毎日毎日男を替へて、お精の惡い事ではあるぞ。

櫻木　せめてこちらが口へも入る事か、悉皆旅籠屋の留め女見るやうに働らいても、いつ堪能なさる事やら、ほんにお精の強い事ぢやないかいの。

青柳　また其方衆は惡口を云やる。この役目を受取るからは、なんであらうと宇治の方さまが、もうこれでよいと得心なさるゝまでは、男を引込んで見にやならぬ。さうざうが此やうにかゝつて居ても、油ぎつた男にヱ、取當らぬは、我れ〳〵が不調法ぢや。コレ、そこな人、爰へご

安永六年九月

大坂中の芝居上演繪番附

ざれ。
　ト順禮、キヨロリとして居る。
梅枝　これはしたり、ちやつと行かつしやれいなう。
順禮　ナニ、うんどもが事かよ。
　ト側へ來る。
青柳　見れば三度笠に棒を突いて、何所から何所へ行く人
ぢやや。
順禮　お身さア女郎衆の親玉さうな。うらは奥州仙臺者だ
アがよ、三十三番のおかんのうどのへ參るべいと思つて、
あつちらこつちら經巡り申したに、女郎どのが泊らせる
宿すべいと無理に引ッ張り申した。こりやマアあんたる
目に遭ひます事よ。
卯の　をかしい物の云ひやうぢや。とんと合點がゆかぬわ
いの。
櫻木　ありやマア、なんと云ふ事であらうな。
青柳　知れた〳〵。あれが仙臺の赤とんぼと云ふのぢや。
西國順禮に出て、連れにはぐれたといなう。
腰元　ホヽヽ、をかしい物の云ひやうぢやわいの。
青柳　コレ、さうして上方を見物でもさつしやつたか。
順禮　オヽサ、かんのうどのより大坂が見申したいから出
申したゆゑ、萬事を捨てゝ大坂へぬめり申したに、住吉
どのからお太子どのへぬめつて、道頓堀どのへつん出た
ら、さアても〳〵巷つた事があり申した。炬燵の蒲團か
けぬこの上四角に、あゝ申す物の屋根に、上へつん出し
て赤い染のうれんをぶッかけて、そん中ででんのこ〳〵
太皷打ち申す。こりやあんたる事だアと尋ね申したりや、
上方のしばやだアと申す。あんだも國サアへの土産に見
べいと思つて入り申したりやア、あんばかおんどもが國
の祭り相撲の事、よもんや〳〵し申した。
青柳　して、その芝居は、どんな狂言ぢやあつた。話しが
聞きたいわいの。
順禮　そのしばやの名は、三千世界やりくつぽうだ。
卯の　ムウ、そりや何時やら繪本で見た、大坂中の芝居の
二の替り。その狂言は、どのやうな狂言ぢやぞいの。
皆々　聞きたいわいなう。
　ト順禮、こなしあつて
順禮　イヤ、あんだも知らないが、唐人どのが出て、女郎
を捉へて、しんだくもんだく云ふと、たんぼの中へ唐
人どのをばたりおッぱめた。サアちよら、それから結構
な唐人どのが仰山に出て、しんだくもんだく騷動に及び

申した。サアちよら、それから廻國どのに女郎さいがどんばらを扶り申して、こていたすけ申した。サアちよら、それからおらが方のおみどうさまの事よ、きらア／＼する内へ、赤いお坊様と男どのと、何か相談ゑたると、大勢が彼のお坊様を取込んで、喧嘩になりさうさ。すんでの事に叩き合ふべいと思つたりや、そこら中の火が消えて眞の闇の事よ。こりやあんたる事だと膽がよまげ申した。その間にお坊様はによろ／＼と逃げてしまつたら、雷の如くどろん／＼と太鼓が鳴り、釣り鐘を突き申す。こりやおつかない、堤でも切れ申したかと膽をたまげ申したりやア、おとろしや地の底からでんぐり返つて、彼のおみどう様やかたを引摺り込み、下から庄屋どのの内にかみさまと男どのが居をるよ、中から／＼つん出す。こりやア彌勒の世界が替り申すかと、蒼くなつて居申したが、そいらしまふすと、また庄屋どのが内をひこずり込んだ。でんぐり返ると今度は鬼神どのが數多閻魔どのを挾み申して、腹をおつころばして、そこへかげ申した。サア／＼、ても／＼慰みになくて、てつからないあぶない目に遭ひ申した。

ト いろ／＼思ひ入れあつて云ふ。皆々をかしがつて

卯の　ホヽヽ、この間見た繪本と、大方似たやうなが、一つも合點がゆかぬわいなア。

櫻木　イヤモウ、云ふうちに、をかしうて／＼ならなんだわいなう。

ト皆々顔見合せ。

皆々　ホヽヽヽ。

順禮　コレサ、笑ひ申さずと、うんどもを宿すべいと云ふは、錢さア高くつちやアならず、木賃十八文だアによ。

青柳　合點ぢや／＼。宿錢も何もいらぬ。ゆつくりと泊める程に、さう思はつしやれ。コレ

〽斯う／＼と囁けば、京も田舍も色事は、くわつと上氣の京とんぼ。

ト 順禮、大惘り。

順禮　こりやア肝が魂消る。上方は大神宮のお膝で、施行女郎があり申すと聞いたが、あねんじよは、みんな施行しめさるか。

青柳　なんであらうと、内へ入りや。

皆々　サア／＼、おぢやいなう。

順禮　あんだる目に遭ふ事よ。今の間に五體がこの棒の如くになり申した。

〽油ぎつたる汗たら〳〵、ゑじかり股で入りにけり。
卯の　サア、あの油ぎりやうでは、如何なお上もお氣に入るは知れた事。
櫻木　さうぢや〳〵、あんまりで毒々しいわいの。
　ト此の時、青柳、向うを見て
青柳　アレ〳〵、其所へ來る屈強な男。草履下駄で肩振つて、嫌身だらけ。あのやうな強い顏して居る者は、結句お寢間の役には立たぬ。併し、只通さうより引込んでマア、お寢間へやつて見たがよいわいなう。
　ト皆々も見て
卯の　それ〳〵、どうで越度は有うぢ。どこらがお氣に入るやら知れぬ。必らず油斷さしやんすな。
櫻木　ふ得て居るわいなア。
　ト銘々身構へる。
〽手ぐすね引いて待つ折柄、この所に、この頃急に立てられて、在所ぐずりの男作、白船の狆右衛門とて、寒いと握る懷手。
　ト出の淨瑠璃にて、花道向うより、白船狆右衛門、不器用な好みの男伊達にて、のさ〳〵と出て來る。
〽こなたの道よりこれも又、同じ在所でたご持たぬ、野出のしよん兵衛、今日のこの場の達引と、立派に穿きし鹿兒島下駄、互ひに立會ふ門前は、女の見物曠れの業、とりのぼしたる眼付き。
　トこの淨瑠璃にて西の通ひ道より、しよん兵衛、これも好みの拵らへ、のさ〳〵と出て來り、双方向うを見て、ちよつと心意氣あつて、直ぐに舞臺へ來る。これ一時なり。床のめりやす。兩人立ちとまり、女形皆々見て居るゆゑ、氣の張る思ひ入れ。双方互ひに入れ違ひ、こなしあつて、
しよ　コウレ、白船の狆右衛門、いから來やうが遲かつたなう。
狆右　野出のしよん兵衛、待ち兼ねた。
しよ　そこへ出ようかい。
狆右　オヽ、出なと云うても約束の達引ぢや。出ようかい。
しよ　サア出い。
狆右　われから出い。
しよ　サア。
狆右　サア。
　ト渡り拍子になり、双方女形の方へ眼を付け、身振りのよいやうにしたいと思ふこなし。向うへ出ても、尻

目で體を見て、チッとつくばうて

狆右　今日この所で出合ひと云ふは、外の達引ではない。この屋敷の後家御は、きつい好きぢやげな。うづいてうづいてとうもならぬと云うて、よい男の達者なを見立て、呼び込まつしやるとある。おれもこの比良の在では、あんまり男がよう過ぎて、色が白いと云うて、白船の狆右衛門と云ふ、隠れのない色男ぢや。おのれマア、おれがかゝつたら、どのやうな後家御でも、息の切る程堪能させる。白船にする狆右衛門、聞きやアわりさまは男自慢して、狆右衛門が手くさいには、あの後家御は行くまいと云やるげな。それで貴様と達引して、どちらが強うてよい男ぢや、達引をこの屋敷から見てもらはうと思うて人をやつたが、よう出ておぢやつたなう。

ト ねち／＼云ふ。

しよ　そりや互ひぢや。おれも在所では男がよう過ぎて、たんごにならぬに依つて、野中でやり放しにすると云ふ心で、野出のしよん兵衛。爰の後家御は、凡そおれならで、やりつける者は覺えがないと思ふ所へ、白船の狆右衛門と云ふじんばり、でつくりの牛蒡や山の芋を喰ひ込んで、後家御の屋敷へ行くと聞いて、如何にも達引する積りで人をやつたが、流石は白船程あつて、ハテよう出て來やつたなう。

ト これもこて／＼云ふ。

狆右　聞いたよりは鼻に油のある、づく／＼した野出のしよん兵衛。

しよ　聞き及んだる齒ぐきの出た、目の垂れた狆右衛門。

狆右　蓬れついた淫聲。

しよ　たん交りの醉柄で

狆右　にきびだらけの團子鼻。

しよ　逢うたは今が初め。

狆右　へ、。

しよ　へ、。

兩人　へ、、、。

ヘ弱味を見せぬ卒笑ひ、をかしさ堪ゆる見物の、女中二人は一生懸命。

狆右　サア、そろ／＼と仕掛けうか。

しよ　いつまで斯うしても居られまい。

狆右　サア。

しよ　サア。

ト双方立つて尻からげ。

〽身縮ろひして尻引ッからげ、兩方立派に立向ひ、目先三寸肩先四寸、ぢつと體を小だゝみに。

狆右　サア、斯うしたらこれが達引。

しよ　其方が强いか、此方が强いか。

狆右　互ひに强いか弱いかの、勝負をして見せにや、女中方の合點がゆくまい。

しよ　そんなら女中の合點のゆくやうに

狆右　互ひに勝負して見せて

しよ　弱いか强いか見てもらはう。

狆右　仕掛けうか。

しよ　サア。

狆右　サア。

しよ　互ひの勢ひ。

兩人　イザ。

ト兩人、キッと見得。

〽手を取り合うて向ひし風情、如何な女中も腹抱へ、わつと云つて逃げ込んだり、二人はうつそり顔見合せ。

ト此うち女形皆々逃げて入る。後に兩人、あたりを見て

狆右　なんぢや。皆逃げて入つて門をさいたぞよ。

しよ　ほんになア。

ト兩人キョロ／＼と見廻し

狆右　折角達引しても、これでは一も取らず二も取らず、たらどうじやんになつてしまうた。

トこの時、橋がゝりより、念佛坊主、鈴を鳴らして出る。

しよ　ア、、じやんになる端か、拍子の悪い日暮らしの林淸。

狆右　エ、、アタ忌々しい。

ト兩人、ぐんにやりとなる。林淸、こなしあつて

〽ちんから／＼歌念佛。

トよろしく念佛ある。櫻木、卯の花、おさゑ、梅ヶ枝出て來り

卯の　コレ／＼林淸、今の歌念佛が、いかうお上のお氣に入つた。サア／＼、ちやつと入りやいなう。

林淸　ハイ／＼、入つたらなんぞ下さりますか。

皆々　遣る段ではないわいなう。

卯の　そこな二人の衆も、喧嘩せぬやうに、兩人とも此方へ入りや。

狆右　アノ二人ながら

しよ 入らして下さりますか。
卯の　コレ、林清や、お上のお召しなさるゝは、コレ。
ト囁く。
〽囁く内に悩り林清、鼻ひこつかす男作、吐息つきつき
色仲間、お辭儀申さず入りにけり。
トこの人數皆々門内へ入る。
〽山風の誘ふ音色も巣籠りの、つらねやさしく修行者が、
通りかゝるを青柳が、袖を扣へて。
ト向うより、片岡酒造頭、旅虚無僧の形。尺八を吹き
ながら出て來る。よき程に門内より青柳出て、造酒頭、
本舞臺へ來て、行き過ぎるを青柳こなしあつて
青柳　申し。
ト袖を扣へる。
造酒　手前かな。
青柳　可愛らしい竹の音色。この所はやんごとなき御方、
御病氣の出養生。女子ばかりの下屋敷。あんまり笛の音
がよさに、お顏もさぞと主人の願ひ……樣子と申すは、
コレ。
ト囁く。
〽笠を隔てゝ耳に口、聞き取る虚無僧打頷き、また笠越
しに小聲の返事。
ト青柳に囁く。
サア、兎角しつぽりと尺八が、お聞きなされたいといな
ア。堪能なさるゝ程、吹いて上げて下さんせ。
〽やいの〱に梵論字は、云はぬ心の竹の音や、吹きそ
らしつゝ連れ立てば。
物數云はぬ、粹な竹さま。
〽兎角竹にはなりたいものと、浮かれ打連れ入りにけり。
ト青柳、先に造酒頭、靜々思ひ入れあつて門内へ入る。
〽世を恨みたる浪人の、大小流石一癖ある、面を隱せし
深編笠、何國の誰ぞや黄昏時、のつさ〱と歩み來る。
トこの淨瑠璃にて、橋がゝりより、浪人後藤兵衛、深
編笠、浪人の拵らへにて出て來る。門内より梅ヶ枝、
櫻木、卯の花、出てこなしあつて
卯の　申し〱、お侍ひ樣。
兵衛　呼び召されたは手前の事か。
櫻木　如何にも、お前樣の事でござりまする。
ト兵衛、こなしあつて
兵衛　さもやんごとなき女臈の、やつがれに用事とは。
ト仔細らしう云ふ。

卯の　私しどもはこのお館の、腰元でござりますが、私しが御主人と申しまするは、若い後家御でござります。

兵衛　ハテナウ。

ト氣味合ひ。

卯の　お前に少とお話し申したい儀がござりまする。どうぞ御寝所までお出でなされて下さりませぬか、との御口上でござりまする。

兵衛　アノ、後家が手前に。

三人　左様でござりまする。

兵衛　ハテナア。拙者は後藤兵衛盛長と申す浪人者。後家とあれば、定めて以前は娘の劫を經たのでがなござらう。七ツ八ツから糸つむぎ習うて、今は絹屋の嫁となるとは、源氏六帖の言の葉。して又拙者への用事とは、何事を仰せらるゝのでござるな。

卯の　大方お聞き及びもござりませう。頼朝公のお妾、頼家さまの母御、宇治の方さまのお下屋敷、日本に隱れのない美人おやわいなア。

櫻木　その宇治の方さまがナ、お前様に。

ト囁く。兵衛、ぞく〳〵して

兵衛　ヤア〳〵、なんと〳〵。

卯の　お前様を遠目に御覽じて。

ト又囁く。兵衛嬉しがる思ひ入れ。

〽聞く内も早冷汗流し、門の方を睨み詰め、物狂はしきその形相。

櫻木　サア〳〵、手を引いて連れて行きませう。

皆々　サア、ござんせいなア。

ト兵衛の手を引き、三味線、天拜山になる。兵衛、惡身にて、女形先に門内へ入る。引違へて青柳出て來て、向うを見て

青柳　コレ〳〵、今朝からにない好い鳥が來るぞや。皆油斷しやんな。

皆々　アイ〳〵。

ト女形皆々出て來り、向うを見て思ひ入れ。

〽待つ間程なくいつきせつき、七里と見えてちよつきり羽織、首に状箱大小も、足も輕げに行く先へ、ずつと青柳行き當り、こけたをしほに裾引留め。

青柳　コレ待たんせ。人を此やうにこかして置いて、斷わりなしに行つてもよいかえ。

七里　これは滅相な。急ぎの御用ゆゑ心が急くまゝ、眞平御免下されい。

ト云ひ捨て行きかゝるを引留め

青柳　イエ〱、やる事はならぬ。人に咎められて、御免なされいで濟む事なら、わしもこなさんをこかして、詫びがしたいわいなア。ナア皆の衆。

皆々　それ〱、さうぢやわいなア。

七里　サア〱、重々それは御尤もぢやが、とつくりと詫び言したいが、これは女覺上人より大江の入道さまへのお使ひ。鎌倉から急ぎの道中。暇がいるとお身様達へも祟りが來る。料簡さつせい。

トまた行きかゝる。

皆々　イヤ〱、やる事はならぬ〱。

ト立ち塞がる。

青柳　詫び言の仕様が惡いに依つて猶ならぬ。マア、とつくりと門の內へ入つて、得心の行くやうに、詫び言をしたがよいわいなう。さうないうちは、滅多にやる事はならぬ〱。

七里　コレサ、それは釜の前の料簡と云ふものだ。大江の入道さまへ使ひに行く飛脚。時が切れると、やかましいわいの。

青柳　イヤ、時が切らしたい。大江の入道、なんともないぞや。鎌倉は怖うないぞや。忝なくも宇治の方さまの御座なさるゝお下屋敷。家來の入道どのが叱らんしても、なんともない。さう云ふ事なら猶ならぬぞや。

七里　ムウ、そんなら宇治の方さまの御座なさるゝ、下屋敷と云ふは。

ト思ひ入れあつて

それぢやあるわいやい。

青柳　達て行かうと云はんすと、やらぬ上に、お上の召使ひを狼藉したと、此方より入道どのへ逆ねだり。

七里　サアそれは。

青柳　それでも行きやるか。

七里　サア。

皆々　サア〱〱。

女皆　どうぢやぞいなう。

七里　ホイ……宇治の方さまのお女中へ、行き當つたが因果。どうなりと詫び言はしませうが、御門の內へ入つて、どうするのだ。

青柳　どうの斯うのはない。お上のお寢間へ引摺つて行く。

ト手を取る。

七里　エヽ、滅相もない。

青柳　滅相でも、もう叶はぬ。
皆々　早うおぢやいなう。
　ト取りつくを振り放し
七里　これは又迷惑な。
　ト後しざりする。
青柳　なんの迷惑。ごんせいの。
　ト引立てる。
七里　サア、行くは行くが。
皆々　ハテ、おぢやいなう。
　ト青柳、引摺る。皆々後より押す。
七里　こりや、困つたものだ。
〽無理に引込む女中方、門の閂ぐわつた〳〵、連れてその日も。
　トこの見得、暮れ六ツの時計にて、チヨン〳〵、返し。
　造り物、通りの二重舞臺、上手一間半の御簾屋體。向う一面の金襖、欄間通り半簾かけあり。この見得琴唄にて道具納まる。
〽暮れ過ぎぬ、宇治の方の帳臺の、夜の光りは雲井にも、劣らぬ露の奥座敷。

〽案内を照らす提灯に、引かれて來たる男作。
ト橋がゝりより、青柳、櫻木、手燭を持ち、狆右衛門の手を取り出て來る。
狆右　どうやら氣味が惡い。もう去にたらござります。
　ト慄ふ。
櫻木　あのやうに云うて、兎角後しざりするわいなア。
青柳　其方はよい加減にして、後を段々寄越しや。
櫻木　心得ましてござんす。
　ト引返し入る。
狆右　わしもどうぞ後へ戻りたい。去なして下さりませ。
　ト行きかゝるを引留め
青柳　これはしたり、男のやうにもない。其やうな卑怯な心で、戀が叶ふものかいなア。先刻のやうに云うて置いて、きたない男ではある程にの。
狆右　それはさうぢやけれど。
　ト後じざりする。
青柳　けれどでは濟まぬ……エヽ、埒の明かぬ。
〽引立て入る一間の內、その身はこなたの長廊下、首尾を窺ふ翠簾の內。
　トこの文句のうち、屋體の御簾一面に卷き上がる。結構

なる夜齊蒲團、朱の利休行燈を灯し、宇治の方、しどけなき拵らへ、病鉢卷にて脇息にかゝり、この前に香を燻らし、蒔繪の手道具いろ〳〵あるべし。宇治の方、狆右衞門を眺め、こなしあつて

宇治　青柳が取次したは、其方かや。

狆右　ハイ、私しでござりまする。

ト慄へ〳〵云ふ。

宇治　大事ない、爰へおぢや。ハテ、ズッと寄つてたもいなう。

ト手を取る。と狆右衞門身を縮めて

狆右　そんならアノ女中が云はれました通り、眞實私しを

宇治　オイナウ。但しは否か。どうぢやいなう〳〵。

トぢつと寄り添ふ。狆右衞門、胸を撫り心を取り直す思ひ入れあつて

狆右　ヤレ〳〵、やう〳〵胸が据つた。

宇治　サア、胸が据つたら、自らが云ふ事を背くまい、他言せまいと云ふ誓紙。

ト手箱より一卷を出して

この一卷に血判据ゑての上の事。定めし物も書きやるであらう。ソレ、讀んで見や。

ト一卷を渡す。

狆右　もう斯うなるからは、例へ逆樣になつて踊れと仰しやると云うても、なんのマア。

ト一卷を開き見て、悔り。

宇治　サア、それに血判せい。

狆右　こりやコレ鎌倉の北條どのを、亡ぼすと云ふ一味徒黨の連判。滅相な。これに血判したら、忽ち磔刑にかゝる事。ヤレヤレ、恐ろしや。

ト逃げうとするを引留め

宇治　大事を知られ、逃がしてよいものか。

狆右　エヽ、命があつての樂しみぢや。

ト突き放す。この時、青柳、長押の長刀を外し身構へる。狆右衞門、其まゝ逃げて出るを、青柳、長刀を振い込み、行く先へキッと立つ。狆右衞門、悔り。

青柳　何所へ行く。

ト立ち塞がる。

狆右　ハイ、、、、。

ト慄へ出す。

青柳　そな男、宇治の方さまの仰せつけられ、背くかどうぢや。

狆右　勿體ない、今の世に、威勢の高い鎌倉を亡ぼすと云ふ血判が、どうなるもので。こんな所に長居は無用。早う去んで。

ト搔い潜り、逃げ行くを伸より見事に切り返し、あたり見廻し、死骸を片脇へ蹴返す。宇治の方、始終窺ひ居て

宇治　青柳、首尾は。

青柳　また殺生を致しました。

ト長刀を拭ひ長押へかける。

宇治　次を呼びや。

青柳　ハツ……卯の花どの、次を早う。

トこれにて御簾下りる。

〽御簾さら／＼と青柳も、一間の内へためらい入る。引立てられてしよん兵衛が、香のかをりにふら／＼と、ふら付く胸を押鎭め。

ト橋がゝりより、卯の花、先に手燭を持ち、しよん兵衛、出て來り

しよ　あんまり結構過ぎるので、生きながら極樂へ行くのではないかと、上へぼつかり氣が昇つて、足がふら／＼するわい。

卯の　もう爰まではわしが役、これから一人行かつしやれ。あの御簾の内がさうぢや程に、何がなしに、ひつたりと。

〽突き放してぞ入りにける。

ト卯の花、引返し入る。

しよ　ア、コレ、突き放しは胴慾ぢや。どうでも行けか。せう事がない。なんの、別におれも男ぢや。敵に後を見せてはならぬ。

ト立つて見てはこける。

こりや、根ッから足が立たぬ。

ト惡身になり、こそ／＼と御簾の側へ行く。

〽四つ這ひになり御簾の際、探る手を持ち引摺り込まれ。

ト御簾の内より手を出して引摺り込む。

〽アッと云つてぞ入りにける。怯めず憶せず浪人が、案内に及ばぬ鼻油。青柳手燭携へ出て。

ト兵衛、下手より探り／＼出て來る。青柳、手燭を持ち添つて出て、手燭を前へ差付けて

青柳　ア、申し御浪人様、此方より案内いたしませうに、早うお出でなされたなう。

兵衛　イヤモ善は急げと申すから、斯樣な事に隙が入ると、得てスワと云ふ時にお役に立たぬ。

トこの時、御簾屋體バタ〱として

しよ　滅相な。これがどうなるもので。

宇治　ならぬと云やると、命がないぞ。

しよ　アヽコレ、危ないわいの。アレエ〱。

ト御簾の内にて云ふ。この聲を聞かさぬやうに青柳、兵衞を無理無體に橋がゝりの際へ連れて行く。

兵衞　アヽコレ、何所へ連れて行くのぢや。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

青柳　お前もマア滅相な。大事の初戀に、其やうなじだらくな。少と襟でも繕らうて行たがよいわいなア。

兵衞　尤も〱。

トこなし。

青柳　さうしてお寢間へ忍ぶのに、この大小は要らぬ物。

ト大小を取る。

兵衞　アヽコレ、それを。

ト取りにかゝる。青柳、灯を消す。

こりやどうぢや。

青柳　忍ぶ戀路は闇こそよけれ。

兵衞　それもさうかいな。

トこれより男振りを繕ろふ思ひ入れ。懷中より万金丹を出して吞みなどして、嫁らしき身振りして居る。

しよ　否ぢや〱。ナウ恐ろしや。

ヘ逃げ出るこなたは眞暗がり、案内知つたる青柳が、長刀押取り後から、走りかゝつて大袈裟に、ずんでんどうと切り下げて、死骸片付け入りにけり。

ト青柳、逃げ出るしよん兵衞を見事に切り、死骸片寄せ、ツッと奥へ入る。兵衞、この物音に怖りの思ひ入れあつて

兵衞　女中、今のバッサリと云つたのは、なんぢや。こけたのか。女中々々……これはしたり、何所へ行たか、暗がりで後先が知れぬわい。

ヘ御簾に手をかけ窺へば、芙蓉の顔、柳の眉。

トこれにて御簾卷き上がる。宇治の方、こなしあつて

宇治　自らが心に從ひ、忍んで來て下さつた、御浪人は其方か。

兵衞　ハイ、私しでござります。

ト宇治の方、兵衞の手を持ち添へ

宇治　必らず斯うした事を、人に云ふ事はならぬぞや。

兵衞　なんのお前。

宇治　そんならこれに血判しや。

ト一卷を出す。
兵衛　お前の仰しやる事ぢやけれど、こんな結構な目に遭ふ事を、誰れがマア他言する者がごんせう。
宇治　イヤ〳〵、マア、その書き物を見た上でなければ、落ちつかぬわいなう。
兵衛　エヽ、そんなら、この書き物に血判を。
　ト云ひ〳〵一卷を開き見て
ナニ〳〵、北條時政を亡ぼし、天下一統に納むるものなり。一味の人數。ヤア〳〵。
　ト愕り。
宇治　サア、その連判に血判しや。
兵衛　アノ、鎌倉を亡ぼすこの連判に。
宇治　返答はどうぢや。
　ト兵衛、キッと氣を替へ、出ようとする。
待て。大事を聞いて返答もせず行くは、不得心か。否でも應でも血判しや。
　ト取りつくを踏み退ける拍子に、御簾下りる。この前より、青柳、出て、長刀を構へ窺ひ居る。御簾の内にて卑怯者めが。
　ト云ふ。兵衛これに構はず、そろ〳〵行きかける。向うより、青柳、長刀突き出し待つて居る。始終暗がりの模樣。兵衛、行き過ぎるを後より青柳切り下げる。兵衛、ハアと苦しむを、滅多に切り倒し、トヾ切り殺す。この時、御簾を上げて宇治の方、顔を出して
宇治　青柳。
青柳　碌な奴は一人もござりませぬ。
　ト死骸を片隅へ隱す。卯の花、櫻木、走り出て
兩人　次の虛無僧、呼びませうか。
青柳　後の二人は、只者ならぬその骨柄。
宇治　自らが直ぐに口說かう。
青柳　わたしは飛脚の狀箱を。
宇治　早う行きや。
青柳　ハッ。
　ト入る。
〽ハッと答へて主從が、心ぞ殊にたくましき。
櫻木　私しどもは今の梵論字。
　ト立ちかゝるを
宇治　コレ。
　ト兩人に囁く。兩人心得、奧より菊燈に火を灯し持つて出て直し置く。此うち、宇治の方、屋體より出て二

重に住ふ。また兩人に囁く。心得て橋がゝりへ入る。
〽程なく出づる虚無僧が、笠は作法と脱ぎもせず、あたりくまん〲見廻して、行き過ぎるを宇治の方、袖を扣へて。
ト造酒頭、橋がゝりより出て、ヅッと二重通り、其まま上の屋體へ行きかゝるを、宇治の方、よろしく留めて
宇治　仁體と云ひ、由ありげに可愛らしい風俗、思ひの餘り、出迎へて居るわいなう。
ト思ひ入れ。造酒頭、ヂッと留まつて
造酒　ムウ。すりや、いよ〱拙者に御執心か。
宇治　幾人も〱、日毎に變る男のうち、これ程の恰好は自らが好む戀人。二世も三世も替らぬと云ふ、寢間の睦言、しつぽりと語りたいわいなう。
造酒　ハテ、それ程男戀しくば、抱かれて寢て進ぜませう、
宇治　人に物思はすやうに、マア、この笠も取つて、顏見せてたもいなう。
造酒　望みならば笠取つて、とつくりとお目にかけう。
〽梵論字笠を脱ぎ捨つれば、顏は片岡造酒頭。
ト造酒頭、笠脱ぎ下に坐る。宇治の方、見て恟りの思ひ入れ。
宇治　ヤア〱、其方は片岡造酒頭。
造酒　造酒頭と云ふ事、その眼から見ゆるぢやまで。
トこれにて、宇治の方、キッとなつて
宇治　ヤイ、玆な不忠者め。鎌倉の北條時政は、賴朝公より天が下を預かり、賴家成長するならば、國家を讓らうと契約しながら、日に增し諸大名が尊敬の威に誇り、天が下を我まゝにするのみならず、賴家成長なせども國家を讓らず、その上北條の娘時姬を、賴家に娶合はしたは、禁廷よりのお仲人調ひ、仲好う添うて居るものを、俄かに時姬の緣を切り、鎌倉へ下せと云ふ事、心得ずと思ふところ、我が子江間の小四郎義時に、人知れず武將繼目の綸旨を頂戴させしを、慥かな噂。
造酒　知れた事。天が下は時政公の物。時姬と賴家を夫婦になし置くに於ては、聟舅の緣と云ひ、面倒な賴家、姬の緣切り、賴家を所替へさせ、御家來分として、鎌倉の下知に從はす心一つ。
宇治　それのみならず、自らに戀慕して、鎌倉へ差越せと無體の有り條。誰れ彼れと云ふより造酒頭、其方鎌倉へ參り、北條を云ひ込み立歸れと申しつけしところ、思ま

り奉る、時政の言句の出ぬやう、申し込めて立歸りますと、滿座の中で請合ひながら、それに引替へ、この有樣。

造酒　北條家へ裏返り、御家來となつたと云ふのか。

宇治　でも、三代御恩の主人を振り捨て。

造酒　どこへ主人。良禽は木を選んで棲む。造酒頭は不義放埒の惰弱者、畜生を主には持たぬ。

宇治　ヤ、なんと。

造酒　往來を呼び入れ、泥膾を其まゝ、寢所へ引込み何召さるゝ。

宇治　サ、それは。

造酒　それはとは、茲な徒ら者め。以前の片岡造酒頭なれば、賴朝公への云ひ譯と、手は見せず討ち放す。今にては威勢の强い鎌倉へ、牛を馬に乘り替へた造酒頭。徒らでも構はぬが他人の一德。改めて時政公、御執心をかけられた宇治の方、連れ歸つて差上げる。百姓町人に從らかわく女郎、時政公のお召しなされしは、有り難いと思ひ、三拜して鎌倉へ來やれ……ヤア〳〵、鎌倉より迎ひの者。これへ參れ。

ト内より

家來　ハア。

ト橋がゝりより、網乘り物に家來大勢付き添ひ出て來る。

〽合圖と見えて網乘り物、家來大勢引添うて、事嚴重に扣へける。一目見るより宇治の方、くわつと急き立ち詰め寄つて。

宇治　ヤイ、人でなし、自らが放埒は、其方がやうな畜生の目からは、惡性とも徒らとも云はば云へ、愚人に向うて云ひ譯せうか。おのれが心に引比べ、時政へ從へと、網乘り物を持たせしは、自らを君傾城の捉はれ者にするも同然。一分試しにしても飽き足らぬ。エヽ、おのれはなア。

〽御目に餘る口惜し涙、造酒頭せゝら笑ひ。

造酒　泣いても悔んでも、もう叶はぬ。達て意地張ると、引ッ縛つて連歸るぞ。

宇治　云はうやうない人非人。覺悟せい。

ト懷劍にて切つてかゝるを、立廻つて引敷く。宇治の方、無念がる。

造酒　何を小癪な。家來ども、此まゝ乘り物へ抛り込め。

皆々　ハア。

〽旣に危ふく見えたる所へ、七里飛脚が一散走り、家來

を摑んで二三間、投げ退け／＼宇治の方、後に鬪ひ立つたるは、心地よかりし振舞ひなり。

ト家來大勢、宇治の方にかゝるを、橋がゝりより、七里飛脚、走つて出て、直ぐに家來を投げのけ、キッと留める。

造酒　ヤア、造酒頭が連れ歸る宇治の方、妨げなすうぬは何奴なるぞ。

七里　御門前を通りかゝつて、引摺り込まれたる七里飛脚。委細をとくと聞いた上、留めに出たはこんたのお爲だ。

造酒　妨げ致してお爲とは。

七里　宇治の方さまを北條さまが、お心を掛けられて、連れて去んで抱いて寢ようと云ふのぢやござりませぬか。戀の使ひに立ちながら、造酒頭さまとやら、少と強う過ぎますかと存じまする。木折りで行かぬが戀の道。お前樣のやうに、徒ら者ぢやの色好みぢやのと、恥面かゝして網乘り物へ抛り込んで、ひよつと女子の一筋に、無念なと思し召して、ちよびとでもなされたら、皆お前の不調法。滿足でござつてからが、野心の晴れぬ時政公と、添臥しは油に水の交つたやうに、心が解けぬ程マア第一、夜の日が合ひそむないものぢや。さう云ふ者を連れて去んでは、お前の不忠になりませうぞや。そこを思うて留めに出たこの飛脚。宇治の方さまにとつくり得心させ、眞實心に從ふやう、口說き落して連れてお歸りなされまするが、憚りながら上分別かと、この飛脚は存じまするでござりまする。

へ辯舌休まぬ飛脚がすつかり、足を入れたる道筋に、只者ならずと造酒頭。

造酒　ムウ、下郎に似合はぬよう云つた。おのれが詞、聞き所がある。宇治の方は暫らく其方に預け置く。口說き負ふせて相渡せ。褒美の品は望み次第。

七里　そりや忝ない。行くか行かぬか、マアそれまでには

造酒　家來ども、身が呼ぶまで、暫らくのうち控へて居れ。

皆々　ハツ。

ト網乘り物家來皆々橋がゝりへ入る。

造酒　下郎、奥で返事を待つて居るぞよ。

へ詞番うて片岡は、奥の間さして入りにける、後見送つて宇治の方、飛脚の物腰打守り。

ト造酒頭、奥へ入る。宇治の方、思ひ入れあつて

宇治　好い所へよう來てたもつた。危ふい難儀を遁がれたも、其方のお庇、忘れは置かぬ、嬉しいぞや。

七里　これは〳〵、お禮に恐れ入りまする。イヤモウ、ひよつと來かゝつて出放題の挨拶が行き詰まつたは、此方どのゝ仕合せと申すものでござりまする。

宇治　サア、その仕合せは結ぶの神の引合せぢやと、わしや思ふが、其方はなんとも思やらぬかや。

　ト恥かしさうに云ふ。

七里　イヤモ、結ぶの神か風の神、何か存じませぬが、仕合せは仕合せでござりまする。

宇治　其方もさう思うて居るならば。

　ト思ひ入れあつて七里が手を持ち、あたり見廻し

アレ、あの寢所は自らが、寢物語りの一間、其方に少と話したい事がある。

七里　仰しやりたい事があるなら、爰で承りませうかい。

宇治　イヽヤイナウ、爰ではどうも恥かしい。其方に頼みたい事がある。

七里　何なりと承りませうが、爰で仰しやれ。承つた上で御寢所へ參りませう。

宇治　云うた上では、後へは引かさぬぞや。

七里　飛脚冥利、膝頭で歩く法もあれ。

宇治　そんなら云ふぞや。

　ト恥かしきこなし。

七里　承りたい。

宇治　あの。

七里　あの。

宇治　其方に惚れたわいなう。

　ト手を持つて顏を隱す。

七里　ハレ、よく惚れさつしやつたの。

　トこなし。

宇治　これまで幾人かの男のうち、千人にも萬人にも、勝れた其方、器量を見て、惚れて〳〵惚れ拔いた。叶へてたもれば直ぐに女夫。否か應か。返事はどうぢやぞいなう。

　ト嫌らしう云ふ。

七里　どうやらあんまり旨過ぎる。そりやハヤ飛脚風情でも、宇治の方樣と女夫になりや、例へ造酒頭でも鎌倉でも、指もさゝさぬ大事の女房。大勢の男のうち、器量に惚れたと見立てられたは、下郎が仕合せ。惚れ手がずんと氣に入つた。

宇治　そんなら叶へてたもるかや。

　ト一卷を出す。七里、ちよつと見てキッと見得になり

七里　起證書いて見せませうか。
宇治　ヤア。
七里　イヤサ、二世三世も替るまいと云ふ、血判か欲しからうが。
宇治　アノ、血判して二世三世も。
七里　往來を引込む不義徒らの思し立ち。鎌倉を亡ぼす戀の手管。仲人の着到、蒲團の上の恩賞に、手配りは濟みましたか。
　　ト宇治の方、キッと詰めかけ
宇治　なんと云やる。
七里　お招きに及ばず、推して參る帶劍は、約束してある眞田帶。
宇治　して、其方の實名は。
七里　先達てお墨付を以て、お招きにあづかり、約束の忠義始め、直さま鎌倉へ入込み、文覺大江の入道が内通の次第、悉く聞き届け、文覺より返書の飛脚、乞ひ請けて上つたるは、この密書。これを證據に入道が、侫姦の舌の根を押へん爲。
宇治　ムウ、そんなら其方は。
七里　佐々木四郎左衛門高綱。

宇治　ヤア。
高綱　鎌倉の評定、お身持ち御放埓の街の噂、心元なく存じたに、今日只今連判の御催ほし、世上の人口を恐れての御計略、承知仕る高綱が大慶。軍師となつて一方のお役に立つは、家の面目この身の譽れ。ハヽア、有り難う存じまする。
ヘハッと退つて主從の、禮儀亂さぬ骨柄は、實に坂本の大忠臣、末の代までも隱れなし。
　　ト宇治の方、嬉しきこなしあつて
宇治　先達て軍師と頼み、契約したる自らが、心に違はず始めての對面に、鎌倉の通路を窺ひしは、流石の佐々木。この上ながら賴家が事、軍の手配り、頼むぞや。
高綱　お氣遣ひあられまするな。佐々木が眼の黑いうちは、例へ時政、百萬の勢を以て向ふとも、城中は安堵。籠城堅き計略は、方寸に覺えあり。お心安く思し召されませう。
宇治　大江の入道、文覺へ内通とは、獅子身中の虫と云ふもの。一時も早う誅伐せん。
高綱　イヽヤ、お急ぎあられますな。邪智深き大江の入道、いま荒立てゝは、彼奴に從ふ臆病者、すは身の大事と出

奔せば、一人にても味方を放すは此方の弱味。萬一裏切り致しては城中の騷動。矢張り今までの如く出頭に用ひ置き、彼れに一味の者どもへ、利害を解き無二の忠臣に仕立つるは佐々木が辯舌。この事はこの場限り、隱密なるが卽ち計略。

宇治　何事も、よきに計らうてたも。一刻も早う城中へ連れ立ちませう。

高綱　拙者も今日、直ぐさま此まゝにて入城いたす心底。存じがけなくお目通り仕るも、主從の奇緣盡きせぬところ。

宇治　萬事の樣子は

高綱　坂本にて、イザ、お立ちあられませう。

ト この時、造酒頭、出て

造酒　佐々木四郎左衞門高綱、軍師となつて坂本の籠城、慥かに聞き屆けた。家來ども、ソリヤ。

〽心得たりと忍びの武士、ばら／＼と取卷いたり、動ぜぬ高綱、動きもやらず。

ト 家來大勢、橋がゝりより出て、高綱の双方より取卷く。宇治の方、身構へる。

高綱　ヤア、鎌倉へ難題を云ひ破りに參りながら、却つて北條の辯舌に蕩らされ、家來となつたる二股武士。その魂ひで高綱に、刃向はんなどとは、愚か／＼。

造酒　二股とは慮外の一言。大膽の心、おのれ如きの知る事ならず。鎌倉を討たんと謀叛の連判。何もかも聞き屆けた。引ツ縛つて連れ下り、造酒頭が高名にする。覺悟なせ。

高綱　大山を碎かんと、蚯蚓どもが穴せゝり。ならば手柄に搦めて見よ。

造酒　何を小癪な。ソリヤ。

〽承ると家來ども、駈け寄らんとする所へ、襖蹴破り青柳が、女姿に引替へて、振り亂したる大前髮、五人三人當るを幸ひ打ちつけられ、表を指して逃げ行く侍ひ、館も搖ぐ大音聲。

ト 奧より青柳、好みの形、前髮の大童にて飛んで出で、直ぐに家來大勢と立廻つて見事に投げる。家來皆々橋がゝりへ逃げて入る。正面の襖引拔く。と見事なる奧庭の遠見。青柳、キッと留つて

青柳　飛脚とは僞はり、佐々木四郎左衞門高綱どの、腰元の青柳が見參仕る。

〽踏み出す足は古木の青柳。

トよろ〳〵く見得。

高綱　ホヽウ、女でないと云ふ事は、先刻五音に依つてよつく知る。聞き及んだる三浦之助、守護召さるゝは天晴れ〳〵。

三浦　軍師と頼む程あつて、三浦之助とは違はぬ黒星。斯う化の皮引ッ剝ぐからは、入込んだる鎌倉の奴等、一人も生けては置かぬ。一番に返り忠たる造酒頭、うぬが首からさらへ落す。覺悟せい。

造酒　推參な小わつぱめ。前髪首にして鎌倉への土産にする。觀念いたせ。

三浦　その頤骨を裂いてくれん。

トきつとなる。

高綱　三浦之助待つた。

三浦　主人の御恩を忘れ、鎌倉へ返り忠なす齷齪侍ひ、討取るをば何ゆゑ留めさつしやる。

高綱　三浦之助は一方の旗大將、造酒頭も古今の勇士、今世の勝負ならば、討取つて手柄にもならうが、この世に亡き死人を捕へ、勝負しても益ない事。

三浦　ナニ、この世に亡き死人とは。

高綱　人は陽を以て司り、火を以て五體を保つ。火盛んに過ぎる時は煩らひとなるゆゑ、病の文字は疾ひ冠りに丙と書く。造酒頭が五臓の盛んに、約り上がつて切れ〳〵の調子、呼吸せまつて面色土色。切腹したに相違ない。

兩人　ヤ、なんと。

高綱　この館にて切腹する、造酒頭が所存こそ一物あり。斯程の忠臣、鎌倉へ返り忠なしたるは、正しく源家の白旗を、取返さん爲なるか。心底殘さず明かされよ。造酒頭。

〽必らず心措かれたと、未前を察する片岡が、詞に基元氣も弛み、撞と座して諸肌脱げば、腹一文字に掻き切つて、疵口くる〳〵引卷いたり。宇治の方三浦之助、顔見合せて呆るゝばかり、片岡佐々木を打眺め〳〵、ホッと溜息つきもあへす。

造酒　ハヽア、片岡に成り代り、坂本の城中守護する者はあるまじと、案じたるは我が高慢。イヤモ、智仁兼備と云ふか、某づれの詞にて、仰ぐもあまる佐々木どの、貴殿と三浦出會ひにて、宇治の方の御前に於て、我が本心を語りなば、浮世に思ひ置く事ない。そも鎌倉へ下るより、時政の難題を云ひ解かんと、廣言吐いて參つたるに、詞を企む北條どのに、文覺が腰押し、坂本には叛逆の企

てあり、この疑ひを晴らさんと思はゞ、時姫を縁切つて戻すか、宇治の方を時政の心に從はすか、この返答なくば、數日に軍勢を催ほし、頼家を討取らんと、諸大名へ申し觸れ、軍の拵らへ。南無三方、不意を討たれ落城せば、坂本の瑕瑾。この時なりとつおいつ、胸を固めて返り忠。宇治の方を手に入れんと請合ひしは、某唐土の關羽が術を習ひ覺え、人相を見て壽命を指す。時政の相を考へ見れば、七十四歳の定命たり。いま時政は七十一、宇治の方鎌倉へ下り給ふ用意に、一ヶ年は隙取り、彼の地に屋敷を建つる好み、この經營に一年、御病氣何かと出立に、事を延して又一年、三年の隙取らば、時政は寂滅。其うちには坂本の用意して、天が下を取返す、思案こそありつれと、北條の手にある源家の白旗を、竊かに奪ひ坂本へ持參して、右の樣子を宇治の方へ呑み込ませ、暫らく鎌倉のいきりを冷まさんと、思ふ所へ宇治の方の放埒、在々所々より願ふゆゑ、云ひ付けられしを幸ひ、この所へ參りかゝり、始終窺ひ見るところ、宇治の方の御發明。
〽色に溺れる放埒は、味方を招く御計略、感するに餘りあり。

造酒頭が一世の本懐、これに過ぎす。即ちこれこそ源家の白旗。
ト苦しみながら白旗を出す。皆々思ひ入れ。
三浦　ナニ、それが源家の白旗。
造酒　宇治の方へお渡し申しまする。
ト宇治の方、感心のこなしあつて
宇治　白旗慥かに受取つた。さう云ふ心底とは知らす、恨んだは堪えてたも。
ト泣く。高綱、三浦も思ひ入れあつて
高綱　計略とは云ひながら、一旦鎌倉へ組みなしたる貴殿、義に依つての切腹とは云へ、あつたら武士をむざ〳〵と殺すか。ハテ、是非もなや。
造酒　忠と義とにこの腹一つ、ナニ惜しむ事やある。とは云ひながら末代に至るまで、片岡造酒頭は鎌倉へ返り忠した二股武士と、名を流すが口惜しい。推量あれ御兩所。
〽齒を食ひしばり拳を握り、無念涙ぞ道理なり、共に不便と宇治の方、二人の勇士も諸共に、感涙催ほすばかりなり。
ハヽア、我れながら怯れたり。佐々木三浦ある上は、坂本は金鐵、本望は達したり。とてもの事に陣立ての、用

意が承つて相果てたい。
三浦　オヽ、この館の淫亂惰弱、宇治の方が放埓の手筈、お目にかけう　…ヤア／＼連判の方々、宇治の方の御歸陣。お供の御用意。
大勢　ハアヽヽ。
ヘハッと答へて奥庭より、お味方の人々には、妻子を忘れし町人百姓、西國四國六十六部、飛脚俠客猿廻し、大和萬歳鹿嶋の事觸れ、僧侶選ばず義に伏し、逞ましげなる者ばかり、選りも選つたり三百餘人、お供せんと扣へたり。
ト橋がゝりより、浪人、坊主、六十六部、その外大勢思ひ／＼の拵らへにて出て來る。上の屋體より最前の腰元四人、襷鉢巻にて長刀を持ち、この人數と一緒に出て、宇治の方を守護する。皆々並よく住ふ。
三浦　見よ／＼片岡、武士町人の隔てなく、義心備はる者ばかり、戀に醒きし御計略、武具の用意は城中にて。矢張り其まゝ御供召され。
皆々　畏まつてござりまする。
高綱　白旗御手に入る上は、新參古參も器量を選み、その格々を相定めん。

造酒　もし鎌倉へ漏れ聞え、急に討手の來らば如何に。
三浦　それこそ軍の手初めよし、石部草津に伏勢は、兼ねて用意の町人百姓、合圖に三浦が名香の、兜の匂ひ鎌倉勢が、高慢の鼻もぎ取らん我が計略。
宇治　自らは川筋より、兵粮運送手筈の吟味、常の女子に變はつて
腰元　隠し目付けはこの四人。
高綱　城內堅固を安堵して、草葉の蔭の賴朝公へ、早く參つて申し上げ、奉公せられよ造酒頭。
造酒　ハ、ア、有り難や忝なや。今こそ思ひ置く事なし、計略とは云ひながら、鎌倉へ裏返り、二股武士の造酒頭、心は忠義、形は惡人、魂ひは賴朝公に、再び冥途の御目見得。五體の不忠征伐は、政道糺す魂ひ。造酒頭が體は造酒頭が成敗する。不忠の片岡、思ひ知れ。
ヘ思ひ知れやとて刀を拔き、我れと我が首に押當て、エイウンと自身の討ち首、勇氣の程、感涙袖に餘りける、折柄表に人馬の足音關の聲、すわやと見やる向うより、どつと込入り眞先に、比企の判官大音聲。
ト どんちやんになり、向うより判官、陣立てにて軍兵大勢引連れ出て來り、本舞臺へ來り、キッと留まり

判官　宇治の方を引立て來れと、仰せつけられし片岡が心底訝かしく、見え隱れの隱し勢。果して坂本方には軍の手配り、忍びの者の訴へに依つて、比企の判官向うたり。宇治の方を相渡し、おのれら一々腹を切れ。

〽返答如何にと呼はつたり、三浦にこ／＼笑ひ出し。

三浦　ヤア、猪小才な蟇蛙、がや／＼ほえるが耳かしましい。爰に某相殘り、慰みに蹈み躪つて立歸らん。貴殿は宇治の御方を、城內へ御供あれ。

高綱　オヽ、爪彈きにも足らぬ奴。手を出すも大人氣ない。前髮の御不肖には、蛙首二三十、土產に持つて歸られよ。味方の方々、お立ちなるぞ。

皆々　ハアヽ、

〽いざと守護なす宇治の方、腰元諸卒引添ひて、後に佐々木が悠々と、坂本へこそ出で行く。

ト宇治の方を先に腰元四人、その外思ひ／＼の人數、殘らず付き添ひ花道へかゝる。後より高綱、悠々と引添ひ、皆々向うへ入る。

〽あれよ／＼ともがけども、踏んばたがつたる鐵石三浦、比企の判官むくりをにやし。

判官　ヤア、案外なる素丁稚め。先づ彼奴めから搦め捕れ。

軍兵　ハツ、動くな。

ト双方よりキッと取卷く。

三浦　ム、、ハ、、ム、、ハ、、、

トのり。

しをらしい蚊蜻蛉めら、三浦をやらぬ道がさぬとは、一生一度の云ひ納め。刃で向ふは大人氣ない。ほゝづき首を前髮が、かま切りにして串に刺す。一度にかゝれ。

〽一度にかゝれと身構へたり。

判官　ソリヤ。

〽突棒刺股はなねじことじ、踏み折り蹴なぐる勇力に、手を盡してぞ。

トこれより軍兵、長道具を持つてかゝり、手に餘る立廻りさま／＼あつて、判官切つてかゝるを蹴返し、トド軍兵皆々、三浦が腰へ取りつく。

〽働らけど、三浦一人萬人力、取りつく軍兵一時に、一息どつと突きやれば、なだれを打つて飛び散つたり。

ト軍兵取りつきながら二三遍舞うて、後へ倒れる　皆皆一時に後へ見事にかへる。これより大ノリ。

三浦　へ、、ハ、、、、脚立たずの鎌倉武士、無益の隙入り、早行かん。

〽御供急ぐ力足、琵琶の湖どう〳〵、降りしく雪に菖蒲が、さつと匂せし角額、色あり勇あり智謀ある、時に近江の合戰と、その名は高き比良ヶ嶽、谷の暮雪とあらはるゝ。

ト段切りの詰め。軍兵、かゝる。その刀を引取り、ポンと切り返す。直ぐに首、前へかへに入込む。この見得、段切りの所まで行て釣り鐘、三重、

よろしく幕

三段目

近江の湖水の場

役名── 鈴木隼人之助。傾城、逢坂。玉木軍藏。石原源太。太鼓持ち、萬八。同、喜作。禿、三彌。同、文字野。船頭、四斗兵衞 實は 後藤和田兵衞。

造り物、向う浪幕、この前通り浪の打寄せ、砂の書割り、樹木の取合せ。所々雪持ちよろしく、すべて湖水濱邊の心、この見得にて、幕明く。

ト雪おろし、雪チラ〳〵降る。

〽雪やこん〳〵霰やこん〳〵、雪をかいつかねて女郎にしたや、慕ひ焦るゝ戀の山、峰も尾上も白妙に、雪の白粉楷は紅の夕化粧、文字の峯がとり〳〵に、雪見の笹、杯も、色香争ふ派手遊び、隼人之助は逢坂と、共に花輪の雪の朝、雪の素足に雪の顔、名にし近江の雪景色、六つの花笠濡れて行く、散るやちら〳〵ふし木の雪と、袖も雲袖も吹き返す、野風呂にちよいと喰ひつけし、比叡の鳥の取形や、大津の町に行き遊ぶ、人目に三井のかな者も、我が身に志賀の浮名さへ、さいた同士は神かけて、あれ白拍子の浪寄する、はたの入江の船よばい、それかあらぬか石場の道を、おゝい〳〵と聲かけて、炬燵に蒲團さし荷ひ、太鼓末社が汗たら〳〵。

ト隼人之助、逢坂、萬八、喜作、禿、皆々向うより出て來て、

喜作　ヤレ、しんどいぞ〳〵。この雪降りに汗たら〳〵。シテガ、これも旦那へ御奉公。瀬田ヶ崎の御陣所は、御家來衆を殘して、柴屋町の居續けに、近江八景の雪景色を、みづ海とは殘念なとあつて

萬八　太夫さんを連れまして、冬の野がけ、野風呂の熱燗、はつたりとして上げましても、お寒からう。禿衆、お銚子〳〵。

安永六年九月大坂中の

芝居上演繪番附

文字　イエ〳〵、殿さんも太夫さんも、酒は上がらずに、痴話と口舌の道草で、埒の明く事ぢやないわいなア。

三劍　座敷と違うて、下に置かれぬ銚子杯。お前方に持つてもらうて、雪こかしがしたいわいなア。

逢坂　今日の雪見は、殿さんの趣向ぢやけれど、春の摘草とは違うて、皆の衆も冷たからう。矢ッ張り廓の一つ夜着が、わしや面白いわいなア。

隼人　雪の朝の眺めより、二つ枕に一つ夜着、それが嬉しいとは、憎うもないせりふぢやけれど、また斯う四方の峯々は綿帽子、里も畑も白無垢をしたやうに、この景色で呑む酒は、三々九度嫁入りの心持ち、堪つたものではないわいなう。

逢坂　嫁入りの心持ちとは、そりや誰れと祝言する心ぢやえ。

隼人　解ける心のこの雪と。

逢坂　エヽ、そんならお前は、積る思ひの色が、外に出來たのぢやな〳〵。

隼人　出來たとも〳〵、雪に見紛ふ花の色。

逢坂　移り氣ないたづら男。オヽ憎。

〽おゝ憎やのと首筋へ、笠の雫のつめられて、むつと手管の負け惜しみ、濡れぬ先こそ露の間も、我れからさきへ行く袖を、いゝややらじと片袂、引きつ引かるゝ琵琶の海、聞くや側から末社ども。

喜作　サア〳〵、これは又、悋氣から起つた大口。癪の發らぬうちに、御機嫌直す用意の炬燵。

萬八　お二人ながら氣を替へて、汗の出る程お當りなされませう。野邊の炬燵火、熱燗で上げませう。

ト鼻唄うたふ。喜作、口三味線にて野風呂の火を炬燵に入れる。

〽太鼓の喜作万八が、野風呂の炭を取敢へず、木下蔭に置き炬燵、蒲團てん手に押しやれば、こりや出かしたと賞められて、脱いだ羽織は草の上、ちつと炬燵に顔と顔、見合す笑くぼ仲直し、ほんにどうした縁ぢややら、新造の時から逢ひ初めて、浮氣はとんと何所へやら、いとし可愛は愚痴な戀、過ぎし如月鏡山、梅の旅籠も吹き初めし、秋葉金比羅地藏樣、戀の願ひに願かけて、結んだ縁の嬉しさも、陣屋とやらに夜晝も、逢はぬ辛さが癪の種、軍も國も納まりて、一緒に居たい添ひたいと、縋る冬野の女郎花、わりなき仲の男山、なまめく振りの暮れ近く、里のおじやれが謡ひつれ、宵の客衆に別れの枕、ついて

行く、よいわいなア、都まで、ア、〱ズウ〱戀の關、すりや小野川さんよついて行く、よいわいなア。大坂まで、ア、〱ズウ〱、謳ふ唱歌も名に寄せて、おつと二人が蔦かつら、サア御機嫌が直つたと、騷ぐ太鼓が口拍子、禿が酌に引つかけて、飲めや謳へや數々に、相よ押へよ手元の無理も、助けて袂に菊の露、移り移らふ醉ひ心、雪の容目もとろ〱と、前後もなんと草枕、夢や樂しく伏しにけり、瀨田ヶ崎に鬨の聲、耳を貫く鉦太皷、響き渡つて凄まじく。

逢坂　あの鉦太皷は、また軍があるかいなア。

喜作　この間は軍がないに依つて、廓へ通ふのぢやと、鈴木さまは仰しやつたが。

逢坂　面妖な、隼人さんが出て居なさんす留主のうちに、軍があらうやうがない。

萬八　申し旦那、ありやどうでござりますな。

隼人　なんのいやい。瀨田ヶ崎を守る大將は、おれが居ぬのに、彼方から仕掛けても、此方から軍はせぬ。こりや時々用心の爲に、味方の者どもが聲を合すのぢや。喜作、われは禿どもを連れて先へ去ね。太夫とおれとは用もあれば、後から去なう。

喜作　さては心中のまねびをなされますか。但し蒲團の上も珍らしからぬに依つて、人のない所で地べたの一曲でござりますか。太夫さん、それは冷えまするぞえ。

逢坂　何云はんすやら。そんな事がどうなるものかいなア。

三彌　鈴木さんも好い加減に、惡洒落したがよいわいなア。

逢坂　エ、モ、そんなてんがう云ふものかいな。また去んでから大勢に、いろ〱の事云うて嬲らさうと思うて。喜作さん、お前も惡口云うたら、聞く事ぢやないぞえ。

喜作　申しは致しませぬが、冷える時分に御苦勞な事ぢやと申します事。

逢坂　アレ、まだいな。

隼人　色と云ふものは、側に人があつては、どのやうに遊んでも、どこやらが窮屈な。たつた二人、手を引き合うて行くが樂しみぢや。

萬八　これはきつい。そんなら私しどもは、皆連れて先へ歸ります。其うちお早うお歸りなされませ。

隼人　早う行け〱。

萬喜　サア〱、おぢや〱。

〽粹を通して歸りける、後に隼人は小聲になり。

隼人　親方に金を渡し、身請けして置いたれ、兼ね〲去

ひ含めた事、仕負ふせう爲ばかり、いよ〳〵時姫君になつてくれねばならぬぞや。

逢坂　なんの違背がござんせう。シタガ、もう時姫さまになるのかえ。

隼人　廓の者を先へ歸したは、直ぐに時姫君にする心。

逢坂　そりや呑み込んで居るけれど、時姫さまになつて、その後はどうするのぢやえ、

へ話す半へ關の聲、玉木軍藏雜兵並の、鎧ちぎらし隼人が鎧、肩に引ッかけ駈け來る。

隼人　ヤア、其方は足輕の軍藏ではないか。

軍藏　殿樣。ア、、益體々々。とんとしまひつけました。

隼人　しまひつけたとは、なんの事ぢや。

軍藏　昨夜橋塚の陣より夜討が來て、お前の留主のうち、此方の陣所瀨田ヶ崎は、乘取られてしまひましたわいの。

隼人　ヤア〳〵。して此方に、防ぎ戰ふ者もなかつたか。

軍藏　なにを。肝心の大將が、柴屋町の廓に居續けの大騷ぎ。それを見習ふ家來ども、呑み喰ひに日を送り、足の立たぬ程の大酒。鎧を着た者一人もなく、ぐつすりと寐て居る所へ、思ひも依らぬ夜討。一溜りもあらばこそ、坂本の御前へ聞え、放埒の鈴木隼人、見付け次第に縛し上げ、見せしめの爲、磔刑にかけいとある御上意。せめて侍ひらしう腹切らせませうと思うて、鎧を持つて參りました。これを着て自害なされい。介錯は私しが致しませう。早う御用意なされませ。

へ後先そゞろに物語れば、側に聞く身の悲しさ辛さ、隼人驚ろく氣色もなく。

隼人　ハテ、取られてしまうたら、せう事がない。なんとせう。廓へ通うたが、おれの不調法ぢや。

軍藏　サア、それぢやに依つて、捕へられて見苦しい最期をせぬ先に、潔よう腹切るが、よささうなものぢや。サア〳〵、腹なされ〳〵。

逢坂　斯うなり下るも、みんなわたしから起る事。

隼人　ア、コレ、時姫さま。イヤサ、コレ時姫さま。お前は坂本の城内を拔け出て、私しに何れへなりと連れて退いてくれいと、お賴みなされた時姫、ナ、ソレ、時姫さま。

逢坂　サア、如何にも時姫は時姫。

軍藏　ムウ。すりやあなたが、時姫君でござりますするか。

隼人　如何にも。陪臣のわれ達、ついにお顏を見た事もあ

るまい。今度の軍、一方は親、一方は夫。どちらをどうとも身一つに迫つて、出奔なされしところ、お目にかゝつて連れ退く隼人之助。再び歸らうと思はねば、陣所取られたとて、なんとも思はぬ。

軍藏　そんなら時姫さまを連れて、駈落ちなされますか。

隼人　命が物種、マア、腹切る事は止めに仕らう。

逢坂　ア、嬉しやお前の

　ト云はうとするを

隼人　ア、コレ。

　ト思ひ入れ。逢坂、氣を替へ

逢坂　其方のその心で、自らも安堵したでござんすわいなア。

軍藏　出來た。釋迦でも腹切らにやならぬ所を、駈落ちとは面白い。私しもお供いたして、何所までも御先途見屆けませう。ハテ、思ひも依らぬ時姫さま。

　ト思ひ入れ。

隼人　長旅の事なれば、其方は後へ引返して、旅の用意それぞれに、調へて參れ。早う〳〵。

軍藏　心得ました。駈落ちするには要らぬ鎧、捨賣りにして笠も草鞋も買つて參りませう。必らず爰にござりませや。

隼人　隨分爰を動きはせぬ。長途の用意何もかも、取殘しのないやうに調へて參れ。

軍藏　畏まつてござりまする。

　へくつと呑み込み軍藏は、鎧兜も引ツさらへ、來た道後へ引返す、逢坂は猶不思議。

逢坂　時姫さんになりはなつたが、詳しい樣子を、云つて聞かして下さんせいなア。

　ト合點のゆかぬこなし。隼人之助、思ひ入れあつて

隼人　瀨田ケ崎を乘取られるは、兼ねての覺悟。敵方の廻し者、家來とても油斷ならず、短から話せば聟舅の軍ゆゑ、北條より時姫君を、犬に犬を入れて奪ひ取らんとすれど、坂本にはこれ屈強の宇治の方、放し給はず、賴家公に引添うて、番人嚴しく守る最中。其方の恰好面ざしが、時姫君に似たる事、よつく知つての廓通ひ。時姫君にして連れ行きなば、兼ねて北條よりの云ひつけ、是非敵より奪ひ取り、鎌倉へ差出すは定のもの。幼少より嫁入りなれば、誠の時姫と心得、肌を許すは定。その時身共に手引きして入込ませ、時政をば刺し殺すはいと易い。もし取卷かれ、その場に於て死ぬるとも、大將時政を討

つたる大功。坂本は十分の勝ち軍。後代に名を止める栞。親鈴木の三郎と、大忠臣の名を顯はす。これ皆忠義より出でし事。二世まで夫婦に違ひはない。正八幡に誓ひを立てし我が本心。

〽疑ひ晴らし聞入れよと、事を分けたる物語り、聞いて逢坂涙ぐみ。

逢坂　逢ひかゝるその日より、外の男と一生枕は交すまいと、命にかけて惚れたお前。あま勿體なお頼みでも、なんの否やがござんせう。例へ鬼住む島へ捕はれても、お前の女房ぢやと思うて居るが心の樂しみ。その代りには未來までも、一つ蓮の夫婦仲、生れ替つたその時も、矢ッ張り夫婦でござんすぞえ。

〽必らず替つて下さんすなと、膝に凭れて抱きつく、女心の一筋は、常の娘も違ひなき。

ト兩人抱きつく。隼人之助、氣を替へ

隼人　兎角云ふうち、廓の者が迎ひに來れば面倒。ちつとも早く、サア、おぢや。

〽早う〳〵と手を引立て、戀に挾みし石場の濱、渡し場へこそ辿り行く。

ト逢坂の手を引き、橋がゝりへ入る。直ぐに浪幕切つて落す。返し。

造り物、矢橋渡し場。向う近江八景の遠見。前側浪の手摺り、下手乘り場の出しかけ。所々雪持ち、すべて矢橋乘り場の體。この道具誂らへあるべし。乘り場の前に誂らへの船。これに四斗兵衞、船頭にて乘つて居る。この見得、浪の音に雪颪しを打込み、この道具納まる。

ト下手より、隼人之助、逢坂、出て來り

隼人　サア、乘り場へ來たぞや。これから船に乘つて、向うへ渡れば心安い。

逢坂　あの軍藏とやら云ふ人が、見えるぢやないかいなア。

隼人　彼奴、身共に忠臣顏、馬鹿のやうに見ゆれども、底意の知れぬ曲者。矢張り時姫になつて居るが、敵へ知らすこれも計略。この向うへ渡れば、身を育てし乳母が娘、連れ添ふ者は四斗兵衞とて、下人に似合はぬ軍略は、委しくある者。天晴れなよき骨柄と、先達て聞き置いた。これを頼み、何かの用意。坂本へ味方に付ける我が心。もし敵方へ味方した事が、實否を糺すその手段は、其方を時姫と云ふが、心底探る一つの計略。必らずぬかるまい

ぞや。

〽談し合するその所へ、軍藏は旅出立ち、草鞋菅笠酒樽を、ふりかたげに走り付き。

ト軍藏、酒樽を持ち、下手より出て

軍藏　エヽ、先刻の所にござるかと、一遍三界尋ねても、影も形も見えぬ筈。モシ、其やうに急がずと、もそつと靜かにござりませいの。

逢坂　イエ〳〵、とても駈落ちするなら、ちよつとも早いが、拍子があつてよいわいなア。

隼人　これはしたり、時姬君、其やうに輕々しう、物仰しやりまするな。あたりに人はござりませねど、ナヽソレ、矢張り御家來のやうに仰しやりませ。

逢坂　ほんに、人目には女房のやうに見せて、忍ばうと思ふに依つて、今のやうな詞遣ひ。早う向うへ渡つて、逃げ延びたいわいなう。

ト此うち、軍藏、後をキヨロ〳〵して眺めて居る。

隼人　お急ぎなさるは御尤も。コリヤ軍藏、早う船を呼べ。軍藏。

トうつかりして居る。

コリヤ軍藏。

トこれにて悄り。

軍藏　ハイ。

隼人　船を呼べやい。

軍藏　サア、呼びまするが……エヽコレ、今ぢやがな。渡らぬ先に、早う來ぬかいやい。

隼人　渡らぬ先に何が來る。

軍藏　エヽ……イヤサ、アノ、それは。

隼人　なんぢや。

軍藏　なんでござりまるソ。二人や三人では船を出しませぬに依つて、乘合ひが早う來ぬかと申したのでござります。

隼人　エヽ、この期に及び、乘合ひが待つて居られるものかい。借切りにして申しつけい。

軍藏　へイ〳〵、そりや借切りにも致しませうけれど、なんぼうあなたお急ぎなされても、行く先がござりますまい。マア、とつくりと相談して、お渡りなされませ。

隼人　何を馬鹿めが。矢橋へ行けば身が乳母が娘の在所。その樽は即ち賴みの印。持參するには屈強の物を求めて參つた。

軍藏　そんな事もあらうかと、この酒買うて參りました。

マア〳〵、草鞋でもお召しなされませ。
隼人　何をキヨロ〳〵。船に乘るに草鞋はいらぬ。早く船を呼ばぬかい。
　トきつと云ふ。軍藏、後の方を見ながら、
軍藏　ハアイ。サア〳〵、呼びまする。コリヤ〳〵、船頭船頭、早く來い、船頭々々。
〽どやけばうんとふんぞり返り。
　ト四斗兵衛、船より顏を出し
四斗　エヽ、やかましい。なんぢやぞい。
軍藏　なんぢやとは、船に乘るのぢや。此奴が寢恍けて居るさうな。
隼人　ナニ船頭、急に向うへ渡る者ぢや。借切りに致すから、早う渡してくれい。
四斗　借切りならば渡しませう……サア〳〵、乘らんせ乘らんせ。
隼人　イザ、お召しなされませい。
　ト隼人之助、逢坂の手を取り、兩人乘る。軍藏、後に思ひ入れあつて乘る。と四斗兵衛、船を拵らへながら酒樽を見て
四斗　ハ、ア、よい物を御持參なされたな。

軍藏　エヽ、モウ、せう事がない。船に乘るからは、早く急げ急げ。
四斗　お供の奴さん、その樽は此方へおこさんせ。
軍藏　何に致す。
四斗　ひよつと轉げて、溢れなどすると、人の酒でも目が舞ふわいの。
軍藏　此奴、餘ッぽど酒喰ひと見えるわい。
四斗　ソリヤ、出すぞ。
〽水棹押し出す湖の、船は沖中、艪をごし〳〵。
　ト向うの霞、八景など遠くなる心。下手の乘り場引込む。船は沖中へ出てある模樣。
ア、よい樽ぢやな。ずく〳〵濡れてあれば、おれが爲には命の親ぢやがな。
隼人　命の親とは、賴みに行くには好い辻占ぢや。
逢坂　どうやら氣の輕い、好い船頭ぢやわいなア。
軍藏　コリヤ〳〵船頭、我れ〳〵は殊の外急ぎの用。全く駈落ちではないから、後より追手のかゝらうやうはない。船はひつくり返つても大事ない。怪我なしに向うへ着きさへすればよい程に、さう心得い。
四斗　其やうに冷酒呑むやうに、この湖がやられるものぢ

やないわいの。
隼人　イカサマ、唐土の西湖、我が朝の近江八景、斯う見晴らした景色は、どうも云へたものではない。
逢坂　ほんに、住吉屋の二階から見るとは違うて。
ト云はうとするを
隼人　ア、コレ。
逢坂　イヤ、アノ、住吉、和歌の浦よりは、好い眺めぢやわいの。
軍藏　船頭々々、この船は向うへ行くかよ。
四斗　向うへ行かいで、何所へ行くものでいの。
軍藏　思ひなしか、同じ所に居るやうだが。
四斗　ア、、やかましい人ぢやわい。イヤ親方、見れば美しい女中を連れて、差合ひなしの旅でごんすか。エ、、うまい事ぢやな。毎晩泊りになると、不便なは奴どのぢや。ハ、、、。
軍藏　推量せい。
四斗　そりや尤も。斯う云ふわしも、身から一心、便りない者でごんすて。
軍藏　ムウ、そんならわれも女房はないか。
四斗　女房はないでもなかつたが、たつた今この船で、寂滅してコロリとしまひ付けた。
軍藏　なんぢや、女房は死んだ。エ、、ぎゐんの悪い。
隼人　女房が死んだとは、さうしてその亡骸は　何所にあるぞ。
軍藏　海へでもさで込んだか。
四斗　イヤ〳〵、さう酷うはあしらはぬ。この船の底に、我れらが戀人の最期物語り。
〽聞いてたべと明樽取出し。
コレ、この亡骸を見て下さりませ。ア、、一生苦を殘したこの鼻に吸ひ取られ亡骸はほうがら。なんと旦那、女中さん、お前方の情で、後連れは持たれまいがな。
逢坂　オ、笑止。この世界に澤山な女子、誰れなと持つたがよいわいなア。
隼人　これはしたり、あの者が云ふは女房の事ではない。酒の事ぢやわいの。
軍藏　此奴底拔けの酒喰ひぢや。この樽を見かけ、太い奴の。
隼人　イヤ、船頭、望みならば振舞うてやりたいが、この酒は身が行く先へ、頼みの印に持つて行く酒。折角の壁訴訟なれど、どうもならぬわいやい。

四斗　頼みの印とあれば、念の入つた結構な御酒であらうな。エ、、咽喉がおへるわい。ちつとばかりはなるまいかな。

軍藏　けちぶとい奴の。こま言吐かずと急げ〳〵。急げと言ふは早くやる事だ。早くやるとは急につける事ぢや。急につける事とは、早く歩く事ぢや。

四斗　そんならどうもなりませぬか。

軍藏　うぬに喰はせる程ならば、おらが呑むわえ。

四斗　ア、〳〵〳〵、ア、、堪らぬ〳〵。死ぬる〳〵ト苦しむ思ひ入れ、

隼人　コリヤ、なんと致した。

四斗　なんとしたとは、マア、よう思うても御覽じませ。〽後の連合ひ叶はぬとは、アタ胴慾なこなたの口上。殊更ひだるい最中に。〽呑まねばならぬと思ひ詰め。持病の疝積、腹が強張つて。アイタ、、、。ト又苦しむ。

軍藏　コリヤ、身を揉むな。急所は外れた。體に疵は一つもないぞ。

隼人　コリヤ〳〵、船が流れるが、どう致すのぢや。

四斗　イヤモウ、船はどうなと行き次第ぢや。

逢坂　どうやら怖いやうな事ぢや。どうぞ仕様はないかいなう。

軍藏　コリヤ、どうか仕様はないか〳〵。

四斗　ア、、これには一杯呑むと、ツイ癒るけれど、此方の樽は殼なり。ア、、叡山颪しで船がぐらつく。皆寄つて私しを、どうなとして下され。何所へ行くやら知れぬぞ。〽あゝ心がぐれ〳〵して、深き所へ沈むやらにはんべるなり、この體ならば相果つべし、酒樽手向けて賜はれと、誠しやかに泣き居たる。

逢坂　それはマア、どうぞ仕様はないかいなア。この場で癒る事なら、呑ましてやつたがよいわいなア。

隼人　エ、コレ、見す〳〵手の見えた作病。せう事がない。呑ましてやれ。

軍藏　忌々しい、酷い目に遭はし居るぞよ。

逢坂　それでも酒で癒る事ならば、早う呑ましてやつたがよいわいなう。

四斗　女中さん、よう仰しやつた。人間一人救ふのぢやわいな。

〽弱身へ付け込む作病持ち、憎しと思へどせう事も、樽と茶碗を差付けて。

軍藏　コリヤ〳〵、船頭、藥ぢや、喰へ。

四斗　ア、、よう下されました。そんならマア、呑んで見ませう。

ト注いで呑み

ホウ、さつてもけうといお藥ぢや。とてもの事なら、また發らぬやうに、補ひを下さりませ。

〽二杯目も、手づから樽の口當り。

隼人　コリヤ〳〵、三獻目は向ふへ船を付けてから、勝手に呑め。その代りに其方の樽へ、酒は皆移してやらう。軍藏、やつてしまへ。

軍藏　エ、コレ、旦那の御意が出たら是非がない。ソリヤソリヤ。

ト酒を四斗兵衛の樽へ移して

サア、さつぱりと進上ぢや。そんだいに、早く船を急げよ。

四斗　これでさつぱりと氣色は直つた。藥も斯う利けば、病の發るもよいものぢや。ドリヤ、精出してやつてくれう。

〽きほひかゝつて押切れば、風まんもよし一刻に、矢橋の乘り場漕ぎ寄する。

ト此うち上手の方へ乘り場突出す。よろしく船を漕ぎつけ

それ〳〵、もう着き候ふ。サア〳〵、上がらんせ〳〵。

軍藏　なんぢや。もう着いたか。

隼人　これ程早く着くものを。サア〳〵、お上がりなされませ。

ト逢坂を介抱して三人上がる。隼人之助、四斗兵衛が首筋持つて引上げる。

四斗　ア、、コレ〳〵、どうするのぢや。

隼人　どうするとは船の上で、足弱を見掛け、憎くい奴の。おのれがやうな奴は、カウ〳〵。

ト投げつける。軍藏も踏み倒す。

四斗　アイタ、、、。

隼人　いつそぶち放して。

トきつとなるを逢坂留めて

逢坂　ア、コレ、大切の身で、船頭風情に手を下ろすと云ふ事があるものか。堪忍したがよいわいの。

隼人　エ、、命冥加な奴。コリヤ軍藏、彼奴が樽に此方の

酒の入れた儘、移し替へるに及ばぬ。樽ごと持つて來い。

軍藏　畏まりました。ヤイ、醉どれめ、この空樽は、うぬにくれるワ。アノ大盜人め。

〽立蹴にどうと踏みのめし、足を早めて急ぎ行く、ひよろひよろ起きて打見やり。

ト皆々入る。四斗兵衞、起き上がり

四斗　ヤレ〳〵、あまの命を拾うた。どうやらうんなりした侍ひぢやと思うたが、氣の短かい奴ぢや。オヽ〳〵、船賃も拂はずに行き居つた。コリヤ、ヤイ〳〵、アヽ儘よ。二杯の船賃ぢやと思や濟むかい。併し、早う漕ぎ戻さう。また拍子が惡いと、どんな目に遭はうも知れぬ。ドリヤ、やりつけう。

〽呟きながらそろ〳〵と、船漕ぎ戻せば石場の岸、數多の人聲。

トこれにて向う誂らへの通り動く。船、下手へ引込む。上手の乘り場も引込む。下手へ以前の乘り場突出す。これに石原源太、陣立てその外軍兵大勢、船を呼び居る。四斗兵衞の船、上手より出て來り、直ぐに漕ぎ付ける。軍兵皆々バラ〳〵と乘る。

〽乘せよ〳〵と打招く、ゑいさよいささつ〳〵さ、矢を射る如く風添うて、元の岸際追ひ〳〵と、馳せ來る軍兵飛び乘れば。

ト大勢殘らず飛び乘る。四斗兵衞、恟りして

四斗　アヽ、コレ〳〵、其やうに滅多無性に乘ると、足がいつてどうもならぬ。マア〳〵、よい程乘つて、後はそこらで賴むと、舟拵らへてくれる程に、餘の船に乘つてもらはう。

源太　ヤア、馬鹿盡すな。鎌倉の急御用、隙取ると首が飛ぶぞ。早く船を出し居らう。

四斗　南無三、御用船か。そう事がない。早うやりませうが、皆仰山な形ぢやに依つて、一倍船がこづむ。コレ、家來樣方、手傳うて下さりませ。

源太　ソレ家來ども、皆艪へ取りついて押せ〳〵。

軍兵　心得ました。

〽心得てん手に艪へ取りつき、滅多無性に押し出す。

四斗　アヽ、コレ〳〵、其やうにしては、船が山へ昇るわいの、も一つ艪がある。コレ〳〵、こちらへ斯う立てるぢや。サア〳〵、皆取りつかんせ〳〵。

軍兵　合點ぢや〳〵。

四斗　コレ、其やうに一挺の艪へ取りつき、これをたかい艪

と云ふわいの。

源太　如何にも〳〵。

四斗　ヤレ、精出して押したり〳〵。

源太　オツと心得。やつしつし〳〵。

へしつと拍子の聲揃へ、船を遙かに漕ぎ渡る。

ト船、上手へ引込み、直ぐに下手へ廻る。下の乘り場取る。右の船、下手より漕ぎ來る。

四斗　イヤ申し、お前方は大勢、どれへござりますな。

源太　おのれらも聞き及ぶ、京鎌倉の合戰最中。夜前鈴木隼人之助が固めたる、瀨田ヶ崎の陣所は、主人橋塚九郎どの、夜討にしてお取りになつたるところ、鈴木隼人之助、時姫君を連れ立退いたと、注進の者あつて、手筈の所まで驅け付けたれども、早風を喰つたと見える。時姫君を時政公へ無事に差上げれば、莫大の御褒美。慥かにこの湖を渡つたに違ひはない。なんと心當りはないか。

四斗　ムウ、時姫に隼人之助とは……そんなら先刻の三人連れが。

源太　褒美は望み次第ぢやが、其方は知つて居るか。

四斗　エヽ、知つた位なら、引ッ縛つて褒美にせうもの。殘り多い、この船に乘せたわいの。

源太　ヤア、して〳〵何方へ失せた。

四斗　何方の此方のと、船着けにや行く先は知れぬ。

源太　さうぢや〳〵。家來ども、早く押せ〳〵。

へ氣は焦立つに家來ども、逆卷く浪を押し切つて、ねんなら矢橋に漕ぎ寄せる。

ト此うちに上手へ乘り場突き出す。トヾ、船が着ける

四斗　サア〳〵、着いたぞ〳〵。

源太　出かした〳〵。早く上がれ〳〵。

四斗　オツと待つたり。急くまい〳〵。大切の追手、一人でも怪我さしてはならぬ。足場をかけて上がるぞ。乘り急ぎするとも、上がり急ぎするなとは爰の事でごんすわいの。

ト云ひ〳〵棹を持つて上がる。

源太　サア〳〵、早く足場をかけい。

四斗　足場をかけるぞ。その足場は斯うぢやと

へ突き出す流れに船どつと、一息風に一町ばかり、沖の方へ一文字、これは〳〵とあわてる家來、船はくる〳〵猶沖へ、渦に卷かれて主從が、あれよ〳〵と叫べども、詮方波の吹え面は、心地よくこそ見えにける。岸には四斗兵衞、簑をかけ。

ト四斗兵衞、三番叟の拵らへにして

四斗　ハヽア、舞ふワ〳〵。我れらも喜びの舞を一さし舞はう……大酒よ〳〵、この樽より外へはやらじとおんもふ。

ト三番叟になり、四斗兵衞、舞ふ。此うち、船クルクル舞ふ度に皆々、助け船〳〵と云ふのを拍子に合せエイ〳〵エイ〳〵〳〵。

〽えい〳〵と浮かされて、烏飛びして。

ト三重にて。

よろしく幕

四段目

四斗兵衞住家の場

役名＝鈴木隼人之助。傾城、逢坂。入頓坊。玉木軍藏。百姓、德八實ハ千島冠者惟信。石原源太。講中、持兵衞。同、丹五郎。四斗兵衞女房、お卷。渡し守、四斗兵衞實ハ後藤和田兵衞秀盛。

造り物、三間の二重舞臺、向う破れ壁、納戸口、佛壇、上手障子屋體。下手落ち間、水の手を取る。見事なる樋の口。山の書割りの上にあり。この前に松の大樹。いつもの所門口。この道具崩す仕掛けあるべし。すべて貧家の取合せよろしく、幕の內より、百姓德八、講中丹五郎、同じく持兵衞、坊主入頓坊、皆々並んで飯食ひ酒呑みなどして居る。女房お卷、世話女房の形にて給仕して居る。皆々は飯食ひながら詠歌を唱へ居る。この見得、詠歌に合せ松虫の鉦にて、幕明く。

皆々　拾六番に淸水寺、松風や音羽の瀧は淸水の、結ぶ心は淸しかるらん。

入頓　オツと待つたり〳〵。三十三番を十六番にして、爰が中入りぢや。マア〳〵、ゆつくりと飯食うてしまはんせ。

まき　マア〳〵、お飯も酒も濟んでからの事がようござんすわいなア。

皆々　さうしませう〳〵。

ト御卷、給仕して廻る。

德八　イヤコレ、貴樣達は下戶ぢやに依つて、飯櫃の胴潰しにかゝる。おりや又妥な四斗兵衞とは、この頃の近付き、新參の同行でも、酒好きの一蓮托生、呑み草臥れて

呂律が廻らぬと、詠歌が痺れて中風病みの寢言になる。今のうちに三十三番こじつけてもらはう。

持兵　一體觀音講の當家に當つた四斗兵衛が、御縁日に魚釣りに行き、留主のうちに講中が、飯食ひ〳〵詠歌を唱へるとは、手廻しのよい、此やうな丁寧な觀音講はござるまい。

入頓　この又觀音講に念佛を挾むと、三十三番が六十六番になるやうなものぢや。そこで先途の割合ひに、マア念佛は拔いたものぢや。

德八　さうぢや。念佛講なら念佛ばかり、觀音講に念佛交ぜるのは、富で云ふと觀音樣がふしになつて、念佛がびりにするやうなものぢや。

丹五　それ〳〵、佛に分け隔てするは勿體ない事ぢやて。

入頓　サア、それでも退屈なに依つて、十番目から酒や飯を出して、喰ひ〳〵唱へると云ふが、愚僧の思ひ付きぢや。

持兵　それに又、拾六番目で留めたのはどうぢやの。

入頓　ハテ、今度の當家の時に、十七番目から唱へると、譯は云つて食ひ物は二杯にしてやる。十七番目から先は觀音樣に借りぢや。

德八　聞えた。行司預つて勝負は今度取らす。併し、貴樣ば餘ッぽど軍法者ぢや。今度軍が始まつたげなが、抱へに來さうなものぢやがな。

入頓　まだ〳〵こんな事ぢやない。もちつと工風を付けたら、初手から飯食つて、去にしなに歩き〳〵唱へてもよい事ぢや。

皆々　ハヽヽヽ、そりやいつちよいわい。

まき　お前方の云はしやんす事は、一向後生ではなうて、觀音樣をば嬲り物にするのぢや。又こちの人もこちの人ぢや。好い加減に戻つたがよいわいなア。

入頓　イヤ、戻らぬ方がよいぢや。四斗兵衛が内に居ると、あれが呑むだけ、おれが呑むのが少なうなる。ならう事なら、こなたも留主がよい。皆さうぢやないかいの。

皆々　そんなものぢや。ハヽヽヽ。

〽話し半へこの家の主、釣り棹へふごぶら〳〵と、内へ戻るも千鳥足、表の松の木打眺め。

ト四斗兵衛、口蕃の形にて、ヒョロ〳〵して、向うより出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、門の松の木を眺め廻し

四斗　ヤイ、おのれは人の門口に立つて、主の戻るに强肱

して、突ッ張り返るは、なんぢやい〳〵。ぐしや〳〵した面構へぢやな。
ト お卷、門口へ出て
まき　おとましや。また醉うて戻らんしだな。コレ、こちの人、同行衆も參つてござる。ちやつと内へ入らんせいなう。
四斗　嬶よ、われが顏は四つも五つもあるはどうぢや。
まき　サア〳〵、よいわいなァ。マア〳〵入らんせ。
ト 無理に連れて入る。
德八　四斗兵衞、遲かつたの。酒は皆我れらが平らげて、もう一雫もないワ。
四斗　出かしやつた。とても吞むならさうぢや。飯はどの位ぢや。
入頓　イヤ、飯はこの入頓坊が、力出して見ても、根が少食ぢやに依つて、たつた二十八杯。
講中　イヤ、きつい少食ぢやわい。ハヽヽヽ。
四斗　イヤ、酒も精進ではいかぬでえす。觀音樣へ備へてやらうと思うて釣つて來たが、この鮒を作つてやらうではないか。
皆々　なんぢや鮒か。

まき　コレ、こちの人、如何に酒の業ぢやと云うて、そんな生臭い物を。ドレ〳〵、此方へおこさんせ。
四斗　エ、何吐かす。佛に生臭いと云ふ事はどこにある。酒と肴とは坊主の食ひ物ぢや。
德八　さうぢや。そこで南無酒如來とも云ふ。
四斗　魚ではしやけ如來とも云ふ。魚に寄せての說法、說いて聞かさうか。
入頓　こりや聞きたいわいの。
皆々　どうぢやの〳〵。
四斗　我れ魚々してもさばせいご、ふな窶が見るに寺どぜうへも參らず、明暮れ鱧に身を作りし者、忽ち地獄へとんぼり貝、すつぽんとすべり込むべし。
皆々　南無阿彌。
四斗　かれいこちを見るに付け、浮世を鰻にぬめり暮らし、あじほう〳〵と三世佛、なまづにては鰯の上にて太刀魚ともなり難し。
皆々　南無阿彌。
四斗　鰹節一蓮托生、無常の風にふな〳〵となつて、このしろやきかざの時、鰕にしんに向ひ、生鯛生貝と念ずれど、くらげの空も赤貝となるべし。

皆々　南無阿彌。

四斗　皆心を榮螺のやうに廻さずとも、鱸あげたあじの淨土へきすごをなされ。今日の鰒のてばつうこれまで生蛸。

皆々　なまだこ。

四斗　なまだこ。

皆々　なまだこ〳〵。

四斗　生蛸坊主。

皆々　冥加錢々々々。

まき　コレイナ、とつけもない。何云はんすぞいなア。

入頓　ア、有り難い。今の說法聞く上は、今日向愚僧も得道して、精進物を食ひやめう。

四斗　えらいワ。御坊の得道。えらいでえす、高が斯うぢやないか。この世で牛や馬に酷う當つた者は、來世で牛や馬に生れるとあれば、そこで佛に酷う當つて置くと、その報いで佛に生れる理窟ぢやないか。

入頓　さうぢや〳〵。時にモウ喰呑みしたら、去なうぢやないか。

皆々　如何にも去なう〳〵。

德八　然らば四斗兵衛どの、いかいお造作でごんした。

ト酒の醉の體にて辭儀する。

四斗　これは〳〵、御叮嚀な事でござります。

ト同じく醉ひたる體にて辭儀する。

皆々　お暇申しまする。

四斗　ようお出でなされました。

ト門口へ出る。德八は納戸へ入る。

入頓　ア、コレ〳〵、其所は納戸口ぢやわい。コレ〳〵。

丹五　あゝ、づたいになつてはどうもならぬ。いつそ爰に酒の醒めるまで、寐さして置いてもらをかい。

まき　好い加減に目が明いたら、起して去なしやんすでござんせう。

持兵　そんなら賴みますぞや。サア〳〵、皆ござれ。

〽挨拶とり〳〵打連れ立ち、我が家〳〵へ歸りける。

まき　皆さん、ようお出でなされました。

ト皆々橋がゝりへ入る。

四斗　嬶よ、去ぬる者に挨拶はいらぬ。五六合燗してくれ。

まき　其やうに醉うて居て、まだかいな。今日は何所へ行て隙がいつたのぢやえ。

四斗　隙がいる筈ぢや、大きな盗人に遭うてな。

まき　エ、、アノ、渡し場でかいな。

四斗　オイヤイ、二人は男一人は女子ぢや。三人連れの晝

頓ぢや。おれが酒樽盜んで逃げ居つたわい。
まき　酒樽ばかりで、外の物は取られはさんせぬか。
四斗　イヤ、おれも氣が附いて取廻して置いたに依つて、外の物は取られなんだ。夫婦連れで供連れた盜人ぢや。怖い時節なう。
まき　ほんにマア、鬼の女房に鬼神とやら。盜みに歩くと云ふは、油斷のならぬ。さうして、酒樽盜んで、何にせうと思ふのぢやいなア。
四斗　さればの事いやい……そりやさうと、觀音講に酒外れすりや。
まき　さう云ひ出して吞まずには置かんすまい。德利に燗してある酒が殘つてある。
　ト取つて來て
ソレ、上がれ。
　ト德利と茶碗を出す、
四斗　オツとよし〳〵。さらば一つ下されうか。
　ト吞んで
オヽ、えいワ。ナニ卷の方、棚元もしまうたら、これへ出御ましませい。晝は矢橋の渡し守、夜は娼樂の渡し守、德利御樂もこれへお出で。
　ト注がうとして
なんぢや、口々せう。これは慮外。矢張り茶碗へ。イヤイヤ、ハツ〳〵、これは〳〵。
〽口から口へ樂しみ吞み。
　ト獨り戯むれ吞み、思ひ入れあつて
イヤナニ内儀所。この德利で我れら一首見しらかす。斯うもあらうか……德利と吞死にせよ上戸達、下戸なりともひやは遁がれず……イヤ、なんとけうといか。ヤ、コレワイサ。
　ト醉うたる體にて其まゝ寢入る。
〽横になるより高鼾、外の噂は如何な事　胸の大海底知れず、夫が常の轉寐を、枕屏風で風ふせぐ、外には人目せぐりたる、鈴木隼人は逢坂を、これ見よがしの主あしらひ、伴ひ來る藁屋の軒、軍藏目早く。
　ト向うより、隼人之助、逢坂、軍藏、口幕の形にて出で來り
軍藏　お旦那、いま敎へた松の木のある所は、これでござりませう。
隼人　イカサマ。案内せい。
軍藏　畏まりました。

ト皆々本舞臺へ來る。軍藏、門口を開けて

まき　賴みませう。四斗兵衛どのと申すはこれかな。

隼人　アイ、四斗兵衛はこれぢやが、どなたでござんすえ。

まき　イヤ、卒爾ながら御內實、お卷どのに用向きあつて參つた者。ちよつと逢はにしては下されまいか。

まき　卷はわたしでござりまするが、どれからお出でなされました。

ト云ひ〳〵門口へ出て顏見合せ

ヤア、あなた樣は鈴木隼人之助さまではござりませぬか。

隼人　其方はお卷か。

まき　これはしたり、マア〳〵、お入り下さりませ。

隼人　イヤ、少と大切なる連れがあるが、誰れも居ぬか。

まき　誰れもござりませぬ。サア、マア、お入り下さりませ。

隼人　然らば許しやれ……先づお入りあられい。

〽主あしらひも勿體も、里に馴れたる褄はづれ、三人打連れ內に入る。

ト隼人之助、逢坂を先に三人內へ入る。お卷、皆々に茶を酌んで

まき　せき〳〵お見舞ひ申し上げたう存じましても、御覽じまする通りの住居、世帶にからまされまして、えゝ參りませぬ。殊に今度は大きな軍があるとやら、あなた樣にも、さぞ何やかやとお忙しうござりませう。どうか斯うかと案じてばかり居りましたに、マア〳〵、御機嫌で、おめでたう存じまする。

隼人　その事について、この家の主に賴みたい一大事。父鈴木三郎より、恩を請け續いだ乳母が娘、乳兄弟のよしみ、違背はあるまいの。

まき　何かは存じませぬが、御恩のお主、なんの違背がござりませう。して、お賴みとは、何事でござりまする。

隼人　イヤマア、その儀は御亭主に逢うての上。高は仔細あつて暫しのうち、爰に逗留が致したい願ひ。

ト軍藏より口蓋の酒樽を取出して

これは近頃粗末なる贈り物なれど、久し振りで參つた印の一樽、納めてくりやれ。

ト差出す。

まき　これは改まつた。何をなされて下さりますぞいなア。

隼人　イヤ〳〵、其方は格別、亭主には初めての對面。表が濟まぬ。納めて置いてたもれ。

まき　これはマア、有り難う存じまする。左樣ならお納め申しまする。コレ〳〵こちの人。

ト立つて屛風の內へ入り

コレ、四斗兵衞どの。俄にお客があるわいなア。

四斗　ナニお客とは。

まき　アノナア。

四斗　其方の母の養ひ君がござつたか。

まき　お前、聞いて居さんしたかえ。

四斗　現のやうに耳へ入つた。

ト起き上がる。

まき　サア、久しうお見舞ひにも行かぬのに、わざ〳〵尋ねてお出で下されて、この樽をお前に土產に遣れてゝ下さんしたわいなア。

四斗　そりや酒かい。御叮嚀に。お目にかゝらざアなるまい。

ト屛風引退け、ゆら〳〵出て

これは〳〵、ようこそお出でなされました。

隼人　これは御亭主でござるか。拙者は卷が由緣の者でござる。

四斗　イヤモウ、兼ねてお噂は。

ト見合せ悧り。

隼人　ヤア、。

四斗　ヤア、。

逢坂　ヤア、。

軍藏　貴樣は。

逢坂　其方は。

四斗　こなた樣は。

皆々　ヤア、、。

ト大悧り。お卷、合點のゆかぬこなしあつて

まき　エ、、氣味の惡い。なんぢやぞいなア。

隼人　そんなら四斗兵衞どのと云ふは

逢坂　渡しで逢うた

軍藏　呑助の船頭。

まき　アイ、網にも行つたり、釣にも行つたり、その間には渡し場へ行かれますが、そんならあなた方は、お近付きかえ。

隼人　近付きの段かいの。

軍藏　樽ぢや〳〵。

まき　樽ぢや〳〵とは……オ、、先刻にから氣が付かなんだが、こりや此方の樽ぢや。この樽はこなさん、今日渡

し場で盗まれたと云はしやんしたぞえ。
四斗　斯う顯はれた上からは是非に及ばぬ。さては其許樣は隼人之助さまであつ樽よな。どうやら見樽やうにあつ樽が、舟の內でゆすつ樽は、私しが惡かつ樽でござります。
隼人　これは〳〵、痛み入つたる挨拶。
軍藏　慮外し樽段は眞平。
四斗　それはお互ひに。
　ト顏見合せ
四斗　イヤモ、膽が潰れた。
〽愕りし樽たるの口、卷に得云はぬばかりなり。
まき　なんの事ぢや。モシ、たつた今こちの人の申されまするは、この樽は女連れの盜人に盜まれたと云うて。
四斗　ヤイ嬶よ、默れ。あんまり男の云ふ事を、もうけにするものぢやないわい。
まき　そんなら渡し場でこの樽は。
四斗　例の好物なれば盜人ぢや。
逢坂　モウ〳〵、船を眞中で廻した憎さと云ふものは。
隼人　一生にいぢられたと云ふは、これが初めぢや。
軍藏　見す〳〵酒をぐづり呑みにしられた時、腹が立つて腹が立つて。
まき　なんの事ぢやいなア。
四斗　女房騷ぐな。盜人を捕へて見れば我が男、何も申しませぬ。ハイ、これでござりまする。
　ト尻もつ立て、辭儀して顏を上げ
ハ、、、。
まき　イヤモウ、大方碌な事ではござんすまい。此やうに見えましても、正直な生れ付き。惡い事がござりましたら、御料簡なされて下さりませ。
〽隼人あたりに心付け、逢坂を上座へ直し。
隼人　御亭主に賴みたいとは餘の儀でない。これにお渡りなさるゝが、坂本の主、賴家公の御簾中、時姫さまぢやわいの。
まき　エ、。
四斗　その時姫さまが、何ゆゑこの所へはお出でなされました。
隼人　その仔細は。
逢坂　聞きも及んで居やらう。わしが父上は北條時政さま、我が夫賴家さまと、この度の軍。親に付けば操が立たず夫に付けば親への不孝。所詮この身を京鎌倉へ立寄らず、

隼人を頼んで何國へなりと、身を隱す心ぢやわいなう。
隼人　時姬さま御行くへ知れずと聞き、鎌倉より詮議最中。暫らく、この所に匿まひ、坂本へ味方して、力となつては下さるまいか。人目には只町人と見ゆれども、智謀軍術逞ましき四斗兵衞どのとは、先達て承り、推參したる隼人之助。何卒一方の軍師とも、おなり下さらば忝なう存じまする。
〽身をへり下り頼むにぞ、女房差出で。
まき　何がさて、大切なお主樣のそのお主樣、お匿まひ申さいでなんと致しませう。シタガ、わたしの所のを軍師とやら。ホヽ、わつけもない。正直一遍で年中酒呑み詰め。他愛のないが愛になりまするばかり。侍ひの事は一向でござりますわいなア。
軍藏　サア、その酒呑みが、旦那の見込みぢやといの。
まき　何が見込みになるぞいの。
軍藏　そりや、おらも知りませぬ。
〽四斗兵衞は默然と、始終手を組み思案顏、遙か下がつて兩手を突き。
四斗　見苦しき茅屋へ、御入り下さる段、有り難う存じまする。女房が爲にはお主同然の隼人之助さま、粗略に致しませうやうがござりませぬ。ソレ、女房ども、奥へお伴ない申しや。
隼人　然らば御亭主、お匿まひ下されうや。
四斗　お心措きなう。
隼人　先づ以て忝なう存じまする。
まき　御覽じませ。念入れて叮嚀になると、あゝ云ふ人でござります。マア、何か詳しい御樣子は、段々承りませう。サア、奥へお出でなされませ。
隼人　何かは後程、ゆる〳〵御意得ませう。
逢坂　萬事夫婦の衆、よいやうに頼むぞや。
軍藏　身共は何所ぞ、片脇に置いて下され。
まき　この納戸から、奥の小座敷へお出でなさんせ。
軍藏　ドリヤ、ゆつくりと足を伸ばさうか。
まき　お二人樣、御案内いたしませう。
〽女房が案内に兩人は、打連れ一間へ通りける。
トお卷、先に隼人之助、逢坂、上手屋體へ入る。軍藏は納戸へ入る。
〽四斗兵衞は樽引寄せ、口切り酒の胸算用、茶碗へどぶどぶ入頓坊、いつきせつたもかたし〳〵。
トばた〳〵にて、入頓坊、橋がゝりより走り出て

入頓　四斗兵衞、内にか。
　ト大きな聲して云ふを
四斗　シイ……御坊、なんぞ用か。靜かに〳〵。
　ト入頓坊、小聲にて
入頓　鎌倉から何者にもせよ、忍びに鍛錬の者、坂本の城中へ忍び込み、時姫を盗み出して來る者に於ては、大名に取立てると觸れたであらうがの。
四斗　そりやモウこの間の事ぢや。それが何とした。
入頓　されば、その時姫が渡しを渡つて、この在所へ來たと云うて、追ひ〳〵と渡しを渡るは。
　ト云ひかけるを
四斗　コレ、もうその後は云ふまい。コレ。
　ト囁く。入頓坊、悧りの思ひ入れ。
入頓　ム、ウ。ヨウ〳〵〳〵。
四斗　所で、斯うする積りぢや。
　ト囁く。
入頓　よいワ。時に、兼ねて云ひ合した通り、そりや皆講中も一統ぢや。
四斗　隨分ぬかりのないやうに。ナ。
　ト囁き呑み込ます。

入頓　そんなら後に。
四斗　合點か。
〽おゝ合點と入頓坊、飛ぶが如くに駈り行く、また引受けて一石呑み、底意の知れぬ底拔け上戶、目先じろ〳〵飛び交ふ蜂、茶碗の中に十四五疋、群りたかれば。
　ト差し金付きの蜂大分、四斗兵衞の側を飛びかふ。
ホ、、おればかりが酒喰ひかと思うたれば、蜂めは大きな呑助ぢや。オ、、何所からかと思へば、松の木に大きな蜂の巢。コレ、爰に置いて見よ。
　ト茶碗を松の巢の下へ持つて行き、こちらよりヂッと見て居る。
〽茶碗の酒を蜂の巢の、下に試せば追ひ〳〵に、我れ飛び出んと思ふにや、巢の中鳴いてゆるぐと見えしが、忽ち蜂の巢地に落ちて、うろたへ廻る蟲の聲、蜂は四方に散亂たり。
四斗　ハ、ア、奇妙〳〵。蜂は毒あつて人を螫せども、また甘き蜜あつて、人をなづく。北條の蜂蜜これなり。構へ堅固に巢を拵らへ、大軍を以て攻むれども、坂本には時姫と云ふ、好物の酒のかざに、屢々鉾先をゆるめ、諸大名も弓馬の分捕り高名より、宇治の方を奉るか、時姫

を奪ひ渡さは、莫大の恩賞にあづからんと、この儀に凝つて軍慮を忘るゝ。瀨田崎の陣所を攻め落したる、橋塚九郎は即ちこの蜂。時姫の酒の匂ひに、寄り來る蜂の巢。この所で蜂を落すか面白い。こりや呑まにやならぬわい。

ト茶碗を取上げ、また呑みかける。

〽また引つかける續け呑み、お卷は一間立出でゝ。

まき　これはしたり、好い加減に取上げて置かうと思うたに、又一人して呑むのかいなア。

四斗　面妖な。男の咽喉しめし居る。おれが貰うた酒を、おれが呑むに、誰れに遠慮があるかい。

まき　そりやモウ、腹の裂ける程呑みたか呑んだがよいが、先刻に奧から見れば、入頓坊がお前に呟き騷きして去んだは、なんぢやえ。

四斗　ヤア。

まき　なんの事ぢやいなア。

四斗　ありや、觀音講の掛け前の事。

まき　イヽエ、さうぢやあるまい。今日膳所の役所へ行つたは、鎌倉より時姫さまの

四斗　そりや知れた觸れ狀の事ぢや。

ト靜かに云ふ。

まき　サア、その觸れ狀の事を、講中の話して居たが、をかしう胸に當つてあるが、今日來た奧のお客、お前はマアどう思はしやんす。

四斗　どうも思はぬ。おりや兎角呑みさへすりやよいぢやて。

ト構はぬ思ひ入れにて呑んで居る。

まき　イヽヤイナア、お前、金輪際匿まふ心かいなア。

四斗　そりや知れた事いやい。

トお卷、思ひ入れあつて

まき　そんなら誓言立てさんせ。

四斗　違ひなし、間違うたらどろ〳〵がつたいになつて、一生酒呑まぬ法もあれ。

まき　そりや、ほんまかえ。

四斗　ほんまの噓のと云ふ所かい。

ト云ひ〳〵呑む。

まき　コレ、マア、酒を止めなさんせいなア。

四斗　この酒を止めたら、おりや死ぬるわい。ア、、羨ましいなア。時姫と云ふ人は、慥か隼人どのと戀慕れゝつをやらるゝわえ。先刻に隼人どのを見る目付きの嫉らし

さ。イヤ又、尤もぢや。あのやうな美しい女子を連れて歩くと、釋迦でもツイ手が觸り足が觸り、エヽ、よからうなア。こりや呑んでなとこまさう。

ト無性に呑む。

まき　じやら〳〵云はずと、先刻に仰しやつた、お味方の事はどうぢやえ。

四斗　味方せう。したい〳〵。

まき　そんなら、して下さんすか。

四斗　してやらう。

ト お卷の體をヂロ〳〵睨めて

エヽ、しゆんだものぢやわい。先刻にお姫様のござつた時には、うまアいかざがそこら中へぽつぽと匂うたが、今この女のかざは、洗濯物の糊のかざで、乾物屋の引出しを嗅ぐやうな。エヽコレ、同じ人間に生れて、とても女房を持つなら、あゝ云ふ結構な、うまいかざのするのを抱いて寐てこそ甲斐があれ。アタしゆんだ。呑んでくりよ〳〵。

トまた呑む。お卷、側へ寄つて

まき　お前、をかしい事云はしやんすなア。しゆんだ〳〵と、しゆんだ女房は初めから合點で、持たんしたぢやないか。今に限つて、しゆんだのなんのと、アタをかしい。

トつんとする。四斗兵衞、構はず呑んで居て

四斗　斯うッと。あの二人は二十三四と、こちらが十七八。誠に油が乘つた最中ぢや。エヽ、持ちたい〳〵。

まき　何が持ちたい。

四斗　女房の好いのが持ちたいと云ふ事。

ト お卷、腹立て

まき　急に味な事云はんすは、そんならこなさんは、時姫さまに惚れたのかいな。

四斗　エヽうるさい。また悋氣か。何をアタ怪體な。

まき　何が怪體な〳〵。

ト 無性に疊を叩く。

四斗　世帶じゆんだ、怪體な面ぢやと云ふ事やい。

まき　世帶じゆんだは、皆こなさんがした事ぢや。誰れが知つた事で。

四斗　エヽ、どう云や斯う云ふと、とんと見比べると、泥龜とお月様程違うてある。

まき　オヽ、精出してお月様に涎流したがよい。その泥龜になた又、なぜ吸ひついて居やしやつた。

四斗　誰れがいやい。

まき　こなたがいの。
四斗　おのれが吸ひつきくさつて、エヽ、否ぢや〳〵。出て行け。
まき　出て行く。
四斗　オヽ、出て行け〳〵。
　ト　お卷、ムツとして
まき　もう堪忍袋が切れた。コレ、こなたは
　ト　云ひかゝるを打消し
四斗　イヤ〳〵、何も聞かぬ。出て行け〳〵。
まき　オヽ、さう云はしやんすりや、もう云はぬ。出て行く。
四斗　出て失せい。エヽ、相手になるも怪體なわい。
〽樽を枕にどつかりと、横にこけたる我まゝ氣質、云ひ破つても女氣の、常に替りし夫の心。
まき　もう添うて居ても面白うない。なんの、こなさんのやうな人に、しをたら〳〵と辛抱するもので。去ぬるぞえ……これから又、男ひでりはあるまいし、わしも牛を馬に乘り替へにやならぬ。好い男持つて見しよ。張合ひぢや。暇取つたからは、ちつとわしも女房振りを作つてドレ、去られて去ぬる拵らへせうか。

四斗　ほやかすと、早うせう。
まき　去ぬる。
〽云ひ諍ひの聲高く、何事やらんと一間には、隼人夫婦が窺ふとも、白木汚れし鏡立、心は剝げぬ櫛箱も、解けぬかもじの百千筋、髮のおくれのはら〳〵と、今結ぼれし我が思ひ、誰れとは木櫛と唐櫛の、常の引とき引替へて、油とろりと白粉の、艶もなまめく紅筆に、所目馴れぬ着る物は、曉れに仕立てし繻子の帶、柳の腰に花の露、見違ふばかりの女房ぶり。
　ト　此うちにお卷、鏡臺を出し、粧ふこなしあつて、着物着替へる事よろしくあるべし。四斗兵衞の側へ寄り
まき　コレ、もう去ぬるぞえ。あの櫛箱や半がいは、後から取りにおこすまで、預けましたぞえ。
　ト　これにて四斗兵衞、顏を上げて見廻す。
なにを。今までこそ怖いが、もう怖うない。斯う云ふが物の云ひ納め。去ぬるぞや。阿房らしい。
　ト　行かうとするを
四斗　待て〳〵〳〵。
まき　イヤ、待たぬ〳〵。
　ト　また行きかゝるを起き直り

四斗　ハテ、待てと云うたら待ち居れやい。
まき　去つた者を未練らしう、なんの用があるえ。
四斗　用がならて……おのれは〳〵、えらう美しうなつたなア。
まき　知れた事。年寄つた身ではなし。また花咲かさにやならぬわいなア。
四斗　とつと、ようなつたり惡うなつたり、人の心を迷はすやうな奴ぢや。
まき　それをこなたが構ふ事かいなア。
四斗　イヤ構ふ。
まき　なぜにえ。
四斗　もう去らぬ。
まき　エヽ。
四斗　さう美しうなつた者を、勿體ない、誰れが去るものでもう去らぬ。
まき　なんぢや、去らぬ。
四斗　オヽ、もう去らぬ。
まき　そんなら斯う作り立てたに依つて、女房ぢやな。
四斗　オヽ、女房〳〵。
ト　おまき、思ひ入れあつて
まき　似たかえ。
四斗　ヤ。
まき　よう似たかと云ふ事いなア。
四斗　誰れにいやい。
まき　時姫さまに。
四斗　なんと。
ト　お卷、四斗兵衛が胸づくしを取つて
まき　こなさんはなア〳〵、一生連れ添ふ女房に、なぜ隱して下さんす。わたしが身の上は知つてあり、常々お前の詞の端で、坂本へ味方して下さんすは知れてあれど、この間の鎌倉よりの觸れ狀。最前坊主がこなさんに云うたのは、この家へ時姫さまを付け込んだ、注進せうと云ふ談合であらうがの。お前の心一つで、わたしを身替りと思ひ付かしやんしても、柴の葉のとろ〳〵わげ、木綿布子の顏形、時姫さまには氣もない事と、身替りの算用が喰ひ違ひ、その腹立ちの離別と知つたに依つて、心一杯繕らうた、心が天に通じてか、お身替りになりさうなと、お前に見られた女の念力、女夫の仲で斯う〳〵して、身替りに立てると云はしやんすりや、なんの否やと申しませう。お役に立てゝ下さんせ。隱さしやんすが、聞えぬ

聞えぬわいなア。
〽夫を思ふ眞實の、心の奥の兩人も、この返答が絶體絶命、すわと云はゞ一討ちと、耳をそば立てゝ聞き居たり四斗兵衞にこ／＼打笑ひ。
四斗　オヽ、女の智惠に味やつた。併し、時姬さまは時政の娘、幼少にて坂本へ遣はし、顏は朧に見紛うても、年配がマア合はぬ。われを身替りにする玉が違うた。
まき　違ふとは、誰が身替りに。
四斗　宇治の方のお身替りに。
まき　エヽ。
四斗　時姬か宇治の方、兩人のうちを差こせと云ふ。北條は宇治の方に惚れて居るゆゑ、時姬より宇治の方にして渡すと、喜んで踊り歩くわい。
まき　ムヽウ。さうして、こなさんの心底は。
四斗　一大事を疊み込んだる我が胸中、探り見ようなんどとて、傾城遊女を時姬に仕立て、主あしらひの隼人之助。イヤモウ、百年も前の身替り。女に迷ひ陣所を乘取らるる魂ひでは、立聞きするも無理ではない。イヤ、寐られまい／＼。
〽未前を察する四斗兵衞に、星を指されてつつと出で。

ト屋體より隼人之助逢坂出て
隼人　驚ろき入つたり、四相を覺る四斗兵衞が詞の端。渡し場にて見るよりも、凡人ならぬその人相。
逢坂　この上は味方になるか、敵方か。
隼人　この返答が生死の境。
逢坂　サア。
隼人　サア。
兩人　サア／＼／＼。……なんと。
ト双方より詰め寄る。
〽返答如何にと詰め寄せたり、四斗兵衞は見向きもせず、顋打撫でゝ構はゞこそ。側に女房はハア／＼と。
ト隼人之助、キッと思ひ入れあつて
隼人　返答打たぬは敵方よな。
〽覺悟せよと切りかゝるを、搔い潜つたる四斗兵衞が、さそくのあしらひ上段下段、云ひしに違はぬ曲者なり。お卷は逢坂隔てにて、貳枚屛風や佛壇の、戸障子外し支へるうち、觀音の臺座を取つて受け留むれば、切り割る臺座の箱の内、あたり輝く星兜。
ト觀音の臺を持つて四斗兵衞立廻り。隼人之助、切りつける。臺を持つてよろしく留める。仕掛けにて中よ

り星兜出る。皆々見て悄り。

隼人　ヤヽ、こりやコレ坂本の三大將へ、下し賜はる鍬形の星兜。三つを分けて一つは佐々木、一つは三浦今一つは、義盛の子息和田兵衛秀盛へ、下されたとの仰せなるか。

逢坂　この星兜のあるからは

隼人　さては和田兵衛秀盛どの。ハヽアハツ。

〽ハヽ、ハツと飛び退り、恐れ入つたるばかりなり、和田兵衛は悠々と、兜片手ににつこと笑ひ。

ト二重の上に直り、合引にかゝり

四斗　父和田の義盛は、北條が讒言に依つて亡ぼされ、九拾三騎も散り／＼に。この度の籠城に、招き給はる身の面目。父義盛が憤、二言と云はずお請けを答へ、後藤が文字を苗字となし、後藤和田兵衛と改名し、星兜を賜はつて。

〽猶も窺ふ敵地の噂、佐々木は城内某は、鎌倉方の計略を、聞き出して内通の、手筈を定むる折も折。

宇治の方を時政が、見ぬ戀に憧れて、盗み出せと觸れ廻る。これ屈強一の謀り事。女房を身替りに、渡すは兼ねての下心。時姫に似たるを付け込み傾城狂ひ、陣所を敵に奪ひ取られ、放埒者と云はれても、女を手引に大將の首取らんとは、小事に拘はらざる大丈夫。

〽ホヽウ出かされたり、最早時姫渡すに及ばず、我が女房を鎌倉へ、入込ませばこの上なし。

橋塚が軍勢を、討取るも今宵のうち。

〽必らず屈する事なかれと、水を流せる辯舌は、その名も後藤和田兵衛と、世に謳はれしも理りなり。始終立聞く玉木軍藏、納戸の内より躍り出で。

ト軍藏、出て

軍藏　鈴木隼人が家來となつて、夜討させしも我が内通。橋塚どのの廻し者とは、知らぬうつそり。傾城狂ひは時姫の身替り。四斗兵衛は義盛が伜、城内の内通、宇治の方の拵らへ物、何事も皆聞いた。この通り鎌倉へ注進する。待つて居れ。

〽云ひ捨て駈け出す後より、はつしと來る尖り矢一筋、脊骨射抜いて太股まで、矢の根通つて俯伏しに、足掻き倒れてくたばつたり。

逢坂　思ひがけない、この矢の主は。

隼人　何れより射かけしや。

四斗　イヤ、我が胸中を試さんと、百姓德八とは假の名、

誠は奥州佐藤庄司が末子、外ケ濱を司る、千島の冠者惟信どの、見參仕らう。

ト見參と呼はれば、障子さつと押開き、隱れ紛ひも佐藤の定紋、威あつて猛き上下の、ひだも千島の冠者とは、骨柄見えて勇ましけれ。

ト上手障子開けると德八、上下小手脛當にて合引に居る。

まき　ヤ、、お前は。

ト惻りの思ひ入れ德八、威儀を正し

德八　如何にも、百姓德八とは僞はり、和田兵衞と知つたるゆゑ、この程より姿をやつし入込みしは、鎌倉方か坂本方か、實否を糺さん爲ばかり。鬱憤ある時政なれば、坂本へ味方とは、我れも心の滿足々々。

隼人　聞き及びし千島の冠者どの。して、御自分は坂本へ味方なるか。

德八　イヤ、坂本へ味方はせぬ。

まき　そんなら鎌倉への志しか。

德八　イ、ヤ、鎌倉へも一味せぬ。

隼人　して、何れへの

逢坂　味方なるや。

德八　兄次信忠信は義經の舊臣、兄には八島と吉野にて、君に替つて討死なす。義經は賴朝公と御仲不和にてこれも討死。恨みある賴朝公なれど、これも御主君。所詮この身を引退き、本國にあつて世上の事は見ず聞かず。この度の戰ひに、北條より催促すれど、馬も出さぬ轡の定紋。和田兵衞が坂本へ一味あるを、心の滿足と云ふは、あの一矢にて推量召され。和田兵衞どの、宇治の方の御供。イザ、仕らう。

四斗　何がなんと。

德八　イヤサ、其方は敵なれば、宇治の方を鎌倉へ渡す便りがあるまいと、見かけて出でたる千島の冠者。敵でなし味方でなし、宇治の方を奪ひしと、鎌倉へ引渡す、仲人には最屈强。もし似せ物と顯はれても、坂本の城中に宇治の方の似せ物を、拵らへありと知らず、盗み出した千島の冠者が不調法。なんとさうではあるまいか。

ト四斗兵衞、こなしあつて

四斗　尤も。宇治の方さま。イザお出であられませう。

トお卷を上座へ直す。

まき　千島の冠者に奪ひ取られ、わしや鎌倉へ行く程にの、隨分無事で。

ト四斗兵衞と顔見合せ、ちよつと愁ひの心意氣あつて
軍の吉左右、待つて居るぞや。
〽人目を恥ぢて名殘さへ、泪呑み込む夫婦の別れ、逢坂
も聲曇り。
逢坂　時姫さまになつて、天晴れ心の鏡とも、云はれうも
のと思うたに、手柄はお前に仕負けました。羨やましう
ござんすわいなア。
隼人　乳兄弟は妹同然。必らず油斷なきやう、北條を討
つ謀り事。合點か。
四斗　和田兵衞が女房の道を守る、今の泪は不心底。その
心では覺束ない。誠操を捨て、不義者と云はるゝ、そ
の器量ばしあるや如何に。
まき　愚かにござんす、こちの人。
トのり地。
勇氣は男に負けるとも、時政に口說かるゝ、戀は女子の
弓鐵砲。
〽例へ時政鐵石の、大將たりとも腰打拔き、蒲團の戰場
帶の劍。
相手に降參さす事は、わたしが胸にござんすで、やんすで
ござんすでやんす。

〽氣遣ひあるなと勇みの詞、逢坂引取り。
逢坂　ア、これ申し。
トのり。
出過ぎたる事ながら、里に育つて客の肌、口舌の後の取
直し、野暮は猶更むづかしい。
〽腹も立つたり立たさしたり。
後へしつくり持ちつける、せりふの大事がござんすが、
素人のお前、合點かえ。
まき　ホヽ、ホヽヽヽ、アノおしやんす事わいなア。……
なんの素人も玄人とも、詰まる所は色と戀。惚れたと思
はす工風が肝要。時政の寢首掻く、手柄は夫の大高名。
必らず氣遣ひさしやんすな。
ト愁ひのノリ。
云はゞこの身を北條に、抱かれて寐る魂膽を、夫の側で
自慢顏。
〽なんの因果と取亂す、鈴木夫婦も心根を、思ひやりつ
つ和田兵衞が、立派の顏は不便とも、云はぬは云ふに勝
りける、千島の冠者聲高く。
德八　ヤア〱、宇治の方手に入る上は、今こそ歸る。家
來ども、乘り物持て。

家來　ハア、。
〽ハッと舁き來る供廻り、提灯持つて居並べば、イザと
お駕を乘り物へ、手を引き乘せる別れ路の、泣く音を隱
す片羽鳥、出で行く千鳥、和田兵衞聲かけ。
四斗　南無三方、宇治の方を奪はれたるか。ハテ、殘念や
なア。
隼人　ヤア、鎌倉の千鳥の冠者。
兩人　引返して勝負なせ。
逢坂　表は敵の千鳥さま。
德八　寄らず觸らぬ奧州武士、合戰の勝負見物せん。もし
落城と見るならば、賴家公は我が本國、奧州へ御供あれ。
外ヶ濱より續いたる、蝦夷が島へ御身を隱し、取籠め置
けば、ちつとも氣遣ふ事はない。
四斗　勝負の知らせは普通にて。
德八　さらば。
四斗　さらば。
德八　乘り物やれ。
皆々　ハア。
〽大大名の國の風、仁義を胸に合紋の、詞の鞘割り、十
文字、明り照らさせ急ぎ行く。

ト乘り物先に德八の惟信、家來付き添ひ向うへ入る。
〽引違へて入頓坊。
ト入頓坊、念佛講の提灯を鎧にして、六部の尻敷を草
摺。裸身に衣を直垂のやうに、肩まくり上げ、いかき
の兜、鍬形龍頭ともにすべて葬禮の道具にて拵らへ、
太刀の代りに竹の先に葬禮の龍頭を付け、掻い込み走
り出る。トのり。
入頓　ヤア〳〵、四斗兵衞どのお內にか。てんつてんとん
つんつつん〳〵……兼ねて合圖の手段の如く、大物の浦
より味方の兵船、義經が御座船間近く漕ぎつけ、知盛が
幽靈なりと僞はつて。
ト思ひ入れあつて
イヤ……イヤ〳〵……これでは千本櫻になる。いま
橋塚の軍兵めら、段々と船で來て、この家を目がけ押寄
すると覺えたり……袈裟や衣ぢや行くまいと、思ひつい
たる鎧姿……講中殘らず彼の山手の、樋の口に合圖を定
めて待つて居る。狼煙を見るとそのまゝに、今の計略、云
ひ合せの入頓、知らせの爲、これまで參り候ふなり。
〽合圖は如何にと呼はつたり。
トいろ〳〵をかしみあつて云ふ。

四斗　我が詞に從うて、大儀々々。兼ねて申し合せた通りいよ〳〵ぬかるな。合圖を違へな。
入頓　合點がてん。
〽合點がてんと頷いて、山手をさして飛んで行く。
ト入頓坊、入る。
隼人　某が胸中まで、見拔く程の和田兵衞との。併し橋塚は大軍、この家を切り拔け登城ある、計略は如何に。
ト四斗兵衞、ムッと思ひ入れあつて、あたりを見廻し
〽和田兵衞行燈引寄せて、墨黑々と橋塚を、飽くまで嘲弄書き認め、松に萬座の釣り燈籠。
ト四斗兵衞、行燈に向ひ、砚引寄せ、墨黑に書いて門口の松の木に釣り下げ
四斗　最前蜂の群つて、酒に望んで巣を落せし時、橋塚が軍卒等、滅亡爰に顯はれたり。我が軍術の手並を見せん。兩人、奥へ。
〽早く奥へと先に立ち、悠々として入りにける。
トおくり。
〽程もあらせず、えい〳〵聲、橋塚が郎等石原源太、軍勢引連れ、どつと駈け寄せ。
ト向うより、源太、陣立てにて、軍兵大勢引連れ駈け來り
源太　ヤア〳〵四斗兵衞、おのれ誠は鎌倉に、恨みある和田の一黨。この家へ鈴木隼人之助、時姫を連れ來り、匿まひある事紛れなし。討手を先へ引込めば、必定おのれ坂本へ、味方したるに違ひない。早く出て降參し、兩人を渡せばよし。異議に及ぶと粉微塵。返答はドヾどうぢや。
〽返答如何にと呼はれども、內はひつそと靜まつて、手向ふ者もあらざれば、短氣の石原むくりを煮やし。
ヤア、馬鹿落ちつきのよたんぼめ。家來ども、込み入つて家探しせい。
家來　ハア、。
〽承つて軍兵とも、込み入り〳〵我れ先に、納戸柴部屋殘りなく、隅々隈々尋ねれども、軍者の祕密一人も、目に遮るはなかりけり。
ト皆々そこら中をウロ〳〵して
源太　一方口の茅家、風を喰ふ筈がない。下道をぽッ駈けん。手分けせい。
皆々　畏まつてござりまする。
〽表へかけ出て松が枝に、かゝりし行燈きつと見付け。

源太　待て〳〵家來ども。合點のゆかぬこの松に、行燈を掛けたのは、さてはこの道を失せたに違ひはない……なんぢや。蜂に等しき橋塚が軍勢、討ち亡ぼすものなり、蟲どもゝ依つてこの行燈に向ひ、成佛を願ひ、おのれらが菩提に供養する高燈籠、施主和田兵衛秀盛。エヽ、腹の立つ。憎くいうづ蟲め。家來、ぶち落せ〳〵。

〽短慮精弱の源太が下知、叩き落す行燈の內、仕掛けの狼煙合圖の樋の口、逆卷く水はどう〳〵〳〵。源太を始め軍兵ども、あれよあれよと云ふばかり、湖水を一つに家も木も、崩れ流るゝ白海の、果も泣き聲あつぷ〳〵、一時殺しの謀り事、目覺ましかりける氣色なり、時分はよしと渡し船、隼人夫婦を取乘せて、千里の果も漕ぎ渡る、腕に覺えの和田兵衛が、今ぞ登城のえいさつさ、源太を始め軍兵ども、船を目がけて泳ぎ寄る。

ト　この文句のうち、誂らへの道具仕掛けにて、崩れ込み一面の湖水になる。よき程に橋がゝりより四斗兵衛、船を漕ぎ、これに隼人之助、逢坂、入頓坊を乘せ出て來る。此うち、源太、軍兵、皆々柱木などを捉へ浮き沈みの心。皆々この船に取りつかうとする思ひ入れ。あぷ〳〵と浮いて來る。

四斗　それ〳〵、隼人夫婦入頓坊、兼ねて用意の玉藥。蜂めらが止め〳〵。

三人　畏まつてござりまする。

〽艪を押しながら下知すれば、三人一緒に種ヶ島、水中手銃の續け打ち、水火の最期數多の軍兵、浮きつ沈みつ流れ行く。

ト　三人、種ヶ島を構へ、軍兵目當に打込み、ドンと本鐵砲の音にて、軍兵皆々苦しみ沈む。源太、浮き上がり

源太　御存じのあづまやでござい。

ト　云ひ〳〵沈む。皆々見て

四斗　ハ、ア、面白し〳〵。生きながらの流れ灌頂

入頓　冬の施餓鬼の送り火は

隼人　我が手に燈籠寂滅爲落。

逢坂　今日は即ち觀音樣。

入頓　山手に待つた講中の、水の手番ひ合圖もよし。

四斗　末の世までも觀音を、爰に据ゑ置き、三井の寺。

〽水は密なり謀り事、艪拍子勇んで。

ト　三重にて　　　　よろしく幕

五段目　唐崎合戦の場

役名――北條相模守義時。比企判官頼員。古郡新左衛門保忠。和田兵衛女房、お巻。安西彌五郎。須磨八郎。上總七郎。佐々木四郎左衛門高綱。

造り物、向う黒幕、一面に草土手の二重舞臺。所々草のうね。判官、鎧陣立てにて、佐々木の心の胴人形を踏まへ、首掻き切つたる見得にて、差上げ居る。烈しきドンチヤンにて、幕明く。

〽比企の判官大音上げ。

判官　ヤア〳〵、鬼神と呼ばれたる、佐々木四郎左衛門高綱を、比企の判官頼員が討取つたり。勝鬨々々。

ト内にて

大勢　エイ〳〵オウ。

〽呼はるに鎌倉勢、我れからさきと馳せ集まる。

ト内にて

呼び　お成り。

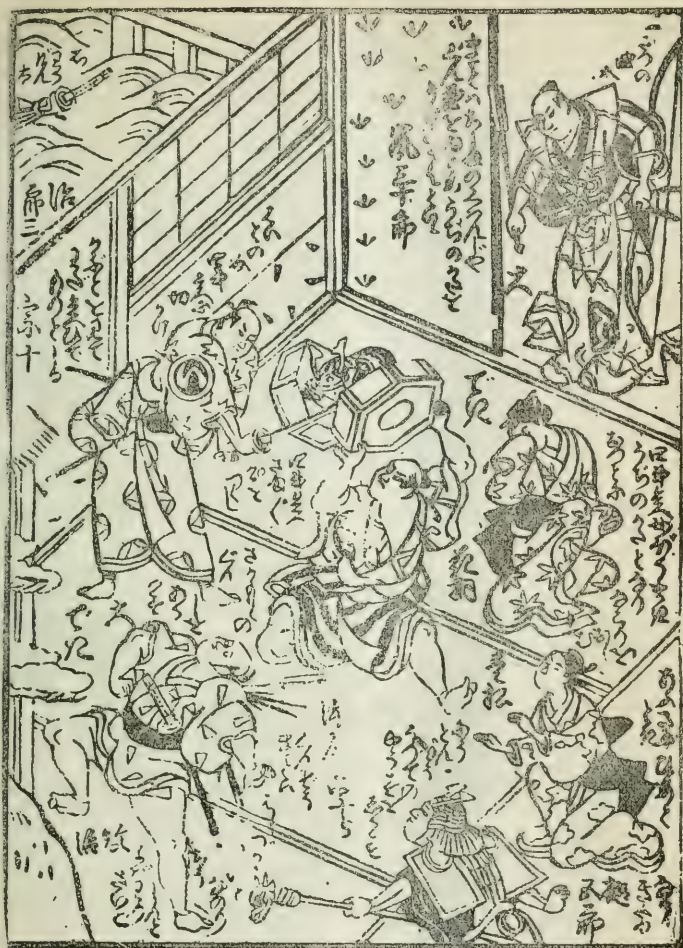
〽大將義時駈けつけ給へば、近習の武士も左右に引添ひ、松影に床几を立てさせ、御座を設けてかしづけば、大將は悦喜の眉。

ト橋がゝりより、義時、鎧陣立てにて、大將の拵らへ。安西彌五郎、須磨八郎、陣立て。その外陣立ての人數軍兵大勢付き添ひ、馬を引き床几を持ち出て來り、よき所へ床几を直す。義時、これにかゝる。皆々並ぶ。

義時　如何に頼員。父時政は後陣と定め、我れ先陣に打立つて、佐々木が勢に割つて入り、揉みに揉んだるその所へ、思ひがけなき隱し勢に、味方驚ろき、飛び道具を持つて防がんとせしに、鐵砲の火繩には水をかけ、弓の弦は悉く外しあるゆゑ、俄かの仰天。正しく味方の内に、裏切りなす曲者あるに極まつたわい。

判官　イヤモ、弓鐵砲の力をかるまでもなく、隱し勢あるにもせよ、鎌倉の大軍がぼッ詰めるに、佐々木が智謀も軍略も、一溜りもござらうか。長追ひは無用などゝ、古郡新左衛門が、智惠あり顔の我まゝ。イヤハヤ、片腹痛い穿鑿でござりまする。

彌五　左やう〳〵。智謀も計略も、城を取るか大將の首を取るより外の儀はござらぬ。佐々木が首討取つたるは、比企の判官どの、比類なき働らき。イヤ、お手柄〳〵。

安永六年正月大坂

竹の芝居上演繪番附

八郎　併し、佐々木が隱し勢で、少々味方を損なひました。無二無三にこの所まで、ぼッ付きましたが、さて逃げ足の早い奴。佐々木めにかゝつて、時政公の近習の武士、大方義時公に引添ひ參つたが、爰はどこでござるの。

判官　爰は唐崎でござる。左樣ならば時政公は、遙か後へお別れなされ、お側の武士も僅かでござらう。

彌五　左樣でござる。

義時　深入りするは大將の本意ならねど、今日の軍は、是非佐々木を討取らんと、猛威盛んに仕掛けしゆゑ、難なく討取つたと申すもの。首實檢いたさん。これへ。

判官　ハッ。

ト義時の前へ首を直す。

〽ハッと答へて佐々木が首、御前にこそは直しける。

彌五　佐々木の四郎は古今の英雄と承りました。さぞお手にあまりましたでござらう。

判官　イヤモ、噂とは大きな相違。寢鳥を刺すよりいと易い。何が、思ひがけない所から、伏勢を出すものぢやに依つて、君を始め御自分方、佐々木と云ふ名に聞きおぢして、お騷ぎなされう。

八郎　如何にも。

判官　所を拙者、騷ぎませぬの。一體身共は人の恐るゝ者程、取つて締めるが好きでござる。勿論御存じの通り、拙者が勇力、佐々木と見るより、わざと馬をゆるやかに立て直しましたれば、彼奴は又拙者を、比企の判官と見るより、慄ひ出しまして、一太刀も合さず逃げ出しましたるゆゑ、比企の判官が留めた、佐々木待てと聲をかけると、ワッと云つて馬より眞逆さまに落ちる所を、なんの苦もなく首搔き落しました。

八郎　それは存じも依らぬ佐々木が振舞ひ。噂とはきつい違ひでござる。

判官　イヤ〳〵、佐々木が全く弱いではござらぬ。拙者が餘り強いゆゑの事でござる。

彌五　左樣でござる。

義時　何にもせよ、佐々木を討取つたと聞けば、坂本方は氣を失ひ、敗軍は知れた事。併し佐々木は蔭武者を拵へ、變幻自在を行ふとの風聞。よし似せ者にも致せ、この首取りし判官が功名。この虛に乘つて坂本の城際へ押寄せ、ひた攻めに攻め落さん。とてもこれまで深入りしたれば、皆一同に心を附けよ。

皆々　畏まつてござりまする。

義時　早う討立てい。

〽早討立ての下知の下、古郡新左衞門聲をかけ。

新左　オ、イく、暫しく、

〽暫しくと呼はつて、女一人繩打つて、宙に引立て大汗流し。

繩をかけ、走り出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

ト向うより、新左衞門、陣立て、和田兵衞女房お卷に

さりとはく、時政公の片意地を意見して居るうちに、また義時どのゝ無分別。エ、コレ、親子とてよう似た胴張り者。モウく、時政公にも付いて廻り、くしやく云ふのに草臥れて、云ふまいとは思へども、こればかりは云はにやならぬ。コリヤ、何所までぼッかけるのぢや。側に歴々も付いて居ながら、大將を深入りさせ、また血の泪こぼすか。時政公の側には、百騎に足らぬ近習ばかり。親を振捨て、何所までござるぞ。

義時　今に始めぬ新左衞門が過言。戰場にて敵が討負け逃げるを、追ひ討に致すが珍らしいか。

新左　その逃げたのが碌な事ではござらぬ。うかく行とつたら、敵の網にかゝる事ぢや。

八郎　何は格別新左衞門、お身が繩かけ連れ來たは、千島の冠者より連れ參られし宇治の方。

判官　時政公お心をかけられし、宇治の方に繩かけた仔細は。

彌五　我まゝも事に依る。義時公へ申し上げられい。

新左　イヤ、どれを見てもく、揃うた業態しぢやなう。

皆々　なんと。

新左　此奴は宇治の方ぢやない。似せ者ぢや。

皆々　ヤア、。

新左　よい年をからげて、見ぬ戀に憧がれ、似せ者を摑んで、陣中まで連れ歩く、時政公のじんばり。合點ゆかずと引添うて窺ふところ、今日の軍に鐵砲の火繩に水をかけ、弓の弦を切つたは、この女が所爲。誠は和田兵衞秀盛が女房サ。

皆々　ヤア。

新左　ヤアくどころか、拔身を裸で抱いて寐るより危ふい事。サア、女、大將の御前ぢや、云つてしまへ。

まき　エ、口惜しい。宇治の方となつて、北條に添ひ寐して、寐首を掻かうと、思ふ間のない軍の只中。飛び道具を破損させ、敗軍に紛れ、時政を討取らうと思うたに、古郡新左衞門に見顯はされ、殘念なわいの。

新左　なんと夢が覺めましたか。サア〳〵、早くお歸りあられませい。
義時　イヤサ、それはそれで濟む事。これまで進んで、一寸も引返す事思ひも依らず。殊に佐々木四郎左衞門は、比企の判官が討取つたれば、猶豫いたす場所でない。
新左　ヤア、なんぢや、討取つた。
判官　オヽ、この比企の判官が討取つたが、なんと致した。
新左　イヤ、これも興がる。その首がさうか。
判官　如何にも。
官義　幸ひの女、佐々木が面體、その女にとくと見せよ。思ふ仔細のあれば繩を解け。
八郎　ハツ。
〽御意に八郎縛めを、解く間遲しと首に取りつき。
ト八郎、お卷の繩を解く。お卷、前の胴人形の側へ來て、思ひ入れあつて
まき　ヤア、佐々木どの、淺ましいこの有樣は何事。夫和田兵衞、佐々木の四郎、三浦之助は坂本の三軍師。分けて頼みに思ふこなさんの討死の體では、夫の身の上、坂本の御運もこれまで。エヽ、淺ましい最期でござんすなア。
〽御運の下る坂本やと、立つて見居て見狂氣の如く、女に稀れなる悔みなり。新左衞門は天然と、時氣を窺ひ大きに驚ろき。
新左　ハテ、合點のゆかぬ。時は霜月、軍の働らきに寒氣を忘るゝといへども、斯程に汗の出る所謂なし。天に氣あり、地には火氣あり。
ト我が手に脈を見て、悄りの思ひ入れ。
南無三、某にも死脈の打つは、疑ひもなくこの所へ、大將を誘き寄せ、火を以て鏖殺しになさん敵の謀計。ハレ、危ふし〳〵。一刻も猶豫ならず。サア〳〵、お歸りなされい。引返さつしやれ。
〽急きに急いて引立つる。比企の判官割つて入り。
判官　面妖。時々狂人のやうに云ひ出して、味方を騷がす。佐々木を討取つたれば、敵に謀計のあらうやうはない。
新左　その佐々木は似せ者ぢやわい。
判官　正しく女が首に向ひ、嘆き悲しむもの。これでも似せ者とは。
新左　馬鹿盡せ判官。お主達にむざ〳〵手にかゝる佐々木でない。こな女め、太い奴の。似せ首と知りながら、誠しやかに泪をこぼし、うま〳〵喰はさうと、その手は喰

はぬ。うな、どぶとい女郎めが。

ト　これにて判官キッとなり

判官　ヤア、又してもく、功名手柄する者を嫉み、様々の悪口。佐々木を怖がつて逃げ廻る性根で、他の御褒美を妨ぐる。今一言似せ首と云つて見よ、手は見せぬぞ。

新左　水の月取る猿猴侍ひ、ほててんがうかわくと、鎧と共に引裂くぞ。

判官　その頤骨を切り下げくれん。

新左　なにを。

ト　双方キッとなる。

義時　待て。

彌五　御意ぢや、鎭まり召され。

新左　イヤ、鎭まつて居る所でない。猿猴めらは何所までなりとも勝手次第に乗込め。義時公はお供して歸る。サアサア、お立ちなされい。

〽無理に御手を引立つる、大將立腹ましく、て、采配取つてりうく、打たれてひるまぬ新左衛門。

新左　こりや又、片意地か、

義時　片意地かとは慮外者。おのれ常々過言を吐き、朋輩へは我まゝ。父時政も持て餘せど、忠義の心あるゆゑに料簡なせば付けあがり、主從の禮儀もなく、出る儘の雑言。佐々木を討つたる判官を、偏執の嫉みと見ゆる。例へ敵方に謀り事のあるにもせよ、目前の勝ち軍、味方勇みの先折るは、不吉とや云はん。そこ立去れ。

新左　エ、、人の思ふやうにもない。

義時　但し勝ち軍を妨ぐるは、所存あつての事か。

八郎　敵方へ返り忠か。

判官　其まゝに差措かぬ。不吉者めが。

新左　ぶたれうと蹈まれうと、火と知つて火の中に置く事ならぬ。

判官　そこ立て。

新左　立つまい。

彌五　立て。

新左　否ぢや。

ト　此うち義時、お卷の側に落ちたる狀を取上ぐる。

〽爭ふうちに御大將、女が落せし書狀拾ひ。

義時　古郡新左衛門どの……和田兵衛秀盛。

ト　お卷、悧り。

まき　ヤア、それを。

ト　取りにかゝるを義時、その手を捻ち上げ

義時　古郡新左衞門へ、敵方の和田兵衞よりの書面。女が懷中より落ちたは。
新左　ナニ、その狀が。
義時　新左衞門を取卷け。
皆々　ハツ。動くな。
ト きつと取卷く。
義時　判官、讀み上げい。
ト 判官取つて披き見て
判官　ナニ〳〵「北條父子が惡事を疎んじ、裏切りして坂本へ奉公いたさるべき段、內通の趣き、我れら取持ち申し入れ候ふところ、賴家御親子御滿足に思し召され候ふいよ〳〵申し合せたる如く、油斷を見濟まし首打つて、陣所へ火をかけ申されべく候ふ、火の手を合圖に討つて出で、義時を始め鏖殺しに致すべく候ふ、首尾相調ひ候ふ上は、約束の通り三十萬石の領地宛て行ふものなり。古郡新左衞門どの、和田秀盛」
ト 讀みあげる。皆々悄り。
義時　さてこそ斯樣の計略あるゆゑ、味方の勝利を妨ぐる。數代の恩義を忘るゝ、こな人畜めが。
新左　跡方もなき事を、女め、企んだな〳〵。うぬ、引ツ捕へて一詮議を。
皆々　動くな。
判官　但し密書の云ひ譯あるか。
新左　ありや、似せ狀ぢやわサ。
判官　似せ狀と云ふに證據があるか。
新左　サア、それは。
判官　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
新左　うぬ、女めを。
皆々　動くな。
ト 何思ひけん大將の、御佩刀拔くより早く女は、咽喉に突き立つる。人々これはと驚ろくうち、抉り〳〵て早絕え絕え、苦しみながら聲を上げ。
まき　ナウコレ、新左衞門どの、もう叶ひませぬ。こなたと心を合せ、裏切りさして本望遂げうと、云ひ合した和田兵衞どのより、大切に預かつたこの狀、渡したうても時政の、側を離れぬこなたゆゑ、遲なはるうちに今の體裁。わざと繩かゝつてこの身を見顯はされ、忠臣の新左衞門と心をゆるさせ、討取らん謀り事も、この狀を拾はれたゆゑ、水の泡になつたわいなう。

新左　コリヤヤイ、そりやなんのたわ言だ。
まき　佐々木どのは討死する。便りと思ふこなたは、顯はれてこの通り。どうぞ爰を切り拔けて、坂本の城へ一時も早う、馳せつけて下さんせ。心にかゝるは、こなさんの身の上ぢやわいなア。
新左　エヽ〳〵、吐かし態わい。うぬをマア。
　ト行きかゝるを
皆々　動くな。
新左　あんまり酷い謀り事ぢやぞよ。
まき　夫和田兵衞どのに、懇ろに云うて下さんせ。草葉の蔭から出世を見るぞえ。新左衞門どの、さらば。
　ト苦しむ。
〽さらばとばかり息絶ゆる、大將始め諸軍卒、皆新左衞門を押取り卷き、我れ討取らんず面魂ひ、云ひ譯せうも死人に文言、かぶつた大葢新左衞門、呆れ果てたるばかりなり、斯かる所へ後陣より、注進と呼はつて、上總の七郎大息吐き。
　トどんちやんにて、向うより、上總七郎、陣立てにて走り出て來り
七郎　今日佐々木敗軍にて、逃げたりと見せしは大きな僞はり。大將始め味方の軍勢、深入りさせて討取らんず敵の計略。時政公のお側には、やう〳〵殘り百騎ばかり、皆この所へ押詰め來り、その間遙か隔つたるに、思ひも依らず時政公の目先、田の畦の間より佐々木が軍勢、四つ目結ひの旗さつと押立て。
新左　ソリヤこそな。
〽待ち設けたる北條どの、佐々木に御首賜はらんと、眞一文字に割つて入り。
七郎　思ひがけなき仰天に、お側に居る者小人數は、踏みとまるに力なく、氣後れなして或ひは討たれ、味方は散散粉微塵。
義時　して〳〵、父は、如何に〳〵。
七郎　されば候ふ。亂軍の中、時政公は駿足にお召しあつて、何所ともなく落ち失せ給ふを。
〽坂本の軍勢ども、餘すまじとぞ追ひかくる。されども味方も命を捨て、踏み止まつて支ゆるうち、御行くへ知れ申さず、早々御加勢あられませう。
〽申しもあへず義時急き立ち。
義時　父の安否も知れず、其まゝにしてあるべきか。上總來れ。

〽上總續けと駈り行く。
ト義時、馬に乘り、上總、引添ひ向うへ入る。
新左　さうなうては叶はぬ筈。何所までも。
ト行きかゝるを
皆々　謀叛人待て。
ト軍兵押取り卷く、
新左　そこ所かい。
ト引退け行くを
皆々　うぬを。
ト軍兵皆々かゝる。
〽うぬとかゝるを投げ退けく、いろくに毆り倒し。
新左　エヽ、面倒な。
ト皆々をよろしく投げ
〽大將の、後を慕うて走り行く。
ト向うへ走り行く。
彌五　うぬ、何所までも。
ト追ひかけうとするを
判官　アヽ、コレく、もうよいく。あのやうな狂人は、拋つて置かつせい。
八郎　それは格別、駈けつけいでも大事ござるまいか。

判官　あゝ云ふ所へ駈けつけた所が、どう致さう。
彌五　時に今の注進では、この首は佐々木でござらうか。
判官　イヤサ、強く押せば押すものゝ、身共もどうか合點が參らぬ。なんでもこの死んだ女が狀の譫悔では、首に取りついて泣くのに、また佐々木が出て來たは、矢ッ張り新左衞門に、壺をかぶせたのかな。
八郎　常々仲惡しき新左衞門、これを幸ひに腹をさすがよくござる。
彌五　併し、命を捨てゝ同士討ちさすとは、坂本の奴は恐ろしいぞや。
判官　それぢやに依つてこの首は、十が九ッ碌な者ではあるまいと思へど、折角取つたものぢやに依つて、是非こじつける心サ。
八郎　御尤もでござる。
判官　これから駈けつける顏で、隨分怪我せぬやうに立廻つて、石山の陣所へ歸るが肝要。
兩人　左やうく。
判官　軍兵ども、參れ。
皆々　ハア。
〽何國よりかは鐵砲の、音に大地は鳴動し、行く先々に

燃え上がり、地雷のあぶれて軍兵の、足の下より火焔の櫻、アッと驚ろき引返せば、又燃え上がる烈火の音、踏む度々に佐々木の地雷、後へも先へも段々に、追ひすくめられ一時に、くゞまり屈む所より、くわつと裂けたる落し穴、皆一時にどだ／＼、重しの大石どつさりと、雀鮨とはこれなんめり。

ト皆々行きかゝる。この時、仰山に本鐵砲の音、舞臺所々にて掛け煙硝。皆々驚ろきうろたへたる事あつて、

ト皆々跳らへの切り穴へ苦しみながら落ち込む。これにてチョンと黒幕切つて落す。向う打抜き、野面の體よろしく

〽佐々木高綱顯はれ出て。

ト高綱、好みの陣立て。手に長刀を搔い込み、上手掛け稲押分け出て、キッと見得あつて

高綱　地雷火を仕掛け、この所へ誘き寄せ、大將始め鏖殺しの落し穴。我が謀計に落入りしと思ひの外、大將父子は討ち洩らせしか。殘念々々。

トあたりにこなしあつて下へ下り、空を眺め、思ひ入れあつて

ムウ、國家の主たる者の上には、正しく黄氣立ち昇る。この黄なる雲氣立つ所は

ト段々眺め、向うを見て

あの森の彼方……ソレ。

ト花道際まで行きかゝる。下手より軍兵一人窺ひ出てうぬとかゝるを後ざまに見事に投げ返し

〽慕ひ行くこそ。

ト三重にて、向うへ凜々しく入る。　よろしく幕

六段目　堅田村の場

役名　泉の三郎近平。佐々木小四郎。大場の十郎。百姓、傳六。同、甚太郎。同、茂平。同、太二兵衛。十作女房、お袖。高綱妻、篝火。百姓、十作實ハ佐々木四郎左衛門高綱。百姓、澤應。

造り物、平舞臺、向う赤壁、納戸口。上手下手ともに障子屋體。いつもの所に藁屋根附きの門口。下手屋體の續き藪疊。幕の內より百姓大勢「かやせ／＼小四郎をかやせ」と太鼓鉦を叩き立て門口に居る。

十作女房お袖、世話形、女房にて盆に茶碗大分載せ、茶瓶より茶を汲み、接待茶をして居る。この見得、わや〳〵と右の太鼓鉦にて幕明く。

皆々 かやせ〳〵、小四郎をかやせ。

ト云ひ〳〵皆々内へ入る。

そで これはマア、皆樣、御苦勞でござんす。毎晩毎日の事ぢやに依つて、何をして上げませうにも、女子の手一つ。接待茶なとあがつて下さんせ。

ト盆の儘差出す。皆々取つて

傳六 イヤモウ、毎日の事なりや、あんまり造作さつしやんな。こなさんや十作がうろつくより、爰な親仁どのは、子よりも可愛い孫をば失うて、さぞ狂人のやうになつて居やつしやらうと、それが笑止で村中が尋ね歩くけれど、今度の軍で、ソリヤ首取つたヮ殺したヮと、叩き合ひの最中ぢやに依つて、それが怖さに、やう〳〵この堅田の近所ばかり。同じ所を探して居るわいの。

茂平 さうして、十作どのや親仁も、まだ戻られませぬか。

そで アイ、こちの人も父さんも、別れ〳〵に一昨日からちつとも戻らず、わたしたつた一人で、あせるばつかりでござんす。

傳六 十作は若し、親の事なり、達者なに依つて、氣遣ひな事はないが、親仁どのはキョロ〳〵と、戰場へでも尋ねて行て、怪我なとしやせまいかの。

甚太 ナンノイナウ、衣は着てもあの親仁どのは、以前一腰も極めた和郎。聟や娘に百姓暮らしさせ、我れは隱居の道心者。在所中の子供に手習ひを敎へたり、讀み物敎へたり、時よりは庄屋どのゝ嫁入りの行儀から、葬禮の行列まで、あのお人の指圖する、物識りの澤庵どの、戰場へ行つても、逃げやうの祕密は覺えて居やつしやる。氣遣ひはないて。

〽辰巳上がりの評定も、そげ立つあんに火のない行燈。

ト向うより泉の三郞、蒸し芋の荷をかたげ出て來り

三郞 芋負けよ、薩摩芋負けよ。百目が六文、ほつこりほつこり。

〽蒸し立てほつこり荷ひ賣り、接待茶では足らぬ顏。

トこれにて本舞臺へ來て荷を下ろす。

甚太 エヽ、よい所へ薩摩芋。ぬくいか〳〵。

三郞 ぬくい段ぢやない。火傷する位でござります。

茂平 夜通しで冷上がつた。マア〳〵、入らつしやれい。

三郞 ハイ〳〵……こりや大勢ぢやさうな。たんと賣る事

なら、負けて進ぜませう。

ト芋籠を持つて内へ入る。

傳六 ドレ〳〵、おいらも腹が提灯のやうになつたわい。

そで それなら、粥でも炊いて置きますのに、なぜ遠慮なされます。コレ、芋屋さん、隨分温かなを上げまして下さんせ。ドレ、錢を進ぜませう。

太二 ア、コレ〳〵、お内儀、錢は銘々持つて居る。氣を揉んで下さるな。物入りの上、錢を遣はしては、親仁どのへ云ひ譯がない。接待茶でしまはうと思うたれど、芋の聲たら胸の間にこべり附いた。はつたいががくりと落ちて、目の玉が飛び出さうな。

茂平 おれも百目相談せうわい。

甚太 爰へも百目下んせ。

三郎 かけて居ては面倒な。よい加減に、ソレ〳〵。

ト其まゝ抛り出す。銘々錢を渡し食ふ。

傳六 オヽ、こりやぬくうて旨い芋ぢや。

三郎 幸ひ茶があるさうな。わしも飯食ひませう。御無心ながら、茶一つ下さりませ。

ト行李飯を出す。

そで サア〳〵、お安い事。よう沸いてある程に、コレ、香々もあるぞえ。

ト鉢に入つてある香の物を出してやる。

三郎 これは忝ない。でも、色のよい香の物ぢや。

茂平 イヤ、事も愚かや、今專ら持囃す澤庵漬。

三郎 さうかして、旨い香の物ぢや。こりや一體、砂糖でも入れますか。どうすれば澤庵漬になりまするの。

太二 それにはたんと祕密がある。先づ爰な親仁どのゝ名を澤庵と云ふぢや。

三郎 ハテナア。

ト飯を食うて居る。

甚太 その澤庵が漬けたに依つて、ソレ、澤庵漬ぢや。

三郎 成る程、聞えた。さうして漬けやうは、どうでござります。

茂平 そりや、どうか、おれも知らぬて。

三郎 エヽ、漬けやうはお前方も知らぬのかいの。

甚太 ハテ、澤庵漬の祕密を教へてやるのぢや。

そで コレ、こなさんは戰場へ賣りに行かんすかえ。

三郎 アヽ、昨夜も行て、なんでも錢儲けをせうと思ひの外、夜軍とやら夜討とやらぢやと云つて、鐵砲を打つ、鎗先に首を突きさいて戻るワ。拔き身で追ひかける。こ

いつは堪らぬと、あちらへ逃げ、こちらへ逃げするうちに、ひだるさうな軍兵を見かけて芋を賣ると、かぶりつくやうに食ひに食うてしまうて、三文にせいの四文に負けてくれいのと値切りかける。ねぢ合うて居る間に食ひ逃げし居るを追ひかける。後で盜まれる。夜の明けるまで居たが、命から〳〵爰へ逃げて來たのでごんす。

そで　それは迷惑されたであらうなア。もしもその戰場の方に、八つばかりになる子は居なんだかや。

三郞　なんの子供が居やうぞいの。

傳六　イヤ、爰の子が迷子になつたに依つて、親仁の澤庵どのも、父親の十作も尋ねて行て、これも今に戻らぬぢや。こちらも毎晩夜の明けるまで尋ねて居るのでござる。親仁樣は坊主ぢやが、もしそんな人も見えなんだかの。

三郞　そんな衆は見えなんだが、あの切ッつはツつの中へ、うろついて居たら、首が十あつても戻らぬて。

トお袖、始終心ならぬ思ひ入れ。

そで　もしやあの太鼓鉦をば、在所の祭りかと思うて、うろ〳〵行きはせまいか。モシ、太二兵衞さま、聞いて下さんせ。あの小四郞は、わたしが生んだ子ではござんせぬ。父樣の病氣の時、十作どのと連れ立つて、白髭の明神樣へ日參したれば、湖の端に捨てゝあつたを、拾うて戾つたはあの子。それから父樣も本腹しやんす。白髭の明神樣に授かつた子も同然。祖父樣も白髭、女夫の緣も白髭まで、長生きの瑞祥と、一年經ち二年經ち、あれ程まで育つたもの、身腹分けぬ情なさ、粗末にもしたかと世間の口振り。父御や父樣の思惑。あの子に附いてあつた書附けは、由ある人の胤ではあれど、捨てる心の親なれば、後で聞いたとて、此方程には思ふまい。ひよつとあの子に怪我でもあつたら、わたしやなんとせうと、案じ過しがしられますわいなア。

〽問はず語りも子を思ふ、案じ淚ぞ遣る瀨なき。

傳六　エヽ、芋屋がいろ〳〵の事を案じさすわい。コレ、子供の事ぢや。軍の場では迷子があると、所を聞いて送らしておこすわいの。イヤ、うろ〳〵して居るうち、もう晝時ぢや。皆去なうぢやないか。

茂平　オヽ、去んで、トロ〳〵とやつて、また晩に尋ねませう。

甚太　さうせう〳〵。

三郞　わしも昨夜から走り步いたので、體が纏のやうになつた。どうぞ御無心ながら、ちつとの間小隅で、とろと

ろと寐さして下さんせんか。
そで　安い事ぢやが、主も留守と云ひ、父様も居やしやんせぬ所へ、知らぬお人を寐さすもどうやら。併し、晝休みとあれば、爰を明けなさんすと木部屋ぢや。そこで寐たがよい。
三郎　それは幸ひの所がある。そんなら暫らく御無心申しませう。
傳六　サア〳〵、皆去にませう。かやせ〳〵は狐に聞かすのぢや。爰から家まで只去なうより、靈狐と云ふ事もある。目をせゝつて太鼓鉦打つが、ちつとでもはかがいてよからう。
茂平　琉球芋の勢ひで、囃さつしやれ〳〵。
皆々　かやせ〳〵。
ト囃して表へ出る。
三郎　コレ〳〵、琉球芋の錢はどうぢや。
皆々　かやせ〳〵。
ト聞えぬ振りして行きかゝる。
三郎　コレ、琉球芋の錢わいの。
皆々　かやせ〳〵。琉球芋の錢をかやせ。
ト云ひながら太鼓鉦叩き入る。

三郎　コリヤヤイ、錢おこさぬかい。食ひ逃げするかい。
そで　コレ〳〵、もうよいわいの。錢は此方から上げるわいの。
三郎　イヤモ、どこからなりと、貰ひさへすりやよいでござります。そんなら暫らく木部屋を御無心申しまする。
女中のたつた一人、晝中でも用心時。
ト表をさして
ドリヤ、一睡仕らう。
ト思ひ入れあつて下の屋體へ入る。
〽荷を片附けて入りにけり、取散らす物そこ〳〵に、片附けながら兎や斯うと、内に思ひの表口、錦の直垂引摺り廻り、鎧重げにいづこかは、坊主頭を戸口でがつたり。
ト向うより澤庵、坊主頭、大將の陣立て、鎧の重たげな思ひ入れ、よろ〳〵して出て、直ぐに本舞臺へ來り門口に行き當り。
澤庵　アイタ、、……爰ぢや。明けい〳〵。
〽明けい〳〵と打叩く。
そで　誰れぢや。
澤庵　おれぢや。明けてくれ。

そで　トお袖、門口を明けて、
そで　ヤア、父さんか。
澤庵　オイヤイ、おれぢや。
　　ト後をさして内へ入り
さて〳〵、年寄つて走り廻ると、肩も腰もひり〳〵いふ。ア、しんどや〳〵。さうして、孫めはまだ戻らぬか。
そで　戻らぬ段かいなア。村中が毎晩々々、かやせ〳〵の太鼓鉦で、わたしも附いて歩いても、これぞと云ふ便りもないわいなア。
澤庵　さうして、十作はまだ戻らぬか。
そで　まだどころか。今日で四日、わたしたつた一人ぢやわいな。
澤庵　エ、、大方戰場へがな行つたものであらう。碌に勝手も知らず、怪我をまくらにやよいが。
　　ト此うちお袖、澤庵の形をヂロ〳〵見て
そで　父さん、お前のこの形は仰山な。こりやマア、どうしたのでござんす。
澤庵　娘喜べ。追ッつけ孫が行くへも知れる。その上大きな出世するぞ。
そで　なんぢや。小四郎の行くへが知れたかえ。

澤庵　イヤ、まだ知れはせぬが、知れたも同然ぢや。マア、この形の仰山な因縁、出世の筋を云つて聞かさう。何が孫めが見えぬと云うて、狂人のやうになつて、石山の方まで尋ねに行たれば、軍の眞最中。こりやならぬと引返して戻る所を、ばら〳〵と鎧武者が追つ駈け廻つて、無理無體に連れて行た所が、北條どのゝ陣所ぢや。近習の大名の中へ突き出して置いて、北條どのがヌッと出て、ヤイ坊主、其方は堅田村の澤庵と云ふ者な。聞きも及ばん、この度の軍は、國家の分け目晴れ勝負。汝が面差寸分も我れに變らぬゆゑ召寄せた。汝北條時政となつて、軍卒に采配して、敵陣の不意を討ち、違背なくこの場所より時政になれ、恩賞は意に任すと仰しやる。ハイ、それはさうでもござりませうが、私しは一人の孫を失うて、尋ねに歩いて居る最中でござります。軍に出ては孫めを尋ねる事がなりませぬと云つたれば、ホウ、その事も聞き及ぶ、悴が行くへは此方が、大勢を以て連れ歸れと申し附けたれば、例へ野狐の障化にもせよ、天地の間に我が詞がゝりしもの、暫時が間も隱し置く事ならず、近江一國は三日のうちに探し求め、汝に返し與へる間、その儀に少しも屈すべからず、この度の役目相勤める當座の

褒美として、堅田の浦にて四千貫宛て行ふ。倅も歸る。事成就なせば、追ひ〳〵に沙汰すべし。四千貫の墨附、請け納めて用意なせと、云ひ捨てしてズッと入ッた。さて鎧を着せる、直垂を卷く、こんな形になると、皆大名が時政公ハア、と云うて辭儀する。合圖に直ぐに陣所を押出す。何を云ふ間もなしに、夢中になつて出る事は出たが、人買ひにもせよ、狐にもせよ、天下取りの息が掛つたものぢやに依つて、孫は連れて戻るに違ひはなし。四千貫のお墨附を頂戴したれば、とても事に手柄をして、いつそ大名にでもなられまいものでもないと、それからグッと北條の氣になッて、滅多矢鱈に駈引きすると、佐々木の四郎と云ふ奴が、此方の陣を攻め破ると、誠の北條でない悲しさには、側に附いて居る和郎達が、おれを抛ッて置いて逃げる。おれも馬の鞍にかぶり附いて逃げたれば、佐々木が見附けて追ひかゝるを、やう〳〵この村へ逃げて戻つた心は、もし爰へ佐々木が追ひ駈けて來おつたら、村中が云ひ合せて、たつた一人を叩き伏せて、生捕りにする積りで、出口の者へ云ひ合せて置いて來た。なんでも功名して、大名になつたらば、わいらも孫めも浮かみ上がる。この親仁が四千貫になつたは、うろたへた神も知らぬ事ぢや。アヽ、しんどやの。マア、この鎧を脫がしてくれい。

ヘ打つて變つた喜び話し、知らぬ結び目、とつく〳〵、脫がしにかゝる表には、戸口を叩く鎧武者。

ト向うより十作、陣立てにて走り出て、直ぐに本舞臺へ來て

十作　明けてくれ〳〵。

ト無性に門口を叩く。

そで　けたゝましい。誰れぢやぞいなア。

十作　嬶よ。おれぢや、明けい〳〵。

そで　ヤア、十作どの、戻らしやんしたか。

ヘ戸を明ける間もぐわつたぴし、草摺引摺る上がり口、澤庵は鎧脫ぎ〳〵。

澤庵　十作、嗜なめ。孫めが見えぬと云つて、村中は上を下へと尋ねて下さるのに、どこへ今まで行つて居たぞ。

そで　さうして、こなさんの形も仰山な。今日は碌な形で戻る者は一人もないがな。

十作　マア〳〵、やかましう云うてくれな。息が切れる。茶一杯くれ。

そで　アイ〳〵。

ト茶瓶の茶を酌んで出す。

澤庵　一體、マア、どこへ入つて居たぞい。

十作　どこへとは舅どの、けうとい出世ぢや。女房ども、小四郎も追ッつけ出る。えらいこつちや／＼。

こで　なんぢや、とんと譯が知れぬ。出世とは、どうした出世で、小四郎は、いつ戻るえ。

十作　さればいやい。悴は賢い奴ゆゑ、狐につまゝれる筈はないが、もし鉦太鼓が面白さに、戰場へ行きはせまいかと、ぶら／＼と尋ねて歩いて行つたれば、軍兵が取卷いて、坂本の方へ引ッ立て、行た所が聞け、佐々木の四郎と云ふ和郎の陣所ぢや。大勢が引挾んで、彼の佐々木が云はるゝには、聞きも及ばう。この度の軍は國家の分け目、我が坂本の軍師となつて、事を計る影武者を詮議なすところ、汝が面體聞き合ひ、召寄せたは、佐々木と名乘つて切つて出よ、これに依つて軍術あり、ソレ、物の具せよ、ハアと云つて、てん手に鎧持つて着せるゆゑイヤ私しは斯樣々々で、悴を失ひまして尋ねまするると、斷わり云うても聞かばこそ、その儀は少しも氣遣ひすな、頼家公の嚴命を以て、手分けをなし、その悴を尋ね出さば、三日のうちに手渡しくれう。この役目相勤める褒美として、頼家公の近習に取立て、子々孫々まで大祿を下し置かるゝが、如何に／＼と云はるゝ。よう思うて見れば、此方が手足逆樣にして尋ねうより、國家の主の威勢で尋ねてもらうたら、一日か二日のうちに、小四郎は戻るは知れてある。とても事に、突ッ込んで働らいたら、大名にでもなられまいものでもないと、大將と杯して詰合つた。いきのりに大名ぢや。お墨附頂戴して、さて軍に出たところが、北條時政の鼻の先へ切つて出て、なんでもこの親仁めが首取つたら、福德の三年目ぢやと、鎗を空棒使ふ心で、滅多なぐりになぐつたりや、皆尻に帆かけて逃げ居つた。外の奴等は知行にやならぬ。所で北條を、爰が大事と追ひ駈けたりや、慥かにこの村へ逃げ込んだに依つて、出口々々の者どもに、もし北條臭い者見附けたら、引ッ捕まへてグル／＼卷きにして置けと、云ひ合して戻つた。舅どの、喜ばんせ。これからは毛綿の白無垢を重ね段にして、織物の衣を着せて、蒔繪の鋤鍬で、畑へ行けば小四郎めも、明日か明後日戻るであらう。イヤモ、軍と云ふものは、肩のつかへるものぢや。嬶よ、茶を一つくれ。

そで　なんぢやゝら、どき／＼と、譯が知れぬわいなア。

ト また茶を酌んでやる。澤庵、合點のゆかぬこなし。

十作　これ程よう知れてある事を、鈍な奴ぢや。

澤庵　ハヽア、そんなら昨夜追ひ駈けたは、十作であつたか。

十作　エヽ、何とぞしましてごんすか。

そで　コレ、北條ぢやと見せて逃げて來たのは、父樣ぢやといなア。

十作　エヽ……面妖な。見知りのある、味いな形ぢやと思へば。

そで　お前の話しに寸分違はぬ話しを、今して居やしやんす所ぢやわいなア。

十作　そりや、どうしたものぢや。

澤庵　おれも孫を尋ねて行て、北條どのに四千貫の御朱印貰うて、影武者に雇はれた。おりや又佐々木が追ひ駈けるを、この村へ逃げ込んで、捕まへる積りぢや。

十作　ムウ。そんならこなさんは、鎌倉方へ一味して。

澤庵　其方は坂本方へ一味して。

十作　北條と思うたのは舅どの。

澤庵　佐々木と云つて追ひ駈けたは聟の十作。

十作　こなたも影武者。

澤庵　其方も影武者。

十作　舅と聟が

澤庵　敵味方。

十作　怪我がなうて

ト 双方顔見合せ

澤庵　十作。

十作　舅どの。

兩人　ても、危ない事の。

〽これはしたりと手を打つばかり。

そで　マア〱、その鎧も脱がしやんせ。

〽取りにかゝれば佛頂面。

十作　エヽ、折角汗水流して千里一跳び、一足飛びに出世せうと思うたに、とんと無駄働らきになつてのけた。

澤庵　イヤモ、そりやおれも同じ事ぢや。シタガ、四千貫の御朱印貰うたりや、マア、これでよい事いやい。

十作　そりやそんなものぢや。慾張れば方途がない。おれも坂本の近習に抱へられたれば、捨てゝも四五千石の知行はぶらついてあるワ。マア、なんでも乘り物で、嬶連れて伊勢詣りをするワ。

澤庵　マア、寺の住持に七條の袈裟衣を買うてやつて、講

中の頼母子を五人前も入つてやるワ。
十作　雜炊を止めにして、毎日燒き物附で飯を食ふワ。
澤庵　强飯を配らざなるまい。
そで　コレイナア、お前方は其やうな事ばかり工面してぢやが、肝心の小四郎は、いつ戻るぞいなア。
澤庵　そりや北條どのから連れて來る筈ぢや。
十作　佐々木どのゝ方から探して下さるわい。
そで　ソレ見なさんせ。どちらも連れて戻ると云うたばかり。わしや榮耀も知行も否。小四郎さへ取戻せば、なんにもいらぬ。坂本方と鎌倉方、引別れて頼まれたお前。兩方から尋ねる小四郎、一方が尋ね逢うたら、一方が聞くまいし、一緒に見附けて、其方ぢやの此方ぢやのと、詰まるところは小四郎がどうならうと、わしや氣にかゝつてなる事ぢやないわいなア。
澤十　こりや、ほんにさうぢや。
澤庵　北條どのから大勢して尋ね行く孫め。
十作　佐々木どのから手分けして探し歩く悴。
澤庵　兩方が突ッ張り合つたら、敵々の意地づく。
十作　半分づゝちぎつて戻してもらうては、一も取らず二も取らず。

澤庵　十作、そちらは變替へはなるまいか。
十作　しつかりと杯までして、今さら變替へはなりませぬが、こなさんの方は變替へはなりませぬか。
澤庵　御朱印まで頂戴して、どう變替へがなるもので。
十作　ぢやと云つて、どちらぞは變替へして、片附けにやなりますまい。
澤庵　鎌倉方へ附くがよいか。
十作　坂本方へ附いたがよいか。
澤庵　お主は、マア、どう思ふぞ。
十作　こなさんは、どう思はつしやる。
そで　エヽ、モ、二人ながら同じ事ばかり云うて居ずと、どちらへなと片附けたがよいわいなア。
澤庵　イヤ〳〵、こりや、大事の事ぢや。おりやマア、奥で思案して見る程に、十作、其方もとつくりと思案して見や。
十作　ナニサマ、どちらへなとも固まつたりや、もう金鐵にならにやならぬ。そんならマア、思案して見さつしやりませ。
澤庵　今日中に互ひの胸を
そで　どちらへなりと片附けて

澤庵　鎌倉か。
十作　坂本か。
澤庵　決着次第。
十澤　後に逢ひませう。
〽心を奥と次の間へ、立別れてぞ入りにける。
ト兩人、鎧ひんだかへ、澤庵は上手、十作は納戸へ入る。
〽後にお袖はとつおいつ、案じ煩らふ表の方、ちよつぼり髪を振り亂し、緋縅しの鎧を投げかけ、靜々と門口より、乳臭き大音聲。
ト向うより、小四郎、子役、好みの陣立てにて出て、門口へ來てキツととまり
小四　ヤア〳〵澤庵、この家に北條時政、匿まひ置く事知つたるゆゑ、佐々木小四郎討手に向うたり。尋常に渡せばよし、異議に及ぶと一々に、首を取らうか、返答は、なんと〳〵。
〽返答如何にと呼ばつたり、一目見るよりお袖は駈け出でひんだかへ。
トお袖、門口より抱へて內へ入る。この時、篝火、下手より出て窺ひ居る。

そで　其方は小四郎ぢやないか。この間から其方が見えぬに依つて、父樣も祖父樣も、この母も、夜の目も寢ずに尋ねて居るのに、どこへマア行きやつたやら。さうしてこの形は。ほんに戻る程の者が、鎧着て居ぬ者は一人もない。今日程希有な日はない程にの。早う譯を聞かしやいなう。
小四　イヽヤ、おりや爰な子ぢやないぞ。粗相云うたら、お母さんでも利かぬぞ。
そで　これはしたり、何を云やるやら。爰な子でないとは、そんなら其方は、どこの子ぢや。
トこの時表より
篝火　佐々木四郎左衞門高綱が忰小四郎、討手の檢使は女房篝火。
〽裲襠壺折一腰を、さしも立派の武家育ち、すつと通つて上座につけば。
そで　ヤア、お前は姉樣。ようマアお健でござんしたなア。
篝火　浪人のうちに馴れ馴染み、親に逆らうて勘當同然。夫は佐ゝ木四郎左衞門、今にては賴家公の軍師。
そで　アノ、お前が佐々木どのゝ。
篝火　肉身の子を生贄に供へ、白髭明神を祈る時は、武運

を開く事疑ひなしと、たつた一人の小四郎を、三つの年に父御の立願、丹誠抽んで神慮に叶うた佐々木どの、神に捧げし我が子の命、その日を命日と思ひ切つて居た所へ、迷子の守り袋、此方に覺えの年號月日、飛び立つやうに思うたわいなう。

そで　エヽ、そんならこの子は、お前と佐々木どのゝ、捨てさよやんしたのかえ。

篝火　迷ひ子の札の所書き、さては矢ツ張り巡り巡つて、伯母の手へ拾はれたりと、事の樣子はとつくりと、云うて聞かしたれば、初めはうろつく顏色も、事の樣子を聞き分けて、佐々木の四郎が子ぢやと云ふ事、辨まへたは天然と武士の骨肉。今までは忝なうござるぞや。改めて小四郎は、此方へ取戻す程に、さう心得て下されい。

そで　そりやモウ、お前の生ましやんした子なりや、どちらで育てゝも大事ないが、コレ、小四郎、其方はいよいよ、あつちの子になりたいか。

小四　アイ、ほんの父樣の子になつて、侍ひになるわいの。

篝火　サア、この上はこの家の内に、北條時政を隱して置く事紛れない。討手には小四郎、首取る役はこの篝火。サア、時政を早う出しや。

そで　なんの事ぢやぞいなア。時政とやら北條とやら、そんな人匿まうた覺えはないわいなア。

篝火　達てあらがふと、この子の命がないぞや。

そで　そりや又なぜにえ。

篝火　夜前の戰ひに、夫佐々木どの、影武者を拵らへ、謀り事を以て是非に北條どのを討取る手筈。運強うしてこの家へ逃げ込んだを、大勢を以て討取るは安けれど、假にも我が子を養育にあづかりし義理と、わしが緣とに搦まれる程、猶一寸も容赦はならぬ大事の敵。それゆゑこの子に討手の役目。わしを檢使に遣はされたは、北條が首引ツ提げ歸ればよし、もし討ち漏らし手に入らずば、腹切つて立歸れ……と、サア、退引きならぬ忠義の金鐵。もう叶はぬ。北條どのを早う出しや。

そで　エヽ、父樣いなア。その事なら大きな間違ひ。成る程、北條の姿で逃げて戻つたに依つて、その御不審もあらうが、そりや北條ではないわいなア。

篝火　ナニ、北條ではないとは。

澤庵　イヤ、澤庵が直に云うて聞かさう。

へ一間を出づる澁面顏父樣かと云ひたさも、隔たる仲の篝火を、澤庵は睨め廻し。

浪人者と腐り合ひ、親を振捨て駈落ちした、惡性のどち女郎め。佐々木どのゝ奥方、北條を附け込み、孫が命を狙ひに討手呼はり、片腹痛い。ハレ、佐々木四郎左衞門は日本での軍師かと思うたれば、明盲目同。然う云ふ者を便りにして、軍する坂本の城。今にぶち落さるゝであらう。ヤレ。笑止やなう。ハヽヽヽ。

篝火　夫佐々木を目が見えぬとは、何を以て云はしやんす。

澤庵　云うて聞かさう。コリヤ、おれはな、昨日北條どのの影武者に雇はれて、錦の直垂で戰場へ出た、時政と云ふはこの澤庵ぢや。なんと膽が潰れたか。まだ恟りさす事がある。其方に雇うた影武者の佐々木は、娘の男の十作と云ふ者。計略で候ふのと、われに智惠があれば、人にも智惠があつて、影武者が突ッ張つたを知らぬ大だわけ。不所存な女郎が生んだ孫めは欲しか遣る。連れて去ね。北條どのは石山の陣で、今頃は蒲團着て寢て居らるる。爰にはお居やらぬと去んで云へ。

篝火　ムウ。この家に北條が居ぬと云ふには、なんぞ慥かな證據がござんすか。

こて　そりやわたしが證據ぢや。先刻に父樣が、鎧直垂で戻らしやんしたを、追ひ駈けて戻つたはこちの人。そりやよう知つて居るわいなア。

澤庵　コリヤ／＼、娘、愚鈍な侍ひの女房になるものは、矢ッ張り愚鈍ぢや。あんな奴にはとつくりと、正體見せて鼻明かすがよい。其方に雇うた佐々木の拔け殼、證據を見せう。十作、爰へ出て、とつくりと云つて聞かせい。

十作　オヽ、慥かな證據は爰に居る。

トずつと出たる顏見て恟り。

篝火　ヤアヽ、こなさんは。

十作　影武者の十作、拾うた倅は篝火どのへ、戻してしまへば別れ／＼。慥かな證據に出た上は、佐々木の云ひつけ。こなたの詮議。とつくりと見物せうわい。

澤庵　十作、聞く通りの體裁ぢや。あゝ云ふたわけ者の孫を貰はうより、思ひ切つて此方へ片附け。なんと、これで思案が落ちつかうが。

十作　如何にも、とつくりと落ちついて、爰に北條が隱してあるに違ひはない。舅どの、云はつしやれ。

澤庵　十作、そりや何を云ふぞい。

十作　すべて人氣天に上り、名將の星はそれ／＼に分る。晝は星の光りなけれども、一旦天下の主となつたる者は、黃氣とて黃色なる雲氣立ち昇る。この家の棟に黃氣立ち

丼るは、大將時政隱れ居るより外、この氣の立つべきやうはない。お袖が留守を考へ、北條を連れて戻り、こなたが隱して置き、そのこなたが鎧直垂で、また改めて外へ廻り、戻つた體に見せ、影武者に雇はれたと吹聽して閻みを解かすのか。もう遁がれぬ。サア、早う出して渡さつしやれ。

澤庵　樣々に云ひ出すが、すりや、どうあつても、われは坂本へ奉公するか。

十作　惡を罰し、善に附くのが天の冥利。

澤庵　北條どのが惡とは。

十作　賴朝公逝去の砌り、天下を預かり、賴家成長の上、天下を讓らうと約しながら、廿歲の上になる賴家公に讓りもせず、我が子の義時に大將の綸旨を願ふは國賊。惡ではあるまいか。

澤庵　サア、それは。

十作　黃氣の立つのが慥かな證據。早う出して渡さつしやれ。

〽すつかり云ひ出す聟の顏、不思議さうに目鏡取出し、ためつすがめつ、とつくりと見極め。

澤庵　イヤ、したり。ハテ、よくしたりな。

〽初めて驚ろく舅の眼力、一物ありと知られたり。

そで　こちの人も、なんの事やら、七むづかしい事云はずと、覺えのない事なら、とつくりと姉樣に譯云うて、小四郎が身に凶事のないやうにして下さんせ。父樣も又、覺えのある事なら、孫が身にかゝる事ぢや。どうぞ早う云うて下さんせいなア。

澤庵　エヽ、何吐かすぞい。例へ天地が引ツくり返つても知らぬ事は知らぬわい。

篝火　申し、達て知らぬと仰しやると、小四郎は今爰で、腹切りまするぞえ。

澤庵　養育の恩も思はず、引ツたくる親も親。それに附く餓鬼めも餓鬼め。孫を飼はうより犬ころ飼へと、譬へに違はぬ。うぬが物ぢや、勝手にしおれ。

十作　拾うた子を親の方へ渡せば、元々佐々木とは朋輩でも、手柄は仕勝ち。天井簀の子の下までも、家探しして引出して見せう。

澤庵　オヽ、勝手覺えたおのれが家ぢや。土の庭まで探して見い。

篝火　どうしても云はしやんせぬか。

澤庵　知らぬわいやい。

篝火　可哀や、其方の壽命が縮まつたわいの。
そで　イエ〳〵。滅相な。この子はなんぼうでも。
〽取りつく女房十作が、荒繩取る手後手に、あたりの柱へ括りつけ、辟立てさせぬ猿轡、ぢろりと見たる舅の側、のさばり返つてふんばたがり。
十作　坂本鎌倉と別るゝからは、敵味方の澤庵どの。聟舅が欝陶しい。女房去つてやりませう。ヤイ、小四郎、佐々木の子となつたれば、われも大名の子ぢや。母めをあのやうに縛つたが、わりや悲しいか。
小四　餘所の伯母が縛られたのは、何ともない。おりや大名の子ぢや。
十作　その土性根を忘れなよ。
小四　百姓の其方達の、知つた事ぢやない。
十作　ハ、、ませるワ。手柄は仕勝ち、褒美は取り勝ち。根太引きまくつて家探しする。北條時政、出さらぬかい。
〽半がい戸棚も踏み砕き、脚を堅めて入りにける。澤庵しぶ〳〵立ち上がり。
澤庵　ドリヤ、狂人どもに構はずと、寺の住持と碁でも打たうか。
ト行きかゝるを引きとめ

篝火　十作どのが家探しするを、見捨てにして行かしやんすは、眞實匿まはぬのか。但し敵方へ救ひの勢を云ひに行くのか。
澤庵　四千貫の御朱印頂戴した澤庵。敵方の奴に物云ふ事はない。
〽振り切り蹴のめし足早に、表を指して出でて行く、胸の篝火消え果てゝ、今は我が子の闇路ぞと、上帶鎧脫がすれば、淺黄上下尋常に、小四郎が死裝束、ハッとお袖が仰天も、寄るに寄られぬ縛り繩、物は云はれず身を揉むばかり。
篝火　なんぼう助けたう思うても、もう叶はぬ。妹、無得心なと思やらうが、澤庵さまをわしが親と云ふ事も、この子の事も、はや宇治の方さま賴家公のお耳に入り、澤庵は北條に一味、女房悴の緣に依る時政、わざと討ち漏らすは佐々木が二心。この上は同勢を以て、一人も遁がすなと、大江の入道が讒言。諸大名の眞中で、我が子に討手の願ひを立て、時政の首手に入らずば、悴小四郎に切腹させ、血筋を切つて潔白の申し譯と、云ひ放した夫の義心。小四郎にも陣所に於て、とつくりと云ひ聞かせし通り、必らず未練を起しやんなや。

小四　アイ、わしや侍ひの子ぢやに依つて、腹切つて死にまする。
〽腹切つて死にますと、健氣の詞、母は涙を押隱し。
篝火　オヽ、出かしやつた。其方が腹切りやるとの、伯母や伯父様も、爰の家の父様母様、みんな達者で長生きさつしやる。今の父様も侍ひが立つ。わしも後から冥途へ行くわいなう。
小四　みんな達者なら、母様と連れ立つて冥途へ行きます。
〽死出の門出を急ぐ子に。
篝火　よう云うた。切腹の作法は敎へて置いた通り。早うしや。
小四　アイ。
〽鎧を假の三方と、首掻き刀差置けば、尋常に兩肌を、脫ぎも脫いだり、いたいけ盛り、後に廻る介錯の、刀は俄かに胸をつく、鐘も涙に暮れ近き、お袖があせる悶え泣き、子は大人しく短刀を、押戴きしその風情、母は二目と見もやらず。
篝火　コレ、此やうに賢う生れついたもの、捨てた時の親心は、鬼とも蛇とも佛神に、罪を請けてもしまはうが、たま〳〵巡り逢うたもの、甦つた心地して、喜ぶ甲斐も武士の意地、捨てたなりで拾ひもせず、鳶烏の餌食とならば、今の思ひはあるまいもの。
〽背中に据ゑた灸の痕、達者に育てゝたもつたを。
思へばこの子の
〽この子の爲に四苦八苦。
病で死んでたもつたら、思ひ切りもあらうもの。ちりけせうもん筋かいの、浮世の母は怨めしい。
〽刀打ちつけ引寄せて、叫び嘆けば身も世もあられず、ワッと泣きたい血の涙、お袖が衿に夕立の、空も曇れるばかりなり、斯くては果てじと泣き腫らす、眼を塞ぎつつ小四郎を、直すもそゞろ、子もそゞろ。
オヽ、ちつとなりとも早いがよい……ア、、後れた。内で存分泣いて來て、又爰で未練をかけては……ア、モウ、思ひ切つた。サア、その刀戴いて、首差延べて待つて居や。
小四　わしや覺悟して居るぞえ。
　ト篝火、思ひ切つたるこなしにて
篝火　南無阿彌陀佛。ソレ、たつた一思ひに。
〽振上げは上げながら、柄も顫ひ目も眩み、立退いては立戻り、思ひ切つてもなか〳〵に、堅田の雁も寄る邊な

き、足踏み直し〳〵。既に斯うよと見えたる折柄、俄かに表騒がしく、馬の嘶き數多の人音、三つ鱗の旗指し物あたりも煌く鎧武者。

ト向うより大場の十郎、陣立てにて首桶を抱へ、軍兵大勢高張りを持ち附き添ひ出て來り、門口に手を突き

十郎 ハツ、鎌倉の大將時政公、この家に遁がれましますよし由、忍びの物見が知らせに依つて、お迎ひに參つたり。腹心の侍となる佐々木四郎左衛門高綱、影武者數多拵らへ置くとも、鎌倉の御威勢、幾人あるにもせよ、影武者ぐるみ大軍を以て討取れと、義時公の下知に依つて、無二無三攻め破り、佐々木と名の附く奴輩、悉く首取り候ふところ、今朝の戰ひに、最早影武者の根を斷たれ、誠の佐々木討つて出で、首取つて候ふ。殘る影武者はこの家の悴小作ばかりと、忍びが訴へ。この上は御安堵遊ばされ、早々御歸陣、然るべう存じ奉りまする。

〽首桶の蓋とつく〳〵、勇み進んで訴ふる、あはやと見えたる奥の間より、何れにありしか北條どの、六拾餘州を鎧兜に、威あつて猛く顯然と、立ち出づれば篝火は、さてはと氣配り、見向きもやらず首を眺め。

ト納戸より澤庵、鎧兜を着し出て來り

澤庵 昨日まではこの首に、後を見せし時政が、今手の下に誅伐する、ハテ、心地よや。我を泰山の安きに傾むけ、坂本の城は最早落城も同然。今ぞ安堵の入陣いたさん。供せよやい。

軍皆 ハア、。

〽悠々と行かんとす、先へ廻つて一腰かい込み、遁がさぬやらぬと詰めかくれば、さてこそ敵よござんなれと、矢褄作つて待ちかくる。

澤庵 待て〳〵。高が女の事、何程の事かあらん。ヤイ、おのれら、捻り殺す奴なれど、澤庵が娘孫とあれば、坊主が忠義に愛でゝ宥しくれる。ハテ、命冥加な奴等ぢやなア。

篝火 ヤア、どこへ〳〵。一寸も遁がしはせぬ。歸りたくば我れ〳〵を討取つて、潔よう歸りや。

澤庵 何を猪子才な女郎め。手向ひせずと、そこ退け。

篝火 時政覺悟。

〽討つてかゝるを事ともせず、ひらりと交し腕首掴み、弱腰蹴据ゑて乘つかゝる、敷かれて篝火無念の涙、庭にはお袖がハア〳〵と、心ばかりをあせり居るっ小四郎は短刀押取り、前へ廻つて小躍りし、時政が鎧の間、柄も

折れよと突つ込めば、ウンと一息苦しみながら、小四郎をかい摑み、篝火すかさずひん抱へ。
小四郎出かした。突け〳〵。抉れ。
〽お袖が喜び表には、騒ぐばかりに矢も放さず、篝火は聲を張り上げ。
鎌倉の大将北條時政を、佐々木小四郎が討取つたぞ。
〽呼はるうち、今まで飾る旗指し物、忽ち替る笹龍膽、坂本の軍勢勇み立ち。
十郎　天晴れ〳〵。佐々木小四郎、北條を討取つたる事、大場の十郎見屆けたり。佐々木どのゝ身の云ひ譯、お疑ひはさつぱり晴れた。この通り申し上げ、小四郎への恩賞は、追つてお沙汰に及ばれん。軍兵ども、勝鬨々々。
軍皆　エイ〳〵、オウ。
〽諸卒引連れ大場の十郎、坂本さして引返す。
ト十郎、軍兵引連れ向うへ入る。此うち、篝火、お袖の繩を解く。
そで　オヽ、出かしやつた〳〵。モウ〳〵、これで腹切る事もあるまいわいなう。
〽あら有り難や忝なやと、伏し拜むうち佐々木が首、お袖が見附けて。

ヤア〳〵、この首は、こちの人十作どの。コレイナア、十作どの。こりやマア、どうしたのぢやぞいなア。
〽愕りうろつくこなたには、片息に苦しむはずみ、兜は脫けて又愕り。
篝火　ヤア、こりや父樣、澤庵さま。
そで　エイ〳〵〳〵。
篝火　コレ、父樣、どうしてお前はいつの間に、コレ・氣を慥かに持つて下さんせ。
そで　コレ、十作どのは死なしやつたわいなア。
小四　コレ、祖父樣いなう。父樣いなう。
〽夢に夢見し姉妹、こりやマアどうせう〳〵と、首と手負ひに取りついて、ワツと泣くより外ぞなき、木部屋を出る以前の商人、欠伸に吐息つき交ぜて。
ト泉の三郎、下手屋體より出て
三郎　アヽ、さても〳〵やかましい內ぢや。寐ようとすりや、ソリヤ北條ぢや佐々木ぢやと、この頃は佐々木と北條に聞き飽きた。何やらお取込みの樣子。もうお暇申しませう。
〽はてお笑止千萬と、餘所に見捨てゝ行かんとす。障子の內より大音聲。

ト門口へ出かけると

高綱　ヤア、鎌倉の舊臣、泉の三郎近平待て。

〽呼はる聲は耳に胴抜け、振返つて素知らぬ顔。

三郎　ホウ、なんの事ぢや。おれが事ぢやないさうな。

ト また行きかける。

高綱　ヤア、卑怯なり泉の三郎。佐々木四郎左衛門高綱これにあり。敵に後を見するか。返し合して勝負せよ。

〽一間の障子さつと明け、袋角を鍬形に、萠黄縅しの具足を着し、采配持つて床几にかゝる、商人見るより素肌脱げば、下に着込みの腹巻きし、隠し置いたる用意の刀、荷桶の内より鐵砲を、取出して大音聲。

三郎　ヤア、烏滸がましの佐々木高綱。おのれ形を變じ、屡々諸卒を驚ろかす。某また姿をやつし、其方が本性見出ださん爲、この所へ入込みしに、案に違はぬ佐々木が正體。泉の三郎近平が、手練の玉を受けて見よ。

〽狙ひ外さぬ引き金の、音はどつたり打ち抜けば、鎧兜も其まゝに、ばら／＼と佐々木が姿、藁人形とぞなりにけり、南無三方と悔りの、こなたの障子に佐々木高綱。

高綱　ヤア／＼近平、佐々木の四郎を恐るゝか。玉藥はそればかりか。飛び道具はもうないか。及ばぬ事を。取措け取措け。

三郎　化け損ひの佐々木の四郎。斯くあらんと今一つ、隠し持つたる種ケ島、胴腹に二つ玉。

〽鎧の間打ち抜けば、又も解けてばら／＼／＼、藁を括りし佐々木が姿、再び呆れ死物狂ひ、奥を目がけて駈け入る近平、すつくと向ふへ佐々木高綱、采配押取り立ち向へば、近平用意の管鎗取りのべ、無二無三に突きかゝる。互ひに名に負ふ名將勇士、水象が山を裂く、龍虎は飛んで雲を築く、互ひの勢ひ叡山颪し、大地も轟き今爰に、湖水の湧くかと疑はる。

澤庵　ヤレ。暫し佐々木どの。云ふ事あり。近平待て。

ト 双方とまる。澤庵、よろぼひ出る。三郎、氣を替へ

三郎　久しう候ふ親人、藁人形と知つて鐵砲を打ちかけしは、當の敵を見遁がさぬ、時政公への忠心。孫の手にかかり、こなたの思ふ壺でござらうがの。

高綱　十作は元双子の兄弟、浪人の時引別れ、この頃不思議に逢うたるゆゑに、我が影武者となり、討死したるを幸ひ、我れ又十作となつて入込んだる仔細は、夜前の軍、時政を追つ駈けたるに、運強き大將、忽ちに見失ひ、前後を忘じ、天文を考ふれば、大將の星は石山の上にあり。

南無三方、討ち漏らして歸せしかと、運氣を以て考ふれば、天が下の主となりし、人の黄氣は爰にあり。星は石山にあつて黄氣は爰に立つは訝かしく、大江の入道が讒言にて、一度ならず二度ならず、時政を討ち漏らすは、二心なりと愚人の舌の根。悴が體突き出して、云ひ破つて女房を差越し、我れも心を附けるところ、黄色は立つて時政はなし。察するところ澤庵の懷中に、日の本の主たる、時政の直筆、書き判を所持召されうがの。

澤庵　ヤア、なんと。

高綱　イヤサ、坂本鎌倉軍を止め、和睦なさんといふ、時政の書き判であらうがの。

三郎　軍を押へて入込んだる佐々木の四郎。其方が懷中にも、頼家公の書き判、所持したであらうがの。

高綱　サア、自筆の書き判見ようか。

澤庵　ハ、ア、恐ろしき佐々木どの。我が子ながらも天晴れ近平。某元は源助とて、頼朝公のお馬廻り。浪人して土百姓となり、儲けたる三人の子。惣領の源一は、年もゆかぬに百姓嫌ひ、侍ひの魂ひ、十二の年に出奔する。中妹のおさいは、十六の年浪人と語らうてこれも出奔。老いの氣力覺束なく、妹に聟取つて、頭は剃れども心は剃らず、坂本方頼家公成長の上、北條は天下を渡さず、合戰になるは知れた事。一方を防ぎ、昔の御恩を報ぜんと、思ふは鷄の嘴の喰ひ違ひ、悴の源一、北條どのゝ小姓となり、氣に入つて次第の出世。衣川の軍より、降參したる泉の三郎が養子となり、御大將の取持ちにて、詰め腹の折柄も、直ちに泉の三郎と、養子親の名を讓り、日に増し夜に増す時政公の憐愍厚く、諸大名の上に立ち、鎌倉の出頭が、我が子の出世は至り至つて、とうどう泉の上に立つ。

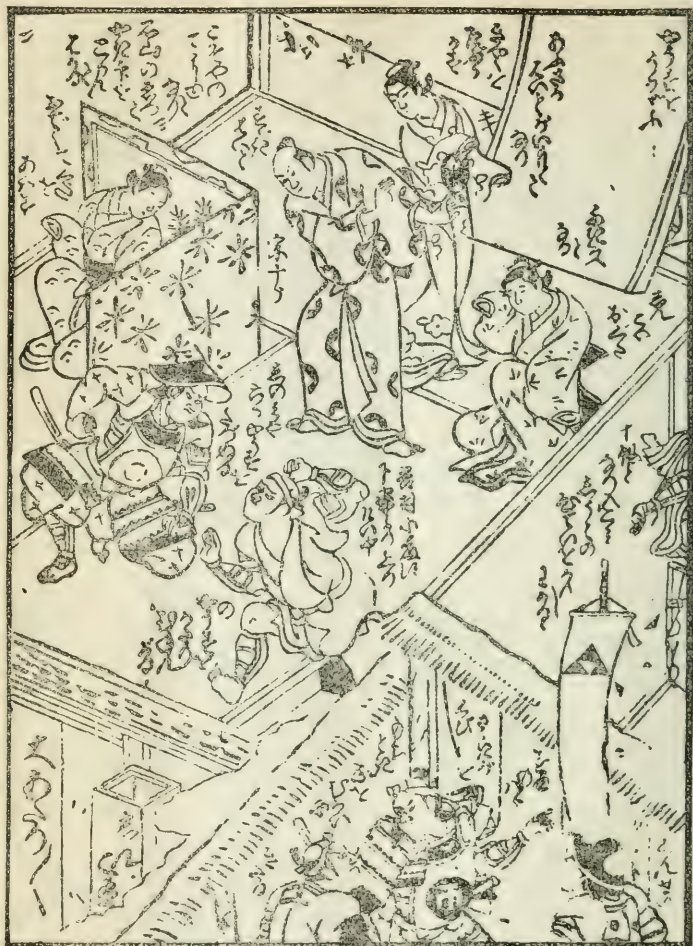
〽北條どのゝ御惠み、ハ、ア忝なや有り難やと、一念ふつと鎌倉へ兆すと思はず味方の心。

佐々木に追はれて北條どの、途中にて我れに出合ひ、匿まひくれよと半死半生、時政公と見るより、よき折柄と密かに伴ひ、孫を尋ねる其うちは、空家へ裏より入れ置いて、豆茶をはまし、附け込んだる和睦の書き判。命の親の澤庵が、往生づくめに自筆の書き判、取つて其まゝ衣類を着せ替へ、我れは北條となつて佐々木を呼び寄せ、和睦の書き判渡さんと、最前の詞の端々。よく〳〵見れば拵らへたる似せ痣の面體。さてこそ佐々木と落ちついても、落ちつかれぬは孫が身の上。北條が爰に居ねば、

腹切らして父の云ひ譯。娘も生きては居をるまいと、とつおいつの思案を極め、裏から廻つて北條と、名乘つたゆゑに突つ込まれ、孫も手柄、御自分も、御前の云ひ譯さつぱり立つた。聟は坂本、悴は鎌倉。古主と恩ある主人とに、心を碎く澤庵が、がんじがらみのお家の緣。どうぞ和睦のあるやうに、執成し頼む、佐々木どの。
〽深手いとはぬ老いの身の、手を合し伏し拜めば、篝火お袖は取縋り。
篝火　さういふお心とは露知らず、恨んだが勿體ない。知らぬ事とは云ひながら、親に刃向ひ殺させたは、あの子の手をかり殺さしたのも同じ事。
そで　イエ〳〵、それより、夫の最期も露知らず、父樣の殺されるを、喜んだわたしが不孝。
篝火　イヽヤ、不孝とはわたしが事。
そで　イヽエ、わたしが。
篝火　イヤ、わしが。
小四　祖父樣、死んで下さんないなう。
〽足摺りしたる幼な子と、お袖が絞る涙より、消ゆる篝火一時に、取亂すこそ哀れなり。佐々木は錦の袋より、恭々しく一書を出し。

高綱　これこそは坂本の城内和睦、相違なき頼家公の自筆。
　ト錦の袋入りを出す。澤庵も同じく出して
澤庵　ハヽア、忝ない。コレこの袋に入りしこそ、時政公自筆の書き判。
三郎　イザ、佐々木、頼家公の書き判受取らう。
高綱　澤庵、時政の書き判受取らう。
澤庵　サア。
高三　サア。
〽サア〳〵〳〵と受取る書き判、兩方さつと披き見て。
ハテナア。
　ト双方こなしあつて納める。
〽互ひにほつと心の一物。
澤庵　最早浮世に思ひ置く事一つもない。和睦濟んだる上からは、これからが誠の一家同志。孫の出世を未來から見て樂しむ。妹の後家めが事、姉よ、よいやうに頼むぞよ。もう目が見えぬ。聟どの、とてもの事に御介錯。
高綱　苦痛をかけるは却つて不孝……南無阿彌陀佛。
澤庵　南無阿彌陀佛。
　ト合掌する。
〽引入る息を太刀風に、首は前にぞ落ちにけり、ワッと

安氷六年九月六坂

中の芝居上演繪番附

一度に取縋り、前後不覺の有樣を、見向きもやらず佐々木高綱。

高綱　舅の心根察しやり、わざと介錯急ぎしは、鎌倉の犬めらに、佐々木が詞傳へん爲。ヤア、近平、よつく聞け。惣じて武士の計略する書き判は、日本大小の神祇を驚ろかし奉り、もし僞はりあるに於ては、子々孫々永々冥罰を蒙むるべしと書くべきを、時姫を返すに於ては、時政和睦を調ふる事實正なり、時政判と書いたる書き判。この書判は誠にあらず、時政は文覺に梵字を習ふと、詳しく聞き及ぶ。この書き判は梵字の寄せ字。賴家滅すと四字の梵字を寄せ合せ、書き判として渡せしは、和睦と見せて氣をゆるさせ、不意に大軍を以て押寄せん謀り事。時姫を返せとは小賢しい。此やうな計略に乘る佐々木四郎左衞門でない。舅が志しに愛でゝ、表は和睦、心は軍配、帶劍解いて夜を寐なと、親仁めに云ひ傳へよ。

三郎　オヽサ、さいふ汝が主人と賴む、賴家のまだら犬。この書面に、天の時政に當れり、鎌倉と和睦、天地神祇も照覽あれ、相違あらざるものなり。天の時政に當ると書きしは、時政公を調伏の願文。源氏の判を据ゆべきに。清盛の書き判したるは、北條の源氏を亡ぼすべき手段の書き判。淺墓な野良犬ども。泉の三郎あるうちは、表は何時城が落ちやうも知れぬ。油斷すな、佐々木の四郎。

高綱　ヤア、ほざいたり。助け歸す奴ならねど、見遁がしくるゝは舅へ追善。

三郎　掻き首にする奴なれど、助けてやるは親人への手向け。

高綱　鎌倉が持ちこたへるか、其方が力でこたへて見よ。

三郎　坂本の城、力一ぱい守つて見よ。

高綱　和睦の後が

三郎　互ひの再會。

高綱　又の戰場。

兩人　見參せうわい。

〽睨み合つたる二人の勇者、止むる女房、止むる妹、親の遺言とり〴〵に、手を合せども、いつかないかな、この場を別るゝ武士の意地。

高綱　女房、北條時政が首を持て。

篝火　エヽ。

三郎　妹、佐々木の四郎が首を持て。

そで　エヽ。

高三　歸陣の手土產、早く〳〵。

篝火　ハアイ。

〽ハイとは云へどおとゞいが、胸も塞がり手も顫ひ、泣く泣く渡す恩愛妹脊、小脇にかい込み義者勇者、寶にも朱印の四千石、貝塚堅田が朧夜の、歸雁亂るゝ聞の聲、後に見捨てゝ。

ト双方、首かい込み、キッと見得。篝火、お袖、ハアと泣き落す。三重にて

よろしく幕

大詰　石山陣所の場

役名――北條時政。稻毛入道。北條相模守義時。泉の三郎近平。古郡新左衞門。金田五郎。淵塚丹藏。横山雷太。瀰尾大助實ハ本田四郎近常。三郎妻、岩菊。三浦之助義村。佐々木四郎左衞門高綱

造り物、平舞臺、見付け金襖。上手、御簾かけたる出屋臺。前側一面に御簾欄間。すべて石山陣所御殿の模樣、よろしく幕明く。

〽京鎌倉御和睦調ひしと、諸大名旗本喜びさゞめく御祝儀、石山の御陣所にて、御吉例の二十六夜、月を御拜の御壽、近く鎌倉へ御下向との觸れ流し、鎧に粹る上下の、行儀崩さぬ出仕の面々、事穩やかに暫らくは、太平の世と祝しける。

ト下手より、泉女房岩菊、裲襠奥方の形にて出る。紅井、絹江、腰元にて付き添ひ、後より、金田の五郎、淵塚丹藏、上下にて出て、各々よろしく仕ふ。

丹藏　なんと、この度の一戰に、京鎌倉御和睦調ひ、町人百姓までも喜びまするは、偏へに御大將の御仁德と、我れ〳〵までも喜び奉りまする。

五郎　イヤモ、推してお攻めなれらものならば、此方の利運は知れた事でござれど、[illegible]舅の遺憾を思し召し、和睦なされ遣はされたは、時政公の御仁心と申すもの。泉どのゝ奥方、左樣ではござらぬか。

岩菊　成る程、皆樣の御意の通り、血を血で洗ふとやら、なんぼうか氣の毒に存じましたが、夫泉の三郎、坂本の書き判を取つて歸られましたるゆゑ、無事に軍も納まり、御先代より御吉例で、毎年霜月二十六夜の月を、御拜遊ばされまする今宵の月。御拜濟むまでは一家中、諸大名にもお逢ひなされず、淸淨潔齋の御祈念濟みまし

て、鎌倉へお歸りなされまする。その時は何れも樣へ御感狀。それまでは武士たる者、太平の姿にて、大小も小短かく、優美にせよとの仰せつけられでござりまする。

丹藏　イカサマ、その儀は先達て、泉の三郎どのより、分けて仰せつけられ、皆上下なども尋常に致し、三尺より長きは御法度に仰せつけられましたるゆゑ、その心得でござりまする。

紅井　モウ〱、明けても暮れても、軍の事はほつとした。今夜は二十六夜待、少と續松でも遊ばされませいなア。

絹江　久しう上下着た侍ひ衆を見なんだ。大小も短かうなつて、切ツつはツつがないやうになつたら、鎌倉の花見のお供せうと、これが嬉しいわいなア。

五郎　イカサマ、こりや腰元衆が尤もぢや。身共らも强ち、長い大小を差したうはなけれども、側あたりに煽てられて、振り廻されもせぬ物を、無理無體に差し、御治世になつて、二尺六七寸から三尺を高にして、銀拵らへで深編笠の、花見が致したいてや。

岩菊　左樣でござりまする。世が治まれば兎角、尋常にしたいもの。ナア丹藏さま。

丹藏　左やう〱。第一腰が重くてなりませぬ。斯樣に出立つて居ると、腰は輕し、とんと體中が伸びるやうにござる。云へば云ふものゝ、軍と云ふものが、あまり出來たものではないてや。

紅井　それでもアノ、古郡新左衛門さまは、兎角軍の事ばかり云うて、怖いお方ぢやわいなア。

絹江　見る〱から憎てらしい。ほんに軍が止んだら、あんな男に惚れ手はあるまい。難儀であらうと、それを案じてやるわいなア。

五郎　イヤ、それで思ひ出した。お觸れの一々、新左衛門に申したれば、例の我まゝ、一つ〱けつぷして、イヤモ、かゝつた者ではござらぬ。

丹藏　一體、人を云ひ破つて、恥面かゝし、心外には存ずれど、數代の御家人と、胸を摩つて居るが、法外な人間でござるて。

岩菊　ほんに、泉の三郎も時々は、あのお方の我まゝを意見するに、ほつと困つて居られまするわいなア。

〽話し半へ横山雷太。

雷太　何れもこれにござりますか。

五郎　横山雷太、何事でござる。

雷太　先達て仰せつけられましたるお觸れ流し、銘々相守

り居りまするところ、古郡新左衞門出仕召され、時政公へ直々申し上ぐる仔細ありと、無理に通られまする。

丹藏　今も今とて新左衞門の噂。我まゝ者ゆゑ、もし口論にでも相成らば、お物忌みの妨げ。勘定所の溜りより、奥へ入る事は無用と仰せつけられたり。何ゆゑお留めなされぬ。

雷太　イヤモ、それに如才なく、一統に留めますれど、例の我まゝ。踏み退け通りまする。

丹藏　お上を輕しめる無禮者。異議に及ばゞ、双方より引ッ挾み、玄關へ引出さつせい。

雷太　心得ました。

ト引返す。

岩菊　ア、又、さう仰しやつても、通らずばならぬと云はれませう。夫三郎が立腹は格別、お上のお耳へ入り、お首尾が損ねうかと、それがお氣の毒に存じまする。

丹藏　イヤ、少と損ねたもよくござるて。

ト次の間より肱を張り、肩を古郡新左衞門、田邊玄蕃が腕捻ぢ上げ、腰に取りつく横山雷太、宙に引ッ提げのつか〳〵と、並み居る諸士を睨め廻し。

新左　古郡新左衞門が出仕するを、奥へ通るなの、爰までよりならぬのと、子供が穴へするやうに、切り切つて渡すは、何奴が采配ぢや。

玄蕃　ア、これサ、仰せつけられだから留めるのぢや。マア、爰を放さつしやれいの。

雷太　首筋がひしやげるやうな。マア、爰を放さつしやれい。

新左　イヤモ、わりさま達が五人十人留めたと云うて、來ずには置かぬ。腕に覺えのある男。すッ込んでお居やれ。

ト兩人を突き放す。

丹藏　ヤア、尾籠なり新左衞門、勘定の溜りより、奥へ通すなと仰せあるに、我まゝに通つても大事ないか。

新左　大事あらうがあるまいが、われ達の世話にならぬ。こま言吐くと顎を引裂くぞ。

ト丹藏、恐れる。

五郎　イヤサ〳〵、これは丹藏どのゝ出損なひ。なか〳〵となたに限つて、理不盡になされう筈はない。マア〳〵次の間でお物語り致さう。次へお越しなされい。

新左　否ぢや。貴樣達に何も物語りはあるまい。ごくにも立たぬ事を。すッ込んでお居やれ。

五郎　左樣なら、すッ込みませう。

新左　イヤナニ、泉どのゝ御內寳。今度京鎌倉の軍の止んだは、泉の三郎どのゝ取持ちとやら。それ〳〵に諸士の面々へ、穏やかな御儀を仰せつけられたは、萬事三郎どのゝさいまくりと見える。それについて時政公へ、直に言上いたしたい儀があつて伺候いたした。お取次には及ばぬ。直々通りまする。斷わりましたぞや。

岩菊　成る程、承知いたしましてござりますれど、今宵は御吉例の二十六夜、月魄の御拜濟むまでは、どなたへもお逢ひなされませぬお定め。御拜濟みまして、明日の事になされませ。

新左　イヤ、致すまい。月を拜むが大事ぢやと云うて、遠慮して云ふ事云はずに、えゝ居らぬ。追從輕薄でよろりよろりと、ぬつたりはげたりして居る和郎達とは違ふ。出頭の三郎どのでも、云ひたけりや云ふ。何を馬鹿々々しい。

　ト行かうとするな、岩菊キッと留め

岩菊　美しう云ふは表向き。夫泉の三郎が、出頭を踏みつけにすると云ふもの。一寸もやる事はなりませぬぞ。

五郎　達て通り召さると、我れ〳〵が不調法となる。やる事はならぬぞ。

新左　不調法は其方の不調法。構ふ事はない。女童の知つた事ぢやない。退さつせい。

岩菊　イヤ、滅多にはやりませぬぞ。

新左　エヽ、面倒臭い。

　へしも面倒と岩菊刎ね退け、止むる諸士を拂ひ退け、御座の間さして入りければ、御簾さつと卷き上げて、內には泉の三郎が、欣然として長上下、流石の我武者の新左衞門、進み兼ねてぞ見えにける。

大將かと思へば泉の三郎、それに居るは御自分一人か。時政公はどれにござる。

三郎　恭なくも我が君は、伊豆の國に居城し給ひし時、霜月二十六夜を御信仰あつて、丹精を抽んでられし御加護、月季の靈夢に依つて、流人頼朝公に政子の前を娶合せ、驕る平家を亡ぼし、四海皆時政公に靡き、國家の主たる事、偏へに御信仰の奇特ゆゑ、月魄御拜までは清淨潔齋の吉例。近習外樣の侍ひまでお逢ひなされず、一間一間を嚴重に、勤番の守護仕るに、御自分は何れへござる。

新左　イヤサ、その切つて通さぬが猶業腹。泉の三郎、御自分は、なんと心得て、この度の和睦は取結んだ。

三郎　ハヽヽヽ、敵を誅罰し、國家を取るも、民の煩らひ

を避けん爲。和睦あつて國民穩やかになつたるが、それが不思議か。

新左　ヤヽ、取れる城を取らずに、仲直つたは不思議にござる。惣體鎌倉の武士は、軍に命をなんとも思はず、滅法に義心を立てる。仲直つた、そんならよいワさ、よう默つて居らうぞ。騙して押寄せるは知れた事。それに又此方は安閑と、イヤ御祝儀ぢやの、おめでたいのと、蝶舞ひに行くやうな形をして、うろたへ廻るが笑止さに、軍を勸めに來た。時政公に逢ひ申す。

三郎　君は船なり臣は水、水よく船を浮ぶれども、騷ぐ時は浪となり、水また船を覆す。御自分は忠臣の水なれども、浪となつて覆す不忠の第一。

新左　ヤア、なんぞと云ふと陳分漢でこねり廻す。なんでこの新左衞門、不忠ぢや。

三郎　一旦の御契約で、軍を納め給うたる、大將の詞は汗の如し。あの方が押寄するにも致せ、それをあぐみ恐れをなす御威勢で、日の本が治められうか。この度の和睦は、早禁廷へお聞きに達し、双方よりお勅使立つて、何れからなりとも手を出し、事を破る方は朝敵なりとの勅諚。さるに依つて、諸大名へも太平の姿を觸れ、いついつよりも穩やかに、御拜なさるゝ二十六夜の月。相濟むまでは淸淨潔齋にて、人にお逢ひなされぬ作法。義時公さへ御遠慮なさるゝに、我れこそ法も禮も破る、貴殿一人我まゝに、お目見得なされ、我れこそ功の者なりと自慢あらば、諸大名がヤレ新左衞門は斯くの通り、我れも〳〵と掟を破り、日本の主たる、時政公のお詞は反古。六十餘州は申すに及ばず、四百餘州の鏡とも、見添る大將の詞、違うても大事ござらぬか。

新左　サ、それは。

三郎　何にもせよ、勘定濟りの間より奥へ無用との嚴命、もどかれしは仔細あつての事か。

新左　サ、それは。

三郎　軍を勸め、禁廷へ對し、違勅の科を拵らへるのか。

新左　サ、それは。

三郎　サア。

新左　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

三郎　なんとでござる。

へじり〳〵と鎹理詰め、口籠つたる正直者、面眞赤いに目をむき出し、あやまり入つたる風情なり。

岩菊　イヤモウ、三郎どのがあのやうに申されますのも、畢竟お前樣を、御前樣の惡う思し召さぬやうにと、思し召しての事でござりまする。必らずお氣にさへぬやうになされて下さりませ。

新左　惡作、三郎どのは智惠者ぢやに依つて、どうやら斯うやら、みんなおれが惡うなつて、あやまりますでござる。

三郎　其許をあやまらして何の益。心一杯理屈も云はれい。理が立たば存分通り致して進ぜう。

新左　どうして〳〵、あゝ云はるゝと、理窟云ふ穴がござらぬ。あのゝものゝと面倒くさいに依つて、いつそあやまつてしまひます。

丹蔵　何れも、あれを御覽じ。かさ押しにはならぬものでござる。

皆々　左樣でござる。ハヽヽヽ。

新左　貴樣達は何がをかしい。

皆々　イヤ、なんでもござらぬ。

新左　なんとでもあつて堪るものか……時に三郎どの、御勘定の間きりで、奧へ通らぬと云うては、どうも身が心が濟まぬ。どうぞ爰へ通る事は、御自分の推擧で、呑み込んで居て下さるまいか。御内寶、さうでないか。

岩菊　ナニノイナア、通すの通さぬのと云ふ事はなけれども、お前樣が氣が短かいに依つて、ひよつと喧嘩にもならうかと、御前を憚つての事でござります。喧嘩さへなされねば、三郎どのぢやとて、なんの否やを申されませうぞいなア。

新左　これは迷惑。身共ついぞ口論せず、人に惡態申した事がない。それともお疑ひなら、今日よりキッと相改める。弓矢神も照覽あれ、爰に居る若い達同然に、ごくに立たずで暮らしませう。ナウ皆、さうではないか。向後こなた衆の仲間、ならず者に仕立てゝ下され。頼むぞ頼むぞ。

へつい云ふ事も耳に立つ、諸士はふくれて返答なし。泉の三郎打笑ひ。

三郎　以後を嗜なみたる心ならば、奧の出入り許し申さう。先づ第一に、その大小が長くて目立ち申す。

新左　この大小が、なんと致した。

三郎　三尺より長い大小は、御法度でござる。

五郎　身共等も御意を守つて、斯くの如く尋常に出立ち勤むるに、イヤハヤ我まゝ千萬な。

新左　オッとよしく。兎角貴様達の氣に入るやうにせにやならぬ。

ト大小拔いて鞘を見せ

御内寶、どの位がよくござる。

岩菊　マア大概、二尺六七寸か三尺がお定まり。それを聞うて、何になされます。

新左　ハテ、好い加減に、ぶち折つてしまひまする。

岩菊　其やうな無益な事、重ねてお噂なみ。今日はマアようござります。

新左　イヤよくない。誤まつて改むるに憚る事勿れ。爰に居る和郎達、なんのかのとこみづのないやうに。

〽目の前で改めると、寸法極めて大小の鞘、すつぱく切り放し。

これでよいか。なんでも小短かい物になつた。

ト云ひく身を鞘へ差す。大小とも鞘の鐺へ身四五寸出る。

こりやどうぢや。鞘は短かくしたが、身がキヨロく出さる。ナニ何れも。鞘はお定まりの通りに致したが、身はどうも切り憎い。明日からよく致さう。マア、今日の掟は、これで濟んだと申すもの。ドレく。

ト兩腰を差して

さて輕くなつた。こりやアよい物だ。何れも、もうこれからは綿のやうになる程に、追從輕薄臆病の御指南を受けませう。上下衣服も當世樣に、伊勢のお師がお祓ひを配るやうなを着替へませう。さてく、泉どのゝ御意見について、當世男になりまして、何れもと一緒に呑み食ひを仕事にせうと思へば、これ程結構な事はない。ナウ御内寶、さうではないか。

〽云ふうち鐺ひよつこく、あたりさはりの切尖に、嫌がる諸士に意地惡う、立騷いだる面構へ、一筋繩ではいけざりけり。

三郎　お上の掟を守らるゝところ神妙。この儀よろしく執成し申さば、御褒美遣はされう。何なりと望まつしやれ。

新左　もう御褒美か。

岩菊　ソレ御覽じませ。おとなしうなさるゝと、息も引かぬうちに御褒美が出まするぞえ。今までは、いつち御辛勞なされても、我まゝゆゑに御褒美が遲い。サア、なんぞお望みなされませ。

新左　もそつと早う追從したら、よい御感狀を賜はらうものを。ア、コレ、何を頂戴せうな。

岩菊　いつそ短かい大小か。
新左　イヤ〳〵、大小と云ふと、もう堅くて惡い。
岩菊　そんなら馬か。
新左　ハテサテ、馬を貰ふと云ふと、軍がしたさうで請けが惡い。
岩菊　そんなら何がお望みぢやえ。
新左　オヽ、その馬で思ひ出した。斯う致さう。どうぞ牛の睾丸が三つ欲しい。
岩菊　エヽ、なんの事ぢやえ。
新左　イヤサ、牛の睾丸三つ頂戴したいと云ふ事。先づ一つは北條どのに頬ばらすワ。一つを息子の義時へ頬ばらす。殘つた一つは、褒美を貰うてやらうと云ふ泉の三郞。こなたに頬ばらせたい。エヽ、忌々しい世界ぢやわい。
〽我まゝ八百旗本に、類ひ稀れなる人物なり。當番の奏者罷り出で。
侍ひ　坂本よりの使者として、屈强の角前髮、時政公へ直直口上申し上げんと、罷り通りまする。如何仕りませう。
三郞　坂本の使者とは……ムウ、大方身が推量に違ふまい。
丹藏　何にもせよ、今宵月魄御拜終るまでは、お目見得は叶はぬと、ぼツ歸せ。

侍ひ　その儀申してござれども、一向にのさ張り、我れ我れが手に合ひませぬやうにござりまする。
五郞　ヤア、手ぬるい〳〵。
玄蕃　いつそ我れ〳〵が。
新左　なんの、アヽ仰々しい。高が小童一人。ドレ、身共が引提げて、外曲輪へ抛り出さう。
　トきつとなる。
三郞　待つた何れも。アヽ、粗忽々々、敵味方と引分かれたる陣中へ、童一人使者に參るに、覺えなくて參らうか。理不盡に事を好めば、それを囮に朝敵など〻、禁廷へ申さば、なんとおしやる。
皆々　サア、その儀は。
三郞　何事も聞き定めし上の事。ハテ、仰々しい。
新左　また誤まつた。
三郞　ナニ女房、其方は義時公へ、右のあらまし申し入れい。
岩菊　ハツ、畏まりました。
　ト入る。
三郞　使者は此方へ通せ。油斷なく組子の用意。
侍ひ　畏まつてござりまする。

ト引返す。

新左　身共はこれに居て、又しくじつたら面倒。兎角除けるが勝ぢや。

三郎　貴殿は後刻遣はねばならぬ場所がある。今こそ奥へ通り召され。

新左　然らば後程。何れも。

ト慇懃に云ふ、

皆々　新左衛門どの。

ト顔見合せ

新左　馬鹿な面だ。

〽云ひたい事を悠々と、奥の間さして通りける、泉の三郎それ〴〵に、一間の障子明け渡せば、譜代外様の諸大名、旗本近習座を亂さず、連綿たる千疊敷、北條四郎義時公、直衣の袖天性に、四海を負ふ御眺り、晴れがましくも恭々し、使者は名に負ふ角前髪、麻上下に威あつて猛く、行儀正しく打通る、後先には力者の十手、透間透間に弓と矢を、見向きもやらで滿座の中、御座の間近く畏まり。

ト三浦之助を、侍ひ取卷いて出る。

三浦　坂本の城主、源の頼家が家來、三浦之助義村、時政公へ使者の口上、申し奉りたう存じまする。

義時　ホヽ、聞き及ぶ三浦之助、使者大義々々。暫らく敵味方となつたれども、頼家は正しく妹聟、和睦調ふ上からは、一家の因み。して、使者の口上は。

三浦　イヤ、時政公へ直々申し上げたう存じ奉りまする。

三郎　時政公は、二十六夜の御拜相濟むまでは御物忌み。家中へも御對面なき事は、郎も宇治どのもよく御存じの事。殊更御親子の御仲、何憚る事やある。義時公直々お聞きなさるゝ由、具さに申し上げられてよからう。

三浦　使者の趣き餘の儀にあらず、この度の合戰は、國家分け目の戰ひ。然るところ時政公、頼家、互ひに二心なき書面を取交しましたるゆゑ、禁廷よりも御挨拶を取結ばれ、以後舅聟の因みを以て、民の嘆きを靜め、禁中の守護いたすべし、何れからにもせよ、軍の手を出す者は朝敵たるべしとの勅諚。然る上は源氏の重寶、八幡宮の白旗、此方へ受取り歸れよとの儀。イザ源氏の白旗、お渡し下さりませう。

〽臆する色なくすつばりと、京の水際立派の口上、泉の三郎席を正し。

三郎　一通りは承知なれど、合點のゆかぬはその白旗、先

達て片岡造酒頭が盗み取り、坂本へ遣はしたれば、其方にある筈、それに又、白旗を受取る使者とは。仔細ばしあつての儀かな。

三浦　成る程、造酒頭が命を捨て、差上げたるゆゑ、白旗は此方にある。

三郎　それに又

三浦　時政公より白旗讓つたと云ふ、御直筆の書き判頂戴したい。

三郎　ハテサテ、其方にある白旗。書き判なくても相濟む事。

義時　先達て父時政書き判なされ、和睦調うたではないか。

三浦　イヤ、あの書き判は時政公、書き召されたのではない。

義時　何がなんと。

三浦　梵字を以て寄り合はしたるお書き判を、お渡しありしゆゑ、此方よりも清盛の書き判据ゑて遣はした。餘人は格別、この儀は泉の三郎どの、御自分一人よく御存じのところ、此方の書き判、よもや今までお上に御覽なされぬと云ふ事はあるまい。今日や御不審、明日や疑ひのお使者が參るかと、待てども／＼、今日までなんの御沙汰もなく、僞はりの書き判、其まゝお受取りござるは、あなたより來りし書き判、賴家滅亡と云ふ梵字とやら、どうでも軍の恐れあるかと存じまする。左樣ならば禁廷へ違勅の科。何卒美しう納めたう存じて、白旗の讓り狀に、書き判頂戴いたしたいと申す事。それとも讓り狀お書きなされずば、右の一件禁廷へ申し上げ、朝敵追討の軍、華々しく致さんと、伺候いたした三浦之助。畏れながら御返答、承りたう存じ奉りまする。

三郎　すりや賴家公の誠の書き判、持參召されたか。

三浦　左樣でござりまする。

三郎　ハテナア。

義時　その儀ならば、此方より遣はしたる書き判も、宇治の方賴家ともに不思議に思ひ、疑ひの使者來らば、その時其方より來つたる書き判試さんものと相待つは、坂本の評定も、鎌倉の內談も、其方と同じ事。案の如く其方より、右の使者に來つたるゆゑ、事明白に分ると云ふもの。成る程、其方に僞はりなくば、此方に仔細はない。先づ賴家の書き判、差上げてよからう。

三浦　イヤ、先づ白旗の讓り狀、頂戴いたした上の事に仕りませう。

三郎　三浦どの、餘り御念が入り過ぎる。君子に二言なし。時政公は格別、義時公御判遊ばされるに相違はない。先づ其方からお出しなされい。

三浦　滅多にや出さぬ。義時公の譲り状は、此方に望みにござらぬ。時政公の直の書き判頂戴いたしたい。

三郎　時政公は御隠居、義時公は今の武將。その御判が望みにないとな。

三浦　イヽヤ、時政公の名代の御判はヱ、請けまい。義時公の直筆、何百本取つても役にや立たぬ。

丹藏　ヤア、御大將を蔑みしたる一言。其所立つて。

ト三浦之助を引立てにかゝる。三浦、ヂツと見て、肱で押し、手を捻ぢ上げ

三浦　若年なれども只一人、國家を取るか取られるか、善惡の使者に立つ三浦之助、ちつと其許方の手くさいには合ひ憎い。

ト投げる。

五郎　なにを。

トかゝるを引つ敷き

三浦　義時公に何も申し上げる仔細はない。時政公にお逢ひなされて下されんと、頼み切つたる拙者が役目。

ト立廻り見事に當てる。大名皆々反り打つ。

へお成りざうと追ひ／＼に、取次ぐ聲に義時も、御座を改め待ち給ふ。上段の御簾高々と、時政公は褥の上、穏やかなる御有様、畏れ敬まふ諸大名、流石の三浦も位に恐れ、ハッと頭を下げにける。北條どの遙かに御覧じ。

時政　頼家が家來、三浦之助とは汝よな。最前よりの一々具さに承知いたした。義を磨き勇を専らにする口上、驚ろき入つたる若者。ハテ、頼家には、よい家來を持ち召されたなア。

三浦　ハッ、數なりませぬ某、慮外をも顧みず、申し上げまするもこれ主命。お目通り仕りましたる段、冥加至極と、斯様な有り難い儀はござりませぬ。

時政　倅義時は年若く、氣丈が勝つゆゑ、家來の者まで鋭くて、耳にかくる事どもあらう。身は隠居の身分なれば、政道の指圖もならず、義に依つて軍はするものゝ、聟は子、なぜに頼家を粗略に思ふやうがない。和睦する上からは、其方の望みの通り、白旗の譲り状認め遣はさうが、今宵は月待の物忌み。暫らく逗留いたせ。

三浦　ハアヽ、寛仁大度のお詞、使者に立ちたるこの身の面目、恐れ入り奉りまする。

時政　ソレ、銚子を持て。

五郎　ハツ。

ト金銀の長柄の銚子、三方に土器載せ持つて出る。

時政　三浦之助、苦しうない、近う參れ。

三浦　ハツ。

義時　イヤ〳〵、昨日今日まで合戰いたし、まだ軍のほとぼりもさめぬうち、坂本の家臣を、御座の間近く召寄もらるゝは。

時政　ハテサテ。あれ見てたもれ。今の若い者は、あゝ云ふ事を云ふ。ハヽヽヽ、和睦濟んで二心ないからは、皆一家の家來。頼家を大切に思ふ三浦なりや、猶更時政は大事にかける。ナウ、泉、さうではないか。

三郎　左樣でございまする。

時政　見れば見る程器量骨柄、三浦之助、其方の武勇を、倅義時にあやからせたい。苦しうない。近う〳〵。

三郎　御賞美の嚴命と云ひ、お許しなるぞ。側近くお目見得いたされてよからう。

三浦　ハツハツ。

ト靜かに時政の側へ行く。この間皆々息を詰め居る。三浦之助、時政と顔見合せ、とくと面體を見知る思ひ入れにてキッとなる。

三郎　頭が高い。低頭平身いたされい。

ト皆々シイと云ふ。

三浦　イヤ〳〵、これが御一家の主人、家來の某、とくと御高顔を拜し仕らねば、武士の本意でござらぬ。

時政　さう〳〵、さうなくては、まさかの時の用に立たぬ。月待の御酒の餘り、老先ある其方、老人が壽命にあやかつたがよい。獻さうか。

三浦　ハツ。

ト辭儀する。時政、酌んで三方に置く。丹藏、取次ぎ直す。三浦、土器を頂き、懐中へ入れうとする。

時政　イヤ〳〵。苦しうない。矢張りこの所で一獻過しやれ。

三浦　餘り慮外にござりまずる。

時政　なんの〳〵。皆諸士の面々も、三浦之助を見てあやかれ。百萬石を宛て行うても、なか〳〵不足なき人相。時政が肴に一腰くれう。

三浦　ハッ〳〵。

ト摺り寄る。

時政　身が腰を離さぬ一腰、時政が壽命にあやかれ。繁昌

長久するやう、三浦、くれるぞ。
ト太刀を遣る。
三浦　ハッ、有り難く頂戴仕つてござりまする。
ト押頂きながら、その場に居る。
三郎　三浦どの、お太刀頂戴濟まば、御座近い。下がりやれ。
皆々　下がり召され。
ト三浦、矢張り其まゝ居る。
下がらつしやれ。
トきつと云ふ。
三浦　御前のお差替へ〳〵。
三郎　誠に、お太刀〳〵。
丹藏　ハア。
ト太刀を持ち出て恭々しく時政に差出す。時政、思ひ入れあつて差す。この時、三浦、後しざりして遙かに平伏する。
時政　あれ見よ。あゝ云ふ發明者ぢや。イヤ、古今無双とや云はん。ナニ義時、其方もこの度の三浦之助への引出物として、乘馬五十疋絹百反ばかり送り遣はせ。
義時　畏まつてござりまする。

時政　その外諸大名、諸旗本に至るまで、それ〴〵三浦へ送り物いたせ。
皆々　ハッ、畏まつてござりまする、
三浦　御意有り難うはござりますれど、御直筆の書き下し頂戴の外、望みなき三浦之助、この儀は御無用になし下さりませう。
三郎　辭退申すは却つて恐れ。謹しんでお請け申されい。
時政　ナニサマ、潔白な心からは、使者の役目濟むまでは遠慮勝ちは尤も。何を隱さう鎌倉には、好い家來がない。頼家は和田兵衛佐々木四郎なんどゝ云ふ、英雄を持たれたれば、三浦之助一人無心申したとて、さのみ事を缺かれもせまい。老人が一期の無心、なんと奉公して、倅義時が後見はなるまいか。
ト三浦、ギョッとした思ひ入れ。
サア〳〵、忠臣二君に仕へずと云ふ事はあれど、これは格別の一家中。氣には入るまいが、白髪に免じくれまいか。
三郎　有り難い嚴命。お請け〳〵。
時政　サヽ、マア、內證を固めの杯。一つ注げ〳〵。
ト三浦の土器へ銀の長柄で注ぐ。三浦、三方のまゝチ

ツと思ひ入れ。

三郎　關八州の大名、斯程の御賞美にあづかる事聞きも及ばず。古今珍らしき御機嫌。あやかり人と云はうか、武士の鑑。サヽ、お請け〳〵。

三浦　イヤ、このお請けは、えゝ致さぬ。

三郎　なぜ〳〵。

義時　父のお太刀拜領しながら、何ゆゑお杯頂戴せぬ。

三浦　イヤ、只今お太刀頂戴いたしたは、こりや時政公、坂本へ改めて出仕なさるゝ心で、如何にも頂戴仕つた。また三浦之助を御所望が、誠の嚴命ならば、この役目終つた後、改めて坂本へ使者を以て、仰せ遣はさるゝに違背はござらぬ。それになんぞや三浦之助に、引出物よなんのと媚び諂らひ、フワと乘らば御不分の御返答にて、坂本の科になるやう、拙者に呑み込ます企みか。

三郎　それにはなんぞ證據があるか。

三浦　證據はこの酒。銚子を替へて注ぎ込んだる酒の湯氣は、土器の底を潜つて、泡立つは正しく毒酒。

三郎　ヤ、なんと。

三浦　白旗の讓り状、受取りませう。

〽土器微塵に一座の白け、御簾はさつと下りければ、すわこそ大事と列座の面々、泉の三郎割つて入り。

三郎　ハテ、不得心な者に、無理に御賞美はなされぬ。御拜濟むまで休息あれ。

三浦　いつまでなりとも相待ち申さう。

義時　父上には、奧殿へ早お入りあれば

三郎　この場の馳走は、拙者が申し付けませう。

義時　諸士も暫らく休息〳〵。

皆々　ハア。

三郎　三浦どの。

三浦　泉どの。

兩人　後刻御意得ませう。

〽心の針に威儀正しく、皆奧の間へ入りにける、後に三浦は默然と、耳の明しや銀燭も、庭の茂りて眞暗がり、岩の狹間に人影は、すわ曲者と灯をしめし、窺ひ寄つたる三浦之助、それと忍びがさし足拔き足、合圖と見えて呼子の笛、物は岩菊手燭の明り。

岩菊　瀨の尾の大助、待ち兼ねた。

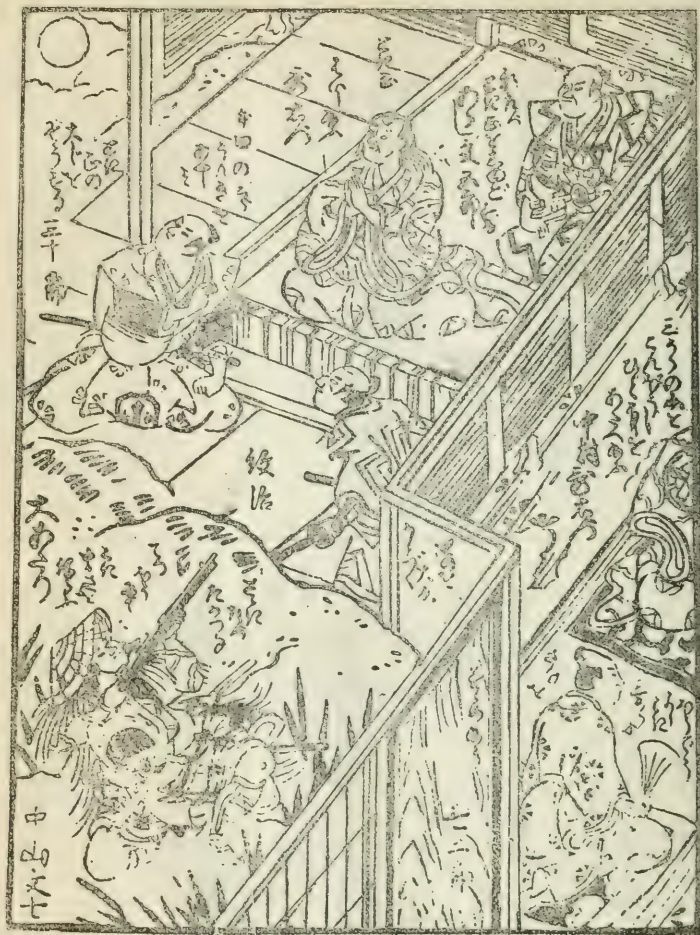
大助　常姫さま。して、泉の三郎に、氣取られはなされぬか。

岩菊　十日以前に女房となり、もう時政にも近寄らうと儘

ぢやわいの。
大助　お出かしなされた。
岩菊　透を見合せ、北條をたつた一討ち。
大助　シイ。密かに〳〵。
岩菊　して、坂本の案内は。
大助　宇治の方と頼家の、寢所の下まで掘つたれば、その抜け道を行けば、この二人は寢鳥を刺すよりいと易い。
岩菊　マア、時政親子を討つた上。
　ト行かうとするを
大助　イヤ〳〵、畢竟時政は敵の枝葉。目ざす敵は坂本の頼家親子。
岩菊　イヤ〳〵、今宵坂本へ抜け行けば、後にて尋ぬるは定のもの。枝葉なりとも門出の血祭り。
　ト行かうとする。この前より、新左衞門、窺ひ居て、この時
新左　何所へ行く。泉の三郎が女房、時政公をなんと致す。
岩菊　ヤア、お前は。
新左　何もかも様子は聞いた、仔細ある曲者、御前へ引いて白狀さす。動くな。
岩菊　それ聞いたら、覺悟。

〽用意の懷劍突きかゝる。さしつたりと身をかはし、腕捻ぢ上げる後より、乳の下かけて大袈裟切り、うんともすんとも新左衞門、其まゝ息は絕えてけり。猶もあたりを見廻し〳〵。
大助　彼奴を殺す上からは、小敵の時政にかゝり、見咎められては肝心の、頼家親子を討つ事ならず。
岩菊　さうぢや。頼家親子が首取つて、手向けが肝要。
大助　一時も早う。
岩菊　大助續け。
　ト行かうとする。三浦之助、立ち塞がり
三浦　兩人待て。
兩人　ヤア、こなたは。
　ト悔り。
三浦　坂本の城内へ抜け道を拵らへ、御寢所へ忍び入つて打たんとは、一寸もやる事ならぬ。
大助　もう百年目ぢや。
〽双方より、打つてかゝるを手練の三浦、飛鳥の如く二人の劍、もぐぞと見えしが瀨の尾が肩先、ばらりずんとなぐり切り、岩菊進んで切り入るを、身をひねつて横なぐり、手利きの早業たまらばこそ、二人ほ其所に苦しみ

安永六年九月大坂

中の芝居上演繪番附

ながら、手燭一つのほの暗がり、三浦之助どつかと座し。

三浦　如何程もがいても、もう叶はぬ。三浦之助これにあるとも知らず、企みの底云ひたるは天命。併し京鎌倉の外、敵あるべきやうはなし。宇治の方頼家公を、敵と狙ふ其方ども。また時政を討たんとも計る。イカサマ、仔細ある者ども、包まず白状いたせ。

岩菊　ナニ、三浦之助とは、坂本の三浦之助どのよな。

三浦　如何にも。

大助　オヽ、さては御主人にて渡らせ給ふか。

岩菊　兄上樣かいなう。

〽手負ひは摺り寄り取りつけば、拂ひ退けて氣色を損じ。

三浦　この三浦之助を捉へ、兄樣か御主人樣かとは、血迷うて、なんのたわ言。

大助　サヽ、御合點は參るまい。それにお渡りなさるゝは、義經公の御息女常姫さま。斯く云ふは平家の侍ひ大將、瀨の尾太郎が伜、大助と申す者。こなたとこの姫君は御兄弟。義經公と門田の前の御中に、出來たお子ぢやわいなう。

三浦　何がなんと。

大助　斯うばかりでは御得心は參るまい。義經公平家を亡ぼし給ひしは頼朝の仕業。敵々とは云ひながら、情ある義經公、やんごとなき方々のさまよひ給ふを、勞はしと思し召し、所々へ放ち助け給ふ。門田の前、大將の情ある心にほだされ給ひ、互ひに結ぶ緣の始め。こなた樣とこの姫君を、一年違ひの御平產。その事頼朝の上聞に達し、平家の女に緣組んだるは、謀叛なりとあつて、討手を登したるゆゑ、兄に敵たふ刃はなしと、大物の浦より、無殘や遂に衣川にて、義經公には無官の御最期。

岩菊　その時はお前もわしも、辨まへなき幼な子。母樣の家來と云ふは、瀨の尾が子の大助ばかり。その騷動に母御樣も、お果てなされましたわいなア。

大助　母君臨終の仰せには、源平と引分れても、義理と緣組みは因緣づく。平氏亡ぼしたも、父御を亡ぼしたも、頼朝生々世々に恨みは盡きず、何卒兄弟の子供を守り育て、頼朝を打ち亡ぼし、修羅の苦患を助けよと、これを云ひ死に御最期。

岩菊　それより大助が守り育ての介抱。お前は六つの年、公卿の諸太夫へ養子にやつたも、末の榮えを見ようばつかり。

大助　所に頼家が手廻りへ、奉公に出したとの物語り。取

返すあだてもなく、年月經る其うちに、三浦之助と云ふは御主人常若丸さまと、思うても云はれぬ身の上。

岩菊　わたしは成人に從ひ、聞く度々に父母の御無念。賴朝はこの世に亡くとも、惣領の賴家、敵の子なれば、討つて捨て、鎌倉の北條も亡ぼし、お前にこの事物語り、國家の主ともなしたらば、父母の修羅の妄執も、晴れるであらうと企みに企んだこの年月。

大助　まんまと姫は、泉の三郎が妻となつて入込ませ、坂本の城内へ抜け道をしつらひ、賴家親子は寢鳥を刺す道理。常姫さまに本望を遂げさせ、その上にてお物語り致さんと存じたに、計らずお目にかゝるも神のお引合せ。

岩菊　わたしは此まゝ死んでも、さら〳〵命は惜しうない。父母の修羅の苦患が助けたい。

大助　倶に天の戴かぬ、敵の族を受けてござつたは、この上もなき大不孝。

岩菊　誤まつて改むれば、義經公の御公達。

大助　敵は　源の賴家。

岩菊　兄樣、わたしや無念な、口惜しい。

大助　この年月、拳を握つた瀨尾が心。

兩人　御推量なされて下さりませ。

〽大地を打つて無念の涙、初めて開いたる我が俗性、吐息をついて。

三浦　京童も知つたる平家の成行き。義經の無念、武士たる者は拳を握る、その義經の倅とは、今まで知らず。ハテナア。

〽流石血氣の氣をくり上げ、暫し思案の眉に皺。

岩菊　とてもこの深手では助からぬ。せめて敵を討つと云ふ、お詞を聞いて、末來の土産にしたい。

大助　英雄の御主人の、お手にかゝつて死ぬるは本望。潔よく坂本を討つて、父御に手向けて下されや。

岩菊　但しは御無念にはござりませぬか。

大助　コレ若殿、恩を思ひ氣後れか。

岩菊　無念にはござりませぬか。

兩人　サア〳〵〳〵。

〽始終立ち聞く大將義時、近習引連れ出で給ひ。

義時　ハヽア、さては源九郎義經公の御公達にてあつたよな。我れ〳〵親子國家を知るは、全く武の榮華にあらず、賴家微弱にして、なか〳〵國家を保つべき器量にあらず。禁廷の守護覺束なく、民の煩らひ、據ろなく只今の仕儀。時政とても元は御家來。智仁勇兼備たる幼年の御公達。

今日より武將と仰ぎ、時政義時執權となつて、國家を保たば、御治世は萬々歲。

ヘハ、ハツと、頭を疊に付け給へば、近習の武士も一同に、恐れ敬ふばかりなり。

大助　ア、有り難や。北條親子へりくだつて、武將となし奉らんとは、草葉の蔭より手を持つて引くが如し。今死んでも本望々々。この上は賴家を誅罰し、國家の主となつてたべ。

三浦　さて〳〵、我れながら誤まつたり。血氣に逸るばかりにて、後先の辨まへなく、これ程知れてある事を、當惑したは何事。イヤハヤ、いかい大だわけ。ハ、、、。

義時　いよ〳〵國家の主となし、我れらが守護し奉らん。

皆々　萬々おめでたう存じ奉りまする。

三浦　めでたいか悲しいか。最早月魄も上る時節。讓り狀の御判受取りませう。

義時　何しに〳〵。國家の主たる貴殿へ遣はす讓り狀は

三浦　イヤ、コレ〳〵〳〵、義時公、もうそれもお止めなされい。兎角辯舌で人を損なふ、惡い老舗な北條どの。暗がりのなぐり切り、三浦の手先は覺えがある。胴切り袈裟切りにもなるべき筈。ハテ、不思議なとこの刃物、よつく見れば、こりや刃引きぢや。拳の強さで薄皮ばかりのかすり疵。さう〳〵が云ひ合せ、義經と門田の前との二人が仲の子ぢやの、賴家は敵ぢやのと、誠しやかに坂本をうとませ、三浦之助を煽て上げて、裏切りさゝうと云ふ企み。マア、さう巧くは致すまい。例へ義經の子でも、一旦主人と賴む賴家公へ、裏切りする三浦之助と思ふは、鎌倉方の內股膏藥。坂本の人間は、餘ツぽど性根が違うてある。折角骨折つて痛い目をした兩人も、無駄な働らき。イヤ、仕組みはよく出來ました。二十六夜のお狂言、御馳走の見物いたした。早く書き判受取りませう。

ヘ石火矢の如くずつかりと、大將始め數多の諸士、下には兩人顏見合せ、呆れ果てたるばかりなり。側に倒れし新左衞門、起き上がつて地團太踏み。

新左　エ、、忌々しい。坂本の奴等は、煮ても燒いても嚙めるものではない。本田の次郎、こりや、なんとせうぞい。

大助　どうと云つて、どうなるものぞ。岩菊どの、御自分は、なんと思はつしやる。

岩菊　折角仕込んだ謀り事。

新左　エヽ、忌々しい。
三郎　ハヽヽヽ、古郡新左衛門が力一杯の計略。それでは
なかなか参るまい。
義時　三浦を圍へ。
皆々　ハッ、動くな。
ト諸士皆々取卷く。
三郎　最早月魄御拜の刻限。間を遠ざけて、何れも三浦之
助へ馳走召され。
義時　義時直ぐに申し付けう。
皆々　サ、歩め。
三浦　御馳走とは面白い。其方の御勝手ならば、足場のよ
い座敷へ参り、御馳走にあづからうか。
〽人を人とも思はぬ顏色、大將下知して押取卷き、組子
捕り手の兩方を、分くる一間は大騷動、寄らばひしがん
眼ざし、圍うて次へ。
トおくりにて、返し。
上の屋體引込み、向う金襖返す。土堤やうの蹴込み
になる。後高二重の白木の御殿、白木の高欄付き、
上段に荒菰を敷き、三方に洗米を供へあるべし。一
面に打拔き、石山の景色、所々植込み、苔岩のあし
らひ。石二重の眞中に時政、好みの月拜の形。側に
大名大勢並び居る。すべて奥座月拜殿の模樣。この
見得、かすめたる神樂にて、道具納まる。
〽慕ひ行く、泉の三郎三方に、神酒携へて恭々しく、御
拜の前に伺候ある、時政欣然と座し給ひ。
時政　ハヽヽ、今聞けば、新左衛門めが相應の計略。併
し、小賢しい三浦之助、論は無益。討つて捨て、首ばか
り坂本へ返しやれ。
三郎　ハッ、その儀は義時公御下知遊ばされ、追ひ〴〵手
配り仕りまする。
トこの時、下手の岩間より、高綱、好みの半切れ、小
手臑當、簑笠にて鐵砲を持ち出て、透し見て狙ふ。
勘解　暫らくは謀り事の御和睦ゆゑ、坂本方は誠と心得、
一人づゝあの如く、參る奴原打ち留めるは、袋に入つた
鼠を討ち殺すより安い事。
有馬　彼奴が歸らぬを不思議に存じ、後より使者に來る奴
を、一人づゝ取つてしめるとは、天晴れの御計略でござ
りまする。
勘解　斯樣にすれば、戰はずして坂本の落城、千秋萬歲。

皆々　おめでたう存じ奉ります。
時政　イザ、月天子の拜禮せう。
〽立ち上がらんとし給ふを。
三郎　ア、、暫らく〳〵。ハテ怪しや。ソレ、雲は陰にして、さんさんの時季昇つて雲となる。風はたいくわの間の氣なり。陽の體にして散ずる、陽氣の雲を陽の風を以て拂ふに、何かは以て堪るべき。然るに風拂へどもしすしになつて月を返す。しすしの形は、必定この庭に我が君を狙ふ者のあるに極まつたわい。
ト大名皆々反り打つ。
〽見通す詞に佐々木の四郎、岩の狹間に種ケ島、碎くるばかり、こなたは打笑み。
時政　ハ、、、泉の三郎が、今に始めぬ五運六氣。例へ時政を狙ふにもせよ、彼れら風情が鋒先にかゝる運命にて、天が下を治められうか。忍ぶ奴は隨分忍び込ませ、追ひ〳〵に打つて捨つるが、手を濡らさずして敵の退治。天の助けに供奉せらるゝ時政。何屈する事やある。併し、三郎が心休め。庭へは下りず、此まゝに拜なさん。
皆々　御上意御尤もに存じまする。
〽天に向つて清淨禮拜。數多の諸士も頭を下げ、感に堪へたる胸板の、狙ひ違はぬ一發に、すつぽり立つて失なへば。
三郎　ヤ、、こりや時政公を飛び道具で。
皆々　さてこそ曲者。
三郎　庭の隅々詮議召され。
ト立騷ぐ。バタ〳〵にて、丹藏、出て
丹藏　御注進々々々。
皆々　ナニ、注進とは。
丹藏　三浦之助、手に餘りまする上、時政公の御最期と聞き、義時公を討取らんと、勇み進んで切り入りまする。
三郎　必定飛び道具は佐々木四郎と云ひ合せ、入込んだに相違ない。大切の敵、組伏せ〳〵。
皆々　心得ました。
〽下知に從ふ諸大名、兼ねて用意の小手臑當、皆一同に手分けを定め、明け放したる石山の、大庭小庭大石大樹、透間輝く高提灯、揉みに揉んでぞ。
ト双方へ入る。どんちやんにて、三浦之助、高綱、荒れになり、軍兵に取卷かれ出て來り、兩人烈しき大タテあつて、トゞ軍兵を双方へ追へ込み、キッと留まる。
遠攻め。

高綱　北條時政を討つたれば鎌倉は明家も同然。泉の三郎は何れにある。伜義時を犬つくばひにつくばはせ、降參させよ。
〽阿修羅王の暴れたる如く、佐々木三浦が大音上。
三浦　異議に及ぶとこの陣中、人馬ともに引裂き捨て、死人の山を築くが、返答なんと。
ト三郎、陣立てになり、軍兵引連れ出て來り
三郎　ヤア、飛んで火に入る夏の蟲。鎌倉の計略にかゝり深味へ入込みし兩人。命が惜しくば降參なし、誠の神文、早く渡せ。
高綱　ヤア、負け惜しみの鎌倉勢。大將時政を打取られ、脚立たずのよまひ言。あやまりましたと三拜して、早く頭を摺りつけい。
三浦　現在の親を討たれ、何所にかゞまる江間の義時。
高綱　佐々木が怖いか。
三浦　但し三浦が恐ろしいか。
兩人　これへ出て勝負いたせ。
〽高聲に呼はれば、御殿もひしぐる高笑ひ。
時政　ムヽヽ、ハヽヽヽ。
〽御簾卷き上げるその中に、大將時政以前に替らず、義時と座を連ね、とう〳〵たるその顏。さしもの二人も興覺めて　ほつと一息つきあへず。
高三　ヤヽ、この體は。
時政　みいら取らんとしてみいらとなる。合戰の影武者は佐々木北條皆同じ事。常に拵らへ置く事は、泉の三郎と某が計らひ。最前打ち留めたるは、稻毛の入道なるわいやい。
兩人　ヤ、なんと。
三郎　最早遁がれぬ兩人。獅子心中の蟲討取つたり。軍の血祭り、それを見よ。
ト首を出す。兩人よく〳〵見て
高綱　ヤヽ、こりや大江の入道が首級。
三浦　いつの間に、この陣中へ。
時政　京鎌倉の不和なるは、これ皆大江の入道が、内通の讒言。我れこれを知ると雖も、表を立てし武士の意地。泉の三郎が申し開きに依つて、今こそ和睦の時節到來。
三郎　和睦の使者遣はさんも、入道が姦佞に支へられ、如何なる事もあらんかと、鎌倉にて大祿を下し賜はらんと僞はり、入道を呼び寄せ、委細白狀させたる上、打つて捨てたる大將の潔白。今より賴家を武將と定め、京都の

守護職。
義時　鎌倉の守護は北條親子。
新左　西國の固め。
時政　東國の押へ。
三郎　日の本の固めは萬代不易。この上にも坂本に、野心あらば一戰仕らう。
時政　武將となつて、禁廷の守護怠りなく、萬民の安全を守るならば、主人の胤たる賴家。後見は北條時政。相違なき直筆の書き判。
ト神文を差出す。
義時　但し、これにも野心あるや。
皆々　サア、どうぢや。
高綱　ハヽア、さほど潔白の大將に、何とて弓引き奉らん。三浦、お書き判受取り召され。
ト三浦、神文を取り押戴き
三浦　これこそ二心なき直筆の書き判。受取りました。
高綱　この上は京鎌倉、水魚の因み。
三浦　我れ〳〵も御家來同然。
時政　オヽ、滿足々々。
トこの時、大江主馬、出て來り
主馬　ヤア、父入道を味方に招くと、一杯喰はし殺したる時政。倅主馬が死物狂ひ。覺悟なせ。
ト切つて行くを三浦支へ、立廻つて投げ返し、首を拔く。
時政　見事。
三郎　一刻も早くこの次第を立歸つて言上せん。
高綱　祝ひの使者は又重ねて。
時政　おさらば。
高三　おさらば。
皆々　さらば。
時政　皆喜びの鬨の聲。
〽祝儀の勝鬨根强き石も、時に取つては市山や、嵐榮ふる城主の、芝居繁昌大入りの、金銀納まる役者の福壽、丸拂ひとぞ祝ひける。
トめでたく打出し。

近江源氏解講釋（終り）

源氏は鶴が岡の大名ぞろへのけぞりゑぼしのはんばく娘ひなの道具に去状ふくんだなま首のけう／＼笑ひひゞき渡つて高館の花軍

日本第一和布苅神事

五段續

都姿石
鄙姿石

平家は龍宮の大だいりあまのよせては五百だんの波枕年こしの豆に昔をかぞへるやまだのをろちがけんの卷はみゝをつらぬくがんおくの船軍

初演絵番附表紙

日本第一 和布苅神事

序段　富樫館の場

役名――富樫左衛門。後室、岩倉。同娘、常陸。源九郎義經實ハ江田源藏。愛妾、靜御前。泡手兵藤太。番場の忠太。津の戸三郎實ハ後ニ常陸坊海存。

造り物、向う三間の間、金襖、橋がゝり中庭のかゝり。松の枝に狼煙の仕掛けあり、好き所に枝折り門、臆病口に黒塗り障子屋體、後へ寄せ日に飾るべし。すべて結構なる館の體、富樫の庄司屋敷なり、但し後に建具に仕掛けあり。

磯ぞなると、三重の後語り出す。

上座に富樫の庄司の後室岩倉、衣裳裲襠。次に富樫左衛門、衣裳上下にて居る。下に關所の役人大勢、かつつくばうて居る。富樫、皆々を叱つて居る見得。

右三重にて幕明く。

富樫　ヤイ、うぬ等もうぬ等ぢや。この左衛門が下知も待たず、なぜ通した。

兵藤　ハイ、最前からも申しまする通り、その節あなた樣には御病氣とあつて、關所のお勤めはござりませず、諸事はあれにござる、後室樣の御指圖でござりました。

軍藤　合點ゆかぬと存じながら、後室樣の下知の通りに

一同　計らひましたのでござりまする。

富樫　まだ〳〵詞を返す憎くい奴ばらめ。富樫の家の斷絶は今この時。伯母者人。エヽ。こなたはなう。

岩倉　ハテサテ、やかましい、甥の殿。最前から番人どもを引付け、何を叱ると思へば、山伏を通したとの腹立ち。そりやもう半月も後の事。今云うて取返へしがならうかいなア。

富樫　サア、ぢやに依つて胸が燃えまするわいなう。今朝未明に、北條梶原家の仰せには、都より早打ち、義經主從作り山伏となつて、奥州へ下るに、安宅の關所を見遁がし通したは、富樫が二心、言語道斷なりと聞き、其まま番人どもを詮議すれば、この左衛門が病氣のうち、後室の計らひとの事。聞かしやる通りぢや。どういふ筋で、

義經主從を見遁がしたのでござる、伯母者人。

岩倉　これは又、甥どのゝ詞とも覺えぬ。義經公陸奥へ下り給ふにつき、この安宅に新關を据ゑ、召捕るべしと、賴朝公の嚴命承はつたは、夫富樫の庄司季影どのなれども、折節老病さし發り、お果てなされしゆゑ今この仕儀。庄司どのに男子とてはなく、自分が甥の其方を、富樫左衛門と名乘らせて、姥常陸が後見。これしきの事謄ろくやうな魂ひでは、この國の政道は覺束なし。

富樫　アレ、まだそんな落ちつき自慢。この國の政道どころか、義經一味と見られては、この館は斷絕。エヽ、阿房らしい。うぬ等、して、この時の山伏どもが人相は。

兵藤　イヤ、モウ〳〵、何れも一騎當千達者づくりでござりました。

軍藤　中に一人、色白な强力、引下がつて通りましたゆゑ、此奴曲者暫らく待て。

一同　止まれ〳〵と、申しましてござりまする。

富樫　ウム。して、其奴をどういたした。

兵藤　時に先達と覺しき山伏が申しまするには、おのれ强力、義經に似たりとて館の詮議、今日能登の國までても行くべきに、うぬゆゑに隙取り憎さも憎し。

〽金剛杖を振り上げて、杖も折れよとりう〳〵〳〵。

富樫　打つて〳〵〳〵打ち据ゑ居つたか。

一同　左樣でござりませる。

富樫　それ〳〵、それが彼方の謀り事ぢやわい。ヤイ〳〵先達は正しく武藏坊辨慶、强力と窶やつせしは、慥かに義經と知れ切つてある人相。それをノメ〳〵通すとは、どう盲目め、なぜ召捕つて身共に知らせぬやい、

兵藤　イヤ、我れ〳〵も左樣と心付きましたれど、そこがサア、鈍なものでござりまする。

富樫　鈍なものとは、何がどうした。

兵藤　義經はもと天狗の若衆、辨慶は荒僧。附き添ひも强者揃ひ。ナウ軍藤太。

軍藤　左やう〳〵、鎌倉の上意を戴く我れ〳〵、義經でも、辨慶でも、さして怖いとは存じませぬが、何とやら氣味が惡く、それゆゑ後室樣の御意を幸ひに、なんの苦もなう

一同　通しましてござりまする。

富樫　エヽ、聞けば聞く程、憎くい奴等。この左衛門が居合さば、例へ鬼神なればとて、一々召捕り、鎌倉へ引かんずものを……コレ伯母者人。こりやこなたも、義經と

は知つて居ながら、討つが恐ろしさに、見遁がして通したのぢやの。

岩倉　女でこそあれ、富樫の庄司季影が妻、判官どのを搦めよと、安宅の關を預かりながら、義經公と知つて通さうか。智仁勇兼ね備へし大將に、三國一の辯者と聞えし武藏坊が、口先に誑かされしとて、さのみ人の笑ひもあるまい。ハテ、安宅ばかりが關所でない。行く先々に關所は數多。判官どのゝ御運盡きなば、どの關所でなりと召捕るであらうぞいのう。

富樫　サレバイナウ、外の關所で捕へて、この關所の手柄になりますかいなう。殊に以て安宅の關を見遁がせしは富樫が二心と、上聞に達したれば、我が身の上でござるわサ。

岩倉　改まつた云ひやう。辨慶に誑かされ、關所通したは自らが誤まりながら、それを推して二心とは、心得ぬ政道。いま鎌倉の出頭、梶原平三景時、これこそ眞の二心。さりながら、時至つて源家の御代となりしゆゑに、今の威勢。よしや眞に義經公と知つて關を通せしとて、同性の御兄弟、御主人の片割れ。助けしを咎むとあらば、自らが命を捨てゝ申し譯。其方衆の腹は借りぬ。氣遣ひせずと、默つて居や。

〽道筋歪まぬ一言に、關も揺らぬ富樫の左衞門、尤もと打うなづき。

富樫　ムウ、さう聞けば尤もらしい。義經を捕へさへすれば、白い黑いの樣子は知れる事。行く先の關所々々は、この左衞門が往來切手を出さねば、滅多には通すまい。コリヤ家來ども、義經は僞はつて通るとも、怪しき奴等が來たらば、早速に告げ知らせよ。

一同　ハア、畏まつてござります。

〽畏まつたと家來ども、兎角我が身は源家の流れぢやと、呟やきながら急ぎ行く、あと見送りて富樫の左衞門、摺寄つて小聲になり。

富樫　ハヽア、流石は左衞門の伯母者人。お出かしなされた。天晴れのお心でござりまする。

岩倉　コレ〳〵左衞門、今の今自らが、不調法を叱つた其方が、出かしたの天晴れのとは、そりやマア、何が天晴れ出かしたと云はるゝのぢや。

富樫　何を云ふとはお情ない。現在甥の左衞門、なぜ打明けてお聞かせなさらぬぞ。只今の一言で思ひ合せば、御仲不和となり給ひしゆゑ、義經公を敵の如く思ひしは、

拙者が誤まり、何れ變らぬ御主人の片割れ。そこを隱して義經公は、この館に匿まうてござらうがの。

岩倉　ア、コレ、云ふ事と云はぬ事とがある。義經公を匿まひしとは、そりや夢さら覺えはないぞ。

富樫　イヤ〳〵、お隱しなされな。關所々々に目を止めるは義經一人。それを思うて次々は、先へ通して義經公一人は、この館にお忍びあると見た眼はよもや違ふまい。……思ひ廻せば鎌倉どのは、餘り胴慾心。弟に辛勞させ、手を濡らさずに源家の世となしながら、讒言に迷ひ、義經公を亡き者にせんなんぞとは、淺ましき御所存。強きを挫て弱きを救ふは勇士の好むところ。今日より富樫の左衞門、義經公の御味方申す。お目見得の儀を伯母者人、よろしく願ひ奉りまする。

〽云うた所は智仁勇、兼ね備へたる空醫に、甘味を付けたる人參は、桔梗の根ぐみぞ恐ろしき。

岩倉　オヽ、天晴れの志し、義經公がお聞きあらば、定めてお喜びであらうが、その義經公は、何方にござるやら。

富樫　何方とは白々しい。この間から見馴れぬ客人。奥の間に取籠つて、お忍びあるは、正しく義經公でござらうがや。

岩倉　イヤ、義經公ではない。

富樫　義經公でなくば、ありや何者。

岩倉　娘常陸が大事の戀聟。

富樫　エヽ、コレ〳〵伯母者人。娘常陸が戀聟とはなんの事、過ぎ行かれし庄司どの、常陸にこの左衞門を娶合せ、富樫の家を治めるとの、噂を聞いて左衞門は、あやかり者と羨まれた身共が、今さら外に聟があつて、立ちさうなものか、立ちそむないものか。さう云ふ奴なら直に逢つて、めつきしやつきせにやならぬ。

ト立つを、岩倉引戻し、立ち塞がつて

岩倉　そりやならぬ。

富樫　なぜなりませぬ。

岩倉　あの姫は、庄司どのの爲にも、自らが爲にも義理ある娘、殊に夫庄司どの寵愛あつて、誰れにもせよ、姫が氣に入つた者を聟がねとは、兼ねての遺言。夫の詞を守る自らが計らひ。其方も姫に添ひたくば、ハテ、氣に入るやうにしたがよい。それにマア無遠慮な。奥の一間は姫の部屋、案内無しに行かうとは、どのやうな差合ひがあらうやら、武骨も時に依るわいなう。

〽味な詞のひつぱなし、氣を持たすのも義經と、思はせまじき一思案。こなたは業腹、岩倉は、心殘して奥に入る。後に殆んど富樫の左衛門、胸むしやくしやと義經の、詮議も何所の無闇に、さも怨めしげに奥の方、身を慄はして睨みつけ。

富樫　昨日までも今日までも、匿まひあるは慥かに義經。實否を糺して搦め捕り、恩賞にあづからんと、いろ〳〵心を苦めしに、今の伯母が詞の端。奥に居るは常陸めが繼聟。一間へ行けば差合ひとは、この左衛門を乘り越えて、さては其奴が直し鞍に、早くも先陣なしつるよな。

〽昨日は人に羨やまれ、今日は人を羨やむとは、左衛門が身なるべし。

もう我が物ぢや、いらひ手なしと思ひ計つてこの不覺。疾にも一戰に不意を打たば、今の無念は……。エヽ、こは死なしたり、殘念や。

〽思へば五體もしやち張り返り、上と下とにほとばしる泪の色は白妙の、溶けてぐにやつくばかりなり。

ト大落しのフシにて、左衛門ドタリとへたばる。六ツの鐘鳴る。

〽早黄昏を夕告げ鳥、函谷關の裏表、共にとざすや關の門、何方より入りたりけん、義經の寵臣津の戸三郎春重、熊野行者の旅出でたち、兜巾篠懸、麻衣、笈を肩脊に大廣庭、枝折り戸に立ち休らひ。

春重　行き暮らせし旅の者。一夜の宿を報謝あれ。

〽思ひも依らぬ外面より、大音に呼はれば、富樫は悄り眼に角立て。

富樫　ヤア、この關所を何所と思ふ。富樫の庄司が奥の庭。殊に以て安宅の關所に並んだるこの館。羽搔あらばいざ知らず、所々の門々を、うぬはどうして通つて來た。先づおのれは何奴だ。

春重　身は雲水の僧形、假にも不動の姿を現はし、千丈の谷に飛び、百丈の岩さへも駈る行力、まつたこの山伏、なんぞやこれしきの關所、たつた一飛びに飛び越えて、推參いたした事でござる。必らず疑ひ給ふな。

〽受けやうもなき一言に、左衛門一圓合點ゆかず。

富樫　なんぢや。關所をたつた一飛び。ハテナア。ムウ、それはそれにしてくれうが、左程に行力ある山伏、この館へ一宿の無心とは。

春重　拙者一人でござらば、野に伏し山にも夜を明かす僧なれども、同行の者が疲れまするゆゑの御無心。何卒一

夜の報謝を頼み存ずる。

富樫　ウム。なんと云ふ。同行の者があると。そして、その連れの奴は何處に居る。

春重　白晝には人目を忍び、即ちコレこの笈の内に。

富樫　アノ笈の内に……ムウ。宿の無心聞き屆けた。イザ、これへ通つて一夜を明かせ。

春重　これは／＼、お聞き屆け忝なし。

〽一禮述べ、つさ／＼通る廣縁先、笈を下ろして紐解き紐解き。

さぞかし氣詰まり。イザこれ／＼。

〽いざ／＼これへと手を取つて、いたはり申せば靜御前しづ／＼出づるその姿、さも美麗なる上﨟の、思ひ惱める有様に、左衛門は二度悔り、元來好色者なれば、思はずふな／＼立寄つて。

富樫　見事。ハ、ア。天晴れ美なるかな。妙なる哉。して、この女性は。

春重　身共が女房。

富樫　アノ、眞實女房か。

春重　如何にも。浮世は捨てゝも、捨てられぬ煩惱即菩提。晝は人目を防がん爲

富樫　この笈に入れて歩くか。これが誠のおひ女房。定めて可愛がるであらうなう。アヽ、羨やましい山伏ぢやなア。

〽見惚れ入つたる折からに、郎黨泡手兵藤太、出合ひ頭にこの有様、一目見るより。

兵藤　さても／＼よい女房。男に生れた思ひ出に、あんな女と添うたなら、何か思ひは有明の。

〽道成寺のこなしにて、ベッタリへたばる。三郎、靜に向ひ、手をつかへ

春重　この程の憂き旅の空。さぞかしお氣詰まりに候はん。次へ參つて休息いたさん。イザ、お入りあられませう。

靜　只さへ旅は憂きものを、人目をいとふ姿を連れ、さぞや御身にも心勞ならん。

春重　なにサ、斯程の事を思つて、心を勞し申さんや。我が事にはお氣遣ひなく、御身を御大切に願はしう存じまする。イザ／＼次へ御入りあれ。方々、御免下されませう。

〽靜を伴ひ奥に入る。後に二人は夢見し心地、やう／＼に頭を持ち上げ。

兵藤　お旦那。

富樫　兵藤太。
兵藤　して、お心持ちは如何でござる。
富樫　其方が心持ちは如何であるぞ。
兵藤　心持ちは、おころもちでござりまする。
富樫　なに餅かは知らぬが、腰骨がグニヤ〳〵と、蕨餅のやうになつた。時に兵藤太、彼奴がいよ〳〵津の戸の三郎、あの女は靜めに極まつた。右の二人がこの館へ、へちまうてうせるからは、奥に居るは慥かに義經。いろいろに尋ねても、心底明かさぬゆゑ、事に依らば岩倉諸とも。コリヤ。
ト囁く。
兵藤　すりや、梶原どのの郎黨、番場の忠太どのが、この邊に。
富樫　おゝサ、一時も早く人數の手配り。合圖の烽火。コリヤ。
〽斯う〳〵と囁きうなづき、
兵藤　必らずぬかるな。
兵藤　ハツ。
富樫　早く行け。
兵藤　畏まつてござります。

〽左衞門は、一間にこそは入りにけれ。
ト常陸出で
常陸　世を忍ぶ身の上と仰しやるが、心がゝり、お名をお名乘りなさらぬが、この程の噂と云ひ、もし義經さまであるまいか。義經さまならば北國路には、手を廣げ待ち設けたる御身の上。
〽あゝ氣遣ひやと云ふ聲を、洩れ聞く一間に靜御前、思はず見合す顏と顏、悔りながら騷がぬ體。
静　それにござんすお前は誰れぢや。ムウ。最前申いた都の女中さんかえ。
静　さう云ふお前は、この館の娘さんかえ。
常陸　ハイ、富樫の庄司季影が娘、常陸の前と申す者でござりますわいな。
静　私しは御推量の通り、今宵一夜の御無心、宿を借りて居りまする、都方の者でござりまする。早速ながら常陸さまとやら、ちつと御無心、お頼み申したい事がござりまする。
常陸　初めてお目にかゝる私しに、お頼みなされたいとは。
静　サア、外の事でもござりませぬか、この館に都方の

お客様があるとやら。どうぞ其お方に、お逢はせなされて下さりませうならば、ハイ、有り難う存じまする。

常陸　それはマア、お安い事でござりまする。あなたのお連れは山伏とやら、私しはまだお顔を存じませぬ。何れへお出でになりましたぞ。ドレ、呼んで上げませう。腰元ども〳〵。

靜　ア、イヤ、連れの人ではござりませぬ。先からこのお館へお入りなされてござりまするお客様へ、ちよつとお目にかゝりたう存じましての、お頼みでござりますわいなう。

〽聞くよりさてはと推量の、顏に常陸がむつと聲。

常陸　エヽ、そりやアノこの間から來てござる、お客様の事かえ。

靜　ハイ〳〵、最前あれから聞きましたが、私しも同様心がゝり、どうぞ早うそのお方へ。

常陸　否でござりまするわいなア。あのお方は大事の大事の私しが殿御。ではない私しがお客。美しい女中さんに、逢はす事はなりませぬ。否でござりますわいなア。

〽否ぢや〳〵とつかうどに、云はれては居ぬ靜御前、かつと上氣の齒に衣着せず。

靜　おぼこ娘と思ひの外、奥の客を義經さまと知つた口振り。もうこの上は包むに及ばず、自らは義經さまに、お情受けた白拍子。靜と云ふ者。どのやうに思ひ込ましやんしても、この館は鎌倉方の娘。お側仕へは叶はぬ程に、フツツリと思ひ切つて、我が君様を爰へ出してもらひまするぞ。

常陸　オヽ、厚かましい、ようそんな事が云はれるなう。戀は親にもお主にも、見替へてするが女子の意地。一旦お情受けたこの身。母様が鎌倉方ならば、勘當を受けてもお側に居る。其方こそ一夜流れの白拍子。この館に置く事はならぬわいなう。去んだ去んだ。歸りや〳〵。

〽取る手を拂ひ。

靜　オヽ、なんぢやいな、なめくさり。一夜流れか流れぬか、五つの年から加茂川の、水で育つて水上げより、今に二人と知らぬ私し。表は玄人と云はれても、まさかの時は白拍子、つい一通りの浮かれ女とは、違ひやんす

〽と仄めかす。

常陸　イヽエ、傾城に誠なし。誠のあるは武士の家に生れた常陸、帯解く人とては只一人、二人と女子は寄せつけぬ。國の戰場、城郭へ、切り入らうとは無遠慮な。

ヘと行くを引留め、止むるを拂ひ、互ひに悋氣の花[illegible]り衣、裾もほら〳〵戀風に、花の安宅の關の戶も、揺ぐばかりに挑み合ふ。この物音に中の間の、襖開いて義經公、立ち出で給へば爭ひも、上の空なる靜御前。

靜　ヤア、お前は我が君。

義經　靜御前か。

常陸　そんならあなたは、義經さまに紛れはない。

ヘはつとばかりに泣き入る常陸。こなたに窺ふ富樫の左衛門、奧には主人の後室が、聞けども知らず義經公。

義經　我れ十二人の山伏と變じ、陸奧へ下るに、この安宅にて見咎められ、既に危ふきところ、武藏坊辨慶が能辯にて、關を安々越え、樣子あつて我れ一人は、この家に留まる。仔細は追つて物語らん。先づ差當つて其方が身の上、大物の浦の一曲が、この世の名殘と思ひしに、縁あれば不思議にも、この館にて對面、如何にして來りしぞ、訝かしさよ。

ヘ訝かしさよとありければ、靜は泪にくれながら。

靜　大物にてお別れ申し、樣子を聞けば浪風荒く、お船は住吉の浦に漂ひ、君は吉野へ落ち行き給ふと、聞きて其まゝ大和路へ尋ね參るその道にて、梶原が家來に見咎められ、危ふき所を津の戶の三郎どのに助けられ、思はず今宵お顏を拜し、夢ではないか此やうな、嬉しい事はござりませぬ。

義經　オヽ、嬉しいは道理々々。我れとても其方の事、旅路の空にも心がゝり、無事を見て喜ぶぞよ。この上は何國までも召し具して、比翼の契りは變るまじ。

靜　ナウ、そのお詞は御[illegible]實か。エヽ、忝ない。

ヘと縋り付き、割なき妹背仲々に、側に聞き居る常陸が思ひ、見兼ねて中へ割つて入り。

常陸　コレ申し義經さま、あんまりぢやわいな〳〵。この程よりのお情は、事かけの仇枕か。そりやお胴慾ぢやわいな〳〵。

義經　オヽ、その恨みも尤も。志しは嬉しけれども、この程も云ふ通り、世を忍ぶ義經が今の身の上、縁と月日を。

常陸　イエ〳〵、待たぬ〳〵。エヽ、胴慾な義經さま、世を忍ぶと仰しやるお前が、靜かさんと何處までも、連れ行くとは何ゆゑ仰しやつた。戀に上下の隔てはない。お主樣の片割れでも、思ひ込んだこの身の因果。何處までもわたしや付いて行く。

へむごい〳〵と抱き付く、娘心の綻び口、義經公は靜が手前、何と返事もなき入る娘、離れ難なき風情なり、障子がらりと岩倉御前、はつと驚ろき立退くを、持ちたる弓にて、はつし〳〵と打ち据ゑ〳〵聲勵まし。

岩倉 智仁勇兼備の名將も、色と云ふほだしにお心亂れ、お輕々しき御振舞ひ。春の野にあさる雉子の妻乞ひに、おのが在所を人に知られつ。この一首も外ならぬ、靜御前の色香に迷ひ、我が身を訴人も同然。君一人搦め捕らんと、四方八方敵の中。辨慶ゆゑに請合ひて君を預かる御一人、この館にお留め申せし心はな、關所々々に目を付けるは君御一人。一緒に下すは十二人の爲ならずと、この岩倉が寸志の忠義。行く先々の關所の切手は、肌身離さず所持する左衞門、何卒して奪ひ取り、安々と奧州へ、御下向なし奉らんと、心を碎くこの岩倉が心の中御推量なき御身持ち。コレ、この弓を持つての諫言。好色ににべも取れ、弦切れたれば矢もたまらず、弓とばかりは形あつて、ゆるみし心の裏はずも、よもやとお宿申せしに、いま靜御前への一言は、あまりと云ふもお情なし。君の心を寢目の弓、この岩倉が誤まりか。返答あらば義經公、サ、、承りたら存じます。

へ理を射通せし諫言は、實にも富樫が後室なり、義經公は最前より、默念たる顏を上げ。

義經 我れを思ふ諫言、志しは過分ながら、斯く我が身を義經と、顯はすも外ならず。とても、かくても傾むく運命、潔よう名を名乘り、其方が手にかゝる、所存とは知らざるか。

岩倉 なんと仰しやる。大切な御身を捨て、我れ〳〵が手にかゝる御所存とはな。

義經 其方が志し立てんとすれば、この義經を見遁がせし科、其方等が身の上。義經ゆゑに命を捨つる、覺悟と知つて落ちられうや。一時も早く義經の、首打つて身の云ひ譯。恩賞にあづかられよ。

へ思ひ切つたる御覺悟、靜常陸は悲しさの、中に後室聲荒らげ。

岩倉 エヽ、腑甲斐ない御所存。大功を立てんと思ふ者は、細瑾を顧ずとは申さぬか。如何やうにしてなりとも、命全う時節を待ち、御兄弟めでたく御和睦あらんこそ御身の譽れ。夫富樫の庄司どの、例へこの世になければとて、同じ淸和の御兄弟、何れを討ち何れを捕へて、高名手柄になるべきぞ。ナウ娘、こなたに母が云ひ開かす事

がある。眞實我が君を思ふ心が定ならば、さつぱりと暇を願や。お情もこれ限りぢやぞよ。

常陸　エヽ、そりや又、何ゆゑでござりまするぞいなア。

岩倉　オヽ、悲しいは道理々々。茲の所をよう聞きや。靜どのも同じ事。女を伴ひ陸奥へ、お下りあらば秀衡どのの、思惑もお爲にならず、これ一つ。二つには國を亡ぼす基とて、范蠡と云ふ臣、寵妃を南海に沈めし如く、付き纏はば足手纏ひと、忠臣の人が殺すは治定。その時は親子の忠義も消え、その身の苦勞も無駄になる。この程よりの添臥しに、一旦の望みも叶うたと云ふもの。思ひ切るも君の爲。合點がいたか。

〽合點がいたかと云ひながら、思ひやつたる隱し泣き、娘はなんと返答も、泣くより外の事ぞなき。

アヽ、思はずも未練の泪。奥州へお上りまでは、猶世を忍ぶ義經公。爰は端近。奥へ御入りなされませう。

〽いざ〱奥へと岩倉が、詞に從ひ義經公、座を立ち給へば靜御前、常陸も共に取りつくを、不便と見やれど後室の、激しき詞に諫められ、心強くも振り切つて、奥の間さして入り給ふ。後に不便や常陸の前、事を分けたる母上の、詞に否もなくばかり、次の間の物影より、始終を聞きたる富樫の左衞門。

常樫　常陸は何處にぞ。常陸の前〱。

〽聲に悔り。襖ガラリと押開けて、何か白木の箱携へ、片手に長柄の銚子持ち出で、傍へに直し。

富樫　オヽ、爰に居るか。最前から聞いて居たが、あつたら者を若後家同然。アヽ、惜しい事ぢやなア。

常陸　エヽ、そんなら最前からの事を。

富樫　とつくり聞いて居た。おれが初手から思うた通り、義經公に極まつた。

常陸　アヽ、コレ〱、聲が高いわいなア。

富樫　なんぢや、聲が高い。アヽ、可愛や何にも知らずに、まだ義經に心中立て。阿房ではある。

常陸　申し左衞門さま、何にも知らぬとは、何を知らぬえ。

富樫　云うて聞かさうか。わしが云ふ事聞いてくれるか。

トしなだれかゝる。

常陸　エヽ〱、なんぢやぞいな。また惡い事を。八の心も知らずに、そんな機嫌ぢやないわいな。

富樫　常陸の前、わりや又、誰れに心中立て。ぴん〱するぞいやい。

常陸　エヽ、面白さうに、知らぬわいなア。

富樫　矢ッ張り義經に心中立てか。それ〳〵、それが阿房の根元ぢやわやい。ひだるい時にまづい物なしと、事かけにしられて、お勿體をせしめられて、靜が來てから、ぽいとしられて、立つか。

常陸　エヽ。

富樫　イヤサ、立つまいがな。一體あの義經公、其方の事は、身の毛を立てゝ嫌うて居る。サヽヽ、その身になつては見えぬものぢや。餘所目からは見え透くぢやて。その義經に荷擔してゐる伯母の岩倉は、如何に胤腹分けぬと云うて、可哀さうに、寄つてかゝつて其方一人を阿房にしよる。エヽ、胴慾な奴等ぢやなア。イヤ〳〵、云うて腹立ちさす程邪ぢや。云ふまい〳〵とは思へども、あんまり憎い奴等ぢやなア。

常陸　左衞門さま、寄つてかゝつてこの常陸を阿房とは、なんの事ぢやぞいなア。

富樫　アヽ、邪ぢやとは思へども、あんまり憎い仕方ぢや。てんぽの皮、云うて聞かさうかい。斯うぢや。義經と靜がちん〳〵は、云はいでも知れてある。日本國へ鳴り渡つて居る色事師ぢや。時に箸豆な義經、この館へ來るより早う、其方をちつうと摘み食ひ。てう〳〵しい事に於ては類もない。もう靜が來たに依つて、其方をぽいとしたうても、この館に居るうちは、どうも退くも退かれぬからの思ひ付き。伯母貴のたわけを取込んで、是が非に理窟を云はせ、二人が仲を引分けるみんな狂言。その證據は、今のやうに云ふかと思へば、もう奧の間へ取籠つて、靜義經口舌の段。互ひに詞のその舌たるさ。ほんにヤレ〳〵、構はぬおれさへ修羅が燃える。そんな奴等に心中立て。へヽ、世界ぢやなア。

常陸　左衞門さま、そんなら伯母様が、今のやうに仰しやつたは。

富樫　知れた事、繼母根性。

常陸　そりや、さう〳〵が一つになつて……エヽ、胴慾な。

ト泣き落し

左衞門さま、さうして今奧で、あの靜と義經さまとは。

富樫　睦事の最中々々。

常陸　エヽ、腹の立つ。

ト行かうとする。

富樫　ホツと待つたり。わが身抓つて人の痛さ。樂しみの最中へ行てやるは大きな殺生。今おれが聞いて來ただけ話して聞かさうか。たつた今の先、奧へ入ると、委細構

はず高調子、靜が謡で、申し義經さま、今のやうに云はしやんしても、矢ッ張りこれの常陸さんに、心が殘つて居るであらう、わしや氣が濟まぬ濟まぬと云うたれば、なんの濟むの濟まぬのと、あの常陸めは嫌で〳〵、顏見るもムッとして、三千世界に其方程可愛い者があろかいなう、其方とわしがその仲は、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝。

常陸　エヽ、阿房らしい。腹の立つ〳〵。

ト そこらあちこちして左衞門を叩き

さうして、その後はどうぢやえ。

富樫　さればその事。今さら云ふも憂し、云はぬも辛き睦事は、申し、そんなら、この後常陸とは、目と目も見合して下さんすなえと云うたれば、知れた事ぢや、そりやほんの事かいな、ほんぢやわいなう、弓矢八幡も照覽あれ、露塵程も僞はりなし、烏の頭が白うなり、兎の角に龜に毛が生え、卵に骨が出來るとも、切れぬ互ひの緣の綱。

常陸　エヽ〳〵〳〵。

〽口に任せて、いら立てる、けしかけられて立ちつ居つ。

エヽ、腹が立つわいな〳〵。

〽奧を睨むも眼は泪、せぐり上げたるおぼこ氣に、振りの袂を喰ひ裂き、引裂き、腹立ち泪ぞ道理なり……しましたりと富樫左衞門。

富樫　オヽ、道理ぢや尤もぢや。腹が立たう。それ程に義經に添ひたくば、添はるゝ事、敎へてやらうか。

常陸　左衞門さま、死んでも添ひたい。どうぞ添はるゝ仕樣があるなら、情ぢや慈悲ぢや。どうぞ敎へて下さんせいなア。

富樫　ものぢや。

常陸　エヽ。

富樫　殺してしまへ。

常陸　エヽヽヽ。

富樫　一生やもめで朽ち果てうより、邪魔を拂うて、添ふ氣は無いか。

ト 常陸、刀を取つて

常陸　上邊はぬつぺり云ひ廻し、戀の邪魔する靜御前。

富樫　後詰めはこの左衞門。必らずぬかるな。

常陸　思ふ夫に、添はいで置かうか。

富樫　コリヤ。氣を急いて仕損じな。

〽燃え杭に火を焚きつけ〳〵、一間へこそは窺ひ入る、

常陸は持ちし刀より、胸の刃の歯切れまで、せぐり苦しき息荒く。

常陸　エヽ、胴慾な義經さま。それ程に嫌ならば、いつそ死ねとはいたまはぬ。お前がお嫌ひなさるゝ程、一倍思ひが増すわいなア。怨めしい靜御前、母樣までが一つになり、ようら自らを退かしたなア。モウ〳〵、義理もなんにもない。さぞしつぽりと今宵から、寢くさると思や、嫉ましい恨めしい。所詮逢うて詰め開きせうよりも、嫌か應かを聞き切つて、承引なくば靜御前、恨みの刃只一思ひ。さうぢや。

〽後先知らぬ嫉氣の、戀に心は亂れ燒、刃をすゝぐ化粧水、結うたる髮も沸くや瞋恚の炎の煩惱、顏は上氣にあけかけし、障子の内こそ靜が寢所、慄ふ足元踏みしめ踏みしめ、忍び入るこそ不敵なり、さアしてやつたと富樫の左衞門、一間をそつと呼子の笛、合圖を待ちたる兵藤太、庭の木影に現はれ出で。

兵藤　お旦那、首尾は。

富樫　上首尾〳〵。奥に居るは義經と云ふ事、慥かに聞き屆けた。常陸めに毒氣を吹き、靜御前も討取る手筈。して、人數の手配りは。

兵藤　お氣遣ひなされな。諜し合せて追ッつけこれへ。

富樫　出かした〳〵。手にあまらば、コリヤ。

〽かう〳〵心得主從は、別れて忍び入りにけり、こなたの一間は女の聲。

靜　忍び入つたは常陸の前。この靜を殺しに來たな。

常陸　ホヽ、戀の敵ぢや。覺悟しや。

〽ぱつた〳〵と障子の内、發矢と太刀音松が枝に、合圖の烽火上ぐると等しく、四方八方數多の人音、鉦太鼓、血刀打振り兵藤太、左手に女の首引提げ、緣先へ躍り出で。

兵藤　ヤア〳〵、番場どの何方にある。義經が思ひ者、靜御前の首討つたり。

〽受取られよと呼はれば、庭先へ込み入る軍兵、中にも忠太勇みをなし。

忠太　ホウ、出かしたり兵藤太。靜御前の首、慥かに受取つたり。して義經は、なんと〳〵。

〽なんと〳〵と云ふ間もあらせず、義經公左衞門に渡り合ひ、爰を先途と戰ひ給ふ有樣、そりやこそ義經討取れと、番場が下知に家來ども、突いてかゝるを事ともせず、薙ぎ立て〳〵。

トこの三重にて皆々大タテにて逃げ入る。
〽追ひめぐる、この隙に富樫主従、取つて返すうろ〳〵眼。
富樫　兵藤太。義經めが死物狂ひ。滅多に手に合ふまい。行く先々の關所々々、知らせの早打ち、一時も早う〳〵。
兵藤　ちやと申して新參の粗者。面見知らねば、行く先行く先、何を證據に關所の固め。
富樫　應ゝ〳〵、それこそコレ、この札は、新關の往來切手。これを證據に。
兵藤　畏まつた。
〽取るより早く、飛ぶが如く走り行く。
富樫　斯うさへすれば義經を、何處の關所で搦めても、富樫が働らき。御褒美には國郡。うまい〳〵。
〽一人頷く表の方、義經をあますなと、聲々罵る大勢の、四方八方切り散らし、立歸る義經公、それと見るより富樫左衛門、こりや叶はぬといち足逃げ足、取卷く家來もひとくるめ、ちり〴〵ぱつと逃げ失せたり、相手なければ義經公、何處より切り拔けんと、見廻る四方遠攻めの、法螺貝吹き立つ鉦太鼓。
義經　この所は切り拔けるとも、行く先々の關所々々、所詮叶はぬ義經が運命。この館にて腹搔ッさばき、せめてこの家の後室が、手柄ともなしくれん。
〽思ひ定めて大音聲。
源九郎義經が、運盡きての切腹。よく見置いて、武士の最期の手本にせよ。
〽縁先に腰打かけ、刀逆手に腹押寛ろげ、既に斯うよと見えたる所に、一間の内より聲あつて。
春重　ヤア〳〵、義經公の御身替りに及ばず。江田の源藏、暫し〳〵。
義經　何がなんと。
〽聲をかけて津の戸三郎春重、悠々然と歩み出で。
春重　名を隱す事は易く、德を隱す事は難し。我が君義經公に面體似たる江田源藏、八島の浦の合戰より、我が君の不興を受け、引籠り居たるを聞きしに、さては武藏坊龜井片岡なんどを頼み、お身替りに立つべき所存にて、奥州へ下るところ、安宅の關にて見咎められ、直さま義經公と顯はさば、身替りなりと推せられん事を思ひ、武藏坊辨慶が杖を以て、さん〴〵に打擲せしは、關守を詐かると見せん爲。誠は江田源藏を身替りに立てん手段の以心傳心、裏の裏行く謀り事。

へ末世の記録に辨慶が、主人を打ちたる忠義の杖、三塔一の智者勇者。
天晴れ武藏、よく打つたり。
へまた打たれも打たれたり、忠臣割符を合せし智略。
まつたこの家の後室は、誠の義經公と思ひ、武藏が忠義を感じ、關所を見遁がし、行き過ぎるを追ひかけて、一人この館に匿まひ置き、猶行く先の關所安らかに、陸奥へ下さんとの志し、天晴れの心底。
源藏　ホウ、流石なり津の戸三郎、天晴れの推察、驚ろき入る。まつた我が君義經公は、津の戸三郎守護申すと聞きたるが、この邊にへちまふは、所存あつてか。仔細は如何に。
春重　ホウ、尤もの不審。義經公を守護せし、津の戸三郎が身の上語らん。
へと威儀を正し。
さても我が君、梶原父子が讒言に依つて、堀川の御所を開き、九州へ赴き給ふに、大物の荒浪に、是非なく吉野に御座を設け、罪なき御身にかゝる御流浪いたはしく、この津の戸が一命を捧げ、藏王權現に祈誓をかけ、七日七夜肝膽を碎いて祈りしに、滿ずる明け方、權現我が枕邊に立たせ給ひ、主君を思ふ汝が心中を感じ、一つの術を汝に授けん。義經が乘つたる黒の駒の行くへを見よ。源家長久、汝長壽の基ならんとのお告げ。ア、有り難し、信心膽に徹せし驗。
へ何とかしけん義經公の召の駒、山路遥かに駈り行く。
これこそ正に權現の、導き給はるしるしぞと、山奧深く峯を分け、谷を越えてぞ尋ねしに、不思議や駒に跨がる老翁、忽然と現はれ、善き哉〱、汝を待つ事三千年、我れと共に仙家へ來れと、一卷の書を授く。
それより異人に仕へる事凡そ三十年、未だ學ぶともなく受くるともなく、海存仙人と號を許され、歸れば僅かに二時に滿たず。思はずも雨を呼び、風を祈れば、心に應じ、雲に跨がり、海にも入る我が仙術。
へハヽア喜ばしや、これぞ源家の守り神。
斯くて海存ある上は、義經公の御身の上。
へ氣遣ひあるなと一言に、蝦夷が千島の外までも、隨ひ靡く源家の礎、今も吉野に義經の、乘り捨てたる馬の後を、保つ海存が仙術の、初めは斯くと知られたり。
源藏　ホ、ウ、天晴れ頼もし。さりながら、我が君の思ひ人、靜御前の最期をば、餘所に見られし仔細は如何に。

春重　それこそは誠に身替り。ヤア〳〵この家の後室、靜御前をこれへ伴ひ、娘常陸が最後の有樣、出でゝ名殘を惜しまれよ。

〽聞くより後室走り出で、死骸に取りつき、可愛やの、外に詞も泣き倒れ、正體涙にむせかへれば、哀れを共に靜御前。

靜　我が君樣に似た源藏どの、隨分變らぬ面體なれども、朝夕馴れし君のお顏、見違ふやうはなけれども、御身替りに立つてもらひたさ。思はぬいさかひ。さぞ腹が立つたでござんせう、堪忍して下さんせ。

〽免してたべと繰口說けば、源藏も涙にくれ。

源藏　我が君の御身替りと、覺悟極めしその源藏を、義經公と思ひ込みし、心の不便さ、さりながら、死したる者は見通し、來世は江田源藏が二世かけし女房。必らず迷うてくれるなよ。可愛や。

〽我れを忘れし男泣き、有り合ふ人もとも泪。何思ひけん後室は、側なる刀物拔き持つて、自害と見たれば靜は取りつき、こりや何ゆゑの御生害と、源藏刀物を捥ぎ取れば、後室涙の顏を上げ。

岩倉　思ひがけない娘の最期。これも主君の爲ながら、この子を殺し生きて居られぬ昔語り。この娘はもと拾ひ子。夫富樫の庄司どの、宿緣あつて常陸の國、鹿島明神へ參詣の歸るさ、守り刀を添へて捨てありしを、拾ひ歸りて、直ぐにその名を常陸と呼んで、夫婦が寵愛。分けて父御の不便がり、臨終の際の遺言にも、この岩倉は、生きぬ仲の義理と云ひ、未來の夫へこの身の云ひ譯。

〽放して殺して〳〵と、泣けば海存近く差寄り。

春重　後室の詞至極なり。さりながら、現在の兄が手にかけしこの常陸、未來にござる庄司どのへの云ひ譯は、死ぬるには及ぶまい。

靜　なんと仰しやる。現在兄が手にかけしとは。

春重　この娘こそ、我が父津の戸兵衞春秀の胤、我が妹。

岩倉　エヽ。

春重　その砌りは浪人、尾羽打枯らし、守り刀を付けて、鹿島明神の松原に捨てられし事、臨終に父が物語り、天願通じて我が妹、この館にあると知つたるゆゑ、この家へ入込み、妹を討つたるは、全く身替りばかりでなし。我が學び得し仙術は、大海を耳に湛え、須彌山を芥子にも入れ、千變萬化の奇々妙々。その奧儀を極めんには、邪念を離れ、假にも同性同血あつては、行ふに妨げあり、

今一日に妹が、血統の緣も打切つたれば、三千世界に凖の戸が血脈斷ち切つて、我が一體を千變萬化。これとても源家の行く末、武運を祈る忠義の首。討取りし心の内。ア、不便や。これなる源藏を都で見初めし因緣にて、義經公と思ひ込み、臨終の際に嫉妬の念。

〽さぞ迷ふらん不便やと、勇氣たゆまぬ眼中に、浮べる淚ハラ〳〵〳〵、大千世界をうるほせり。

源藏　仙術の奧儀を極めん爲、娘常陸を討つたとあるは、すりや、最前の忍びと見えしは。

春重　オヽ、この海存、化身の者。早く參れ。

〽早く來れの聲につれ、ハッと答へて富樫が郎黨、新參の兵藤太、飄然と飛び來れば、江田源藏摺り寄つて。

源藏　富樫が家來と見えたるは、貴殿の郎黨、義經公に忠義の者にてありしよな。

春重　イヤ、最前も云ふ如く、我れに隨ふ者はなく、君に仕ふる我が一心。これこそ我が身の一體分身。

〽しるしを見せんと差向ひ、唱ふる祕文に家來が姿、忽ち變じて炎々たる、焰と水を卷き上げ〳〵、とう〳〵きつと消え失せけり。

源藏　ハヽヽ、かゝる妙術ある上は、君の御先途氣遣ひなし。假の契りに相果てし、常陸が爲の追善供養はこの黑髮。

春重　ヤア、愚か〳〵、つら〳〵世界を考ふるに、萬國殘らず平均するは今この時。この日の本は未だ亂より治に至るべからず。見よ〳〵やがて奧州の、衣川にて合戰あらん、急ぎ彼の地に馳せ向ひ、忠死あるこそ武士の本志。女が爲に出家とは、不覺なり。

義經　尤もなる詞ながら、行く先々は關所多く、義經公に似たる某、此まゝにては通すまい。

春重　オヽ、それゆゑにこそ我が形を分け、富樫が手より取つたるこの札。關所は安々氣遣ひなし。我れこそは恩愛輪廻の黑髮、妹が名を直ぐに今日より、常陸坊海存と名乘るべし。梶原が讒言の根は、日の本の神寶、紛失より事起る。天に駈り、地に下り、尋ね出だして我が君の御名を淸く雪がん事、常陸坊が方寸の内にあり。

〽勇める姿は威あつて高く、實にも仙家の壽を保つ、骨柄見えて賴もしゝ。かゝる時しも烈しき鉦太鼓、四方を取卷く人馬の音、さもすさまじく聞ゆるにぞ。

源藏　又もや敵の寄せたるな。いで物見せん。

〽と立ち上がれば、海存重ねて押止め。

津戸　鶏を裂くに牛の刀用ふべからず、危ふきに臨むは愚將の業。敵方に義經と思へばよしや。義經公討死は時節ぞあらん。葉武者どもは、この海存が、霧を呑み風を喰ひ、木の實を拾ふ仙人の腹べらし。爰構はずと、奥へ奥へ。

〽指圖に任せ源藏後室、靜御前を伴うて、奥の間指して入りにける。程もあらせず富樫の左衞門、大勢引連れ、どつと押寄せ、

富樫　ヤア、義經は何處に居る。例へこの場を逃げ延びても、行く先々は關所だらけ、所詮叶はぬ運の盡き、尋常に腹を切れ。異議に及ふと踏み込んで、搦め捕るが、サア、サ、なんと〳〵。

〽と呼はつたり。

ト物凄き合ひ方となり

〽海存は見向きもやらず、人に向つて九字を切りかけ、印を結べば、あら不思議や。

トこの淨瑠璃のうち、ドロ〳〵になる。皆々身に堪える見得にて

家來　家來ども、ぬかるな。

家來　やらぬぞ。

〽有りつる姿は掻消す如く、忽ち入るよと見えけるが、折から吹き來る風につれ、館の障子ばら〳〵、霹靂閃電雷雲中より、突き出す兩腕古木の如く、鐵石城も動かす、音はどう〳〵どう〳〵〳〵、阿修羅王の手の内に、乾坤を握る時、千山萬山四大海、森羅萬象一時に、轉倒するかと疑はれ、凄まじなんどは愚かなり、富樫を始め數多の士卒、桑原々々、世直しと、顏も詞もなき喚く、現どつさりぴつしやりと、さしもの館も粉微塵、後振返る者もなく、散り〳〵ぱつと逃げにけり。

ト淨瑠璃に合せ、屋體兩方に揺れる。皆々桑原々々、世直し〳〵と、やかましく云ふ。隨分手嚴しき音してよき所にて屋體打倒れ、家來皆々逃げて入る。富樫、ウンと悶絶する。海存、影を見せず、内より

春重　あら心地よし、面白し〳〵。

〽大地も裂くる大音の、聲に氣の付く富樫の左衞門、現の如くむつくと起き。

ト始終どろ〳〵になり

富樫　ヤア〳〵義經、何處へ逃げる。逃ぐるとて逃がさうか。

〽あたりを見れど人影も、相手なければこれ待て〳〵。

いで義經に追ひつかん。
〽例はゞ關羽が赤兎馬に、項羽がうすゐの功あつて。千里の逃げ足早くとも、虎の威をかり、風を起して飛鳥のかけり。
〽我が脛骨の續かんだげ。討取らいで置くべきか。
〽駈け出す勢ひふは〳〵〳〵、不破の關屋の板びさし、風に揉まれてひよろ〳〵〳〵、足踏み締めてどう〳〵どう、巖も碎き古木を裂く、智勇の兩眼仙術の、さも勇ましき勢ひに、富樫左衞門引ッ摑み、二つに裂いて失せにけり。
トこの段切りの間、始終ドロ〳〵にて幕際ドロ〳〵頻りにて、上より大きなる腕ヌッと出で、富樫左衞門を二つに引裂く。淨瑠璃、常の如く、段切り。

幕

二　段　目　　吉野山文内住家の場

役名――馬士、實ハ佐藤四郎忠信。小柴文内。同姉娘、安督。同妹娘、お袖。一子、峯松。阿房、仁太郎。醫者、福庵。賴朝御臺、政子御前。土肥女房、卷絹。揚屋、喜右衞門。馬士、萬平、〔名菊王〕丸實ハ江間小四郎義時。

造り物、藁屋葺き、見附け赤壁、納戸口、西方障子屋體。橋がゝり、生垣。此うちに櫻の大木。門口藁屋葺き、門口に碁將棊會合所と掛け板あり、よき所に梶原平三休息所と高札立てあり、すべて吉野山の景色なり、幕の内より文内、禁振りあげて居る。安督、峯松を圍うて居る。福庵、仁太郎、百姓皆々文内を留めて居る。この見得にて幕明く。

福庵　マア、待ちやれ〳〵。
文内　イヤ〳〵、留めずと放さつしやれ。
福庵　コレ、何から起つた事ぢや。マア、氣を鎭めさつしやれ〳〵。
皆々　おいらも奧で碁の勝負、かけ將棊のどうぶくらを、親子喧嘩して無茶苦茶にした。もう料簡さつしやれの。
仁太　オ、さうぢや。おれも坊さんと機嫌よう芝居事して遊んで居たを、けないて、旦那さん喧嘩さんすの。芝居

文内　事の喧嘩なら、安督さんを相手にせずと、わしが相手になつてやろ。旦那さん、返答はなんとぢや。

文内　默り居ろう。持ち前の阿房盡すと、箒の相伴潰はすぞよ。

安督　コレ仁太郎、阿房な事はせずと、坊を奥へ連れて行て、何なりともして遊ばしや。

仁太　オツと承知。サア、坊さんごんせ。

ト子役を連れて行かうとする。

文内　待ち居らう。おのれらばかり腹ふくらして、遊ばして置く事ならぬ。坊主めをだしにして、うぬが遊ばうでな。慈な横着者め。

仁太　オヽ、怖や。なんぼうお前が睨ましやつても、遊ぶのはおれが商賣ぢやわいなう。坊さん、そぢやの。それを箒で喰はさうとは、慈な狸親仁の阿房人よ。

文内　うぬ、その頬桁を。

ト仁太郎、子役を連れ逃げて入る。文内、箒を持つて追ひ駈けうとする。皆々留めて

皆々　ハテサテ、もうようござるわいなう／＼。

文内　サア娘、おれが云ふやうにするか、どうぢや／＼。

安督　父さん、そりや胴慾でござんす。あの子を捨てゝ、わたしばかり、なんで勤め奉公に

文内　行く事は否か。その不孝な根性を。

ト叩きにかゝる。

皆々　ア、待たつしやれ／＼。

福庵　なんの事ぢやと思うたれば、あの娘をば勤め奉公に賣つてやるのか。こりや腹立つる娘が尤もぢやわい。親仁どの、惡いぞや。

皆々　惡い／＼惡いぞや。

ト口々に云ふ。

安督　よう仰しやつて下さりました。この子を爰に置いて勤めせいとは云はれまする。あんまり酷い心ぢやに依つて。

文内　默り居らう。酷いと云ふはおのれが事ぢや。お前方も一通りでは、酷いやうに思はしやらうが、これには樣子のある事ぢやわいなう。

福庵　サア、その樣子を云はしやれぬと、なんぢややら譯が知れぬ。その樣子、云はしやれ／＼。

ト皆々云ふ。

文内　エヽ、根問ひをする衆ぢや。ひッ摘んで云うて聞かしませう。高が、この姉めは、小さいから病身者で、藥

ばかり服んでけつかる。おれも元は武士の果。相應に貯へもあつた間は、どうぞ斯うぞ食はしても居たが、段々錆が詰まつて來て、どうも仕樣がなさに、京の室町通りで、碁將棊の會席を始め、席料取つて暮らすうち、聞かしやれ、病ひ者とて油斷はならぬ、一二度碁を打ちに來た浪人者に、いつの間にやらちん／＼貝合せ、内をぼいと駈落ち。

安脊　ア、父さん、何を云ふのぢやな。あなた方の知らしやんした事でもないに、あられもない京物語り。其やうな事云はずに。

文内　イヤ、云はらわい。云はねば譯が知れぬわい。

福庵　さうぢや／＼。どうやらうま臭い話しぢや。その後は、どうぢや／＼。

安脊　申し皆さん、聞かずとよしになされませ。

文内　イヤ、云はうわい。

安脊　よしにさしやんせ。

文内　イヤ／＼、云はうわい。

へせり合ふ表へ來かゝる馬士、内の喧嘩に門の口、駄荷をおろして聞き居たる。

ト萬平、聞いて居る。

時に、方々尋ねても、彼奴の行くへがとんと知れぬ。そこでよく／＼思うて見れば、娘の子を只置くゆゑに、此やうな目に遭ふと思うて、妹のお袖めは、傾城に賣つてやつた。尤もであらうが。

皆々　こりや尤もぢやわいなう。

文内　その後、半年も過ぎて、キヨロリと小判五十兩、彼奴が手紙添へて送つた。こりや有り難い、なんでもよい出世をしをつた。その時の浪人は、定めて源氏の侍ひ衆が、平家を窺ひに來たのぢやと思うたばかり。名も知れず、また三十兩五十兩、折々怖い侍ひが持つては來れども名は知れず、追つて知れう／＼と睨み廻して、ツイと去ぬる。睨まれ甲斐のある事と、樂しんで居るうち、キヨロ／＼と坊主を連れて娘が戻つて來た。それから居食ひの病廻し。何やかや手詰めになり、京にも居られず、この吉野の麓はおれが出所ゆゑ、去年から宿替へして來て、碁將棊の會合しても、摘み錢では屆かぬゆゑ、また浪人に取られぬうち、おやまに賣らうと云ふが無理か。なんと皆の衆、おれがのは無理ぢやござるまいがの。

皆々　謂れを聞けば尤もぢやわいなう。

安脊　父さんのやうに云はしやんすと、わたしが徒らばつ

かりして、親を捨てたやうに聞えるけれど、さうばかりぢやござんせぬぞえ。

文内　そんなら勤め奉公に行くか。

安督　わしを又勤め奉公にやつて、お前、その金何にさしやんす。

文内　生れ付いての勝負好き。急に十兩程なけにや、工面の惡い事がある。そこで御所の町へなと勤め奉公に賣つてやらうと云ふが無理か。

安督　どのやうに云はしやんしても、勤めする事は否でござんす。

文内　そんなら、われが世話になつた侍ひが名は、何と云うて、今はどこにどうして居るぞ。

安督　そりや知れた事。木村源藏さまと云うた源氏方のお侍ひ。死別れした譯は、先度云うたぢやないかいなア。

文内　さうぢやに依つて、勤め奉公に賣られて行けと云ふ事。

安督　それでも勤めしては

文内　立たぬと云ひ譯があれば、死別れは嘘か。

安督　イヽエ、さうぢやござんせぬ。

文内　さうでなけにや、賣られて行かぬか。

安督　それでも勤め奉公は。

文内　否と云うて云はして置かうか。聞かにや斯うしても。

〽あぐる箒の會釋なく、挨拶人も一群に、まくり立てたるじや〳〵馬親仁、見兼ねて駈け込む馬方が、箒打つ手を締め上ぐれば。

アイタヽヽ。何奴ぢや。コリヤ、なんとしをる。

萬平　イヤ、何ともせぬ。挨拶するのぢや。

文内　おのりや、どこの奴ぢや。

ト突き飛ばす。

何の爲に出たのぢや。

萬平　おりやアノ、梶原平三さまのお先手の荷物を付けた、萬平と云ふ馬士ぢや。

文内　なんと吐かす。そんなりや今度賴朝さまが、梶原さまをお連れなされて、この吉野の權現樣へ御參詣なさる、その先手の馬士ぢやと云ふか。

萬平　オヽ、その馬士。最前から喧嘩の樣子は、とつくりと門口で聞いて置いた。親仁、おれが挨拶する。お娘に勤め奉公は、料簡してもらひませう。

文内　此奴、横柄な奴ぢやわい。わいらが知つた事ぢやない。片隅へすツ込んで居れ。サア、娘、返事せい。

へ返事はどうぢやと立ちかゝる、思ひがけなき小判の手裏劍。

アイタヽヽ。うぬこりや。

　ト金を取上げ

ヤア、こりや金ぢや。

萬平　きつさりと十兩ある。お娘に疾から頼まれて、これからおれが世話するのぢや。大名のお供して、道中筋の泊り〳〵で、勝ち溜めた百兩餘り。なんと世話さす氣はないかな。娘が勤め奉公、今日もおれに義理立てて、それで勤めを嫌ふのであらう。

安督　滅相な。ついに見た事もない

萬平　ハテサテ、コレ、そりや悪い。それでは又、悪うなる。日本國股にかけ歩く萬平は粹ぢや。ハテマア、いつやら云ひ交した男が爰へ來ぬと、こなさんは賣られにやならぬ。そこを思うて爰へ出たは、たんと譯のある事。イヤサ、譯のある事ぢやに依つて、なんであらうとおれ次第にして、親仁どのゝ機嫌を直し、勤め奉公もせぬやうに、この場を濟ましてしまふがよからう。ハテ、何もかもとつくりと、云うて聞かせば胸は濟む。なんと、おれに世話してくれと頼まんしたであらうがの。サア、コレ、イヤサ、コレ、勤め奉公が否さに、マア〳〵、頼まんしたに違ひはあるまい。マア〳〵、さうであらうが。

安督　其やうに云うて下さんすと、マア〳〵、頼んだのぢやわいな。

萬平　親仁どの、あの通りぢや。勝ち溜めの百兩餘りが、この懐中に在します。なんと世話さす氣はないか。

文内　へ、ハア〳〵〳〵、さてはこなさんに義理を立て、勤め奉公をせまいと云ふのか。さう云ふ事とは知らなんだ。百兩餘りも打込んで、世話をする心なら、勤め奉公はさすまいが、その百兩はあるかや。

萬平　エヽ、疑ひの深い人ぢや。その十兩が違はぬ證據。手付けやら祝儀やらぢや、些少ながら取つて置いて下んせ。

文内　そんならこれが。ハヽヽヽヽ、おりやモウ、金さへ見りや身内がぞく〳〵するわいなう。こりやモウ、祝うて酒など出しませう。福庵さま、金右衞門さま、お前方も氣もせをさした。奥へ行て一つ飮んで下さりませ。

福庵　イヤ〳〵、滅多に飮んで居られぬ。いま馬士どのゝ云はしやる通り、頼朝さまや梶原さまが、吉野山への御參詣。今夜は大方この村で、御一宿なさるゝ筈ぢや。こ

ちらもモウ去なうわいなう。

金右　ほんにさうぢや。義經さまが隱れてござつて、山法師どのと戰ひ、大事のお山を血で穢した、その詫び事に藏王樣へ御參詣と、この海道は持囃す。イヤモウ、おいらも去にませう。

文內　ハテ、よいわいなう。こなた衆が去んだとて、何の用もない體ぢや。此方の內も梶原さまの休息所に云ひつけられたれど、まだ先供さへ見えぬ。滅多に今日の事でもあるまい。一つ飲んで去なしやれませ。

安督　ほんに何かとあなた方に、お心遣ひをさしました。何は兎もあれ奧の間で、一つ上がつて下さりませ。それはさうぢやが、馬士樣、どうぞ今の譯が。

萬平　イヤサ、コレ、その譯は、マア／＼奧で。

文內　エヽ、ぐど／＼と何を云ふのぢや。キリ／＼奧へ連れまして行け。

安督　アイ／＼。そんなら皆さん、馬士さん。マア／＼、お出でなされませ。

〽マア／＼奧へと打連れて、一間へこそは入りにける。

ト皆々入る。文內一人殘り、喜ぶこなしにて片附け居る。

〽折柄表へ緒屋が、駕籠を舁かせて息急き、爰ぢや／＼と駕籠舁き込ませ。

喜右　文內どの、內にか。島原の

文內　オヽ、こりや京の親方どの、何と思うてござりました。

喜右　何と云うたら、こなたの娘、お袖を連れて來ました。サア、太夫を爰へ出せ。

〽駕籠の內より引出す、思ひは胸に誰ケ袖が、絕えて久しき親の內。

文內　オヽ、わりや娘のお袖か。

こゝで　父さん、お健な顏を見て、お嬉しうござりますわいな。

ト泣く。

文內　娘よ、わりやなんで泣く。親方どの、どうでござりまする。

喜右　サレバイノ。この太夫めが、えらい色事をひろいで駈落ちするやら暴れるやら、廓は引ッくり返し、それで元へ戾しに來たのぢや。廓の法ぢや。太夫の身の代立て娘返しや。いま受取らう。

文內　イヤ、そればかりでは合點が行かぬ。勤めすりや色

根本所

載　挿　繪

事が商賣ぢや。それを仰山に。

喜右　イヤ、仰山に云はねばならぬ。彼奴がその間夫と云ふは、平と云ふ田舍客。よう聞けば平家の侍ひお尋ね者。その譯がこの頃知れて、廓へ捕り手が見えるやら、此奴めが駈落ちするやら、一向益體はなかつたところを、やうやう引ッ捕へ、責め折檻しても、客の本名知らぬと吐かす。あの根性ではこの上に、どんな難儀がかゝらうも知れぬ。それで今日連れて來たのぢや。サア、立て銀ぢや。受取らうぞ。

〽わやくる轡がいなゝく聲、又も表へ來かゝる馬方、貫八が門口に、樣子聞くとも白髮交り、頭がちなる主の文内。

文内　イヤ、親方どの、さう權柄に物云はしやるな。立て銀する金があれば、最初から賣りはせぬ。シタガ、娘も鈍な奴ぢや。頼朝さまの威勢に恐れ、逃げ隱れする平家侍ひ、間夫にして堪るものか。そのならずめを思ひ切れ。但し、切る事ならぬか。

そで　アイ、さつぱり思ひ切らうと思へども、心が思ひ切れぬわいなア。

〽夜毎に變る仇枕、辛い勤めの其うちに、思ひ込んだるその人に、死目にまさるいとしさは、女子に生れた身の因果。

誠々を明かし合ひ、日蔭のお身の大事さへ、話しさしやんす深ひ仲、今さら平家の落人とて、どう捨てられう、思ひ切られう。過ぎし廓の騷動から、どうなされたやら音信の、泣いてばつかり居るこの身。死んでもわたしや思ひ切らぬ、堪忍して下さんせ〳〵。

文内　エヽ、忌々しい奴ぢや。そのならず思ひ切らぬと、親も難儀がかゝらうも知れぬ。サア、キリ〳〵と思ひ切り居れ。

喜右　アヽ、親仁どの、其やうな事で行く奴ぢやない。意氣勢張らずとも、立て銀五十兩受取らう。

文内　滅相な。五十兩と云ふ金、いま出來て堪るものか。エヽ、馬鹿らしい事云やんないなう。

喜右　そんなら此方も云ひがゝりぢや。この太夫めを代官所へ連れて行て、お尋ね者の侍ひが行くへは、此奴が知つて居りますると、申し上げて責めさすぞや。

文内　サアそれは。

喜右　但し、金が出來るか、どうぢや。

そで　イエ〳〵、構うて下さんすな。責苦に遭ふとも、夫

ゆゑにはいとはぬ命。サア、どうなりと勝手にさしやんせ。

喜右　エ、、さう云ふ根性なら、サアうせう。

〽親方甲斐に引立つる、轡が首筋馬方が、ちよつと摑んでゐのころ投げ、こりや何しをるとむしやぶりつく、腕先握られ。

アイタ、、。何奴ぢや。コリヤ、なんとしをる。

貫八　おりや頼朝さまのお先手、梶原さまの御家來衆に、雇はれて來た直し馬、貫八と云ふ馬方ぢや。

喜右　アイタ、、。その貫八とやら云ふ馬方なら、おれが太夫を折檻に、なんで邪魔する。

貫八　イヤ、おれは邪魔はせぬ。最前から來かゝつて聞けば、段々の親方がひ。それを挨拶するのぢや。サア、おれが云ふ通りにして、立て銀を濟ます氣なら、たつた今銀渡す。否と云はるゝと、どこまでも付いて廻つて邪魔する氣ぢや。親方、返事は、サアどうぢや〳〵。

喜右　アイタ、、。ア、、聞きます〳〵。こなさんの挨拶なら、どのやうな事でも聞く程に、マア、寛めて下んせ、腕が碎けるやうなわい。

貫八　さう云うて下んすりや、挨拶人の顏も立つぢや。コレ、この金十兩、これでサラリと濟ましてもらはう。コレ、十兩渡すぞや。

喜右　そんならこの十兩で。

貫八　不足なら、どこまでも付いて廻つて邪魔をせうか。

喜右　不足にはない。消します〳〵。

貫八　そんなら年季證文があらう。其方の手で出してもらひたい。

喜右　ハイ〳〵、持參いたしました。サア〳〵、これを受取つて下さりませ。

貫八　ドレ、これが證文か。親仁どの、この證文、違ひはないか見やしやれ。

文内　ハイ〳〵、いかいお世話でごんす……成る程、娘が年季證文、これに相違はござりませぬ。

貫八　そんなら立て銀の十兩、キリ〳〵持つて去なんせ。

ト突き飛ばす。

喜右　そんならこの十兩で

貫八　云ひ分あるのか。

喜右　ア、申し、なんの云ひ分ござりませう。痛い目をして損をして、まだその上にどのやうな、御馳走にならうやら。

〽長居は恐れと親方は、恨めしさうに立跡る。
文内　ても、好い所へこなさんは、よう出て下さつたなら
そで　ほんに、お前さんはマア、よい所へ來て下んして、
　さりしてマア、わたしが身拔け立て銀まで、して下さん
　して
貫八　嬉しいかえ。
そで　大抵嬉しい事ぢやないわいなア。
貫八　ア丶、そんならわしも嬉しい。親仁どの、これから
　爰の花聟樣ぢや。敷金は道中すがら、勝ち込んだ百兩餘
　り。即ちお爰に在しますぢや。なんと、この敷金で、聟に
　する氣はごんせぬか。コレ、きつう惛うはあるまいが
　の。
文内　そんならこな樣が聟に。
貫八　立て銀した花聟樣。なんと不足はごんすまいがの。
そで　エ丶、滅相な。阿房らしい。父さん、相手にならしや
　んすな。アタなめ過ぎた聟詮索。そんな事は否ぢやわい
　なア。
貫八　なんぢや否ぢや。否なら今の立て銀いたさう。急な
　難儀を救うた、恩知らず情知らず。親仁どの、こなたも
　聟にする事否か。百兩に餘る敷金を、他人の手へやらざ
　なるまい。但し聟にする氣か。
文内　ハテ、百兩さへ渡す氣なら、娘はどう吐かしても、
　聟にする氣ぢや。
貫八　否なら立て銀返してもらはう。
そで　すりやお前さんが、醉狂でやらんした事。此方は知
　らぬ。
貫八　返さにや、おれが女房にする。
そで　イヤ〱〱、女房にやならぬ。
貫八　イヤ、女房にして見せう。
そで　否ぢやわいな。
〽否ぢや〱と奧の間より、逃げて出る安督が帶の端、
　引ッ張りながら萬平が、はずみ切つたる上調子。
萬平　なんぼ否でもおれが女房。マア〱、ちよつとあそ
　こへおおや。
安督　エ丶、嫌らしい。誰れが頼みもせぬ事を、頼もしさ
　うに云うて置いて、そんな事は否ぢやわいなア。
萬平　ハテ、マア〱、頼もしさうに云うたのも、高が抱
　いて寢たさぢや。
安督　否ぢやわいなア。
貫八　コレ君、返事はどうぢや。

そで　否ぢやわいなア。
安袖　エヽ、阿房らしい。そんな事は知らぬわいなア。
　ト思はず二人は行き當り
そで　姉さん。
安督　妹か、よう戻つてたもつたの。其方は廓を、どうして出ておぢやつたぞいなう。
貫八　そりやおれが立て銀して。
萬平　サア、女房ども、おぢや。
安督　エヽ、知らぬわいな。
萬貫　ハテ、さう云はずと、おぢやいの。
　ト兩人手を取り
そで　ヤア、お前は菊王
　ト云はうとする。
萬平　ア、コレ〳〵、おりや馬士ぢや。萬平と云ふ馬方ぢやぞ。
安督　見れば見る程、お前さんは忠信
　ト云はうとする。
貫八　アヽ、コレ〳〵、おりや馬方ぢやぞ。オヽ、貫八と云ふ馬士ぢやぞ。エヽ聞えた。見れば見る程憎てらしいアタ野太い人と云ふのか。
萬平　オヽ、さうであろ。おれもこなんの姉さんに、惚れやうがきついに依つて、マア、お前はと惚りしたか。
安袖　イヽエ、それでも。
萬貫　ハテ、きつい惚りぢやの。
文内　コリヤ娘ども。馬方であらうが何であらうが、金次第で聟にする。二人とも、さう思うて居い。
兩人　エヽ。
萬平　そんならわれも聟になる氣か。
貫八　オヽ、立て銀した妹の聟様。相聟は叶はぬ程に、どこへなりと出て行け。
萬平　さうさうはなるまい。爰の内はこの姉聟様が納める。妹をかたげてわれ出て行け。
貫八　われ出て行け。
萬平　うぬが出い。
貫八　出さらぬか。
萬平　うせいでな。
兩人　いつそうぬ、まくり出さう。
　ト掴みかゝるに、安督お袖留めうとする。兩人留めなと云ふ仕方。
兩人　なんぢや構ふな。なんぢやい〳〵。

〽なんぢや〳〵と摑み合ふ、二度の喧嘩に奧の客、走り出でて中へ入り。

福庵　ア丶、これは又、喧嘩かいなう。マア〳〵、待たつしやれ待たしやれ。

皆々　コレ親仁どの、よい料簡附けませう。文内オ丶、よい料簡附けさつしやれ。

〽料簡附けうと傍への碁盤、眞中へ直し置き。

文内　此方の䦨にならうと思や、碁將碁の譯知らねばならぬ。二人ながら碁を打つた事はあるまい。その心掛けがなうては䦨になられぬが、どうぢや。

萬貫　なんぢや、碁を打つのか。

文内　オ丶。

貫八　なんのおれが、打つわい〳〵。

萬平　オ丶、打つてやるわい。打つわい〳〵。

文内　そんなりや好い思案がある。たつた金十兩で、䦨に二人も面倒い。十兩づゝを賭けにして、碁の勝負で䦨定め、勝つた方へ固めてしまふ。但し、碁はよう打たぬか。

貫八　そんなら勝つたが䦨になつて

文内　負けたのは追ひ出すのぢや。

兩人　ヤア。

福庵　こりやよからう。居定めの双六代り、馬方と馬方との碁の始まり。サア〳〵、ござれ〳〵。

〽さア〳〵ござれと口々に、煽て上げられ今更に、知つた顏する胸どや〳〵、弱味を見せぬ負け惜しみ。

貫八　コリヤ、われ見事碁をやるわよ。

萬平　オ丶、われから行け。

貫八　マア、われから行け。

萬平　エ丶面倒な。一緒に行かう。

貫八　こりやよかろ。

〽こりやよからうと兩方が、摑んで並べる滅多打ち。

ト皆々笑ふ。

萬平　ハア丶、こりや梅鉢とやり居つた。そんならおれも斯うやらうかい。

貫八　やり居つた。こりや悉皆菊の花。いつそ散らしてしまはうわい。

そで　イエ〳〵、滅多に散らさしやせぬ大事の菊王。

萬平　ア丶、コレ〳〵、滅多に助言云はるゝな。いつそ小石の緣を切らうか。

兩人　切つてしまふもよかろわい。

福庵　イヤ〳〵、切つたら惡からう。マア、その白を押よ

うかい。
安督　ア、コレ、四郎を押へるといな。油斷をせずと、マア、退いて。
貫八　ハテサテ、いらぬ。お構ひな。
　トのりになる。
〽例へどれ程闇んでも、切つて／＼切りまくろ。
そで　イヤ／＼、そこを斯う押へ、姉を一目してやらう。
安督　なんの滅多に押へられう。こりや白石の生死を、案じてばつかり此やうに。
文內　サア、病ひな石が出來た。まだこりや養生せざなるまい。
安督　思ふは女子の身の因果。
文內　因果な石を打ち居つた。コリヤ、この白が危ないわい。
　ト皆々笑ふ。
萬平　蹴る程に。
貫八　打つ程に。
〽碁盤の面は一面に、黑白分ぬ亂れ碁や。
　ト皆々笑ふ。
萬平　ハア、こりやとんと詰まつたワ。

貫八　ほんに、どうも仕樣がない。いつそ丁半なとせうか。
萬平　腕押しで勝負せうか。
〽よからうと云ふ所へ、所の代官鳴瀧源內、家來引連れ門口より。
源內　亭主は居るか。これへ出い／＼。
文內　ハイ／＼、何の御用でござります。
源內　先達て觸れ知らせ置いた、梶原さまの休息所、俄かに今宵一宿なさるゝ。人寄せは叶はぬ程に、何奴も此奴も早くほひ出せ。
文內　ハイ／＼／＼、畏まりました。代官樣の云ひ付けぢや。サア／＼、皆出て行た／＼。
皆々　サア／＼、皆ござれ／＼。
萬貫　ア、コレ、小雨と云ふ金を。
文內　サア／＼、出てもらはう。
安袖　ア、コレイナ。
家來　出居らぬか。
〽出居れ／＼と權柄に、叱りつけられ一群れは、喧嘩しながら金棒に、追ひ立てられて出でゝ行く。
文內　ハ、、、、ア、、うまい奴等ぢや。ア、よい所へ代官樣、よう來て下さつた事ぢや……コリヤ／＼、コリ

ヤ娘ども、そりや何を見てけつかるのぢや。
　トきつと云ふ。
安袖　アイ、こりや今の喧嘩見て。
文内　エヽ、うか／＼とし居らずと、臺所へ行て茶など沸かせやい。そりや、どこを見るのぢやいやい。
安袖　ハイ／＼。
〽悔り坐る表の方、村の歩きが慌しく。
歩き　モシ／＼、文内さま、鎌倉よりのお尋ね者。二人の繪圖でござりまする。
文内　お尋ね者の繪圖ぢや。コリヤ娘ども、讀んで見い。
〽讀んで見よと差出す、何事やらんと姉妹が、打眺めて。
そで　ナニ／＼、四郎兵衞忠信、この人相に候ふ間、見附け次第訴人いたし候はゞ、重罪たりともこれを赦し、恩賞望みに任すべく候ふ。
安督　平家の落人菊王丸、この人相に候ふ間、見附け次第訴人いたし候はゞ、重罪たりともこれを赦し、恩賞望みに任すべく候ふ。
文内　ハアヽ、こりやうま臭い御詮議。金儲けが出來さうなわい。
歩き　イヤア、文内さま、お前にはまだ庄屋樣から、云ひつける用がある。連れ立つて戻れと、云ひ付けでござりまする。
文内　なんぢや、そんなら庄屋どのから、おれを連れ立つて戻れか。成る程、そんな事もあらう。コリヤ娘ども、その繪圖はわいらに預ける。金儲けになる大事の繪姿。しつかりと預けたぞ。
安袖　アイ／＼。
文内　サア、行かう。ござれ。
〽詞殘した一癖親仁、庄屋方へと出でて行く。
　トこれより合ひ方になり
安督　妹、わしや其方に問ふ事があるが、隱さずと云うて聞かしやるか。
そで　わしもお前に問ひたい事があるが、隱さずと云うて聞かしやんすか。
安督　オヽ、改まつた事云やる。サア、問ひたいとは何ぢやいなう。
そで　マア、お前が問ひたいとは、何事でござんすえ。
安督　わしがこなたに問ひたいとは。
　ト姿繪見て
サア、アノ、こなたが廓へ行きやつて、深う云ひ交した

と聞いた、平とやら云ふお方の本名は、なんと云ふかや。
そて　オヽ、姉さんとした事が、深いと云ふも一夜妻。淺井瀬平と云ふお方。平と云ふが本名ぢやわいなア。
安督　イヤ〱、さうぢやあるまい。平と云ふは假名で、いとしほがりやる本名は、コレ、このお方であらうがな。
そて　エ。ホヽヽヽ。オヽマア、其やうな滅相な、お尋ね者ぢやないわいな。わしが事よりお前さんの、駈落ちまでさしやんして、いとしほがらしやんす殿御の名は、何と云ふか聞きたい。
安督　木村源吾さんと云うて、侍ひであつたけれど、死別れして戻つたわいなア。
そて　イヽエ、そりや嘘であらう。お前がほんの殿御と云ふは、コレ、このお方でござんせうがなア。
安督　ヤアヽ。あの子わいなう。此やうな源氏のお尋ね者ぢやないわいなア。
そて　そんならお前は源氏が好きか。但し平家方が好きかえ。
安督　オヽ、こちや平家方が好き。源氏方は嫌ひぢや。わが身は又、どちらが好きぢや。
そて　アイ、こちや源氏が好きぢや。平家方は嫌ひでござんす。
安督　ハテナウ、なんと、この繪とその繪姿と、替へ〱してやらうか。
そて　アイ、イヽエ、その繪は欲しうないわえ。
安督　コレ、其やうに隱さずと、打明けて云うて聞かしやいの。
そて　わしが事よりお前の、ほんの事が聞きたいわいなア。
安督　そんならどうでも云やらぬか。
そて　お前も隱しなさんすな。
安督　エヽモウ、どうなりと勝手にしや。シタガ、この繪が欲しかろがの。
そて　お前もこの繪が欲しかろがな。
安督　こちや欲しい事はないわいの。
そて　わたしも欲しうはござんせぬ。
安督　きつい負け惜しみであるぞ。
そて　お前もきつい負け惜しみぢや。
安督　こちやモウ奥へ行くわいなう。
そて　わたしも納戸へ行くわえ。
安督　欲しかろがの。
そて　欲しいかえ。

安曾　云やらぬな。
そで　云ひなんせんの。
安曾　エヽ、性強な。勝手にしや。
〽綻び合ひし、姉妹が、夫ゆゑ心奥の闇へ、ぴんしやん
として入りにける、表へとつかは女内は、我が家の首尾
を窺ひて、一人呑み込み忍び入る、思ひはいとゞ増す鏡、
曇る安曾が胸の内、まだ日は暮れねど烏羽玉の、戀の暗
や峯松が、手を引き連れて立ち出づる、かこち顔なる、
一思案。
峯松　コレ母様、いま奥で美しい小母様が見せた、人形の
畫いたのが欲しいわいのう。
安曾　なんと云やる。美しい小母様が、人形の畫いたのを
見せたか。
峯松　あの繪が欲しうござんすわいなア。
安曾　イヤ〳〵、あの繪は欲しがりやんな。コレ、爰にも
よい繪がある。これをやらうかや。
峯松　イヤ〳〵、おりやその繪は否ぢや。矢ッ張り奥の繪
が欲しいわいなう。
安曾　オヽ、欲しい筈ぢや。あの繪姿は、其方の父御、四
郎兵衛忠信さま。

ト云はうとして思ひ入れ。門の戸を締め
コレ坊や、あんな繪は欲しがらんものぢや。欲しがると
怖い程に、必らず欲しがりやんな。
峯松　イヤ、それでもわしは、欲しいわいなう〳〵。
安曾　コレ、其方よりこの母が、戀しゆかしい繪姿の、主は
それぞと見ながらも、慾の深い父さんの、心をかねて我
が夫とも、得云はぬ胸の苦しさ。虫が知らして其方まで、
欲しがる父御の繪姿は、わしも欲しい、懐かしい、日蔭
の身でないならば、最早去なしはせぬわいな。
〽可愛の者の心根や、逢ひたや見たや戀しやと、聲を忍
びのむせび泣き、疾よりそれと馬方が、樣子立ち聞く忍
び足。
峯松　コレ母様、あの繪を小母様に持たして置いたら、切
りちやくつてしまふも知れぬ。おりや奥へ行て取つて來
るぞや。
安曾　アヽ滅相な。そんな事はせぬものぢや。コリヤ、わ
が身のせがむは寢むづかりぢや。ドレ〳〵、寢さつしや
りませう。ねんこ〳〵〳〵やねんねこさしやれ。ねんね
こが守りはどこへ行た。
〽山を越えて里へ行た、とろ〳〵眠るうたゝ寢の、時分

はよしと萬平が、登る櫻木さゝがにの、いとしの者を黄昏の、誰れと見合す顔と顏、悔りしながら馬方は、垣の小蔭に身を潜む。

今のは最前の馬方。ハテ、合點のゆかぬ。

ト思ひ入れして、子役を寢さして、菊王の繪姿を出し

菊王の姿繪、斯くの通りに候ふ間、訴人いたし候はゞ、重罪たりともこれを赦し

ト思ひ入れあつて

いとしい夫の爲めぢやもの。鬼よ蛇よとも云はゞ云へ、先越されては詮ない事。さうぢや。

へ硯引寄せさら〳〵と、何か樣子を白紙に、隱して卷き込む繪姿の、上封じして立出でしが。

ア、イヤ〳〵、滅多にわしは行かれぬわいの。コレ、坊よ。目を覺ましや。コレ、ちやつと目を覺ましや。

峯松　ア、母さん、なんでござる。

安督　コレ、其方は賢い子ぢや。この狀を庄屋どのへ、ちやつと持つて行てたも。この狀を持つて行きやると、小父樣がよい物くれる。ちやつと持つて行きや。

峯松　アイ、合點ぢや。そんなら持つて行きませう。

へどれ行てからうと走り行く。

安督　コレ、とほ〳〵して怪我しやんな。冗談せずと早う歸りや。どうやらあの子ばかりやつても置かれず、わしも後から。

ト行かうとして

イヤ〳〵、ひよつとその後へ、最前の馬方が見えたら、どんな事があらうやら。エ、とツと、どうせうぞいな。

へ思ひ煩らふ納戸口。

貫八　おりさん、何を思案さんす。

ト聲をかけて馬士貫八立ち出づる。

安督　エ、お前はいつの間に。

貫八　たつた今、裏から仕掛けた馬方の貫八。

安督　よう戻つて下さんした。逢ひたかつた、忠信さま。

忠信　コリヤ、聲が高い……人が聞く。すりや、馬方の貫八を。

安督　忠信さまと見るものは、廣い世界にわしほかあるまい。初めからお名を包んだ親子の仲。最前それとは知つたれど、云ふに云はれぬ日蔭のお身。幾世の案じをして居たわいなア。忠信さま、逢ひたかつた〳〵。

忠信　某、都落ちの節、おことに倅を預け置き、我が君の御供し、この吉野山の戰ひに、君の姓名を賜はり、某一

人踏み止まり、多勢を切り拔け艱難して、讒言したる梶原めに、仇をなさんと妾かしこ、付け狙ふ折に幸ひ、右大臣賴朝公に見參して、義經公に曇りなき申し譯し、その上にてお見捨ての恨みなくば、君を恨み申さんものと、姿をやつすこの有樣。それと咎むる人もなきに。

安督　忠信さまと見立てしは、心に忘れぬ女の念。どうお姿が變つたとて、見紛ふやうな事かいなア。とは云ふもの、これがマア、四郎兵衞忠信と、人に知られた弓取りの、お姿かいなア。

忠信　へお姿かいのと取縋り、見上げ見下ろし目に淚。

忠信　コリヤ、泣いて居る所でない。梶原今宵旅宿と聞けば、本望達する大事の場所。

安督　そんならお前は賴朝さまへ、近寄る手段がござんすかえ。

忠信　オ丶、その手段いま見せう。ヤアノ＼、小蔭に忍ぶ小童、四郎兵衞が首取つて、それを功に賴朝へ、近寄らんとは優しき計略、見參せん、これへ出よ。

へ聲かけられて小蔭より、ずつと出でたる馬士萬平。

菊王　流石は忠信、よい推量。御一門の仇を討たんと、生き殘つたる菊王丸。去ぬる八島の戰ひに、初めて船と、陸との見參。汝に膝を射られたる、その返禮に首取つて、賴朝へ近寄らんと、姿をやつすこの菊王丸。我が首取つて梶原へ、近寄らんとは野太い忠信。

忠信　オ丶、小賢しくも申したり。兄次信が敵の片割れ。首打ち落す、觀念せい。

菊王　さ云ふ汝が首取つて、賴朝へ見參する。覺悟せい。

へ觀念せよと拔打ちに、はつしと打てばちやうと受け、沈んで拂ふ上段下段、源平血氣のはやり武者、安督はハツと一間より、鬻ケ袖も走り出で、なうコレ待つてと姉妹が、縋るを蹴跳ね蹴飛ばして、切り結んだる劍の下、身をも惜しまずかけ隔て。

安袖　コレノ＼、待つて下さんせ。

安督　どちらが怪我をなされても

そで　悲しいはわしらばかり。

安督　その上、折角どちらぞに首持つてござんしても、彼方に合點せぬ時には、ほんの死損、骨折り損。

そで　どうぞどちらも睦まじう、納まる仕樣はないかいなア。

忠菊　ヤア、面倒な。

へヤア面倒なと蹴飛ばす、爪先急所かすり、ウンと左右

へ苦しむ妻、刃の電光、虚々實々、双方手練の切尖に、火花を散らして切り結ぶ、文内は最前より、樣子を見濟まし聲をかけ。

文内　ア、、二人とも惡い〳〵、兩虎相爭ふ時は、一虎は死し、一虎は斃つく。その思慮は危ないもの。二人の命を果さずとも、仇を討つ思案がある。

忠菊　ヤア、なんと。

文内　菊王、忠信、この通り冥土へ注進。

へ云ふより早く二人の刀、腹へぐつと突き立てる、これはと皆々立寄つて。

忠菊　コリヤ、血迷うたか。何をするのぢや。

安補　ヤア、こりや父さん。なんで死なしやんすぞいな。

へ縋りつけば文内は、苦しき息をほつとつき。

文内　この云ひ譯はこの書付け。娘ども、早く讀め。

へ投げ出す一通押披き。

安昔　某こと若氣の至りにて、主人知盛の勘氣を受け、浪人の其うち、平家の滅亡口惜しく

そで　強慾無道者となつて、金銀を掃き溜めしは、如何なる御公達をも守り立て、謀叛を起さん軍用金。

忠信　すりや、小柴文内どのも、平家の餘類であつたよな。

文内　聟どの、おれが義心を繼いで、賴朝に仇して下され。コレ、忠信どの、菊王どの、首の代りに文内が首を取つて、梶原へ近寄つて本意を遂げ、この場の勝負はこれぎりに、菊王どのゝ力となり、共に仇を討つて下され。源平兩家の歷々を、聟に持つたる身の果報。忠信どの、死後の一句を賴み申す。おさらば。

へさらばとばかり二振りの、刃の氷老の浪、哀れ果敢なくなりにけり、菊王丸、錦の袋取出し。

菊王　舅が金言を用ひ、この場の勝負を延引。心を一致にするならば、本望遂ぐるは手の中にあり。

忠信　ムウ。すりや源平一致するか。

菊王　これこそは大内より、源家へ賜はる大將の印。義朝内海にて討たれしより、平家へ傳へ、我が主人教經より、預かり置きし大切の物なれど、元は源家の重寶なれば、心を合はすと云ふ證據、忠信、受納する心か。

忠信　オヽ、傳へ聞きし諸軍の印。それに替ゆる物こそあれ。この一品は平家の重寶、もと平の維盛へ、内裏より下されたる、軍勢催促諸軍の印。大納言時忠より、義經公へ送られしを、我れに預け給ひし重寶、

菊王　すりや、その印と

忠信　その印と。
菊王　兩家の寶を取戾すか。
忠信　互ひに一味の證據として
菊王　本望遂げたるその上で
信忠　勝負決する源平兩家。
菊王　マア、それまでは
信忠　心を合せ
菊王　今宵のうちに
忠信　喜べ菊王。
菊信　エヽ、有り難い。
安督　そんなら、お二人ながら仲よう
そで　心を合せて下さんすか、姉さん。
安督　妹。
そで　こんな嬉しい事はない。エヽ、忝なうござんす。
ト安督誰ケ袖喜ぶ。
〽かゝる時しも嵐につれ、四面に聞ゆる鉦太鼓、兩人キッと心附き。
忠信　ヤア、あの鉦太鼓は。
菊王　正しく遠攻め。
忠信　すりや我れ〳〵お身の上を

菊王　敵が氣取つて押寄するか。
兩人　ハテ、怪しやなア。
安督　そんなりや、ありやお前方を。
そで　攻め寄せて來る遠攻めでござんすか。
安督　サア〳〵、ひよんな事をしたわいな〳〵。
〽こりやなんとせうどうせうと、おろ〳〵淚わけもなき。
菊王　ハテ事々しや。何萬騎寄せるとも、一戰に打破らん。
我れは一間に用意せん。忠信來やれ。
〽心も先へはやり男の、一間の内へ駈け入つたり、斯くとは知らで阿房の仁太郎。
仁太　戾つた〳〵。コレ、お袖さん、今のを注進して來たぞえ。なんぞうまい物おくれんか。
〽はつとばかりに誰ケ袖は、既に自害とありければ、忠信押留め。
忠信　コリヤ、なんで死なうとするのぢや。
安督　妹、何をしやるぞいなう。
そで　忠信さま、姉樣、堪忍して下さんせ。重罪たりとも赦すとある、繪姿の晴れ書ゆゑ、菊王さまが助けたさに、忠信さまのお身の上を、注進にやつたわいなア。
安督　ヤア、そんなら其方が、忠信さまを。ハア。

そで　夫がいとしさ大切さに、後先の辨まへなう、注進し
たはわたしが誤まり。堪忍して下さんせいなア。
安督　イヤ〳〵、妹、わしも堪忍をしてたも。忠信さまが
助けたさ、斯うならうとは露知らず、罪を赦すとあつた
ゆゑ、菊王さまの身の上を、注進にやつたわいなう。
そで　エヽ、そんなら菊王さまの身の上、注進にやらしや
んしたかえ。
安督　妹、其方への云ひ譯。
ト死なうとする。忠信留め
忠信　待て。すりや我れ〳〵が身の上を、其方達が訴人し
たか。ハテ、天命ぢやよなア。
安袖　それぢやに依つて、どうも生きては。
忠信　われ達が死んだとて、今さら益なきこの場の仕儀。
峯松を連れ裏道より、一時も早く落ちよ。サア、峯松は
どれに居る。
安督　エヽ、その坊は。
忠信　サア、峯松を連れて退け。
安督　サア、その坊は。……コリヤ阿房よ。わりや彼方で
逢はなんだか。坊に逢ひはせなんだかいやい。
仁太　アイ、坊さんに逢ひやんした。
安督　サア、その坊が、どこに居たぞいやい。
仁太　アイ、庄屋どので逢うたけれど、そこへ大勢大將〳〵
形が來て、坊さんをひん抱へて、どこやら入れて居たわ
いなア。
忠信　ヤア。
ト聞くより忠信仰天し、安督を引据ゑ。
ヤイ、峯松を何とした。
安督　サア、こんな事とは露知らず、義理のある大事の子、
罪をかけまいと思うて、菊王どのゝ身を、注進にやつた
わいなう。
忠信　ヤア、身にも命にも代へぬ峯松、心を見込んで預け
しは、わざと敵に覺られまい爲。その大切ない峯松を、
敵へ擒にせられしとは、憎くい女の猿智慧ゆゑ。エヽ、
見下げ果てた女め。何にもせよ、峯松を捜して。
ト安督をかつぱと蹴り飛ばし、駈け出す表に窺ふ軍兵、
後よりしつかと抱けば、忠信につこと打笑ひ。
ムウ。小賢しき拔駈けよな。死急ぎする罪人めら、忠信
が引導してくれん。
トたてあり
さては悴を擒にし、多勢を以て寄せたるな。過ぎつる吉

野の戰ひにも、君の姓名を賜はりて、人に知られしこの忠信。うか〳〵と深入りして、名を下さんも不覺なり。末代までの身の浮沈。鎌倉勢に泡吹かせん。さうぢや。
へそれよ〳〵と小躍りし、誰ケ袖安督を踏み退け蹴退け一間にこそは駈け入つたり。
　トこの間始終遠攻め鳴る。
そで　サア〳〵、姉樣、こりやひよんな事になりましたわいな。お前さんが氣の惡い事をしやんすに依つて、こんな事になつたわいなア。
安督　何を云やるやら。わが身が氣が惡いに依つて、此やうになつたわいなう。
そで　どうせうと思はしやんすぞいなア。
安督　どうと云うたら、峯松を取返さねば夫へ立たず、死ぬにも死なれぬ身の上。よい思案はないか。こりやマア、なんとせうぞいなア〳〵。
そで　エヽ、泣いて居ては濟まぬわいなア。コリヤ阿房よ。アノ爰へ來る衆を、とつと彼方へ去なして、峯松をば取返すよい思案はないかいやい。
仁太　彼奴等を彼方へ追ひ去なして、坊さんを取返す、こりや好い思案があるわい。
安督　サア〳〵、なんぢや。よい思案があるか。
そで　サア〳〵、早う云うて聞かしや〳〵。
　ト紙袋を出し見せる。
仁太　サア、その思案と云ふは、これぢや。
安督　そりや、何ぢやぞいやい。
仁太　今朝八百屋へ使ひに行つた時、ツイ側にあつたに依つて、なんぞ旨い物かと思うて、持つて戻つて舐つて見たりや、阿房らしい、胡椒の粉ぢや。
安袖　それが何ぞになるかいやい。
仁太　サイナ、いま大勢がうせ居つたら、わしがちやつと屋根の上から、この胡椒の粉をバラ〳〵と振りかけると、皆の奴等が、くつさめ〳〵と、くつさめして居る間に、坊さんを取返す。好い智慧であらうがな。
安袖　エヽ、阿房らしい。
安督　斯う云ふうちも時移る。命限りに峯松を、取返さいで置かうか。
そで　死ぬるとも生きるとも、二世の契りは違はぬ夫婦。姉さん。
安督　妹、おぢや。
へ心も空に姉妹が、取りつく阿房を突き飛ばし、奥の一

間にに太郎も、はふ〳〵聲で走り行く、時も違へず鎌倉勢、一手になつてどつと寄せ、大將黒彌吾大音あげ。

黒彌　ヤア〳〵、この家に義經が郎等、佐藤四郎兵衛忠信、隱れ居る由慥かに聞く。鎌倉どのゝ下知に依つて、黒彌吾が向うたり。叶はぬところ、腹を切れ。如何に〳〵。

〽如何に〳〵と呼はつたり、忠信は靜々と、肌着の兵具に身を固め。

忠信　ヤア、事々しき討手呼はり。うぬら如きの蛆虫に、刀ざんばい無徒なり。碁盤の引導してくれん。閻魔の帳の土産にせよ。

〽有り合ふ碁盤に腰をかけ、仇笑うてぞ扣へたり。

黒彌　ヤア、舌長なる廣言。ソリヤ者ども、番手を揃へ、組んで取れ。

家來　ハァゝ。

〽はやみ團八矢柄の藤太、人にさせじと一番二番の手筈を取り、卷き倒さんと突きかゝる、忠信得たりと身を潜め、突棒左右の腕にもぎ取り、うんつく棒な奴輩と、十八間投げつける、黒尾の與市川岸藤馬、熊手刺叉叉方より、三番手四番手の、手柄にせんと駈け向ふ、碁盤の妙手を振舞はんと、四方八方會釋なく、彼處に振り上げ秘術を盡す、刺叉熊手打ち落され、川岸黒尾が功もなく、四丁になつて引き兼ぬれば、切つては取るな責め合へと急きに急いたる敵の助言、ヤア面倒な目算知らず、皆殺さんと力碁に、先手後手も打亂し、しどろになつて逃げ行くを、うんと投げたる碁盤に當り、打ち倒されし有樣は、鎧兜や書に殘る、武士の譽れは潔よき、又も寄せ來る討手の大將、悠々と打通り。

小四　ヤア、四郎兵衛忠信、我が父北條四郎時政、直に逢うて尋ね問ふべき仔細あり。召し具し參れと命に依つて、嫡子江間の小四郎義時、疾より迎ひに參つたり、用意せられよ忠信。

〽呼ばり出づるは前の菊王、忠信はキッと見て。

忠信　ヤア、さては平家の小童、菊王と名乘りしは。

小四　江間小四郎義時、源家を狙ふ菊王は、早先達て搦め取り、父時政の計らひにて、某都へ紛れ入り、菊王丸が姿と似せ、我が綺姿を寫させしも、平家の殘黨一つには、和殿が在所を知らん爲。父時政の御計略。

忠信　ヤア、烏滸がましき一言。左程に我れを付け狙はゞ。最前勝負は決せずして、平家となり源氏となり、後暗き計略呼はり。片腹痛し。ハヽヽヽ。

小四　ホヽ、尤もなる一言。我れ〳〵姿をやつせしは、おことが手より受取つたる、軍勢催促諸軍の印、忠信所持し申さるゝ由、例へ理解を説いたりとも、恨める鎌倉、一應にては渡されまじ、權威を以て責め取らば、過ちあらんも計られずと、心を碎きし甲斐あつて、最前おことに渡したる、源氏の印は菊王が、隱し持ちしを幸ひに、取返せしは義時が、私しの計らひならず。

〽讒者の爲に苦しまるゝ、義經公の身の明り。一つの功にとなれかしと、父時政が寸志の餞け。あつたら武士をやみ〳〵と、佞人どもが手に渡さば、その殘念は如何ばかり。義經公の罪なき樣子を、父へ言上させん爲、召捕りに向ひしは、忠臣勇士を惜しまるゝ、父時政が計らひなるぞ。後暗き働らきと、蔑しまるゝな忠信。

〽智勇聞えし丈夫の詞、さしもの忠信晴然と、答へる詞もなかりけり、始終を窺ふ誰ケ袖安督、思ひがけなく立寄つて。

ト奥より兩人出て

安督　コレ、モシ、そんなら菊王さまと云うたは

そで　江間小四郎義時さま。

小四　オヽ、身をやつし窺ひしも、忠信手に入れん爲。

安袖　エヽ、、、ハア。

〽はつとばかりに誰ケ袖は、落ちたる刀取るよりも早く、咽喉にぐつと突き立つる、なう悲しやと取りつく安督。

安督　コリヤ、この姉への云ひ譯に、自害して死ぬのかいなう。

〽これならこれと取り縋れば、お袖は苦しき顏をあげ。

そで　姉さん、堪えて下さんせ。義時さまを眞實の、菊王さまと思ひ込み、わたしが輪廻の深いから、大事の殿御を訴人して、討手を寄せし極惡人。さぞ腹が立たう、憎からう。忠信さまを見出さうとて、わたしに通はしやんしたは、義時さまの謀り事と、憎いつれないお情でも、わたしや矢ッ張りいとほしい。可愛い殿御の勇ましい、お姿を見るにつけ、忠信さまの今日の仕儀。姉さんの心の内、云ひ譯なさのこの自害、堪えて〳〵堪えていなア。

〽堪えてたべと身を悶え、かこち嘆くぞ哀れなる、木石ならぬ義時も、涙を浮め。

小四　アヽ、さもありなん、さりながら、天が下の一大事に、我が情をかけたるは、武門に生れし身の不肖。恨みを晴らして成佛せよ。

〽二世の契りを待つべしと、詞少なき暇乞ひ。

ト此うち黒彌吾、出かけ居て
へ裏手へ廻つて黒彌吾が、隙を窺ひ忠信を、只一打ちと切りつくるを、しつかと留めて。
忠信　誰ケ袖が切なる最期、義時の申し譯、一通り聞えしなれど、おのれ鎗者の素頭取り、頼朝どのに見參と、思ひ立つたるこの忠信。おめ／＼と縄かゝらうか。
ト黒彌吾を蹴り退ける。
小四　すりや、我が君に近寄つて
忠信　義經公の申し譯、頼朝どのに一問答。梶原が素頭取つて、義經の善惡、糺して見せう。
黒彌　忠信、うぬ。
へまた切りつくるを引外し、刀かはして忠信が、手練の稻妻、黒彌吾は、二つになつて死してんけり、一間の内より聲高く。
政子　ヤア／＼忠信、右大將頼朝、梶原を召連れ、疾より一間に扣へたり、見參せん。暫らく
へ明くる一間は花の香の、匂ひ氣高く床几にかゝり、峯松が手をとり／＼に、守護する武家の妻取るも、流石名を得し三吉野の、櫻もはゆる景色なり。
忠信　ムウ、さては右大將頼朝と云ひしは。

政子　我が君右大將頼朝公、吉野藏王權現へ御參籠と披露して、政子の前が名代。
卷絹　梶原が名代には、土肥の次郎が女房卷絹。
政子　平家の殘黨一つには、義經公が忠義の武士、おことが安否を知らん爲、父時政の計らひにて、我が君樣の名を借りて、この三吉野への御代參。
小四　あれ見よお側に仕ゆる峯松。重罪たりとも科を赦す、訴人の功には義時が、命に代へて申し上げ、名將のお胤を長く傳へん志し。
忠信　ヤ、なんと。
小四　長く傳へん志し。
卷絹　この峯松は堀川にて、萩の戸といへし女、懷胎ありしを忠信へ、送られたとある義經公の、御胤であらうがな。
ト忠信こなし。
政子　イヤ、義經の胤ならず、勇氣を兼ねし忠信を、賞美の餘り義時が、養子となさん志し。父時政が計らひにて政子の前が遙々と。
へその櫻木の名に高き、花の蕾を三吉野の。
この峯松が生ひ先は、千歲の枝葉に御連枝の

〽榮えを祈る御迎ひ。心措きなう自らが、預かるこの子は甥の殿、政子の前が介抱せん。

忠信　すりや、義時の養子として、政子どのゝ介抱とな。

小四　俊人輩の手に渡り、顯はれなば義經の、胤を絶たんは治定。

政子　斯くまでおことを賞美ある、父時政の志し。

小四　無足にするを

政子　許容あるか。

政小　サア〳〵　なんと。

〽忠信刀がらりと捨て。

忠信　サア、立寄つて繩打たれよ。

小四　ヤ、なんと。

忠信　武運盡きたる忠信、腹掻ッさばき、死なんずなれども峯松が

ト云はうとして

サア、繩打てよ。

小四　オヽ、尋常の振舞ひ。義時づれが痩腕にて、擒となる和殿ならねど、義經公の罪なき趣き、言上させんその爲に、仁義五常のこの繩は、御兄弟の御仲を、取結ぶ忠義の繩。御免候へ、忠信どの。

〽御免候へ忠信と、かけるもかゝるも義者勇者。

安督　コレモシ、義理のある子と仰しやつて、お預けなされた峯松どの、君のお胤と云ふ事は、ようお隱しなされたなア。恨みと云ふも悔んでも、取返されぬこの縛め。さぞ口惜しうござんせうなア。

〽口惜しかろと身を寄せて、膝に側なす妹脊仲、涙やるせはなかりけり。共に哀れを政子の前。

政子　誰ヶ袖が訴人の功に依つて、同罪の科を赦し、安督は峯松の添へ人。

安督　エヽ。

小四　死を全うして親妹、生死の妻の二世安樂。

安督　そんなら後世の道に入り。

政子　イヤ〳〵それもその人の、生死の知れた上の事。マアそれまではこの子が添へ人、心を附けて介抱しや。

〽數々盡きぬ情の詞、今際の手負ひも嬉しげに。

そで　エヽ、有り難きお詞。姉さんさらば、義時さま、この世の縁は薄くとも、必らず未來で。

〽未來でと、云ふも涙の玉の緒は、早絶え〴〵に鳴る鐘の。

ト一つ鐘。

小四　夜明けも近し。イザ、お立ち。

政子　文と云ひ誰ヶ袖まで、二世の手向けは三吉野の、この子諸とも參詣せん。

卷絹　何れも、お供の用意さつしやれ。

小四　ソレ、忠信を引立てい。

安督　コレ、もうお前はござんすか。

忠信　未練の繰り言。コリヤ、若君の介抱。

ト云はうとして

さらば。

〽さらばとばかり見返らぬ、武士は武士なり三吉野の、木の間を花の行列に、また振亂す涙の雨、恩愛妹脊を打捨てゝ、仁義の繩に引かれ行く、實に忠臣の忠信は、吉野の碁盤忠信と、今にその名を殘しけり。

トこの淨瑠璃のうち、向う一面に吉野山の景色打拔きにて、山々を行列通る。お袖見返り、よろしくこなし。三重にて

幕

三段目　鶴ヶ岡の場

役名――源右兵衛佐頼朝。愛妾、靜御前。千葉之助常胤。土肥次郎實平。宇都宮彌三郎。飯原左衛門。安達三郎景盛。津田判官。醒ヶ井兵太。岩上五郎。江間小四郎義時。梶原平三景時。

造り物、向う山、松原、西の方に、鳥居の柱見ゆる。右松原に方々へ陣幕を張り、眞中に大將の幕を張り、幕の内より眞中に、頼朝、烏帽子、直垂にて、座するかゝり。この兩脇に、千葉之助常胤、土肥次郎實平、宇都宮彌三郎、飯原左衛門、安達三郎景盛、津田判官、素袍、烏帽子にて、左右に分れ並ぶ。この見得、天王立ち、下がり葉にて、幕明く。

〽それ民は國の元、國は君の元、人主の體、山岳の高峻にして、動かざるが如く、日月の貞明にして、普ねく照らすが如し、神慮も深き源や、武家を鎭護の宮造り、萬里に羽を伸す鶴ヶ岡、神と君との道直ぐに、兵衛の佐右大將頼朝公、御參詣とて帷幕をかたせ、正面に座し

初演の

演　番　附

給へば、御座の左右は千葉之助、土肥次郎、飯原左衛門、安達三郎、津田判官、宇都宮彌三郎、その外近習の諸大名、列を定めて相守る、大將床几にかゝり給ひ。

頼朝　この度義經都を開き、奥州へ下向し、天下の騒亂直ちに鎭まり、太刀は鞘、弓は袋の泰平も、偏へに源家の御守り、八幡宮の御加護。尤も帝の威德の然らしむるところ。尙萬歳を祈らん爲、即ち今日の社參、皆々神慮をしづしめてよからう。

土肥　ハア、成る程、いま一天四海下萬民まで、御大將の武威に從ふも、全く君の勳し、泰平の御壽き、數ならぬ我れ〳〵までも、如何ばかりか恐悅至極に存じ奉りまする。

飯原　過ぎつる石橋山の一戰に、危ふき御難を遁がれ給ふも、即ち御運の盡きざるところ。既に西國の平家亡びてより、天ケ下惣追捕使と仰がれ給ふ君の御威勢、萬里に羽を伸す大鵬の御勢ひ、猶々天下萬々歳、何れも君を祝し申されてよからう。

千葉　何れもの仰せの如く、君の武威烈しければ、國土の榮え萬民の喜び、御治世萬歳。

皆々　おめでたう存じ奉りまする。

〽各々喜び奉る、大將、莞爾と笑ひ給ひ。

頼朝　天下は萬人の天下にして、一人の天下にあらず、下萬民に至るまで、我が政事を守る事、偏へに王威の勝れ給ふゆゑ。全く我れ一人の武勇にあらず。この上とても忠勤を勵んでよからう。

〽我が威に誇らぬ寛仁大度、實に大將の源なり、飯原左衛門進み出で。

飯原　御諚の通り、梶原景時など數度の軍功、殊更石橋山の御難を遁がれ給ふも、梶原が情と思し召しての御諚ならん。これについては彼の梶原に、緣を引いたる千葉之助どの、又は土肥どのなどは、列座うちでも自ら、お喜びでござらう。ナウ、景盛どの。

安達　左やう〳〵、舅と申せば親、その親の手柄を、子が喜ばいで、なんと致さう。津田どの、さうではござらぬか。

津田　イカサマ、こりや御尤ものお詞。梶原どのは今での出頭第一なれば、緣を組んで置かせられたが御發明でござるてや。

宇都　イヤ、何れもには變つた事を御意なさるゝ。出頭の景時に緣ある我れ〳〵、舅を鼻にかけ、我まゝ致すと云

はぬばかりの一言。耳に障つて聞き憎うござるぞ
土肥　それ〳〵、例へば梶原、如何程に威を振ふとて、それがようて縁は組みませぬ。御邊達は御存じなけれど、我れ〳〵聟舅とはなつたれども、出頭第一の景時を見習ひ、我が君の御前體、追從輕薄も致すやうに思はれんがむやくしい。世上の人にも塞ぐ用意も致してござるてや。
安達　如何やうの御用意かは存ぜねど、兎角御前の御機嫌に入るやうに、召さるゝが御銘々の御發明でござる。
宇都　默り召され、景盛。梶原が威勢を振ふを、腰押し追從をして、我が君へ御奉公を勤めうか。
土肥　忠義を勵むは武士の常。後穢ない追從輕薄、人の威勢を借り武士が立たうか。サア、今の一言云つて見やれ。
宇都　我れ〳〵に容赦はないぞ。
ト兩人、刀に手をかける。
津田　イヤ又、餘り違ひもあるまい。
宇都　さう云やればモウ。
ト立ちかゝる。
四人　なにを。
ト同じく立ちかゝる。

ト素袍も跳ね退け、刀に手をかけ、双方色立ち見えければ。
頼朝　ヤア、尾籠なり方々、先づ〳〵扣へい。
ト御諚にハッと座に直り、恐れ入つてぞ平伏す。大將御聲爽かに。
方々の爭ひ、何れに道理も付け難し。土肥次郎、宇都宮、皆々梶原が聟なれども、縁に依つての分知はなし。銘々。切尖の功を以て、我れに屬する事なれども、飯原左衞門、津田判官、この兩人が申し條、全く蔑みする詞にあらず、忠義を勵む心より、今の爭ひなれば、この後とても疑心なく、互ひに平和を違へずして、猶も忠義を勵むべし。方々、キッと申し渡したぞ。
皆々　ハア、。
ト事を納むる優美の詞、各々ハッと平伏す。かゝる折柄馬場先より、梶原が郎等醒ケ井兵太、靜御前を引立て、御前遙かに手をつかへ。
兵太　主人景時申し越しましたは、この女は靜と申して、義經公の思ひ者。義經公の跡を慕ひ、さまよひありしを折よく見付け、引立てゝ立歸り、主人へ申し上げしところ、君この所に御座ある由、早速召連れ、主人にも追ッ

つけ參上仕るとの儀でござりまする。
〽手柄顏にて引据ゆる。大將遙かに見やり給ひ。
頼朝　オヽ、早速の言上、大儀々々……イヤナニ女、其方は靜とな。義經を慕ひ、捕はれしこと一つの不審。先達て常陸坊海存が匿まひ置く由に聞きしが、何ゆゑにさまよひ歩きしか。様子ぞあらん。なんと〳〵。
〽仰せに靜は泪ながら。
靜　成る程、仰せの通り、海存どのゝ情にて、我が君に別れてより、これまで隱れ居りましたれど、只寢覺めに思ひ出すは義經さま。誤まりもなき御身を捨て、都を開き、奥州と云ふ所へ御下向遊ばし、明暮れお側に仕へし身が、引別れたる今の悲しみ。どうぞ奥州とやらへ連れ下り、我が君に逢はせてたべと、願へば無下に叫りつけ、仙術とやら學ぶ邪魔になる、知らぬ〳〵と堅くろしう、人の云ふ事聞きもせず、一心不亂に行ひすまして、相手にさへも泣くばかり。云ひ出さうとすりや睨みつけ、その愛惜の念あつては行法の妨げ、思ひ切れと胴慾に、云ひ出されてあるにもあられず、只戀しい床しいと、思ひ思うた判官さま、お後を慕ひ行かんものと忍び出で、奥州へと思へども、女の事なれば、道は知らず、ウロ〳〵とさまよふうち、この人に見付けられ、捕はれし身の憂き恥。どうぞあなたのお情にて、奥州へやつて判官さまに、お逢はせなされて下さりませ。それも叶はぬ事なれば、いつそわたしを手にかけて、殺してなりと下さりませ。お顏が見たい、逢ひたうござりまするわいなう。
〽云ふも泪に後先は、見目も形も取亂し、泣くより外の事ぞなき、岩木ならねば誰れ〳〵も、靜の心根思ひやり、脇目涙を催はせり、折節向うの松原より、供人引具し梶原平三、出頭顏にのさばり烏帽子、矢筈の紋も角菱の、三角眼鼻高々、挨拶もなく打通り、御前間近く座を構へ。
平三　我が君には今日の御社參、千秋萬歳、おめでたう存じ奉りまする。某も御供仕るべきところ、先刻申し越せし如く、家來醒ケ井兵太、靜御前を引立て歸り、何かとの遲參。恐れながら、御容赦願ひ奉りまする。
〽阿諂る詞に頼朝公、
頼朝　オヽ、先刻家來兵太が申せしゆゑ、只さに聞きしが、これなる靜は聞き及ぶ白拍子、扇の手の聞えある、風流の今様一奏で。幸ひ神慮をすゞしむる爲なれば、一指し舞はせて見物せん。梶原、早く〳〵。
平三　ハア、成る程、御尤もなる御仰せ。判官どのを戀し

く思ひ、何を云うても只奥州へやつてくれいと泣くばかり、なか〳〵詞甘く云うては舞はぬ根性。コリヤ靜、冥加に叶ひし我が君の御所望、めろ〳〵とこぼえずと、大將へのお慰みに、早く舞の用意をせよ。我れが爲には幸ひの裟婆忘れだ。サア、早く舞へ〳〵。

〽云へども何の應へなく、泪に袖を浸せしが、稍あつて顏を上げ。

靜　味氣なの世の中や。鎌倉どのも我が夫も、同じ御兄弟なれども、先に生れし兄甲斐で、居ながら天下をしろし召す御果報。それには引替へ弟御は、平家を亡ぼす代官を受け、山とも云はず舟の中、馬の脊に一日心を休めもせず、使ひからして揚句の果に御勘當。廣い世界に御身を一つ、置く方もなき武運の拙さ。吉野山がお顏の見納め。思ふ仲の憂き別れ。まだその上に此やうに、東路にさまようて、憂き恥かきし自らの、舞を見んとは胴慾な。お恨みある頼朝公、なに追從に舞ひ唄はん。お情には誰れなりと、早う殺して下さりませ。いつそ死にたい死にたいわいなア。

〽かつぱと伏して嘆くにぞ、梶原大きにむくり起し。

平三　ヤア、詞甘く云へば樣々のたわ言。我が君に恨みとは何が恨み。親兄の禮を忘れ、我が君を追討の綸旨を乞ひ受け、剩さへ謀叛を企てし、朝敵の九郎どの、非義非道に罪は遁がれず、遂に都を開き、奥州へ駈落ち。早速討手は遣はす所なれど、それだけは我が君の御宥免。この景時が情だぞよ。サア、役にも立たぬ世になし者の、判官どのを慕はずとも、我が君の御意ぢや。早く舞の用意をせい。

〽例の苦口耳ねぶり、耳にもかけず泣き居る靜、宇都宮側へ寄り。

宇都　イヤナニ靜御前、嘆きに沈むこなたなれば、心には染まずとも、快くお請け召され。判官どのゝ行く末、お爲になるまいものでもござらぬ程に、ナウ、實平どの。

土肥　如何にも左樣。忝なくも右大將、頼朝公の御所望は、その身の大慶、殊にはお身の爲にもならず、八幡宮の神慮に叶はゞ、且は義經公の御身の上、靜どの、早くお請け申さつしやれ。

千葉　左樣でござる。靜どの、早くお請けなされい。その上では又どのやうにも、こなたの願ひの品も、共々に仕樣もあらう。サア〳〵、お請け申して面白う、御機嫌に入るやうに、一さしツイくる〳〵と舞はつしやれ。早く

早く。

〽賺かし宥むる其うちも、梶原が焦ら立つ色目、それと見るより諸大名、早う／＼と進むれは、大將御氣色を和らげ給ひ。

賴朝　如何に靜、例へ朝敵謀叛の妻たりとも、女には構ひない。奧州へ行きたくば行くべき時節があらう。それは格別、いま某が望んだる今樣。一さし法樂の舞として、サア／＼、早く／＼。

平三　ャア、お詞が甘いゆゑ、付けあがつて猗埒が明かぬ。將軍の御意を背くか。サア一口に返答せい。女郎め、ドドうぢや。

〽さア／＼どうぢやと雷聲に、靜はなんと返答も、果てし泪に時移る。折から御注進と呼はつて、錦戸太郎が郞等岩上五郎、手の者引連れ駈け來り。

五郎　御注進々々。

平三　慌しい。注進とは。

ト乘り地になる。

五郎　ハッ、主人錦戸太郎どの、御舍弟伊達の次郎どのと心を合せ、和泉どのと引別れ、高館にて合戰の、中に病氣の秀衡は、判官どのを預かりて、引籠りたる其うちに、病苦に惱み相果てしが、運の極めか和泉の三郎、伊達錦戸に切り立てられ、今ぞ一生懸命。

〽死物狂ひと働らけども。

判官どのに從ふ武士、大半は討たれたり。主人は多勢に下知をなし、半時計り戰ひしが、叶はじとや思ひけん、判官どのに生害勸め、その身も刀取り直し、腹十文字に掻き切つて、遂に最期の和泉の三郎、判官どのも御切腹。負ひ重なつて御首賜はり、主人の仰せに從うて、直さまこの地へ馳せ參じ、義經公の御首、御實驗に供へ奉りまする。

ト首桶出す。

〽語るうちにも諸大名、目と目を見合ひ默然たり、靜は身も世もあられぬ思ひ、泣くに泣かれず茫然と、いつそ泪は目の中に、つまるばかりの思ひなり、梶原は首桶引寄せ。

平三　オ、早速の注進、大儀々々。恩賞は追つて御沙汰あらん。先づ／＼休息しやれ。

五郎　ハッ。

〽ハッとばかりに岩上五郎、軍兵引連れ歸りける、景時はその隙に、首桶の蓋引明くれば、正眞の義經公の御首

なり、梶原も仰天顔、
平三　ムウ。こりや義經公の御首。
〽皆々呆れて殘念泪、素袍の袖は朝顔の、花に日のさす風情なり、嘆き沈みし靜御前、泣く〳〵側に立寄りて、首に手をかけ押動かし。
靜　さても〳〵淺ましい、このお姿は何事ぞ。斯う云ふ事とは思ひも依らず、奧州とやらんに尋ね行き、御無事なお顔見んものと、今の今まで樂しみに、思うて居た甲斐もなう、此やうなお首ばかりに逢ふとは、味氣ない世の有樣。コレ、申し、我が夫判官さま、たつた一言靜かと、仰しやる事は叶はぬか。こりやマアどうせう、なんとせうぞいなう。
〽首に取りつき縋りつき、絶え入るばかり嘆きける、梶原は靜を引退け。
平三　得て斯う云ふ時は、身替りの似せ首などのあるもの。首桶の蓋取るまでは、大方忠信かなんぞであらうと思ひの外、義經の首に違ひはない。よくも討つたなア。
〽流石不敵の景時も、呆れ果てゝぞ居たりける、賴朝公も御落淚。
賴朝　定むる運とは云ひながら、現在血を分けし弟は、道を背きし誤まりにて、果敢なき最期。憐れむべし兄の身でなくば、其まゝ打捨て、親しき因みを結ばんに、不便な最期を見る事ぢやなア。
〽御身を悔み在せしが、よく〳〵透かし御覽あり。
ハテ心得ぬこの首、口の内に物こそあれ。方々、取出し開き見よ。
〽仰せにハッと宇都宮、義經の笄にて、口押割り取出す一通、各々寄つて押開き、高々とこそ讀み上げたり。
宇都　謹んで申す、抑々義經苟くも、淸和の臺を出で、多田の滿仲の家を繼ぎしより、末期の繼父淸盛に隔てられ、邊土遠國を住家とし、土民百姓等に服せられ、然りといへども、當家の御運を開く勅宣の一つに選ばれ、或る時は野に伏し山に臥し、また或る時は漫々たる海上に風波の難を凌ぎ
ト此うち各々思ひ入れ。
敵徒の首を切り、鯨鯢の腮に曝し、三年三月に攻め靡け、それのみにあらず、大臣どの父子を生捕り、京鎌倉に渡し、源氏の會稽の恥を雪ぐと雖も、梶原が讒言に依つて、空しく莫大の勳功を默され、親しき兄弟を僅かの侍ひ一人に思し召し替へらるゝ事、只これ不運と存ずるなり、

將又前世の業因を感ずるに似たり、仰ぎ願はくは梶原父子が首を切つて、義經に手向けられなば、今生後世の恨みあるべからず、萬端筆紙に盡し難く、恐惶謹言、文治五年四月二十八日、進上、源の右兵衞の佐どの、義經……ホイ。

ト無念のこなし。

皆々　こりや皆讒者の。エ、。

ト各々無念のこなしにて、梶原を睨む。

〽殘念泪義經の、御最期惜しむばかりなり、頼朝御目をうるませ給ひ。

頼朝　人の善惡を云はんには、先づその身を顧みるの教へ。取上ぐべきにはあらねども、肉身の義經が、身の成る果こそ淺ましけれ。ヤア／＼宇都宮、神主方へ參り、この如く因緣の血汐に穢れたれば、かへりもうでの社參は取止め、これより直ぐに歸館の由。右の穢れあれば神職にも、この所へ來る事無用と、兩人參つて、この旨具さに告げ知らせよ。早く／＼。

宇都　ハツ、御諚でござりますれど、この場の仕儀を打捨てては。

頼朝　ハテ、この頼朝が所存あつて云ひ付ける事。違背なく早く參れ。

宇都　ハア、畏まつてござりまする。

飯原　イヤ、これは結構なる御諚。今のを聞かれては御座には居られまい。こりやお使ひを幸ひに、お出でなさるるが御勝手でござらう。ナウ、何れも。

皆々　左樣でござりまする。

宇都　オヽ、成る程、何れもの疑ひは尤も。併し、御邊達の疑ひを晴らすは、この彌三郎が胸にある。

飯原　面白い。しかと見るぞや。

宇都　見せるぞや。

頼朝　サア、早く參れ。

〽早く參れの御上意に、心殘して宇都宮、神主方へと急ぎ行く。後に梶原大口明き。

平三　ハヽヽヽ、血迷うて樣々の世迷言を書き散らし、この梶原を佞人ぢやの讒者ぢやのと、死しなの惡口。最前も云ふ如く、親兄の禮を忘れ、我が威に高ぶり道に背き、天の罪を蒙むつて、自滅したとも知らずして、てんがう書を誠にして、尤も顏する馬鹿武士もあるもの。兎角この梶原などは、脇平見ずに忠義を第一として、君の爲には身を塵芥よりも輕くし、危ふき時の前後を覆ひ、主た

る人を大切にするゆゑ、天の惠みと云ふもので、今この如く鎌倉の出頭第一。それを妬んでいろ〳〵と、蔑みする輩もあれど、そりや取るにも足らぬ木の葉武者。大功細瑾を顧みずの本文。なんの事があらう。この義經も、身共が爲す業を手本としたれば、此やうに手足の不自由はないものを。ムウ、ハヽヽヽ、なんと何れも、さうではござらぬか。

〽惡口雜言出るまゝに、おのが遺恨を持出して、人もなげに云ひ放す。

イヤ、思ひ出せし事こそあれ。この靜、義經の胤を懷胎せし由聞き及ぶ。臨月を待ち出生して、男子ならば敵の末、捻り殺してしまふが遠計。それまでは某が屋敷に押籠め置き、又この首は罪の次第を書き顯はし、由井ケ濱にて獄門に曝し、鳶烏の餌食とせん。我が君には、早く御歸館あつて然るべし。サア、靜立て。

〽引立て行かんとする所に。

ト幕の内より

小四 待つた、梶原どの。暫し〳〵。

〽幕絞らして、江間小四郎義時、烏帽子大紋爽かに、悠悠と出でければ、梶原見るより威猛高。

平三 誰れぢやと思へば江間の小四郞。この靜めを引立て歸るに、批判があるか。

小四 如何にもある。

平三 なんと。

小四 月明らかなれども風雨これを覆ふ。水淸けれども泥砂これを濁す。出頭を鼻にかけ、預けるとある我が君の、一言の御諚もなきに、靜を無理に引立て召さるは、君臣の禮を亂ず、小兒に同じき我まゝ無禮。諸大名を下に見る、出頭どのに似合はぬ儀と、止めたがなんと誤まりか。

平三 ヤア。主君のお詞も待たず、引立つれば無禮で

小四 ト梶原、息詰む。

ないか。出頭なれば君臣の、禮儀亂しても大事ないか。

平三 ムウ。

ト また息詰む。

小四 ム、ハ、ヽヽヽ、人も無氣なる振舞ひ。父時政に成り代り、申し上ぐべき仔細あり、梶原どの、靜を差置き、座に付き召され。

平三 すりや、この梶原に。

小四　申し上ぐるは御身が一件。マア、座に付きやれ。
平三　云ふ事あらばいつまでも。
　ト静かに突き退け坐る。
〽云ひ込められても馬の耳、風を溜めたる大紋の、袖打ちつがひ横柄顔、義時御座に立ち向ひ。
小四　父時政所労に依つて、愚臣名代としてお供にて、義経公御落命の様子、委細具さに承はる。是非もなき世の有様。親兄の禮を重んじ、誤まりなき御身にて、都を開き給ふといへども、何卒時節を見合せ、御兄弟の御仲御和睦なさんものと、思ひし甲斐も情なや、御落命は是非もなし。讒者の蔓る御運の末。この上は列座の面々、申し合せし通り、大将へのお願ひ。
皆々　畏まつてござりまする。
飯原　恐れながら、我が君の御諚意は四海に及ぶ。變ぜざるを鑑とし、天下を治め給ふゆゑ、大将にも義經公の御身に、誤まりなきを御存じなれども、是にもあれ非にもあれ、鎌倉どのゝ一言が、飜へされぬ御心を察し
津田　生害ありし義經公、京鎌倉と隔つれど
安達　君恩替らぬ御兄弟。
飯原　何卒和睦を取結ばんと、心を碎きし甲斐もなく、先ツこの如く御落命。この上の願ひには、これなる梶原平三を、我れ〲へ申し請け、義經公の供養に手向ける心底。この願ひ、お聞き届け下されなば
皆々　有り難う存じ奉りまする。
〽皆一同に言上す、御大将も詞なく、あぐませ給へば梶原平三。
平三　ハヽア、何事の願ひかと思へば、なんぢや、この梶原が貰ひたい。ハテ、ぱつとした儀を申し出た。三千世界が一手になり、某が上に掩ひ重なつても、びくともする梶原でない。及ばぬ事ぢや、ゆかぬ事ぢや。我が顔の赤いを知らず、金色の佛を笑ふと云ふは、偏執の深き猿智恵サ。ないもせぬ猿智恵で、要らざる事を願はうより、この梶原に追従して、御前の首尾を繕ろふが大乘の智恵と云ふもの。ハヽヽヽ。
〽嘲弄すれば堪えぬ若者、各々刀に手をかくれば、義時押へて。
小四　ヤア〲方々、我が君の御前なるぞ。扣へ召され。
　ト皆々静まる。
サア我が君、一旦申し出しては、再び變ぜぬ我れ〲が願ひ。梶原を下し置かれうや、御賢慮の程、承はりたう

存じ奉る。

〽押して申せば頼朝公。

頼朝　至つて高き樹は嵐に破られ、勝れて忠ある武士は人の妬みを請く。憂ふる心せう／＼たり。孔子にも嫉みを免かれ給はず。その昔石橋山の戰ひに打負け、土肥の杉山に籠り伏し、木の内に隱れし所に、梶原が情にて、頼朝が必死を免かる。その後數度の合戰にも、身を塵埃よりも輕んじ、國家を大切に思ふものゝ、我れその恩を無下になさんや。梶原が事に於ては、いつまでも叶はぬ事。罷り立て。某も歸館せん。

〽御座を立たんとし給ふを、義時寄つて御袖を扣へ。

小四　すりや、如何やうに申しても、お聞入れなきお心か。この上は一統に、梶原を申し請けん。ヤア、連判の人々、殘らず出てお願ひあれ。早く／＼。

皆々　ハア、。

早く／＼。

〽呼はれば、在鎌倉の大小名、烏帽子をつらね、大紋の袖、さつ／＼と打寄する、波か潮の湧くが如く、立出づるは、一條、檜垣、小笠原、茨木、笠木、島野時貞、淺利の與市、須藤八郎、後藤の三郎、加藤、齋藤、近藤、仁田の四郎、竹田の太郎、眞田、淨田、志田、小野田、狩野、宇佐美、川越太郎、武藤の七郎、小山の一黨、和田一黨、上總三浦の一門、都合八十五人、御座の方へ取廻し、一度に烏帽子を傾むけて、お願ひとこそ責めかけけり、梶原は仰天顔、大將少しも騷ぎ給はず。

大勢　我れ／＼のお願ひ。

〽この淨瑠璃にて、百人ばかり烏帽子大紋にて一時に出て、各々詰めかけ平伏する。

頼朝　オヽ、斯く一統に願ふ事、方々の存念も默しがたければ、死後とは云へど供養のしるし、義經が誤まりを赦しくれん間、その首を持ち歸り、後弔らうて方々が、義經への一つの恩報じ。また靜は梶原が願ひに任せ、平産までは預け置く。先づ諸大名の面々、その首を持ち歸り、罪を赦せし頼朝が、詞を述べて手向けとせよ。早く立て立て。

〽御諚に義時進み出て。

小四　科ある人の命こそ、お赦しあるを有り難しとも云ふべけれ、判官元より罪なければ、遮つて御赦免にも及ばず。梶原一人に八十五人を替へ、切腹仰せつけらるゝか、また景時を賜はるや、二つに一つの御諚。イザ、承はり

根本所

截部繪

たう存じまする。
〽申し切つてぞ居たりける、頼朝公もあぐみ給ひ。
頼朝　この願ひ、今日に限るべからず、重ねて評議もあらん事。先づ／＼退出仕つれ。
〽仰せと共に振り切つて、帷幕の内に入り給ふ、飯原左衛門急き立つて。
飯原　こは延引になる御諚。所詮御評議なきからは、御奉公もこれまで。サア、何れも、イザ立ち並んで切腹仕らん。
皆々　尤も。
〽尤もと八十五人、騒ぎ立つを義時押へて。
江馬　ヤア、麁忽なり方々、道理至極の身を以て、腹切らんとは何事ぞ。この首を賜はりしは我れ／＼が面目。梶原が身の上は、又ぞろ願ひを上げし上、お聞入れなき時は、その期に至つて生死一決。一先づこの場は引退き、重ねてお願ひ申し上げん。何れもお立ちなされ。
〽血氣の勇氣を押へる義時、梶原は空嘯き。
平三　歷々の諸大名、逃げ吠えもなるまい。なんと、梶原を貰うて見ぬか。身共たつた一人だが、訴人ばかり唸り寄つても、えゝ貰はぬは、どうぢや／＼。貰うて見ぬか。ム、、、ハ、、、。叶はぬ事、成らぬ事ぢや。某に大勢敵對ふは、鎌倉どのに敵對ふ同然。それとも貰うて見ぬかい。もう歸るか、貰うて見ぬか。大勢と一人には、替へられぬ文武の德。叶ふまい／＼。イザ歸るぞ。コリヤ兵太、靜めを早く引立てい。
〽引立てられて詮方も、泣き入る夫の御首を、一目見せてと立寄るを、哀れ情も荒けなく、引立させて梶原が、威勢を振ふ横柄顏、憎しと立寄る諸大名、制する義時義經の、御首携へ悠々と、立つか弓取り源も、暫しは濁る雲水の、流れ直ぐなる神垣や、立別れてぞ。
ト淨瑠璃にて諸大名、梶原目がけて寄らうとするを義時、隔てる。靜、泣き落し、梶原、睨む。各々よろしく、三重がゝりにて　幕

四段目　梶原館の場

役名――梶原平三景時。梶原平次景高。宇都宮彌三郎友綱。景高妻、榊葉。友綱妻、菊町。實平妻、卷絹。常胤妻、千草。景高一子、龜丸。友綱一子、

友若。醒ヶ井兵太。早見金吾。腰元、紅葉。同、若葉。常陸坊海存。

造り物、向う一面の金襖、總緣付き。二の手の西に安土的あり、幕の內より二の手の東の方に、龜丸、片肌を脫ぎかけ、白木綿にて腹を卷き、矢を射て居る。腰元、紅葉、若葉、見物して居る。側に卷絹、千草、打悄れ居る體にて、幕明く。

〽別れ行く、定めなき世を習ひとて、緣を去り荷の數々は、簞笥長持挾み箱、持ち込む座には的の稽古、梶原平三景時が、祕藏孫とて萬年の、齡は名付け龜丸とて、手取り早の矢繼早、當り喜ぶこなたには、思うた的の外れ矢にて、糸筋切れし琴箱や、これは貝桶甲斐も泪の黒棚三筋、姉と妹の鏡臺手箱、持ち行く下部が不審顏、分けてどうぢやと土肥の家、問はれもせぬが夜軍に、口舌か痴話か千葉どのゝ、緣の切れ目と口々に、運ぶ兩家の奴らさ、足早にこそ歸りける。表より使ひの聲高く、榊葉さまのお歸りと、聲諸ともに吹き送る絹の香の薰りをば、裲襠姿たをやかに、平次が妻の榊葉は、心に深き神詣で、腰元を連れ歸りける。

ト奴大勢、荷物を運ぶ事あつて入ると、榊葉、早苗を連れ出る。

若葉　奧樣、お歸り遊ばしてござりまするか。

紅葉　早いお歸りでござりました。

早苗　その筈、お急ぎぢやに依つて、お早いお歸りぢやわいなう。

若葉　お留主の內に卷絹さま、千草さまのお出でござりまする。

紅葉　先刻にから、お越しなされましたわいなア。

榊葉　これはお二人ながら、ようお越し遊ばしました。夫平次どの御在番より、首尾よう歸られますやうにと、氏神樣よりの歸り。いつにないお二人ながら、打揃うて、ようお出で遊ばしたなア。

卷絹　この程は父上樣にも、お目にかゝらぬゆゑ、お見舞ひに參りましたのでござりまする。

千草　私しとても同じ事、お見舞ひに參りましてござりまする。

榊葉　これはようこそお出で遊ばしました。御覽じませ、的矢の稽古。オヽ、龜丸、この間より、大分拳が固まりましたわいなう。

龜丸　母樣、今日は矢繼ぎが致しようございまする。
榊葉　その筈、精の出たのが見えまする。イヤ、卷絹さま、千草さま、お前方は、舅御平三さまを、お見舞ひにお出でなされたぢやないか。龜丸が射前を、なぜ賞めてやつて下さりませぬぞいなア。
卷絹　サイナア、先刻にから心で賞めて居りまする。達者な事でござりまする。
千草　イヤモウ、器用な子でござりまするなア。
榊葉　ソレ、伯母御樣方の御賞美、有り難う思や。
龜丸　伯母樣、御賞美のお詞、有り難うござりまする。
〽同じやうの挨拶は、氣を張り弓と知られける、榊葉廣間を見るよりも。
榊葉　ハテ、合點のゆかぬ。ありやお前方のお手道具。いつの間に持つて來た。お二人樣、樣子はどうでござりまする。
〽尋ねに二人は差俯向き、暫し詞もなかりしが、卷絹、やう〳〵顏を上げ。
卷絹　樣子御存じないゆゑに、御不審は御尤も。この譯は父樣お歸りなされたら、知れる事でござりまする。
千草　何かの事は、追ツつけ知れるでござりませう。
榊葉　合點のゆかぬお二人の詞の端。舅平三さまがお歸りあらば、樣子が知れると仰しやる上、お前方の手道具を、案内なく持ち運ばせし、お二人の殿御の心底。こりやどうでも、深い樣子がある事ぢやわいなア。
〽あゝ氣がゝりなと、とつおいつ、案じ侘びたる表の方。
呼び　殿樣のお歸り。
〽呼はる聲に嫁娘、孫も出迎ふ奥座敷、見る目いぶせき網乘り物、醒ケ井兵太に誘なはれ、靜々歸る梶原平三、心に深き邪智佞奸、のつさ〳〵と打通り、苦々しうも座に付けば、嫁や娘も不思議顏、さあらぬ體に手をつかへ。
榊葉　只今お歸りなされました。
龜丸　祖父樣、お歸りなされましたかえ。
〽挨拶なせど景時は、姉妹に目もかけず。
平三　コリヤ兵太、靜めが胎内には、義經が胤を懷胎なれば、大切の科人、奥座敷へ押籠め、嚴しく番を仕れ。キツと申し渡したぞ。早く〳〵。
兵太　ハア、。
〽早く〳〵に醒ケ井兵太、網乘り物に引添ひて、奥座敷へぞ入りにける。
卷絹　ヤア、。さては靜さまをあの如く、擒にしてお歸り

なされしは。
平三　鶴ケ岡にて某が、望んで預かるあの靜め。判官贔屓の大名めら、身が威勢に恐れ手出しはならず。大勢かゝつてやつさもつさ……聞えた。わいらは去られて戻つたのであらうがの。
〽星をさゝれて姉妹は、恨めし氣につツと寄り。
巻絹　去られたかとは聞えませぬ。夫土肥の次郎どの、佞人讒者の娘をば、女房に持つは穢らはしい。暇をやると、この一腰が暇の印。
千草　わたしとても同じ事、千葉之助どの、一門一家の顔よごしと、飽かぬ仲をば去られたは、父さん、お前のお心柄。
巻絹　元のやうに女夫にして
巻千　下さりませいなア。
〽右と左に戀と義理、一方ならぬ二思ひ、心を察して榊葉も、胸にせまりし貰ひ泣き、梶原は空吹く風、煙草の烟りすつぱ〳〵。
平三　ハテ、役にも立たぬ世迷言。義經はうぬが罪、天罰と云ふものでくたばつたを、身が讒言などとは片腹痛い、差別も知らぬ青蠅蟲の、大名めらがぶう〳〵と姦ましい。此方から緣切らうと思ひしに、去つたとは、重疊々々。
ト巻絹、千草、泣く。
何吠ゆる。見苦しい。吠え止めぬか。
ト同じく泣く。
まだ吠ゆるか。こな大馬鹿めが。
〽高聲詞の愴て口、とから應へもなき所へ、何所よりか乘り物を、ひた〳〵と舁き据ゑれば、早見の金吾郎謹しんで。
金吾　宇都宮彌三郎さまが、御内意のお使ひとて、この乘り物舁き据ゑ、歸られましてござりまする。
平三　ムウ、これも大方推量した。娘菊町めを離緣したる乘り物ならん。ヤア、娘菊町、苦しうない。早く出い。
〽呼はる聲に乘り物より。
友若　宇都宮よりの使ひ。それへ參つて申し上げう。
〽中より出づるは友綱が一子友若、明けて十二の上下姿、大小さすが武士の、奥と呼ばるゝ菊町も、夫に離れて悄悄と、翼離れし風情にて、我が子に付いて立出づれば、榊葉は又惘り。
榊葉　ヤア、菊町どの、お前も去られてお歸りか。
巻千　姉樣、お前も去られさしやんしたかえ。

〽問ふに答へず涙川、袖を浸するばかりなり、榊葉は猶も氣を苛ち。

榊葉　コレ、友若どの、お使ひの御口上を、早う聞かして下されいよ。

友若　伯母様、使ひの口上は、直々祖父様へ申せとの事でござりまする。

榊葉　ムウ、そんなら早う。イザこれへ。

〽さア／＼早うと友若を、景時が側に伴へば、行儀正しく手をつかへ。

友若　申し、祖父様、父様の仰しやるには、大悪人の梶原が娘なれば、母様に暇をやる。われも侫人の孫ぢやと、悪名が付いた。この悪名を抜かねば、屋敷へ歸るなと仰しやつた。母様を元の女夫にして、わしが悪名も抜けるやうにして下され。エヽ、思へば悪人でござるなう。

〽子心にも、憎しと思ふ一途の雑言、側に聞き居る誰れ誰れも、なんと詞のなき入るばかり、龜丸は分ちなく、祖父の肩持ち。

龜丸　コレ友若、先刻にから聞いて居れば、大切の祖父様を、悪人ぢやの侫人ぢやのと、なんで悪名付けるのぢや祖父様の事を悪う云やると、わしが聞かぬぞや。

友若　こりや面白い。侍ひはひけを取らぬ者。聞かぬと云うてなんとする。

龜丸　さう云やると、堪忍せぬぞや。

友若　わしが堪忍ならぬぞ。

〽互ひに爭ふ兒ざくら、二人が母は春雨の、泪ながらに押し隔て。

榊葉　二人ともに、マア待つた。

菊町　龜丸どの、堪忍して下され。友若が皆悪い。如何に父御の使ひぢやとて、云ひ過すとこの母が胸の苦しさ。もう何にも云うてたもんなや。

友若　でも、父様の云ひ付けぢやもの。

菊町　まだ／＼詞を返しやるか。マア、ヂッと静まつて居やらぞや。榊葉さま、必らず氣にかけて下さりますなえ。

榊葉　イエ／＼、龜丸が悪うござりまする。何もかも様子を聞く上は、お前方のお心根を察しやり、わたしが胸も張裂く思ひ。子心は正直、友若どのの悪口は、世上の取沙汰と同じ事。

菊町　そんならお前のお心も。

　トこなしあつて

榊葉　みんなと御一緒に。

ト顏で知らす。

卷千　合點でございまする。

ト三人頷づく。

〽互ひに目配せ頷き合ひ、梶原が側近く、四人一緒に詰め寄つて。

榊葉　申し、舅御樣、段々樣子を聞けば聞く程、淺ましいお心根。いま友若の口上、御返答はなんとなされます。

菊町　今日鶴ケ岡にて、義經公の讒言を惱み、八十五人の大小名申し合せ、お前の命を貰ひ受けうとした噂。

卷絹　わたしが夫土肥の次郎も、一分立たぬと御立腹。

千草　夫千葉之助もその通り。

菊町　夫々が心の同じ離別の印。せめて云ひ開きの筋あるならば

榊葉　お命の助かるやうにして下さりませ。舅御樣。

卷千　コレ、申し父樣。

〽こりやマアなんとなる事と、かつぱと伏して泣き沈む、梶原は見向きもせず。

平三　ハヽヽ、小賢しき諫言立て。孫めがませた使者の口上、用ゆるに足らず。コリヤ、よつく聞け。賴朝を助けし、命の親のこの梶原。八十五人や百人の、へろ〳〵武士とは釣合はぬ。云ひ譯も糸瓜も要らぬ。去られたを吠えずとも、三人ともに一生やもめで居らう。ヤア、金吾、奧座敷に押籠めある、靜めを猶以て、嚴しく守れ。最前からの長談議に、ホッと退屈。好い日なみの夕日影、暮れかゝりの鞠も樂しみ。金吾も參れ。

金吾　先づお入りあられませう。

〽ちつとも屈せぬ大丈夫、睨み廻して跳ね袴、奧庭さして入りにける。後には四人が顏見合せ、暫し泪にくれけるが、菊町は恨めし氣に。

菊町　エヽ、聞えませぬ父樣、娘や孫が身の難儀を振り捨つる、エヽ、胴慾なお心ぢやなア。

卷絹　あんまり氣強い、聞えませぬわいなア。

榊葉　オヽ、御道理。わたしとても同じ思ひ。如何やうに仰しやつても、お諫め申さにやなりませぬ。ハテ、お聞き屆けない時は

三人　刺し違へて死ぬばかり。

榊葉　オヽ、わたしが心も同じ事。それまでは、マア奧へ。

三人　然らば後程。

菊町　友若。

千草　龜丸。

兩人　奥へおぢや。
〽口は立派に目は泪、奥の一間へ入る後に、榊葉は獨り言。
榊葉　思ひも依らぬ今日の仕儀。こりやマア、どう納まる事であらうぞ。
〽案じ侘びたる折からに、都より息せきと、立歸る平次景高、斯くと聞くより追取り刀、座敷へずつと駈け通れば、榊葉嬉しく。
ヤア、平次さまお歸りか。マア、お健な顏を見て
平次　マア挨拶は後で聞かう。親人に怪我過ちはなかりしか。
榊葉　イヤ〳〵、恙なうお渡り遊ばす。
平次　それ聞いて先づ安堵。都在番より歸るさ、道すがら噂を聞けば、今日頼朝公、鶴ケ岡へ御參詣ありしところ、義經公衣川にて御落命、首實檢の時、含み状の趣きにて、父平三が讒言を憎み立て、諸大名一致して、親人を貰ひ受けしと、聞くより直ぐに馳せ歸つた。
榊葉　サア、その事について、姉御の琴絹さま、妹御の菊町さま、千草さまも飽かぬ離別。
平次　すりや、土肥次郎、千葉之助、其方の兄の友綱まで。
榊葉　アイ、氣の毒に氣の毒を重ねかけた縁者仲。飽かぬ別れをなさるゝも、平三さまのお心柄。コレ申し、どうぞマア御意見を。
平次　默り居らう。馬鹿々々しい。なんの意見。去つておこしたたわけども、今の間に吠え面。コリヤ、女房、もうその外に替つた事はないか。どうぢや。
榊葉　ハイ、その外に替つた事は、オヽ、それ〳〵、義經さまのお胤を、懷胎なされた靜さまは、景時さまがお預かりなされ、座敷の奥へ押籠めとあつて。
平次　ヤア〳〵、なんぢや。義經の胤を懷胎せし靜めを、連れ歸られしとな。……ムウ、けうとい〳〵。これを斯うして、此奴を斯うして。これを斯う〳〵すれば、大方日頃の願ひの筋は。さうぢや。
〽さうぢや〳〵と打頷き、心に呑み込む胸算用、奥を差して入らんとす、袖を扣へて。
榊葉　イヤ申し、お前獨り合點して……こりやマア、何所へお出で遊ばす。
平次　何所へ行かうが彼所へ行かうが、知つた事ではない放せ。
〽振り切る袖に又取りつき。

榊葉　コレ申し、仰々しい。なんの事でござりまする。兄御源太さまは御勘當。殘つてござるは女中ばつかり、お前一人を力にして、待つてござるその中へ、其やうに取逆上して、無相な事でもあつた時は、まだその上に憎しみを。

平次　ヤア默れ、惡であらうが邪であらうが、親仁の上越すこの景高。重虎公の言傳てもあり、何やかや氣が苛つ。放せ。

〽放せ〳〵と氣を苛つ、取次の口より早見の金吾、つかつかと立出でて。

金吾　ハツ、平次さまへ申し上げまする。お殿樣御歸國の樣子、大殿樣お聞きなされ、お休息なされなば、早くおこしなされとの御意でござりまする。

平次　ムウ。さうであらう。して、靜めはなんとした。

金吾　ハツ、奥座敷へ打込み、嚴しく番を致し居りまする。

平次　すりや座敷牢へ。ムウ、よし〳〵。ドレ行かう……コリヤ金吾、大事の用を云ひつけるが、何事でも違背すまいな。

金吾　ハツ、改まつたるお詞、何しに違背仕りませう。

平次　さうあらう。申しつける大事と云ふは。

ト思ひ入れあつて

コリヤ、耳寄越せ。

金吾　ハツ。

ト耳に口寄せ囁く。

平次　ナ……合點か。

金吾　ハツ、畏まつてござります。

平次　早う行け。

金吾　ハツ。

〽樣子は何か白砂を、蹴立てゝ早見は出でゝ行く。

平次　ムウ、これで樣子が大方知れう。コリヤ榊葉、何を思案顏して居る。サア、奥へ來い〳〵。

榊葉　なんぢややらソワ〳〵と、そしてマアお氣の惡い。わたしへ隱して囁き聲、金吾へ仰せつけられましたは、何の御用で。

平次　ヤア、小賢しい。なんの用事であらうと儘よ。小言も云はず奥へうせう。但し否か。

榊葉　なんの否でござりませう。

平次　否でなくば、早くうせう。

榊葉　ハイ。

平次　うぢ〳〵せずと、うせうてや。

〽叱り散らして、のつさ／＼、心を奥へ榊葉も、伴ひてこそ入りにける。一間の内より心もそゞろ、卷絹千草銘銘に、夫の魂ひ甲斐々々しく、脇挾み伴ひ出て。

卷絹　なんと妹、あの父さんのお心では、靜さまのお身の上、心元ない。斯うなるからは夫への面晴れに、靜さまを盜み出さうぢやあるまいか。

千草　それは好い御思案。シタガ、大勢の番人と聞けば、容易う奪はれまいぞえ。

卷絹　ハテ、夫の去り狀代りのこの一腰、命にかけて盜み出さう。

千草　わたしとても、夫の魂ひを持つて、奪ひ取らいで置かうか。

卷絹　オヽ、出かしやつた。サア／＼、用意々々。

〽心の帶も引締めて、氣を配つたる折こそあれ。

呼び　宇都宮彌三郎さまお入り。

〽呼はる聲を聞くよりも、ハッと二人は氣もせかれ、頷き囁き奧座敷、忍びてこそは入りにける、程なく入り來る宇都宮彌三郎友綱、首桶小脇に大小も、長袴踏みしだき、對客の間に打通る。襖押明け梶原平三、刀引ッ提げ出迎ふ。

平三　ヤア、昨日までは聟どの、今日は離緣の孫娘、兩人ともに慥かに受取る。この景時が緣を離れ、口の端の果報を落す、たわけ者の仲間の友綱。何用あつてお來やつた。

〽例の苦口耳にもかけず。

宇都　他人となつたる宇都宮、只今推參仕るは、北條和田畠山、千葉之助土肥次郎、斯く云ふ友綱を始め、諸大名の名代に、選み出されしこの友綱、申し入るべき仔細あり、御免あれ。

〽御免なれと云ひ捨てゝ、上座に通り悠々と、首桶直し座につけば、不承々々に景時も、下座にむんずと座しにける。

宇都　平三どの、御意得たきは、この一品、これこそは義經公の御首。この一通は含み狀。我れ／＼へ下されしかど、無實の讒言痛ましく、この許容には貴殿父子を申し受け、ずだ／＼に切り苛なむべしと、諸大名の儀一決。さりながら、これまでの讒言を改め、仁義の武士とならるゝならば、一命は安堵たるべし。先非を悔い詫び申さるゝ所存ならば、コレ、この首再び蘇生あるやうに、生けて返し召されと、諸大名一統の望み。なんとこの首、

生けて返さるゝ所存なりや。但し又、讒者の爲に本意なくも、死首でしまふ心か、この首貴殿へ進上いたし、善惡理非の返答を、聞き切るべきの總名代、とくと思慮して生死の返答、分明に承らう。

〽生死の返答申さるべしと、苦り切つてぞ申しける、平三首を打守り。

平三　この梶原に拒みし天命、くたばつてしまつても、高慢の鼻高々と、忌々しいしやツ面。彌三郎、このならず首を景時に、蘇生して返せとか。

宇都　如何にも。

平三　ムウ。

〽暫し思案して。

ハ、、、智惠なしどもが五臟を絞り、思ひ附いたるこの難題、何は兎もあれ進上のこのならず首、慥かに落手仕る。

〽含み状を懷中し、首桶取つて引寄せつゝ、盜しむる間に引明くる、襖の内より聲をかけ。

平次　親人、先づ〳〵お待ちなされ。その首落手なさるゝは、生けて返す御所存か。

平三　馬鹿な事。首ばかりのこの態。どうして生けて返さるべき。

〽平次はさこそと打頷き。

平次　その生返らぬ生首を、生けて返せなんどとは、云ひやうが無さの惡態。彼の下世話に申す比丘尼に何とやらム、ハ、、、餘り馬鹿な儀でござる。

宇都　花實の榮枯、春夏秋冬、散れば咲き咲けば散る、人一盛り花一時、有情非情と分れども、盛衰生死は同じ理り。死んだ者が生きられまい道理でもないサ。

平次　コレサ友綱、學文自慢措いてたもれ。お身が妹は身が女房、身が妹はお身が女房、引ツ張り合うた縁者と縁者。女房子まで去つて歸すは、八十餘人の大名が怖さに煽て上げられての臆病。こりやモウ子供同然。

宇都　默れ景高、思慮深き畠山、北條なんぞ心を籠め、送られしこの首。望んで參つたこの使ひ。なんとして合點がゆくまい。

平次　ヤア、洒落くさう云ひ廻しても、臆病風に吹き立てられ、後先揃はぬねだり口上。死んだ者が生返る、道理があらば云へ聞かう。

宇都　そりや此方から指圖はせぬ。生かさるゝか生かされぬか、平三どのに問うて聞け。

平次　イヤ、親人も此やうな、返事の思案は出來憎い。
宇都　オヽ、人を讒し、人を損ふ邪まの思案は出やうが、人を生かすこの思案、大抵の事では出まい。
平次　ヤア、邪まの思案とは何が邪ま。サア、それ聞かう。
宇都　オヽ、その譯は父の平三どのに聞くが相應。
平次　ヤア、舌長な雜言。臆病者のいらざる長居。返事は後から云つてやる。脛の立つうち早く歸れ。
宇都　蟹同然に横に歩む、脛骨とは違つてある。氣遣ひせずと、すツ込んで居れ。
平次　何が邪ま。
宇都　何が臆病。
兩人　サア云へ、聞かう。
〽その譯聞かんと居直つて、双方刀に手をかくる。鍔音刃音烈しくも、聞かぬ〳〵免さぬと、詞凛々しく友若龜丸、小腕と小腕の太刀さばき、切り合ひ出づる庭の面、砂を蹴立てゝ菊町榊葉、こりやマアどうして短氣ぞと、留めても留まらぬ腕白盛り。
菊榊　こりやマア何から起つた事ぢや。マア〳〵、靜まりやいなう。
龜丸　イヤ〳〵、彼奴切つてしまふ、放さつしやれ。
友若　オヽ、おれも彼奴切つてしまふ。放さつしやれ〳〵。
平次　ヤイ〳〵、倅、待ち居らう。幼なくても武士の魂ひ、抜き放したその刀、譯が立たねば納まらぬ。どう云ふ譯で抜き放した。サア、その譯を早う云へ。
龜丸　アイ、友若が云ひますには、こなたの祖父平三さまは、御主人の耳を舐り、人を損ふげぢ〳〵侍ひ。父様へさう云うて、意見してもらはつしやれ。さうでなければ諸大名が、祖父様を貰ひ請け、嬲り殺しにすると云ふ。わしや腹が立ちまするわいなう〳〵。
榊葉　サア、そりや腹が立つ筈ぢや。友若どのゝ爲にも祖父様。なんのそんな事云やらう。こりや、云ひ損ひであらうナウ友若。
友若　イヽヤ、云ひました。若君様のお禮日に、諸大名の子供衆と出會うても、げぢ〳〵の血筋ぢや、耳舐りの孫ぢやのと、密々云うて寄りつかぬ。それが口惜しうござるに依つて、祖父様を平次さまに、意見さつしやれと申しました。
菊町　こりや其方が尤もぢや。子供中のつき合ひにも、選り嫌はるゝは父様のお心から。コレ、平次さま、兄様、なせ御意見なされませぬ。大兄様の源太さまは、諫言耳

に逆らふとやら、父樣の御勘當。その餘は女姉妹。お前が御意見なされいで、誰れがお諫め申しませうぞ。
平次　默れ妹。親人に何を意見。げぢ〳〵と云はれうが、讒言と云はれうが、御主人のお氣に入り、出頭するが武士の本意ならば、讒言して、これ程出頭して見やれ。それを嫉むは、へんねし根性で育つた魂ひ。なんとしてなんとして。ヤイ友若、忰が前へちよ〳〵となつて、只今のは誤まり、堪忍して下さりませいと、手を突いて詫びをしをらう。
友若　否ぢや〳〵、命が惜しか其方から、手を突いて詫び言せい。
菊町　オヽ、よう云やつた。コレ、此方の子が龜丸に、敵ふまいと思うてか。慮外ながら宇都宮友綱が一子友若、人切る術は知つて居るぞや。夫も爰にござるのに、人も無げな云ひやう。
宇都　イヤ、夫とは誰れが事。離別したれば、夫と呼ばる覺えはない。さりながら、忰は忰、媚び諂らうて祿を喰む、生くら者の魂ひでは、及ばぬ〳〵。
榊葉　イヤ申し、兄樣、そんならこの子が友若に、敵ふまいと思うてか。

宇都　云はれざる怪我せうより、友若に手を突いて、祖父樣意見して、根性直させませうと三拜せよ。
龜丸　否ぢや〳〵。大勢に煽てられ、使ひに來た臆病者にあやまる事はならん〳〵。
友若　アレ、あのやうに奧でも云ふゆゑ、堪忍がなりませぬ。
菊町　オヽ、腹の立つは道理ぢやけれど、相手にするも人に依る。追從云うても讒言しても、出頭するが本望ぢやと、兄樣の腐つた根性。その血脈を受けた龜丸なりや、侍ひでも杭でもない。相手にならずと堪忍しや。
榊葉　イヤ、菊町さん、詞が過ぎる。讒言ぢや、げぢ〳〵ぢやのと、祖父樣誹らばとて、この子が武士でも杭でもないか、侍ひらしい魂ひを、御所望ならばお目にかけう。必らず泣き顏さんすなえ。
菊町　イヤ、聞き憎い榊葉さん。其方が武士を見せる間に、友若が兩の手は、働らかずに居やうかいの。ひよんな事云ひ過し、後で後悔さしやんすなえ。コレ、そんな事云はうより、平三さまに御意見申し、詫び言をさしますが、忠孝の武士と云ふもの。
榊葉　その御意見をこな樣に、敎へられやうがない。こな

様こそは娘の役、御意見申して讒言の、罪を詫びたがよいわいの。

菊町　イヤ〳〵、なんぼう娘でも、他人に添へば他人の菊町、兄様に添ふこな様こそ、御意見申す役目。父様の氣が直らねば、龜丸が身の上ぢやぞえ。

榊葉　オヽ、身の上が怖いとて、御承引もないものを、無理に御意見申されうか。命に代へても申し入れ、御意見をなさんせんと、友若が身の上ぢやぞえ。

菊町　そんなら見事友若が、身の上になるやうに、龜丸が育てゝあるか。いらざる過言云はうより、御意見申すが勝ちであらう。

榊葉　そりや皆此方から云ふ事。龜丸が身の上に、なるかならぬかお育て柄を、氣の毒ながら見ますぞえ。

菊町　オヽ、見るぞや。

ヘ互ひに挑む母と母、子ゆゑの慾目纐仲の、義理も禮儀もなかりける。

平次　ヤア、見苦しい詞爭ひ。女房妹、扣へ居れ。

平三　イヤ〳〵、叱るな。嫁や娘が爭ひは、育て柄を自慢する、武士一同の嗜み。十一や十二の孫めらが、義を勵む力味だて。流石は景時が孫ども。エヽ、小氣味のよい奴等だわい。

宇都　梶原どの、御返答あまりの延引。首の善惡承らう。

平三　オヽサ、子供喧嘩に首の生死、工風いたしたこの返答。併し、孫どもが抜き放した、切尖の勝負をさせ、その上にてこの首を、生かして景時あやまるとも、髑髏首にて景時が、手道具に使ふとも、孫どもが勝負次第。生ける殺すの返答いたさう。

宇都　すりや、友若と龜丸が、切尖の勝負次第。

榊菊　エヽ、そんなら二人とも。

平三　育て柄を早く見せい。

二人　エヽ。

ヘそつと二人が顔見合せ、抜きさしならぬ刀の切端。

平三　親であらうが孫であらうが、意地を立て抜く身共が氣性。最前から二人が、聞き憎い雜言。其まゝには引かれまい。但し友若が怖うなつたか。龜丸が怖いか。

友若　イヤ、龜丸怖うない。

龜丸　友若も怖うない。祖父様を誹つた代り

友若　父様を臆病者と蔑すんだ代り

二人　見事に切つて見せませう。

平三　オヽ、出かす〳〵。身が見る前で勝負せい。

平次　親人の返答定め、曉れの勝負ぢや、用意せい。
宇都　女房を離縁すれば赤の他人。身内より猶曉れの勝負、必らず未練な働らきすな。
友若　アイ、合點でござりまする。母さん、お怪我があれば悪い。其方へ寄つてござりませ。
平次　ヤア、見苦しい。詞には似合はぬうろ／＼眼。親人の思案を定むる大事の勝負、邪魔になる。これへ來て見物しをらう。目先にうろ／＼うろついて、氣後れすれば引けを取るがや。
菊町　ほんにさうぢや。父さんも返事を定める、大事の大事の曉れ勝負。
榊葉　コレ、祖父樣に褒めらるゝやう、龜丸、首尾よう手柄しや。
菊町　友若、手柄してたもや。
菊榊　母も側から見物する。
〽思ひ切つたる風情にて、それ／＼が右左、どうと据ゑたる恩愛の、心に心隔れたる、二人の子供は淑かに、袴の股立ち小凛々しく、提げ緒の襷手早くも、後鉢卷ちつと締め、立派に向ふ互ひの身構へ。
龜丸　友若、祖父樣をげぢ／＼ぢやの、讒言ぢやのと云うたゆゑ、堪忍ならず討つて捨てる。
友若　オヽ、げぢ／＼の小虫の身で、父樣を臆病者と、惡口云ふゆゑ堪忍ならぬ。打つて捨てる。覺悟しや。
二人　ヤア。
〽互ひの掛け聲立ち向ふ、刃の光り目に遮ぎり、母はひやいさ危ふさに、見まいとする程目にかゝり、あるにもあられず悲しさに、心に信ずる神佛、共に力を。
ト三重になり、樣々思ひ入れあり
〽附け合うて、斬るに甲斐もなさけなや、附け込む刀、兩方が、受けはづしたる肩先へ、はつと血走る子供より、見てゐる母が氣は半亂、抱き留めうにも鋭どなる、景時が眼ざし、友綱平次は見向きもやらず、二人の母は共に恥ぢ、泣きたさぢつとくひしばり、澁面つくるいぢらしさ、手負ひの子供は起き上がり、また切り結ぶ劍の光、菊町榊葉ハア／＼と、胸にこたゆる大刀筋の、亂れて高股小鬢先、切りつ切られつ修羅道の、苦患も斯くやと兩親は、五臟を絞る血の涙、心地よげに梶原は、邪魔の笑顔につたにつた、二人の子供は悪びれず、一足引かず切り合ふ手も、互ひに亂るゝ數ヶ所の疵、たぢ／＼／＼と双方へ、撞と倒れて苦しむ有樣、堪え兼ねて兩親は、思はず驅け

寄り抱き起し。

二人　コレ、氣を慥かに持つてたも。疵は淺い。氣を慥かに持つてたもいなう。

菊町　友若やい。

榊葉　龜丸いなう。

〽抱きしめ呼べば、氣性は強く。

友若　龜丸逃げな。

龜丸　友若逃げな。

二人　サア、勝負せう。

〽勝負々々と踏みしめて、立ち上がれどもよろ〳〵〳〵、母は堪え兼ね押隔て。

榊菊　コレ、もう勝負は見えてある。其方が勝ちぢや〳〵勝ちぢや。

平三　イヤ〳〵、勝負は附かぬ。人間の數にも入らぬ、虫同然のちつぺいめら。生殺しで置くは殺生。とてもの事に勝負をつけい。

菊町　エヽ、あんまりぢや父樣。年端もゆかぬ子供等が、切り合ひの元はと云へば、お前が讒言、佞人と世の譏りから、斯う云ふ思ひ。この子供等が氣に耻ぢて、改める心はないか。

榊葉　オヽ、よう云うて下さんした。佞人讒者と云はするが、口惜しい無念なと、心に思ひ詰めたゆゑ、身をば惜しまぬ志し、不便なと思し召し、心を改め兄樣へ、非を改めると御返事を、仰しやつて下さりませ。

平三　ヤア、面倒な世迷言。切り結んだその刀、此まゝで置かれうか。梶原が孫でないか。卑怯者。立ち上がつて勝負せい〳〵。

〽怒りの大聲耳に入り、むつくと起きて刀を杖。

龜丸　おりや隱れやせぬ、爰に居る。母樣どこにぢや。友若が見えぬ程に、爰へ連れて來て下され。

榊葉　ヤア、そんなら二人とも

菊町　もう目が見えぬかいのう。

〽見えぬかいのと云ひ兼ぬる、親の心を子は知らで、修羅の巷の目くら道、見るに堪え兼ね抱き留め。

榊葉　コレイナア、コレ、氣を揉みやんな。あつちは負けた。其方が勝ちぢや……勝ちぢやわいなう〳〵。

龜丸　イヤ〳〵、おりや佞人ぢやの、げぢ〳〵ぢやのと、云ひ居つたが口惜しい。腹が立つ。わしや友若を切らねば死なぬ。

榊葉　サア〳〵、もうあつちは切られた。わが身は強い。

勝ちぢや程に、もう堪忍しや〳〵。
友若　母さん、なんぼう術なうても、おりや佞人ぢやの讒者のと、選り嫌はるゝが口惜しい。龜丸を殺すまでは、なんぼうでも死なぬ〳〵。
菊町　オヽ、コレ、死んでたもんなや。勝負は其方が勝ちぢや程に、其やうに氣を揉まずと、チッとして居てたもいなう。
榊葉　コレ、氣を靜めてたもいなう。
友龜　イヤ〳〵、おりや相手を仕留めぬが、口惜しい〳〵。
榊菊　道理ぢや〳〵。
友龜　無念たわいなう。
榊菊　尤もぢや。
友龜　口惜しい。
榊菊　道理ぢや。
友龜　口惜しい〳〵〳〵。
榊菊　道理ぢや〳〵道理ぢやわいなう。
〽道理々々と振り亂す、岩木の露の身をもだへ、無念無念と武士の、子は子なりけり痛ましくも、刀の柄を握り詰め、十五に足らで義に捨つる、あたら命ぞ健氣なる、ハッと倒れて母と母、死骸に取りつき縋り泣き。

ト大泣き。
榊葉　ヤレ、龜丸、出かしたなア。健氣な最期と云ひながら、よく〳〵無念にあつたかして、コレ、この刀を此やうに、握り詰めて居るわいなう。
菊町　コレ、友若も同じ事。刀の柄を握り詰め、口惜しさうな死顏。深手に弱る斷末魔、我が目の見えぬは氣も附かず、龜丸逃げな隱れなと、死ぬると知らぬいぢらしさ。
榊葉　今際の際にも父上や、母に未練の詞もなう、口惜しい口惜しいと云ひ死に、死んだが可愛い。
菊町　戰場の討死にも、勝つた健氣な二人の子供。出かし居つたと只一言、褒めてやつて下さんせ。コレ、友綱どの。
榊葉　平次どの。
兩人　コレ、褒めてやつて下さんせいなア。
〽褒めてやつてと抱き上げ、見せる死顏恩愛に、見やる瞼は保ち兼ね、顏を背けし一雫、千萬無量の涙なり、嘆きに屈せず梶原平三、くわん〳〵と打眺め。
平三　ハヽア、蛇は寸にしてその氣を顯はす。梶原が孫ほどあつて、小氣味のよい死樣。ハレ、うい奴等ぢやなア。

宇都　景時どの、龜丸と友若が勝負は、御覽なさるゝ通り。この首の生死の返答、分明に承はらう。

平三　小ぴつちよどもが二人とも、勝負も分らずくたばりしゆゑ、返答をし切れとな。ムウ。

宇都　但しその首生かすべき、御思案がまだ出來ぬか。

平三　この首の生かせやう、なんの工風するにや及ばぬ。聞きたくば云つて聞かさう。

平次　ムウ、すりやその首を生かすべき、御返答がござるかな。

平三　畠山北條なんどが、無い智惠を振る意地難題、この首を生かせと云ふは、我が預かり歸りし靜、義經の胤を懷胎、これを痛はり安產させ。賴朝公の御前を執成し、義經の家督を梶原に、取立てよと云ふこの難題。死首の生かせやう、なんと斯うであらうがや。

ト友綱はつと座を改め。

宇都　ハ、ア、驚ろき入つたる御賢慮。伊達錦戸が野心の爲、不意に臨んで義經公、御切腹なされしは、天命とは申しながら、全く貴殿の讒言ゆゑ。罪なき罪に落命し給ふ。サア爰にこそ仔細あらん。その首の生死に依つて、貴殿の本意を探らん爲、望んで參りし宇都宮。その氣を察して靜御前、安產のさせんとは、梶原どのゝ御本心、深き御賢慮あるべけれ。イザ、お明かし下されよ。

ト威義を正して述べければ、梶原ふつと吹き出し。

平三　宇都宮、小伜がくたばつて、不便や氣が狂うたさうな。孕んで居る靜めを、助けうと云ふではない。畠山北條などが、智惠自慢が胸惡さ。斯うしてやつたりや勝手がよいが、死首を生かせとは、斯う云ふ事かと云つたばかり。梶原がそれ程まで疑はしくば、落ちつく返事してくれうわサ。

ト行かうとする。

平次　親人待つた。落ちつく返事してくれうと、奥へお出でなさるゝは、靜を殺してしまふ氣か。左様ならば親人の、手を下ろさるゝまでもなく、この平次が靜がどん腹、串刺しにして參らうが、それではいよ〱讒者となつて、義經どのゝ根を斷つ氣ぢやの。

平三　おんでもない事。忠義を存じて勸めし逆櫓。諸軍勢のその中で、恥を與へし面憎さ。根を斷つて葉を枯らすが、梶原が本心。

宇都　すりや、死首の生けやうを、存じながら助けぬ氣か。

平三　云ふにや及ぶ。

平次　コレ親人、平次が捕まへる惡黨は、こなたの目には何と見える。

平三　源太めが見立て、勘當した裏を掻き、おのれが我まゝ惡黨は、この梶原を意見の種、嗜なまさうとの作り惡。

平次　すりや、年月の惡黨は、意見の種と知りながら、讒言の舌の根を、洗ひ淸むる所存はないか。

平三　ヤア、事麁々しき意見立て。おのれが臍の固まるやうに、澁い返事をしてくれう。

ヘずんと立つて入らんとす、透かさず友綱立ち塞がり。

宇都　ヤア、どこへ〱。靜御前に凶事なさば、安閑と見て居やうか。返事に及ばず手短かに、友[illegible]見せぬ。

ヘ刀の柄に手をかけて、行かば切らんと立ち塞がる、平次景高ずつと寄り、父を引据ゑどつかと座し。

平次　エヽ、淺ましや情なや。賴朝公を助けられし、朽木隱れの忠に誇り、義經公の軍慮を嫉み、賴朝公へ讒言し、御仲不和となし奉る、後穢なき讒者の振舞ひ。アレあの如く友若や、年端も行かぬ龜丸まで、人の誹りを口惜しがり、命を捨てしに恥ぢもせず、義經の胤を絶やさんとは、この上もなき極惡人。後世末世の恥を思ひ、心を改め靜御前を、安産させて義經公の、御胤を守り育て。罪を謝する心はないか。八十五人の大小名、生死を定めし手詰めの場所。命惜しむにあらねども、後人讒者と末世まで、云はれん事の口惜しさ。平次が意見の仕始め仕納め。聞入れてたべ、コレ親人。

ヘ聞入れてたべ親人と、打つて變へたる景高は、忠節至き武士魂ひ、平三クワッと目を剝き出し。

平三　ヤア、云はれざる忠節振り。一旦思ひ立つたる存念、立て通すが武士の意地。無益の舌の根動かすな。すさり居らう。

ヘすさり居らうと蹴り飛ばし、目がくる一間の內よりも、醒ケ井兵太轉び出で。

兵太　申し〱梶原さま、押籠んである靜めを、卷絹さま千種さまが、奪ひ取らうとなさるゝゆゑ、番人どもが支ゆるうち、どつと吹き來る一まくり、番人どもは吹き倒され、うろたへ廻るそのうちに、靜めもお二人も、行き方知れず候ふゆゑ、御注進申し上げまする。

平三　ヤア、うろたへ者。早く追ッ駈けい。

〽ハッと答へて醒ケ井は、表をさして駈り行く。

宇都　ヤア、嬉しや土肥次郎千葉之助、靜御前を迎ひの手筈。首尾よくお供させん爲、意見に事寄せ隙取つたり。腐りかゝつた命の切端。手を拱いて降參するか。

平次　但し讒者の名を取つて、末代耻辱を殘す氣か。

平次　ヤア、くど〳〵しき意見呼はり。靜めを奪ひ取られし不孝者。ぼッ駈けさせて面縛せん。

〽首桶携へ座を蹴立て、奥の一間へ入りにける。

宇都　ヤア、根深くも泌み込んだる、侫人讒者の極惡人。大小名に云ひ聞かせ、追ッつけ憂き目を見せてくれん。待つて居れ。

〽庭に飛び下り駈け行くを、菊町裾に縋りつき。

菊町　ア、コレ、待つて下さんせ。せめてこの子に暇乞ひ。わたしも未來で女夫ぢやと、たつた一言仰しやつて。

宇都　ヤア、ならぬ。梶原が心底、もしやと思ひ探りしに、底まで深き極惡人。見下げ果てたる侫人の、血筋を引いたる其方達親子。この世は愚か未來永々、夫婦親子の緣は切る。さらば。

〽さらばとばかり振り切つて、心強くも駈り行く、ハッと叫びし菊町が、嘆きは共に榊葉も。

榊葉　菊町さま、さぞ悲しからう。むがら仰しやる兄様も、親子一世の別れぢやもの、悲しうなうてなんとせう。錚い詞のお別れが、おいとしうごさんすわいなア。

〽いとし可愛といや増す涙、表の方騒がしく、平次が近習早見の金吾、慌しくも駈け來り。

金吾　御主人の仰せに任せ、千葉之助畠山、土肥北條その外の、館を窺ひしところ、友綱どのゝ返答次第、このお館へ攻め寄せんと、八十五人の大小名、用意の手當事急なり。御用意あつて然るべし。又も變りし事あらば、御注進申すべし。

〽云ひ捨てゝこそ引返す。

平次　オヽ、さもあらんと思ひしゆゑ、手詰めの意見も皆無駄事。可愛いは友若龜丸。頑是もない者けしかけて、討ち果させしも親人を、善心にしたいばつかり。兄弟夫婦が云ひ合せ、企みし事も水の泡。侫人讒者の胤なればナニなか〳〵に長らへん。榊葉も死ぬ、妹も死ぬ、この景高も死ぬわいやい。

菊町　アイ、科もない友若に、犬死させし云ひ譯。

榊葉　龜丸へも追ひついて、賽の河原で從弟同士。

菊町　切ッつはッつせぬやうに、コレ、榊葉さん。

榊葉　一緒に早ゥ追ひつきませう。

〽子供が刀取るより、早く咽喉に突き立て一抉り。

菊町　兄様。

榊葉　我が夫、お先へ行つて待ちまする。さぞ亀丸が待つて居やう。

菊町　友若もさぞ待たん。コレナウ母も、今行くぞや。

〽死骸の側ににじり寄り、刃を抜けば血汐の瀧、落入る我が子に縋りつき、膝に抱き上げ泣く露の、消えて行くこそ哀れなり。

平次　オヽ、潔よし〳〵。景高もイデ追ひつかん。

〽いで追ひつかんと双肌脱ぎ、刀逆手に左手の脇腹、がばと突き立て引き廻し、恨めしげに大音聲。

ヤア、親人、仁義の諸士に責めつけられ、見苦しき死をせんよりも、潔よく腹召され……と云ふも無駄事。勘當ありし源太どのに、悪を以て悪心を翻へさせて見せませうと、番うた詞の申し譯。平次景高がお先へ参る。

〽腹十文字に切りさばき、咽喉笛掻かんと取り直す。

平三　ヤア〳〵平次、止めを刺すな。云ひ聞かす仔細あり、暫し〳〵。

〽聲凛然と平三景時、烏帽子大紋首桶抱へ、立出づれば睨みつけ。

平次　エヽ、親ながら愛想の盡きた極悪人。いま死んで行くこの平次、聞く仔細何もない。

平三　オヽ、助からんと見しゆゑに、我が本心を先立ちし、嫁や娘へ言傳てする。梶原が實正は、この御首への申し譯、苦しくとも暫時堪えよ。

〽首桶上座に恭々しく、一つの箱を直し置き、禮儀正しく座を下り、烏帽子を疊に摺りつけ〳〵。

平三　先ッこの如く我が首を、義經公の御前に直し、我が實正を一紙に認め、含み状にて申し譯、仕らんと存ぜしに、過去の因縁遁がれずして、伊達錦戸が心變り、天命盡きさせ給ひしは。

〽さて是非もなや残念や。

抑々義經公を讒言せしは、平家西海の浪に沈み、源氏凱歌を上ぐるの時、我れは逆艪の爭ひより、諸軍の心を一致させんと、都に歸り旅館せしに、大納言重虎我れを招き、この度の合戦、源氏の勝鬨、然るに今度は頼朝へ、追討仰せつけられし、平家こそ討取るべきに、安徳君海に入らせ給ひし上、神寶失せさせ給ひしは、これ全く頼朝が武勇に誇り、義經に云ひ含め、斯く計らひしものな

るべし、惣じて今度の軍立て、君を敬ふ手段もなく。
〽軍慮の程こそ不審なれ。
その上汝が陣中に、都に上り窺ふを、頼朝が計らひにて、
位を窺ふ大望ならんと、以ての外の御怒り。云ひ譯あら
ば云へ聞かんと、思ひも設けぬ難題。察するところこれ
らの家來、大望あつて頼朝公の、御身の上を讒言なせ
しものならん。すは鎌倉の御大事と、心附くより思慮を
めぐらし、この度の合戰、全く頼朝が軍慮にあらず、君
を敬ふべき旨申し含めて候へども、義經武勇に高慢し、
かゝる疑ひ蒙むりしは、これ義經が科なりと、心に思は
ぬ讒言は、頼朝公を助けんと。
〽思ひ込んだる我が存念。
重虎が思ふ圖に當りしにや、汝が詞に僞はりなくば、諸
神諸佛を誓ひにかけ、誓紙を捧げ義經が、善惡を告げ知
らせよ。若し他言せば頼朝が身の上なるべし、よく〳〵
心得申すべしと、退引きならぬ手詰めの誓紙。ハヽ、畏
まり奉ると、恐ろしき神文して、重虎に渡せしは、頼朝
公の御身を庇ひ。
〽この身を捨てる覺悟とも、しろし召されぬ義經公、西
海の手柄に慢じ、酒色に溺れ剰さへ。

源氏重代の白旗紛失、ハア南無三方。斯くて義經堀川の
御所に住しまさば、重虎の怒り強く、遂には鎌倉の御大
事と、思ふにつけても我が君に
〽分けて云はれぬ讒言は、源氏を長く傳へん爲。
また讒言に讒言を重ね、なんなく都を開かせ申し、義經
公は奥へ下り、秀衡が館に着き給ふ。ハア心安やと思ふ
折柄、重虎又ぞろ我れを招き、備前守を語らひ、謀叛
を明かす[illegible]の企み。早速一味と了承し、心に思はぬ連
判して、備前守が奪ひ置きし、御旗を頼みの印。エ、嬉
しや、鎌倉に立歸りなば、この御旗を奥州へ、密かに送
り奉らんと、思ひし甲斐も情なや、錦戸伊達が心變り、
落命ありしと御首を、鶴ケ岡にて見し時の、この景時が
胸の苦しさ。悔むに甲斐なくこの上は、義經の御弔らひ
に命を捨て、死後に至つてこの御旗、梶原が奪ひ置きた
りと、せめて御名を雪がん爲、一倍增したる惡言雜言。
〽とは知らずして嫁娘、悴や孫が一筋に、命を捨てての
諫言も。
眼前に見殺せしは、主人を讒せし梶原が、血縁を斷ち切
つて、義經公へ申し譯。せめての其方が死しなに、安堵
させんと只今まで、包み隱せし一大事。明かすは即ち御

首へ、申し上ぐる我が心底の一通り。お聞き屆け下されかし。

〽生きたる人に云ふ如く、禮をなし義を立て、命を捨てし讒言は、天晴れ源氏の大忠臣、佞人讒者の名を取りし、類稀れなる義臣なり、

平次　ハヽア、有り難や忝なや。その本心を聞く上は、平次が未來は極樂淨土。この本心を露ばかり、聞かせてやりなば菊町や、榊葉が恨み死はせまいもの。二人の子供が修羅道の、苦患をせめて晴らす爲、コレ、この死骸へ一言の、暇乞ひ賴み上げまする。

〽賴み上ぐると深手の平次、にじり寄り兩人の、亡骸を引上ぐれば、我が子〳〵を抱きしめ、恨めしげなる娘の形相。

平三　輪廻深くも恨みし形相。むから隱せし本心は、未來で聞いて安堵せよ……コレ、この含み狀の中にも……源氏の會稽は雪ぐと雖も、梶原が讒言に依つて、空しく莫大の軍功をもだされ。

平次　すりや義經公の御筆に、梶原が讒言に依つて。

平三　オヽ、梶原が讒言と、末世末代に云はれん事、この梶原が未來の本望。千萬人の誹りをも、少しも厭むにあらねども、年端も行かぬ孫どもが、佞人讒者の名を耻ぢて、切り死したその時は、張裂く胸を睨みつけ、張りを持たする苦しさは、修羅の苦患を目の前で、見殺しした梶原が心は、鬼でも蛇でもない。この云ひ譯を孫どもに、云うて聞かせて未來では、祖父樣來たかと一言も、聞かりよものなら聞かせてくれ。祖父かと呼んでくれいやい。

〽聞かせてくれい景高と、思はず知らず大音あげ、泣き倒れたる殘淚、旱天續きし雨乞ひに、降り亂したる夕立の、雨やさめ〴〵むせび入る、平次苦しき息をつき。

平次　ハヽア、天晴れの大忠臣。年月讒者の名を取つて、折角包み隱されし、父の忠義を聞く上は、暫らくも息ある程、御本心を背く道理。景高お暇仕らん。

平三　オヽ、潔よう成佛せよ。

平次　さらば。

〽既に肝うよと見えたる折柄。

海存　ヤア〳〵梶原、犬死するな。暫し〳〵。

〽雲中より聲をかけ、生首引提げ常陸坊、忽然として顯はれたり。

平三　ヤア情なし海存、忰が死を止めしは、梶原を後暗き

侍ひと、世に笑はせん結構よな。

〽海存庭に下り立つて、

海存　只今死を止めしは、汝が忠義を立てさせんと、返し申すこの生首。江田源藏が忠義に依つて、身替りとなりしこの首を、義經公と轉じ替へ、靜御前をも手に渡し、その本心を探らん爲、我が心魂を髑髏に寫し、和殿が忠義を聞き得しは、天地の間に海存一人。梶原と云ふ忠臣あつて、賴朝公を守護すれば、海存と云ふ忠あつて、義經公の影身に添ひ、御身をやつさせ寶劍の、御行くへを尋ね求め、疑ひ晴らし申させん。

平三　イヤ、義經公存命と、賴朝公へ聞えなば、梶原これまで讒言せし、その功も空しくならん。疑念を晴らすはその死首、わざとつれなくもてなさば、八十餘人の諸大名、いよいよ怒りの氣を發し、恨みの刃に梶原が、命捨てるは本望なり。もし我が死後に義經公、京鎌倉に御入りあらば、諸士の面々心を亂し、また御兄弟の不和とならん。

海存　オヽ、尤も至極の咎めなり。天國の御劍手に入らば、その時こそこの御旗を、共に捧げて和殿が忠節、義經公御存命の樣子を語り、六十餘州に望みなき、判官どのゝ御供し、蝦夷が千島に押渡り、唐高麗を攻め靡け、四百餘州に我が君の、淸和の氏を輝かさん。和殿が秘密の忠節は、餘人の耳目に遮ぎられ、海存より外知る者なし。且つ末世まで梶原が、讒言の舌頭に、義經公落命ありしと云ひ傳へ、唐と日本に御連枝の、枝葉を榮え申させんは、梶原が義を感じ、この常陸坊海存、雲に跨り浪に乘る、仙術秘術の計略あり。ちつとも氣遣ひし給ふな。

〽氣遣ひあるなと梶原が、未然を顯はす海存は、誠なりけり末の世に、蝦夷が千島に名を止め、唐土までも切り靡け、淸和源氏の淸の字を、淸と稱へて唐土に、今も傳へて武威高き、氏は日本譽れぞと、感ぜぬ人はなかりける。

平次　ハヽア、賴もしや。この上は思ひ置く事一つもなし。ハレ嬉しや。

〽云ふをこの世の名殘にて、敢へなく息は絕えにけり、平三景時大いに喜び、死後の本懷これなりと、詞の内にはつしりと、矢一つ來つて梶原が左の股にすつぱり立つ。この時海存仙人は、烟となつて失せにけり、こは何奴と見る所に、宇都宮友綱は、素袍の袖をまくり手に、武士の義心を立烏帽子、弓ひん握りつッと入り、大音聲に呼

はつて。

宇都　ヤア〳〵梶原慥かに聞け。おのれ邪智の佞姦にて、子を殺し妻を捨て、眼前理非を見ながらも、讒者の舌の根翻へさず、鬼畜に劣りし大惡人。卷絹千草が働らきにて、靜御前を奪ひ取り、土肥次郎千葉之助、二人の夫に手渡しなし、その座を去らず自害せしは、天晴れおのれに似合ぬ貞女。肉身爰に亡ぶるは、天より責むる極惡人。賴朝公へ申し上げ、八十餘人一決して、只今汝を申し受け、義經公の許容には、靑道心に剃りこぼち、長く耻辱を與へんと、諸士の面々押寄せたり。されども友綱目前に、妻子を捨てし心外さ、肉を食むとも飽足らず、怨みの一矢急所を外し、先立つ者の追善。サア、手を拱いて降參し、剃髪染衣に義經公の、御跡弔らひ奉らんや。

平三　ヤア、あぐちも切れぬ小雀の、烏滸がましくも囀つたり。逆櫓の遺恨を立て通す、我が所存はこの通り。これを見よ。

〽切り首足下に踏みつくれば、

宇都　身の程知らぬ佞人め。何れも、來やれ。

〽詞の下にバラ〳〵〳〵、八十餘人の大小名、素袍袴もまくり手に、覆ひ重なり口々に、覺悟々々と詰めかけたり、梶原ちつとも驚ろかず。

平三　ヤア、姦ましい靑蠅めら。命の恩忘れたる、賴朝の大だわけに、仕官して心に入らず、只今腹をかッさばき、冥途の供に靑蠅めら、うぬらが命五十百、取つたりとて益ならず。足下に踏まへしならず首の、追善の爲め助けてくれる。コヤ、梶原が死首取つて、靑蠅めらが手柄にせよ。

〽睨み合うたる多勢と一人、寄るに寄られぬ不思議の仙術。

ト淨瑠璃のうち、ドロ〳〵にて常陸坊海存、仙術の印を結びながらセリ上がる。皆々梶原に寄りつかれぬこなし。

〽姿は爰に常陸坊、義者を助くる奇々妙々、動かぬ巖石群鳥の、寄せ來る浪にはね袴、取卷く中を悠々と、立別れ行く娑婆冥途、彌陀の利劍や稻妻の、形は消えて見えやらず、佞人讒者の名を殘す、梶原平三景時が、最期の程こそ勇々しけれ。

トこの淨瑠璃のうち、諸大名かゝらうとする。海存、印を結ぶ。皆々寄りつかれぬこなし。各々よろしくあつて、海存、靜かに場の中へ行く。皆々梶原にかゝる。

初演の

繪番附

海存、また印を結びながら、場の中へセリ下がる。景時、腹に刀を突き込む。始終ドロ〳〵にて、よろしく

幕

五段目　隼鞆明神の場

役名　薬賣り、三平實ハ源義經。巫子、千早實ハ静御前。漁師、喜作。同、鴈四郎。同、岩六。海女、若松。同、お濱。同、小磯。同、苅藻。神主、岸波主鈴。禰宜、治郎藏。禰宜、又五郎。

造り物、一面の松原、間々に石燈籠。打を點してあり、橋がゝり赤き玉垣。すべて隼鞆の明神の境内なり。前は海端の見得にて、二の手摺りは磯端の書割り。三の手摺りは波の書割りなり、漁船一艘繋ぎある見得。男海人、岩六、女海士苅藻、お濱、小磯、右の人數、舟より籠を出し、貝を入れたり出したりして皆々腰簑にて、海士、漁師の形にて居る、この見得、庭神樂にて幕開く。

〽天地の、開けし御代は久方の、長門の國に跡をたれ、海邊の御守り、祈れば利生速かに、實にも隼鞆明神の、誓ひは深き海面に、網引き釣垂れ海士人の、勇ましくも祭禮の、間は漁りも禁制と、掟背かぬ正直の、頭に宿る漁りは、しまひ仕事と見えにけり。

岩六　サア、大方よいワ。これで問屋に事は缺くまい。休みの間の仕事まで、しこなさうと思へば、肩も腕もメリメリ云ふわえ。

皆々　オヽ、そりや道理いの。シタガ、年内の仕事も今日限り。もそつとの事ぢや。やつてしまはうわいの。

岩六　オツとよいワ。榮螺が三百。鮑が貳百ぢや。

ト籠受取る。

はま　海月が九杯、みるが六杯。岩六どん、合點かや。

岩六　オツとよし〳〵。赤貝が六杯。小磯、その籠しようかい。

小磯　皆云うた通り、よいかえ。

岩六　これで算用は合うてある。おれが云やよいて。鴈四郎はどうしたぞいの。

苅藻　鴈四郎どのは、まだ海ぢやわいの。

岩六　ても根のよい奴なア。そんなら後に。皆行て來うぞや。

三人　オ、、岩六どの、大儀ぢやなア。
〽漕ぎ別かれ行く海女小舟、身過ぎは愚か渚の方、三人見送り。
小磯　ア、嬉しや。今年中の働らき納め。明日から、十分色どつて、遊び歩かうわいの。時に、苅藻、其方の色は誰れぢやいなう、（笑）
苅藻　誰れと云うても、顏の美しい、本山の茶碗見るやうな男。もういつも來る時分ぢやわいの。
はま　いつも來る時分とは、よう似た事のあるものぢや。わしが色も、もう來る時分ぢやが。
小磯　わしがのも、もうぢやわいなう。
三人　遲い事ではある程にならう。
ト在郷唄になる。
〽誰れを待つのか三人とも、同じ思ひも男に浮身、憂き身や積る義經公、過ぎし都を落ち方の、奧へ下り給ひしは、熊野行者の御姿も、今は引替へ熊野浦、狩人出立ちを看板に、實に商ひは牛尾三平と、名もなりふりも變る姿の藥賣り、濱邊傳ひに聲高く。
三平　本家紀州熊野浦の名方、啖咳には大龜の練り藥がようござい。

ト三平、人形のある荷をかたげさせ出る。後より大勢附いて出る。
荷持　冷え一切。大龜の練り藥でござい。
〽賣り聲聞いて三人が、そりや彼の人と云ふ間もなく、參り下向かわや〳〵と、取廻してぞ、うつか〳〵。
仕出　この間から評判の、大龜の練り藥。どんな事に利きますぞ。
皆々　功能が聞きたい〳〵。
三平　そも〳〵この万年丹の儀は、私し先祖より數年賣り弘めましたる、仙術仙傳の練り藥。卽ち方劑は鹿の腹ごもりに大龜、この二品を三年酒にて焚き詰め、八味の唐藥を調合いたし、唐蜜を以て練り藥に仕りましたれば、功能は申し盡されませぬ。第一冷え一切、啖咳胸の痛み、精分を強くし、顏色を潤ほし、肌をよくし、筋骨を健やかにして、腎精を增し、惣じて男女に限らず、白髮を黑くし、男は太く逞しくなり、女は如何なる大敵たりとも、ちつともひるまぬ大妙方。大龜の練り藥、お嗜み藥。御用なれば、お求め下さりませう。
〽口に任せて功能を、云ふ通りなら何にでも、利くか利かぬか我れ一に、爰でも一服そこへも一服、貝包む間も

押合ひへし合ひ賣藥の、繁昌とこそ見えにけり。
　トこの淨瑠璃の間、せりふありて藥賣る。
仕出　時にコレ藥屋どの、熊野浦の大龜とは、濱にも狼が居ますか。
皆々　ほんに、こりや詰まらぬ口上ぢやぞや。
三平　ハテ、お前方も、とつくりと理屈を聞いたがようござりますわい。大龜の練り藥と云ふは、一體獸ではござりませぬ。
蛋一　おふかめが獸でなうて、なんとぢやの。
三平　さればいの。熊野浦には三十三尋の、途方もない大きな龜があるぢや。脊中には蓬萊山と云ふ山を脊負うて居る龜ぢやが、それを取るに、アレあの看板の人形が持つて居る、空鐵砲と云うて、まだ日本へは渡らぬものぢやが、仙人に習うて、この三平が鐵砲を拵らへまして、その大きな龜を、熊野浦で練り藥にしたものぢや。大きな龜の練り藥ぢやに依つて、熊野浦の妙方、大龜の練り藥がござい〳〵と賣るのでござります。
皆々　ハア、。それで聞えた。爭はれぬ事ぢやなう。
三平　その證據にはこの間、また鶴の練り藥と云ふ藥が出來ました。此方のは大龜、彼方のは鶴。兩方合して鶴龜の練り藥。めでたい時の島臺、佛前の蠟燭立て、祝儀不祝儀にお用ひなされて、御人體のすたらぬ鶴龜の練り藥。どちらもお求めなされて、御損のゆかぬ妙藥でござります。
〽滅多やたらに出放題、當り次第に空拍子、空鐵砲を放すとは、この齊板より始まりけり。
小磯　さて由來を聞けば有り難やぢやなう。はま　龜の練り藥、鶴の練り藥、追ッつけ松竹の練り藥と云ふが出來るでござらう。
苅藻　イヤ、それでは尉と姥の練り藥を賣つたれば、流行りさうなものぢやぞや。
皆々　ハヽア。サア〳〵、下向しませう。
〽丸口々も正直の、神と君との道直ぐに、我が家〳〵へ立歸る、
　ト神樂。
三平　サア、ぱら〳〵と十四五服は賣れた。アヽ、冬の日は忙しなうて、思ふ程商ひが出來ぬ。六助、一休みして去なうぢやないか。
六助　アイ、もう追ッつけ日も暮れます。早うしまうて去にませうわい。

三平　シタガ、おれは明神へ參つて、後から去なう。まだ海邊に用事もあれば、荷を持つて先へ去ね。
六助　アイ〳〵、そんなら後から戻らんせい。
ト荷をかたげ
本家紀州熊野浦、痰咳には大龜の練り藥がござい。
〽主の賣り聲賣り習ひ、宿ある方へ急ぎゆく。
ト神樂。
三平　ドレ、マア、宮に參詣を。
ト行きかける。三平が向うへ、三人突ツかゝる。
三人　コレ、三平さん、待つて居たわいなア。
三平　ホウ、これは海女達、皆精が出ますなう。
はま　サイナア、海の仕事は今日でしまひ。明日から休みぢやさかい、お前の仕事を精出して、根限りしてもらはにやならぬぞや。
小礒　オヽ、措いてたも。この間から云ひ交して、休みになつたら堪能さしてもらはうと、思ひ詰めて居る三平さん。
苅藻　オヽ〳〵、二人ながらなんぢやの。天にあらば比翼の鳥、地にあらばソレ、何やら擂粉木でもない、れんぎの枝と契つた、この苅藻を差措いて、あんまりであらうぞや。
はま　ホヽヽヽヽヽ、そんなら其方も三平さんに。
小礒　こなたもか。
苅藻　わが身もか。
三人　がそれ。
〽寄る語るも濡れたる袖、蜑の藻に住む蟲くらひ、礒せせりはこれなんめり。
苅藻　わが身達もわが身達ぢや、この間からこの苅藻が、詞つきでも知れさうなもの。わしが大事の三平さま、二人りながら思ひ切りや。藥賣りの男が好きなら、外になんぼうも男がある。鶴の練り藥、ろんしやう散、ざしやく丸の親仁さんになど、惚れたがよいわいな。
はま　オヽ、さう云やるなら其方、外の男にしや。まだ前髮の好い男、後藤熊膽の黑丸子、門々へは持つて參らぬ堅い人。呼びかけて色事ぢや。わしや三平さんに濡れた袖ぢや、
小礒　オヽ、措きや〳〵。わしや若松に世話してもらうて、仲人のある戀仲。人の色事とは違うてある。三平さんはわしが男ぢやわいな。
苅藻　阿房らしい。措いてたも。さう云やりや戀は仕勝ち

わが身達に構やせん。めんく先に口説いて見せう。
ト側へ寄り、
苅藻　コレ、三平さん、この間云はしやんした事、よもや忘れはさんすまい。この苅藻を連れて去んで、堪能さして下さんせ。
小磯　練り藥を入れた貝を續けたこの小磯、今さら嫌とは云はれまいがな。
はま　いつちの先は此お濱。それともにお前は、誰れを女房に持つ氣ぢやえ。
苅藻　サア、いま返事が
三人　聞きたいわいなア。
〽責めらるゝ身も責める身も、どうやら褰をかつぎの蜑、砂端叩いて詰めかくる。
三平　サアく、尤もぢや。道理ぢやが、どれを女房に持つとも云はれぬ。仔細は高でおれが頼み事、聞いてくれた者が女房かい。
皆々　サア、その頼みたい譯はえ。
三平　ハテ、三人ともに別れしなに、云うた事忘れてか。ちつと思ふ仔細があつて、惡魚毒蛇に身を捨つる程の、辛抱がしてもらひたい。

三人　エヽ。
苅藻　滅相な。マア、心安さうに、惡魚毒蛇に身を責めては、それがマアどうならう。
はま　それく、其やうに恐ろしい事が、どうならうぞいな。
三平　サア、その恐ろしい事をしてくれるが、おれへの心中。例へ蛇に呑まれうが、あの鯨に取られうが、それをいとふやうな魂ひでは、三平が女房にはしられぬ。こんな事は昔に例しがある。天竺のちやら國とやら云ふ林に、ぬめたと云ふ獸が棲んで、多くの人を惑はしければ、蕈菜と云へる女、太平樂を申し、頭ての弓に介添ひの矢を番ひ、すかんたらしいと切つて放てば、石に立つ矢も鐵砲も、やはらか女の念力。
ト皆々キツとなる。
三人　さうぢやなア。
小磯　斯う云ふ事せにや、よい目に遭はれぬ。
はま　危ない枝の熟柿を喰ふと
苅藻　なんでも膽で
三人　やりつけうわい。
小磯　サア、その用を云ひつけて下さんせ。

苅藻　イヤ、おれが聞く。
はま　イヤ〳〵おれぢや。
　ト神樂。
〽又も競り合ふ氣は上ずり、他愛緩體なき折から、宮居の方より巫子千早、神樂の隙を立出でゝ、思はず見合す三平も、あたり人目に目で知らせば、呑み込み千早が小頷き、素振り見て居る三人が、腹立ちの上氣聲。
苅藻　ほんに與がる事。こちら三人ばかりかと思や、あの巫子どのにも、鈴口あてがうたのぢやな。龍宮へ行けと煽てかけ、海へ沈めて殺す氣かいなう。
はま　巫子どのも巫子どの、此方の大事の男の鈴、振らうとは野太い事。サア、三平さん。
〽彼方此方へ引摺り褄、神樂乙女の卽座の機轉、競り合ふ中へ割つて入り。
千早　皆の衆中へ御託宣々々。明神樣よりの御託宣。皆靜まつて聞かしやんせ。
〽持つたる御幣振り立てれば、三平はつと畏まり。
三平　それ〳〵、明神のお告げか。アヽ、大方こなた衆のうち、どれぞを女房に持てとある、御託宣に極まつた。
〽聞いて三人嬉しさに、皆靜まつて聞き居たる。

千早　明神樣の御神德、人は卽ち天が下の神の者なり、神の心を破る事勿れと、恐れみ恐れみ申す。三つの寶此あたりに、あるべき由の仰せを請け、どうぞ詮議の綱にもと、この國へ天降つてはありながら、これぞと思ふ事もなく、徒らに
　トせりふ砕けて
暮らすわたしが心の內。
　ト三平、咳拂ひすると、キッとなつて
苦しい事の御事ぢや。
三平　ハツ、有り難や御託宣。我れとてもその事に、辛勞するも世の盛衰。何卒兄弟睦まじく、和睦の折もあるならばと、時節を窺ふ事なれば、別れて居るは覺悟の前。
千早　サイナア、それはさうぢやけれど。
　ト砕けて云ふ。三平、咳拂ひする。
この神樣の仰しやる事も、とつくりと聞き給へ。明暮れお側に宮仕へ、それに引替へ此やうに、別れて居る神心、推量あれとの神の告げ。
はま　申し、巫子さん、わたしを女房に持てとある、御託宣でござんせうなア。
小磯　イヤ〳〵、わしでござんすなう。

苅藻　イヤ〳〵、わしぢや。わたしかえ。
千早　エヽ、厚かましい。皆思ひ切れとの御託宣ぢや。
はま　なんぢや。思ひ切れ。そりや神さん、胴慾ぢや。
小磯　思ひ合うた貮人が仲。
苅藻　相惚れのこの苅藻。
はま　なんと思ひ
三人　切られうぞいなア。
　ト三人なから三平に取りつき泣く。千早、御幣で三人を叩き退ける。
小磯　エヽ〳〵〳〵神の前も憚からず、アタ嫌らしい。なんぢやいの。
三平　それ〳〵〳〵、神さんのお腹立ちぢや。エヽ、穢らはしい。
　ト三人を退ける。
千早　よい口な。お前もお前ぢや。あんな者まで……あんな氏子は退いてしまへとの御事ぢや。
苅藻　イヤ〳〵〳〵、わしやなんぼでも。
三人　退きやせん〳〵〳〵。
　ト三人寄つて、三平を揺る。
三平　これはきつとした御託宣。皆退きやせん程に、放し給へ淸め給へ。
千早　申し。そんならどうでも、あの氏子を、お前は惠む心かえ。
三平　氏子を惠むは神の常。
千早　アタ憎てらしい。あんまりぢや〳〵わいなア。
　ト御幣にて叩き、氣の付いたる見得にて
との御託宣。
三人　オヽ、なんぢや。グニヤ〳〵とした御託宣ぢやなア。
千早　なんぞと云うて、この氏子を拂ひ給へ。
三平　それでは結句
千早　そんならどうでもこの氏子に、お心があるかいなア、とのお告げなり。
三平　ハテサテ、疑ひ深い御託宣。あたりの人目を
千早　恐れみ〳〵申す。コレイナア、久しう積る御託宣を、あの宮の廻廊で
三平　しみ〳〵云へとの神の告げか。
千早　その通りの御託宣。
三平　そんならあれで、とつくりと御託宣を。
千早　云はにやならぬ事があるわいなア。

〽手を取れば三人は、どうやら味な御託宣。

ト神樂。

〽大事の刀を巫子どのに、乘り替へさせてはマアならぬ、やらじならぬと取りついて、爭ひはてしなき折しも、先退け〳〵警固の聲、何かは知らねど世を忍ぶ、身は是非なくも振りはつて、木蔭へ忍べば我れ一に、後を慕うて追うて行く。

トこの淨瑠璃にて、いろ〳〵せりふのうち、先拂ひの侍ひ出て來るゆゑ、しか〳〵云うて三平逃げて入る。皆皆續いて追ひ驅け入る。ワヤ〳〵としたせりふ、思ひ附きなり。

〽程なく來る備前守行家、高校邪智の眼を光らし、のつさのさばる宮司の方、神主主鈴出で迎ひ。

主鈴　先達てお成りの樣子承はり、お迎ひの爲、これまで參上仕つてござりまする。

ト供の禰宜、治郎藏尾いて出る。

備前　オヽ、早速の出迎ひ、大儀々々。西國表平定せしゆゑ、某巡見の爲下つたるは、平家の殘黨義經が餘類爰彼處に徘徊する由、詮議せん我が心。猶また其方に申しつくる密事もあれば、幸ひのこの松原、傍らの者を暫らく退けい。ナニ、家來ども。身はこれに用事もあれば、神職方へ參つて居れ。

家來　ハア……畏まつてござりまする。

主鈴　コリヤ治郎藏、御家來衆を案内せよ。

治郎　ハア、。サア〳〵、斯うござりませ。

〽禰宜が案内に家來ども、打連れ彼處に急ぎ行く、後には兩人鼻と鼻、摺り合ふばかりに差向ひ、岩波主鈴、あたりを見合せ。

主鈴　仰せつけらるゝ密事とは、如何やうの儀でござりまするな。

備前　イヤ、密事とは餘の儀でない。先達て平家沒落の砌り、日の本の神寶、安徳君の御手にありしが、八島の浦にて一門殘らず入水せしゆゑ、神寶の行くへ知れず。この詮議をせん爲に、津々浦々へ廻し者を入れて窺はしむるところ、和布苅の瀬に光り物あると、注進するに依つて、大納言重虎公斯く云ふ備前守、巡見と號し、この國に下向せしは、神寶を取り得ん爲。その儀について頼みたき事あつて、今日の社參ぢやわいやい。

主鈴　それは何よりお心安い御用。委細承知仕つてござりまする。併し、その儀ならば、御威勢を以て、浦の蜑

どもに仰せつけられ、この間にも何ゆゑ御詮議は遊ばし
ませぬ。
備前　申し條尤もなれど、神寶海底より得しなどと沙汰あつては、手柄にて手柄にあらず。兼ねて我れ〳〵が大望、神寶失せたるは、賴朝公が隱し置きしを、詮議いたせしなど〻讒言を構へ、この上賴朝をしまうて取れば、我れ我れが大望成就。其方が魂ひを見屆け、一大事を告ぐる。密かに取り得て某に渡せば、褒美は汝が心任せ。必らず首尾よく致してよからう。
主鈴　委細畏まつてござりまする。この御用仰せつけらるるは、拙者が立身出世の綱。當月晦日寅の刻には、海底に分け入り、邪正を見屆け、神寶に極まらば、早速差上げまするでござりまする。
備前　過分〳〵。義經は梶原が讒言にて命を絕つ。追ッつけ賴朝もしまうて取る。神寶さへ手に入れば、折を得て重虎公を君と仰ぎ、某は將軍職。その時は其方も、過分の社領を宛て行ひ、日本惣社第一としてくれん。喜べ喜べ。
主鈴　エヽ、有り難うござりまする。
備前　まだ云ひ合はす仔細もあれど、爰は往還。

主鈴　萬事は私宅で。
備前　案內しやれ。
〽案內せよと打連れて、慾と惡との二柱、鳥居をさして歩み行く。生活は草の種とや浮草の、波のうね〳〵そこ爰に、棹さす船も新艘漁師、形も心もさつくり喜作、和布苅の磯に漕ぎ寄する、濱邊傳ひに、オ、イ〳〵と呼びかけて、浦に久しき海女乙女、老松が娘若松、賤の姿や腰蓑も、潮に染める色盛り、舟を目がけて走りつき。
若松　コレイナア、喜作、お前、今まで沖にぢやあつたかいなア。
喜作　オヽ、若松か。濱の仕事は今日でしまひ。明日からはさつぱりと、布子着た小野の小町。我れらが思ひは、深草の、只せう〳〵と思うて居るて。
若松　なアに啌ばつかり。この間から苅藻やお濱に賴んで母さんに二人が譯云うて、もらはうと思うても、お前の心がとツとモウ、わしやどうも氣が濟まぬわいなア。
喜作　なんで氣が濟まぬぞ。阿母が合點で、家へ入れうとさへ云はじやりや
若松　來て下さんす心かえ。
喜作　小鰈三合あるならば、入り聟すなとの譬へあれど、

壹合もないこの喜作、其方さへその氣なら
若松　そりやお前、ほんまかえ。
喜作　知れた事。
若松　オヽ嬉しや。そんならちよつと。
ト囁く。
喜作　何を阿房らしい……とは思へども。
ト囁く。
若松　とツとモウ、わしや恥かしい。
喜作　シタガ、母者はキッと堅藏なげな。小糠三合はさて措き、壹合もないこの喜作、聟入りと云ふと、入り聟と云ふとは、ちつとの違ひで、どうやら身がすぼり、さうして、どこやら氣の張りさうな事ぢや。
若松　なんのマア、氣張る事があるぞいな。わたしが方から來てもらひたいが高ぢやもの。大事のお前の肩身のすぼるやうな事、誰れがさせやうぞいな。男は日からと、わたしが心にある事ぢやさき程に、どうぞさうして下さんせいなア。
ト寄り添ふ。喜作、思ひ入れあつて
喜作　そんなら、さうもしてやらうが。
若松　エヽ、嬉しうござんす。必らずさうでござんすぞえ。
〽互ひに寄り添ふ手の内に、深き契りの有磯濱、波を潜つて磯端へ、ぬつと出でたるさるぼの鴈四郎。
鴈四　見附けた。
〽云ふに恟り若松喜作、飛び退くうちに濡れ體、泳ぎ上がつておのが名の、猿ぼのやうな目を剝き出し。
鴈四　コリヤ喜作、わりやマア新米の漁師だてら、うまい事するなア。コリヤ若松、われも又酷いぞよ。海士は海士同士ぢやと思や、いろ／＼に云うて口說いても、兎角ぴんしやん／＼と、足に障つた魚のやうに刎ね廻る。先度も水底の岩影で、裸で居るこそ幸いと、側まで行つたら、ぬらりしやらりと擦り拔けて、ぽいと上へ上がつたゆゑ、その後の心惡さ。幸ひの處で出合うた。サア、ちよつと海へ來ておくれ。アレ、あのズッと向うな沖の石。人こそ知らぬ、けうといもんぢや。
〽サア／＼來いと無理無體、引立つる手を捥ぎ放し。
喜作　イヤコレ鴈四郎、見付けられたら、くど／＼と、云ひ譯はせぬ。新米の漁師なら、色事ならぬとお觸れがあつたか。貴樣がなんぼ踠いても、モウ／＼／＼、あかん事ぢや。ちやつ／＼と去にや／＼。

鷹四　去ぬまいわい。われがやうならずにや構はぬ。サア、若松來い。

若松　嫌ぢやと云ふのに、又しても〳〵、アタ形の悪い。

鷹四　イヤ、此奴が〳〵。形が悪いとはなんぢやぞい。海女に海士が惚れるが、なんで形が悪い。どちらも潮のしゆんだ同士。物脇ひら見ずと、サア來いやい。

〽しなだれ抱きつき鰐鮫の、見入りし如く附け廻す、喜作はそれを若松に、目で知らせ合ひ紡ひ綱、分ける振りして船の中へ、乘るを乘せじとさゝへる鷹四郎、引ッ摑んでこれわいな、海へざんぶりその隙に、押し出す漁船浮船の、群るゝも斯くや水馴れ棹、此方へによつぽり浮き上がり、見れば見る程

鷹　エ、、、、怪體の悪い。たつた二人船に乘つて、船で船を漕ぎ居るかい。待ち居れやアい。忌々しい。上がれやアい〳〵。

〽呼べど答へず荒波を、潜り〳〵て沖の方、泳ぎ付かんと追うて行く。

ト庭神樂になり、三平、千早、連れ立つて出る。

〽宮居の蔭に最前より、窺ふ折も義經公、靜を伴ひ立ち出で給ふ。

三平　今あれにて云ふ通り、其方をこの社へ入込ませしも、一つの計略。これぞと思ふ事はないか。

千早　仰せの通り、出で入る人にも心を附けますれども、さしてこれぞと思ふ事もござりませぬが、申し我が君様、この間よりこの島へ、お姿をやつしお出で遊ばすには、なんぞ仔細のある事でござりますかいな。

三平　某このあたりを徘徊するは、餘の儀でない。この頃はこの海中に、夜な〳〵光り物。察するところ天國の寶劍とは思へども、取上ぐべき便りなし。然るにこの宮の神事に用ゆる神秘の鎌。これを以て海に入れば、波は四方に分つて平々たりと聞き及ぶ。これ屈竟の事なれば、其方が入込み居るを幸ひ、何卒その鎌を奪ひ渡さば、某が望みは足りぬ。首尾よくせば大願成就。この儀申し付けん爲、今日の對面ぢやわやい。

千早　すりや、神秘の鎌さへあれば

三平　海底へ易々と、神事は晦日の寅の刻。

千早　光を日當に天國の寶劍

三平　コリヤ、聲が高い。

千早　どうぞしてお手に入れませう。

三平　隨分ぬかるな。

千早　合點でござんす……とは云ふものゝ、もしや仕損じて殺されたら、これがこの世の。

トしいなりとある。

三平　ヤア、未練の繰言。上は大君、下萬民の助けとなる大事の役目。心を定めて、必らず吉左右。

ト千早、涙拂ひ、キッとなる。

千早　仕負ふせて見せませう、

三平　ホヽウ、出かした。仰ぐは直ぐなる神の力。

千早　斯れる鎌を奪ひ取る

三平　心の切れ味。

千早　心の誠

三平　靜

千早　我が君樣。

三平　キッと申し渡したぞ。

〽諜し合して義經公、拜前さして過ぎ給ふ、後に千早はとつおいつ、思案に胸も落ちつかず、案じ煩らふ波間より、又もぬつぽり鷹四郎、千早は悔り逃げ行く袖、走り上がつて引ッ捉へ。

鷹四　ヒヤア、こりやア妾にも美しいのが座するぞ。

〽云ひさまほうと抱きつけば、ちやつと飛び退き。

千早　オヽ、なんぢやぞいな。誰れぢやと思へば、こなさんは男海士の鷹四郎どの。何さつしやるぞいなう。

鷹四　何するとはコレ巫子さん、こなたにちつと餘儀ない無心があるが。

千早　無心とわえ。

鷹四　サア、たつた今、こなさんも知つて居る、若松と云ふ海女と、喜作と云ふ漁師めが、アレ〳〵あの沖にある船がさうぢや。たつた二人で乘りくさつて天井抜け。所詐叶はぬと觀念して、戻つて見ても、どうも心が納まらぬ、所に事らッツクリとして居るとは、出船あれば入り船。捨てる神あれば拾ふ神。幸ひあたりに人もなし。

ト無理に寄りつくを突き退け

千早　オヽ、けうと。いろ〳〵の事を云はしやる。わしやそんな事は知らぬわいなう。

鷹四　これを知らいでよいものか。知らぬが定なら猶の事。

〽云ふも幸ひ海士人の、水底尋ぬる御劍の事、騙して問はんと心に領き。

千早　コレ、鷹四郎さん。

鷹四　エヽ。

千早　成る程、お前の云はしやんす通り、心に隨ふ、とサア、ひよつと云ふ氣になつたならなア。

鳫四　オヽ〳〵。

千早　又わたしが頼む事、よもや嫌とも云はしやんすまいなア。

鳫四　ア、、愚かの君の云ひ事や。足で飯食うて頭で歩くと云ふやうな海士。逆さまにしてゞも頼むとあれば引きはせぬ。ハテ、親はなし一門なし。して、その頼みたいと云ふ譯は。

千早　アノ、海の底と云ふものは、どんなものぢやえ。

鳫四　ハテ、稀有な事、訊ね糺したワ。海の底は、とつとなんぢや、ソレ、とつと海の底ぢや。

千早　定めて怖いものであらうなア。

鳫四　イヤモウ、いろ〳〵さま〴〵の怖い物があるわい。まだそれよりえらい、海の底に龍宮と云ふ處があるて。

千早　そりや話しに聞いて居る。いろ〳〵の魚をかづいてゐる人々のある處かえ。

鳫四　その通り〳〵。まだその外に、えらい大蛇が龍宮には居るてや。

千早　其やうに恐ろしい所が海の底に。さうして、その龍宮までは遠いかえ。

鳫四　ア、、マア、凡そ七八百里。大方千里もあらうぞえ。

千早　鳫四郎さん。

鳫四　ヤア〳〵。

千早　わたしが頼みたいと云ふはな。

鳫四　なんぢや〳〵。

千早　海底から一遍歩いて、殊に依つたら龍宮に行て來て下さんせぬかえ。

鳫四　ヤア、。龍宮へ行て來てくれ。

千早　サア、頼みたいとは、この事ぢやわいなア。

鳫四　イヤ、途方途徹もない事云ひ出したな。その恐ろしい龍宮へ、なんの用がある。

千早　わたしやこの海へ、アノこれだけな。

鳫四　これだけな。

千早　脇差のやうな、劍のやうな物を落したわいな。それをどうぞ、お前が訊ね出して下さんしたら、成る程、お前の云つてぢや事

鳫四　聞いてくれるか。オツとよいワ。今行くぞ。追ッつけ行く。龍宮へ行くは行てやらうが、門出の祝ひに。

ト抱つくな突き退け

千早　滅相な。なんぢやぞいな。今云つた物を取つて來てさへ下さんしたら、成る程、心に隨ひませうが、さうないうちは嫌ぢやわいなア。

鴈四　ヤア、そんなら今の物を龍宮へ行て取つて來ねば否か。

千早　知れた事いな。

鴈四　コリヤ、さう云はずとツイちよつと。

千早　エヽ、。嫌ぢやわいなア。

〽突き倒されて鴈四郎、恨めしげなる聲音にて。

鴈四　エヽ、鬼よ鬼神よ。これ程に思うて居るのに、抱きつかす氣はないか。聞く耳は持たぬか。海人の身なれば一里や二里の海。

〽怖いとも思はねども。

龍宮へ行て來いとは、八百里九百里。

〽泳ぎも潜りも叶はねば、乘せてたべなう乘せ居れと、惡身になつてせり込む折から、當社の神職岸波主鈴、うろうろ眼でいつきせき。

主鈴　ヤア、千早、爰に居るか。備前守さまお入りなされ、今日は我れらがめでたい事だらけぢや。めでたい次手に其方に、ちつと話したい。心のたけを云はうと思うて、尋ね〳〵て爰へ來たが、よう爰に居てたもつたなう。

千早　話したいと仰しやるは、どんな御用でござりますえ。

主鈴　用と云うたら、話したい事があつて。

千早　お話しとはえ、

主鈴　その話しは、斯うぢや。

〽抱きつく主鈴を鴈四郎、引摺り退けて。

鴈四　コリヤ、何するのぢや。この巫子には、おれと云ふ先役がある。神主であらうが、相國であらうか、おれが邪魔して、さす事はならぬワ。

主鈴　イヤ、此奴が〳〵。なんぢや、海士の分際で、この神職が心を、懸けた女、先役の萬役のとは、推參者、すさつて居らう。コリヤ千早、兄弟連れで奉公に來た日から、どうぞ高間が原の上と、明暮れ思うて居るわいやい。

ト しなだれかゝる。

千早　ア、コレ、旦那さん、わたしや怖い。嫌ぢやわいなア。

鴈四　オ、さうぢや。さう云ふはこの鴈四郎に、心中立て

と見える。サア、ちやつと此方へ來て下んせ。
千早　嫌ぢや〳〵。嫌ぢやわいなア。
主鈴　さうぢや〳〵。あんな穢らはしい奴、側へも寄せるものぢやない。身は淸淨な、この主鈴が心に隨うてくれやい。
鴈四　主の手かけになるよな女子、灰汁のたれ粕あと捨てると唄にさへ謳ふぢやないか。神禰宜に構はずと、この鴈四郎が色にならんせ。
主鈴　邪魔すると、うぬ、免さぬぞ。
鴈四　豬口才吐かすと、かぶりつくぞ。
主鈴　見事おのれが、かぶりつくか。
鴈四　かぶりついて見せう。
主鈴　そりや勝手にせい。千早、おぢや。
鴈四　イヽヤ、此方に來てもらはう。
主鈴　千早來い。
鴈四　巫子さん、ごんせ。
主鈴　此方へ來い。
鴈四　此方へ來い。
〽兩方より手を取つて、爭ひ合ひし雛儀の千早、遠目にそれと又五郎、走り寄つて二人を突き退け、眞中へずつと入れば、
主鈴　エヽ。邪魔な處へ又五郎。さうしてマア、慌しいなんぞ用があるかいやい。
又五　イヤ、外の儀ではござりませぬ。備前守さまが御用があると、最前からお尋ね。サア、早うお歸りなされませ。千早どのも、こんな所に、若い者の居る者ぢやアない。サア、戻つた〳〵。これはしたり、サア、お出でなされませ。
主鈴　エヽ、惡い時に備前どのが。
又五　ハテ、マア、ござりませ。
主鈴　サア、行くわいやい。
又五　千早どのも、ごんせ。
〽千早も共に引立てる。そもじは爰にと取りつく鴈四郎、後に蹴られてひよろ〳〵どつさり、見向きもやらず又五郎、主鈴を追ひ立て立歸る。
ト主鈴は千早に思ひ入れ。手を引かうとするやら嫉やらしい模樣。又五郎中へ入り
又五　ヤレござりませ。ハテサテ、行かしやりませ。
ト云ひ〳〵入る。
〽日も早西に入る方の、濱邊傳ひに友呼び連れ、三人一

緒に寄りつどひ。

トこの淨瑠璃にて、三人の海士、名を呼びて出づる。

はま　コレ苅藻、鴈四郎どん見やしやらんか。

苅藻　イヽヤ、わしも尋ねて居るわいの。今夜は備前守とやら云ふ殿様が、海中の海人を呼びつけて、何やら云ひ付けさつしやるといな。

小磯　サテ、それぢやに依つて、鴈四郎のやうな向う見ずを突出す積りぢやが、今頃まで海には居まいが、何處へ行た事ぢやいなう。

〽尋ね廻る足元に、のたれ臥したる。

苅藻　ヤア、鴈四郎どんぢや。爰に居るわいの〱。

小磯　オヽ、ほんに、こりや寢て居るのか。目が鮮うたか。

皆々　鴈四郎どんイなう。鴈四郎どんイなう。

〽口々喚けば氣のつく猿ぼう、あたりを眺め立たんとせしが。

はま　コレ、鴈四郎どん、氣が付いたら、わしらが仲間を庄屋どのから、用があると云うて、呼びに來たわいの。

苅藻　聞きや備前とやら云ふ人が、何やら云ひ付けるといなう。

〽さアござんせと引立つれど、腑抜けになつて見えにけり。

鴈四　イヤ〱、備前も德利も入らぬ。そこらに巫子は居ぬか〱。

皆々　イヽヤ、誰れも居やせんわいなう。

鴈四　そんならもう連れて去に居つたか。神主めが餌食にするか。おのれ、さうしてよいものか。

〽立ち上がりしが、ふら〱と、立たねば詮なく、只手を上げて。

巫子よなう。

〽巫子よと呼べど、いつかな〱、情を知らぬ海女人ども。

ト神樂になり、引摺つて入る。ト神樂止む。

〽ごんせ〱と無理やりに、手引きの綱を見る如く、引摺りてこそ歸りける。はや黄昏の宵闇に、人跡絶えて澄み渡る、松の遠音も打つ波も、餘に添ふる夕風や、御燈を照らす燈籠、光りも強き御神に、仕へて禰宜の又五郎、松の木の間の石灯籠、映す灯影もしん〱と、いとど貴く見えにけり、

トこの間に金燈籠を提げ出て、石灯籠へ灯をともし廻る。

又五　ア、海邊の夜の景色は、物凄いやうなれど、斯う又見晴らした處は、どうも云へたものではないぞ。お燈明も爰でしまひ。さらば一服催ふして、闇の夜の海の景色、凄いのが又一興ぢや。

〽腰の胴亂取出だし、莨盆にも火入れにも、側に有り合ふ金燈籠、吸ひ付け莨すつぱすつぱ、煙くゆらす淺間山、淺瀬深味の淺間より、赫つと光りの。

トどろ〳〵。

〽煌々と、さしもに暗き闇の夜も、晝かと疑ふ光り物、煙管啣へし又五郎、沖の方にキッと目を附け。

ト切り穴より光り物の仕掛け。煙硝火の下にて太鼓ドロドロなる。

又五　ハテ心得ぬ。頃は今冬の末、極陰たる海中より、いま赫々たる光り物は、陰中に物を生じ、水克火と克すべきに、金生水と卷きあぐるは、さては海中に。ムウン。

トこの間に禰宜治郎藏、窺うて居る。

治郎　又五郎、合點のゆかぬ事云ふなア。この通りを。

ト行かうとする。煙管持ちながら片手に引ッ摑み

又五　金氣盛んは名劍あるべし印。これ正しく天國の御劍か。ハテナア。

ト治郎藏を引くり返す。

治郎　われを。

ト又かゝる手先に、チョンと眉間を打つ。額へ糊紅べったりつけろ。

又五　命知らずめ。

ト死骸を海へ蹴込む。

〽彼處へどつさり水煙、煙草の煙呑み込む曲者。

ドリヤ、去んで休まうか。

〽そらさぬ體にて。

三重よろしく。

幕

大詰

老松内の場

隼輌沖の場

役名——九郎判官義經。漁師、喜作實ハ梶原源太景季。漁師、鷹四郎實ハ佐々木三郎盛綱。母、老松。娘、若松。門田の前。巫子、千早實ハ靜御前。海女小磯。同、お濱。同、苅藻。大納言重虎。備前守行家。岸波主鈴。横山主税。常陸坊海存。禰宜、

又五郎實ハ能登守教經。

造り物、世話場、向う赤壁、納戸口、臆病口の方、障子屋體。側に古木の白梅あり、橋がゝりの方に紅梅の古木、これは蕾なり。よき所に門口据ゑ、磯端の住居の體なり。二の手摺り、磯端の書割り、三の手摺り、浪の書割り、女海士小磯、お濱、苅藻、呼ばれて來た見得にて居る。娘若松、田舍模樣の着物、襠補着て、綿帽子着ながら、茶を汲んだり酌したりして居る。この見得、淨瑠璃にて幕明く。

〽立歸る、長門の浦の海士乙女、和布苅汐汲みいとまなみ、柘植の小櫛もさすが又、世を離れ庵、昔は故も有磯海、今は寄る邊も年の波、老松と云ふ通り名の、それにはあらで庭に白梅、外面には色香爭ふ寒紅梅、折知り顏に咲き初むる、この家の娘若松が、殿御待つ間の馳走振り、嫁になりふり綿帽子、着ながら給仕介添へも、打混じたる所がら、風雅ともまた可愛らし。

トこの淨瑠璃のうち、皆々捨ぜりふよろしく、淨瑠璃とまる。

若松　小磯、お濱、苅藻女郎も、よう上がつて下さんせや。

苅藻　オヽ、若松の云やる事わいの。心安い友達仲、なんの遠慮せうぞい。ナウお濱。

はま　それ〳〵、海月のおあへ、荒布の浸し、食ひかゝつてから手が放されぬ。イヤ、放されぬ次手に、其方はマア、今日はとてつとへうもなう嬉しからうなう。

小磯　お濱、知れた事云やる。好いた男と祝言する事ぢやもの。それはさうと、喜作どのも、もう聟入りに來さうなものぢやがなう、

若松　サイナア。もう見えさうなものぢやが、何として此やうに遲い事ぢやぞいなア。

苅藻　オヽ、さてもきつい待ち兼ねやうぢや。

若松　イヽエ、なんのマア、待ち兼ねるぢやないけれど、もう見えるか〳〵と、先刻にから祝言拵らへ。着つけもせぬ綿帽子して、寒の内に汗水だわいなア。

はま　オヽ、けうと。今體に汗がついたら肝心の時に、いつそ體が流れて去なうぞ。オヽ、辛氣。

皆々　ホヽヽ。

ト皆々高笑ひする。

〽笑ひ聲に納戸より、若松が母老松、昔の殘る褄はづれ、

淑かに立ち出づる。

老松　オヽ、これは〳〵皆様、ようこそござりましたなう。先刻からお聲は聞いて居たれど、若い衆は若い同士が話しよい。年寄りは御面倒にあらうと、差控へて居りましたが、さてマア、何から何まで、いかいお世話にあづかりまして、忝なうござりまする。

苅藻　阿母の結構なお禮ぢや。この間からも云ふ通り、コレ、若松女郎も、いつがいつまで獨り身でも置かれず、幸ひ合うたり叶うたり、漁師の喜作を、これの聟に世話してもらひたさうな若松の口振り。それでマア、友達のよしみ、阿母のお前に云うて見たれば、どうなりと云はしやんしたを幸ひ、今日は極月晦日、日本國中が節季ぢやの拂ひぢやのと、忙しい日ぢやけれど、この浦ばかりは和布苅の祭りで、めでたい日の祝言。追ッつけ喜作も聟入りしやるであらう。明日へかけて新玉のお朔日。どうでこちらもあやかりたいものぢや。

小磯　ほんに、けなりい。歳暮やら年玉やら、來年へかけての姫始め。よう若松さま、あやかり者。

皆々　オヽ、けなり。

〳〵なぶられて若松は、何と返事も恥かしの、盛り並べた る酒肴も、一つ上がれの詞の端、銚子代へよと立つて行く。

老松　イヤ、コレ〳〵皆の衆、この間ちよつと云はしやんした事、そんなら今日は、娘若松に、聟どのが見えますか。

はま　アイナア、連れ立つて來うと思うたれど、なんぼ海端の一つ家でも、晝中には人目もある。先へ行てくれとあつたゆゑ、ナウ小磯。

小磯　それ〳〵、仲人は宵の程、早う去ぬるだけ先へ來て、祝言の前酒、いかい御造作になりますわいなう。

老松　これは又、あんまりな輕はずみ。尤もこの間から、こなさん方が、好い聟を世話せうと云うて下さんすけれど、娘にもとつくりと尋ねた上、聟どのの氏素性、器量骨柄、この母も見た上では、ハテ、脊丈伸びた娘、どうなりとしませうと云うたのは、よう〳〵昨日。それにモウ今日聟入りとは、あんまり急で、この母は呑み込まぬわいの。

苅藻　お濱、小磯、ソレ見やいの。わが身達、なんと聞いてぢや。阿母も得心ぢやと云やつたに依つて、もう追ッつけ喜作の聟入り。今となつて、どうなるものでいの。

はま　サイナウ、兩方がはずみ切つて居るものぢやに依つて、前置きの口上は聞き捨て、どうなりとしませうと、阿母の云はしやんしたを聞くと、其まゝ取急ぎ節季の聟入りぢやが、阿母、氣遣ひさんすな。器量なら發明なら、云ふ所もない男ぢやぞいの。

小磯　ソレイナウ、まだ阿母の氣休めは、第一鼻が小さいでもなし、また人に勝れて大きいでもなし。

苅藻　イヤモウ、それは／＼頃合ひな聟どの、又あんな代物はあり憎いぞえ。

小磯　こちらはみんな男のない身、どうぞあんなをと思ふうち、若松が入れてもらやつたわいなア。

老松　ヤア、あの若松が入れてもらうたとは、何を。

ト若松出て、術なきこなし。

小磯　アノ何を……聟に。

老松　ヤア。

小磯　つい若松が聟に入れてもらやつたと云ふ事いなア。

ト此うち若松、側へ座る。

老松　なにを。まだ聟に入れうやら入れぬやら知れぬのに。さうして、その聟入りしようと云ふ人の氏素性は。

苅藻　どこの生れやら、牛の骨やら知らぬが、都方とやら尼ケ崎とやらで、この浦では新米の漁師。新米ゆゑか、その氣立ての和らかさ。和らかと思へばまた堅うて、その味ひは若松が、よう知つて居やるわいの。

老松　イヤ／＼、人の心と云ふものは、つい上邊から知れぬもの。とつくりとした事見ねば、ナウ娘。

若松　イエ／＼、ほんに氣立てなら器量なら、どこに一つも難癖のない。さうして聞いて下さんせ。昨日も云うてぢや事にはな、其方の母さんは、わしが母さんも同然ぢや。行たら隨分孝行にするさかいで、其方も隨分孝行にしやて。こんな事ぢやない、まだ何やかや可愛らしい事の有り條。それは／＼頼もしい、見かけからキッとしてしやんとして。

トいろ／＼此やうなせりふのうち、老松、コレ／＼と云ふも聞えぬこなしにて自慢する。

老松　コレ／＼／＼／＼、娘。

若松　エ、。

ト恟りして、ひよんな事云うたかと思ふこなし。

老松　問ふに落ちいで語るに落ちると、娘、今日見える聟どのとは、其方もう、近附きになりやつたの。

若松　エ、。イヤ、エ。

ト術なさうにする。

老松　ほんにマア油斷のならぬ。いつの間に近附きになつたぞいなう。

苅藻　ア、まどろし。モウ〱、てんぽの皮ぢや。若松も白狀してしまや。近附きどころか、二人が深い仲ぢやわいな。

ト若松、いろ〱術ないこなし。

老松　エ、、其方はなう。と云うたとて後の祭り。

苅藻　イヤモウ、海士と云ふものは、裸になつて海へつかる濡れ仕事、この位の事は有うちと、阿母も料簡して女夫にしてやつて下さんせいなう。皆、さうぢやないか。

はま　ソレイナウ、海士仲間に貰ひやんす。添はしてやつて下さんせ。若松も爰へ寄つて、さう云やいなう。

ト若松を突き出す。いろ〱恥かしいこなし。

若松　母さん、どうぞ皆の云うてぢや通りに

老松　嘉作どのとやらと、祝言がしたいと云ふのか。

小磯　コレ、したいかといなう。したいと云やいなう。アイ、したいと云うて居られます。

老松　望みある身と知つて居ながら、この母が目顏を忍び、エ、見下げ果てた徒ら……とは云ひながら、何の彼のと今云うては、皆の衆の世話が無足になる。成る程、祝言させませうわいな。

皆々　そりやこそ、まんまと埒が明いた。

若松　母さん、エ、、忝なうござりまする。これと云ふもみんなのお世話。小磯、お濱、苅藻女郎も、エ、、嬉しうござんす。忝ないぞえ。

皆々　オ、、あの嬉しさうな顏わいの。ホ、、、。

小磯　イヤモウ、嬉しいは道理ぢや〱。時に若松や、主を思ふも身を思ふとやら。此やうに世話するのも、また世話してもらふ心當があつての事ぢやわいの。

刈濱　わしらもその心ぢやわいの。

小磯　マア、わしから云ふが、外の事でもないわいの。この間からちよと話した、この邊の浦々へ、熊野浦から藥賣りに來る三平どの、どうぞ其方の口先で、仲人してたも。

はま　オ、、小磯の厚かましい。三平どのには、わしが首たけぢやわいの。若松、どうぞわしに世話して下んせ。

苅藻　オ、、二人ながらなんぢやの。すッ込んで居や。三平どのには、この苅藻が首たけ打込んで、咳も出ぬのにおうかめの練り藥、十六文のを三度で四十八文、元入れ

してある色事ぢや。若松、わしが心の丈云うて世話してたも。

はま　イヤ〳〵、わしぢや〳〵。

小磯　イヤ〳〵。わしぢや、

　ト せり合ふ、若松老松、取り支へる。

〽いや〳〵わしぢや、いやおれぢや、わつぱさつぱと夕暮れ時、仲人變じて煩惱の、犬か猿かは門口へ、葬禮戻り見る如く、麻上下に頰冠り、つか〳〵入る喧嘩の眞中。

　ト この淨瑠璃の間、三人揑み合ひ。鴈四郎、その中へ入る。

若松　ヤア、喜作さんか。

老松　聟どのが見えたか。

〽喜ぶ若松三人は、耳へも入らぬ滅多打ち、わしが先ぢやわしがのぢやと、あなたこなたに引摺り引ッ張る三人を、蹴りこかして頰冠り、取つたる顏は猿ぼの鴈四郎、やアこなたはと若松が、二度悔り、睨め廻し。

　ト この間に老松、角行燈を灯す。

鴈四　こりやマア、おのいら、何さらすのぢや。損料借りの上下を、曠れ立たぬうちに茶々無茶苦茶、なんぢやいなんぢやい。不思議さうにキョロ〳〵と。何奴も此奴も頰打つぞ。

　ト 睨み廻して若松が手を握り

若松、どうぢやい。ヤイ〳〵、わりやマア酷い者ぢやぞよ。濱手の若い奴等に聞けば、今夜若松が所へ聟が入ると云ひ居るに、アタ忌々しい。なんでも聟めがうせぬ先に、おれが先へ聟入りして、否でも應でも祝言する氣で、上下立派爽やかに、仕立てたところは、なんと好い男であらうがな。さうして今夜の聟入りも、今云うたので知れた、喜作めぢやな。暗がり紛れでマア喜作さんかとは、エ、忌々しい。時に、えらい粹は、これの婆さんぢや。聟どのが見えたとは忝ない。おれは猿ぼの鴈四郎と云うて、一と云うて二のない海士ぢや。向後、聟になるからは、マア、おれが爲にも親にして、孝行にしてやらう程に、有り難い仕合せぢやと、マア、さう思うて下アれ。

〽智惠も猿ぼが聟入りの、先陣したる高名顏、親子は呆れて詞さへ、納戸へそろ〳〵逃げて行く、若松、裾を提へて。

　ムウ、コリヤ、どうでも鴈四郎の心には從はぬな。ヤイ、婆も不得心か。イヤサ、聟にする事は否か。否と云や仕樣があるぞよ。ヤイ、そこにけつかるちんからりめら。サ

ア、世話燒いて祝言させい。若松、祝言する事は否か。婆さん、お娘を下んせ。返事せぬは、どうでも否か。否ならおれが存分に仕樣がある。
〽奥を目がけて駈け入る鴈四郎、母は悔り、引き戻して立ち塞がり。
老松　ア、コレ、滅相な。鴈四郎どのとやら、奥を目がけ、どこへござる。
鴈四　どこへ行く。それ云うたら物がないワ。サア、奥へやりとむなけりや、若松、おれと祝言するか。
若松　サアそれは。
鴈四　奥へ行て詮議せうか。
老松　ア、コレ。
鴈四　抱かして寢さすか。
老松　サアそれは。
鴈四　奥へ行かうか。
若松　サアそれは。
鴈四　祝言するか。
老若　サア。
鴈四　サア。
老若　サア。
鴈四　サア／＼／＼。どうぢや。否なら奥へ行て家搜しする。キリ／＼と返事せい。
トべつたり坐る。
〽聞いたか見たか手強き一言、胸にこたへる親子が思ひ、返答猶豫の表の方、さぞ待ち兼ねと息せつき、來かゝる喜作が縫入りも、遲ればせなる門の口、內には猿ぼがきめ合ふ仕振り、樣子あらんと覗ひ居る。
トこの淨瑠璃にて、喜作、漁師の形に麻上下、脇差、門口に居る。
鴈四　サア、大概で返事せい。長う云ふうちも有やうは、大抵痛はつて居るこつちやないぞよ。えい加減に祝言せいでな。
トいろ／＼思ひ入れ。
エヽ、忌々しい。もう踏ん込まにやならぬわい。
ト駈け込まうとする。
老松　アヽコレ、待つた。
若松　マア、待つて下さんせ。
〽留むる親子を踏み退け蹴退け、傍若無人に苛なむ鴈四郎、堪り兼ねて駈け込む喜作、猿ぼを摑んでゐのころ投げ、すつくと立つたる男振り。

若松　ヤア、お前は。
老松　ヤア、こなたは。
三人　それこそほんまの聟入りぢや。
苅藻　先刻にから待つて居た。
若松　よい所へ、よう來て下さんした。
はま　若松女郎、嬉しいか。
小磯　サア、マア、ちやつと祝言の杯々。
〽俄かに生きたる色直し、酒も肴も早々に、蘇生つたる心地せり、庭にうと〳〵鴈四郎、夢見たやうに投げられて、擂り剝いた膝頭、唾つけ〳〵もへらず口。
鴈四　女子ばつかりぢやと侮つて居たりや、よう投げたな。出かした。ぢやが、こんな常住はないぞよ。如何におのらが海士ぢやて、海士兵法大疵の基であらうぞよ。おのりや漁師の喜作めぢやな。ムウ、それで聞えた。そんなら今投げ居つたは、うぬぢやなア。
喜作　オヽ、おれぢや。投げたら何とした。
鴈四　此奴が〳〵。何とせいで堪るものか。なんで投げた。なんで投げさらしたのぢや。
喜作　ハテ知れた事。この形が目にかゝらぬか。おりや今夜宴の内へ聟入り。最前から見て居れば、母や女房を手籠めにするゆゑ、聟の身で見ても居られず、投げたと云へば仰山な、つい引分けうとした所に、われが身の取廻しが惡うて、ひつくり返つたは其方の不調法ぢや。鴈四郎、マア、さう思うてござれ。
鴈四　イヤ、さう思うて居まいわい。なんぢやこの形見い、聟入りぢや。さう吐かしや云はにやならぬ。コリヤ、この形が目にかゝらぬかい。おれも今夜宴の内へ聟入りして來た鴈四郎。おれが女房や母を、おれが手籠めにしやうが、足込めにしやうが、おれ次第、おれ任せぢや。ナア女房ども。
若松　知らぬわいな。阿房らしい。
三人　惡い受けなア。
鴈四　エヽ、すッ込んでけつかれ。受けがようても惡うても、若松が男はおれぢや。なんぢややら、後からキョロキョロ〳〵湧いてうせて、聟入りぢやの入り聟のと、あんまりどんと吐かすな。また祝言がなるならして見い。オヽさゝんわい。何奴も此奴も忌々しい。怪體が惡い。
ト騷がしう云ふ。
喜作　ハヽヽヽ、不便や彼奴、氣が狂うたさうな。きつう冷える加減かして、冷えのぼせと見えるわい。ナウ皆

の樂。
三人　そんな事ぢやさうなわいな。
喜作　年の暮れから元日かけて、勿怪な時に狂うたわいの。
鵬四　淸くもさらすない、面白ないぞよ。サア、若松、おれと抱かれて寢い。婆よ、娘と祝言さしや。よし否と云ふと、この奧を。
ト行かうとする。喜作引捉へ
喜作　ソリヤ、また氣狂ひが起り出した。一世一度の祝言の場所。エ、、アヽ邪魔な。勿怪な時に起つた事ぢや。
鵬四　なんとなと吐かせ。金輪際邪魔するのぢや。
喜作　ぢやと云うて、思ひ立つた吉日。ナウ皆の衆。
小磯　それ〳〵、氣狂ひは氣狂ひ、祝言は祝言。別々の事ぢやわいなア。
若松　さうでござんす。何は兎もあれ、早う固めの杯がしたうござんす。申し母さん。
老松　成る程〳〵。髭どのの器量も見て安堵しました。この上は祝言の杯、お世話ながら皆さん、賴みます。
三人　合點ぢや〳〵。
トお濱小磯苅藻、杯拵らへする。

鵬四　サア、だん〳〵忌々しうなるぞ。怪體が惡いぞ。もうぶち割らんならんわい。何奴も此奴も覺悟さらせ。
喜作　これは勿怪な氣狂ひぢや。
小磯　氣狂ひが喋るなら喋り次第に抛つて置いて、サアサア、祝言の杯。若松から飲んで、喜作どのへ献しや。なんと阿母、めでたいぢやないかいな。
鵬四　めでたうないぞ。忌々しいぞ。怪體が惡いぞ。胸が惡いぞ。
トこの間若松、杯受けて
若松　お慮外ながら。
ト喜作に献す。
鵬四　エ、、忌々しいわい〳〵。怪體ぢやわい〳〵。
〽こなたは業腹献いつ献されつ三々九度、鵬四郞すつぽんぬけ、びりも當らぬその隣へ、百雷落ちて來た心地、むつかむかつく荒涙、靑うなり赤うなり、顏は五色の息づかひ。
喜作　千秋萬歲の
鵬四　怪體が惡いぞ。忌々しい。
喜作　千箱の玉を奉る。
鵬四　面白うないぞ。業が湧くぞ。

苅藻　三國一ぢや。
皆々　聟になり濟ました。しやん〳〵のしやん。
鴈四　モウ〳〵、どうも斯うもならん程忌々しいわい。業が湧くわい。怪體が惡いわい。
喜作　さて、祝儀は納まつたが、納まらぬはこの氣狂ひ。女房ども、どうせうぞい。
鴈四　なんぢや、女房どもぢや。怪體ぢや〳〵。
喜作　さて〳〵、勿怪な代物ぢやぞ。
若松　モシ、こちの人え。
鴈四　なんぢや、モシこちの人。あんまりぢやわやい。エヽ、怪體ぢや〳〵。忌々しいわい〳〵。燃えるわいやい燃えるわいやい。
若松　どうでこれからアノ、何やかやするのに、邪魔になりさうな氣狂ひぢや依つて、ぐる〳〵巻きに縛つて、門へ抛り出してしまうては惡いかえ。
鴈四　てもマア美しい顔をして、酷い事を吐かすワ。モウ自棄ぢや。何となと云へ。おれも上下着て來た手前が濟まん。なんでも聟にならにや置かんワ。
喜作　先刻にから大目に見て、氣狂ひにしてこましや、忝ながつてうぬ去ぬ筈。こりや、どうでもわりや腰据ゑるのか。
鴈四　オヽ、知れた事。おのれ、よう物を思うて見居れ。本性の眞人間を、氣狂ひぢやと云はれて、忝ながるたわけがあるかい。
喜作　鴈四郎、本性ぢやと云や命がないぞよ。
鴈四　ヤア、なんぢや命がない。そりや、どうして命がない。
喜作　この喜作と云ふ主ある若松、女房にしようと云ふからは、云はいでも知れた不義間男。
鴈四　イヤ、云ふないやい〳〵。われより先へ聟入りしたこの鴈四郎、それ云ひ立てすりや、われが間男ぢや。
喜作　ハヽヽ、得手勝手な事吐かすワ。たつた今祝言したを見て居やうがな。まだそれよりは女房ども。
若松　エ。
喜作　コリヤ鴈四郎、おれが女房どもと云ふと、エヽと返事するぞよ。又われが云うたら、よもや返事しやしよまい。
ト鴈四郎、急いたる見得にて
鴈四　女房ども。
ト堅う云ふ。返事せぬゆゑ

女房どもく。

トいろくの聲して云うても返事せぬゆゑ

女房ども。

ト大きな聲して云ふ。若松、悄りして

若松 エヽ、なんぢやぞいな。阿房らしい。

トびんとする。

鴈四 これだけ云ふのに、取違へてなとたつた一つ、返事してくれ。エヽく、忌々しいふんばり女郎め。情知らずめ。勝手にさらせ。

喜作 息精張るな。これだけ正直正銘喜作が女房。本性で云や不義間男。天下の大法、磔刑にかゝりたいか。

鴈四 誰れがかゝりたい者がある。

喜作 そんなら內證で、お定まりの三百目か。

鴈四 イヤモウ、それは。

喜作 ないと云や、天下の大法。

鴈四 サアそれは。

喜作 但し、本性では云やせぬか。

鴈四 サアそれは。

喜作 三百目おこすか。

鴈四 サア、ぢやと云うて。

喜作 なけりや磔刑に。

鴈四 サアそれは。

喜作 氣狂ひになるか。

鴈四 サアそれは。

喜作 三百目か磔刑か。

鴈四 サア。

喜作 サアくくく。どうぢや。

ト云ひ詰められて、さしもの鴈四郎。

鴈四 エヽ、忌々しい。磔刑、氣狂ひ三百目、三つのうちでは氣狂ひが、いつち廉う て行く。氣狂ひくくぢや。

喜作 いよく氣狂ひに違ひないか。

鴈四 ヤア。

喜作 本性なら磔刑ぢやが。

鴈四 オッと氣狂ひく。ほん氣狂ひぢや。

芴藻 喜作どの、憎さも憎し、とつくりと詮議さんせ。

小磯 どうやら味いな氣狂ひぢやぞや。

鴈四 アレくくく。ハヽア、、、咲いたワく。

ト唄にて

咲いた梅の木なぜ鶯繫ぐ。鶯が勇めばヤレ花が散る。

チントンチリツヤツトントン。
ト惡ちやりの身振りして
ヤイ、女郎ども、なんと、これでも氣狂ひではないか。
三人　ほんに氣狂ひぢやわいの。
鳫四　知れた事。氣狂ひぢや。こんな所に長居したら、又
どんな目に遭はうやら。怪體な所で去んでくれう。
〽去ならやれ、我が古里へ歸ろやれ。
鳫四　チン〳〵トチンツチン〳〵トロニツチン〳〵チンテ
ツトン〳〵。
〽とんとあやまり入り聟は、出て行くしほに氣狂ひの、
所作にくろめて逃げ歸る。
ト鳫四郎、いろ〳〵をかしき身振りして入る。
老松　ヤレ〳〵、今夜はひやいな所へ、聟どのゝ働らきで
これと云ふもみんなの世話。
苅藻　ナンノイナア。ほんに、こちらも、あんまりの長居。
もう皆去なうぢやないかいなう。
はま　仲人は宵の程。去んでお雜煮拵らへませうわいの。
小磯　おいらもさうぢや。もうお暇申しませう。
苅藻　喜作どの、阿母も、もう休まんせ。
喜作　これは〳〵、今日は段々のお取持ち。お禮は明日。

小磯　ナンノイナ。若松、今夜は嬉しかろ。
皆々　オヽ、けなりやなう。
若松　何をじやら〳〵と。皆、ようござんしたえ。
〽挨拶そこ〳〵二人は、我が家〳〵へ立歸る。後見送り
て母親は
若松　サア〳〵、聟どの、娘も爰へおぢや。
〽娘も爰へと打解けし、詞にはつと聟喜作、慇懃に手を
仕へ。
喜作　定めてお聞きなされたでござりませう。私しはこの
邊で世を渡る、漁師の喜作と申しまする者。お許しを受
け今宵の聟入り。併し、宵からのもや〳〵にて、まだ沁
み沁みと御挨拶も申し上げませぬが、この上ながら眞實
の悴と思し召し下され、お心措きなう。ナウ若松。
若松　アイ〳〵。喜作どのを可愛がつて下さんすか、矢ッ
張りわたしを思うて下さんす道理でござんすわいなア。
喜作　それ〳〵、わしも隨分孝行盡して、母者人に可愛が
つてもらはにやならぬ、その代りに其方はわしが
若松　可愛がつて下さんすかえ。
ト寄り添ひ、老松の顏を見て
ボヽヽ、わたしとした事が、母さんの前とも憚からず。

オヽ恥かし。ホヽヽヽ。
老松　イヤナウ。その詞、此方から頼まにやならぬ。娘が戀聟、殊に器量骨柄と云ひ、見立てゝ母が頼みの印。ドレ。
〽靜々立つて外面なる、寒紅梅の一枝を手折り。
コレ、この枝は莟がちなる寒紅梅。この花を開かさんには、室に隱して咲くを待つ。この一枝を聟引出に、しつかりと預けたい。受取つて下さる心か。
〽聞かま欲しと差出す紅梅、きつと眺めて。
喜作　いま源平は盛衰の代。紅梅衰へ白梅は盛んなり。有情の源平、非情の梅、この紅梅を咲かせよとは、ムウ、危ふきに臨んで命を糺すは勇者の魂ひ。我が心底を御覽に入れん。
〽樣子は何と白梅の、咲き亂れたる一枝を手折り。
寒紅梅は冬に咲き、白梅は赤きに後れ、春の半を盛りとする。然るにこの花紅梅に先達て咲き亂れしは、外より入るゝ陽氣の德、我が手に入れんずな、コレこの花嫁。頼みの印はこの一枝、御受納なされて下されかし。
〽同しく白梅差出せば
老松　心ありげなこの白梅。
喜作　樣子ありげなこの紅梅。
老松　頼みの印。
喜作　聟引出。
老松　慥かに申し
喜作　受けませう。
〽互ひに受けたる心と心、分けて云はれぬ赤白は、花の底居や匂ふらん、折柄表へ村の歩きがとつかはと。
ト提灯ともし、歩き權三出て來る。
權三　ホウ、まだお休みなされませぬか。
老松　オヽ、權三どの、忙しさうに夜夜中、なんぞ用でもござるかの。
權三　サア、なんの用か知りませぬが、名主から老松を、今呼んで來いとの事。サア／＼、急にござりませ。
老松　なんぢや、名主どのからこの老松を。ハテナウ。
ト老松、奥を見て思ひ入れこなし。
コレ娘、もう大方四ツでもあらう。ソレ、表も裏もどこもかも、よう締めて休んで居や。わしは名主どのへ行て來る程に、聟どの諸とも、必らずともに、合點か。サアサア、案内頼みます。
〽どれ行て來うと落ちついても、疝持つ足の踏みどさへ、

何の用ぞと出でゝ行く、後に二人は今更に、また改まる恥かしさ。

若松　申し、喜作さん、いま母さんと梅の枝で、何やらむづかしい謎々。ありや氣遣ひな事ぢやないかえ。

喜作　イヤモウ、氣遣ひな事でもなし。

ト思案して居る。

若松　氣遣ひな事でなくば、とつと辛氣な顏せずと、浮き浮きして下さんせいなア。エヽ〳〵、モシ。エ、辛氣、さうして母さんの戻りも知れまい。ドレ、表も締めて。

ト戸を締め、いろ〳〵思ひ入れあつて

コレイナア、お前は、いつまで其やうに思案すのぢやえ。母さんの戻らしやんすまで、其やうにつらくりとして居るのかいなア。オヽ、辛氣な人の。思ふやうにもない。今夜からアノモウ、ほんぼうの女夫ぢやないか。ナア。なんぞ思案のいる事なら、女房ども斯う〳〵した思案が一ついる、どうしようか斯うしようかと相談してくれたがよい。なんぞわしにも思案さす用はないかえ。もう側に誰れも居やせんがなア。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

エヽ、とツとモウ、なんぞ用はないかいなア。さうしてモウ何時ぢややら、オヽ眠た。コレイナア、お前、眠たうはないかえ、

喜作　イヤモウ、さして眠たい事もないて。

ト構はず思案して居る。

老松　オヽ、結構な目ぢやなア。わしや眠たうてならん。オヽ眠た。ドレ、わしばかり先へ寝よ。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

エヽ、つツとモウ寝まい。

トあたりを見て

オヽ、爰にまだ先刻の殘り。ドレ、酒一つ、喜作さん、飲まぬかえ。

喜作　ムウ、酒よからう。爰へ持つておぢや。

老松　アイ〳〵。どうやら斯うやら、こちら向いて物云うてぢや。

〽云ひ〳〵有り合ふ酒肴、持つて寄り添ふ初女夫、その水上は浮橋の、渡り初めせし睦言も、忍び逢ふより猶更に、恥かしいのが戀なれや。

トこの間、酒飲む事あつて

喜作　イヤコレ、若松、と云ふも堅くろしい。ナニ女房ども。なんとマア、緣と云ふものは不思議と云ふか、味

いなものぢやなう。様子あつて上方から、この國へ下つた新米漁師。其方は又、海女の身なれば、海で出合うて一つ二つ、物云うたが緣になつて、和布刈祭りの御輿洗ひが渡り初め。その時其方の云やつた事、よもや忘れはしやるまいなう。

若松　アイ、殿御初めの睦言を、なんの忘れうもの。

喜作　サア、あのやうに云やつても、馴染み重ねたと云ふ仲でもなし、まさかの時、合點がゆかぬ。

〽云ふに若松顏打眺め。

若松　少さいから母さんの御教訓、貞女兩夫に見えず、思ふ殿御を一筋に、心中立てるが女の道。云うた詞を僞りとは、エヽ、聞えませぬ。聞えませぬわいなア。

〽聞えませぬと取縋り、恨み淚は一筋に、夫を思ふ眞實の、理り見えて可愛らし。

喜作　これはしたり、それをなんの泣く事ぞ。斯う云ふも其方の心底、しつかりと聞きたいばかり。シタガ、浦の女子の貞心は、昔からまゝ例しがある。おいらがやうな下郎の身に、例へて申すも恐れながら、中納言行平の通ひ給ひし松風村雨、また藤原の淡海公は、讃岐の浦の海女と契り、面向不背の玉を得給ふ。これと云ふも命を捨てゝ、龍宮へ行た海女の働らき。併し、昔より夫の爲に、命を捨てた女、數へて見ればコレ、指が剩る。これを思へば

若松　命を捨つる女は、稀れなと云はしやんすのかえ。

喜作　女ゆゑ身を亡ぼす者は、その數が讀み盡されぬ。夫ゆゑに身を亡ぼす女は、イヤモウ、滅多にはないものぢや。

ト若松、キツとなつて、喜作が脇差を拔き

若松　さうぢや。南無阿彌陀佛。

ト自害しようとする。

喜作　女房ども、コリヤ、なんで死ぬるのぢや。

若松　なんで死ぬとは聞えませぬ。先刻にから云はしやんす詞の端と云ひ、初めから望みある方と、思ひながらも惚れたが因果。例へ命の御用でも、お前に任すわたしが體。賤しい身なれば疑はしやんすも、さら〳〵無理とは思はねど、疑はれたこの無念。死ぬるはわたしが身の潔白。放して殺して下さんせいな。

喜作　待て。すりや、夫の爲に命も捨てる心底ぢやよな。

トきつとなる。

若松　夫の爲に捨つる命も、いま爰で無駄死するも、命に

二つはござんすまいがな。

喜作　ムウ、出かした。その心を見る上は、頼みたい一大事。

〽物語らんと奥と口、見廻し〳〵差寄つて。

頼みたいと云ふは餘の儀でない。今宵寅の上刻に、和布刈の神事、古代よりの吉例とあつて、神秘の鎌にて海底の和布を刈る祭禮。その時に至つて、浪は左右に別れ、海底は平らかに、龍神惡魚も退くと聞き及ぶ。その所を窺ひ、海に、入つて　寶劍が取つてもらひたい。

若松　エヽ、なんと云はしやんす。そんならアノ和布刈の海に寶劍とやらがござんすかえ。

喜作　若君、御入水の砌り、寶劍海中に入つて行くへ知れず。故あつて詮議するこの喜作。然るにこの頃、和布刈の海上に、夜な〳〵の光り物。察するところ天國の寶劍、この浦へ流れ寄つたに違ひはない。サア、頼みたいとは爰の事。夫の爲に命も捨てる其方が心底。なんと海へ行てくれるか。但しは否か。

〽但しは否かと氣を持たされ、いとしと思ふ夫の頼み、何か違背も涙を拂ひ。

若松　なんの否でござんせう。寶劍があの海の底にさへあるならば、惡魚毒蛇の餌食となつても、身はずた〳〵になるとても、女の念力、その劍、取上げて見せませう。とは云ひながら命がけ、死ぬる命は惜しうはないが、もしも死んだら未來までも。

喜作　云ふにや及ぶ。事成就せば二世三世、變らぬ縁の仲立ちは、即ち寶劍。何卒して手に入れよ。人に申すな。合點か。

〽氣強う云へど心には、毒蛇の住家へ我れゆゑに、行くと思へば不便さの、涙の色目見て取る若松。

若松　エヽ、忝ない。寶劍が海にあればこそ、二世三世も變らぬと、こんな嬉しい事も聞く。例へ命は失ふとも、寶劍さへ手に入れば、未來では睦まじう、添ふと思へばわしや嬉しい。悲しい事は微塵もない。

〽こぼるゝ涙押包み、盡きぬ名殘もなか〳〵に、思ひ切つたる風情にて、泣かぬ顏する心根は、泣くよりも猶いぢらしく、喜作も心亂るれど、斯くては果てじと聲勵まし。

喜作　命がけとは云ひながら、死ぬると極めし事でもなし。思はずも不吉の涙。最早時刻も夜半過ぎ。彼れこれ云ふ間に祭禮の時近し。心慥かに、用意々々。

〽諫むる折柄表の方、數多の人音足音に、爰は端近奥の間へ、引立てゝこそ入りにける。間もなく表へ黒目七郎、重虎の下知に依つて、門田の前を召捕らんと、老松を家來に圍ませ、金棒摺らせ歩み來る。

ト淨瑠璃にて黒目の七郎、股立ち取つたる侍ひ、凛々しき形にて、家來大勢に老松を取圍ませ、立て提灯ともし出る。

七郎　ヤイ老松、主人重虎公の仰せ、名主方で申せし通り、匿まひある門田の前、首打つに相違ないか。

老松　只今も申しまする通り、少しの緣で匿まうた門田さま。顯はれたらば是非もない仕合せ。お痛はしうござりますれど、この身には替へられぬ。成る程、討つてお目にかけませう。

七郎　オヽよい料簡。然らば宅へ案内せい。ソレ、家來ども、この家を取巻き、油斷いたすな。

家來　ハア。

老松　サア、斯うお入りなされませ。

〽先に立つて我か家の内、この物音に奥よりも。

若松　オヽ、母さん、戻らしやんしたかいな。

〽出づる娘を母親が、わざと敬ひ驚ろき顏。

老松　ア、申し、門田の前さま、端近う出て大膽な。

若松　エヽ、そりやマア何を。

老松　ハアテ、コレ、もう叶ひませぬ。門田の前さまと云ふ事を、隱し遂げうと思へども、もう叶はぬの。コレ、もう叶はぬに依つて、門田の前さまと聲をかけた、この母が心の内、推量あれ、コレ、門田さま。

若松　そんならアノ門田。

老松　サア、コレ、兼ね〴〵覺悟なされたれば、今さら悔む事はなけれど、手詰めとなつたこの場の仕儀。

若松　そんなら兼ねて話す通り

老松　潔よう御最期遊ばせ。

若松　アイ、この身は疾から、覺悟して居ります。

〽兼ねて覺悟も今さらに、夫の賴みは如何せんと、思へば胸も張裂く心地、主人と夫に身一つを、分け兼ぬるこそ道理なれ、かゝる哀れも白々しき、似せを誠と黒目の七郎。

七郎　最前よりの詞の端、門田の前に極まつた。家來ども引立てい。

家來　ハア〳〵。

ト家來バラ〳〵と立ち寄るを

〽マア〳〵待つてと押しなだめ

若松　マア〳〵〳〵待つて下さんせ。とても助からぬわたしが、イヤナニ、門田の前が身の上。今宵七ツの鐘の鳴るまで、どうぞ情に待つてたべ。どうで死なねばならぬ體、いま暫らくの御容赦。コレ、モシ、皆様、どうぞ七ツの鐘の鳴るまで、遲うて明け六ツには、殺されに參りませう。それまでわたしは命が惜しい。また此方に大事の大事の頼まれた事がある。その用をしまはねば、いとしい……サア、イヤ、夜明けまで命が惜しい。コレ、拜みます。お情ぢや。頼む〳〵。

ト手を摺つて頼む。

〽拜みまするは夫の頼み、劍を取つたその後で、御身替りと二道に、分けて云はれぬ心根の、思ひやられて哀れなり。

老松　不便とは思へども、エヽ、卑怯な門田の前さま、とても助からぬ御身の上。一時や二時生き延びたとて、なんの益なし。所詮卑怯未練な魂ひ。この老松が手にかけて、冥土の御供する。覺悟あれ。

〽有り合ふ脇差切りかくれば、身を交し逃げ廻るうち、黑目の七郎立寄つて、脇差たくり。

七郎　イヤ、滅多には殺さぬ。首打てとは表向き。誠は生捕りにして重虎公のお妾になさるゝ。此まゝで連れ歸る。サアござれ。

若松　エヽ、そんなら首打つは嘘で、わたしを連れて去ぬのかえ。

七郎　オヽ、お供する。お立ちなされ。

若松　エヽ、滅相な。わたしが行てよいものか。そんな事は否ぢや〳〵。否ぢやわいなア。

老松　オヽ、それ〳〵、死ぬるは兼ねてのお覺悟なれど、此まゝやります事は、ならん〳〵なりませぬぞ。

七郎　エヽ、面倒な。

〽引立つれば若松は、否ぢや〳〵と振り切る袖、交へる老松踏み退け蹴退け、駈け出す表口、いつの間にか鷹四郎、だんびら引提げ抜く手も見せず、肋をかけて大袈裟切り、目を白黒目が敢へなき最期、内には悔り家來ども、命があつての奉公ぢやと、立つ足もなく逃げて行く。

鷹四　婆さん、顫ふ事はない。おれぢや、鷹四郎ぢや。若松、怖い事はない。チッとして居い。

〽云ひつゝ刃の血押拭ひ、鞘に納めてどつちよ聲

なんと、どんなものぢや。見事な手の内であらうがの。
老松　そんなら今の侍ひを
鴈四　肋をかけて大袈裟切り。
老松　エヽ。
鴈四　この鴈四郎が、惚れ抜いて居る若松を、連れて去なうとさらすに依つて、あの通りぢや。あれがよい手本ぢや。何奴も、あらがふか邪魔さらす奴は、あの通りぢや。若松、これまでのやうに、ぐにやついた口説きやうはせぬ。手短から否か應か、この返事が絶對絶命。婆、貴樣も娘をくれるかくれぬか。否ぢやと云や、奥に居る匿まひ者の種割るぞ。
老松　サアそれは。
鴈四　若松、どうぢや。返事せい。
若松　サアそれは。
鴈四　寶の門田の前を引摺り出さうか。
老松　アヽ、滅多な事せまいぞ。
鴈四　否と吐かしや、手短かに殺らして退けうか。
若松　早まつて下さんすな。
鴈四　サア。
若松　サア。

鴈四　サア／＼。どうぢや。エヽ、面倒な。いつそ、斯うして／＼。
〽刀の背打ちりう／＼。
鴈四　サア、キリ／＼と返事さらせ。否ぢやと吐かすと、まだカウ／＼／＼。
〽既に危ふく見えにけり、何所よりかは白羽の矢、急所にや當りけん、庭へどつさり鴈四郎、脆くもそこに倒れ伏す、親子は又も恟り仰天、如何と見ゆる一間の內。
喜作　武士の、取り傳へたる梓弓、引いては人の返すものかは。
〽一首と共に、合の障子を押開き、立ち出づる喜作が有樣、長上下爽やかに、重籐の弓に白羽の矢、後に差したる梅花の一本、匂ひも異なる名香くゆらし、門田を守護し立つたるは、勇々しくも又勇ましゝ。
老松　ヤア聟どの、その姿は。推量に違はぬ勇士の骨柄。
若松　鴈四郎どのを矢先にかけ、門田の前さまを守護なさるは、最前聟引出の
老松　梅花の謎が解けましたか、
喜作　仰せの如く、寒紅梅の咲かせやうは、先ッこの如く、まつた頼みの印と渡せし白梅、イザ、御返答承らう。

老松　それこそ、咲き亂れたる白梅なれば、白きは源氏の落花微塵。

喜作　イヽヤ、さにあらず、白梅の咲く頃にも、あらぬに咲き亂れしは、外より陽氣のなすところ。殊に以てこの家の棟に、王氣立ち上ると云ひ、察するところ、この白梅のうつろ木に、貴き方のましまさん。不淨を拂ふ名香は、故あつて聞き覺えし、小松どのゝ秘藏ありし、橋の下と云ふ名香木。さてはこの家に門田の前、御座あるに疑ひなしと、心を碎きし今月今日。有り難き御對面、ハハア〳〵、有り難し。

〽と身をへり下り敬へば、門田の前は御顏曇らせ。

門田　八島の浦にて死すべき命、御鏡を守り奉れば、水屑となさん勿體なさ。人を見立てゝ渡さんものと、小船に取乘りこの浦へ、吹き寄せられしは不思議の因緣、只この上は御寶を、大切に守り奉れ。

〽仰せに老松立寄つて。

老松　天晴れ賢察。さほど明智のこなたの本名。

喜作　ホヽオ、今は何をか包み申さん、鎌倉の出頭と呼ばれたる、梶原平三景時が嫡子、源太景季とは某。

若松　ヤアヽ。

〽さては源氏の武士なるかと、親子は顏を見合せて、只茫然たるばかりなり。

喜作　イヽヤ、騷がれな方々。某この地へ來る事、全く門田の前の詮議ではない。助け申すが主人へ忠義。

若松　ナニ、門田さまを助けるが、源氏の主人へ忠義とはえ。

喜作　ホヽウ、不審は尤も。既に平家亡びし後、梶原平三景時が讒言に依つて、義經公の御流浪。弟平次景高と心を合せ、善惡不二の諫言せしに、忠言耳に逆らふと、勘當受けしこの景季。都には大納言重虎と云ふ佞人あつて、父景時と心を合せ、讒言の元と云へば、我が君を入水させ、神寶紛失が、義經公の科となつて、遂には都を開き給ひ、衣川にて御落命。エヽ、南無三方死なしたりと、云うて返らぬ父の惡事。よしこの上は景季が、身を粉に碎き神寶を尋ね出し、死後なりとも義經公の、お身の明りを立つるこそ、この源太が身の潔白と、姿をやつし、この邊を徘徊せし功あつて、御鏡の御在所、まつた寶劍の御在所も、この浦の海底にと見極めしゆゑ、この家の娘若松に契りを籠めしも、寶劍を我が手に入れん方便の聟入り。神寶揃はゞ都に移し、義經公に罪なき由を

申し開き、その上は腹かッさばき、未來にて義經公に、申し譯仕らんと、思ひ立つたる我が存念。例へ平氏の亂にもせよ、門田の前さまの御命、助け奉るも、國恩を思ふ景季が、所存と申すは斯くの通り。

〽辯舌さつぱり勇士の骨柄。

門田　オヽ、敵ながらも天晴れの武士。花も實もある源太景季、頼もしや〳〵。

〽賞美の詞に老松差寄り。

老松　聞き及ぶ梶原源太景季どの、高名手柄も多きうち、津の國の生田の戰ひに、二度の駈けとは異なる高名。

〽聞かま欲しと尋ねに景季。

喜作　ホヽ、ウ、事新らしき問ひ事。高名手柄と聲かけられ、物語らんは烏滸がましきに似たれども、その日の軍は梶原が、必死を遁がれし神の助け。神木の梅ケ枝を、まッこの如く箙に差せば、紅梅即ち笠印となつて、景色あらはに。

〽著し、所は生田の森蔭に、勝色あらはす紅梅の、花開けては天下の春よと、勇み進んで押寄する。

さる程に平家方は、室山水島二ケ度の合戰に打勝つて、山陽道南海道、十四ケ國の軍兵、都合十萬五千餘騎、東は生田、西は一二の谷を限り、その間三里ほど、浦々に數千の軍船、陸には赤旗。

〽飜翻と春風に靡き、天に飜り、雲を燒くかとあやまたる。

イデ一軍目に物見せんと、生田の逆茂木取りのけさま、城内近く鐙踏ん張り、後三年の戰ひに、鬼神と呼ばれたる、鎌倉の權五郎景政が五代の末葉、梶原平三景時が嫡子、同苗源太景季なるぞ、我れと思はん者あらば、寄り合へや、見參せん。

〽出合へやつと呼はれば、すは先駈けぞと平家の軍兵、火花の穗先鬨の聲、我れ討取らんと駈け合せ、おめき叫んで駈け立つる。

我が父平三景時どの、竪さま横さま十文字に、駈け破つて出られしが、この景季が見えざれば、深入りして討たれしか、二度返せや進めやとて、駒引返す二度の駈け。

〽散々に薙ぎ立つれば、敵も引き色負け色に、四方へぱつとぞ退いたりけり。

老松　コレ〳〵聟どの、其やうな烈しい軍、こなたはどうさつしやつたぞ〳〵。

喜作　この景季は深入りして、爰を最期と攻め戰ふ、ほと

りへ咲きし梅の花、花も源太も先駈けんと、梅も軍も勝色見えて、暫らく木影に引退く。

〽敵の兵これを見て、天晴れ敵よ遁がすなと。

八騎が中に取籠められ……兜を打ち落され、大童の姿となり、爰を先途と戰うたり。

老松　して、その八騎の名は誰れ〳〵。

喜作　イヽヤ、亂軍なれば名乘りも敢へず、向ふ者を拜み打ち、また巡り逢へば車切り。

〽蜘蛛手鈎繩十文字、鶴翼ひぎようの秘術を盡し。

取巻いたる八騎の武士、一騎も殘さず討取つたり。その日の高名一番帳。

老松　ナウその中に、萠黄縅の鎧着たる、老人はなかりしか。

喜作　ホヽウ、五十有餘の頑丈づくり、萠黄縅、鬼面の兜。

老松　ハアハツ。

〽とばかりに今更に、思ひ迫りし憂き涙、側なる刄取る手も見せず、夫の敵と打ちかくれば、かい潜つてしつかと捉へ。

喜作　ムウ、さてはその時討取りしは。

老松　オヽ、夫伊賀の平内左衛門。梶原源太、サア尋常に、勝負しや。

〽また立ち寄るを娘は留め。

若松　コレ母さん、常にお前の仰しやる父さんとは、違うた名の敵討。樣子はどうでござんすぞいな。

〽問はれて又も涙にくれ。

老松　オヽ、不審は尤も。何を隱さう其方の父御は、伊賀の平内左衛門どの。この母は元重盛公の、御簾中にお宮仕へ、平内どのとフト馴染め、其方を懷胎。掟嚴しい御所なれば、平内どのもこの母も、覺悟極めて居る折節、重盛公のお耳へ入りしが、わしを御前へお召しなされ、汝が腹に我が胤を宿すなれど、其孕みは女子なるべし、向後暇遣はす間、産み落さば我が子の印に、小松の松の一字を取り、若松と名付けよと、仁心深きお計らひ。平内どのゝ名も出さず、故郷なればこの國へ、懷胎ながら身を退き、産み落したは其方。若松の母なれば、老松と名を改め、共に賤しう海女の世渡り。年寄るに從ひて、戀しう思ふ平内どの、生田の森の合戰に討死。その時の出立ちも、風の便りに聞いたゆゑ、敵は何者聞きたやと、人にも云はで心の苦しさ。サア〳〵娘、泣いて居る所で

はない。其方の爲にも親の敵。夫婦の緣も諸共に、切つて本望遂げてたも。

〽云へど娘は身に返る、涙隱して。

若松　コレ母さん、なんぼう親の敵ぢやとて、これがマアどうならう。父さんも父さんぢや。よい年をして軍場へ行くと云ふやうな、大膽な事があるものかいなア。お前も又、年寄りは痛はつてくれたがよい。ひよんな軍があつたゆゑ、こんな悲しい事はない。

〽なんの因果に敵味方、結び合うたる夫婦の緣、こんな悲しい情ない、因果な事がと身を悶え、あどなき詞もいぢらしう、母は正體泣き入るにぞ、心を察して門田の前、悲嘆の涙にくれ給ふ、源太景季目を瞬き。

幸作　親子が切なる嘆きと云ひ、討たれてくれたいものなれども、神寶を都へ移し、義經公のお身の明り立てるまでは、滅多に死なれぬこの命。是非とも勝負と云はゞ云へ、不便ながら返り討。

〽如何に〳〵と呼はるにぞ、老松も涙を拂ひ。

老松　その勝負望むところ。返り討に討たんとは、それこそ未來の夫へ云ひ譯。サア娘、覺悟しや。

〽旣に斯うよと見えければ、門田の前は止め給ひ。

門田　ヤア、心得ぬ老松。若松の父上は、自らが兄、小松の太夫重盛公、平內左衞門と云ふ夫があつては濟むまいぞよ。

老松　エヽ。

門田　忝なくも重盛公、小松の一字を名乘らせよと、宣ひし娘の若松。伊賀の平內が胤とあれば、その時に不義の科。今まで生き延びたは何ゆゑぞ。小松どのゝお情を忘れ、今さら平內と云ふ夫があるとは云はれまい。但し名乘つて平家の政道、暗かりしと重盛公のお名をば、亡びし後まで引出すか。

老松　サアそれは。

門田　返答しや。なんと。

〽理の當然に老松が、あやまり入るも涙なり。

一途に早るは尤もながら、爰の所をよう聞きや。差向ひの敵討とは治世の事。亂世と云ひ、殊に亂軍の戰場で、討たれたる者の敵討と云ふならば、凡そ源平の人種はあるまじ。やう〳〵この頃穩やかなりし御世と云はんに、敵討と云ひ立たせば、又もや世の騷ぎとはならん。一度は榮え一度は衰ふ世の成行き。源氏を亡ぼし、榮華を極めし平家の成行き。又も源氏に亡ぼされし、因果は廻る飛

花落花の理を觀ずれば、源平兩家、悟れば不二、これを菩提の種として、亡き一門の後弔らはん。自ら諸とも剃髮あれ。

〽仰せは後に老松が、磯野の奥に正念を、思ひやられて哀れなり、門田は重ねて。

コレ／＼若松、其方は又、兄小松どのに成り代りて、門田の前が勘當ぢや。

若松　エ、。

門田　イ、ヤイナウ、小松どのゝ胤とあらば、折角思ひ合うたる縁邊の、妨げになるまいものでもない程に、勘當受けて末永う。

〽添ふとは云はで景季に、打たば響けの御言の葉。

喜作　ホ、ウ、例へ内府の胤にもせよ、勘當とあれば憚かりなし。この景季が二世の妻。

〽詞に花實有り難涙、重々情のお詞に。

門田　今こそ花の拏引出。

〽梅の古木のうつろ木より、御鏡を守り奉り、渡せば景季押戴き。

喜作　有り難や忝なや、二度照らす神寳。

〽取納めたる弓取りの、箙の花の若武者は、勝色見せし梅の花、譽れを代々にその名こそ、末世に聞ゆる芳しさ。

トこの浄瑠璃のうち老松、御鏡を梅の木の内より出し源太に渡す。源太、鏡を取り納め

喜作　ヤア／＼女房、最前申しつけたる如く、海底を捜し求め、寳劍を守り奉れ。事に紛れて失念も事こそあれ。

ト縁先に歩み出て

最前一矢に射止めたる、鴈四郎が面魂ひ、只者ならず實否を見んと、矢の根を拔いて射かけしに、矢柄に當つて倒れし曲者、見參せん。

〽と聲より早く、むつくと起きたる鴈四郎、矢柄投げ捨てツッと寄り。

鴈四　天晴れ源太よき推量。小島の城を馬にて渡せし佐々木盛綱、浦の男に淺瀬を習ひ、水練得たるを幸ひに、海底に沈んだる神寳、四國九州の浦々を詮議するに、この家の上に王氣と云ひ、和布刈の海に光り物、正しく實はこの邊にと、忍びやかに義經公、この邊へ下向の折柄、汝は知らねど此方には、よつく知つたる梶原源太、この邊にへちまふは、親の遺恨を持ちかけて、義經公に仇せん爲か、實否を糺さんその爲に、汝が行く先附き纒ふ、この三郎、矢柄を以て射たるこそ、様子あらんと窺ひ居

たるに、汝が心底、頼もゝし〳〵。この上は義經公に、
御目見得いたされよ。
〽姿詞も忽ちに、實にも勇士のその骨柄。
喜作　ナニ、義經公は未だこの地に御存命。ハア、〳〵、
ハア。
〽ハア〳〵、有り難し〳〵と、心解けたる義者勇士、
勇み立つたる折こそあれ、遥かに聞ゆる人馬の音、何事
かはと驚ろく人々、盛綱制して。
鷹四　ちつとも氣遣ふ事でない。我が君の仇敵、大納言重
虎、備前守なんど、この國へ來たこそ幸ひ、偽はつてこ
の所へ誘き寄せ、討取らん我が計略。
〽云ふ間もあらせず馳け來るは、大納言重虎、後に附き
添ふ備前守、それと見るより。
備前　コリヤ〳〵鷹四郎、門田の前を生捕つたか。
重虎　早う渡せ。なんと〳〵。
鷹四　オヽ、待つて居たべら坊めら、命の寢ぐさり小豆公
家、大納言重虎。
喜作　備前守諸とも生捕つて、義經公へ引く。覺悟せい。
重虎　ヤア、うぬら、こりやア誑つて釣り寄せたな。
備前　ソリヤ、家來ども。

〽はつと答へて拔きつれ〳〵、打つてかゝるを事ともせ
ず、切り立て〳〵。
ト盛綱、楯になつて皆々逃げて入るを、追ひかけて入
る。
〽追ひ廻る隙を見て、取つて返す備前守、門田を目がけ
馳け寄るを、振りよく源太一摑み。
喜作　アレ〳〵、時刻も和布苅の神事、女房若松、はや急
げ。
〽はつと答へて若松が、裾引上げて小凛々しく、帶を結
ぶの神寶。
若松　取り負ふせなば二世三世。もし仕損じなばこの世の
別れ。
喜作　ヤア、不吉の涙。早く行け。
若松　アイ、仕負ふせて見せませう。
喜作　出かした。行け。
〽引けば返さじ弓取りの、妻ゆゑ身にもふりかゝる、雨
の足どり隼納の、宮居をさして。
トこの三重にて若松、走り入る。重虎逃げて出る。盛
綱景季、取卷いて
皆々　動くな。

トとまる見得にて、屋臺、後へ引ッ込む。

　造り物、隼鞆の社、廻廊の體。

〽頃は極月三十日の夜、只さへ暗き丑滿時、篠を亂せし大雨に、前は海原どう〳〵と、波音のみぞ物凄く、きぬか皷もしん〳〵たる、神慮もさぞと殊勝なり、本社拜殿廻廊に、金燈籠の赫々たる、明りをよけて岸波主鈴、何かは白木の箱携へ、重虎が雜掌横山主税、相伴うて歩み寄り。

　ト兩人、傘をさし、下駄を穿き出る。

主税　ナニ岸波主鈴、兼ねて主人重虎公、仰せつけられし密事の御用、いよ〳〵右の手番ひはよいか。

主鈴　ハヽ、その儀について神秘のこの鎌、爰へ持參仕つてござる。この裝束を着し、この鎌を持つて水底に入る時は、波四方へ退いて、平らとなる稀代の鎌。イザ、お渡し申しまする。

主税　この主税は水練の達者。その上この神秘の鎌、首尾するは案の内。

主鈴　祭禮の時刻は寅の一天。この主鈴に成り代り

主税　海底を詮議して、寶劍はこの主税が方寸の中にあり。委細はコレ。

〽諸事は斯う〳〵斯く〳〵と、囁き頷く後の方、いつの間にかは又五郎が、隱れ簑笠打かづき、窺ひ聞くも暗紛れ。

主鈴　主税さま、吉左右を相待ちまする。おさらば。

主税　さらば。

〽立別れ行く兩人が、兩の首筋、兩の手に、ほうと握るが暇乞ひ、ぐつともすつとも息の根留め、死骸は海へどつさりばさり、恐れみ敬ふから手水、神秘の鎌を懷中に、納めた顏色裝束の、箱引かたげて駈り行く。

　若松千早出づる。

〽添はせてたべと伏し拜み、こなたを見れば降る雨に、いと物凄き海の面、危ふき怖さ女の念力、傘も堪らぬ横しぶき、これも同じく濡るゝ袖、絞る間もなき若松が、神事や過ぎんと氣もそゞろ、胸は早鐘隼鞆の、神前に走りつき。

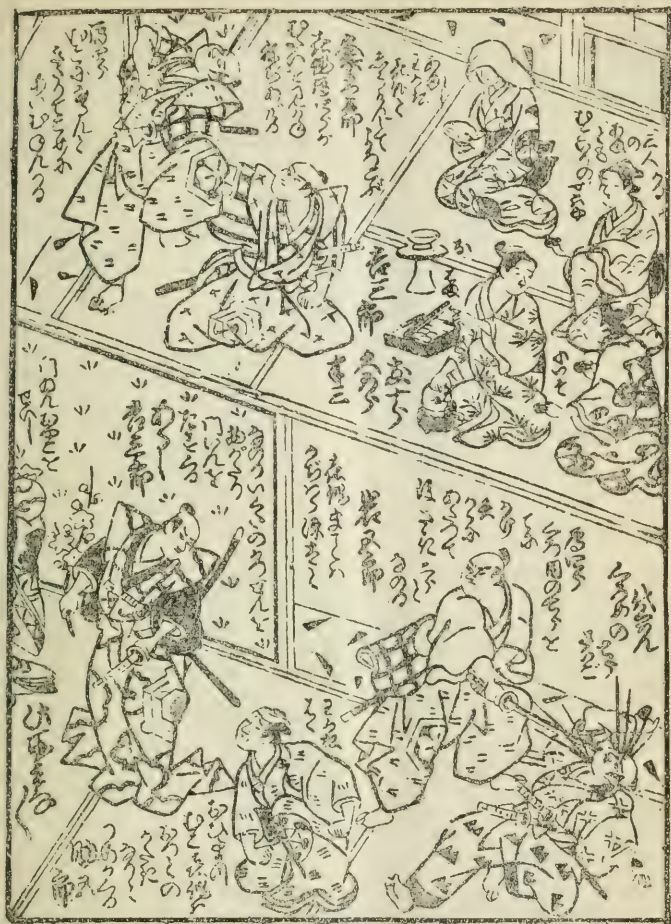
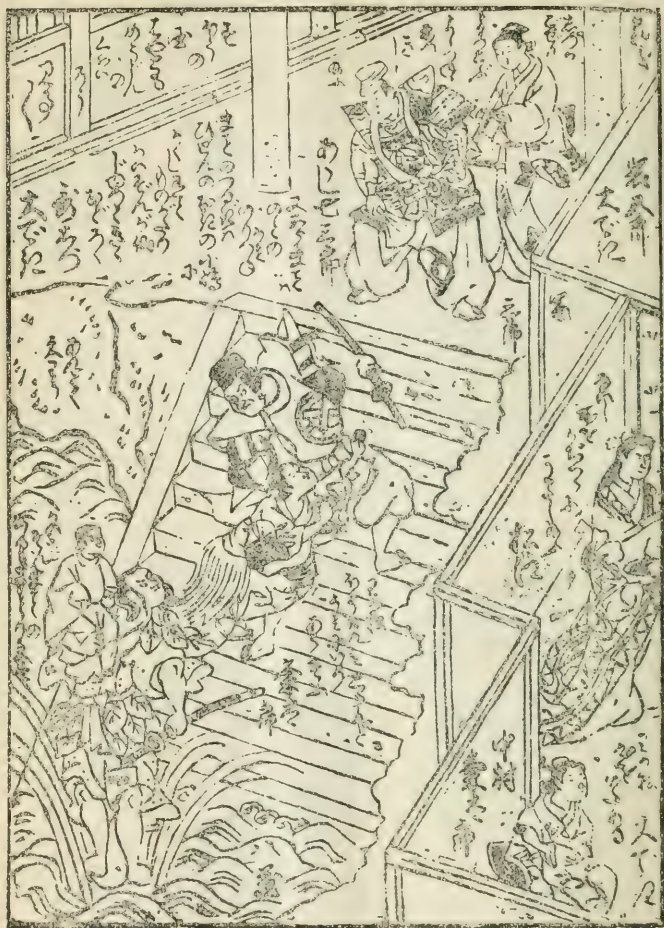
若松　ア、嬉しや、まだ御神事は終らぬか。

〽えゝ忝なや、神の力を添へ給へ。

千早　寶劍を取上げ、思ふ夫に添はしてたべ。

〽添はしてたべと兩方が、同じ願ひの聲聞きとめ。

初演の

繪番附

若松　オヽ怖。そこに居るは誰れぢやえ。
千早　さう云ふお前は。
若松　わたしは願ひのある身ぢやわいな。
千早　わたしも願ひのある身ぢやわいな。
〽互ひに寄り添ふ女子同士、金燈籠の灯し影に、透かし見合ひて。
若松　ヤア、お前は巫子の千早さんか。
千早　こなさんは若松どのか。……エヽ、忝ない。これと云ふも神の利生。ようマア來て下さんしたなう。
若松　ようマア來たとは、それはマア、何としてよう來たえ。
千早　サイナア、此やうな幸ひもあるものか。何を隱さう、わしやこの海へ入つてな、捜したい物があれど、とんと海の勝手を知らぬ。こなさんは常住の事なれば、海の勝手を知つての筈。どうぞ世話して、海の底へ連れて行て下さんせぬかえ。コレヽ、若松どの、一生恩に着る。
〽頼む／＼の一言を、聞いてどうやら氣にかゝり。
若松　味いな事云はしやんす。お前方が海へ入つて、なんの用があるぞいなア。
千早　サア、その用はな。

若松　その用は。
千早　寶劍が。
　　トあたりを見て
　　寶劍と云ふものを取りに行くのぢやわいなア。
若松　エヽ、そりや誰れぞに頼まれてかえ。
千早　いとし可愛い君の爲。
若松　コレイナア、わたしが來たのもその劍を。
千早　エヽ、そりや誰れぞに頼まれてかえ。
若松　アイ、いとしい可愛い夫の頼み。
千早　ムウ、そのお人の名はえ。
若松　お前の可愛いお方の名はえ。
千早　こなさんのは。
若松　お前のは。
千早　イヽエ、滅多に云はれぬわいなア。マア、その話しは後の事。そんなら一緒に。
若松　イエ／＼／＼、劍は一振り、頼み手は二人。後で揉めるとお笑止な。
千早　イヽエイナ、もし頼み手が一緒なら。
若松　それなれば戀の意趣。わたしやお先へ參じます。
〽駈け出す若松、千早は押留め。

千早　そもじに取られて自らは、何を功に夫に添はう。
若松　それをわたしが知らうかいな。この荒海の水底へ、海女の身さへ命がけ。素人の行かれるものかいなア。
〽云ひ放して振り切る袖。
千早　例へこの身はこの海の、水屑となるとも女の念力、寶劍は自らが。
若松　イヽヤわしが。
千早　イヤわしが。
〽爭ひ果てし浪の音、駈け出せば引き留むる、引きつ引かれつ袖袂、振り切る拍子にかつぱと伏す、上に躓きコロコロ〳〵、髮も姿もバラ〳〵に、亂れ心や打ち合ふ傘、上段下段社段の燈火の影に、この筋こそ神の石段、水底へ導き給へと、靈諸共にどうと飛び込む水煙り、千早も續いて駈け入る有様、底の水屑や鮫の餌と、今にもさぞななりなんと。
ト一聲になり
〽さる程に、今ぞ和布苅の時至り、うそむく寅の一天は風隼柄の神いさめ、又五郎がその出立ち、烏帽子裝束凛然と、千早かけ帶しつかと結び、神秘の鎌を狩衣の、袖まくり上げ炎々たる、松明振り上げ神前より、海面キッと見渡せば。
トこれより眞の神樂になり、又五郎、五百段を下りる。石段、程よくセリ上がる。前は一面の吹き水なり。
〽海原や、博多の海も程近く、汐引く島も見え渡る、浮洲に通ふ友千鳥、沖の鷗も群れ立つや、煙りの波のそこ爰と、暫らく時をぞ。
ト三重にて、右石段、よき所までセリ上がると、上より浪幕下りて、一面の波になり、これより始終音樂やうの囃子になり
〽移しける、波を潜つて二人の女、爭ひ苦しく窺ひ出づれば、あら不思議や、滄海忽ち平沙の如く、初めて心つくづくと、四方を見れば青海原、いづくと目ざす方もなく、呆れて詞もなかりしが。
ト淨瑠璃にて兩人、摑み合ひながら場の花道を上がる。
若松　ハテ不思議や。どうやら海の勝手も違ふし
千早　ほんに、思うた程術なうもなし。さうしてマア、海の底と云ふものは、奇麗なものぢやなア。寶劍どころか塵一つないわいなア。
ト此うち始終音樂鳴る。
若松　ヤア、あの音わえ。

千早　ありや音樂の音ぢやわいな。
若松　なんぢや、音樂ぢやと云はしやんすか。海の底であのやうな音がすると云ふは、ムウ、そんなら聞き及ぶ、龍宮ではないかいなア。
千早　エヽ。
若松　古へ面向不背の玉を、龍宮へ奪ひ取つたとの事なれど
千早　寶劍をば奪ひ取つて去んだかいなア。
若松　こりやモウ、どうでも命がけ。
千早　遁がれ難ないこの身の上。
〽思へば流石恩愛の、古里の方ぞ戀ひしけれ。
若松　あの波のあなたに、母さんやこちの人。
千早　我が君樣もおはします。
〽さるにても此まゝに、別れ果てなん悲しやと、涙にくれて居たりしが。
若松　オヽ、さうぢやなア。例へ寶劍龍宮へ奪ひ取り、八大龍王守護するとも、夫を思ふ一念力。
千早　自らも劣りはせぬ。
〽取返さで置くべきかと、又も心にとゞめの劍、腰の懷劍拔き持つて、南無や隼鞆大明神、力を合せたび給へ、彼の龍宮はいづくとも、底計りなき音樂の、聲を知る邊に尋ね行く、怪し恐ろし。
ト右兩人駈け出すを、待つた〳〵と、又せり合ふ見得にて、舞臺へ移り、よろしき所へ入り、また場の中へ又五郎をせり上げる。
〽猶も神變不思議の鏁、海底を照らしければ、潮は光り鳴動して、波は屏風を立てたる如く、左右へ分れて平々たり。爰ぞと松明振り立て〳〵、見れども〳〵寶劍とても見え給はず、五百の段も遙かの上、雲の波とぞ見えにけり。又五郎は茫然と。
又五　ハテ怪しや。遙かに音樂の聞ゆるは。
〽如何にさしもの又五郎、心迷ひ猶も松明振り立て〳〵直ぐなる道を行く如く、爰ぞ名に負ふ滄海の、都と知れば水もなく、廣き眞砂路踏み荒し、龍宮界にぞ。
ト又五郎舞臺のよき所へ入る。浪幕切り落す。龍宮の門になり、音樂頻りに聞ゆる。
〽到りける、青天蒼々として白日雲に輝き、煌々として際もなし、霞に聳えし樓門に、大龍王宮と云ふ額を打ち、左に火焔の輪燈右に紫雲の廻廊あり、七寶七重の玉の垣、靑貝の甍を巻き、宮殿樓閣建て續き、中には錦を敷き並

べ、夜には金砂瑠璃の玉、軒には珊瑚の玉をかけ、沈水栴檀四面に薫り、峯の松風芬々と、出で入る人も魚鱗の備へ、あらゆるうろくず惡魚毒蛇それ〴〵に、式を守るや龍宮城、門番には榮螺の一統、鮑赤貝蛤は息吹きかける奏者の役、朝日に照りて美を盡し、さも嚴重なる構へなり。

ト鯛鮹榮螺赤貝蛤などを戴いたる下官出づる。

〽若松はやう〳〵と、樂を知る邊に來て見れば、さも廣廣たる樓門は、これぞ聞ゆる龍の都、忍び入らんと駈け寄れば、數多の番人押隔て。

榮螺　ヤア、どこへ〳〵。この世界に見馴れぬ女、女ぼんの下界たいほうしやくしやりくい〳〵。

ト留める。

若松　オヽ、無粋な、なんぢやぞいな。常住海を商賣にして居るわたし。お前方、遊びに出なさつた時には、まんざら知らぬ顔でもないぞえ。

赤貝　誠に汐干の遊興に、見たやうな顔でもあり

鮑　して海が商賣とは

若松　アイ、和布刈の海士ぢやわいなア。

皆々　ヤア〳〵、なんぢや海女ぢや。

鯛鮹　なんの事ぢやぞいなア。

昔この龍宮界へ、面向不背の玉を奪ひ取り、三十丈の玉塔に籠め置かれしに、玉を難なく盜み取つて、駈け出し居つた。ところで、守護の大蛇どのが、追つかけて見たれども、彼の海女乳の下をかき切り、朱になつてのたくり廻れば、龍宮の習ひに、土左衞門は大禁物、あたりへ近寄る事叶はず、折角爰まで追ひかけしも、即ち今度が利となつて、遂に玉をば取られ終んぬ。なんぼう恐ろしき物語りにて候ふ。

鮑　我れらが眷族、前は海女貝と云うたれども、海士と云ふ名は禁制ゆゑ、鮑と名を改めたも、この因縁ぢや。

榮螺　殊にこの頃日本の寶、天國の劍が、この龍宮界に納まつてあれば、また取返しに來居る事もあらうやと、門番嚴しく廻るところ。

赤貝　海女とあれば猶以て、とつとゝ歸れ。

鯛　この門通す事は、叶はぬぞ〳〵。

皆々　海女は猶も禁制々々。

若松　そんならアノ天國の寶劍とやらは、この龍宮にござんすかえ。

皆々　あるとも〳〵。

若松　それなれば御尤もぢやわいなア。シタガ、わたしはアノ、ナニ、それならこれは餘の海女とは變りて候ふ。
鮹　それは何と變りて候ふ。
若松　これは天上に住み馴れし、海女は海女でも、天乙女にて候ふ。
鮹　天津乙女とは天人の事か。
若松　なか〳〵。
鮹　イヽヤ、天乙女ならば、天の羽衣を着て居る筈ぢやが。
若松　サア、その羽衣はアノ日本で、中休みの間に洗濯を致し、三保の松原に乾して置いたにて候ふ。
鯛　天津乙女の舞の袖と云ふ事があれば、誠の天津乙女ならば、天人の舞を見たい〳〵。
榮螺　舞を見申し天人に相違なくば、龍の都を拜見させう。
鮹　幸ひ、爰に龍女の裝束、これを着て面白う、舞を御舞ひ候へや。
若松　さアらば舞を舞はんとて。
〽龍女の裝束を假に着て。
鮹　既に拍子を
皆々　進めけり。

〽所作になり
〽我が住む方は久方の、天津乙女の雲の袖、かざしの花の手向け草、色こそ變れ和田海の、花は波路の底よりも、龍宮の捧げ物、あの花ともに數々の、龍女は波をかざしの袖、返す〴〵も立ち舞ふ袂かな。
所作留まる。
皆々　りてうゑいらいみやうじんから、よいや〳〵。
鮹　この舞を見る上は、天人に違ひはない。
皆々　サア〳〵、こなたへ來り候へ〳〵。
〽連れて内にぞ。
ト三重にて樓内セリ下げる。
向う一面の結構なる龍宮御殿になる。但し前は一面の御簾なり。
〽入りにける、龍宮臺のその結構、碼碯の階瑠璃の帳、硨磲の瓔珞珊瑚のけまん、紫摩黄金の欄間玉の簾、内ぞ床しき有樣なり。
ト又五郎バタ〳〵にて出る。千草も後より出る。
〽又五郎は野太くも、奥殿目がけてづつか〳〵、支へる番人毆り退け蹴退け薙ぎ立つる、この勢ひに辟易して、

左右へぱつとぞ退いたりけり。

又五　海とんぼうめら、寄りあがるな。今あれにて聞けば日本の神寶天國の寶劍、この龍宮に奪ひ取りしとは、いづくにある。豐前隼鞆の明神の神職又五郎と云ふ者、サア、速やかに寶劍を我れに渡せ。異議に及ばゞ手を下し、結構づくめの龍宮城、踏み破つて忽ちに、泥海になしくれん。八大龍王はいづくに居る。惡魚毒蛇の輩まで、いづくに屈む。これへ出よ。

〽飽くまで廣言大聲にて、はつと睨みし眼の光り、御殿に輝くばかりなり。

鮑　ヤア、何者なれば尾籠千萬。おれんぞう。

〽おれんぞうとの聲につれ。

ト音樂盛んに聞ゆる。

〽玉の簾を卷き上ぐれば、中央に風水龍王、難陀龍王跋難陀、阿那婆達多娑伽羅龍王、八つの冠波瀾の裝束、眷族引き連れ宮中に、蟠まつたる和田の原、恐ろしなんども愚かなり、又五郎ちつとも臆せず。

又五　八つの冠り八大龍王、寶劍を速やかに渡せばよし、渡さずんば龍宮を、踏み碎いて劍を奪ひ取る。サア、返答せよ。なんと〳〵。

難陀　ヤア、愚か〳〵。もと天國の寶劍といつぱ、この世界の劍なるを、日本の寶とせし心外。この度故あつて奪ひ返せし寶劍、やす〳〵と渡さんや。とく〳〵立ち去れ去らずんば惡魚毒蛇の餌食になさん。如何に〳〵。

又五　ヤア、案外なる一言。イデ、物見せん。

〽いで物見せんと小躍りして、宮中へ馳け寄つて、きつと見ればあら不思議や、中央にある風水龍王、御顔は見知りある。

ヤア……。中央なるは我が君樣。ハ、ハ、〳〵〳〵ハ、。

〽何ゆゑこの地にましますぞと、低頭平身敬ふにぞ、各各冠打傾むけ、共に拜顔なしにける。娑迦羅龍王儼然と。

娑迦　尊き御方と見知り奉るは、さては平家の武士よな。

又五　我れこそ門脇教盛が次男、能登守教經、八島の合戰に安藝の太郎兄弟を、小脇に挾み入水と見せ、今日まで存命せしは、平家の御代に飜へさん我が存念。まつた神寶のうち神璽寶劍二品を、我れ密かに守り奉り、時節を待つとも公達のましまさねば、我れ密かに都に上り、平の大納言の息女、卿の君を奪ひ取り、せめてはこの姫君にても守り立て、再び平家の氏を輝やかさんと思ひ立つ鐵石

若はつ

中村 三光

附番載

所　本　繪

義心、敎經が私慾にあらざる身の潔白。先達て寶劍は、この敎經が隱し置きしに、和布苅の海に光り物、ハテ心得ずと神職に身をやつし、尋ね來つてこの仕合せ。さては先達て隱し置いたる寶劍は、似せ物でありしよな。

婆迦　ホ、ウ、云ふにや及ぶ。實の劍は、コレ爰に。

〽差出す寶劍恭々しく、袋を開く其うちに、樣子窺ふ若松が、その寶劍をと取りつく間もなく靜の前、その寶劍こそ二世三世、結ぶ緣の仲立ちと、立ち寄る兩人荒氣なく、取つて押へて聲荒らげ。

又五　ヤア、小穢な女め、汝如きの手に觸るゝ劍にあらず。穢らはし〳〵。

〽不淨拂つて寶劍を、よく〳〵眺めて。

ハ、ア、天晴れこれこそ天國の、寶劍に紛れなし。

跋難　して又、似せの寶劍、神璽諸共いづくにある。

又五　ホ、ウ、その二品は讃岐の沖に。

阿難　二つの島に。

難陀　岩を穿つて隱しあるとな。

皆々　ハ、、ハ、〳〵喜ばしや。

〽喜ばしや一同に、呼はる聲に鬨の聲、音樂忽ち今爰に四方を圍む鉦太鼓、さしもの敎經こは如何にと、見やる宮殿樓閣も、皆消え消えて豐前の沖、巖の上に茫然たる岸には九郎義經公、肌に小具足陣羽織、龍王と見えたるは、龜井片岡伊勢駿河、熊井鷲の尾源八兵衞、若君を守り奉り、あたりを拂つて扣ゆるにぞ、敎經大きに驚ろく面色。

又五　思ひがけなき義經、眼前龍宮界へ入りたる敎經、この有樣は、ハテ訝かしや。

義經　ホ、ウ、不審は尤も。義經この地にある事は、失せたる神寶詮議の爲。汝が隱せし二種の寶、御鏡も手に入りたれば、今こそ寶は揃ひたり。これ偏へに常陸坊海存仙人が、仙術のなすところとは知らざるかやい。

又五　さては常陸坊が仙術に誑らかされしか。エ、、無念口惜しやなア。

〽無念とあせる海上に、常陸坊海存、渺然と顯はれ出て。

ト二種の寶を持ち、場へセリ上がる。

海尊　ヤア〳〵敎經、仙術を以て寶の在所、聞き取つて守り奉る。これこそ二人の女が働らきしその功に依つて、靜の前は義經公と千代かけて、若松もまた景季と、末長く添ふ女の譽れ。寶を隱せし二つの島、靜の前には京女郎。田舍女郎は若松が、名を後の世に輝やかせん。

〽詞は今に讃岐の沖、二つの小島を京女郎、田舍女郎と名づけしも、この時よりと知られたり、義經重ねて。

義經　ヤア〳〵敎經、我が君は先達てより、義經が守護する上は氣遣ひなし。汝は平氏を打捨てゝ、源家に仕ふる所存はなきか。なんと〳〵。

又五　ヤア、穢らはしき一言。能登守敎經が、運盡きて切腹ずる。これを見よ。

〽刀逆手に取り直せば、これなら待つてと靜の前、若松も立ち寄つて、止めて止まらぬ勇士の覺悟、腹にぐつと突き込む折柄、梶原源太佐々木の三郎、重虎備前守に繩をかけ、宙に引提げ走りつく。

喜作　元の起りは。

鴈四　此奴等兩人。

義經　兩人急いで首を刎ねい。

〽仰せに二人が首打ち落し、喜びの聲は八島の隅までも納まり靡く御大將、御夫婦仲も義經公、兄は日本の惣追捕使、弟は異國のきくるみ王、神と君との道直ぐに、千鶴萬龜と書き納む。

幕

日本第一　和布苅神事（終り）

解說

渥美清太郎

近松門左衛門が淨瑠璃へ轉じて以來の京坂歌舞伎界は、劇作家の人材に乏しく、爲に繁昌は操りに奪はれてしまつたが、寶曆明和の期になると、玆に並木正三といふ傑物が現はれて、歌舞伎は頓に光彩を放ち、やがては全盛の安永天明期が造られたのであつた。彼れは享保十五年の生れで、父を和泉屋正兵衞と云ひ、芝居茶屋が業であつたから、幼名久太郎の正三は幼年の頃から操りや歌舞伎の樂屋へ入つて居たので、自然とその空氣に親しみ、劇作の志しを得、又は仕掛け物なぞに興味を持つて、十四五歳の頃、既に「若水千歳狐」といふ手づまからくりの水船の仕掛けをした程で、後に和泉屋正三と名乘つて作者となり、寬延元年八月、大西の芝居で、鍛冶屋の娘で大怪我をした當時の三面記事を脚色したのが、その處女作であつた。一二年のうちに「大和國井手下紐」なぞといふ名作を發表したが、後に豐竹座の並木宗輔に見込まれてその弟子になり、並木正三の名で院本を書いたが、淨瑠璃は性に合はなかつたと見えて再び歌舞伎へ歸り、以來安永二年まで殆んど休みなしに百に近い新作を發表し、大當りを得たものも數多く、「宿無團七時雨傘」なぞは今日の舞臺でさへ見られるのである。脚本の內容を向上させたと同時に、建築家であつた彼れは舞臺裝置や大道具に劃期的の改良を試み、劇界の恩人とまで稱された。廻り舞臺が彼れの創意であるといふ事實一つだけでも、成る程、恩人の名には背かぬ譯で、現今の劇場は勿論、外國の劇場までがその恩澤を蒙むつてゐる次第なのである。門下に並木五瓶といふ傑物を出して、並木の姓は今に傳はつてゐる。安永二年二月十六日、胸の病氣の爲に死んだ。臨終の時には大喝一聲「南無三方」と叫んだら、眠るやうに息が絕えたといふ。

本卷には彼れの作六種を收めた。いづれも特色の深い脚本のみである。

けいせい天羽衣（あまのはごろも）

寶曆三年十二月二十八日、大西芝居で上演した二の替り狂言である。これが正三の出世作であつた。當時非常に疫病が流行し、どこの家でも軒下へ「キノニノヤノハノモノ北川惣左衞門宿」といふ咒ひの札を貼つてゐた。これから思ひついて作つたので、主人公の赤松四郎が疫病の形をし

て横行し、北川惣左衛門の出合ひの隱語にキノニノヤノハモノを使ふといふ趣向にしたのが目新らしく非常に利いた上、大詰の大磯廓の場で、揚屋の道具を引いて後から大屋根を突き出し、それをセリ上げて見せるといふ大仕掛けを正三の工風で初めて見せたのが大評判で、この狂言は大成功を占め、後年も盛んに興行されたものである。今から思へば大した事でもないが、當時としては素晴らしい大道具なので、觀客を驚ろかすには充分であつた。この作一つで、正三の名聲は一度にあがつたのであつた。

役割は左の通り。

天野藤内。いせき大盡（中村六十郎）天津姫（佐野川惣吉）岩淵丹下（中村蔦五郎）藤倉玄蕃（中村三七）傾城見空（姉川大吉）同玉の井（嵐大吉）同空蟬（山本左吉）同琴浦（和歌山八重菊）村雲大學。清見作作（山下治郎三）今川仲秋。阿房與五郎（和歌山文七）細川修理太夫政恭。奴關内（中村四郎五郎）太田鄕左衛門（和歌山權十郎）東山義尚。細川左近之進勝元（中村十藏）八幡屋才兵衛（中村富五郎）太皷持ち喜作（市原幸四郎）牛飼ひ金三（中村八藏）遣り手さち（泉平三郎）茶道珍辨。（平岡萬助）荒川藏人（澤村菅右衛門）山名勝家（松山三十郎）漁師白了。虎屋妙林（大谷廣八）與五郎女房お高（松島喜代崎）白了娘乙女（佐野川花妻）左衛門女房白妙（三條浪江）赤松四郎高定。山名宗全持豐（中村歌右衛門）北川惣左衛門（中山新九郎）

三十石艠始（さんじつこくよふねのはじまり）

寶曆八年十二月二十二日初日、大坂角の芝居の二の替り狂言で、河村瑞軒が淀川々淩ひの一件に、吉岡又三郎といふ猿樂師が大内を騷がした事を混合脚色したもので、淀川堤には源八渡だの平太堤だのといふのがある所から、神道源八關口平太といふ人物を作つて中心にしたのはよかつたが、河村瑞軒を大惡黨にしてしまつたのは、如何にしても可哀さうである。併し瑞軒といふ人物が、世間から誤解されて居た事は、これだけでも解る。

この狂言の大詰、淀川堤仇討の場に、正三は獨樂からヒントを得て、初めて廻り舞臺を工風し、實地に應用して觀客を惘りさせた。舞臺轉換法は以來革命を起し、脚本の書き方がガラリと變つて來た。廻り舞臺を造る爲に、角の芝居の地下を掘つたが、正三はその土で道頓堀の往來の凹凸を直した。彼れは立派な土木工業家であつた。

この狂言も勿論大當りで、維新前まで盛んに京坂で興行された以外、江戸でも同じ名題で上演され、不破名古屋や

染分手綱の世界に直されては、明治までも殘つてゐた。戲曲史上一二を爭ふ重要な狂言と云ふべきである。

役割は左の通りであつた。

志賀左近（小川吉太郎）揚屋才兵衛。志方由兵衛（中村友十郎）傾城總角（山下金作）娘お松（嵐松之丞）妹喜蝶（中村小伊三）女房木幡（三名川才藏）花滿將監（澤村助十郎）池上圖書（坂東岩五郎）花滿織之助。下人與九郎（松山三十郎）川浦遊軒。關口平太（三枡大五郎）辨中將（嵐粂松）山家屋太郎右衛門（大谷彥十郎）岩瀨記內（三名川彌平次）石橋中將。奴雁平（三枡貫藏）太鼓持ち小市（中山來助）熊本辨之作（山下治郎三）女房深雪（姉川大吉）淀與三右衛門（中村四郎五郎）源八女房見船。妹お舟（中村喜代三郎）花滿憲法。百姓茂治兵衛（中山新九郎）神道源八。爪長屋權九郎（中山文七）

江戶での初演は、天明九年五月の市村座であつたが、この時は信田の世界に改め、憲法を信田左衛門、與三右衛門を淀左近之助、遊軒を小山判官、深雪を眞弓、總角を九重、等と改めた。口繪に入れたのは、その時の大詰の錦繪である。

無宿團七時雨傘（やどなしだんしちしぐれのからかさ）

普通には、明和五年七月に大坂竹田の芝居初演といふ事になつてゐる。その頃あつた岩井風呂の女郎殺しを脚色したもので、昭和の今日まで上演を絕たぬ名作であるが、この上演年月は秋葉芳美氏の說に依ると少し怪しい。前年の明和四年夏、京都の北側芝居で、竹田芝居の引越しの一座が、左の役割で正にこの狂言を上演してゐるからである。

團七茂兵衛（竹田他四郎）堺の大治（竹田友九郎）岩井風呂治助（竹田伊勢松）女房お梶（山科槌五郎）女郎お富（山科甚吉）

この時の作者が、果して並木正三であるかどうかは、まだ不明なのであるが、竹田の芝居と正三とは以前から深い關係があつて、度々脚本を書いてやつてゐるから、無論正三の作と云つても差支へないものと思はれる。明和五年の上演は二度目なのであらうが、この時の役割は殘念ながら解らない。現今殘つてゐる脚本も、初演のものではなく、後に並木五瓶あたりが訂正したそれらしい。

江戶で、この狂言をハッキリと元の役名でやつたのは、天保三年六月の河原崎座、「旦說浪花當寫本」である。この時の役割は左の通りであつた。

園七茂兵衞（澤村訥升）岩井風呂の富（嵐龜之丞）川九（惣領駒右衞門）高市數右衞門（尾上梅五郎）堺の大治（嵐七五郎）女房お梶（瀨川路之助）岩井風呂の治助（市川壽美藏）並木正三（松本幸四郎）

その後、江戸の世界に訂正され、東都では多くこの方の脚本に依つて、最近まで上場を續けられて來た。

三千世界商往來（さんぜんせかいやりくりわうらい）

當時あつた阿蘭陀人殺しを種に脚色したものらしい。三千世界を强盜して歩くといふ趣向が奇拔で、特に序幕は素晴らしい出來であるが、大詰へ行くと矢張り普通の二の替り狂言に墮してしまつてゐる。それにしても、肝心の阿蘭陀人殺しの幕が、定本に缺けてゐるので、どういふ筋か趣向なのか、一向に解らないのが殘念である。江戸では斯うした狂言は、見たくも見られないが、大坂は流石商業地で、相當外人との接觸も多かつた所爲か、異國情調を帶びた作も多くあるが、この脚本なぞ中でも白眉である。

石川辨內。松屋利兵衞。喜村將監（藤川龍左衞門）傾城長門（姉川菊八）瀧川藏人。小人島の亡靈。一先城金方。船頭九郎助。才若實ハ岸田道成。珊珠慶（嵐文五郎）成合玄蕃。大矢勘解由。乾隆王の靈。種ケ島時高（市川晉十郎）傾城逢夜實ハ小女郎。梅町御前（中村喜代三郎）宗の彈正。梅ヘ夫。甥岩子。北條氏直（坂東岩五郎）相人久五郎。奴和田平（藤川八藏）奴文字平。岩城主計。正木隼人（市山助五郎）娘芙蓉（中村富之助）親方才兵衞。高慶劉（中村傳五郎）背劉貞。大館源吾（淺尾乙五郎）東容夫人。娘四聲（花桐豊松）娘錦沙。渚の方（佐野川花妻）喜村釆女之助。阿房雲太郎（嵐七三郎）黑ん坊（中村新五郎）鹿島權藤太。岩木監物（中村四郎五郎）せらい權平。可慶館德禪司。島田勝家（市の川彥四郎）阿蘭陀人加比丹ていかう。山司金右衞門實ハ武智左馬五郎（中村歌右衞門）

近江源氏躾講釋（あふみげんじしかたかうしやく）

安永元年三月、大坂中の芝居初演の脚本。近松半二の「近江源氏先陣館」の役名をかりて、同じく大坂陣の事蹟を脚色したものであるが、彼れよりも露骨で、殊に澤庵和尙の事なぞを輕々と脚色してある所なぞ、頗る大膽で面白い。淀君放埓の段は、同時に吉田御殿まで當込んであるのだが、これは近松の「平家女護島」の燒直しである。古郡新左衞門で大久保彥左衞門を暗示したり、泉の近平で藤堂和泉守を當込んだり、大分手が込んでゐる。

この脚本で注意すべきは、全體がまるで義太夫狂言から出發したかと思はれるほど、所謂る「チョボ」を使つてゐる事である。一時は人形芝居の作者であつただけに、殊に時代物であるだけに、人形劇を眞似てやつたものであらうが、昔の歌舞伎狂言としては珍らしい。大坂でも末期には折々あり、江戸でも默阿彌作あたりになると、無暗にチョボを使つてゐるが、昔の歌舞伎としては餘り多く見られない。が、この脚本から推して考へれば、我れ／＼がまだ一向接しない京坂の時代狂言の中には、チョボを使つたものも澤山あるのかも知れない。それにしても、歌舞伎へ義太夫を應用するといふ事は、恐らく正三が創案と思はれる。彼れは全く發明家だ。

初演の役割は左の通りであつた。

片岡造酒頭。泉の三郎近平（市の川彥四郎）佐々木小四郎（嵐松治郎）泉三郎女房岩菊（姉川菊八）傾城逢坂（市山富三郎）四斗兵衞女房お卷（花桐豐松）浪人後藤兵衞。石原源太（坂東岩五郎）鈴木隼人之助（嵐七三郎）玉木軍藏。野手のしよん兵衞（中村新五郎）文覺上人（藤川龍左衞門）瀨尾大助實ハ本田次郎近常。入賴坊（市川音十郎）比企判官賴員（中村四郎五郎）白船狆右衞門。百姓德八實ハ千島冠者。古郡新左衞門（嵐文五郎）宇治の方。十作女房お袖（佐野川花妻）三浦之助義村。高綱妻篝火（中村喜代三郎）佐々木四郎高綱（藤川八藏）林淸。北條相模守義時（市山助五郎）四斗兵衞實ハ和田兵衞義盛。百姓澤庵。北條時政（中村歌右衞門）

日本第一和布苅神事（にっぽんだいいちめかりのしんじ）

安永元年三月、大坂中の芝居に上場されたもので、正三の絕筆である。前者と同じくチョボを各幕每に使つた上、構想にも筆致にも、殆んど院本其まゝの形式を使つてゐるのは、當時人形芝居が復活したので、觀客の嗜好に迎合したものであらうか。歌舞伎の或る時代の風潮としては認めるが、正三としては矢張り二の替りや世話狂言が得意で、斯うしたものは餘りすぐれてゐない。只彼れが絕筆といふところで收錄したのである。

繪番附を見ると、この脚本以外、まだ一二幕あつたらしい形跡が認められるが、何分定本に缺けてゐるので收める仕樣もなかつた。筋には勿論差支へはない。

文政頃になると「日本第一和布苅神事」といふ同じ名題で、內容の全然違つた脚本が出來て、明治の中年まで行はれたが、これは錦帶橋を扱つた周防家騷動の狂言である。役割は左の通り。

津の戸三郎春重實ハ常陸坊海存。馬方貫八實ハ佐藤忠信（藤川八藏）源賴朝。駿河次郎。母老松（市山助五郎）龜井六郎。下人仁太郎。梶原平次景高（嵐文五郎）備前守行家。飯原左衞門（藤川龍左衞門）忠信女房安督。門田の前（中村松江）江田源藏。源九郎義經（嵐七三郎）政子の前。妻菊町。海女若松（中村粂太郎）巫子千早本名靜御前（市山富三郎）後家岩倉。女房千種（中村玉柏）宇都宮彌三郎（藤川柳藏）妹お袖（三枡德次郎）小柴文內（市川宗三郎）娘常陸。平次女房榊葉（花桐豊松）富樫左衞門。漁師鷹四郎本名佐々木盛綱（坂東岩五郎）馬方萬八實ハ江間小四郎義時。漁師喜作實ハ梶原源太景季（嵐吉三郎）梶原平三景時。禰宜又五郎實ハ能登守敎經（中村歌右衞門）

例に依つて、年代考證役割カタリ等に關し、山形の秋葉芳美氏から敎へて戴いた所が頗る多い。記して謝意を表す。

編輯校訂
責任
渥美清太郎
鈴木侃

日本戲曲全集・第四卷
並木正三篇・第十四回配本

編纂者檢印

昭和四年八月二十日印刷
昭和四年八月廿三日發行 （非賣品）

編纂者 渥美清太郎
發行者 和田利彦
印刷者 高見靖雄
製本者 高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所 春陽堂
電話日本橋 五一・六四一
三七・八八
振替東京一六一七

製版所 新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社）